



大正十三年三月二十八日印刷
大正十三年三月三十一日發行

花袋全集第十二卷

（非賣品）



不許複製

（第十二回配本）

著作者　東京市小石川區東青柳町二十九番地　田山錄彌

發行者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　川俣馨一

印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　松浦政吉

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　株式會社博文館印刷所

發行所　東京市小石川區東青柳町二十九番地　花袋全集刊行會
電話小石川一〇五四番
振替東京三一七〇〇番

て好いといふくらゐの程度のものかも知れなかつた。

しかし私は死ぬかと思つた病氣から幸にして癒えた。今は死ぬるとか老いるとかといふことについては、あまり思ひ煩はなくなつた。何方かと言へば、若いのんきな心持になつた。その時にこの全集が出來上つたことは、私に取つて二重に喜ばしいことであらねばならなかつた。私は終に臨んで前田晁、生方敏郎、川俣馨一、福岡益雄諸氏の好意を厚く謝したいと思ふ。

大正十三年二月二十七日、作者。

から散つた。唯それだけであつた。綺麗な花だと言はれやうが、またその反對に色彩に乏しい花だと言はれやうが、もう少しにほひがあつても好さうなものだと言はれやうが、それは見てゐる側の言ふことで、私には何の關係もないことだつた。私は唯時が來て、かうした花を咲かせたに過ぎなかつた。私は花の種類とか妍醜とかいふことに就いては、一度だつて自分で思ひ煩つて見たことはなかつた。私はいつも成行に任せた。

何んなにすぐれた作者でも、一度は屹度埋れた。そして誰もそれを言はないやうになつた。それは凡庸な作家であると天才であるとを問はずすべて一樣であつた。しかし、再び蘇る時がその内にやつて來た。そしてそこで始めてあらゆるものが本當の批評と鑑賞とを受けるやうになつた。さういふ意味から言つても、全集と言ふものは、生きてゐる中から、幅で出すものではないかも知れなかつた。唯、かうして輯めて置けば散亂しなくつ

巻末に

大地震があつたりしたにも拘らず、兎に角この全集が完成したのは、私に取つて喜ばしいことゝ言はなければならなかつた。

全集と言つても、一種の選集で、比較的作者の好いと思つたものを輯めたに過ぎないのであるが、それは巻後に附した『著作年表』を見てもわかることゝ思ふが、その作者の選んだ標準がまた何れだけ正しいか否かが、作者自身にもわからないのであつた。これを見ても、全集といふものは、死後に出づべきものではないかと思はれた。

ある作者に取つては、その作つたものは、非常に大切なものであらうが、私には何うもさうは思はれなかつた。私には時が來て唯、花が咲いたくらゐにしか思へなかつた。咲くべき時が來たから咲いた。散るべき時が來た

星（新小説）　大正十一年　四月　ひとりの女（現代）　同　五月
船路（太陽）　同　四月　○印を附せしものだけが『全集』の中に入って
心中（新小説）」　同　五月　ゐるのです。」

○足（中央文學）　大正八年　二月
○林に添つた道（大觀）　同　二月
○夜の灯（新日本）　同　三月
白い鳥（婦人公論）　同　三月
○川そひの春（やまと新聞、長篇）　同　四月
再生（太陽）　同　四月
○Kの死因（文章世界）　同　五月
○土藏のかげ（改造）　同　六月
○強い心（雄辯）　同　七月
○萎れた草（中央公論）　同　八月
○鸚鵡（中外新論）　同　八月
○銹びた沼（中外）　同　九月
○一夜（大觀）　同　十月
○黄い麥畠（中外）　同　十月
一室の牢獄（不詳）　同　十月

○新しい芽（朝日新聞、長篇）　大正八年　十一月
○一つの空想（文章世界）　大正九年　五月
○ぬかり道（上海公論）　同　七月
カイゼリン、ウイルヘルミナ、
トツプ（新小説）　同　七月
○島の虐殺（雄辯）　同　九月
戀草（讀賣新聞、長篇）　同　十月
○一つの恐怖（改造）　同　十一月
曠野の戀（大正日々新聞）　同　十一月
くれなゐ（新家庭、長篇）　大正十年　一月
海の上（中央新聞、長篇）　同　四月
眉（國粹）　同　六月
淺い春（國民新聞、長篇）　同　七月
銀盤（讀賣新聞、長篇）　同　十月
廢驛（福岡日々新聞、長篇）　大正十一年　二月

○大隊長の帽子（不詳）	大正六年	一月
○埋めた金（新日本）	同	二月
○赤い夕日（中央文學）	同	二月
○お八重（單行）	同	二月
○河ぞひの家（新小說）	同	三月
○お蔦（文章世界）	同	三月
○山の旅舍（中央文學）	同	四月
○心願（中央佛教）	同	四月
○鈴子の戀（單行）	同	五月
○小さな舟（雄辯）	同	五月
兄弟（文章世界）	同	九月
○パラソル（雄辯）	同	九月
○ある僧の奇蹟（太陽）	同	九月
○剃刀と鋏（早稻田文學）	同	十月
○三人（中外）	同	十月
○2と3（中外新論）	大正七年	一月
○Sとその妻（新小說）	同	一月
○惡友？（文章世界）	同	一月
○女の留守の間（中央公論）	同	一月
○芍藥（早稻田文學）	同	一月
○殘雪（朝日新聞、長篇）	同	二月
○かれの一日（新日本）	同	五月
○號泣（新小說）	同	八月
○かの女の幻影（解放）	同	六月
○Nの水死（中央公論）	同	六月
○山上の震死（同）	同	九月
○再び草の野に（單行、長篇）	同	十二月
○遺傳の眼病（太陽）	大正八年	一月
歸京（文章世界）	同	一月
弓子（福岡日々新聞、長篇）	同	二月

○歸京（文章世界）　大正四年　八月
○籾がら（早稻田文學）　同　九月
○ボオルドに書いた字（文章世界）　同　九月
○毒藥（太陽）　同　十一月
○をばさんのImage（文章世界）　同　十二月
○二人の最期（新日本）　同　十二月
○旅の者（新小說）　大正五年　二月
○息子への手紙（文章世界）　同　三月
○山の町まで（ほとゝぎす）　同　四月
○二人の母親（新小說）　同　四月
○大工の噂（三田文學）　同　四月
○黄い小さな花（中央公論）　同　五月
○山村（文章世界）　同　六月
○歸國（新小說）　同　七月
○山莊にひとりゐて（中央公論）　同　八月
○出水（新小說）　大正五年　八月
○時は過ぎ行く（單行、長篇）　同　八月
○丘の上（新小說）　同　十月
○ある轢死（文章世界）　同　十月
○山の悲劇（文藝俱樂部）　同　十一月
小雨ふる日（新公論）　同　十一月
ある宴會（黑潮）　同　十一月
○長流（早稻田文學）　同　十二月
○KとT（文章世界）　同　十二月
○祖先（中央佛敎）　同　十二月
○一兵卒の銃殺（單行、長篇）　同　十二月
○絶壁（中央公論）　同　十二月
ある訪問（不詳）　大正六年　一月
○丘の悲劇（新小說）　同　一月
○禮拜（中央公論）　同　一月

○暴風雨の前（太陽）　大正二年　五月
○ある朝（不詳）　同　六月
○霜解（太陽）　同　十一月
○一握の藁（中央公論）　同　十二月
○寒い朝（新潮）　同　十二月
○蝋燭（早稻田文學）　同　十二月
○明るい茶の間　大正三年　二月
○鶴田君（家庭雜誌）　同　三月
春近しへ（太陽）　同　三月
○トコヨゴヨミ（早稻田文學）　同　三月
○春雨（讀賣新聞、長篇）　同　四月
○ある母の眼病（新日本）　同　四月
トリップ（文章世界）　同　四月
○風雨の夜（中央公論）　同　四月
○停車場へ行く道（早稻田文學）　同　六月
○毒草（太陽）　大正三年　八月
海のほこり（大日本）　同　九月
○九時すぎ（文章世界）　同　四月
○山の湯（文章世界）　同　九月
○殘る花（國民新聞、長篇）　同　九月
○戀ごころ（單行）　同　十一月
海をこえて（太陽）　同　十二月
ある山の寺（文章世界）　同　十二月
境界線（文章世界）　大正四年　一月
○孤獨（太陽）　同　二月
○野の道（ほとゝぎす）　同　三月
○日曜日の遠足（中央公論）　同　三月
小さき廢墟（中央公論）　同　六月
○燈影（毎日新聞）　同　八月
○合歡の花（太陽）　同　八月

○幼きもの（早稲田文學）　明治四十三年十二月
○記念會（太陽）　同　十二月
○町より山へ（早稲田文學）　同　四十四年一月
○幼兒（中央公論）　同　四月
○髪（國民新聞、長篇）　同　八月
飯（早稲田文學）　同　九月
○朝（文章世界）　同　九月
鷄（中央公論）　同　九月
○ある死（文章世界）　同　十月
○別るゝまで（中央公論）　同　十二月
○客（太陽）　同　四十五年一月
○別れてから（中央公論）　同　三月
○散歩（新小說）　同　三月
○線路（文章世界）　同　五月
海邊より（太陽）　同　六月

少尉の軍服（中央公論）　明治四十五年六月
○女の髪（早稲田文學）　同　六月
○郊外にて（中央公論）　同　八月
暑い日に（文章世界）　大正元年　八月
百日紅（太陽）　同　九月
○劇場で（文章世界）　同　十二月
不思議な小包（中央公論）　同　十二月
山の雪（太陽）　大正二年　一月
○樂園（中央公論）　同　三月
雪の夜に（早稲田文學）　同　三月
○赤い肩掛（文章世界）　同　三月
渦（國民新聞、長篇）　同　三月
○椿の花（ほとゝぎす）　同　三月
波の上より（新潮）　同　四月
○叢に（新日本）　同　五月

白鳥（太陽）　明治三十八年十二月
キス以前（中學世界）　同　三十九年六月
秋晴（文藝俱樂部）　同　十月
アリユウシヤ（太陽）　同　十一月
春の町（文章世界）　同　四十年四月
○少女病（太陽）　同　四月
マウカ（趣味）　同　四月
○蒲團（新小說）　同　八月
勝公（中央公論）　同　八月
家婢（新潮）　同　九月
○土手の家（中央公論）　同　十二月
○一兵卒（早稻田文學）　同　十二月
姉（中學世界）　同　十二月
○兄（太陽）　同　四十一年二月
○生（讀賣新聞、長篇）　同　四月
○弟（新潮）　明治四十一年四月
○ネギ一束（中央公論）　同　四月
放火犯（趣味）　同　四月
○寫眞（新小說）　同　六月
○車の音（文章世界）　同　九月
○妻（日本新聞、長篇）　同　四十二年二月
○死（太陽）　同　十月
○田舍教師（單行、長篇）　同　十二月
○拳銃（早稻田文學）　同　四十三年一月
○不安（文章世界）　同　四月
○庖丁（同）　同　五月
○艮（中央公論）　同　九月
○胡瓜（文章世界）　同　九月
○緣（毎日電報、長篇）　同　十月
○おし灸（文章世界）　同　十二月

著作年表

小詩人（小櫻縅）	明治二十七年十月
水車小屋（文藝倶樂部）	同　二十八年九月
斷流（同）	同　十一月
わすれ水（國民之友）	同　二十九年八月
一片雲（世界之日本）	同　九月
離れ小島（同）	同　三十年三月
わかれ（文學界）	同　七月
ふる池（新著月刊）	同　八月
涯頭（新小說）	同　三十一年八月
ふる鄕（單行）	同　三十二年七月
思ふどち（伽羅文庫）	同　十月
憶梅記（文藝倶樂部）	同　三十三年三月
みねの松（新小說）	明治三十三年五月
島の心中（文藝倶樂部）	同　三十四年五月
野の花（單行、長篇）	同　四月
重右衞門の最後（アカツキ）	同　三十五年二月
梅屋の梅（小天地）	同　五月
女教師（文藝倶樂部）	同　三十六年二月
令妹（中學世界）	同　三月
山小屋（文藝倶樂部）	同　六月
亡國の恨（中學世界）	同　九月
春潮（單行、長篇）	同　十一月
悲劇（文藝倶樂部）	同　三十七年二月
名張少女（文藝倶樂部）	同　三十八年三月

旅客は始めて琉球の殘波岬をその前に望むことが出來た。この列島は臺灣列島と共に東洋花彩列島の南端を成し、東に淺き支那海の海棚を有し、西に深い海溝をつくつて、宮古、石垣、八重山諸島から臺灣列島へとつゞいて行くのであつた。

—花袋全集第十二卷　終—

分は勿論、其以前にもそこは外國と常に接觸を保つてゐたやうなところで、九州島の文化は、長崎以前は、其處と平戸から主として入つて來たといふことであつた。

この南の海岸は、私は丸で知らないが、ある人の話では、山川港から鰻池火山群を横に、海門ヶ岳の裾を通つて枕崎に行く路が、非常に好いといふことであつた。鰻池の薄暮の水光の上に、黑く形の好い海門を發見した時には思はず快哉を叫んだとその人は話した。

實際、海門ヶ岳は、九州島の名山である。琉球、臺灣に行く汽船の甲板の上からは、殊にそれがよく見えるさうだ。私も一度は是非其方の方まで行つて見たいと思つてゐる

九州島の東海岸では、細島港、それから内海港の手前の青島、鵜戸の岬、それから油津あたりにも好い處があつた。志布志から錦江灣の方へ出て行く間には、潤い高原などがあつて、世に知られない名勝がまだ澤山殘つてゐた。

錦江灣の櫻島も、よく日本新三景の候補者になるところだが、何うも私にはさうすぐれて好いとは思はれなかつた。規模がさう大きくない。宮島の少し大きい位の感じしかしない。しかし重富から鹿兒島に行く海の間はいかにも明媚だ。

で、九州島から南は、島嶼が或は隱れ、或は現はれて、遠く大島列島から琉球潟をつくり、海行十八時間、黑潮の通過で名高い六島灘を過ぎ、始めて大島の名瀨港に達し、それから猶南すること十時間で、

歸りは私は同じ道を歸るのは愚だと思つて、七ツ釜のある土器岬の後の方から高い絶壁に添つた路を湊の立岩の方へと出て來た。立岩は見事な美しい岩だつた。其處には小さなわかし湯などがあつて、涼しい海風の吹き透る室に、浴客が浴衣がけでごろ〳〵してゐるのなどを見た。前には廣い碧い海を隔てて、芥屋の大門を深くその胸間に藏した山脊の嶺が繪具で塗つたやうに青く青く見えてゐた。

八六

九州島の西海岸では、何と言つても唐津半島だ。伊萬里灣がこれに次ぐ。それから天草の富岡町のあるところが好い。概して有明の海は、海として餘りすぐれてゐない。それは海が泥海で色が鮮かでないからである。しかし、その中では、口の津港のあるあたりが一番すぐれてゐる。

八代から三太郎の嶮を越えて水俣から川内の方へ出て行く路には、すぐれた海山の眺めがあるさうだが、私はまだそこを通つて見ない。薩摩の人の話では、そこを通つて見なければ西海岸の勝を語ることは出來ないさうである。隼人の瀬戸、それから川内からずつと南した海岸に非常に好いところがあるといふことである。或はさうかも知れない。其處はもう有明の海を脱却して、ひろい太洋になつてゐるから……。

薩摩では南の海岸が好い。加世田、殊に枕崎あたりが特色に富んでゐるといふことである。鹿兒島縣時

田島神社のある處へ行く海添ひの長い路の叢には、ギスや松蟲などが鳴いてゐた。

田島神社は九州島では有名な古社だ。境内はさう大して幽邃ではなかつたけれど、兎に角かうした絕海の畔に三千年も鎭座してゐたかと思ふと、旅情が私の胸に渦まき上つた。私はかなりに長い間其處に立つて、美しい海山を眺めた。

名護屋の城址のある處は、この加部島とは反對の方向になつてゐるが、そこも私にいろ〳〵なことを思はせた。城址は舟を捨てゝ七八町行つた大きな丘陵の上にあつた。老松が高く海風に鳴つてゐた。本丸の趾には、誰かの選文になつた碑が立てられてあつた。船頭の話では、天氣の好い時には、そこから壹岐島が見えるといふことである。私は秀吉がかうした邊陬の地にその本營を置いてあの征韓の雄圖を實行したことを思ふと不思議な氣がした。私は當年の武將や兵馬の此處に集つたさまを想像した。また秀吉が一年を此處にすごしたことを想像した。其時は、無論、今の路ばかりではなく澤山な道路が唐津方面から開けて、そこに人馬が陸續として跡を接したであらう。その路の跡は、今でも、地圖の上にさがすことが出來た。

それに、城址のあるところは、風景も好かつた。澤山の島々を持つた海、白い帆を持つた海、鷗の群の多く飛びちがふ海が松の大きな幹の間を通して眺められた。單に風景としても九州島にざらにある海ではない。

八五

、炭坑の烟突の多い山際の町、火山灰を運搬するトロコの長く通じてゐる埃の白く立つ街道を、私の車は海へ海へとあこがれる私の心を載せて駛つた。

唐津の西ヶ濱の旅舍の一夜は私を喜ばせたが――暑い暑い九州の夏の旅にほつと一呼吸つかせたやうな氣がしたが、私は更に半島の奥を究めて、呼子港から豊太閤の名護屋城址を探らうと心懸けた。

呼子港は非常に面白い特色に富んだ港であつた。私はこれほど昔の和船の港らしい港を九州島の何處に發見し得るであらうか。細い通、魚の腥い臭ひ、深く入り込んだ入江、林立した帆檣、そしてその細い町の通をうねうねと折れ曲るやうにして車は通つた。

その町の通の中ほどの或る家で、私は加部島に渡る舟を頼んだ。運が好かつたら七ツ釜にも行きたいと思つたが、「とても、今日は駄目でさ、しけてゐますからな――。何うもあそこはな、不便で、運が惡いと、幾日ゐても行かれないやうな處だ。此間も、大阪の衆が來て一週間ゐやしたが、到頭駄目でした。」などと老いた主人らしい船頭が言つた。

實際、荒い海であつた。わづかにそこに見えてゐる加部島に渡るにすら、私は烈しい船の動搖に惱まされた。海中にある巖島の根元を洗ふ波は白く高く碎けて、半ばその礎盤を洗ふやうにした。加部島の

ゐるさまは『廢都』の繪卷の一章として確かにすぐれてゐると私は思つた。
しかし、日本の『廢都』としては、規模も感じも矢張奈良が大きい。それに比べると、此處はぐつと落ちる。しかし鎌倉よりは好い。鎌倉のあのひらけた形よりは何れほど此方の方が好いか知れない。それに、『廢都』の感じとしては、何方かと言へば、明るい方である。平泉の持つた暗いさびしい感じは、此處では何處にも見出すことが出來なかつた。
これから眞直に田圃を拔けて、菅公の邸趾を通つて、二日市の停車場に出て來る路も好い。昔のことの犇々と胸に簇つて集つて來るやうなところだ。それに、その停車場のぢき近くにある武藏溫泉は、一浴の價値がある。設備も割合に完全してゐて、平野の溫泉といふ氣が何處となくあたりに滿ちてゐる。浴舍の垣の外は、麥畑で、雲雀などが颺つて鳴いてゐるのも好い感じがした。
兎に角、九州島では、筑後平野は昔から開けた。それだけこの附近には旅客の思ひを誘ふやうな名勝古蹟が多い。博多の海は決して美しくはないが、それでも箱崎とか香椎とか宇美とかぐる〳〵歩いて見るのは面白い。海の中道の松も見事であつた。天橋立、夜見濱ほどはすぐれてゐなくとも、春の靜かな海を眺めながら松露などを拾つて歩くと、何んなにのんきで好いか知れない。福岡では、私は東の公園よりも西の公園の方が好きだ。

樓の趾とか、觀音寺の趾とかゞ面白いのである。

太宰府の町は茅茨瓦甍相半ばすと言つた風の衰へた町である。宇佐神宮でも、町そのものゝ衰へて汚いのにはあきれたが、概してかうした古社を持つた町は、昔のやうに榮えてゐないらしい。伊勢の大廟の持つた宇治山田の町などすらさういふ風であるのを見てもわかる。交通の便が開けてから、すべてかうした町は衰へた。

町から田圃の中を脱けて、七八町で都府樓のあつた趾に達する。地形がいかにもひろ／＼としてゐて大きい。成ほど昔の人達が九州島の中心政廳を此處に置いたのも尤もだと點頭かれた。つゞいて、萬葉集にある防人のことだの、蒙古來寇の時の騷ぎなどが、頭に浮んだ。さぞその時は大騷ぎであつたらう……。かう思ふと、箱崎宮の「敵國降伏」といふ後龜山帝宸筆の扁額などが思ひ出され、つゞいて、博多附近が外國への唯一の門戸であつた時代のことなどが繰返された。九州では、長崎よりも博多の方が古かつた。唐土に渡る使節や僧侶の舟は皆そこから出帆した。

大宰府の防禦の趾の水城などの附近に殘つてゐるのも、私に昔を思はせた。紫宸殿などといふ地名の殘つてゐるのも、懷舊のなつかしい念を誘ふに好い材料だ。

丘陵を後にし、前に天拜山とその松とを望んだ形は、深い感情を起させずには置かない。觀音寺の古鐘、都府樓の礎石、それから城の趾などが日ざしして、赤蜻蛉などが飛んで居り、靜に微かに鐘の音がかして

かな眺望をつくつた。ある朝私はその上流の渡場を乘合馬車と一緒に渡つたことがあつた。朝霧の深くこめた日で、渡場の垣に紅白の木槿の微かに霧の中に見えてゐるさまは今でも私の眼に殘つた。渡舟は深い川霧を衝いて此方へと近寄つて來た。

筑後川は平凡であつた。それよりは寧ろそれと向背して高良山脈の向うに深く穿たれて流れてゐる矢部川の溪谷の方が面白かつた。例の日向神岩などのある溪山である。其處では南朝の征西將軍宮の末路の趾が偲ばれた。懷良親王の死後、八代平野をすら保つことの出來なくなつた南朝の勢力は、最後に、肥後の菊池の一族に半ば寄りかゝるやうにして、この矢部の溪谷に深く深くその跡を埋めた。良成親王の墓は今でもその深山窮谷の中に殘つてゐた。この谷には久留米平野からも入つて行ければ、筑後川の流域の田主丸町のあたりから城壁のやうな高良山脈を越しても入つて行けた。

八四

太宰府の趾は、九州島では是非旅客の一度は行つて見なければならない所だ。福岡からは幹線鐵路に添つて電車も動いて行つてゐるからわけはない。

しかし大抵の旅客は菅原道眞とそれに連關した太宰府八幡宮とだけに興味を持つて、太宰府の趾そのものには餘り價値を置かないやうであるが、それはいけない。こゝでは太宰府のあつた地形とか、都府

きは勿論で、日本中部地方の持つた溪山に勝るところのないのを思はずにはゐられなかつた。ここに人吉以下八代の平野に出づるまでの間は阿賀、天龍、富士以上激湍急瀬で、そこを往來した河舟は、昔から天下の勝景の一つと言はれてゐた。しかし今では汽車が開通してこの河舟の路は衰へたが、旅客は人吉から白石あたりまでは是非ともこの川舟に乗つて見なければならない。一勝地あたりは殊に溪山色を生じ、雲烟皆動くといふ風である。

この他では、大隅から薩摩の西海岸に流れ落ちる川内川の峽谷なども面白かつた。霧島火山群の背面を流れる頃は、流れも緩に他の奇はないが、大口附近に至ると、稍特色を帯びて來て、下流に赴くに従つて次第に趣を増し、遂に川内地方の一大動脈となつた。昔の國府の趾や、秀吉の攻めて入つて來た趾や、新納氏が島津のために頑強に抗拒した址などは、皆その流域にあつて、ゴタ／＼と色彩の多い空氣をあたりに漂はしてゐる。しかし、この川は耶馬溪や球磨川のやうな瀬の多い急流激湍ではなかつた。中流以下は奇樹相通じ、楓影相重り合つた。

日向の大淀川では私は平野を流るゝ川を發見した。別に他の奇はなかつた。利根川のやうに又は信濃川木曾川のやうにひろ／＼とした其上に大きな雲を浮べるといふやうな趣も持つてゐなかつた。しかし、いかにしてものんびりとした緩やかな川である。太古の昔の偲ばれるやうな川である。宮崎の市街にかかつた長い橋、川に臨んだ旅舍の納涼臺から見た清武嶽の山脈、これがいかにも巧に川と相映發してゆるや

八三

耶馬溪の谷は、今は軌道が出來て、柿坂までは女子供でもわけなく入つて行くことが出來た。しかしその持つた谷は、私には……大してすぐれたものとは思はれない。取れば先づ、谷を挾んで聳えた奇岩の排列である。溪流は淺露で且つ美しい瀬に乏しい。樹木の緑の深くないのも、その淺い一原因を成してゐる。羅漢寺のあるあたりは殊に凡だ。岩石としても妙義の石門の奇には比ぶべくもない。

しかしそれは表面から見たことで、もつと詳しく探つたならば、面白い奇勝があるらしく思はれる。山の成因、谷の成因がさうした奇勝を作るべくつくられてある。何でも柿坂の旅舍の主人の話では、山國川に落ちる輻射谷の數は非常に多く、それを一々探つた上でなければ、耶馬溪を正當に評價することが出來ないさうであるが、成ほどさうかも知れないと思はれる理由がないでもない。山移川の新耶馬溪が、賴山陽時代に知られずに、却つて今日にあらはれたといふこともその一つである。津民谷なども非常にすぐれた溪流と岩石とを持つてゐるといふことである。しかし私はまだ行つて見ない。

耶馬溪に比べると、球磨川の持つた谷は大きなもので、流石は九州アルプスの奥にその源を持つて流れ出て來てゐるだけに、その流れる區域の山巒も深く、崖も嶮しく、嵐氣も多く、到るところに美しい瀬を展開して、山村十數里の長い一幅の繪卷をつくつた。九州島の溪山としては、この谷に指を屈すべ

つた。

この九州アルプスの外面に位置して、旅客の眼を惹き、又はわかい人達の憧憬の的となるのは、矢張霧島であり、阿蘇であり、溫泉岳である。皆んなその位置が好いためである。中でも溫泉岳が一番好い。有明海をその四周に持つた大きなその山の基盤は、何處の海岸からも、何處の汽車の中からも、何處の田舍の町のはづれからもそれとはつきり仰がれた。丁度九州島に於ての富士と言つたやうな形だ……。

阿蘇は世界でも屈指な大活火山であるが、矢張その位置がわるいがために、普通の街道を旅する旅客の眼には餘り多く觸れなかつた。霧島は阿蘇よりあたりが展けてゐるけれども、これとても溫泉岳のやうなわけには行かなかつた。幹線の汽車の窓からは、丁度その背面を見るやうな形になつてゐるので、殊にその姿が小さく見えた。霧島の一番すぐれて見えるところは、矢張日向の高原附近であつた。

霧島は寧ろ遠く望まれる山と言ふよりも、登攀して展開する方のすぐれてゐる山である。この點になると、阿蘇よりもぐつとすぐれてゐる。又、溫泉の山頂の眺望よりもすぐれてゐるかも知れない。其處から眼下に眺めた錦江灣の眺望は、日本にも澤山ないもの・一つとすることが出來ると私は思ふ。

背振山、多良岳、これもまた九州島では名高い山である。筑後川の流に添つた高良山の[illegible]のやうな形をしたのも私にはおもしろかつた。背振山は太宰府に行く汽車の中から殊にあざやかに[illegible]夏の長い姿を見ることが出來た。多良岳は大村灣をめぐつて逞しく聳えた。

て行くといふ意味に於ても、九州アルプスを横斷するといふ意味に於ても、又は最も開けない交通の不便な土地を見るといふ意味に於ても……。

九州アルプスを横斷する地點としては、この他に、日向から肥後の馬見原に出て行く路、椎葉の山中から人吉に出て行く路、耶馬溪を溯つて筑後の久留米に出て行く路などがあるが、中で矢張この道が一番面白いらしかつた。椎葉からの路は嶮しすぎた。馬見原へ行く路は、阿蘇の南方に延びた裾と、そのラバの流れた形と、その大きな山の基盤とを見る上に於て非常にすぐれたシインを持つてゐるさうであるけれども、矢張交通が不便で、山路を二日も三日も歩かなければならなかつた。耶馬溪を溯つて久留米に出る路は、山勢が陵夷してゐるために、九州島横斷といふ氣分は十分に味ふことは出來なかつた。そこに行くと、矢張面白いのは、竹田、久住の路だ。惜むらくは、私は未だそこを横ぎつてゐなかつた。從つて多くの智識を持つてゐない。

しかし人の語るところに由ると、非常に大きな高原やステツプがあるといふことである。世にかくれた奇勝も澤山にあるといふことである。實際、九州の山岳では、其處にある九重、祖母などと言ふ山が一番高いのであるから、深いすぐれた嵐翠の氣は其處に複雜に巴渦を卷いてゐるに相違なかつた。

しかしこれ等の九州アルプスは、日本北アルプスなどのやうに、何處からも展開して眺め得るやうな地點を持つてゐなかつた。深く端山繁山の中にかくされてゐた。從つて人口に膾炙するやうな山はなか

つて不便のやうであるが、大阪までの急行列車を利用し、瀬戸内海の汽船を利用すれば、そんなに厄介ではない。熱海、湯河原あたりに行くよりは、結局面白くつて、變化に富んでゐて、費用もさう多くはかゝるまいと私は思ふ。別府は割合に物資の豐富なところで、從つて物價も廉い。濱脇あたりで、溫泉つきの家を一軒借りて、家族を伴れて行つて、ゆつくり湯治をするのも面白いに相違ない。

それに生魚が多く、風光が好い。別府の持つた海は、九州でも澤山はない海である。一體九州は西海岸よりも東海岸の方が海がすぐれてゐるが、その東海岸でも指を屈すべき海である。大分から別府、別府から日出に行く間に展開された別府灣の海の碧は、東海道沿岸などではとても得られないものである。それに、別府は山の美をも持つてゐる。背景をなした由布岳一帶の翠微が深く、火山群としても優に地理學者の研究に値ひする特色や材料や價値に富んでゐる。溫泉も非常に多い。そこにある硫氣孔を見ては、箱根あたりの大涌谷などは、言ふに足りないとすら思はれる。

九州島と思ふと、私はその賑やかな色彩の濃やかな一角が海を隔てゝ直ちに大阪の繁華に續いてゐるやうに思はれて仕方がなかつた。

八二

別府から竹田を經て、久住、阿蘇に出て行く路も面白いに相違なかつた。九州島の東面から西面に出

かう言つて私は灣形を成してひろがつてゐる岸に、白堊と瓦甍と炊烟とが一緒になつて固つてゐるのを見た。右には姫島が見え、國東半島の丸く海中に出てゐるのもそれと指さゝれた。

別府は一面溫柔鄕で、一面溫泉場と言つたやうな處であつた。非常にあたりがゴタ〳〵してゐる。不揃な家並、細い通、埠頭、溫泉宿、電車――さういふものが雜多な色彩と氣分とをあたりに投げた。汽船の甲板の上では高い山に遮られてそれと見えなかつた天正時代の古戰場である四極山などといふ山も町からはそのすぐ近くに見えた。

私は秀吉が九州を征した時のことなどを頭に浮べた。その軍兵の中で第一にこの地に渡つて大友を扶けたのは、四國の長曾我部だが、その長曾我部が、大分附近で、島津の北上した勢力と戰つて大敗して、長曾我部信親の墓を其の附近に殘してゐるのなども、いかに島津の勢力の大きかつたかを示してゐる。島津は九州の東面と西面とから二道並び進んだ。東面は到る處で大友の勢力を驅逐し、その最初の應援軍をも破つて、宇佐平野まで進出した。西面は熊本から久留米、太宰府を經て、福岡一帶の筑紫平野を蹂躪した。立花宗茂が孤軍を揚げて、辛うじてそれを拒いだ地點は、今、九州縱貫幹線の香椎驛の少し手前の立花山がそれであるが、そこさへ破られゝば、關門海峽は全く島津の手に歸するところであつたのである。秀吉はさう容易くは九州を手に收めることは出來なかつた。

別府は冬行つて見たいと私は思ふ。避寒には持つて來いのところである。東京あたりからでは、遠く

「もう、別府の山が見えますぜ。」

かう船員が教へて呉れたので、甲板の上へと出て見る。果して前に山が見える。それは今まで見て來た山とは形も姿もすべて變つてゐる高い山である。午後の日が明るく深い襞にさし込んで見られた。

「由布岳かね？　あの高いのは？」

「さうです……」

私の心はあくがれずにはゐられなかつた。それこそは九州アルプスの連環の一峰ではないか。四國の劍山山脈から豐後水道を經て、再び九州島にあらはれて、一方は霧島火山群に接し、一方は九重、祖母から阿蘇へと出て行く山嶺の連亙ではないか。私はその夕日に彩られた美しい高い山群を仰いだ。

汽船はその高い由布岳を正面にして、金錫のやうに美しく輝きわたつた海を航行した。

九州に來たといふ感じ、漸く瀨戶內海に離れたといふ感じ、さういふ心に滿されて、私が甲板に立つてゐると、

「それが佐賀の關の鼻でさ。」

かう船員は指さして教へて、「そら、見えるでせう。山の下にごた／＼と固つて簇つて、人家が……あれが別府……」

「はア、あれが別府……」

けれども――またその湯錢が馬鹿に高いと思ふけれども、それでも浴槽、浴舍の規模の大きいのは人の眼を驚かすことが出來た。公園になつてゐる河野氏の湯月城の址から眺めたあたりの丘陵ののんびりしたさまも私の心を惹いた。しかし松山の好いのは春だ。其處には春が早く來た。靜かな雨と青い繪具のやうな草と、昔の感じのまだ殘つてゐる士族屋敷と、その屋敷跡の中の料理屋からきこえて來る若い妓の三味線の音とを持つて春は來た。ロシアの俘虜のゐた大音寺の佛舍に、聖基督の像を置いて、そこに黃い菜の花や紅桃の花の供へられてあつたシインは、今だに私の眼に繪のやうになつてはつきりと殘つてゐる。

八一

高濱から長濱を經て、九州の別府へと行く間の海は、最早瀨戶內海らしい何等の特色をも持つてゐなかつた。幅もかなりに廣く、處々に散點した島などもなく、島を彩つた松もなく、唯赤膚の單調な山が終日中板の上の旅客の眼の前にあつた。宇和島や大洲や八幡岬や、佐田岬がその左にあるのであるけれども、展望がきかないので、深く入り込んだ入江などを見ることが出來なかつた。私は唯その丘陵の襞の中に埋れてゐる町や人家や旅舍を想像した。

海は次第に濶く濶くなつて行つた。もう全然瀨戶內海ではなかつた。波の立ち具合や、海の色までも違つて來た。汽船の動搖も次第に烈しくなつて行つた。」

白峰の位置もそれと甲板の上から指すことが出來た。多度津からは、例の有名な金比羅神社のあるところへと行けた。やがて觀音寺、今治、その附近は脇屋義助の勤王の跡が非常に殘つてゐるところで、四國の名山石槌山の雄姿の晴れた朝の空に美しく聳えてゐるのを見ることが出來た。別子銅山の精錬所のある四貫島の賑かな林立した烟突、晴波に漲り渡る烟突、その傍を掠めるやうにしてこの汽船は通つて行つた。

來島瀬戸に來ると、波はや〻高くなつた。汽船も少しは搖れる。瀬戸内海の幅も段々廣くなつて行き、そこらに散在してゐる島の形も大きくなつて行つた。石槌山脈が段々左に、後にはその西の側面を見せるやうになつて來ると、汽船の舷窓に入り込んで來る日影も右から左に移つて、航路が右に一大廻轉をなしてゐるのを誰も氣が附かずには居られまい。

伊豫の高濱は美しい港だ。興居島、伊豫富士、すべて繪葉書になつてゐる。夕暮に、港の岸の茶屋で船を待つてゐると、海と島とが靜かに暮れて、漁舟の灯や岸の漁村の灯が水に落ちる頃、宇品から來た汽船が赤い青いランタンを薄暮の空氣の中に際立たせて、靜かに港に入つて來る感じは何とも言はれなかつた。

こゝから松山市へ行くのは近かつた。汽車一時間、それで旅客は丘陵の上に今も完全に殘つてゐる昔の白堊の天主閣を望むことが出來た。道後の湯は湧出量が少く、温泉としては最早老衰したものである

大阪を出帆して瀬戸内海を航行する大阪商船會社の汽船は、その船の瀟洒なのと設備の完全なのと速力の輕快なのとで世間に知られてゐる。それに、波の靜かな風光の明媚な海山の眺めは旅客をして長い航路に倦むことを忘れしめた。『あの汽船の中位涼しいところはない。好い納涼船だ。』などと上方の人達は常に言つた。

この汽船の航路には、內海線と油津線との二線がある。共に沿海の諸港に寄港して、一は日向の內海まで行き、一は油津から鹿兒島まで行つてゐる。內海まで二晝夜、鹿兒島まで三晝夜かゝる。二等室の設備が好いので、旅客は大抵は樂に寢て行ける。食ふものはさう旨くはないが、我慢が出來る程度のものは朝夕に食はせて呉れる。それに、海が穩かで、荒れてもさう大してひどい目には逢はない。時には道化芝居や茶番などがあつて、船客を慰さめるやうな催しなどのある汽船もあつた。

淡路島が既に好い。由良あたり、それからぐるりと廻つて福良、しかし汽船はこの航路を取らない。岩屋から――讃岐の方へと進んで行く。高松の海の明るく美しいのは既に說いた。小豆島の土の庄にもたしか汽船は寄港したと思ふが、こゝで下りて、例の神馳の奇勝を訪ふのも旅の一興である。

概してこの汽船は、中國の海岸には近づかずに、四國の岸を縫うて行つた。崇德天皇の跡をとゞめた

見て通ることが出來た。

大阪は京都と比べると、空氣から感じからすべて違つた。言葉でも仔細に聞くと餘程違つたところがあつた。實際山の都會と海の都會の相違のあるのを感ぜずにはゐられなかつた。

京の着倒れに比して食ひ倒れと言はれるだけあつて、食ふものには旨いものがあつた。料理もすぐれてゐた。例のあんかう鍋、まな鰹、鯛なども瀬戸内海でとれる奴を此處でくひ留めて京都まではやらないので、旨いのが食へた。京都料理の概して上品に、外形を美しくしたのに比べて、此方は内容と實質とに富んでゐると言つて好い。

昔から上方の感化と言へば、主として大阪の感化であるが、今日でも、關西地方に於ける大阪の勢力といふものは非常なものであつた。あらゆる市街、岡山とか、徳島とか、松山とか、廣島とかいふ市街は、すべて大阪式に店を構へ、店の飾り附けをなし、ショウウィンドウの形を揃へた。否、それは中國地方ばかりではなかつた。大阪から出帆する汽船の到る處——たとへば、豐後の別府とか、大分とか、日向の宮崎とかいふあたりまでその感化の及んでゐるのを私は見た。それに、狭斜街がさうであつた。九州地方でも、評判の好い賣れ兒は大抵大阪の女であつた。從つてさうした土地の女や娘達も、多くは大阪風に着物や髮の形を眞似た。福岡などは殊にその感化の著しいのを私は見た。

ある時、奈良の方から來た私は、天王寺驛で下りて、車を賴んで、三時間の中に大阪の名所々々を案内させた。

一番先に天王寺に行つた。成ほど大きな寺だと思つた。例の新たに鑄た大きな鐘などもあつた。丁度ぼろ市か何かで、寺内は雜沓してゐたが、それでもいろいろのものを見て、それから高津へと行つた。參詣して下りて來ると、丁度晝近いので、其の前にあつたある料理屋で午飯を食つた。それから生國魂に行つて例の大きな眺望の好い舞臺の上に立つた。この丘陵は高津乃至大阪城址のある丘陵と共に曾つては波に洗はれたところで、これから下の低地、卽ち、大阪の繁華な市街は、さながら海であつたのであつた。仁德帝の眺められた民の烟は、實に漁村蜑戸の朝夕の烟であつたのであつた。

そこから道頓堀へ來て、例の特色のある千日前へと車夫はつれて行つた。こゝは東京の淺草見たいなところだが、またそれと違つて上方の氣分が漲りわたつてゐるのを誰も見る。宗右衞門町の夕の灯の賑ひも思ひやられた。

それから心齋橋の畔、四ツ橋、こゝらは大阪でも最も賑やかな家並の揃つたところである。車夫は猶二三の名所を案内して、中の島公園から梅田の停車場へと來た。ほんの素通りならば、二時間もあれば

蘇すことは筆の力では出來ないのか、否、否、かう心の中に叫びつゝ私はそこから出て來た。

つゞいて私は昔榮えて今衰へた佛教の宗門のことなども考へた。法相、華嚴、さうした宗門の日に衰へて、その持つた寺觀と共に日に月に塵埃の中に埋れて行かうとするのは悲しかつた。

藥師寺はそこから近かつた。

そこに藏されてある三尊佛の偉大なる藝術的價値は、今更此處に喋々するを須ひない。雖仲の持つた扁額に、「西の京、藥師寺」と書いてあるのもなつかしく、裳階を持つた三重塔の形の好いのも、またはその水烟に天人飛揚のさまを刻してあるといふことも、私に『詩』を思はせた。

今でこそ寺の本堂や、その本堂の持つた佛像や、優秀な彫刻や、さういふものがすつかり特別保護建造物になり、國寶になり、永久に保存される計畫が着々實行されるやうになつたけれども、明治の初めまでは、さうした佛像も何も彼も全く塵埃の中に埋れて、小さなものは皆な人の持つて行くのに任せたのであつた。

それにしても、木の葉の疎々として路に散る頃、靜かにこの間を逍遙つたならば、それこそ何んな氣がするであらうか。なつかしき古都よ。

松林の角で逢つた萠黄の僧衣を着た若い尼、やがて行き着いた本坊から私のために案内の勞を取つて與れた跛足の僧、佛像の前に行く度に丁寧に禮拜したその掌中の念珠、その光景を私は後までも長く忘れることが出來なかつた。その時分は私はまだ若かつたけれども、それでもさうした寂滅の影が深く私の魂に染みた。

あらゆる人事の變遷は、いち早く移つて行つて、帝王の世すらも、その榮えた宮殿の址すらも、何も彼も痕も形も留めなくなつてゐるのに、この寺ばかりが、またその寺の中に藏された佛像のみが、更に扉を明けて入つて行く時にぷんと鼻を撲つて來る埃の香のみが、移らず、變らずに、長い年月をかうしてこゝにあると思ふと、爭鬪の徒らにして人事の去り易きを思はずにはゐられなかつた。私はぢつと立盡した。

佛像の持つた藝術的價値、また建築上驚嘆すべき幾多の技巧、さうしたものもたしかに私を驚かすに足りたけれども、それよりも一層深くその跛足の僧の合せた念珠が私にある感動を與へた。

その後、私は二度も三度も西の京に行つた。しかし、その時ほどさびしい『廢都』の氣分を味つたことはなかつた。私は跛足の僧に別れて出て來たが、猶暫くはその境内を去ることが出來なかつた。

ロオデンバハは "Bruge la Mort" を書いた。この奈良のために "Nara la Mort" を書く藝術家は日本にはないか。またこの舊都はあまりに荒れ果てゝ、またはあまりに時代が離れすぎて、それを再び

かう言つて車夫は空車を曳いて田圃の路を向うに行つた。

裏門を入ると、梅が一本、白く浮出すやうに咲いてゐた。

『一人してさびしき酒は醉を成さず垣根の梅の唯白くして』さつき奈良の轉害門の近くの旅舍を出て來る時には、かう口吟みつゝ車を呼んで貰つた。旅舍の空地には矢張梅が白くさびしく曇つた日の空氣に際立つて見えてゐた。それは丁度若草山を燒く日で、旅舍の一間から見ても、淡い烟がさびしくあがつてゐるのが指さゝれた。

春はまだあたりに遍くはなかつた。嵐山、吉野の花信もまた一月後である。車に搖られて來る間も、寒い寒い風が生駒連峯から下ろして來た。

あたりはしんとしてゐる。人の氣勢もしない。唯、古い寺の屋根が、廂が鴟尾があたりにレリイフのやうに浮き出して見えてゐるばかりである。千餘年來のさびしさはぢつと私の胸に染みた。

鴟尾を持つた大きな金堂の扉は、ぴつしやりと堅く閉ぢられて、それをめぐつた長松の梢が徒らに風に鳴つてゐるのを耳にした。

私は縣廳のある人からの紹介狀を持つてゐたので、彼方に行つたり此方に行つたりして僧のゐるところを求めた。しかし何處にもさうした氣勢を認めることは出來なかつた。漸く三面僧房の一部に行つてそこにある僧を認めた時には、僧は面倒臭さうにしてその行くべき方向を敎へて呉れたばかりであつた。

私達は旅舎を出て、普通の遊覧客と同じやうにして、手向山神社から三月堂に行き、二月堂に行き、その舞臺からは、香久、畝傍の山々を望んだ。

大佛の前では、聖武天皇が皇后以下百官を帥ゐて、この毘盧沙那佛を開眼するために此處に行幸あらせられた昔を思つた。つゞいて佛教に歸依しなければ生きてゐられなかつたやうな男女を思つた。何も彼も、しかし皆すぎ去つた。涙も、煩悶も、美も、榮華も……。

轉害門のあるあたりは、殊に私達にいろいろなことを思はせた。そこは往昔の平城宮の一條大路ではないか。これから眞直に左に進むと、往昔の大極殿の址が、そのまゝに田疇の中に殘つて居るではないか。

舊い都をめぐつた山はことに靜かで、そこにはぼつと淡い霞が棚引いてゐる。花がほの白く處々にあらはれて見えてゐる。佐保川の細い流れの岸には、依然としてやさしい菫の花が咲いた。

春だ……。かう思ひながら、私達は靜かに西の京の方に向つて歩いた。

七八

ある時は寒い曇つた今にも雨が降つて來さうな日に、唐招提寺の裏門に來て私は車を捨てた。

『表門に廻つてますから。』

猿澤池、その岸に靡いた楊柳、大きな華表、古い寺、鹿はもうあたりにその姿を見せなかつたけれども、其處まで、その旅舍までやつて來る間の暗い杉の森の空氣が私達の心を躍らした。をりをり白く咲いてゐる馬醉木の花は、私達に昔を思はせるやうに微かに薄暮の空氣の中に漂つた。

私達は千餘年來の昔を思つた。此處等が春日野であつた時代、「春日野の飛火の野守出て見よ今いく日ありて若菜もゆらん」と歌つた時代、子の日の小松を引きに男も女もやつて來た時代、さうした昔のことが私達の胸に往來した。

私達の泊つたあたりが、伊勢物語にある武藏野であるといふ話の出た時には、「若草のつまもこもれりわれもこもれり」と歌つた優美な物語が盡きずに話された。誰の心も皆な遠い遠い昔の戀のロオマンスに向つて漂つた。

私は言つた。

「その時分は、此處等は郊外でさびしかつたんだね。寺ばかりがあつて、あとは野山だつたんだね。その時分のことを考へると、何とも言はれない氣がするよ。」

私は此の前來た時、若草山の上に登つて、大和の平野を望んだことなどを思ひ起してゐた。大和の持つた古い感じ、古の人が此處に數千年來住んでゐたといふ感じ、その時分からの寺が處々に殘つてゐるといふ感じ、その感じだけでも、私は深い瞑想に耽らずにはゐられなかつた。

七七

若草山の下にある亞字欄干を取廻した旅舍の一間で眼をさました私達は、いかにも古都の中にゐるさいふ感じがした。

春だ。常磐木の綠の中には花がほの白く咲いてゐる。此處にのみ多いさいふ馬醉木の花も白く微かに匂つてゐる。さ、不意に古い寺の五重塔のぬつさ聳えてゐるのが私達の眼の前にあらはれて見えた。寺の朝の鐘の聲が靜かにした。

遊覽の氣分の中に離れて殘つてゐる舊都の感じが私達の若い心を堪へ難くした。あたりはすべて春でありまた詩であつた。

『好いな。』

かう誰も彼も言つた。

私達は昨日薄暮に此處にやつて來たこさを思つた。私達は月の瀨の梅の咲きすぎたのを見て、山越しに柳生に出でそれから笠置に登つた。そこでは佛像の刻んである大きな石の兵燹にか丶つてその痕も髣髴するこさも出來ないやうに微かになつてゐるのを見た。また元弘帝の行在所の趾や、昔の勇士達の烈しく戰つたあさなごをも見た。笠置の停車場の前では、しばし休んで、靜かに旅のつかれを醫した。

川を挾さんで相對した源平二軍の戰も私達に繪を思はせた。

茶摘の頃は私はまだ知らないが、その時は賑かであるだらうと思ふ。さぞ色彩の濃やかな感じがするだらう。赤い襷に白い手拭、すらりとした姿を茶の樹の新綠の中に見せてゐる繪はよくあるが、それ以上に面白いすぐれたカラアがあるであらう。人の話に由ると、平生は靜かなその町も、その時は非常に生々とした氣分をつけて來るさうであるが、他鄕から入つて來る若い男女が多いことゝて、戀物語も必ず澤山あるに相違なかつた。私は其處に行くと、いつも紅葉の『新色懺悔』といふ作を思ひ出した。

縣さまと土地の人の言ふ縣神社の祭禮も近畿では賑かなので有名だ。丁度、東京の羽田稻荷と言つたやうな風で、主として花柳界の人達がお詣りする神なので、その色彩は殊に濃やかであつた。

兎に角、宇治は好い處だ。一つ其處だけ切り放して來ても、上方のリフアインされた空氣がインプレツシヨニストの繪のやうに鮮かに明るく感じられる。『京都の旅舍に泊る位なら、宇治だね。宇治なら、いつでも行つて一夜ゆつくり泊つて來たいやうな氣がする。』かう私ばかりではない、誰も皆な言つた。

京、大阪の嫖客達が妓をつれて遠出をする理想的のところにしてゐるのも無理はなかつた。

川に臨んだ旗亭には、三味線の音がいつもきこえて、美しい舞子が長い袂を亞字欄干に凭らせてゐるたりなどした。

量が多いので、いかにも滿ちてあふれて流れてゐる。それに湖水の決水地、南鄕からこゝまで流れ落ちて來る間に世にかくれた溪流の美が澤山あるといふことであつた。宇治川は宇治に來て、始めて平野を得て、桂川を合せて、淀川となつて、そして大阪平野へと流れ落ちた。

この川はかなりに洪水の被害が多かつた川であつた。雨が降つて水が出ると、淀川附近に行つて逆流して、例の殘水湖なる巨椋池をつくり、猶暴漲して大阪の都會のある平野を浸した。河村瑞軒が名を成した安治川開鑿も、主としてこの川の水を治めたのである。明治になつてからも、その十七八年頃に非常に大きな洪水があつた。で、それを根本的に治めたいと言ふので、新しい淀川の水路が、河口近くにつくられ、南鄕と淀と安治川とに三つの大きな閘門が出來て、常に水量の調節を計ることとなつた。

宇治には私は三度遊んだ。初めて行つた時は、その停車場で非常に眼の美しい女を私は見た。二度目に行つた時には、川に臨んだ離座敷に泊つて、宇治橋の上を往來する紺蛇の目の傘の繪のやうなさまを眺めた。三度目には、千鳥の聲を夜もすがら聞いた。

今日殘つてゐる平等院が、關白賴通の別墅であつたことから考へると、昔の人達も矢張此處等を悠遊の地としたものであることがわかる。それに、以仁王の亂も、この川に添つた町を色彩深くした。源賴政は此處に來て、萬事了すと觀念して扇の芝で自刄し、以仁王はもう少し先まで遁れて井手附近で流矢に中つて薨じた。

や、八瀨や、鞍馬や、それから丹波の山の中や、さういふ處に住む人達は、その山の都に榮華、驕奢、沒落、歡樂、敗滅の行はれてゐることなどには全く無關心に、靜かに平和にその持つた一生をすごして行つたのであつた。そしてたまには、その烈しい悲喜劇の巴渦に堪へ兼ねた人達が、その深山幽谷の中に隱れて入つて行つた。

西鶴のおさん茂右衞門が、琵琶湖に入水したと見せかけて、この山の都の背後にある丹波の荒山の中に入つて行つた形も私には面白かつた。熊のやうな獵師、破れた壁、軒端の山からは雲が起つて、時の間に雨となつて行くやうな山村、そこに怖れをなしながら、さびしく悲しく日を暮した二人の驅落者の心理は、人に種々のことを思はせずには置かなかつた。しかし今ではこの荒山の中にも汽車が通じた。

嵐山が人口に膾炙したので、小嵐山と呼ばれるところが日本中ところどころにあつた。平泉の藤原秀衡は、北上川の對岸の束稻山に櫻を栽ゑて京の嵐山に思を寄せた。周防の岩國の錦帶橋の向うの山も、矢張小嵐山の名に呼ばれてゐた。日光の下河原も矢張さうであつた。

七六

京都附近でちよつと遊びに行つて見たいところは宇治である。

一體、宇治川そのものが既に面白い。琵琶湖から流れ落ちたので、水はさう大して綺麗ではないが、

流が急なので、ともすると、舟が流されさうになる。それを船頭は努力して、成たけ岸へ岸へと寄つて上つて行く。

少し溯ると、趣がすつかり變つて了ふ。兩岸が狹くなつて、次第に深い峽谷となつて行くのを見る。瀟洒な茶棲の水に臨んで構へてあるのが段々見え出して來た。

舟を捨てゝ岸に上る。いかにも好い。そこの溫泉の旗亭の川に臨んだ一間で、半日の淸興を恣ままにするのも、また旅の興の一つでなければならない。

保津川の谷はちよつと面白い。いかにも深い谷のやうな氣がする。その癖、溪谷としてはさう大きなものではないのであるが、兩岸が迫り、幅が狹いために、水は深く谷を穿つて流れてゐる。無論、この保津川下りは、富士とか天龍とか球磨とか言ふほどのものでもなく、瀨などもさう大きいのは澤山はないが、しかし都會の人達の遊ぶ方法としては、寧ろこの位のところが丁度好いかも知れないのである。これをやるには、汽車で一つ先きの龜岡まで行き、そこで川舟を艤してそして一直線に下つて來るのであつた。

嵐山、愛宕、比叡、大文字、これ等はすべて京都の四周をめぐる山巒である。がこれを一歩入ると、非常に深い山であるといふことも面白かつた。東京がその附近に荒凉寂寞とした武藏野を持つてゐると同じやうに、京都も一歩入ると、太古に似たやうな山と山村とが到るところにあるのであつた。大原

仁和寺では『徒然草』にある鼎をかぶつた僧のことなどが思ひ出された。

やがて妙心寺、それから前に言つた京都第一の古寺廣隆寺もその近くであるから、それは是非行つて見なければならない。つゞいて清凉寺、野の宮の趾、此處まで來ると、嵐山の翠微は既に眼の前に聳えて、やがて潺湲とした大堰川の流が、山の影を、人家の影を、又は長い橋の影を涵して、一卷の繪卷を其處に展開した。

七五

嵐山は私は夏が好きだ。

殊に、初夏の新綠の頃が好かつた。花もわるくはないが、いかにも雜沓して、塵埃が多かつた。秋の紅葉はやゝさびしすぎた。しかし矢張わるくはなかつた。

『大堰川かへらぬ水にかけみえて今年もさける山櫻かな』景樹の歌などが思はず口に上つて來た。流は淸く、且つ水量が多かつた。その水に映つた鮮かな新綠、岸には妓を乘せた屋根舟などがかゝつてゐて、其處等を種々な色彩がチラチラと搖いた。靑葉には日が照つて、濃淡の繪がその下を行く人達の衣の上に落ちた。

舟で川を溯る。

數できこえた三十三間堂の古寺の堂宇があらはれて來た。秋なれば、通天橋の紅葉、そこはちよつと世離れてゐて感じが好かつた。

知恩院から北するこ、青蓮院、後花園帝の陵、粟田燒の陶器、此處等が昔の東海道の入口で、旅客は逢坂山の嶮を越えて此處から京都に入つて行つたことなごが偲ばれた。やがて平安神宮、これも千年も經つた後には、明治大正の榮えを偲ぶ好記念物となるには相違なかつた。蹴上のインクラインから一帶青松路不迷こ賴山陽の詠じた南禪寺、その隣の永觀堂、岡崎は今は人家が櫛比して了つたけれども、香川景樹の東塢塾のあつた頃は、半ば竹藪なごの多い野や畠で、若菜も萠え、霞も靡き、糸遊の中に若菜つむ人達が行つたり來たりした。詩仙堂、銀閣寺、そこまで入つて見る人は稀だ。

皇居のあるところから、西陣、そこでは應仁の亂のことなごが思ひ出された。やがて電車で北野へと行く。菅公を祭つた一番最初の天神祠であると思ふとなつかしい。平野神社、金閣寺、足利義滿が山に白布を張つて夏日雪を見ようとした山、それから田圃を越して、等持院、そこには維新の志士がその首を切つて三條河原にさらした足利尊氏の木像があつた。やがて嵯峨の仁和寺の五重塔が高く林間に聳えてゐるのが見え出して來た。

こゝらは京都の中でも、殊に山の氣分に富んだところで、右に大文字比叡の連峰をめぐらし、左に愛宕の翠微を望み、遠く南に笠置山脈と生駒山脈とを望むことが出來た。嵐氣が非常に多かつた。

等は旅客にその時分の京都の位置を思はせるに十分であつた。京都は昔は今の京都よりももつと西に偏つてゐた。

鴨川以東にある東山の地區は全くその郊外であつた。『徒然草』にある鳥邊野の烟の條を見ても、その時分のさまが思はれた。

東山、西山にある寺々の配置も、それから考へると成程と點頭かれた。

『寒しとてかへり見すれば北山の峰白妙に雪はふりけり』かうした歌があるが、その北山の雪をその歷史上の人物が皆な仰いで冬の來るのを知つたことを考へると、一層昔の山の姿が眼の前に近く迫つて現はれて來るではないか。

しかしこの山の都の昔の趾も、探るにはさう面倒ではない。先づ東山に行く。今は電車があるから便利である。三條、四條の賑はひ、それから祇園の絃歌の巷、そこの男女の歡樂が昔の悲喜劇の跡と相映對してゐる形も意味深かつた。知恩院の大きな堂宇、キウキウと鳴る鶯張、八阪の五重の塔、陶器の肆の多い五條坂、清水の舞臺、音羽の瀧、そこでは山科から通つたといふ大石良雄のことなどが考へられた。鳥部野の墓地にお俊傳兵衛の跡を弔ひ、それから北條が威權を挾んだ六波羅の址、方廣寺の國家安康の鐘の銘、阿彌陀峰の大きな墓に對しては、絕世の英雄の資を持つた豐太閤のことを思はずにはゐられなかつた。朝鮮人の耳を無數に斬つて塵づけにしたといふ耳塚の丸い塔、それから少し行くと、大矢

正成も、尊氏も、義貞も皆なそこにゐるのである。鴨長明も、兼好法師も、天台大師もすべて皆なそこにゐるのである。旅客は是非とも一度はこの古い山の都に入つて、細かにそれ等の人々と語つて見なければならない。歴史上に動いたすべての人物は、必ず再び旅客の前にその姿をあらはして來て、いろ〳〵な昔の事蹟を語るに相違ないであらう。

これ等の人達の姿、趾、事蹟、さうしたものゝまだなかつた以前、即ちこの山の都がまだ山の都でなかつた時分、その時分のことをもをり〳〵私の想像に上つた。その想像は不思議であつた。私の眼の前には、さびしい山村、處々に微かに鷗つてゐる烟、その間を通る旅客、さうしたものが映つた。奈良から宇治川をわたり、逢坂山の嶮を越して、一日かゝつて湖畔の都に行く人達の姿が映つた。

多い趾の中で、その時分の趾を語つてゐるものが、唯一つあつた。それは何か？　即ち太秦に今も殘つてゐる京都第一の古寺廣隆寺であつた。

従つて多い寺々の中で、その廣隆寺の建物が一番深く私を動かした。私はある秋の日に其處に行つた。草藪には赤い實が交り、薄の上にはさびしい夕日が射した。私は『時』を思はずにはゐられなかつた。

七四

神泉苑附近にある大極殿址、それから眞直に南に下つた朱雀大路、東寺の左にある羅生門の址、それ

つたのではないか。

であるから、京都の歴史は暗黒の歴史が多い。戰亂の記事が多い。爭鬪殺伐の事實が多い。到底奈良朝乃至奈良朝以前の平和に比すべくもない。堅い殼の中に入つて、それが却つて戰亂を誘致した。帝都は屢々賊の手に落ちた。帝王は或は蒙塵し、或は捕へられて島に流された。さうだ、京都が戰亂の巷と化したことも一度や二度ではなかつた。

守るもの必ず敗れるといふ原理、自から退嬰して却つて滅亡を招くといふ原理は、此處にもよくあらはれてゐるのを私は思はずにはゐられなかつた。

かの清盛が豪邁の資を持つて、新都を今の神戸に移さうとしたのも、秀吉が大阪を開いてそこに自己の根據地を置いたのも、單に地の利の便不便ばかりに歸することは出來ない。山の都、平野の都、海の都、その都の位置に由つて、ある國は衰へ、またある國は榮えるのであるから――。

しかしこの狹い山の都には、實にいろ〳〵な悲喜劇の跡が今でもはつきり巴渦を卷いて殘つてゐるのを私は見た。いろ〳〵な人が種々な心を抱いて皆な逢坂山の嶮を越えて出たり入つたりしたのである。それを思ふと、汽車で倏忽に通つて行つても、深い瞑想に耽らずには居られなかつた。

祇園精舍の鐘の聲も今猶ある。鳥部野の跡も今尚はある。義經の堀川の邸の趾も、清盛の全盛を極めた跡も、足利義滿の豪奢の跡も、何も彼も今猶はある。小督局も、後白河法皇も、源爲義も、平重盛も

艪を持つて、そして甲板へと出た。

岸の提燈の動いてゐるのが、屋根や二階屋の此方に見えた。そこは、今津の埠頭であつた。やがて棧橋が來た。私は下りて、すぐそこにある小さな旅舍に入つた。夜はもう十一時をすぎてゐた。私はすぐ寢て了つた。

あくる朝、私は私を靜かな湖の岸に見出した。いかにも靜かな鏡のやうな朝の湖水である。竹生島の大きな姿が手に取るやうに見えた時には、私は思はず驚喜の聲を擧げた。

七三

一方に琵琶湖を持ち、一方に丹波山地を控へ、南だけ僅かに大阪平野の方に通じてゐる京都の位置は何うしても山の都と言はなければならない。それに比べると、東京や奈良は平野の都である。この地形だけから考へて見ても、爲政者の別々な心持が飮込めて來るやうな氣がした。

大和に都を持つてゐた時分は、まだそんなに人心が險惡でなかつたのであらう。又帝王も靜かに安んじて人民と相和することが出來たのであらう。ところが中世になつて、城塞などが出來ると共に、帝都も亦た城のやうな形を備へなければならなくなつた。榮螺や、蝸牛のやうに、危難に際して遁げ込む場所が必要になつた。さうした風潮に自然に動かされて、桓武帝は平城宮から平安宮の殼の中に入つて行

『いや、あれは長命寺山です。』

『はゝア、あの八幡の沖の？』

『え、さうです。』

『伊吹は見えないかね。』

『もう少し前に行かなければ、伊吹は見えません。』

段々その長命寺山ははつきりし出して來た。空氣の加減か、それとも月光の具合か、いかにもそれはぼつかりと浮んだやうに出てゐて、それより他はあとは何物も見えず、何だかロオマンスの中の挿畫でも見るやうな氣がするのであつた。

湖水は茫々としてすべて銀のやうに見えた。左を見ても、湖岸は勿論、比良の連峰の髣髴すら見ることが出來なかつた。

汽船は處々に寄港した。大抵其處には棧橋があつて、乘降の客の黑い影と二つ三つの提燈とがチラチラと交り合つて見えた。近江聖人の遺趾や、安曇川や饗庭野や、往昔の北國街道を持つた湖の岸に添つて、汽船は靜かに航してゐるのであつた。

『今津上りの方は、お支度をなさい。』

かういふ聲が微かに耳に入つた時には、私は二等客室の中でうと〳〵としてゐた。私は急いで起きて

湖畔の小さな埠頭から、乘客はぞろ〳〵と其處にかゝつてゐる汽船へと行つた。それは秋の九月の末で、前日來の風雨は拭つたやうに晴れたが、その名殘はまだ岸の柳に殘つて、白い雲が淋しく夕暮の空に靡いた。

私は大津から今津へ渡らうとしてゐるのであつた。比叡の頂きに日は既に落ちて、それに連つた山嶺は、濃い深い紫色に暮れかけてゐた。

琵琶湖は私は餘り好いとは思はなかつた。三井寺の眺望、それも少し散漫である。石山寺は好いが、湖上の眺望にはやゝ遠すぎた。それに、湖水が淺いので、何うも色がいやに錆びて灰色をしてゐる。私は帝都に近いがために實質以上に人口に膾炙した湖水を思つた。

汽船はやがて出帆した。

平滑な鏡のやうな湖上である。堅田を通る時分には、もうすつかり日が暮れて、その八景の一つである浮御堂をも見ることは出來なかつた。汽船は段々沖に出て、後にはひろい暮れた湖水の他には何物も見えなくなつたが、暫くすると、遲い月が出て、それが湖水にきら〳〵と金を流した。

暫くすると、その月の中に淡碧な山の影がほつかりと浮んで見え出した。さながら淡碧の墨繪でもあるかのやうに。

『伊吹かね、あれは？』かう私は船員に訊いた。

には容易のことでなかつた。信長はほつと此處で呼吸をついたばかりであつた。それを、一朝にして豎子のためにそのすべてを失はなければならなかつたことは、いかに殘念であつたであらうか。本丸の附近に親近の家臣の邸趾が殘り、やゝ下に宿將の邸宅の趾の殘つてゐる形なども私に信長の性格の一端を思はせるに十分であつた。私達は草藪の茂つた中に昔を偲び、透蛇曲折した路をつたつて、遂に、本丸の址のところまで登つた。

笹川臨風氏が、信長は好きな人だと云つて、その廟の前に帽子を脫したさまなども私には深い興を誘つた。

城址の東、一ところ湖水に面したところがあつた。そこからは、觀音寺山からずつと安土山を經て、その丘陵脈が湖に盡きてゐるさまが一目に指さゝれて見えた。湖の深く入込んだ入江を隔てゝ、山襞が環のやうに水光と相映對してゐるさまは、何とも言はれなかつた。帆が一つ靜かに鏡のやうな平滑な水面を動いて行つた。私は長い間佇立盡した。

琵琶湖の勝は、湖中に於ては多景島、竹生島附近を取り、湖西に於ては、雄松、饗庭野附近を取り、湖東に於ては此の附近を以て第一とすべきであると私は思つた。次に、湖東にある英雄爭奪の跡は、旅客の思ひを誘はずには置かなかつた。

山の深樹の中に僅に其水烟を見せてゐる三重塔は、安土の停車場からも猶はそれと指さゝれて見えた。

哀果君はあとで歌を示された。

小忌衣劍の舞の足取りの

淸くあるらしをとめの心は

この歌によつて、この小さなシインは一層深く私の頭に殘つた。長壽を祈ると靈驗があるといふ社、杓子や、延命酒や、さうしたものも地方的カラアがあつて面白いと思つたけれども、それよりも、雨の中の舞殿のさまは、さながら繪のやうに私には思はれた。

七二

半ば城市を成さうとして、遂に荒草野田に化した安土城址のさまは、私に信長や秀吉や家康のことを深く思はせた。佐々木神社に詣でた頃は、雨は蕭々として容易に晴さうには思はれなかつたが、淨嚴院の古くさびた庭を前にして午飯をつかふ頃から、漸く晴れて、安土へ向ふ一筋の長い田舍道を車のたどる頃には、淡い日の光が野に靜かに落ちてゐた。

規模はさう大して大きいといふことは出來なかつたけれども、城門、城樓、天守閣の址はそれぞれに殘つて、殘礎の猶ほところどころに落ちてゐるのも悲しかつた。折角、信長は此處まで出て來た。尾を略し、濃を取り、湖東の地方に出て、北は淺井朝倉の勢力を驅逐し、漸く此處にその地盤を固めるまで

七一

多賀神社の舞殿では、若い清い巫女が三人、樂の音につれて、頻りに長い袖をひるがへしつゝ劍の舞を舞つてゐた。雨は降り頻つてゐる。都合よき好晴を祝福した此行程も、昨夜樂々園で靜かに蛙聲に埋められて寢た頃から降り出して、今朝起きる時にも、入江に雨の蕭々としたさまを私達は眺めて來た。多賀に行く小さな軌道には横ざまに雨が降りつけて、煤烟が蓬々として田植の濟んだばかりの田や、黄く熟した麥の畑に靡き落ちた。私達は小さな停車場で下りて、雨を衝いて、さびしい田舍町をこの大きな社へとやつて來たのであつた。

舞殿の周圍には、一行の人達は皆な集り立つて眺めた。巫女の鈴は古雅に鳴り響き、足取りは靜かに動いて、ぐるりと小さな臺をめぐらす時には、袖と袴とがおもしろく舞つた。いかにも靜かな好い心持がした。しかし、この降り頻る雨では、折角一行のために催されたこの古典的な雅致ある舞踊も、多くの人の足を留めさせなかつた。暫く見てゐたと思ふと、すぐ向うに歩いて行つて了つた。始めはそれでもかなり多勢が立留つて見てゐたが、本當の劍の舞の初まる頃には、もうそこには五六人しか殘つてゐなかつた。巫女達の顏の表情も、樂の音も、いかにもさびしさうに見えた。しかし、この雨の中のシインは、私に取つては忘れ難いものであつた。私はその舞の終るまでそこに立つてそれを見てゐた。土岐

鹿山脈の靈仙寺山と相對して、關ヶ原の狹隘を扼してゐる形は、此處でなくては見ることの出來ないものであつた。大津市が持つた比叡、比良の眺めなどは、とてもこれに及ぶべくもなかつた。

それに、伊吹の北に連つた翠巒に嵐氣の漲りわたつてゐるさまが私の眼を鮮かにした。そして淺井氏の據つた小谷山は實にその翠嵐の中に埋められてあるのである。

私は明るいインプレッシイブな長濱を見た。それと言ふのも、時が丁度午後三時すぎで、日がまともにこの濱にさし添つてゐたからであらう。次に、私は豐公園に行く途中にある古い殘濠の眞菰の繁つてゐるのをなつかしく思つた。そこには小さな田舟などが繋がれてあつた。

私は何遍となく振返つた。賤ヶ岳一帶の山巒に雲の暗く湧きあがるのを眺めた。

長濱から再び汽船に乘つた時には、伊吹おろしが強く吹いて、女達はその髮の亂るゝのを氣にした。船側には波が白く湧き立ち、ともすると、汽船は左右に動搖した。

彥根まで私達を送つて、この汽船で大津に歸らうとしてゐる女達は『大丈夫かしら？』などと頻りに氣を揉んでゐるのを私は聞いた。

彥根の埠頭に近寄つて行つた時には、湖の東岸を明るくした夕日は、旣に比良連峰の上に落ちやうとして、その光は瀲灎として湖の中心にきらめきわたつてゐた。

などと書いたことも覺えてゐる。また同じ家のやゝ年増の春といふ女に、『春はやゝすぎにけれども竹村にのこれる花の影ぞゆかしき』と書いたのも覺えてゐる。以前、博文館で席を並べた井澤君と大に議論を鬪したことも覺えてゐる。そしてその間を、多景島の翠黛だの、そこにある寺だの、沖の二つ岩だのが縫つて行つた。竹生島の近づくにつれてある人の扇に、『石見國如硯、竹生島似笙』といふ祇園南海の語を書いてやつた。從つて竹生島に上る時には、かなりに苦しいほど私は醉つてゐた。

竹生島も好かつたが、そこから見た湖の北岸の翠微、鹽津、海津のあるあたりの後に聳えてゐる山々の湖光に相映對したさまが殊に私の心を惹いた。

年來、琵琶湖をさう好いと思つてゐなかつた私も、こゝらあたりに來ると流石に心を動かさずにはゐられなかつた。水も深かつた。從つてその色も大津や唐崎あたりで見たやうなものではなかつた。飽まで自然の懷に身を抱かれたやうな氣がした。

七〇

長濱の町は、榮えた商業の町であるといふことよりも、家並の揃つた賑やかなところであるといふことよりも、有名な山車の上の囃よりも、何よりも彼よりも、伊吹山の町だといふことが一番深く私に印象された。そこから見た伊吹山は實に見事である。赤く薙ぎた一面に初夏の雲が斜に浮んで、それが鈴

昔のまゝの瀬多の長橋、南鄕の洗堰では、これから宇治に出て行く間の山中にある溪流の奇と村落の平和とを思つた。石山、粟津、すべて曾遊の地であつたけれども、皆それぞれに私の興を惹いた。小舟に乘つて、蜆を掬つてゐる漁師達の姿もめづらしかつた。それから私達は湖の西岸にわたつた。思ひ出すのも容易でないやうないろ〳〵のシイン、とてもこれだけをかう短時間に自分で廻つて見ることは難かしいと思つた。

しかし、何と言つても、琵琶湖の美は堅田以北であつた。普通に八景と言はれるところは、あまりに人口に膾炙しすぎたためか、それとも度々來て見て知つてゐるためか、或は實際湖が衰へ果てゝ了つたためか、私の心を動かすやうな新しさと鮮やかさとを持つてゐなかつた。

私は瀟洒な遊覽汽船の中を思ひ出すことが出來た。舩で獲れた魚の鰭のキラ〳〵と光つたさまをも思ひ出すことが出來た。森知事の白髮頭をも思ひ出すことが出來た。杯盤の間を斡旋した美しい袖をも思ひ出すことが出來た。湖上の風は凉しく船の中を吹いて通つた。

雄松崎の白砂靑松は、無論、須磨あたりよりは好かつた。此處まで來ると比良の嶺の姿もはつきりと見えて、『雪白比良山一角、東風猶未到江州』といふ詩なども思ひ出された。此處等あたりまで來ると、都會の俗氣は既に已に跡を絕つた。長松の下で食つた鯽の味は殊に私にはめづらしかつた。

私は醉つて、竹淸樓の玉といふ女中の扇に、『玉のごと淸き君かな竹村のながれの石はさはにあれども』

歌をよんだが、かうした城下町に生立つた身の、いろ／＼幼時のことが思ひ出されて、父母や祖父母のことなど歴々として面影に迫つて來るのを覺えた。五十年も六十年も世に後れたさびしいなつかしい町、そこに住む人達の生活なども思ひやられて、大津、長濱あたりの明るい繪のやうな町と好對照をなしてゐることを思つた。

それに、その城址の佐和山と相對してゐる形が私に昔の英雄達の成敗の跡を偲ばせた。しかしもしこれが薄暮でなかつたならば、また空氣が雨意を帶びてしつとりと重くなつてゐなかつたならば、また城址の中が荒涼としてさびしさに閉されてゐなかつたならば、或は彦根の町そのものに對しても、これほどの印象を受けなかつたかも知れなかつた。それに一日の遊びに疲れ果てた私の心と體とが更にそれを色濃くした。

私の當てられた樂々園の一間が奥の閑雅な一室であつたことも限りなく私の心を落附かせた。剖葦が頻りに鳴いた。雨の糸のやうに細く降り頻る中を簑に笠をつけて船を漕いでゐる漁師達も、昔の古い繪そのまゝであつた。

「好いな。」

かう私は繰返して言つた。

私は昨日から一週した琵琶湖のさま／＼のシインを頭に繰返した。白いペンキ塗の瀟洒な遊覽汽船、

行つた。その形が面白かつた。

かれはこの狹隘を出で、最初に姉川の一戰を戰つた。そして秀吉を湖畔の長濱に置いて、一方北陸の勢力に備へると共に、一方安土から京都へとその勢力を伸して行つた。湖の東岸は物資の豐富なところである。かれがその本據を安土に置かうとしたのも面白いではないか。

六九

彦根の樂々園に來て始めて水郷らしい感じを私は味つた。もう日暮に近かつた。それに雨さへ降り出して來てゐた。眞菰や芦の繁つた向うには、湖の入江がひろ〴〵とさびしく且つ錆びて橫つてゐて、葦の聲と蛙の聲が湧くやうに聞えた。

『好いな。』

かう私はひとりで言つた。一日船と、車に乘り勞れた體を縁側の處に持つて行つた。彦根の町の感じは、何故か私に一番すぐれた印象を與へた。私はかういふ町が此處に殘つてゐやうとは思はなかつた。封建時代そのまゝになつてゐる城址、天守閣、昔と少しも變らない大きな鬱蒼とした樹木、その間にをりをり見える城樓の白壁、それを取卷いた濠に眞菰や蘭や蘆の發生してゐるさまも、私に『詩』を思はせた。井伊家の別邸に行く車の上で、『年を經て蘆の葉しげり水草生ひ蛙ほたるの濠となりにき』といふ

作戰をあやまつた。退いて關ケ原に據つた時は、その勢は既に敗軍の形になつてゐる。果して數時間の中にその大軍はすつかり混亂させられて了つた。

私は東海線で此處を通る時に、いつもそんなことを思はずには居られなかつた。感慨に滿されずには居られない歷史の趾である。今はその間を、山村を、伊吹山の翠微を、又は階段をした山畠を、秋は柿の實の赤く鈴生になつてゐる白壁の土藏の傍を、汽車は唯無心に煤烟をあげて通つて行く。『新しきわか木わか葉に日影さしうもれ果てたるいにしへの跡』私はある年の初夏の新綠時分に此處を通つてかういふ歌を詠んだ。

時には濃尾平野が雨であるのに、この狹隘にかゝると、俄に雪になつたやうなこともあつた。この狹隘は割合に寒かつた。また山が深かつた。それと言ふのも、伊吹山がかなりに高い山であるのに加へて、西が一帶深い鈴鹿山脈で蔽はれてゐるためであらう。鈴鹿山脈は、東海道をその中に持つた鈴鹿峠あたりから、一直線に北を指し、御在所岳などといふ大きな山岳を欹たせて、そしてこの狹隘へと迫つてゐる。敗戰の後、浮田秀家は飯も食はずに、二日二夜その深山の中にかくれてゐたのである。

それから、織田信長の事蹟も、此處等を通る時にはよく思ひ起された。かれは桶狹間の一戰に東の今川の勢力を打破してから、美濃の岐阜を攻略し、大垣を攻略し、それから、この狹隘を越えて湖畔へと出て

大王はさう旅客の心を惹くほどに景色はよくないが、御座岬から見た濱島灣は、或は鳥羽の日和山よりも好いかと思はれる位に好い。私は金比羅山の上からその落日の海を見たが、その時には暫しは我れを忘れて立留まるほどその眺めに見惚れた。薄暮に私は小舟で濱島に渡つた。

六八

佐和山にその根據地を置いた石田三成は、浮田、島津などと共に大軍を帥ひて、關ヶ原の狹隘を出て東下した。

石田は最初からこの狹隘を扼する考はなかつた。かれは大垣を陷れて尾張平野に出て一戰しようとした。勢に乘つたかれとしては、まことに當然のことである。しかし大垣に支へられて、徒に日をその間に費したといふことは、既にその敗戰の第一歩を形成する形となつた。

かれは東軍の既に近く迫つて來るまで大垣でぐづ〳〵してゐた。進んで戰へば猶萬一を僥倖することが出來たが、それすら敢てすることが出來なかつた。あの大戰の戰はれた前一二日に至つて、始めてかれは狹隘戰を試みるべく餘儀なくされた。

關ヶ原の狹隘は、今日通つて見ても、その天險であることがわかる。最初から此處に據るつもりであつたなら、西軍は決してあのやうな慘めな敗北をしなかつたであらう。惜むらくは、かれは最初にその

私はまだそれをやつたことはない。しかしその神島だけには、私は渥美半島の伊良湖岬から渡つた。面白い島だつた。その島の一角には、海水の呑吐する大きな洞窟があつた。その附近には信天翁が群を成してやつて來た。

鳥羽は九鬼氏のゐたところとして、和船の造船業が昔から發達した。九鬼氏は昔の海軍の唯一の大名である。それに太平洋岸の港としても、位置がよく、各種の風を保障して、帆檣が常に林立した。

この志摩の國を猶奥深く入つて行くと、まだ世に知られない隱れた海山の勝が澤山に澤山にあつた。海女のゐる國崎も面白ければ、下の鄕から的矢へと出て行く川のやうな入江を舟て下るのも愉快であつた。的矢港は矢張船舶の避難港として昔からきこえてゐる特色のある港である。そしてそれと相對した高原の一角に、安乘岬の白色の廻轉燈臺があつた。

曾て私は伊良湖岬の岸から遠くこの燈光を望んだことがあつた。

『あゝ見える……そら……』

『うむ、見える、見える。』

かう一緒に歩いてゐた友達は言つた。

兎に角この志摩の沿海が、航海者に取つて非常に暗礁の多い悪灘であることは昔から人に知られてゐる。殊に、大王の沖が最も悪い。現に、この間もそこで軍艦か暗礁に乗り上げて遂に沈沒した。

何方かと言へばすぐれてゐた。

伊勢灣海岸は、その平野が平凡で乾燥無味であると同じやうに、矢張特色のない平滑な砂濱が長く長く續いた。贄崎附近、辛洲附近がそれでもやゝ好いのではあるが、その持つた松林も淺露に、海も清澄と言ふことが出來なかつた。東京灣よりはいくらか好い位の程度にすぎない。從つてこの二見の一角でもそこに住む人達の心を惹くことが出來た。

例の夫婦岩は旅舍のあるところから二三町行つた海岸にあつた。初めて見た人は『何だ！ これなのか。』と思ふに相違なかつた。この間から朝の日の出を眺めるといふ趣味も餘りすぐれた趣味ではない。

しかしこゝを去つて志摩に入ると、海山の勝が驚くほどすぐれて來るのを旅客は發見するであらう。今までの平滑な砂濱がすつかり徙崖になつて、その上からは、碧い海と、その海の上に星散羅列した無數の島嶼とが望まれた。日和山は兎に角天下の奇觀である。登つて行く感じが淺露なために、その十の二三は興味が減ずるけれども、それでも眺望臺の上に立つて、思はず快哉を叫びたくなる。或人は松島よりも好いと言つた。成ほど外面だけ見ると、さう言ひたくなる。しかしとても富山から見た松島の雄大は其處に望むことは出來なかつた。

しかし舟を雇つて島めぐりをやると、中々面白い逸興があるといふことである、答志、菅、それから先きの神島、そこに渡つて行くと、とても他では見られない雄大な海を見ることが出來るさうであるが、

て名物の萬金丹を賣る店などが見え出して來る。さびしい門前町である。萱葺屋根などが甍を並べてゐる。神社のあるところからは、たうふやで見た海とは丸で正反對の志摩の海が光つて見えた。

大廟から二見へ行く電車は、この朝熊の連峰を右に仰いで、半ば田舍の部落、半ば入江のやうな處を通つて行く。

神社港、そこには遊覽者は滅多に行かない。しかし、この港とそれに隣つた大湊とは、昔の人達の水運を利用して東國に赴いた地點で、歴史上注意して見なければならないところだ。其處からは種々な人が舟を出した。例の南朝の北畠親房が義良親王を奉じて東國に赴かうとした時にもそこから舟を出して、鳥羽水道で暴風雨に逢つて、それで四散して、義良親王は伊勢灣の篠島に漂着し、宗良親王は遠江の井伊谷に辛うじて到着することが出來た。日本武尊の東征も矢張此處から出發して行つたらしかつた。さうした關係から、大湊あたりには、今でも和船の造船業が發達してゐた。

六七

松林を透して海が見えた。波の音が地を撼かすやうにしてきこえた。

狭い猫の額のやうなところではあるけれども、二見が浦はちよつと感じの鮮やかな海水浴場であつた。旅舍は皆な波打際近く並んで建てられ、其二階の欄干からは、濶い碧い海が眺められた。旅舍の設備も

てゐる。そして開けてゐる。何となく氣が落附くやうな感のするところである。鹿島や宇佐などは殊に似てゐる。さう思つて見ると、神武以來帝都のあつた大和の平野にも、何處かさうしたやうなところがあるのを私は見る。昔の人達はのんきであつたのだ。かうした開けたところが好きだつたのだ。それが平安宮——卽ち京都に移つてから、丸でその感じが違つて行つた。人の心が段々せゝつこましくなつて行つたのである。かう言つても決して獨斷ではないやうな氣が私にはした。

伊勢の大廟に詣でた人は、もう一奮發して朝熊へ上つて見ると好いのだが、大抵はそれをやらずに歸つて來る。惜しいことだと私は思ふ。

二見から登ると、かなりに路は嶮しいが、內宮の傍から上つて行くと、さう大して骨が折れない。始め十二三町ほど登りがあるばかりで、あとは谷に沿つて爪先上りに、丘の背のやうなところを通つて行く。そしてその途中に蜃氣樓のやうに伊勢灣からかけて鳥羽水道の海を見ることが出來る。

たうふやといふ大きな茶店がある。此處は二見から上つて來たところで、眺望がすぐれたのできこえてゐるが、そこでは午飯位つかふことが出來る。

名所だけに、中々眺望が好い。志摩の日和山から見た眺望ほど海に近く迫つてはゐないが、離れて見たところにまた捨て難い趣がある。晴天には遠く東海の富士が仰がれた。

こゝから朝熊の神社のあるところまで、かれ是れ十二三町ある。こゝは別に見るところがない。やが

深な氣分には缺けてゐる。この瀑は沖を行く汽船の甲板の上から指すことが出來るさうだが、それなども瀑の位置として面白い。『大八州遊記』の作者の賞めた小座川の谷には私は入つて見なかつた。

橋杭岩と串本の港との位置はすぐれた眺めを持つてゐて好い。

六六

伊勢にはその時初めて行つて、それから後二度行つた。

大廟は內宮の外苑が私は好きだ。それから宇治山田の衰へた昔の町も好かつた。淺黃の暖簾の中に白粉の女などが見えたり隱れたりしてゐるのもそゞろに旅の興をそゝつた。伊勢音頭は潮來のあやめ踊などゝ同じく、女郎の顏見世乃至引つけのやうなもので、踊にも振りにも、唯めづらしいと言ふばかり、別にすぐれたものではなかつた。矢張田舍の音頭だ……、かういふ氣がした。

宇治橋の上はいかにも敬虔な心持を起させる。跣足で歩いて、差支ない位に橋の上は綺麗になつてゐる。五十鈴川の手洗場も私の心を惹いた。

それに、大廟の背後をめぐつた山の形に特色があつた。昔の人はかうした處が好きであつたと見える。私は其後、太宰府に行き、宇佐に行き、大社に行き、鹿島に行つて見たが、さうした往昔の社のあるところは、皆な伊勢の大廟の地形に髣髴してゐるのを發見した。それをめぐる山は皆な何處かのんびりし

大きな瀞潭だ。實際驚心愕目すべき瀞潭だ。しかもこの奇景は明治の初年まで全く榛莽の中に埋れて、里人もこれを知らなかつたと言ふに至つては、いよ〳〵奇としなければならない。玉置口で舟を雇ふ。舟子はやがてやつて來て、舟をその瀞潭に放つ。潭は濃い碧で、寂として音もない。唯舟子の櫓の音の靜かにあたりに反響してきこえるばかりである。

この間十二三町、溪の盡きたところに、田戸といふ山村がある。丁度その時、上流から筏を瀞山に下して來てゐたので、その小さな旅舍には筏師が大勢泊つてゐた。さうした人達の生活も私にはまためづらしかつた。

翌日私は玉置山に登つた。かなり嶮しい路であつた。途中で路を失つて十津川の方へ下りた時には、體は綿のやうに疲れてゐた。辛うじて本宮に出て、その先の湯の峰の溫泉に私は疲れた足を橫へた。

しかしこの紀州の旅は非常に雨に惱まされた。殆ど全く雨ばかりであつたと言つても好い位であつた。いつも私はぬれ鼠のやうになつて旅舍に着いた。新宮でも、湯の峰でも、那智でも……。泥濘のはねはキヤラコの黑い羽織の背筋まで上り、蝙蝠傘は殆ど每日乾くひまもなかつた。これに由つても、紀州の地の潮流の關係で雨量の多いといふことが思はれた。しかし氣候は暖かで、蛙は鳴き、菜の花は咲き、夏蜜柑は黃ばみ、綠の中に山櫻がちら〳〵見えたりして、非常に色彩の濃やかに複雜した旅であつた。

那智の瀧は見事ではある。しかし境が淺露なために、日光の華嚴の瀧や阿蘇の數鹿留の瀧のやうな幽

ると、今でも私の心は、その月の瀨の梅溪に飛んだ。

六五

O君にわかれて、私は伊勢から志摩、それから紀州へと入つた。その沿海百十數里、那智の瀧を始めとして、北山川にある瀞八町、護良親王の遺蹟のある玉置山、熊野川は本宮から新宮まで下つた。そして大阪へ出るまでに二十日以上の日數を費した。

『いかにして種は生けんと思ふまで高きたかねに花の咲くかな』實際、春の熊野川は美しかつた。溪山の勝としては、『大八州遊記』の記者の言つたやうに、日本では私も矢張此處を推したいと思ふ。いかにしても谷が深い。山が深い。それに熊野川はその兩岸を高い高い絶壁で蔽はれてゐるので、とても他の溪谷に見ることの出來ないやうな深い氣分に滿されてゐる。水も飽まで綺麗で、その鳴る音は四面に反響して、巨人の嘯くやうな音を到る處に立てゝゐる。

耶馬溪、富士川、球磨川、阿賀川、多摩川すべてこれに及ばない。北山川――瀞八町のある北山川もまた美しい。これは熊野川に比べると、やゝ開けてゐるが、溪瀞のあるところは幽深怪奇を極めてゐる。そこまで行くには、何うしても新宮から七八里の險しい山路をたどらなければならないが、その長い路をも悔いないほどそれほどその谷はすぐれてゐるのを私は見た。

行つてそして私達は引返した。

三月の中旬になつてから、私達はまた二人づれで、月の瀬の梅を見に出かけた。私のその旅は、始めての上方見物で、かなり大規模に計畫されてあつたが、月の瀬の梅を第一にして、それから京都や吉野の花の咲くまで、志摩から紀州の奧をさまよふつもりであつた。月の瀬には上野から下りて行つた。伊賀盆地の第一印象は私には非常に好かつた。私達は歌の手帳を袂に入れながら、出來るごそれを鉛筆で書きながら歩いた。月の瀬は裏から入つて、最初に一目萬本、それから一目千本、九十曲折の險しい山路を越えて鶯谷から溪橋のある方へご行つた。梅は八分通咲いてゐた。桃香野で雨に逢つて、それから引返して、山の半腹にある一旅舍にさびしく寢た。

『梅はわがこひしき人にあらねごもわかれづらくもおもほゆるかな』かうした歌を私は詠んだ。

それを始めに、私は月の瀬には三度行つた。それほご美しい溪山は私の心を惹いた。一度は島ケ原の旅舍に泊つて、『名張少女』『椿の花』の二作を得た。

その作にあらはれた女は、此處等に見るチピカルな伊賀少女であつた。頰の豊かな、肌の白い、おとなしい娘で、年はその時二十だと言つた。不思議な情痴ではないか、又不思議な緣ではないか。今でも何うかすると、その女の笑顏が私の眼の前にあらはれて來た。もうお婆さんになつたであらう。子供も大勢持つたであらう。そんなことはとうの昔に忘れて了つてゐるだらう。かう思ひながら、梅の頃にな

それは寺の門前町からちよつと横に外れた角の下駄屋の二階であつた。そこにO君はゐた。O君は土曜日から日曜にかけて其處等にある狹斜街にいつも遊びに出かけて行くやうな人だつた。その話によると、其處等の女は非常に廉くつてそして面白いといふことであつた。O君は始めは人に知られないやうに、成たけ遠い遊廓に汽車で行つたが、後には平氣になつて、一身田にある遊廓の二階から講堂に出かけて行つたりした。

丁度三月の初めであつた。寒い強い風が毎日吹いて、外に出るにも億劫な位砂塵が立つた。『成ほど伊勢の神風と言はれるほどあるね。』など、私は言つた。

とり貝が非常に多く、後にはそれを見るのもイヤになる位食はせられた。裏に出ると、汽車のレイルを越して、經ケ岳の翠色が鬚眉に迫つて見えた。

私はO君と彼方此方に行つた。錢かけ松にも行けば、津の公園にも行き、贄﨑の美しい海岸にも出かけた。停車場を下りて、長い場末町を砂埃に塗れながら、津の町の觀音のあるところへは何遍行つたか知れない位であつた。ある日曜日には、關から鈴鹿の方へ出かけた。『坂はてるてる鈴鹿はくもる……』その昔の街道を見たいと思つたためであつた。關では私達はその昔の有名な地藏尊を見た。

鈴鹿川の清淺な流れに沿うて、山の中に入つて行く感じは好かつた。到るところ衰へ果てゝ、大きな旅舍が荒れ果てゝゐたりなどしたが、それでも昔の榮えた驛路のさまがそれと指さゝれた。筆捨山まで

知多の空氣はすつかり名古屋であると言つても好い。『そんなことあらすかい』など、いふ言葉を女は使つた。それに、この半島は割合に工業が盛んだ。酒が出來る。陶器が出來る。今では電車が名古屋から大野、常滑まで通じた。浴室の中で殺された源義朝の址が依然としてこの半島の丘陵の中に埋れて殘つてゐるのも旅客の思ひを惹いた。

東海道の汽車で來ると、岡崎はちよつと下りて見て面白いところだ。それから矢矧の長橋、業平朝臣の八ツ橋の趾、それから鳴海に來て、今川義元の桶峽間の古戰場があつた。

尾張平野は、地形から考へて見ても、信長だの秀吉だの家康だのの諸英雄が起りさうなところだ。いかにもひろびろとしてゐる。それに物資が豐富である。氣候が穩やかである。名古屋から關西線で行くと、蘆荻の生えた溝渠が縱横に通じてゐたり、林の中に白堊の土藏が見えたり、豐饒の水田があつたり、排水のために出來た大きな閘門があつたりして、いかにも富んだ農村らしい氣がした。

木曾、揖斐の二川にかゝつた大きな鐵橋を汽車が渡つて行く時には、日本にもかうした大陸的の感じのするシインがあるかと思はれた。

六四

一身田の專修寺にO君が英語の教師になつてゐて、其處に私はある時訪ねて行つて一月ほど逗留した。

二三里行つた宇津江附近にあるが、更に進んで、福江町あたりに行くと、世離れた江村といふ感じが旅客の胸をそゝらずには置かない。そしてこの衣ケ浦を、蒲郡から出て伊勢の神社港に行く汽船が航行した。

この航路は、東からするものに取つて、伊勢參りの近路とされてゐる。蒲郡を正午の十二時に出帆して、福江、篠島、師崎によつて、そして右に伊良湖岬の鼻を掠めて、眞直に伊勢へと向つてゐる。師崎の鼻を離れるあたりから、波はやゝ高くなつて行くが、それでもさう大して烈しい動搖を受けるやうなことはない。舟に慣れた旅客は、長い單調な汽車よりも此の航路を選ぶ方が好い。

それに、此間はいかにも風景が好い、衣ケ浦、それから後村上帝の遺址のある篠島、知多の師崎に來ると、伊良湖の鼻と神島答志の諸島嶼と相接して伊勢の朝熊連峰に連つてゐるさまがいかにも好い。伊勢海は平滑で鏡のやうだが、鳥羽水道の方を見ると、怒濤が奔涌して、島々の根元に白く波の飜つてゐるのが見える。

知多半島は前にも言つた通り、非常によく開けてゐる。それと言ふのも、まだ汽車の出來ない前主として交通の全權を握つた汽船の寄航港が澤山にその沿岸にあつた爲めであらう。武豊、半田、龜崎、すべて皆一時非常に榮えたところである。中でも半田港の如きは、四日市にも劣らない位の賑さを呈した。武豊港では、曾て明治天皇が其處で海軍の大演習を天覽あらせられた。

月が出て、海水が金屬のやうに美しく輝いた。

宮島の停車場から出て、眞直に島へ渡る連絡船の出る埠頭まで行く間の感じも私には忘れかねた。連絡船の新しい白いペンキ塗が深碧な海と相映對して、大華表を前に島へと渡つて行く感じも旅の興を動かすに十分であつた。兎に角美しいシインだ……。

六三

餘りに遠く行きすぎた。少し引返して來る必要がある。

私は既に富士の仰がる、國のところどころを描いた。今度は暫く、伊勢參宮、上方見物の旅客となつて、近畿地方を歩いて見ようと思ふ。

長く海中に突出して、知多半島と共に伊勢灣から鳥羽水道に接してゐる渥美半島は、人は餘り行つて見ない。又文化の程度としても、この半島は知多半島に比べて非常に開けない。知多はすべての丘陵の上まで山畠になつてゐるが、此處はまだ林や草藪や丘陵で蔽はれてゐる。村もさびしい。町にも大きな賑かなものがない。到る處荒凉寂寞としてゐる。

東海線の汽車は、一ところこの半島の内部の衣ヶ浦の風景を蜃氣樓のやうにして展いて見せた。蒲郡の海水浴のあるあたりが卽ちそれである。この衣ヶ浦を見る地點としては、半島の頸部に近い田原町から

にかけてあつたが、それを一つ一つ仰ぎながら、靜かに歩いて行く心持は今でもはつきりと印象されて殘つてゐる。

一度は私は新綠の時に來た。その時は紅葉谷の岩惣の離座敷に一夜寢たが、こんなに好い處は他にあるだらうかと思ふほど心を惹かれた。瀟洒な欄干に映じた新綠、下には淸淺な水が潺々として碎けて、それが綠から綠へと落ちて流れて行つてゐる。向うの離れの二階の欄干には、美しい雛妓の長い袂をひるがへしてゐるのが見えたりして、何うしても明るい繪としか思へなかつた。或は紅葉の時よりももつと優れてゐはしないかとすら私は思つた。鹿が流れの岸に下りて水を飮んでゐるさまなども面白かつた。

千疊敷の大きな堂宇に無數に奉納してゐる杓子は滑稽だ。外國人などが見たら、さぞ面白いと思ふであらうが、私達には何うも俗すぎてイヤだ。しかし海中にあるあの大きな朱塗の華表は面白い。潮の引いた夕暮などには、漁師の嚊達や子供や遊覽者達がそこまで行つて、貝などを拾つてゐるが、後に落ちかけた夕日が半ば暗く半ば明るく海を見せた。帆が靜かに低く通つて行つた。

嚴島の町は、江の島の町のやうに、貝細工や、お盆や、箸などを賣る店が兩側に並んでゐるが、一面、何處か漁師町らしい匂がして、特色にも富んでゐる。ある春の日に、私はそこから舟を賴んで、海をずつと廣島まで歸つて來たことがあつたが、この舟路はかなりに面白い。外海の舟のやうに荒れてこまるやうなことはなく、ビイルでも飮み飮み、靜かに歸つて來ることが出來た。その時は途中で日が暮れて、

嚴島の價値は社殿と海山の風光と相映對したところにある。またその規模の扇頭小景らしい小さな感じを持つたところにある。橋立や松島とは丸で趣を異にしてゐる。或は比較して一緒に彼是言ふのは間違つてゐると言つても好い。

雄大とか爽快とかいふものは此處にはない。唯、明媚である。雋秀である。小さな幀中に描かれた繪畫である。

始めて觸目した時には、誰でも、『なんだ、宮島つてこんなところか。』と思ふに相違ない。舞子、須磨あたりの方が、第一印象はすぐれて感じられるかも知れない。しかし舞子須磨は長く見てゐると倦きる景色である。單調である。色彩も深さうに見えて實は餘り濃やかではない。それが嚴島になると、流石に日本三景と古人が選んで置いたゞけあつて、見てゐると、段々よくなつて來る。線が複雜してゐる。色彩の變化にも富んでゐる。それに歷史の伴つてゐる形は、橋立、松島に比べてすぐれてゐる點である。

あの朱塗の渡殿や長い廊下に潮のさし込んで來るのを見てゐると、成ほど芝居の背景などには持つて來いであると思ふ。淸盛が落日を招き返した物語は、いかにも此處にふさはしいローマンスであると云はなければならない。私が始めて行つた時には、この汐入の海に面して、長い廊下に、名畫がまだ澤山

るために、文化がまだ昔の氣持を破壞してゐないやうなところがある。昔の時代のいろいろな好いもの、すぐれたもの、なつかしいものがまだそこらに澤山巴渦を卷いて淀んで殘つてゐるやうな氣がする。そこらを歩いてゐる人達の顏にも、一時代前のなつかしい心の影が動いてゐるのを私は感じた。

　橋を渡つて向うにある小さな城址も、私に私の父母や祖父母の呼吸した空氣を思はせた。依然として昔のまゝに殘つてゐる城の濠に藻の花の白く咲いてゐるのもなつかしかつた。休茶屋には、藤棚に房の長い花が咲いて、それがはらはらと赤い毛布の上に散つた。そしてその茶屋の離れのやうな處で、小鯛の押鮨を午飯の代りにした。

　この位完全に封建時代の氣分の殘つてゐる町は、もう日本にもいくらもなかつた。私の知つてゐるのを擧げて見ると、日向の高鍋、美作の津山、出雲の松江、伊豫の松山、關東東北では、武藏の川越、上總の大多喜、羽後の山形、米澤などであるが、それでもこゝのやうにちんまりと完全に昔の氣分を味ふことは出來なかつた。沿線中、岩國の停車場が最も綺麗に掃除が行き屆いてゐたのなども、微かにその消息を語つてゐるものである。

　今は停車場前に、電車が待つてゐて、橋を見に行くのはわけはなかつた。

するに足りない。猿橋も面白いには面白いが、いかにも規模が小さい。橋としてよりもむしろ深い深潭の上にかゝつてゐるといふ方の興味の方が多い。そこに行くと、面白いのは岩國の錦帶橋だ。

古物保存の意味から言ひ、また日本の持つためづらしいものといふ意味から言つて、この橋などは、無論國寶として、特別保護建造物として長く保護して置くべきものであると私は思ふ。

この橋を見た私は不思議な氣がした。この今の文化の世の中に、かうしたのんきなもの、あるのは、人にある暗示を與へるものである。『この橋を わた つたのでは、お產や急病人の間に合はない。』かうその土地の人達は笑つて話してゐるが、私にはそれが面白かつた。例の太鼓橋のやうに丸い階段のある橋を、涼傘をさしたり、洋服を着たり、麥稈帽を白く際立たせて下りたり登つたりして行くさまは、時代錯誤の最も代表的のものであるとしなければならない。この橋の上は車は通らなかつた。況んや自動車に於てをやである。

この橋のかゝつてゐる川は、淸淺晶玉の流である。對岸に聳えてゐる山も凡でない。何處か京の嵐山に似てゐる。川は橋を過ぎて大きく曲つて、赤壁といふ名勝をそこにつくつて、そして海岸平野へと流れ落ちて行つてゐる。

それに、岩國の町が好い。中國での氣持の好い町の中では、私は先づ第一に此處に指を屈する。いかにも士族の町らしい。又いかにも封建時代の町らしい。汽車といふ恐ろしい怪物からいくらか離れてゐる

あたりと名を齊うするに足りる海山の勝を持つてゐる。

で、中幕が濟んで、次第に大切近くなつて行く。汽車で素通りをしては平凡だが、大道、三田尻あたりは海は中々見事だ。線が太く、味は大味だが、何處かに南宗畫らしい氣分が漂つてゐて、尾の道乃至舞子あたりのやうに纎巧でない。そしてこの調子と氣分とが、大切の下の關海峽へと向つて行くのであつた。

長府、下の關附近を彩つた平家沒落の歷史は、大切としては實によく作つてゐると私は思ふ。此處等あたりでは、最早風景ばかりを味つてはゐられない。海にも山にもその『詩』のやうな歷史が縺れ合つてゐるのを私は見る。壇の浦、御裾川、安德天皇陵、平家の墓、そしてその潮流の早い早吸の瀨戶を取卷いては、門司市の煤烟、下の關港の帆檣林立、輕快なペンキ塗の連絡船――その連絡船は、汽車の着くごとに、深い早い碧い潮流を橫ぎりつゝ、本土から九州島へと旅客を運んで行くのであつた。大切にふさはしい瀨戶内海の一幕ではないか。

六一

岩國の錦帶橋は日本ばかりではなく、世界でも奇橋の一つに數へることが出來ると思ふ。

日本の奇橋では、甲斐の猿橋、祖谷の葛橋、飛驒の籠の渡、信濃の久米路の橋などが數へられる。しかし、葛橋や籠の渡は、人間の原始の狀態をあらはしてゐるのがめづらしいだけで、橋としては既に奇と

によるこ、其處も非常にすぐれてゐるこいふことだ。けれごこのあたりは二幕目よりも、何方かこ言へば序幕へ入れても然るべきものであるかも知れない。

蟲明、牛窓あたりこ、笠岡、尾道あたりこを比べるこ、海の幅、山の高さなごに於ていくらか似よつたこころがあるのを私は見る。島のつらなり、山のなびき、すべて小規模で、日本畫的で、瀬戸内海らしい氣分を澤山に持つてゐる。山の赤く禿げたのが多いのもその特色だ。二幕目では何うしても尾の道がその中心だ。

尾の道から竹原を經て吳に至る間は、山容水光依然こして相似たりで、別に他の奇はない。それが宇品から嚴島に來るこ、海は急に濶く、そこに散點された島も大きく、氣象が甚だ雄大である。江田島、嚴島すべてその描かれた線が太い。しかしさうかこ言つて、四國に接した方面のやうに、海が散漫でなかつた。宇品から伊豫の高濱にわたつて行く途中にある音戸の瀬戸は、瀬戸内海ではまづ大きい美しい瀬戸で、その感じも、規模も尾道あたりの二幕目の感じではない。

これから周防へ入るこ、尨大な大島なごがあつて、益々風景が大味になつて來る。それをもう一度狹ばめて、線を細くして、賑やかな中幕を見せたのが、上の關瀬戸である。今は汽車の線路がこれこ遠くかけ離れてゐるので、この瀬戸までわざわざ行つて見る旅客は稀であるけれご、瀬戸内海を仔細に知らうこするには、何うしても上の關、室積、普賢岬あたりを探らなければならないそうである。普賢岬は鞆の阿伏兎

ところ鹽田があつたり、船の集つて來るところがあつたりして、繪を見るやうな美しい明るい藝術的な感じがした。花の松原に交つて咲く頃、私は其處のＫといふ人の瀟洒な二階屋に一夜泊つた。

『遠帆如坐近帆行』といふ山陽の詩の句があるが、これは何でも舞子あたりで作つたものだが、かうしたシインが、瀬戸内海の序幕の一つとして數ふべきものである。

飾磨の津、室津あたりもまだ序幕かも知れないが、もう餘程趣は變りつゝある。此處等は海がやゝひろすぎる。散漫すぎる。家島群島あたりは、ちよつと面白さうに思はれるけれど、さう大して瀬戸内海らしい特色には富んでゐない。

玉島から蟲明瀬戸、牛窓あたりに行くと、もう二幕目だ。今は概して衰へてゐるので、昔のやうな和船の港の賑はひを見ることは出來ないさうであるが、それでも船頭や漁村の生活には、やはらかな細かい線で描かれた日本畫を見るやうなところがある。

しかしこれから少し行くと、中國に屬した方の風景は甚しく劣つて來るのを見る。岡山あたり、兒島半島あたりは趣が乾きすぎてゐる。

しかしこれが一度四國に面した方に行くと、線は太いが、又色彩が濃かすぎるが、非常にすぐれた繪があらはれて來る。宇野から讃岐の高松に渡る連絡船の甲板の上は、日本三景にも敢て劣るまじきほどの明媚と爽快とを持つた海山の景である。小豆島の寒霞溪は私はまだ行つて見たことはないが、人の話

本堂の方がすぐれてゐた。

六〇

瀬戸内海は、舞子明石を序幕とすれば、尾の道、笠岡附近は二幕目、宇品、嚴島附近が三幕目、上の關、普賢岬あたりが中幕、長府、下の關あたりが大切と言ふ形である。

序幕の須磨、舞子には對岸の淡路島をも入れて置かなければならない。何故なら、淡路島は人は餘り言はないけれど、瀬戸内海の諸勝の中で多く他に讓らないすぐれたシインを澤山に持つてゐるからである。洲本から由良に行く海岸、松州園のあるあたりは中でも最も好い。それに、淡路島は古い國である。歷史上の趾の澤山に殘つてゐる國である。淡路廢帝の陵のある賀集などは面白いところだ。志筑、岩屋あたりも好い。

鳴門海峽は瀬戸内海の門戸のやうな形を成してゐるけれども、幅がひろく海が荒いので、何處か瀬戸内海といふ氣のしないところがある。しかし、撫養から見た鳴門は雄大で且つ明媚だ。

松のある播磨の海岸も、序幕の中に入るべきものだ。別府の手枕松あたりでは、漁村にも一種瀬戸内海らしい氣分があつて、何となく旅の思ひを誘つた。石の寶殿の前の觀濤處は、瀬戸内海の眺望地點としては、餘り大したものではないが、曾根の松のある一漁村は、潮入川に蘆荻が生えてゐたり、ところ

ある向島――桃の花の勝を以て聞えてゐる尨大な島が、今しも最初の光を放ちはじめた朝日に照されて、山畠の段をなしたのや、海に添つた村や、そこらを潜いで行く舟や、さうしたものが皆な美しくかゞやいて見渡された。

『流石は尾道瀨戶だ！』

かう私は思はずにはゐられなかつた。

朝霧は瀨戶の折れ曲つたところにかゝつて、それが半ば朝日にかゞやいて、次第に少しづゝ消えて行く。

私はぢつとそれに見入つた。

シインとしてはさう大きいとは言はれない。雄大とか崇高とか言ふ感じは何處にも味はれない。しかしその柔らかな、線の細い、感じのこまやかな景色は、ぢつと私の朝の心に染み通るやうな氣がした。帆がまた一つぽつかり霧の中からあらはれた。

何うしても日本畫だ。外國の色彩では、又は刷毛では、とてもあらはすことの出來ないやうな氣分だ。四條派の繪卷などにありさうな眺めだ。

私はそこから千疊敷へ行つた。そこの眺めは、寺の本堂から眺めたものよりも、ぐつとひろいけれども、右の方が餘り見えすぎるので、感じがやゝ散漫なやうな氣がした。矢張瀨戶の扇頭小景を見るには

しい人達の住んでゐる裏町である。やがて寺の門へとかゝつた。
最初入つた寺を通りぬけると、それに添つた石ころ路があつて、爪先上りからかなりに急な坂になる。一歩一歩尾道市の瓦甍を隔てゝ海が見え出して來た。いかにも美しい海だ。又さわやかに晴れた朝だ。
一歩一歩振返りながら登つて行く。
段々奇岩が前にあらはれて來た。面白い形をした松なごが生えてゐる。やがて支那式のつくりをした大きな寺があらはれ出して來た。
形の面白い山門、それから堂宇、それも岩山のこゞしい間を求めて建てたものなので、いかにも窮屈だ。路はその間を折れたり曲つたりして上つて行く。
やがて寺の本堂のあるところに達した。
そこには眺望臺があつて尾道瀬戸が一目に見下された。
繪はがきでよく見る景色であるが、丁度それが晴れた朝であり、澄んだ空氣であるために、非常に明媚に美しく私の眼に映つた。私は思はず驚喜の聲を擧げた。
朝の霧が茫ゝ瀬戸の海の半面に沈んで、白く布でも布いたやうに靡いてゐる。水深の淺い瀬戸内海であるのに拘らず、海の色は思ひ切つて碧く、帆がその白い朝霧の中から一つ二つあらはれ出して來た。
尾道市の瓦甍がその前景を成して、いかにも中國の港らしい感じを私に與へた。それに、海の向うに

この川舟で下つて行くに限る。また三瓶山に登るにもこの川を下るさ便利である。今は廣島から三次まで汽車が出來た。この河舟に身を託するのもさう不便を感じない。

　これから石見の國の方へ行くさ、中國の中央を貫いた脊梁山脈が陵夷して、江川でさへその關所をもこめて流れて行く位であるから、此方から向うに越えるのにも、さう大して大きな嶮しい峠はない。山口から津和野へ出て行く路も樂に車が通じた。

五九

　尾道で汽車を下りた時は、まだやうやく夜が明けたばかりであつた。それでももう戸のあいてゐる茶屋が一軒あつたので、そこに休んで、顏を洗つて、夜一夜ゆられゆられてゴタ〳〵した汽車の疲れを休めた。

　此間は度々通るけれごも、いつも素通りして、つひに千光寺へ登つて見たことがなかつたので、一汽車おくらせてそこに登つて見やうこ思ひ立つたのであつた。

　私は朝飯の支度を賴んで置いてそして出かけた。

　汽船問屋だの、大きな呉服屋などの多い町であつた。少し行くさ、角に大きな郵便局があつた。そこから少し行つたところで、細い通りを左に入る。爪先上りである。寺の門前に達する間はゴタ〳〵した貧

若狹の小濱、それから此處、この三つは、旅をして見て、私に一番柔らかな靜かな感じを與へたところである。旅舍にも好い旅舍があつた。

この道路から西しては、備後の庄原から入るものと、三次から入つて來るものとがある。この道もかなりに嶮しくかなりに遠かつた。多くは丘陵と山襞の中で、平和な鷄犬の聲の靜かな、赤い瓦で屋根を葺いた村や町などがあつた。三次はその山襞から流れ落ちる諸川の合湊するやうな位置に位してゐて、脊梁山脈を南から、北へと破つて流るゝ大きな江川が、その町の手前で東から來る三次川と合した。さういふ深い山の中にあるので、夏秋の候は霧が深く、朝は午前十時にならなければ晴れなかつた。時には咫尺を辨ぜざる位に深く深く立ちこめた。

町の人達はこの霧の晴れるのを丘の上から眺めて、霧の海と言つて、土地の一名勝にしてゐる。繪などにも書いてある。町の瓦甍や廂が霧の中から半ば見えてゐたり、長い三次川の橋が霧に次第に包まれて行つたりしてゐた。成程一奇勝とするに足りると私は思つた。

江川を下る河舟がこの橋の袂から出た。この川舟は私は下つて見ないが、かなりに溪山の勝に富んでゐるといふことである。富士、球磨、阿賀などほど溪山は迫つてゐないが、また流もそのやうに瀬の多い急流ではないが、規模が大きいので、ゆつたりとしてゐて好いといふ話だ。途中に川本といふところがある。そこまで三次から一日以上かゝるが、そこからは石見の一勝斷魚溪が近いので、そこに行くには

姫路から但馬の和田山、この間には例の名高い生野の金山がある。城の崎に湯治に行く人達は皆なこの道を歩いて行つた。上郡からは、智頭を經て、鳥取市へ出て行く路がある。車は通ずるが、十七八里、もつとあるかも知れない。それに、例に由つて脊梁山脈を横斷してゐるので、路は頗る險しい。この道路は中ほどで分れて、美作の津山に入つて行つてゐるが、これはかなりに舊い道で、後醍醐帝も此處を入つて行かれたのである。赤松圓心の白旗城址のある位置などを考へて見ても、この路は昔にあつては樞要の地點で、此處に據つて海岸路を控制すれば、九州、山陰から上つて來る勢力はどうすることも出來なかつたに相違ない。從つて、毛利氏時代になつても、この路は彼此の爭ふところとなつた。山中幸盛の上月城址も人をしてその昔を思はしめるに足りる。

從つて美作の津山は、岡山からよりも、此路から主として入つて行つたらしい。津山からは、人形山峠を越して伯耆の倉吉に行く一路と、四十曲峠を通つて、米子へ出て行く一路とがわかれた。

この四十曲峠は、陰陽連絡の道路としては、一番榮えた路である。感じもまた大きかつた。伯耆から來る人は、これを越して、勝山あたりから旭川の水運を利用して、今の中國線の通つてゐるところを岡山へと出て來た。この川は中國では川舟の通る川としては、石見の江川に次ぐと稱せられて、峭影萬山の中に重るといふ奇勝を到るところに展開した。

津山の盆地は私は好きだ。山城の位置も面白ければ、土地の娘達の頰の紅も好かつた。伊賀の上野、

こゝでは旨い烏賊が食へた。すべて魚は新しかつた。埠頭あたりでも、人が釣竿を垂れてゐるのを見かけるが、長くゐてさうした興に浸るのも面白いと思ふ。それに折れ曲つた細い通りのゴタ〳〵したさまにも特色がある。町は一面狹斜町であると共に、一面魚蟹の町であつた。魚の腥い匂ひは脂粉の匂ひと相混じた。

私の知つてゐる所では、かうしたところはちよつと何處にも發見することが出來なかつた。港としては敦賀を小さくしたやうな感じがあるが、町の空氣や氣分は丸で違つてゐる。銚子もいくらか似てゐるが、それは地形でなく、漁師町としてゞある。新潟や七尾などとは丸で感じが違つた。房總の海岸では勝浦がやゝこれに似た地形と感じとを持つてゐると思つた。

こゝから地藏崎の鼻まで、徙崖の間を十七八町、この間は人は滅多には行かないけれど、大山を眺めるためには非常に好いところである。燈臺のあるところからは、暗礁とした海を隔てゝ、隱岐の大滿寺山と、その左に低く連つた島前の島影を眺めることが出來た。

五八

山陰、山陽兩道を連絡する道路は、汽車が出來てから、旅客の通るものが少くなつたが、昔は皆な二日も三日もかゝつて此間を通つて行つた。

境から美保の關に行く間は、右は全く外洋に暴露してゐるので、汽船の動搖することはかなりにひどい。やがて例の關の五本松の丘の上に並んで立つてゐるのが見える。唄にある通り、今は四本しかない。やがて美しい明媚な斷崖と海との間にぴたりとくつゝいたやうな美保の關町があらはれて來た。

町はすべて狹斜街と言つても好い位なところであつた。此處では町娘か皆な三味線を持つて客の座敷へ出た。此處では男の子の生れるのよりも女の子の生れるのを喜ぶといふことであつた。旅客は皆な此處に來てさうした種類の女を聘んで騷ぐのを例としてゐた。そしてこれを美保神社のために御神樂をあげるのだと言つてゐた。從つて絃聲と鼓聲はこの狹い海岸の町に溢れてきこえた。

町が弓弦のやうに海に臨んでゐるために、旅舍の二階からは、何の家からも美しい明媚な海が展けて眺められた。正面には伯耆の大山がその雄大な山容を以て欄干に凭る客の眉睫に迫つた。

ラフカジオ・ハアンの文集の中には、この町の光景を書いた美しいフランス式の文章があつた。鼓の鳴る町、灯の明るい町、漁師の船唄のきこゆる町、海の美しい町といふ風に書いてあつたのを私は記憶してゐる。

しかしこの町では、靜かに眠ることは出來なかつた。ゆつくり自然を樂しむことは出來なかつた。さうした旅客にはこの町に泊ることは勸められない。こゝより、松江の方がまだ靜かに落附いてゐることが出來た。しかし一度は行つて、その歌聲と絃聲とに埋めらるゝのも旅の一興である。

宍道湖に面した方面では、鰐淵寺の幽邃な境内と一畑藥師の雜沓した門前町とは是非行つて見なければならない。一畑には今市から電車がわかれて行つてゐるからわけはない。序に平田に出て湖水の汽船で松江へ渡つて來るのも面白かつた。

木次の方へ行く軌道では、その奧にある鬼の舌震などといふ山水に行つて見ることが出來た。私はしかしまだ行つて見たことはない。私は備後の三次から脊梁山脈を越えて、掛合から宍道湖の方へと出て來たが、その路は開けた中國にもこんな深い山の中があるかと思はれるやうなところだつた。掛合の町の旅舍には、白粉をぬつたあやしい女が澤山にゐた。この附近にある何とかいふ瀧にも私は行つて見なかつた。

五七

中の海と日本海とを連絡させて居る境の狹い瀨戶には、迅い深い潮流が巴渦を卷いて流れた。そしてその埠頭には下の關行、敦賀行、隱岐行、美保の關行の汽船がいつも碇泊して、その烟突から淡い煤烟をあたりに漲らせてゐた。

裏日本の海岸では、境港は敦賀に次いでの良港であつた。西は島根山脈が連亙してゐるので、各種の風を避けることが出來た。美保の關の沖には、軍艦などがいつも來て碇泊した。

日の御岬は、岬頭の風景としてはかなりにすぐれてゐる。私は岬が好きなので、かなりに多く行つて見た。志摩の安乘、大王、御座の三岬、三河の伊良湖岬、遠江の御前岬、伊豆の石廊崎、東北では陸奥の尻矢崎、渡島の惠山岬、九州では日向の鵜戸岬、大隅の佐多岬などに行つて見たが、この日の御岬はさうした岬の中でも、決して二流には落ちないものであつた。私は行きは稻佐濱から和船で行き、海の荒いのにこりて、歸りは三里の山路を歩いて歸つて來た。神社の松原の中に埋れたさまや、大きな岩の海岸に多いことや、向う側の日の御岬の村の標式的漁村の趣を備へてゐるさまなどは、今でもはつきりと私の眼の前に印象されて殘つてゐた。しかし燈臺のあるあたりは、やゝ開けすぎて、石廊岬あたりの雄大な感じを味ふことは出來なかつた。

この日の御岬から島根半島の山脈の日本海に面した海岸をたどると、かくれた海山の奇勝が澤山にあつた。日の御岬から美保の關まで里程十二三里、さう大して遠い路ではないけれども、大抵は嶮しい徙崖で、上つたり下つたりしなければならないので、この間を歩くには、何うしても二日や三日はかゝるといふことである。例の加賀のくげ戸などといふ奇岩の勝は、實にこの間にかくれてゐるのだ。

この島根半島の山脈の裏表を仔細に見れば、それで一通りは出雲の勝は知り得たといふことになるのであるけれども、裏には容易に旅客は入つて行かなかつた。從つてその山脈の上から眺めた夜見が濱の大天橋は、未だ多く人口に膾炙してゐない。

の白堊が湖の夕日に照されて並んでゐる形は繪も及ばなかつた。

五六

大社は伊勢の大廟に比べるこ、非常に規模が小さい。しかし古い國だけあつて、感じには何處か古雅な捨て難いところがあつた。宮の造り方などには特色のある好いところがある。それに、北島、千家兩家がその左右に侍して、昔から連綿こして此處にゐるさまが好い。

今市から大社に行く間に、旅客は左の車窓から眼を離さぬやうにすることを注意したい何故なら、そこに低い丘陵の連亙を前景にして、上に石見の三瓶火山を望むことが出來るからである。子三瓶、孫三瓶、それが相連つて、駱駝の背のやうな形をして、晴れた秋の空にあらはれてゐるさまは旅客の心を惹かずには置かなかつた。大山の雄大なのに比して、これはまたその形の面白いのを私は取る。

今はまだ汽車が出來ないから、出かけて行くのは、ちよつこ億劫だが、この三瓶の山中には、志學溫泉、其他にも澤山の溫泉があつて、一遊の價値は十分にある。それに石見國は沿海百有餘里、溫泉津から濱田、萩、油谷、到る處に美しい海が展けて、世に知られずに殘つた不遇な風景が澤山に澤山にあるこいふことである。江川の一支流にある斷魚溪なごも山水こしては非常にすぐれてゐるこいふ話だが、位置が邊僻の地にあるので、人は容易にそこまで入つて行かなかつた。

湖水に醸してゐた。秋は殊に明るい繪に對するやうな感じがした。

海の肴、川の魚、それがこれほど豐富にあるところは、日本にも澤山にはあるまい。烏賊の生づくりも出來れば、鰻の蒲燒も出來、鯉のあらひや鱸のあらひも出來、ひらめや鯛の刺身なども膳に上つた。ここに旨いのは蜆汁であつた。ある人の話に由ると、此處で獲れる蜆は日本はおろか世界にもめづらしいものであるといふことである。私はあちこちの湖水で獲れる蜆を食つて見たが、此處ほど旨いものはなかつた。これに次ぐのは、諏訪湖だが、そこにも今ではこゝで獲れるやうに大きなものはなくなつて了つた。

それにわかさぎが多く獲れた。これも旨かつた。

宍道湖は私の考へでは、琵琶湖などよりもぐつと景色が好い。霞ケ浦よりも好い。猪苗代湖、諏訪湖、すべて瞠若として、この下にある。日本三景のつぎに指を屈せらるゝのも尤もであると思ふ。

汽車が出來ない以前には、湖を航行する汽船の甲板の上が好い眺望であつた。庄原といふ小さな船着などは殊に湖港としての特色を非常に色彩深く持つてゐた。私は一度そこから汽船で松江に渡つたが、落日の宍道湖の美は容易に他に求めることが出來なかつた。琵琶湖は濶いけれど、風景がやゝ散漫である。霞ケ浦も、麻生あたりはやゝ好いが、これも宍道湖のやうに變化に富んでゐなかつた。やがて大きな盆のやうな又は金盤のやうな日は湖の半を染めて、キラ／＼と美しくかゞやきわたつた。―ここに宍道の人家

いつかあなたの嫁が島

例の安來節の賑やかな唄だ。三味線はこの唄に合ふだけの長さの手で、長い文句になると唯それを繰返すばかりだといふ。そして踊は例の鰌すくひの踊で、手拭をかぶつて、笊を持つて、鰌をすくひ取るやうな恰好をして踊つた。出雲地方では、この唄が到る處で唄はれた。酒宴に侍る藝者ばかりではなかつた。子供や子守や上さんなどまで唄つた。街道の垣の外などを小聲で唄つて行くものなどもあつた。

あすはおんすのふらたのおまれ
ずうる二ずうる三ずぅる
ふがしのはてからぬすのはてまで
ふくずるふつはる來たものを
いまさら……

かうした出雲訛の言葉の入つた唄なども あつた。そして遊覽の人達はそれを面白がつて歸つての土産話にした。何處の旅館へも、藝者は褄を取つて入つて行くやうな土地であつた。

湖水に面した旅舍の中で、私はいつも皆美館に泊つた。あちこちを歩いても澤山ないやうな好い感じのする旅舍で、女中には色の白いしとやかなものが多く、湖に臨んだ室毎の感じは非常に好かつた。そこからは、嫁が島のぽつかり湖中に浮んでゐるのが見え、對岸の人家の白堊や二階屋がその影を靜かに

『おーい。』

又、誰かゞ呼んだ。何故呼ぶのかを知らせるために、撥を高く持上げて。

しかし波を截つて進んでゐる汽船は一刻毎に、その間の距離を遠くして行くばかりで、竟に竟にその呼聲は先方に通じなかつた。

『氣の毒だな、弱るだらう……』

かうかの鬚の生えた紳士は言つたが、何うすることも出來ないので、今度は船の事務員に、

『ぢや、仕方がないから、君、あづかつてゐて、あとで渡してやつて呉れ。Kのだ。忘れて行つたんだ……』

『餘りはしやいだから、その罰だ……』

などと事務員は笑ひながら言つてそれを受取つた。

苫舟との距離は益々遠くなつて行つた。まだ氣がつかないか、依然として靜かに雨中に櫓を押してゐる船頭の姿が見えた。

五五

まゝになるなら松江の湖水

苫舟は島の岸に沿ふやうにして、小雨の降りしきる中を次第に向うへと漕いで行つてゐた。

ふと今までKを中心にしてうかれて騒いでゐた船客の一人は、慌てたやうに、

『お、大變だ……忘れて行つた！』

かう呼んで其處に、隅に置き忘れられた象牙の撥を高く持上げた。

『あ、大變だ……』

かう言つて、人達はその撥を持つたまゝ甲板に出た。

しかし汽船と苫舟との間は最早かなりに遠く離れてゐた。

『おーい！』

かう鬚の生えた紳士が呼んで見た。しかし聞えなかつた。苫舟は靜かに岸に沿うて漕いでゐた。

『おーい！』

今度は二人三人聲を合せて呼んだ。矢張聞えなかつた。

『困るだらうな……先生、あつちについて三味線を彈かうとすると、撥がない。……困るだらうな。』

かう人々は言つた。

『何處にあつたんです。隅に？……何うして氣がつかなかつたでせうね。……困るでせうねえ。』中には嘗つて藝者をしたことのある中年の女も雜つてゐて、さも同情するやうに言つたりした。

い海を越して、島根半島の山脈が遠く望まれた。

五四

小さな埠頭が前にあつた。汽船はその沖二三町のところに停つてゐた。

松江の大橋の袂にある中の海航行の汽船發着所で一緒になつたKといふ妓は、大根島の牡丹園に宴會があるので聘はれて行くのであつたが、知つてゐる客が二三人あつたので、汽船の一室で、三味線と撥とを出して、陽氣に安來節などを彈いて、船の客達を興がらせてゐたが、漸く汽船が目的地についたので下り支度をして皆なに挨拶して、甲板の上から下へと行つた。

其處にはかねてかの女の來るのを待つてゐた苫を葺いた船が一隻かゝつてゐたが、やがて艀からそれへと移つて行くKの姿が見えて、赤い顏をした客などが其の苫の中から出て來た。その船の中には既に酒宴の席が設けられてあるらしかつた。

その船は糸のやうに降る小雨をついて、靜かに艣を押して向うへ向うへと行つた。

埠頭の近くには、さや豆の畠などがあつて綠が生々としてゐた。

甲板の上の人達は、長い間騒いで三味線を彈いて興れたKの乘つて行つたその苫舟を見送る樣にした。

やがて汽船は動き出した。

かう女中は私に言つた。

その時ほご渡航の念に誘はれたことはなかつた。財布に二三日の旅費の餘裕がありさへすれば、私は必ずそれに乘つて行つたに相違なかつた。それほど私は隱岐にあくがれた。

後醍醐帝は配流された菱浦から知夫里へ出て、それから荒海の中を一日一夜漂つて、そして例の御來屋の海岸へと漂着されたのであつた。その上陸されたところは、今日でもちやんと殘つてゐて、元弘帝遺蹟とか何とか刻んだ碑がそこに立つてゐる。そこは御來屋驛から下車するとすぐだ。

名和神社――船上山。そこでは、名和長年の事が深く考へられた。自分の邸に火をかけて、一族を集めて船上山に據つた名和氏の一擧は、懦夫をして今日猶國を思ひ帝を思ふの念に堪へざらしめるものがある。

京都から此處まで來られた元弘帝の通られた路のことがつくぐ\〵と考へられる。天皇は今の山陽線の上郡から入つて、杉阪峠を越えて、萬山の中を美作の津山へと行き、それから四十曲峠を通つて境から美保の關に行き、そこに一日二日滯つて、それから隱岐へと渡つて行かれたのであつた。その時分は何うであつたであたうか。美保神社はその頃も依然としてあつたが、村のさまはどんなであつたであらうか。漁村のさびしい夕暮の烟や、參差錯落とした人家のさまや、さういふものが帝の腸を寸斷せずには置かなかつたであらう。私はいろ〳〵のことを思つた。

名和神社の境内は淸楚でいやみがなくつてよい。大山はこの附近に來ると、もう餘程左に偏つて、碧

た。

佐渡の三つ一つも面積のない島だけに、絶海の孤島こ言ふ感じが一層深い。佐渡は遠く望んでも明るいが、隠岐は晴濟こしてゐる。わびしい〳〵氣がする。それに、距離も佐渡よりは遠い。

始め行つた時には、何處からもその遠い青螺を望むここが出來ないので、私はわざ〳〵美保の關の先の地藏岬の燈臺のあるこころまで行つて、漸くそれを眺めることが出來た。しかし二度目には、大山の裾野、赤崎あたりからそれこはつきり認められた。

隠岐には私はまだ行つて見ない。しかし話を聞いただけでも、旅の興が動かされずには居なかつた。大滿寺山の眺望、一種特有な悲調を帶びたドッサリ節、内地こは變つた島の風俗、盛んな賑やかな烏賊漁、入江を深く抱き込んだやうな島前の地形、後醍醐帝の配流された址、後鳥羽院の崩御あらせられた址、さうしたものを思ひ浮べるこ、すぐにも飛び出して航して行きたい位であつた。そこに毎日航行する汽船は、境から美保の關に行つて、それから眞直に島後の西郷港へこ行くが、この間の時間は、かれ是十時間近くかゝつた。私はある午後、美保の關の旅舍の窓で、海を眺めてゐるこ、沖に一隻の新しい白いペンキ塗の汽船が淡い烟を吐いて碇泊してゐるのを見た。

『何處に行く汽船だね？　あれは？』

『隠岐通ひ。』

『左樣ですか……それでは……』

かう言つて半ば布の浸つたまゝにして出て行つた。私はじつとそこに長く浸つてゐた。秋の夜の氣分が何とも言はれずに私の心に浸み込んで來るのを感じた。

湖水から湧出する溫泉は、この東鄕溫泉の他に、私の知つてゐる限りでは、加賀の柴山潟の中から湧出する片山津の溫泉があるばかりである。片山津の溫泉もわるくはない。しかしそこは眺望がやゝ散漫でひらけすぎてゐる。こゝのやうに小ぢんまりとしてまとまつてゐない。それに、こゝだけの設備が、またはがたい片山津にはない。

しんとして、物音の聞えない、湯の流れ落ちる音より他に物音のないこの溫泉の旅舍に私は秋の一夜をすごした。唯、一夜であるが、私は竟に竟にそれを忘れることが出來なかつた。

私は山陰に旅する人達に、いつもこの東鄕溫泉を勸めた。美保關の淫らな賑やかな空氣に浸つてから、此處にやつて來ると、殊にその感が深かつた。なつかしい溫泉場だ。

五三

大山の裾野を行く時には、運が好いと、汽車の窓から遠い遠い隱岐の青螺が、それと微かに指さゝれ

湖で獲れた鯉、鰻などが膳を賑やかにした。調理の仕方も田舍にはめづらしく上手であつた。私は立つて行つては、靜かな美しい湖水を眺めた。

私はこんなところにかうしたすぐれた旅舍を發見し樣とは思はなかつた。私はかねて聞いて知つてはゐたが、しかしかうしたところだとは思はなかつた。私はさびしい田舍の停車場を下りて七八町しかない路をてく／＼と歩いてやつて來た。さう大してすぐれてはゐないだらうが、まあ兎に角靜かに一夜寢やうと思つてやつて來た。それがこんなにすぐれた湖水だとは、又は溫泉旅舍だとは――。

『好いな、靜かだな。』

かう又私はくり返した。

溫泉の浴槽がまた私を喜ばせた。私が入らうとすると、メイドは、

『布を入れておきまして。』

かう言つて、あとについて來て、そこに浸けてあつた半ば黃く染つた布を引揚げた。

『染まるのかえ。』

『え、湯につけて置くと、よく染つて、こゝの名物になるもんですから。』

『さうかねえ……いゝよ、皆な出さんでも……』かう言つてすべてを引揚げやうとするのを止めると、

メイドは素直に、

松江の大橋、中の海を航行する小蒸汽の甲板の上、すべてその方面から見た形がすぐれてゐて、伯耆に入つては、餘り大きい感を人に與へなかつた。つまり富士が甲斐盆地で見て小さいのと同じである。名山は多くはさうである。

汽車が進むにつれて一度見えた大山の秀色は再び見えなくなつて了つた。

五二

湖に面した靜かな一間、時は秋の十月の中旬。

私の他には客といふ客もなかつた。あたりはしんとしてゐた。頰の豐かなメイドが私の夕飯の給仕をした。

三面はすべて湖水の水光で、それが硝子窓を隔てゝ夢のやうに展げられて見えた。湖をめぐつた山は低いが、それが半ば紅葉して、派手な女の衣をかけたかのやうに見えた。

『靜かだね。』

かう何遍も私はメイドに言つた。

『いつもこんなに靜かかね。』

『いゝえ、夏はかなりに込みますけれども今は閑で……』

ちたところなどもあらはれて來た。ふと、大きな山の姿が汽車の右に左に見えたりかくれたりするのを旅客は眼にするであらう。それは實に中國の屈指の名山なる伯耆の大山であることを忘れてはならぬ。

「あゝさうですか、あれは大山ですか。」

車中の人達はかう指して語合つた。

大山は日本でも屈指の名山である。單に中國の名山でなく、日本の持つた多くの名山の十指の中に數へられるもの〻一つである。富士、鳥海、淺間、溫泉、かう數へて來て次に指を折るのが此山である。富士がその背景に多くの複雜したものを持つたと同じやうに、この山もまた彼方此方から仰望の的となるやうなところにその位置を置いた。中でも、海から放つた眺望が一番すぐれてゐるのを私は見た。出雲の美保關あたりから眺めた山は殊に見事である。境から美保へ行く汽船の甲板の上から、夜見ヶ濱の長松をその前景にした形がすぐれてゐた。

遠く離れて、隱岐から望んだ形はここにすぐれてゐるといふことであつた。隱岐に行つたことのある私の友達は話した。「大滿寺山から見たさまは何とも言はれませんよ。前景も背景もなく、ぽつかりと海の中に浮んでゐるやうな氣がしますよ。實際、そこまで行つて見なくつちや、大山の名山たる價値がよくは分らないやうなもんだ。」成程それに違ひなからうと私は思つた。

それに、この山は伯耆にあるのであるが、伯耆よりは寧ろ出雲の山と言ふ方が至當であつた。宍道湖、

ることの出來なかつた一人だ。この小英雄の一生も旅客の思を惹かずには置かなかつた。

かれの遺跡が鹿野町に二三殘つてゐる。碑がある。墳がある。私は其處には行つて見ないから、詳しいことは言へないけれど、そこにはかれの肉身のものがゐて、かれが播磨の上月で捕へられて、成羽まで伴れて行かれて、其處で毛利氏のために殺されたのを聞いて、それを供養するためにその影塔や碑や墳を建てたものであるらしい。

幸盛を思ふと、私は尼子氏を思ひ、つゞいて毛利氏を思はない譯には行かなかつた。伯耆因幡の間に轉戰して、遂に全く尼子氏を亡したのは、吉川元春が主としてそれに與つて力があつたが、それに對抗して、躓いても悔いず、最後まで孤忠を守つた幸盛の一生は、中國の歷史人物の中で最も光彩あるものの一つとしなければならない。私はそれを思ひながら、汽車の窓から午後の日の光線に美しく染つた鰲峰山の山容にぢつと見入つた。

この山は餘り人口に膾炙してゐないけれども、山陰では名山の一つに數へても好い山である。唯その位置が大山乃至三瓶のやうに特立してゐずに、群峯起伏の中にあるがために、平野を行くもの丶眼を欹たしめることが出來ないが、それが惜しいが、その山容といひ、襞の多い形といひ、立派に旅客の憧憬の的となることが出來た。

鳥取平野を離れると、丘陵が次第に多く複雜して來た。沙濱の幅も次第に狹くなつた。徙崖の海に落

見えなくなつた。殊に、この山脈の間からをり〳〵見ゆるその海は――。

鳥取平野近く、ある處では長く昔の街道と汽車の線路とが相添つて行つた。小さなしかし深い山の中に、四面から取圍まれたやうなところに、靜かな平和な山村の白壁が夕日に照らされてゐるのをも見た。又田舍の娘達が三々五々相携へて、晴衣を着飾つて、汽車の通つて行く間を立つて待つてゐるのを見た。

鳥取平野に來ると、感じは全く違つた。山脈は次第に遠く、前には海を豫想して、時には川、時には沼、時には村落といふ風に、段々と人寰に近くなつて行つた。

鳥取の瓦甍を後に、かなりに長い鐵橋をわたると、此處等に特有な赤い砂山があらはれて來て、河口に近く大きな沙丘の聳いてゐるのが見え、風景のすぐれた賀露港の位置がそれと指點され、やがてインプレショニストの繪のやうな湖山池が車窓の左にその水光をかゞやかしてゐた。

海岸の砂濱の赤松の特色は、そこに遺憾なくあらはれてゐるのを旅客は眼にするであらう。能登の敷浪、高松附近、それにも增して印象的であるのは此處である。陸前の原釜附近の松、乃至は北陸親不知附近の松、それとは全く色彩を異にし、氣分を異にした樣な處に、この附近の松と砂丘との特色があつた。

五一

山中幸盛は中國地方での昔の英雄だ。智將だ。又ある大勢の力に背いたために、志を抱いてそれを遂げ

こゝにある城の崎川はちよつと面白い。但馬の山の中を潺湲と靜かに汽車に添つて流れて、そしてここに來て、俄かに海近く想像される感じが好かつた。海の潮の臭をも嗅ぐことが出來ると共に山の深い嵐氣をも味ふことが出來た。

こゝから鳥取市のある鳥取平野まで出て行く間の山巒は高い嶮しい山である。中國山系の最も嶮峻な部分の一部がそこにある。從つて、昔は旅客はこの間の峠の多いのに苦しんだ。冬は雪が深く積つて、路の絕えることなども度々あつた。しかし今ではなんの苦もなかつた。汽車はトンネルを穿つて、時には銀盤のやうに美しくかゞやく海を見せ、時には行つても行つても盡きない荒山の寂寥としたシインを開き、又た他に類を見ることの出來ない長い陸橋を持つた山村を展開して、數時間ならずして、その嶮しい山巒の間を通過し去る。

私は一度晩春の候に此處を通つた。山藤が樹の幹にかゝつて咲いてゐたり、燃えるやうな岩躑躅がところ〳〵に點綴されてゐたりした。『岩つゝじ山藤咲きてあら山の中行く旅も慰まれつゝ』かういふ歌を私は詠んだが、いかにも旅の情を動かされるやうなこころであつた。

鎧といふ停車場の位置は眺望に富んでゐた。明るい日にかゞやいた海である。またなつかしい島の粧點してゐる海である。漁村の網の高く日に干され、漁師の船の櫓拍子を揃へて出て行く海である。しかし、汽車の窓から見た海ほどあつけないものはなかつた。それは蜃氣樓か何ぞのやうにすぐ掻き消すやうに

兎に角、橋立に行く人は、笠松に行き、成相に行き、橋峠に行き、各方面からいろ〳〵にしてそれを眺めて見るが好いと思ふ。無論、規模としては松島の方が大きいが、その瀟洒な藝術的な點は此彼に勝るものが大いにあると私は思つた。

伯耆の夜見濱の大天橋は私はまだ知らないから、比較して見るわけには行かないけれども、人の話では、そこを見ると橋立などは小さくつて見るに堪へないさうだが、成ほどそれはさうかも知れなかつた。其處ではあの大きな中の海が、橋立の左の入江として役立つのであるから……。

五〇

京都大社間の線路が完成してから、大社參拜は非常にわけがなくなつた。この間では但馬の城崎の溫泉が人口に膾炙してゐて、よく旅客が一晩下りて泊つて行くが、土地の感じは割合に平凡だ。湯の湧出量の少ない爲めであらう、共同浴槽の立派なのがあるだけで、客は皆手拭を下げて家々からそこに出かけて行かなければならなかつた。伊豫の道後などと感じがよく似てゐた。

しかし溫泉の乏しい中國地方にあつては、この溫泉は昔からきこえたもので、近畿地方山陽地方からも、浴客ははる〴〵と山越をして出かけて來て、淹留數十日に及ぶ者が多かつた。從つて有馬と道後と此處とは、歴史上にもきこえてゐる良い溫泉であると言ふことが出來た。

田舍だ。
切戸にある文珠閣の位置も、松島の五大堂などよりも好い。流行佛としての形にも特色がある。大きな智慧の輪のあるのなども滑稽だ。そこにある旅舍は、さう大してすぐれてはゐないが、海を眺めるには好い處である。
切戸の渡しをわたつて、始めて長松の中に入る。平坦の路、靜かな松原、これが天の橋立の松の中かと思ふと、不思議な氣がする。それは山中にあつて山を知らずと言つたやうな氣持である。松はかなりに大きい。赤い幹の處々に立つた間に朝日夕日が自由に射し込んで來る。その中に、岩見重太郎仇討の址があつたり、磯淸水があつたり、橋立神社の小さな宮があつたりした。
右の海の深い碧であるのに對して、左の入江の錆びて鼠色をしてゐるのも一種面白い對照であると言へば言へる。この入江の岸には藻が一面に生えて、それに白い花が咲いた。成相へ行く遊覽の人達を載せた小さな船は、その藻の上をわけるやうにして橋立神社のある處へと寄つて行つたりした。
入江の左に連亙した山巒の凹所は、丹後から但馬の山の中へ入つて行く道路の通じた處で、そこに、例の横一文字の樗峠の眺望があつた。私の見たところでは、その眺望は、笠松と比べて、荒い外海に遠いため、全面の感じが生々としてゐないやうなところがあつた。しかし横に長く見た橋立は奇觀である。その長松のために入江がすつかり塞がれて了つたやうになつて見えた。

四九

橋立の日本三景の位置としての價値は、海の深く荒いのにある。周圍の山の高く嵐氣に富んでゐるのにある。笠松から眺めた長松の左の海の汀の碧の上に船が一痕長くその跡を曳いて、靜かに搖いて行く形は美しい眺めであつた。其處から見た縱一文字が橋畔の横一文字に對して、橋立の眺望點を成してゐるのも面白かつた。

―

それに、宮津の町が好かつた。縞の財布が空になると言はれてゐる昔の和船の港、小さな大名の城址を持つた町、舊い空氣と新しい文化とがまだ完全に離り合はないやうなところに世離れた好い氣分があつた。私の行つた時は、丁度初夏の祭禮で、大きな山車などが出て、それを牛がひかずに人が大勢太い綱に縋つて『えんや、えんや』と面白い懸聲をして曳いた。そしてその山車に紅葉山とか相樂山とか一一山の號がつけてあつて、町の通りの到る處に立留つて、子供芝居などが其の上でやられた。群集は狹い通りに滿ち溢れて歡呼してそれを見た。

數島の町も特色ある町だが、それよりも此方の橋立の持つた宮津の町の方がより以上特色もあり面白くもある。女郎の置屋が普通の町の通りの中にあつて、白粉をつけた女が艶かしい風で歩いてゐるなども、昔の港としての氣分を濃やかにした。これから比べると、松島の持つた町などはさびしいものだ。丸で

無双岬の鼻から黑岬の突角まで、その間は全く北海に暴露された航路である。船にはかなりの自信を持つてゐた私も遂には船室の中に入つて横臥した。

併し私は長くさうしてゐるに堪へなかつた。橋立は最早そこにあるのである。わが戀の橋立は其處に橫はつてゐるのである。私はつとめて起きて、また甲板に上つて行つた。

私の眼には美しい風景が映つた。宮津灣――汽船の今入りつゝある宮津灣は、夕日の光に湧くやうに美しく輝き渡つて見えた。そしてその正面には例の大江山が高く見事に聳えてゐた。

『橋立はもう見えますか。』

かう私は汽船の事務員らしい詰襟の洋服の男に訊いた。

男は私の爲めにその前を指さして見せた。成ほど其處に一帶の青松の長く連つて林立してゐるのが見えた。

宮津の粉壁はその左の山際に明るく簇つて指さゝれた。私は最早船暈などには頓着してはゐられなくなつた。

私の旅情は湧いて來た。今夜はあの古い宮津の港に泊つて、明日は橋立のすぐれた風景に接することを得る身ではないか。私はかう思つて立ち盡した。橋立の長松は次第に近く近くなつて來た。

徒崖に圍まれた灣の内は、まだそれほど船の動搖が烈しくなかつたけれど、次第に北海に出て行くにつれて、汽船の上下動は漸く深く大きくなつて行つた。金岬の鼻を左に、右に博奕岬の長い突出を見るあたりに行くと、甲板の上に出てゐた人達も一人減り二人減つて、遂には僅な男達を殘すばかりになつた。ある女は、急に堪らなくなつたと言ふやうに、甲板の階段の眞鍮の丸い棒に縋るやうにして慌てゝ下りて行つた。

何と言つても、凄じい北海である。波頭は白く畝を成して湧きあがつてゐる。帆は一つ二つさびしく危げに欹つてゐる。汽船の動搖は益々烈しくなつて來た。

大阪から一日泊りか何かで橋立まで遊びに行く連中は、何處か銀行か會社の人達らしく、ビールや何かで元氣にはしやぎ廻つてゐたが、由良港の人家が白く左の山際に見え出した頃から、とても堪らないといふやうにして下の二等船室の中に入つて行つた。

『何に、醉ひやしないよ。大丈夫だよ。』

などゝ言ひながら、後頭部に掌を合せて仰臥するものが多かつた。

大雲川の海に注ぐあたりは、殊に烈しい動搖を汽船は感じた。船の脚は湧き上る波濤を縫ふやうにして上下動をなして進んで行くのである。注ぎ落ちた大雲川の流は、前にあらはれた無双岬の鼻に向つて瀬をなして流れてゐるのを私は見た。

受けてゐたやうなところで、その言葉にも氣分にも、今の京都でない京都を味ふことが出來る。勿論、敦賀と比べると、地形がぐつとひらけてゐる。のびのびしてゐる。一時代おくれてゐるやうな氣分が町に靜かに巴渦いてゐる。

こゝから高濱、舞鶴、宮津、其處には日本三景の天橋立がある。つまりこの敦賀、小濱と同じ徙崖、同じ怒濤、同じ地形を持つてゐるのである。思ふに、裏日本の徙崖では、此處等あたりと、親不知附近と、越後の村上の先の海府浦あたりが一番すぐれた海山の眺めを持つてゐるのであらう。私は若狹には琵琶湖の西岸を今津まで行き、そこから峠を越して小濱へと入つて行つた。忘れられない逸興の多い旅だつた。

四八

海舞鶴を出た宮津の連絡船は、白い新しいペンキ塗の汽船であつた。港外の獨立山を後にして、高い徙崖の深く落ちた碧い海の波濤を截つて、船は次第に沖の方へと出て行つた。

軍港は深く藏されて見えなかつたけれど、隼のやうな白い早い水雷艇、一本檣の巡洋艦、あの丘陵の蔭にその活躍した市街、鎭守府、海軍の人達の生活があるのだと思ふと、何となく私はなつかしい氣がしてぢつとそれを見入つた。甲板の上では、双眼鏡を手にした人達が頻りに其方を指して説明した。

る早瀬、日向湖の南岸にある日向などといふ漁村は、他に容易にその類を見ないほどの面白さを持つてゐる。

しかし、敦賀から若狭に入る旅客は、大抵は三方街道を車で入つて行くので、つい近くまで行つてゐながら、その勝を探らずに歸るものが多いやうだ。これを探るには、旅客は街道上の河原市から久々子に出て、早瀬に渡り、それから笠田の峠を越して日向湖に行き、その湖畔から、水月湖をぐるりと廻つて田井に出て、ずつと内外海の方へ行くやうにするが好い。車は通らないが、里程はさう大して遠くない。この四湖を廻つて、内外海に出て、小濱までは一日で樂に行けた。

内外海の海岸もあまり澤山はない好い眺望を持つた海岸である。海中には沖の石などといふ奇岩がある。

小濱灣では、例の外面の奇が忘られない印象を私に殘した。大門小門の勝は、久須夜ヶ嶽の背面に藏されてゐるのであるが、丁度妙義の石門を海岸に移したやうなもので、帆を立てたまゝ、帆がその石門の中を通つて行くことが出來た。小門の方の深潭には、かなりに大きな瀧が、日本海を瀑壺にして落ちてゐるのを私は見た。運塚岩の瀧めぐりの中にある但馬津居山の小車の瀧、並に越後の彌彦の背面にある浦濱の白瀧と共に名を齊しうするに足るものであらうと思ふ。

敦賀も私は好きだが、更に一層忘れられないのは、若狭の小濱港である。開放に京都の影響を帶ぶら

行つてゐることのみを知つてゐるだらう。しかし私達はその一角に、金崎城址のあるのを忘れてはならない。あの悲劇のあつた金崎宮のあることを忘れてはならない。

皇太子の死は、更に義貞の死を促したに相違なかつた。何の面目あつて歸つて帝に見ゆべき。味方に有利になつた藤島の戰に義貞が率先して流矢に中つたのも實にその爲めではないか。

四七

越前から若狹、丹後に連つた海岸は、裏日本でも屈指のすぐれた風景を持つたところである。敦賀の港は、港として價値が多いばかりでなく、風景としても多く他に讓らない海である。山が高く徙崖が嶮しく、海水の彎入もまた複雜してゐる。杉津の小さな停車場から見た眺望は、北陸線を行く旅客をして恍惚として我を忘れしめる趣がある。

そればかりではない。この海岸にはかくされた奇景が一二ならずしてある。北は東尋坊の奇岩怒濤から始まつて、常宮、敦賀灣、その向うには若狹の四湖がある。それは海水の浸蝕作用やら地形の陷落やらから出來たものだが、久々子、水月、日向、三方、この四湖が四肢のやうに相連接して潮水を呑吐してゐる形は殊に奇である。久々子、日向の二湖は最も面白い。海としきりをなしてゐる徙崖の幅などは十町位しかない。それでゐて完全な湖水の形を成してゐるのである。久々子湖の海に接したところにあ

その頃は北國への主要路は、比良の連峰の麓に沿ひ、湖の西岸を掠めて、今津から鹽津、海津へと行つてゐた。そしてその兩國の境には、昔の愛發の關の址があつた。義貞の軍は、疲れた軍兵は、鎧、兜乃至はその武器の重さにすら堪へないやうにして、その湖のさびしい岸を北へと向つた。

雪は果して來た。まだその落附くところをも得ない中に、又はその行先の味方であるか敵であるかをも十分に知ることが出來ない中に、雪が來た。最初の北國の雪が來た。鎧も、兜も、槍も總て白雪の降り積むに任せた。疲れた兵士は敵と戰ふ前に先づ飢寒と戰はなければならなかつた。その悲慘な光景は、太平記を讀むもの丶皆知るところである。

思ふに、北國路の義貞の心には、既に藤島の戰死が豫想されてあつたであらう。北國に於ける悲劇は、かれの既に十分に自覺して居つた所であつたであらう。南風競はず、將帥多く死んだ當時にあつては、かれの心もその大勢の既に廻らすべからざるを十分に知つてゐたであらう。從つて私は正成の戰死よりも、この藤島の田疇の中の戰死を一層悲しく思つた。深い悲しい色彩で塗られた歷史上のシインではないか。義貞なればこそ、かれなればこそ、孤軍を提げて、この飢寒と戰ひ、この深雪と戰ひ、しかもその狹い地形の中に一時の足溜をつくることが出來たのである。瓜生氏の孤忠を示した杣山の城址は、今でも汽車の車窓から指すことが出來た。しかし大抵の旅客はさうした地形も、歷史も知らずに、唯隧道の中を通つて行くであらう。敦賀は今は北海の唯一の港門、露西亞への航路は主としてこゝから開けて

たかも知れなかつた。その三湖の丘に連つてゐる形、その平遠な感じ、その向うに連つてゐる松並木、それを越してきこえて來る日本海の怒濤、それがひどく私の旅の心を動かした。私は空腹をわすれて、長い間その一株の老松の下に立盡して眺めた。ふと氣が附くと、小松原から粟津溫泉に通ふガタ馬車のラッパの音が丘の下を廻つて通つて行く氣勢がした。

四六

米原から岐れた北陸線で旅行する人達は、琵琶湖の水光に別れて、更に余吾湖の髣髴を車窓に指すことが出來るであらう。そこは例の賤ケ嶽の決戰の勇ましく戰はれたところである。これから汽車は越前と近江の國境に橫はつた大きな山嶺の翠色の中へと入つて行つた。

そのあたりの山轡は頗る高い。栃の木の嶮がその一方にあると共に、木の目峠の嶮がその一方に橫はつた。勝家の軍はこの峠を越して前進した。

しかしこの附近では、新田義貞の事蹟が先づ第一に思ひ出されて來る。太平記に書いてある北國落のさま、それは今でも私達の眼前に迫つて來るではないか。時は十一月の下旬、都の大路を右に天皇は和を講じて敵の陣營に、義貞は皇太子を奉じて、重い寄託を身に帶びながら北へ、漸く雪の來らんとする北國へ。

『え？』

『三湖臺ッて、湖水の見える……』

『あ……』とやうやくわかつたらしかつたが、さういふところをたづねて行く好奇の旅客を訝しむやうな表情をして傍に立つてゐた同じやうな嚊に、『あそこだや？　沼の見える處ッて言へや？』

『さうだ……』

かうその嚊が答へたので、最初の嚊は、『それを行かつしやれ、ぢきだアて……』かう言つてその五六間先の竹藪のある處から曲つて行く細い道を指し示した。

それは間道であつた。少し行くと、小松町から粟津溫泉に通ふ大きな路が向うから來て合してゐた。

私は猶一二度訊いて、漸くその三湖臺の丘陵に達した。

昔では茶店がけ位はあつたてあらう。又名所としてたづねて來る旅客を休ませる設備位はあつたてあらうと思はれた。しかし今は、山畠と草原と榛莽とがすつかりその丘の上を領してゐた。大きな松が唯一本取殘されたやうにして其處に立つてゐた。

私は名高い三湖臺がかうしたものだとは思はなかつたので、いくらか失望したやうな氣分で、草を分け、榛莽をわけて、漸くその丘の上へと登つて行つた。

しかしその丘の上は、決して私を失望させなかつた。或は却て其榛莽に埋められた形が私の興を誘つ

をたどつたりしてやつて來た。午飯を食はないので腹が空つてゐた。三湖臺と言ふからには、其處には湖水に臨んだ旗亭などもあるであらうし、湖水でとれる鯉のあらひ位はあるのであらうし、殊に由つたら、夜泊つて行きたい位の旅の興も動くかも知れないと思ひながら私は歩いた。一番先にひろい街道が來た。つゞいて松並木が來た。さびしい中の宿らしい萓葺屋根が來た。松並木の間からは、大きな白山の片鱗が見えた。

昔は榮えた北國街道であつたであらうが、今は東海道の五十三次がさびれてゐると同じやうに、すつかり農に歸したり衰頽したりしてゐた。何か食ふやうなものを搜して步いても、何も食ふやうなものはつひにあたりに見當らなかつた。

萓葺屋根と廣い街道とが長く長くつゞいて暑い日が照つた。

私は幾度となく、通りに出てゐる人達をつかまへて、三湖臺のあるところを訊いた。

三湖臺に對する私の希望は次第に裏切られてゐるのを私は感じた。とても旨い午飯は食へさうになかつた。旅の興をさそふやうな湖畔の旗亭などは得られさうにもなかつた。況んや一夜泊るやうな旅舍をやである。

ある處で、私は髮を箒のやうにしてゐる上さんに訊いた。

『三湖臺は?』

東國の武士、關東平野の中に今だにその跡を留めてゐる武士といふことも一層強く私を引きつけたかも知れなかつた。實盛の東國の所領は、私の故郷に近かつた。その勸請した聖天祠は、現に今も香煙の盛んな流行佛として大きな河の畔の古い田舍町に殘つてゐた。私はいろ／＼なことを思つて低徊した。

　この松原の中から、今江潟の方へ出て行く路も面白かつた。時には湖の縁を縫ひ、時には草原の中を拔け、時には西瓜の赤いのが切つて並べて置かれてある葦簾張の茶店の傍を通つて行つたりした。このあたりでは、人達は『はい』といふことを皆な『ヤア』と言つた。ドイツ語のJaなどを思ひ出しながら私は歩いた。

　ある松原は今江潟、それに連つた柴山潟の水光を望むやうなところに位置してゐた。蘆荻の繁つた中に捨てられたやうに置いてある舟、小さな人のゐない埠頭、水の上に浮いてゐる藻の白い花、細かい蓴菜の葉、さうしたものに夏の午後の暑い日はキラキラと照つて、その上に白い赤い雲が湧くやうにあがつた。そしてその奮湧した雲の中から雄大な白山の鼠色した肩がそれと仰がれた。

四五

三湖臺を私はさがして歩いた。

柴山潟、今江潟、木場潟を眺望する名高い地點である。私は實盛の墳から松林を越したり、湖水の縁

この實盛の戰死の墳もかう海近くはなかつたであらう。倶利加羅の一敗、潮のやうに押寄せて來る木曾勢、一人の踏留まつて戰ふものゝない中に、われこそはと言つて、白髮を染めて潔く敵に向つた實盛の心は不思議にも今私の心を動かした。芭蕉の『無殘やな冑の下のきりぎりす』それと同じ懷古の情が私の胸に湧いて來た。

その墳のある處は、行つても行つても容易にやつて來なかつた。松林は松林につゞいた。撫子の赤く咲いてゐる草原の道、西瓜のごろごろと轉がつてゐる畑、その松の林を越しては、日本海の怒濤の打寄せる音が凄じく聞えて來た。をり〱行き逢ふ漁師の嗅、西瓜のぼてをかついだ男、さういふ人達を呼留めて私は度々墳の所在地を聞いた。

たしか小さな商賈の二階屋のあつたその少し先であつたらうと思ふ。私は松林の中に、竟にその小さな戰死の墳を發見した。

それは小さな塔の形をした墓石であつた。しかしこの松の中に埋れた墓は、名所圖繪をつくつた昔の畫家達にも知られず、名所古蹟に思ひを寄せる俳行脚の人達にも知られず、ましてや今の新聞雜誌の記者達には一顧の價値をも置かれずに、長い年月の間をこのさびしい松風の音と波の音との中に埋れて過ぎて來てゐた。私は過ぎ去つて行つた永刧の『時』をまざ〱と眼の前に見るやうな氣がして、暫しは其處を立去ることが出來なかつた。

津幡から入つて行つた幹線鐵路に沿うては、例の木曾義仲の平家を破つた倶利加羅の嶮がある。山はさう大して深くはないけれども、山中にある一小停車場は、旅客にその時のことを思はせずには置かなかつた。峠の上には、今三角測量點があつた。

山を越えると、石動の町がある。そこを流れてゐる小矢部川の舟運は私には面白かつた。山の中で、山の中の町で、かうした特色のある河港を持つてゐるといふのが……。水量の多い川には帆が處々に白く浮んで、福岡を通つて、高岡市の北を流れ、礪波地方を灌漑した射水川と河口に近いところに行つて合して、そして海に落ちた。伏木の古い港、衰へた港、倉庫のさびしく並んでゐる港は實にその河口に位置してゐた。そして港外には、曾て北國交通の半を占めた伏木直江津間の汽船が時勢外れの汽笛を鳴らして碇泊した。

四四

私は柴山潟の南端にある片山津温泉から、田舍籬落の間を通つて、北海の怒濤と共に靡いた松林の方へと志した。そこには、その松林の中には、實に東國の老武士齋藤實盛の戰死の墳があるのであつた。昔は北國街道は、この海岸を通つてゐたといふ。年々歳々土地陷沒の實例の多い此海岸、安宅關の址なども今の安宅町の所在地點から二里以上も海中に沒して了つたといはれてゐる。從つてその時分には、

が怒濤につゞいて、到る處に美しい海山の勝を藏してゐる。東海岸には見ることが出來ないやうな風景が福浦、地頭附近にはあるといふことである。

金澤から津幡、そこで乘換へて此方にやつて來ると、一番先に河北潟の明媚な穩かな水光が旅客の眼を樂しませた。其處では鰻、鯉、鮒などが獲れた。わかさぎなどはことに味のすぐれてゐるのできこえてゐる。小さな帆の一つ二つ往來してゐるさまも繪のやうであつた。殊に注意すべきは、この湖水の西側に發達してゐる砂丘が、地理學上標式的の砂丘として有名なものであることである。北海の怒濤はその赤ちやけた砂山を越して地を動かすやうにして聞えて來た。

高松、敷浪、この附近では、赤ちやけた砂山にひねくれた赤松の並んでゐるさまが私にインプレシヨニストの繪を思はせた。午後の日影のさし透つてゐる松原の中に思ひ切つて赤い撫子の咲いてゐるのもなつかしかつた。

羽咋に來ると、この赤松は次第に盡きて、今度は邑知潟の水光が時には車窓の右に見え、又左に見えた。河北潟に比べて、蘆荻蒲葦の綠の多い湖水である。汽車のレイルは、時にはその水光の上を渡つて行つた。能登木綿の主產地である能登部附近に來ると、寶達山脈の一峰石動山が其翠色をその前に落して、人をして僧泰澄の創建した山中の寺の香烟の盛んであつた昔を思はせた。この山は七尾から伏木に行く汽船の甲板の上からは殊によく指さゝれた。

つて見たよりも數倍すぐれた美しい眺めを持つてゐるといふことであつた。

七尾灣の美しい明媚な風光、いかにも溫柔鄕らしい和倉の温泉、其處までは都の人達も出かけて行くが、それから先には探勝の旅客も滅多に入つて行くものはなかつた。海岸を縫ふ汽船の航路もあるが、それよりも一層行つて見たいのは、田舍のガタ馬車に搖られながら、山を越え丘を越えて陸行十里、全く北海に瀕したすぐれた漆器の出來る輪島の町！

四三

能登も昔は島であつた。佐渡が島に對した能登が島であつたのである。その跡は今日でもそれとはつきり指すことが出來た。今の汽車の駛つてゐる線、寶達山脈と能登丘陵との間に横たはつてゐる狹長なる第三紀新層、邑知潟は實にその昔の地形を語つてゐるすぐれた材料の一つであつた。昔は海潮がこの平野を貫いて流れた。寶達、石動、二上山の麓には北海の波が凄じく打寄せた。大伴家持時分には子浦、羽咋からかけて、邑知潟附近はまだ一帶の海であつたのであつた。

一宮の多氣神社がその南の鼻の絶端にある形も面白い。それに、越前の三國港の港外にある東尋坊あたりから、越前、加賀の海岸に發達して來た長い長い沙濱、それが此處に來て、再び徙崖となつてゐる形などもその昔の地形を語つてゐるものゝ一つである。一の宮の瀧崎以北は、徙崖が徙崖につゞき怒濤

私は九十九灣を見に行つた歸りに、その帆船で埋られた面白い光景を能登の小木港に發見した。小さな港は殆ど帆檣と船とで一杯になつてゐる。半島の東海岸を定期に航行する汽船すら入つて行くことが出來ない位である。海に面した旅舍の二階の欄干から見ると、銅色をした船頭の肌、束ね髮にした嬶の頭、船縁に危なげもなく遊んでゐる子供、疊んだ帆布には暑い夕日がさして、港口の潮の早い脈が黑く碧く光つて流れた。

『もう今夜あたり立つて行くだ。……四五日こゝにゐるのでな……』

かう婢は私に言つた。

そして風さへ能くなると、その時の朝であり夜半であり晝であるに拘らず、さうした和船は、一齊に帆を揚げて出かけて行つて、朝起きて見て、あの多い船がいつ發つて行つたらうと思はれるほど、港が空しくなつてゐることなども珍らしくはなかつた。

七尾から小口瀨戸を出て來た處は、風景が好かつた。其處から見た能登半島は、山といふほどの山もなく、丘といふほどの丘もなく、何方かと言へば海岸の高原らしい氣分が多かつた。刈草を燒く烟が到るところに靑く高く颺つてゐた。そして海に面した徙崖は、大抵低い白茶色の崖でをりをり潮風に揉まれた松の靡いてゐるのが見えた。聞く所に由ると、海行よりも陸行の方が眺望がすぐれてゐるといふことである。徙崖を一つ越して、海。海をぐるりと廻つて、徙崖。その徙崖の上から見た九十九灣は船で行

波杳かに、その碧い遠い佐渡が島は見えた。實際、わが眉太しといふ感に打たれずには居られなかつた。

『今日はよく佐渡が見えますな。』

かう言ひながら、その山中の溫泉宿の浴客は、涼しい長い緣側に立つて、それを眺めた。

四二

『佐渡は四十九里波の上』この四十九里といふ距離は、能登の東海岸から海上杳かに佐渡を望んだ形であるといふことである。その能登の東海岸にある港、小木とか宇世津とか飯田とかいふ港から東に向つて航する和船は、佐渡の東、赤泊まで順風を待つて一齊に帆を巻き上げて出帆した。そして途中で方向がわるくなると『千石積んだる船でさへ風の都合で出て戻る……私とてその通り』と小唄にもあるやうに、佐渡の島影がもう見えてゐるあたりまで行つてゐるにも拘らず、皆そこから元の港へと引返した。從つて能登の東海岸の小さな港は、いつも和船の帆檣で埋められるやうな光景を呈した。

これ等の帆船は、多くは中國あたりから北海道へ鰊を積みに行く船である。三百石積、五百石積、さうした船は、裏日本の港々に碇泊して、山陰の諸港から、珠洲崎の絶端をめぐり、佐渡からずつと北へ北へと航して行くのであつた。そして歸途は、到る處の港に鰊でふくらました福の財布を空にしつゝ故鄕の港へと歸つて行つた。

廣い日本にもかうした高い山の上で、かうした邊僻の地で、かうしたすぐれた眺望を持つて　それで新しい魚を食ふことの出來るやうな溫泉がこの他に何處にあるであらうか。それは設備はさう大して好い方ではない。旅舍なども綺麗と言ふわけには行かない。しかし私の考へでは、これほど理想的な避暑地は他に澤山はないと思ふ。

この溫泉場は何處？　信越の境に横はつた大山脈、妙高、黑姬、戶隱などの聳えてゐる山の半腹にある赤倉溫泉である。それは日本でも冬は雪のために一番多く汽車の不通になるので聞えてゐる高原地方で、信濃の富士見と下野の那須とそれから此處と、この三つが日本でも一番高燥な感じを持つた高原である。そしてその高原の片隅にその美しい眺望を持つた赤倉溫泉があるのであつた。

紅葉山人の俳句に、初五文字は忘れたが、何でも『……わが眉太し佐渡が島』といふ句があつた。これは紅葉が此處の旅舍の二階の一間に淹留してゐて詠んだものだが、かれは日夕佐渡の青螺にあくがれた末、遂にその憧憬の情に堪へず、そこから新潟に行き、佐渡に行つた。そして小木あたりの女との美しい情話の一幕を逸話に殘した。その佐渡の女は、今だに故人の筆蹟を珍藏して、そのなつかしい昔を偲んでゐるといふことである。

そこから見た佐渡の青螺は、實際美しかつた。上杉謙信が常に軍を行つたといふ山中七宿の平野を隔てゝ、春日山城址をその中に持つた南葉山脈を隔てゝ、米山一帶の翠螺の落ちた海岸を隔てゝ、太洋の

登つて軋つて來る音がきこえた。

四一

大きな山の半腹に構へられた溫泉場の旅舍、其の旅舍の長い緣側から、山を越し、川を越し、野を越して遙にこの佐渡の青螺が指さゝれた。

それは汽車の線路から、小さな山街の停車場から、乾草の腐る匂ひのする村やら、女郎花、桔梗、刈萱などの亂れ開く高原やらを通つて、二里以上も山の斜坂を登つて來たやうな處にある溫泉場であつた。夏は蚊もゐなかつた。寒暖計も八十度以上には滅多にのぼらなかつた。綺麗な小さな川はちよろちよろと流れ、薄の穗には冴えた山中の月が水のやうに照つた。

そしてこの溫泉場は、冬は十一月の初めに閉ぢ、春は四月の釋尊會を期して開いた。春の花は梅も櫻も桃も一時に咲き、秋の紅葉は山を錦繡にするのもほんの僅の間で、山風の一叢にやがて疎々として散つて行つて了つた。山に住む民は、骨に染み透る寒氣と深い堆雪の中に埋もれながら、かねて刈つて置いた山の篠笹を材料に、養蠶の籠をつくつて、それを半年のたつきにした。磽确な土地は馬鈴薯の他には僅かな蔬菜しか作ることが出來なかつた。

それにも拘らず、海が近いので、其處では朝に晩に北海の新しい魚が膳に上つた。鯛などは旨かつた。

澤根と相川との間には小さな峠があつた。それは大佐渡隆起帶の南に向つて陵夷した鞍部で、相川の町はそれを越して西の海岸に出たところにあつた。この峠—澤根からだらだら上りに登つて行くこの峠は、佐渡でもすぐれた眺望を持つた處の一つであつた。長い間沿つて來てしかもその全景に觸れることの出來なかつた眞野灣は、登るに從つて、一歩一歩その穩かな夢のやうな風景を私の後に展開して來た。それに、灣の東に連亙してゐる小佐渡隆起帶の山巒の翠色が、灣の色彩に濃かな影を與へて、柔かな靜かな氣分をそこにつくつた。私はじつと見入つた。そこには例の眞野陵があり、またその山巒の鞍部を越えて赤泊の唯一の冬季港があるのであつた。

動くこともなく唯一つ粧點された帆ははつきりと其影を白くあたりに際立たせて、薄暮のトワイライトの中に昔のロマンチックな物語の挿繪でも見るかのやうに靜かに漂つてゐた。大きなスワンのやうな氣がした。

私はこの景を背にするに堪へず、そのまゝ車を捨てゝ、その峠に達するまでの幾曲折した道を歩いた。段々灣はひろくひろくなつて行く。通つて來た澤根の灣口の人家も手を取るやうに見え出して來る。美しい松原の次第に暮色の中に埋れて行くのも見える。

峠の上に着いた時には暮色は既に遍なくあたりに迫つてゐた。帆の影も松原も、人家ももう見えなかつた。暗碧な山と海との影は一つになつた。ふと氣が付くと、幾曲りも後れた私の車の靜かに此方へと

四〇

半漁半商の長い汚い家並は、河原田から澤根の先の二見港近くまで續いた。非常に子供の多い處である。何處の家にも五人や六人はあるらしい。これを見ても、この大海の一島嶼がいかに物資に富み、生活に安らかであるかといふことが分る。『それは生活は樂な處でさ。働きさへすりや食へないことはありませんからな。』東北生れの車夫は、かう言つて此島に來てからの七八年の生活の話を私にしてきかせた。

『もう、他所に行く氣はないかね。』

『ありませんな。暮らすにや、こんな好い處はありませんや……。何しろ、米は澤山穫れますし、金山はうんとあるし、何一つ不足なものはありませんからな。金のなる木の生えるところッて昔から言ひますが、實際、何處だツて、金が澤山あるんだツて言ひますからな。だから、そこの山にも、金が出るさうです。』かう言つて車夫は車の轅を留めて右に連つた低い山を指した。

實際金は今だに澤山あるらしかつた。元祿年中の一俳人の書いた『佐渡紀行』にある新町附近の金山などには今でも金が澤山に殘つてゐるのださうだけれど、村の人達は幕府時代に經驗した風俗の頽廢と村の習慣の破壞とを恐れて、鑛山師が度々そこを復活させやうとしてやつて來るにも拘らず、常にそれに反對して、容易にそれに手をつけさせないといふことであつた。私は面白いと思つた。

ついて賣つてゐた。私は咽喉が渴いてゐたので、それを一杯買つて食つたが、餘りに旨いので皿や箸の汚ないのに始めは怖氣を振つたにも拘らず、二杯、三杯までつゞけて啜つた。『旨い心太だなあ。』かう思はず私が言ふと、婆さんは得意さうに、『家だとな、もつと冷たくして食はせるがな。旨い心太ずら？おらがのは自慢なんだから。』かう言つて婆さんは莞爾と笑つて見せた。

日蓮が三年ゐたといふ寺へ行く路の狹い谷間も涼しかつた。稻の穗の靑い山の田、灌木の林、松並木に添つた路では、蟬が頻りに鳴いた。最初にお松といふ寺、その大きな掃除の行屆いた本堂、つゞいて其奧にある寺では、車夫が其處にゐる癡呆の寺男に賴んで、冷たい水をわざわざ遠くから汲んで來て貰つた。私は齒に染み通るやうな水を二杯も三杯も飮んだ。老いた寺僧は、日蓮のゐた址などを私に案內した。

國中平野――大佐渡、小佐渡兩隆起帶の中に開けて、その爲めに島の地形が工の字を成してゐるといふ國中平野の路は、夏は暑い暑い處であつた。濶々した稻の田、ところどころにある森、その間から金北山の深い碧に白い雲の颺るのが見えて、何うしてもこれが大海の中の一島嶼であるとは思はれなかつた。成ほど、島では食ひ切れないほど米が穫れる』と言はれるのも尤だと私は思つた。やがて新保川の流をわたると、ぽつぽつあらはれ出して來る河原田の人家、美しい松並木を隔てゝ、その向うに深く入込んだ眞野灣の波が展けた。

暑い平地に芙蓉の花などが赤く白く咲いて、萩野博士の書いた石碑の上に赤トンボなどがとまつてゐた。

順德院の御事蹟は佐渡では殊に旅客の思ひを誘つた。長い年月をこの邊陬に過ごされた御一生のことを考へると、私は哀愁に胸をむしられずには居られなかつた。院の皇女の墓の其處此處に殘つてゐるのも悲しかつた。

御所址の少し手前にある小さな寺は丁度觀音さまの緣日で、村の娘子供は晴衣を着飾つてぞろぞろ出懸けて來てゐた。駄菓子を賣る店、玩具や人形を並べた店、白い晒布の日除に午後の日影が當つて、突當りの御堂では、賽客の鳴らす小さな鰐口の音がぢやらぢやら聞えた。いかにも田舍の緣日らしい光景が私の心を惹いた。

この觀世音が曾ては院の御持佛であつて、今は國寶になつてゐるといふことも私にはめづらしかつた。かうした由緒のある觀世音菩薩を持つてゐる村の人達は幸福である。又さういふことは少しも知らずに祭禮を樂しみに集つて來る子供達も幸福である。かうして靜かな悲しい址を持つた佐渡の人達も幸福である。こんなことを思ひながら、私は、萩の赤く白く雜り咲いた寺の境内をあちこちと步いた。本堂では今少し前に說教か始まつたらしく、鬚の生えた若い住職が僧衣に袈裟をかけて頻りに佛の功德を說いてゐた。人が一杯集つてゐた。

堂の傍では、頑丈な田舍の婆さんが黃褐の財布に錢をちやらつかせながら、頻りに一杯一錢の太心を

にこんなことを言つた。

そこに集つて動搖したり廻轉したりしてゐる多くの汽船をあとにして、やがて佐渡に航する度津丸は出帆した。

煙突から凄じく黑い煤烟が漲るやうに湧き上つて、それが汽船の進むにつれて、碧い海上に長く靡いた。

振返ると長い汀線が次第に遠くなつて行く。晴天を報じた測候所の白い旗が砂山の上にピラピラ靡いてゐるのが見える。今出て來たところに集つてゐる汽船のあるものからは、煤烟が俄に盛んに渦まき上つた。『あれは酒田行だな。』などと人々は言つた。

突然ある光景が私の眼に映つた。見よ、其處には、かなりに幅の廣い黃色く濁つた流が、布でも敷いたかのやうに、長く長く大海の中に線を成して流れて行つてゐるではないか。それこそは實に信濃の萬山の中を流れ落ちて越後の平野を流るゝこと三四十里、溶々として海に注いでゐる信濃川の水ではないか。私は思はず驚喜の聲を擧げた。

三九

街道から車は右に入つて行く。やがて黑木御所の址が私の前に現はれて來た。そこには樹影の疎らな

かゝる前に車を捨てて、車夫に荷物を持たせてそしてやつて來た。

「海は荒れてゐるな。」

かう言つてさういふ人達は心配した。

碧い碧い海である。紺ご染めたやうな、又は濃い繪具を流したやうな……。佐渡は見えなかつたが、その上ごく饒しきあたりには、半赤く半白い雲がもくもくと湧くやうに渦まきあがつてゐた。

やがて時が來た。打寄する波に搖かされて、船頭が三四人して引き寄せてゐるにも拘らず、一隻の艀は、岸まで寄せて來るのが容易でなかつた。岸から汽船の甲板まで、この北海の海岸では、灣入した良港に乏しい海岸には、何處でもこの荒い艀の動搖を旅客は味はなければならなかつた。艀は時には奈落の底深く、時には波濤の畝の上高く擧げられた。「あ、何うしよう、大變だ……」と氣の弱い女達はかう言つて聲を擧げた。

しかしそれも五六町の間であつた。やがて艀は汽船に横付けにされて、上から下ろされた階梯の綱をたよりに人々は漸く甲板の上へと立つことが出來た。しかし海が荒れてゐるので、汽船の上でもその上下動はかなりに烈しかつた。女達はすぐ船室の中に入つてそして突伏した。ボウイは小さな金盥なごを逸早く持つて行つた。

「なアに荒れてゐるのは岸ばかりでさ。沖へ行けば、好い凪で、富山灣の背風を肴に朝飯はのんきさう

なかつた。さびしい冬だ。さびしい北國の海だ。かうした感がその眺望臺の上に一人立つた私の胸に脈々として迫つて來た。

しかし、旅舍の一間には、暖かい火燵があり、酒盃を並べた火燵板があり、赤い襷をかけた色白のお玉さんがあり、明り取りの硝子障子の外には、雪に彩られた瀟洒な庭があり、心持のよい朝風呂があつて、靜かに旅の心を落付かせることが出來た。何處かで二上りを爪彈で彈く音などもした。

三八

鼎の沸くやうな海のごよみが廳て私の前に展けた。一本檣、二本檣、青い白いペンキ塗の汽船が捲き上る波濤につれて、たぷたぷと上下動をなしてゐるのが見えた。煙突からは煤煙が或は淡く或は濃く海の上に靡いて落ちた。

二三日來のしけの名殘は、長い砂濱に打寄せる波のうねりにも、まだいくらかその跡を留めてゐた。

朝日は美しく太洋を照した。

岸には大勢乘客が待つてゐた。大抵は佐渡に渡る人達であつたが、中には鼠ケ關、酒田の方へ行くものも雜つてゐた。かれ等はしけで汽船が信濃川の萬代橋の下まで入つて來ることが出來ないので、止むなく長い路を稅關の前やら倉庫の前やらを通つて此處までやつて來たのであつた。車で來た人は、砂濱に

山祠の境内でやつてゐるのだが、其處を通る時には、私はわざと車を留めて、その賑かに渦を卷いた雜沓した光景を見た。梆砧の音は冴えて晴れた夜空に染み通るやうに聞えた。

信濃川に水の出た時などには、堀割の濁つた水の色に岸の楊柳の綠が靡いて、何とも言はれない感じを旅客に與へた。實際すぐれた『繪』であり、また美しい『詩』であつた。水鄕といふ感じも深かつた。朝はその堀割の岸を魚を賣る漁師の嚊達がぼてをかついで爽かな聲で觸れて通つた。ある處では、この堀割と柳の綠とを前にして、賑やかな魚や青物市が立つた。潑剌とした魚の鱗に南瓜や茄子の色の際立つて鮮かに見られるのも面白かつた。インプレツショニストの繪か到る處に展げられた。

これに比べると、冬の新潟はさびしかつた。また佗しかつた。雪も山寄りの町のやうに、深くは積らず、昔はあつたといふ長い山國風の廂もなく、半は雪半ば泥濘といふ風で、路は步くにも足駄でなくては駄目であつた。その雜雪は絕えずやつて來た。今、美しい朝日がさしたかと思ふと、時の間に凄じい吹雪が市街を襲つた。半析の晴日、半析の風雪と言つたやうな光景の中に長い信濃川の萬代橋の橫つてゐるさまなどは、決してめづらしいシインではなかつた。

日和山の高い眺望臺の上には、風雪が凄じく捲き上つて、北海の怒濤は地を撼かして來た。海は暗澹として鼠色の雲深く、佐渡どころか、その砂山の連亙すらもはつきりと眼の中に收めることが出來

林立した。上方の文明は皆そこを門戸にして入つて行つた。今日でも越後の女の氣分に何處か上方情調のあるのは、實にそのためである。それに佐渡に配流された人は、順德天皇を始めとして、日蓮も其他の人々も皆この海岸から出帆した。寺泊は殊に佐渡に近かつた。海上十二三里、晴日ははつきりとその金北山の山容を指すことが出來た。

三七

縱横に通じた堀割に橋が無數に架つてゐる。そして岸には楊柳が毿々として綠を拖いてゐる。その葉間には夜は涼しい町の灯が搖曳した。

新潟は暑いが、夏は特色に富んでゐる處だ。冬の町よりも何方かと云へば夏の町だ。賴三樹の詩に、『柳橋眉月夜微茫、江入渠流曲々通、八百八樓涼似水、掀簾七十二橋風』と言ふのがあるが、實際よく新潟の夏の夜を描いてゐると思ふ。到る處旗亭には絃歌の聲が湧くやうにきこえ、闇に逢ふ娘達の白く艶かしい姿が其處にも此處にも見えて、成ほど北國の溫柔鄕だと言はれるのも尤もだと思つた。

ある夏には、私は夜更けてから白山驛に下りて、車で旅舍へ向つた。秋近い夜は美しく晴れて空には天の川が白く星が銀のやうにきらきらと輝いた。その下でゆくりなく耳にした棹砧の音、それはどんなに私の旅の興を誘つたであらうか、又何んなに長い旅に勞れた私の心を爽かにしたであらうか。それは白

ゐたかも知れなかつた。

從つて彌彦、角田の連峰は、私達にその時分の地形を想像させる十分な材料を與へた。三條、加茂あたりを歩いた昔の旅客は、左に明媚な入江を隔てゝ彌彦、角田の翠微を望み、右に六十里越八十里越の大きな峠を持つた山嶺の連亘した姿を仰ぎつゝ、靜かに海岸に沿つて旅行したのであつた。そして今の越後鐵道の線からは、その大きな山嶺の連亘が美しくその入江にその影を蘸して見られた。

それが今、あの米の出る蒲原の大きな平野となつた。夥しい變遷だ。

越後鐵道の線は、幹線と信濃川とを右にし、荒濱の海岸路を左にして、到る處に小さな停車場を置きつゝ、次第に新潟へと向つて進んで行つた。從つてその名の停車場から其海岸の町まではいづれも大抵一里乃至一里半を隔てゝゐた。出雲崎も寺泊も……。

荒濱の海岸路をたどるのも興味が多かつた。柏崎の北を流れて海に注ぐ惡田川の河口は、砂丘、砂洲の成立と風位との關係を研究するに就いて非常に興味ある地形を示してゐるといふことである。

それから路は全く砂濱の間に通じて、荒濱、椎谷、寺泊、出雲崎へと行つて、それから海を離れて彌彦をぐるりと東南にめぐつてゐる。從つて芭蕉時代、西鶴時代にあつては、旅客は大抵は皆この海岸路を通つて旅行したらしかつた。

それに、出雲崎も寺泊も、昔の和船の港としては、酒田、新潟などと同じやうに榮えた。帆檣が常に

一緒になつた。其人は佐渡の赤泊から荒い風濤を冒して、寺泊にやつて來る郵便汽船の話などを私にした。『昨日もやつては來ましたが、海が荒れて港へ入れなくつて困つてゐましたよ……。え、よくありますとも、引返すことが……』佐渡と本土との間は冬は唯この一線のみが僅かに通ずるのであつた。私は風濤の湧きあがる中を勇ましく衝いてやつて來る小さな汽船を思はずにはゐられなかつた。

三十六

柏崎を出て新潟の白山に行く越後鐵道の線路は、地方的交通の便を計つてゐる形が面白かつた。この線路で行くと、信濃川を渡ることなしに新潟へ行けた。

越後の古い地圖があるが、それに由ると、海水は深く內地に彎入して、今の信濃川の流域は大部分海であつたらしく、新潟の鼻が新發田附近の鼻と相對して、廣い入江を扼してゐる形になつてゐる。從つて加茂の青海神社あたり、三條あたりはすつかり海に瀕してゐるのを私は見た。

歌枕にある越の長濱は、名立能生附近を言ひ、越の荒濱は鯨波以北出雲崎あたりまでを言つたのであつた。其時分には蝦夷がまだ此處等に蟠居してゐて、屢々王師に抗した。始めて肅愼を征した安倍比羅夫が實にこの越後の最も有力な豪族であつたなども面白かつた。昔は路は長濱を傳つて行く路と內海の岸を縫つて北走する二路が通じてゐたらしく、長岡の繁華の市街なども或は全くその入江の中に埋れて

の光線が幅廣い影をさびしさうに落した。

米山の峯徴を貫いた國道上の眺望は昔から世に聞えてゐるものであるが、それは青海川がすぐ近くにある。此處では曾つて維新兩軍が會戰した。此處を扼した長岡勢は容易に破ることが出來なかつたといふことである。

冬行つた時には、私は鯨波の停車場の前の松林の丘の中の路を登つて、その上にある大きな旅舍に泊つた。家は風雪を防ぐために明り取りのついた雨戸ですつかり閉められてあるので、室が少し薄暗かつた。私は女中に一枚雨戸を繰らせた。その間からも雪がバラバラと吹き込んで來た。海をどよませて來る怒濤の音と風の音とは、時には家を撼かしさうにした。

室の一隅につくられた火燵板に凭りかゝりながら、私は北海の荒い風雪の中に埋められたやうにしてその一夜を過した。颱の多い一夜であつた。遠くの室で三味線の音などがした。

夜は女中が丸い行燈を運んで來た。それが私には嬉しかつた。行燈には誰の旅の樂書か、「行燈に殘せし針のあと」といふあの昔の小唄が書いてあつた。私は靜かに北國の雪の旅を思つた。

私は風雪に降り込められて、小千谷で二日を過した。其處は同じ越後でも海岸地方では見ることの出來ないほど雪が深く、人々は皆な家々の深い廂の中を歩いて行つた。大きな赤い蟹が肴屋の店にあるのも節のやつであつた。私は其處では、今朝寺泊から三條に來てそれから又此處にやつて來たといふ人と

て來た。遂には驟雨が沛然こしてこの海岸のさびしい小さな旅舍を襲つた。

『降つて來ましたな。』

かう言つて旅舍の上さんは急いで明放した二階の雨戸を引き寄せた。

三五

鯨波の夏の海は、かうも俗化されたかこ思はれるほごであつた。こても嵐氣の多い親不知の海岸には及ぶべくもなかつた。それこ言ふのも、米山連峰がさう大して高くなく、從つて雲烟の氣に乏しく、それに加へて柏崎や長岡の繁華な町がその附近にあるからであつた。旅舍も海岸もすべて半裸體の男や鍔の大きい麥稈帽なごで一杯に滿された。青海川あたりの漁舍の一間にすら避暑客が浴衣がけになつてごろごろしてゐるのを見懸けた。

冬の積雪の中で見た海こは丸で違つて、波も靜かに岩も淺露に、色彩も單純であつた。これに比べて、冬はそこには何んなに雄大なシインが展げられたであらう。鉢崎あたりから汽車の線路に沿つた防波堤には、凄じい恐ろしい怒濤が打寄せて、暗澹こした鼠色の雲が坌湧し、掀翻し、動搖し、奔跳した海を包んだ。トンネル又トンネル、その間には、碎け、散り、吼え、悶えつゝある海に、大きな屋のやうな波濤が沖から畝を成して打寄せて來た。そしてその暗澹こした大洋の上には、をりをり黄い佗しい冬の日

その指した方には、鳥首岬の鼻を越して、米山の翠螺が碧に染つてはつきりと眺められた。能登は小木港あたりか、それともつと北か、それはわからないが、兎に角鯨の背の海中に浮んだかのやうに、鼠色になつて長く横つてゐた。帆影が一つ靜かにその前を動いて行つた。

私は靜かに欄干に身を凭らせて、直江津からやつて來た途中の事などを頭に浮べた。この海岸は徙崖と海と絶えざる戰鬪を示してゐるやうな處で、町や村落はすべてその間の狹小な平地を求めて構へられてあつた。白い貝殻の屋根を越して、濶い海がいつも盤のやうに汽車の窓から展げられて見えた。そして此間に、「東遊記」の「名立崩」の跡があり、芭蕉の能生の鐘があつたり、姫川の荒い川口に位置した糸魚川の町があつたりするのであつた。北海は年々歳々陸が海に蠶食されて行つた。從つて汽車は崖崩れや小さな海嘯で常に不通になつた。昨年なども波が荒いため、姫川の水が海に注ぐことが出來ず、糸魚川の町はすつかり水に浸されて、住民は生心地がなかつたとの話などを私は聞いた。

月はなかつたけれども、その夜は稻妻が美しく海を照した。それは丁度米山あたりに起つた雷雨で、その光る度毎に、翠嵐と、その翠嵐の上に簇り湧いた雲がはつきりと指さゝれた。時には欹つた帆が一つ黒く見えたりした。

私は二階の戸を開放しにして、新しい淺黄の蚊帳が靜かに海風に動く中で、その美しい稻妻の光に見入つた。旅の興は盡くるところを知らなかつた。次第に稻妻は強く烈しくなつて鋭い雷聲が段々近寄つ

それは汽車が通じたために出來たやうな小さな旅舍で、設備も何もなかつたけれど、それでも海に面した二階の一間は、私に尠からぬ逸興を與へた。前には一巨岩が海中に立つてゐて、そこには波濤が絶えず打寄せて來ては碎けた。海に行く路には草が繁つて鈴蟲やギスなどが鳴いてゐた。夕日は美しく海を染めた。

旅舍の裏は小さな崖で、そこからちよろ〳〵水が滴り落ちてゐるのも涼しかつた。そしてその水は樋を傳つて、厨の方から家の脇の方へと小さい瀑を成して落ちた。赤い小さいみぞ萩などがそこに濡れて咲いてゐるのもなつかしかつた。旅舍の上さんはそこに竹樋をかけて、そして私を浴れる爲の据風呂の中に水の落ちるやうにした。

『佐渡かね、あれは？』

ふと微かに遠く横はつた山影に眼を付けた私はかう言つて主人に訊いた。

『いゝえ、あれは能登です。』

『さうかね、能登かね。……佐渡は見えないかね。』

『何うかすると、微かに此方に……』と主人は指して、『此の見當に見えますけども、それも一年の中に一度か二度です。』

『さうかね。』

路には朝の露がしとゝに置いて、月見草の黄いのが朝日に俛首たれてゐるのが處々に點綴された。やがて路はぐるりと大きな絶壁をめぐる。と、昔の親不知の險が一目にそれとその前にひらけて見える。海を縁取つた徒崖が思ひ切つて高いので、遠くから見ると、波濤と崖との間に挟まれた波打際が非常に狭い。晴日にもちよつと其處を越えて行くのは困難に思はれるほどそれほど險しい。

で、菅原の中の路を下りたり、トンネルの前の橋を渡つたりして、風羽見といふ徒崖の中に埋もれた村の人家の傍を掠めて、辛うじて濱へと下りて行く。濱には小さな茶店があつて、冷たい水が山からちよろちよろと樋を傳つて落ちてゐた。

昔の難所は七八町、その途中には例の風濤に閉ぢ込められて握り飯一つが一兩もしたなどといふ洞窟が二三殘つてゐた。案内者は徒崖の上に生えた草を指して、「そら、そこまで波が寄せて來るんだから、まごまごしてゐりやすぐ波に持つて行かれて了ふ。えらいこつちや……」などと説明した。しかしその險も、今では全く遊覧者のみが行く名所となつて了つた。夏は涼傘や、麥稈帽がこの絶壁の畔を縫ふやうにして歩いた。

三四

私はこの海岸の漁舍に一夜寝た、

のがすぐ眼に附く。平凡な山巒の末ではないといふやうな氣がする。深く穿つた谷間からは、碧い空が見上げるやうにして仰がれた。

昔は加賀の百萬石の勢力を以てしても、この海岸の路を何うすることも出來なかつた。旅客は皆波濤の靜かな時を選んで、そしてその海岸に落ちた高い徙崖の波打際を通つて行つた。それは繪にもある、物語にも書いてある。佐渡に流された順德院も、東國に赴いた源義經も、皆なこの波打際を通つて行つたのであつた。何でも昔は、親不知人足なるものが市振と青海との間にゐて、今日は大丈夫だといふことをそれと見定めてから旅客の案内をしたといふ。加賀侯の通る時には、人足が二十人も三十人も怒濤の寄する岸に並んでそれを保護したといふ。そして市振、青海間の人達は、漁師の他は皆その親不知人足として長い一生を送つて來た。であるから、明治になつてこの徙崖の上に路を開くといふ議が決した時には、村には非常に騷がしい運動が起つて、容易にその工事を進めることが出來なかつた。今でも何うかすると、遊覽者はその昔の親不知人足の一人に案內されるが、その老いた案內者は、さもさも昔が戀しいと言ふやうにして、その時の旅行のさまを人々に語つた『それがなア、路ごころか、今ぢやかうして汽車さへ通るから……』かう言つて、トンネルの中から出て來る長蛇のやうな汽車を見送つた。

親不知驛で下りて、それから外波へと來て、そこから次第にその嶮しい徙崖へと私達は行くのであつた。右は渺漫とした海である。碧い水面に波頭の無限に颺つた海である。左は高い徙崖乃至山巒である。

や、槍ケ嶽や、そのや、右に偏つて、雲煙坌湧した中に木曾の御嶽や、駒ケ嶽の聳えてゐるのを見ては、誰でも驚喜の聲を發せずにはゐられなかつた。

　黑部の谷はこれから猶七八里無人の境を流れ、鐘釣へ行つて、初めて鑛山の事務所や山中の溫泉宿や、谷間の製板所などを見るやうになつたが、それでもまだ山は深く、密林は日を蔽ひ、絕壁は谷を圍んで、下流から其處まで入つて行くにも一方ならぬ努力を要した。それから川は更に東から黑薙川を合せ、水勢益々盛に、漸く萬山の中を出て、魚津の海岸平野へと落ちて行つてゐるが、海に注ぐまでは竟に荒山の中を流れて來た鋭さと烈しさとを失はず、一度雨期に際會すると、その海岸平野はいつもすつかりその水に浸されるのを例とした。從つて、それを何うすることも出來ない。昔にあつては、川は自ら恣にその欲する處に流れて、所謂『くろべ四十八瀨』の難所をつくり、旅客は淹留數日、その減水を待つて、初めてその多くの瀨を徒涉して通つて行つた。

三三

　黑部が海に注ぐと同じやうにして、この大きな日本アルプスも、大蓮華から乘鞍、雪倉ケ嶽と次第に低くなつて、竟にその末梢は北海へと落ちた。そしてその岸に例の親不知の險をつくつた。流石に強弩の末のやうな氣がして、あたりは頗る嵐氣に富んでゐる。汽車で通つて見ても、山の高い

した溪谷はこの他に南會津の奥の只見川がや〻これに匹敵するに足るばかりである。
この谷には主が住んでゐるこいふ。また岩魚を釣りに行くものが偶には入つて行くくらゐなものだこいふ。そこにかくれてゐる神秘は唯をり〳〵日本アルプスの大膽な探檢者に由つて語らる〻ばかりで、その源流乃至上流のさまはまだ多く世に知られてゐなかつた。或はいふ、こてもその源は究めるここは出來ない。何故なら、絶壁が高く、水量が多く、岸こいふものが殆ごないから、こ。或はいふ、崖に攀ぢ、樹に縋り、僅に水聲を聞いて下にその髣髴を見るばかりである、こ。しかも針の木を越えて、越中の立山に行くものは、是非一度はこの溪谷を渡つて行かねばならなかつた。
そこは黑部の谷の中で、割合に平坦なこころであるさうだが、それでも樹は深く、崖は高く、水は常に凄じく吼えて流れた。徒渉してなごはこても行けさうにも思へなかつた。從つて其處を越えて行く人は針線で出來た昔の籠の渡しのやうなものを自分の手で押してそして辛うじて渡つて行つた。
この針の木のすぐ西に當つて、越中の立山の連峰がその雄大峭拔な姿を屹立させてゐるのであつた。從つて探檢者は大抵大町を出て、針の木の峠附近で一夜露營して、それから黑部の谷を渡つて、そして立山溫泉乃至立山の絶頂へこ志して行くのを例にしてゐる。佐々成政時代からあるこの間道、德川時代になつても、前田家が萬一の時を期して保護して來たこの間道が、かうして今日まで殘つてゐるこいふここも面白い。それに、立山の上で、晴日に見た山巒の起伏は、日本でも多く得べからざるもので、乘鞍

してそれを記念するやうな祭禮だが、安曇地方を通つて、日本アルプスの麓を長く一直線に北に沿つて、姫川の谷を越後の糸魚川に出て行く路も面白い路の一つだ。松本平には、此路から例の謙信の武士の情の鹽が入つて來た。

この道は、今は夏は日本アルプス、ここに中房、針の木、白馬などに登る人達の多く集るところとなつた。軌道は今その中心の大町まで行つてゐるので、松本からわけなく入つて行くことが出來る。中房には穗高から行き、針の木には大町から行き、白馬には北城から松川の谷を溯つて行つた。木崎、中綱、青木三湖の連つた形も面白かつた。

そしてこの姫川の谷に沿つた一路は、障壁を立てたやうに大連華、乗鞍の峻嶺と共に、これから全く北を指し、十二三里が間、水鳴り雲湧き、處々に山村を點綴しつゝ、遂に裏日本の海に向つて馳り下つた。

三二

この大きな日本アルプスの峻嶺を挾んで、東は姫川が流れ、西は黑部の一水が連山重疊した間を凄じく大きく溪谷をつくつて流れた。

實際凄じい大きな溪谷である。人跡の至らない間を、十餘里、谷は深く密林で蔽はれ、絶壁は高く、兩岸に欹ち、いかなる探險者と雖も、容易にこれを探ることが出來ないので聞えてゐる。日本一とは、かう

ゐも地形をも眼中に置かないやうな路をつくつて、一擧して諏訪を略し、更に鹽尻を越えて桔梗ヶ原に松本平の小笠原氏を破つた。そして信玄は更に杖突峠、金澤峠から伊那に殺到して天龍川河畔の豐饒な平野をその手中に收めた。木曾谷は全く占領することは出來なかつたけれど、和を講じた木曾義昌は、竟にかれの支配の下に屬さなければならなかつた。從つて信玄はその盛時に於ては、甲府盆地よりも、寧ろこの信の中央部にその主權を置いて、そして越後の上杉の勢力と對抗した。信玄は大門を越えてはよく千曲川の流域へと出て行つた。

それが一度勝頼の代になると、今まで張つてゐた四面が却つて向うから押されるやうになつた。一番先に織田氏に内通したのが木曾義昌であるのなども面白いではないか。地形の天嶮は木曾氏をしてさうした擧に出づる餘裕を與へたのである。で、側面に木曾氏の力を得た織田氏は、御阪峠から潮のやうに入つて來て、難なく天龍川河畔の地に殺到し、遂に高遠に主力を置いた勝頼の軍を打破して、矢張、杖突、金澤の二つの峠に由つて諏訪地方へと亂入した。これから見ても高遠の山城は當時の要害であつたといふことがわかる。高遠の守を失つた形のかげには、既に全く天目山の最後の一幕がかくれてゐたのであつた。で、信玄の度々往來した杖突峠の路も、攻略のために拵へた八ヶ嶽裾野の棒路も、やがては信長の勝誇つて通つて行くのに任せた。

松本市に今でも鹽祭と言つたやうなものがあるが——それは越後の上杉から鹽の入つて來たのを歡喜

複雜して入り込んでゐるが、その谷の四方から落ちて集まつて流れて行つたやうなところに、あの美しい昔の高遠の城邑は開けてゐた。

高遠から伊那へ行く間は、南アルプスの連峰を東に、木曾の駒ケ岳を西に眺めるやうな處で、氣象が頗る雄大であるが、その間を田舍の乘合馬車はラッパを鳴らして通つて行つた。伊那の旅舍からは、天龍の水聲が靜かに枕を撼かして聞かれた。

三一

諏訪の山裏の西に對して連つてゐる山脈を貫いて峠が三つ並んでゐる。御作所峠、金澤峠、杖突峠即ちこれである。共に諏訪から伊那地方に出て行く道だが、この路は古來幾多の歷史上の人達の通つて行つたところで、中でも大門峠から杖突峠、それから伊那へ出て、權兵衞峠を木曾谷の宮の越へと出て行く一路が、中山道の副路となつて榮えた。これ等の峠の上からは、すべて諏訪湖が美しくその明鏡を展いて見せた。

大門峠を下りた處には、面白い驛路の光景が巴渦を卷いてゐた。茅野の町も諏訪上社の前景として昔から榮えたところである。此處等では武田信玄の攻略の跡などが第一に偲ばれる。信玄は最初に佐久方面の海の口を略し、一方北に發展すると共に、八ケ岳の裾野に棒路といふ眞直な一本路――村をも人家

いてそしてそれを獲つた。運が好いと隨分澤山獲れるといふことである。それに、山中の製板所の生活も私達にはめづらしかつた。谷に沿つた狹い平地、そこにかなり大きな二三の建物があつて、電氣仕かけか何かで盛に製板をやつてゐる。そしてその出來た板は、そのために開いた一條二條の道を最も近い停車場へと運送車で搬出するやうになつてゐた。車力の唄ふ聲は谷から谷へと反響して聞えた。

で、この黑川の谷は、無人の境を五六里も流れて、伊那の高遠に落ちる三峰川に注いでゐるが、更にこの三峰川を溯つて、市の瀨から鹿鹽、それから大河原へと行く路がついてゐる。倶に南アルプスの西部の大きな溪谷乃至山巒の間である。ところが面白いことには、この大河原には、南朝の宗良親王が長い間隱れて居られた跡がある。遠江に居られず、この山の中に親王は長い間蟄伏して『われを世にありやと問はば信濃なるいなと答へよ峰の松風』などといふ歌を殘して居られる。親王は甲斐の白須あたりから、釜無の谷乃至富士見の裏の御在所峠を越えて、この萬山の中の路を大河原へと、又は大河原から關東地方へと往復されたかも知れなかつた。それに大河原からは、青崩峠を越えて、親王の最初の根據地である遠江の井伊谷の方へも行かれた。さう思ふとこの山の熊笹の路も非常になつかしく私には思はれた。

この黑川の谷の途中から、高遠の方へ下りて行く路も面白かつた。そこのある位置からは、伊那平を流るゝ天龍川の大きな流れが、さながら天の川か何ぞのやうに遠く眺められた。谷はいつともなく深く

は先年山岳會の人達のやつた横斷では滿足することが出來なかつたのである。そしてかれはその深山の中にさびしくその屍を横へた。

三〇

この南アルプスの深い峽谷の中を私は一度歩いたことがあつた。それは鋸岳、駒ケ岳、奥千丈の西面の谷で、黑川の流れてゐるところであるが、密林が深く續いて、いかにも深い山の中であるといふ氣がした。高知は海拔千五百米突、山から山へとぐるぐる廻つて越えて行くやうなところで、入笠の裏を通つたり、釜無の傍を掠めたりして行くやうになつてゐた。途中に製板所があるので、そこまでは運送車の通る路が大きく開けてゐるが、それを通り越すと、全く無人の境で、深い樅の密林の中を、谷の水の音のみを便りに、熊笹をわけて通つて行かなければならなかつた。駒鳥が、キ、キ、キと頻りに鳴いた。日光あたりで聞くと、この駒鳥は非常に優長な鳥である。また籠に飼はれてやさしく人に馴れてゐる鳥である。しかし其處では、決してさういふやさしい感じを人に與へなかつた。非常にキ――――キであつた。またその鳴聲が非常に早かつた。且つそれが餘りに多いので、終ひには何だか恐ろしいやうな無氣味な氣がした。

この黑川の谷では、岩魚が獲れた。山に深い人達は三日も四日もその山の中に泊つて、小さな澗を遡

くれた奇勝がさぞ澤山にあることであらう。そしてこの一大峰巒が白馬から猶北走にして、大蓮華其他の諸峰を起し、その末梢は日本海に落ちて、例の親不知の嶮をつくり、黑部の四十八瀨を奔跳させてゐるかと思ふと、更に一種何とも言はれない雄大な感に撲たれずにはゐられない。

この連峰は八ヶ岳の裾野の諏訪の山裏から比較的明かに指すことが出來た。や、遠くはあるが、それでも松本平で眺めたよりは、もつと廣く大きな、略その三分の二を望むことが出來た。槍ヶ岳の尖頭もはつきりと見えれば、乘鞍も穗高も常念も見えた。蝶ヶ岳も見えた。針木の鞍部もそれと略想像することが出來た。

南アルプスは、これから比べると、全體の山容を一目に眺めることは難かしかつた。北アルプスのやや一直線なのに比して、南アルプスは山脈が複雜してゐるばかりでなく、その四周にそれを望み得るやうな平野を持つてゐなかつた。東海道の海岸平野、天龍川の流域、乃至甲府盆地からも、唯纔にその一部の山嶺を見るに過ぎなかつた。白嶺、赤石、農鳥山などは、容易にその山容を世間に示さなかつた。その最も人寰に近い駒ヶ岳ですら、中央線の七里岩上から僅にその髣髴を得るばかりで、もう少しはつきり眺めやうとするには、諏訪の山裏か乃至は伊那平まで行かなければならなかつた。

私は昨年富士見高原にゐて、朝な夕なに、釜無の谷を塞いだ鋸岳に對して、この深い南アルプスを思つた。例の落合閣は、この釜無の谷から奥千丈に入つて、この南アルプスを縱斷しようと心懸けた。かれ

是非とも山の絶頂とか、山脈中の一地點とか、又は位置の好い山の鞍部とかに求めなければならなかつた。立山も白山も餘り多くその姿を世間に示す方の山ではなかつた。

二九

北アルプスを望む地點としては、人は多く松本平を説くが、實はそこでは完全にその一大光景を望むことは出來なかつた。それはその前に横はつた丘陵が半ばそれを遮るからで、穗高の見える處では乘鞍が見えず、槍ケ岳の見える處では常念が見えないといふ風である。安曇地方に行つては有明、烏帽子、白馬は見えるが、乘鞍、穗高はや丶左に偏り過ぎたといふ形である。しかし何と言つてもその山容は雄大である。槍ケ岳がぽつんと尖つて聳えてゐるのなぞを見ると、誰でも驚喜の聲を發せずには居られなかつた。ここに冬の雪の閃耀が見事だ。關東平野をめぐる山の雪ほど眼界は廣くはないが、山が高く雪が多いので、いかにも大山脈を望んだといふ氣がする。ヒマラヤの千古の雪なぞが想像されて來る。

私は實は北アルプスに就いて多くの知識を持つてゐない。しかし想像しただけでも、行つて見たくならずには居られない。深い密林の中をわけて行く白骨温泉、槍ケ岳の尖頭を望みながら段々と入つて行く深い山路、例のさらさら越の稱ある針木峠、無人の境を、絶壁の間を凄まじい渓湍をつくつて二十餘里も流れて行く黒部の峽谷、白馬の大雪渓、今では大分世間に知られてゐるけれども、それでもまだか

きな山だが、これに比べるこ、萬山の中にあるがために、餘り普通の街道からは見えない。餘程近く入つて行かなければその噴煙を見ることが出來ない。しかし、これを日向の方面から見るこ、そのラバの及んでゐる裾野は非常に雄大である。霧島も矢張周圍から仰ぐこいふよりは、その頂上乃至半腹から薩摩大隅の錦江灣を望んだ眺望の方がすぐれてゐた。陸奥の岩木山の位置の好いことは既に前に說いた。岩手山は大きい割合に周圍から望むには餘り適してゐない。これこ言ふのも、その聳えた平野がさう大して廣くないからである。淺間は上州の方から見るこ非常に大きいが、一度信州に入るこ、非常に小さく低くなつて了ふ。これに比べるこ八ヶ嶽は矢張信州の山でなくて甲州の山こいふ氣はするけれども、それでも信州に入つても、淺間ほど低く小さくなつて了はない。これこ言ふのも、その山裏の裾野が大きく廣いからである。越後の妙高も直江津あたりから見るこ、非常に大きい。

赤城山はこれ等の山に比較してはよほど低いが、それでも名の聞えてゐるのは、矢張富士に似てその周圍がひらけてゐるからである。薩摩の櫻島山や、筑波や、讃岐の飯野山なども矢張さうである。

これ等の山岳に比べるこ、日本アルプスの持つた雄大は、全く隱れた雄大であつて、普通では、その全景を一目に見るやうな地點は何處にも求めることが出來ない。松本平乃至安曇平野から見ただけでは、屛風のやうなその連嶂の中に、乘鞍なり槍ヶ岳なり穗高なり白馬なりが見えるだけで、獨立した山こいふ感は何處からも得ることが出來なかつた。それを、その大山脈を一眸の中に集めやうこするには、

句があるが、その黄昏の薄の上に、富士はその落日に彩られた姿をさながら絵のやうにあらはして聳えた。

二八

富士に比較して、日本での山のことを言つて見るのも興味がある。裾の大きいのは概して名山の資があると言つて好いが、富士に次で大きいのは、北海道のマツカリヌプリ、伯耆の大山、肥前の温泉岳、肥後の阿蘇山、陸奥の岩木山、陸中の岩手山などである。稍下つては、上野の赤城山も裾が大きい。信州の八ケ岳、越後の妙高なども裾野が廣いのできこえてゐる。

しかしかうした裾野の大きい山にも、おのづから位置といふものがあつて、それに由つて眺望の廣くきく山ときかぬ山とがある。マツカリヌプリや大山や温泉岳などは非常に好い位置を占めてゐる。富士に次ぐと言つても好い位の位置である。大山を持つた明媚な海と湖水とは、或は東海の風光に勝るとも劣ることはないと思つてゐる。島根半島の山の上から見た三面に海を持ち一面に湖水を持つた眺望ときては日本にも滅多ない好眺望の一つである。温泉岳も彼方此方からよく見えた。有明の海や或は右にし、或は左にして聳えてゐる形は、いかにも「雲仙岳」である。中でも長洲の海岸から、三角行の汽車の窓から、又は口の津行の汽船の甲板の上から見た形は、何とも言へないほど見事だ。阿蘇は非常に外輪の大

富士が……』かう言つて、都會の人達はあくがれるやうにして到る處からそれを眺めた。駿河臺、駿河町、富士見町、さうした名稱は、總て昔の人達が矢張この富士にあくがれた形を示してゐるのであつた。德川家康が初めて此處に覇府を開いた時なぞには、殊にこの富士の晴雪が英雄の心に染み渡つて感じられたに相違ないと私は思ふ。太田道灌はこれを靜勝軒の軒に仰いだ。

『山は皆な夜になりゆく大空に富士が根のみぞ暮れ殘りける』ある年の冬、私は信越線の厳附近でかう詠んだが、關東平野の處々から見た富士も亦美しかつた。東京の郊外では、大抵箱根足柄を前景にしてゐるが、それから西北に進むに從つて、丹澤山塊から多摩山群、次第に秩父山塊をその前に帶びるやうになつて行つた。中川の河口から見た富士は東京の百萬甍を帶びた形に於てすぐれ、稻毛の海岸から見た富士は、盤のごとき海と無數の白帆とを持つたさまに於てすぐれてゐた。多摩の横山の上では、形は小さいが、前に淸淺晶玉の一水を帶にし、附近往昔の武藏野の名殘の林や草原を持つてゐるのが好かつた。

武藏野の跡を、今の東上、武藏野兩線の馳走する附近に探る人達は、をりをり思ひもかけず、その紫紺色に染つた美しい夕暮の富士を、林の外又は田舍の垣の緣、又は蚊遣火に包まれた一村の上に發見するであらう。黃熟した麥の畑、又は甘藷の畑、林に沿つた草原路の上に遙にそれを發見して思はず驚喜の聲を發するであらう。秋は郊外は野趣に富んでゐた。『山は暮れて野は黃昏の薄かな』かうした蕪村の

れませんよ。」かう歸去來莊の主人は私に言つた。

二七

武藏野の背景も矢張富士で彩られてゐる。繪にもさうした種類のものが澤山にある。尾花の末に描かれた富士、近頃になつては、ニコライの高塔やガスタンクや十二階などがその前景として役立つた。それにつけても昔の武藏野のさまが思出される。皇居の丘陵に平川天神社があつて、日比谷の岸に波が打寄せ、白金臺に添つてさびしい漁村が連つて横はつてゐた時分のさまが。又た世田ケ谷から來た往昔の奥羽街道が、麹町を通つて半藏門をぬけてずつと海岸へと出て行つてゐた頃のことが。乃至は更科日記にある竹芝の浦時分のさびしい光景が……。其時分にも旅客は矢張荒涼とした武藏野の末に、白く雪に輝いた富士を仰いで旅をして行つたのであつた。

富士は今でも東京の帝王である。東京の何處からも富士を取去ることは出來ない。街頭の富士の晴雪は、一日の忙しい勤めに勞れた都會の人達の頭に新しい自由と慰藉とを與へるばかりではなかつた。富士は實際其處からも此處からも見えた。煤煙の暗く巴渦を卷いてゐる中からも、だらだらと反對に向つて下りて行く坂の半腹からも、若い娘達の浴衣姿で涼んでゐる夕暮の屋敷町からも、モウターボオトの往來する川沿ひの高樓の欄干からも、又は電車の輕快に走るアスハルトを敷いた街路からも……。「あ、

それに、この線が日本の脊梁山脈の南灣北灣の接觸點になつてゐる形が面白かつた。で、日野春、小淵澤附近に行くと、今まで小さかつた富士が、次第にそのまことの高さと立派さとを示して南灣北灣の巨峰の中にも矢張帝王として群を拔いて聳えてゐるのを眺め得るやうになる。私は曾て小淵澤で落日の富士を見たことがあつたが、その時の壯觀は今だに私の眼の前にあつた。私は汽車の窓から顏を離さなかつた。

しかし、この小淵澤の落日の富士よりも、更に壯觀なのは、富士見高原の歸去來莊の前から眺めた眺望であつた。歸去來莊は小川平吉氏の別莊だが、その二階から見ると、南灣の鋸岳、駒ヶ岳を右にし、北灣の八ヶ岳を左にし、やゝ右に偏つて、秀麗な富士は惜しげもなくその姿をあらはして見せた。御阪、十二岳の連峰をその前景にして……。

それに、それを眺める高原の位置が好かつた。そこには白樺の林があり、瀟洒な松林があり、此處等でなければ見られないやうな山村が山の半腹の處々にあつたりした。綮無の谷を塞ぐやうにした鋸岳からは、雲煙が常に湧き上つた。

こゝを去つて諏訪湖の岸、更に鹽尻峠の上、これも富士を眺める名所にはなつてゐるけれども、とてもこれを富士見高原の眺望に比することは出來なかつた。私は海では三浦半島の長井附近、山では富士見高原が富士を眺めるのには最もすぐれたところであらうと思ふ。一月の夜に見た富士なんか何とも言は

二六

富士の背面にもすぐれた眺望の位置が澤山にあつた。山中湖、河口湖、西湖、精進湖、すべて富士の美しい姿をその滑らかな鏡面に映した。中では河口湖の北方が一番雄大な感じを人に與へた。

御阪峠の上も、富士を見るには屈竟なところである。これは、河口湖畔で見たものを更に大きく廣くしたもので、黑嶽、十二岳などの左に連亙した形が、更に一層の色彩を添へた。それに西湖から森林帶を拔けて、精進に行つて、山容をその湖畔に回顧した形もすぐれてゐた。

しかし一度甲府盆地に入ると、四周を取卷いた山嶺や丘陵に遮られて、富士はその姿の半をすらあらはさなくなつた。そこでは何處から見ても富士は小さかつた。「さうかね、あれが富士かね、小さいね。」かう言はずには居られなかつた。甲府盆地の帝王は富士ではなくて、八ケ嶽であつた。

けれど一度汽車が甲府盆地を離れて、八ケ岳の大裾野と相連接した七里岩上の高原に行くと、感じは丸で違つて來る。嵐氣が非常に多くなる。雲煙が頻りに發涌する。林は林につゞき、草山は草山につゞき、左右に須玉と釜無の大きな谷の開けたのを見るやうになる。八ケ岳がいかにも見事である。それに、釜無の峽谷の西部は、日本の南アルプスの連亙してゐる地區に當つてゐるので、山も高ければ渓谷も深く、駒ケ岳は容易に其姿を人に示さない。

少し手前の處にある潮見阪の觀音だが、そこからは、濱名湖の北東部を繞つた丘陵の上に富士が小さくあらはれてゐるのが見えた。足利義敎は此處で、「今ぞけふ願ひ滿ちぬる潮見阪心ひかれし富士をながめて」こいふ歌を詠んだ。

それに關聯して、古來東海道を通つて行つた歷史上の人達の事蹟が考へられるのも自然の順序である。菊川の里に斬られた南朝の忠臣も、例の東下りの跡を處々に殘した業平朝臣も、竹下の一戰で敗れて退いた義貞も、信長も、信玄も、秀吉も、家康も皆この道を通つて、東海の富士を仰いでそして鎌倉乃至小田原へこ志して行つたのであつた。西行に富士見西行の目あるのも、面白かつた。

長く海中に突出して、內に風光明媚な衣ケ浦を包んだ渥美半島では、伊良湖岬の東一里にある越戶の大山の上から鮮かに富士の姿が眺められた。それは丁度海を越した志摩の日和山から眺めたのこ同じ形であるが、さうした絕海の畔に、思ひもかけずその端麗な姿を髣髴し得たのは、何こも言はれずなつかしかつた。

古來幾多の英雄、幾多の美女が、或は憂ひ、或は嘆き、或は樂み、或は喜びつゝこの富士を眺めて通つて行つたのを思ふこ、私は『時』こ『歷史』こを前にして屹然こして高く雲表に聳えてゐる山の姿に憧れずには居られなかつた。夥しい變遷だ。今は飛行機がその半腹の空を凄じく鳴つて掠め通つて行つた。

その起點の日本橋の背景が既にその白扇で塗られてある。川崎の手前の六鄕の渡船あたりにも相模丘陵を前にして高く聳えてゐる。しかし富士の姿と始めて旅客の相對してゐるのは、程ケ谷の先の科野坂の上の茶屋であつた。當年の旅客は、日毎にその姿の近くなつて行くのを樂しみにしつゝ草鞋脚半で歩いて行つたのであつた。

箱根の山中で見た富士は、種々に形が變つて描かれてあつた。時には籠と雲助の毛脛とを添景にして書き、時には關所と槍とを前に置いて書き、又は湖水と相映對させて書き、武士と挾箱とを取り合せて書いた。三島から沼津、薩陀の峠の上は、殊にその中心で、昔の旅客は皆な笠を傾けたり首を廻らしたりしてそれを仰いだ。蜀山人は、その峠の上の茶屋で、「山の神さつた峠の風景は三行半に書けど盡きせじ」などと洒落のめしてゐた。

しかし興津以西は、今までとは反對に、次第に遠く小さくなつて行く富士が描かれた。實際今通つて見ても、蒲原のトンネルを向うに拔けると、もう富士との緣が遠くなつて行くのを感ずる。私達の靜岡、島田あたりで見た富士はもう餘程小さい。富士川以西の丘陵にその半は遮られてゐる。それでも大井川の蓮臺渡しには矢張その背景に富士が書いてあつた。

上方から江戸に向つて來るものも矢張この富士を眺めることを樂しみにして歩いて來たに相違なかつた。西から來て最初に富士を眺める地點として著名なのは、これから濱名湖畔の新居に行かうとする

次第にその大きさと美しさを增した。茅ケ崎、江の島あたりよりは逗子が美しく、逗子よりは更に三浦半島の長井の海岸あたりが美しかつた。それに海中にある大島の噴烟が更にその色彩を濃かにした。

私はかつて能登の小木港から、立山の連峰とその奧に連つてゐる日本アルプスの連亙とを見たことがある。その眺望の雄大な形はちよつと三浦半島の絶端から富士を眺めた形に似てゐたが、立山を持つた富山灣よりは流石に富士を持つた相模灘の方がすぐれてゐるのを感ぜずには居られなかつた。そしてこの相模灘と富山灣とが、偶然にも表日本と裏日本との最も水深の深い海を代表してゐるのも面白かつた。

この三浦半島を越して、更に房總半島に行くと、その眺めは餘程小さく狹く遠くなつてゐるけれども、それでも猶ほ富士を眺める位置として世に知られてゐるところが到るところにあつた。鹿野山の頂上、鋸山の頂上、殊に那古の觀音堂から見た眺望は、昔から人口に膾炙してゐた。洲の崎の絶端からは三浦半島の低い丘陵が白茶色の徙崖と劍ケ岬の燈臺とを前景にして、さながら、その上に富士の雄姿を擁してゐるやうに眺められた。

二五

昔の五十三次の道中双六や、廣重の繪や、其他の繪卷などにあらはれてゐる富士の姿も面白かつた。

駿河の海岸では、龍華寺が一番好いと言はれてゐる。蒲原のトンネルの前で見た眺望と比べて、三保の松原が入つてゐるだけそれだけ風景が複雜してゐるのである。しかし此方側よりも向う側の伊豆の西海岸から見た方がもつとすぐれてはゐないだらうか。靜浦、戸田、土肥あたりの海岸から見た富士は、後に高い山を帶びてゐるために起る空翠の氣に富んでゐて、光線の具合も複雜してゐるし、海の彎曲した又は松の林立した前景にも、色彩が濃やかであるやうに私には思はれた。沼津から松崎に行く汽船の甲板の上も、富士を眺めるにはすぐれた位置の一つであつた。

駿河、伊豆の海岸に比べて、相模の海岸の思ひ切つて一直線であるのも面白かつた。その海岸はすべてその背景を富士の姿で塗つてゐるが、其處には國府津の蜜柑の出來る山畠があり、雜沓した大磯の別天地があり、肺病にやつれた若い娘のゐる平塚、茅ケ崎があり、烏帽子岩があり、砥上の原の古戰場があり、日蓮の御難の址があり、義經の腰越狀の滿福寺があり、江の島があり、鎌倉の覇府の址があり、『不如歸』の浪子不動があり、更に南に延びて三浦一族の盛衰の跡があつて、昔の人達も今の人達も皆同じやうにして、この富士の端麗な姿を仰いだのであつた。烏帽子直垂と被衣と涼傘と麥稈帽子の違ひはあるけれども……。

この海岸で見た富士は、箱根足柄の連嶺を前景にし、天城山群をその左翼とし、丹澤山塊をその右翼として、いかにもすぐれた帝王の貴たる威容をあたりに示した。そしてそのシインは愈南するに從つて

がさして、一帆の危く欹つてゐるのが見えたりした。隱れては見え、見えてはまた隱れる富士は、時にはその髻を見せ、時にはその肩を見せ、時にはその半腹を見せた。左に連つた伊豆半島は晴れて、達磨火山群から天城火山群へと靡き渡つた山嶺の半ば日に照らされてゐるのが指さゝれた。十國峠の上の廣告柱が全く雪に埋もれてゐるのも私に『詩』を思はせた。私は山の背のやうなところを通つてさびしく箱根の方へと歩いて行つた。薄が日に照り、白雲が空に流れる秋晴の日を想像しながら、又は外國人などの籠に乘つて萱原の中を通つて行く光景を頭に描きながら……。

鞍懸の裾から細い路を下りると、箱根の蘆の湖――雪に埋もれたさびしい湖水がさながら蜃氣樓か何かのやうに見え出して來た。さびしい山上の冬の湖水、雪のみ降り頻る中にわびしく横はつてゐる往昔の驛、住民は多くは戶を閉し窓を蔽つて、中からはをり〳〵内職の挽物細工の轆轤の音が聞えるばかり、夏の賑やかな面影は何處にも見出すことが出來なかつた。雪は猶降り頻つた。駒ケ嶽も神山も見えなかつた。元箱根から蘆の湯に來た時には、私の蝙蝠傘は拂つても拂つても雪で埋められさうになつた。『まア、この雪に……熱海からですか、それは大變だ。』かう言つて其處の浴舍の人達は私を迎へて呉れた。

二四

神山、駒ケ嶽、二子山、すべてその頂上からは富士がよく見えた。

なり深い密林が靡き下つてゐて、その向うに蘆の湖の碧い鮮かな一端が見えてゐたが、其上に半腹に白い雲を靡かせて富士が其端麗な姿を十分に現はして見せてゐる。いかにも靜かである。水に映つた倒影が影そのものとは思はれない位に靜かである。その靜けさを破つて、郭公と鶯とは互に好い聲をして鳴いた。

姥子の溫泉は、この密林の中に位置してゐるが、その浴舍の緣側からも、林と湖水とを越して矢張その姿が仰がれた。蘆の湖の倒さ富士は、蘆の湯から元箱根に行く途中の眺望が一番多く世間に知られてゐるが――繪葉書なども其處から撮つたのが一番多いが、其處よりも姥子の方が密林を前景にしてゐるだけそれだけ嵐氣に富んでゐて好いと私は思つた。

乙女峠から見た富士は美は美だが、それは高原のひらけた感じで、御殿場あたりで見た形と同じく、あたりが餘りに淺露である。雄大はあるが、幽邃はない。それに比べると、姥子附近はいかにも山の中から見たといふ好い感じがする。影が多い。色彩が多い。

それから鞍懸の裾から十國峠に行く間も、富士を眺めるには好いところであつた。私は秋の晴れた日と、冬の風雪の烈しい日とにそこを通つた。秋晴の時の好かつたことは言ふを待たないが、風雪の中からをり〳〵その片鱗を見せる富士の姿は、殊に忘れられないもの丶一つであつた。その日は私は熱海から上つた。ひどくならなければ好いと思つた雪は往々降り頻つて風さへ烈しく出て來た。私は蝙蝠傘をさして步くことすら出來なかつた。その袴山風に蓬々として雲の動くことは早くをり〳〵海上の初島に日

甲斐の桂川の谷の大月の手前あたりで見た姿である。それは萬山の中に埋却して、僅にその髻をその上にあらはした形である。中でも私の忘れることの出來ないのは、ある冬の曉に、鰍澤の河舟を殘月を帶びて出發したが、丁度切石あたりに行つて夜が明けた。舟の苫の上には眞白に朔霜が置いてゐる。瀨に逢ふ每に瓜の皮のやうな舟は掀翻して、寒い冴えた水烟がばつと颺る。山際には、既にオレンジ色の黎明の光が遍く行き渡つて、舟の下る每に一つ一つ山の姿があれはれて來た。ふとそこに、その亂山の中に、白雪に埋もれた富士が東海の最初の曙光を受けて薄紅色にかゞやいてゐるのが仰がれた。私ばかりではなかつた。船中の人は皆驚喜の聲を擧げた。

南朝の宗良親王の歌に、『北になし南になして今日いくかふじのふもとをめぐり來ぬらん』といふのがある。これなども私の心を惹いた。親王は遠江の井伊谷の城を落ちて、駿河で常陸から來た興良親王に會つたが、そこにもゐられずに、浮島ヶ原から富士の裾野をめぐつて、割石峠の路か、でなければ富士の東の路を通つて、甲斐から信濃の大川原へと落ちて行かれたのであつた。親王は矢張この富士を表から裏から眺めてそして甲斐の釜無の谷に入つて行かれた。

二三

箱根の山の中で見た富士では、大湧谷の少し先きの閻魔ヶ臺で望んだ形が私には忘れかねた。前にはか

もつと遠くからその端麗な姿は眺められた。流石に名山だ。流石に東海の名山だ。かう私は思はずには居られなかつた。

富士は山そのものとしては決して面白い山ではない。暑い思ひをしたり汚い石室の蒲團にくるまつたりして、わざ〳〵登つて行つて見たところで別に心を惹くところもないやうな山である。裾野にはそれでもすぐれたシーンがあるが、森林帶などは、日本アルプスや日光あたりに比ぶべくもないほど淺露である。七八合目以上は唯岩石磊々たるばかりである。眺望も唯單調な雲の海を眺めるばかりである。頂上の日出などでも世間的の好奇心を惹くのに留る。日本アルプスの諸峰で見たやうな山體起伏のさまや雲煙奎涌の光景はとても其處では見ることは出來ない。ある人が東海の富士を評して、『大きいと言へば大きいが、小さいと思へば、盆景のやうに小さい。』かう言つたが、つまり形のあまり整正端麗にすぎたために生じて來た弱點である。

しかしさう言はれても、富士は決してその大を失はない。またその名山たる資格を失はない。富士は背景又は前景として、實に無限の美しいシインを到る處に展げてゐる。富士はその周圍にあらゆるものを持つてゐる。山、海、湖水、平野、都會、河川、すべて天然の持つたあらゆるものを持つてゐる。富士は到る處から見えた。大都會の煤煙の中から、又は絶海の孤島から、又は埋れ果てた萬山の中の峠から……。

志摩の鳥羽の日和山の上から遠矚した山容などは、中でも一番遠い富士であつた。又一番小さい富士は、

きり見えて、そこから眞直に下りて行つて見たくなる。この間直徑七八里、小利根を渡り、大利根を渡り、岩井を經て、その西麓の一驛、下妻の方へと出て行かれたが、ある歴史家の說に從つて、岩井の平親王の址を探るのも、興味が饒かつた。大寶の古城址と結城との間を歩くと、北畠親房と結城との關係などが思はれた。それに、この附近では、旨い梨が夏は澤山に出來た。これから北して、水戸線に行つて、關東平野の中で最も酌婦や小料理屋の多い笠間、眞壁の方へ行つて見るのも好い。

鬼怒と小貝、この二つの川の相違も特記すべきものだ。同じ地域を流れてゐながら、この二川は全く趣を異にしてゐた。鬼怒の何處までも石川であるのに反して、小貝はいくら溯つて行つても、どんよりと靜かに深く湛へて、そして緩く流れてゐる。岸に咲いた合歡の花などを靜かに水に映してゐる。それは眞岡、もつと先の下野の鹽谷郡から出て來て、最初から平野に生れ平野に生長し、そして矢張平野の大動脈を成してゐる利根川に落ちてゐるが、日本では澤山ないめづらしい平野の川である。そしてそれが最後まで上流の烈しさと若さとも失はない鬼怒の激流と相並行して長く流れてゐるのは面白いではないか。

二三

筑波の位置を大きくしたのが富士だ。波筑は關東平野の筑波だが、富士はもう決して關東平野の富士ではない。富士の姿の髣髴せらるゝ地域は非常に廣い。富士見十三州の古圖があるが、十三州どころか、

つゞ北して、南朝の悲劇の址を示した大寶城址と大寶沼、概して此間は鬼怒と小貝との二川の灌域で、朝に夕に筑波の翠色と相對することが出來た。

長塚節氏の『土』はこの附近を題材にしたものだが、いかにも鬼怒川畔のカラアがよく出てゐて、其處に住む農民の生活を思はしむるに十分だ。それにこの筑波の周圍は、上古から歷史にも見えてゐるところで、萬葉あたりにもそれを詠んだ歌が非常に多い。例のかがひの庭や、日本武尊の『新治、筑波』を想像して見るのも興味がある。昔の常陸の國府は、その東側の石岡附近にあつたが、概してこの四周は昔から早く開けたところだ。標高は低いが、平野の間に特立した筑波の秀姿は、連山重疊した山嶺などよりも早くから旅客の興味を惹いたものと見える。實際關東平野では、筑波は特記すべき山である。その翠黛は到る處から見えた。都會の煤煙の中からも見えれば、帆影の重なり合つた川からも見えた。田舍の垣の外れ、塵埃の白く颺る街道、川添の旅舍の窓、或は連山の平野に盡きたその先に、さながら孤島か何かのやうに美しく浮んで見渡されたりした。

晴れた日に山頂から眺めた東京市の煤煙は、平野の外れの何處の山頂から見たものよりも、もつとはつきりと指さゝれた。それに其處からは富士が實によく見えた。宗長は、「富士は筑波の山の上から眺めたのが一番好い。」と言つてゐるが、實際さうした昔の人達の觀察も面白いと私は思つた。

淺草業平を起點とした東武線の汽車で行くと、粕壁あたりが最も近く、山の襞に夕日の當るのもはつ

いくらか雲があつて、をり〳〵日光がそこから洩れて來るといふやうな空は、いかにもこの錆びた沼に對照よくひろ〴〵とひろげられて映つた。『かうして見るとさびしいところでせう。都會が近くにあるなどとは思へませんね。』かうＩ君は言つた。藻の水中に動くにつれて、光線が輕く動いた。周圍の丘や森の蔭もさびしくひろく沼の水の面にその影を落した。

『あれが、吉高城址です。』かう言つてＩ君は右の丘の森の上に松が面白く高く聳えてゐるのを指して見せた。

舟の持主は、鯔だの蝦だの水鳥だのゝ獵について話した。鰻は中でもこの沼の最もすぐれた特產物であるといふことであつた。沼の中心近く來た時、彼はそこに立てゝある細い竿につけてある丸いうけを水の中から引上げて見せた。

『や、何にも入つてゐない。背黑一つしきや入つてゐない。』

かう言つて、それを私達に見せた。背黑といふのは、この沼でとれる小さな魚の一種であつた。

二

筑波の西麓を駛つてゐる軌道は、つい昨年あたりから出來たものだが、この沿線には二三面白いところがあつた。例の平親王將門の僞府の址のある守谷、鬼怒川の昔の河口である水海道の古驛、それからず

都會の忙しい生活から離れたやうな氣がした。

『好いね、靜かで……』かう私は何遍となく言つた。

午すぎ舟の支度が出來たと言ふので、私達はござや茶道具や座蒲團などを持つて出かけた。農夫でそしてその餘暇に漁をやるといふ若い男が私達の前に立つた。

青々とした水田の中のあぜ路、それを傳つて私達は次第に堤防の土手の方へと行つた。果して土手の上からは、さびしい廣沼が一目に見わたされた。衰へた錆びた水の色であつた。

『何うも、渴水で、舟はあそこまでしか入らないんです。』

こんなことを言つて、舟の持主は、土手を猶ほしばし行つて、閘門のある少し手前のところから草の茂つた中を下りて、水あほひの綠葉や、藺や、眞菰や、川楊などの靡く間を一歩一歩沼の方へと近づいて行つた。上からをり〳〵日は暑く照つた。

置いてあるところから、舟を沼に浮べるについても、我々は一方ならぬ努力を要した。淺瀨に膠した小舟は押しても押しても容易に出なかつた。舟の持主は後には裸になつて力を盡して押した。

やがて出て行つた沼の水底は、深い藻で一杯に蔽はれてゐるのを私は目にした。棹も艪も自由には使へないほどに……。

遠くの葦原では、剖葦の頻りに鳴いてゐるのがきこえた。

りとは見えなかつたけれども、いかにも沼らしい氣分がそれと指點されてゐるやうな處であつた。

I君は其處で相思の仲であつた垂死の病妻を看護してゐた。『ふるさとの墓となるべく歸り來し妹を悲しと思はずや君』かうした歌を私がよむほどそれほどI君の細君の病は重かつた。

同棲して五年經つてからその病にかゝつた細君のために、I君は或は鎌倉に、或は逗子に三年乃至五年の月日をすごした。しかし今はそこにも倦んだ。病も竟に癒えなかつた。『いつそ故鄕の方へ……』かう細君が言ふので、I君は昨年この沼のほとりの舊い家にその垂死の病妻を伴れて來た。まだ年若くして美しい細君の病んでゐるさまは、私の心を悲しませずには置かなかつた。

『コ、コ、コ、コ、コ、……』といふ聲が水田の中でした。

『水鷄だね。』

『え。』

『好いな。』かう言つて私は其方の方を見た。水鷄は頻りに鳴いた。

『始終鳴いてゐるんですか。』

『まア、田舍にゐてはあゝいふものがせめてもの伴侶になりますよ。』

『さうだね。』

新鮮な野菜、かをりの高い胡瓜揉み、さいの洗ひ、さういふもので午飯をすませた私は、何年振かで

が沼でも昔から一番好いと言はれてゐるところだけあつて、蘆荻のしげり、眞菰のなびき、川楊の毿々としてゐるさまは、いかにも古いさびしい水郷らしい感じに富んでゐるのを私に思はせた。そこには今でも沼の主と言はれる蛇が住んでゐて、現に去年もそれが雉子を咬へたまゝ長い首を擧げて麥畠の中を通つて行くのを見たものがあつたさうだが、成るほどさうしたものがひよつくりあらはれて來はしないかと思はれるほど、それほどあたりは水草や眞菰や草藪に滿たされてあつた。私はツルゲネフの『獵人日記』の中にあるロシアのさびしい沼などを思ひ出した。

それに、沼を繞るその丘陵地が大抵針葉林、殊に松の林を以て蔽はれてゐるさまが一層あたりを繪のやうにした。路の折れ曲つた具合によつて、をりをり思ひもかけないあたりに沼の錆びた水光を發見するさまも面白かつた。

二〇

私はI君の家に一夜泊つた。

それはその桑地から沼の岸に下りたやうなところ寧ろ沼の年々水田になつて行くところにあるやうな舊い農家で、I君はその離座敷の一間を書齋にしてゐたが、そこからは、低い垣根を越し、周圍を取卷いた青々とした水田を越し、その向うにぐるりと長くつゞいてゐる堤防を越して、水光はそれとはつき

に入込んでたものであつた。今でも私は、昔海中の無數の島であつたと想像される獨立した丘陵を、その附近の到る處で發見することが出來た。

そこは佐倉の方からも行くことが出來、利根川沿岸の成田線からも入つて行くことが出來たが、またその一部は、松崎の停車場附近から微かにそれと指すことが出來たが、いかにも錆び果てた太古の沼であるといふ形が私を一種の感じに撲たれしめた。日本にも沼は多いけれども、その他に何處にかうしたさびしい沼を發見するであらうか。陸奥の小川原沼がやゝこれに似てさびしいけれども、それとて決してこれほどさびしく且つ侘しくはなかつた。

周圍十七里といへば、かなりに大きい沼である。しかも、利根川に接した方面の廣沼がやゝひろいだけで、水神渡以西は幅が次第に狹く、沼と言ふよりは、寧ろ泥川の靜に横つてゐるのに似てゐた。廣沼の錆びた水の面にはさびしい空が太古そのまゝの姿を以て映つてゐるのを私は見た。

それをめぐつた丘陵地、即ち前に言つた兩總山地の特色なる複雜した山の連亙、谷あり村落あり松林ありと言つたやうな地形は、沼に一種獨得なカラアを與へるに十分であつた。その臺地のところどころから、そのさびしい錆色をした沼はあらはれて見えた。吉高の古城址のあるあたり、松蟲祠のあるあたり、ここに、瀬井の大川岸の上の臺地から沼を眺めたさまはいかにも見事であつた。

平賀にある花島山は、今は樹が繁つて、沼を眺めるには餘りに適しなくなつたが、それでもその附近

一九

兩總の山地は、一種めづらしい特色を持つてゐた。丘陵と言つても極めて低く、大抵五十乃至七八十米を出でない山ばかりで、それが犬牙錯綜して、時には小さな谷をつくり、時には高原らしい氣分を漲へ、しかも針葉樹の密林が深く茂つて、東京近くにこんなさびしいところがあるかと思はれるほどそれほど世間離れがしてゐる。そしてその複雑した丘陵の中に、村落が處々に點綴されて、古城址があつたり、古祠があつたり、古い太古のまゝのやうな大きな錆沼があつたりした。

佐倉の町、または關東の有名な流行佛である成田の不動や宗吾靈社、または三里塚の御料林、多古の町、昔、平忠常の叛した椿湖の址、さうしたものは、皆なその丘陵の中にあるのであつた。汽車の線は、房總線に於ては、千葉大網間に於てこの山地を横ぎり、總武線に於ては千葉成東線に於てそれを横ぎつてゐるが、汽車の窓から見ただけでも、いかにその地の原始的氣分に富んでゐるかを知ることが出來た。八街驛のあるあたりでは何となく私にロシアのステップを想像させた。

この山地の中に深く長く入り込んでゐる印旛沼は、一種他に見ることの出來ないカラアを持つてゐるのを私は見遁すことが出來なかつた。無論、この沼は利根の殘水湖ではない。霞ケ浦が海であつた時分、または利根川が今の水路を成さない以前にあつては、大きな入江の一部であつて、深く海からこの丘陵地

も既に大河の河口に近づきつゝあるのが感じられた。對岸に一線白く見えるのは、波崎といふ漁村の貝殼の屋根だ。

半は商業都會、半は漁師町といつたやうな氣分の漲つてゐる銚子の町は、大きな醬油屋の店や、郵便電信局や、生魚を藻や繩で下げて步いてゐる人達や、混雜した町の通りや、さういふ間を弓のやうに曲つて通つて、そして飯沼の賑かな觀音堂へと達して行つた。

大河の河口にある町では、私は此處が一番好きだ。新潟も好いが、やゝ大きすぎ開けすぎてゐる。德島は混雜しすぎてゐる。酒田、石の卷は衰へすぎてゐる。從つて此處の持つやうな活躍した空氣の中に殘つてゐる素朴の氣分と言つたやうな複雜味を持つてゐない。此處では私はまだ江戶時代の空氣を嗅ぐことが出來た。江戶商人の純な商賣の氣分を味ふことが出來た。そしてまた一方純粹な漁師町の生活を見ることが出來た。

それに、この町は關東でも屈指なすぐれた海岸をその背後に持つてゐるのであつた。そこにある遊覽軌道は、わけなく旅客をそこに伴れて行つて吳れるが、岬頭の燈臺、松林を越して鳴きわたつて來る波の音、岩の多い沙濱、海中に遠く浮んでゐる海獺島、ここに西明にある海水浴場は、東京附近で、最も人を惹くに足りる凉しさと面白さとを持つてゐて、その松原の上數町のところにある愛宕山の石の祠のある頂上は、この大河の河口と燈臺と三面をめぐる海とをさながらパノラマのやうにして見せた。

一八

木下が昔河港として榮えたのは、こゝから陸路江戸に行く路が近かつたためで、銚子江戸間を往來する旅客は、ぐるりと利根川を船で大廻りをせずに、此處から、八幡、市川の方面へと出て行つた。しかしこの木下の船着も今は衰へた。昔の面影すらも見ることが出來なかつた。

布佐、布川の二つの川添ひの町を聯絡した天地の渡、それから稍下つて川を二條にわけた布釜島、小御門神社、香取神宮、津宮河岸の大華表、こゝあたりに來ると、川は益水鄕の美を發揮して夏の平野の彩色を一層濃かにした。葭雀が鳴き、櫓聲がひびき、河に臨んだ丘陵の深樹に帆影が重なり合つて眺められた。

息栖の祠の華表のある河岸あたりまで來ると、川は益大きく、まことに落々とした趣を見せてゐる。それに一面入江の持つた水國の氣分が到る處に漲つてゐる。そこらで見た水邊の住民の生活、船頭の生活は、他では見ることの出來ないやうな複雜したカアラを持つてゐる。淺處を求めて水泳してゐる子供、岸近く網を下ろしたり釣竿を垂れたりしてゐる舟、船頭の嚊は鐵色の肌も露はに夫を扶けて、頻りに上つて行く大きな船の竿を押した。河岸の並んだ家々は、水脈を立て、流れる水に深くその影を蘸してゐた。

汽車で行くと、松の多い松岸停車場で始めてこの水光に逢ふのであつた。其處は眺が美しい、對岸は常陸の地續きで、その向うには鹿島灘の怒濤の音を聞くことが出來るやうにすら思はれる處である。誰に

くのであつた。頗る時代おくれの交通機關ではあるが、その時代後れが一種の面白い趣味を旅客に與へた。蘆荻に埋れた河岸、土手に添つた町の家並、夕日の中に黑く現はれた半鐘臺、棹を弓のやうに張つて努力して舟を行る船頭、舟の船尾に淡く靡いてゐる夕暮の炊烟、さうした小さな繪は、脚の遲い汽船の動くにつれて一つ一つその前に現れて來た。夜は螢が明滅して、時にはそれが船室の中まで飛んで入つて來た。岸に鳴く蟲の音は、船の中かと思はれるばかりに近く聞えた。この汽船は水量の多少に由つて遲かつたり早かつたりした。水の少い時には汽船はをり〳〵淺瀨に乘り上げて、船員が總がかりで棹でそれを動かさうとしても動かない。止むなく客を一時別の船に移して辛うじてそれを瀨から浮ばせたりした。その時分には、岸には美しい合歡の花が咲き、子供達は銅色した體を川に浮ばせて水泳をした。

下流の銚子に下つて行く方の汽船は、野木崎から、小利根と大利根とを連絡した例の細い運河を通つて、布施から取手へ出て、それから布佐、木下へと行つた。運河の狹い水道は二里ほどで、丁度そこを通る時分に、夏の夜がほのぼのと明け放れるのが例になつてゐた。朝露に濡れた岸の草花は美しかつた。

取手を過ぎると、右岸には丘陵があらはれ出して來た。この丘陵は今は東京人の別莊地として開けたが、この裏に手賀沼の細長い蘆荻の多い、冬は雁鴨などの下りる沼が橫はつてゐる。河はもうすつかり下流の氣分で、人肩を沒するばかりの蘆荻の綠の上に半ば現はれた帆の影は、そこで川の大きく曲つてゐるのを示した。

一七

栗橋あたりに來ると、山はもう遠くなつてゐた。赤城はまだ見えたが、それも眺めるには最早遠すぎた。これから下流は、山は唯筑波の双峰を見るばかりである。

川は次第に下流らしい色彩を多く着けるやうになつた。帆が帆に重なり、櫓聲は櫓聲につゞいた。關宿あたりの朝の川は、夏は殊に爽かである。ぎつしりと帆と檣とで埋つた小さな埠頭、土手の下に低く並んでゐる町の家並、川に臨んだ雁木では、若い上さんが物を洗つてゐるのなどが指さゝれた。ある土手の上には、月見草が一面に黄く朝の露に濡れてゐた。

境は面白い町だ。野木崎の運河の出來ない以前には、東北から長い陸路に艱んで、宇都宮の先きの阿久津から鬼怒川を河船で越して來た旅客は、水海道に來て、それからこの境の行德舟へと便船して、そして小利根を江戸へと下つて入つて行つた。其時分は此處は賑かな色彩に富んだ河港として聞えてゐた。今はもうすつかり變つて了つたけれども、それでも猶ほ昔の面影を語る旅舍や旗亭などがあつた。白粉を塗つた女などもゐた。河岸には蘆荻や蒲が叢生した。

この行德舟の航路を、今はあのペンキ塗の舊式の外輪の汽船が航行した。東京の蠣殼町を起點にして、小利根を溯つて、一つは上流の渡良瀬川の越名河岸まで、一つは下流をずつと銚子の河口まで下つて行

したのであつた。從つて平親王が僞府を猿島に置いた時分には、霞ケ浦ももつと深く内地に入り込んでゐたし、今の利根の流域は、全く入江乃至沮洳地として殘つてゐたのであつた。

前橋あたりでは川はまだ上流の若さと烈しさとを失はないが、妻沼、赤岩あたりに來ると、もう中流は、靜かに淀んで、處々沙洲をつくつて流れてゐた。この附近は、兩岸は荒涼として別に見るものもなく、川は何處か原始的の氣分を持つて流れてゐるが、それでも處々に舟橋があり、河川工事のトロコがあり、兩岸の平野に灌漑する用水の堰の閘門が出來てゐたりして、時には一帆の影が大きな鳥か何かのやうにぼつつり浮んで見えたりした。夏の夕立雲は、四周をめぐる山々から起つて、見るが中に平野の空の半を蔽ひ、珠を聯ねたやうな又は急箭のやうな雨は、慌てゝ船頭の葺いた川舟の苫の上を凄じく打つて行つた。

またある土手の上には、近所の林から伐り出した穉木の粗朶の束ねたのが山のやうに積んで置かれてあつて、船頭はそれを一つ一つ岸に繋いだ船の中へと運び入れた。例の唄にある早瀨を下る柴舟をそのまま此處に見るのであつた。ある處には、大きな鐵橋が虹霓のやうに川を跨いでかゝつてゐて、をりくく汽車が凄じい轟音と黑い煤烟とをあたりに靡かして通つて行つた。時には赤い大きな笠のやうな月が平野の地平線上に輾り上つて、それがきらきらと川水に搖曳した。

一六

利根川では私は前橋の公園の向うを流れる早い瀨と、妻沼、赤岩附近の冬の山の雪の眺めと、栗橋のいなり屋の二階と、關宿の小利根の分岐點と、水海道の少し下の鬼怒川の會點と、布佐布川の二つの町の相對した丘陵と、神崎のあんにやもんにやと、津の宮の大華表と、息栖の河岸と、最後に銚子の愛宕山の上から見た大きな河口とを思ひ出した。

溶々とした大河、實際、日本にはめづらしい大河だ。それに、その流れてゐる處は全くの平野なので、感じがいかにも大きい。風を孕んで上つて來る無數の帆影、その上に白く大きく浮んでゐる夏の雲、濶い地平線を劃つてゐる村落の森、碧い鮮かな空は一路遠くこの溶々とした大河と相映對して、人をして一卷『利根川圖志』の挿畫を思はしめずには置かなかつた。

しかしこの利根川は昔はかう大きくなかつたのである。上野から埼玉の野に入つて、今の元荒川乃至隅田川の水路をその主脈として流れて東京灣に注いだ。從つて栗橋、關宿あたりは全く渡良瀨川の水路で、小利根は實にその本流を成してゐたといふことである。また鬼怒川は鬼怒川で單獨に流れて、江戸崎あたりに行つて霞ケ浦に注いでゐたといふことである。それを德川時代になつてから、その治水策上川を左へ左へと押して、利根、渡良瀨、鬼怒の三つの水を合せて、そしてこれを銚子の海に落すやうに

昔の旅行のさまが歴々と私の眼の前に浮んで見えるやうな氣がした。佐野附近の渡良瀬川の渡津もその時分はかなりに榮えたらしく思はれた。

この都賀山、安蘇山は、鹿沼からも入つて行ければ、栃木からも入つて行けた。佐野から入つて行く路は、秋山川の谷を深く溯つて行くやうな位置で、石灰の出る葛生町があつたり、麻の綠葉の人肩を沒するやうな山畠があつたりした。田沼の近くにある唐澤山は秀鄕の古城址のあつたところで、山は淺いが、眺望は非常に好い。しかし、この奥一里のところに、これよりももつと眺望のすぐれてゐる琴平山がある。琴平の流行祠があつたが今はすたれた。岩舟には天台の古刹があつて、香煙が盛んである。

出流の觀音の窟のある谷は狹い小さな狹谷だが、山襞が深く入り込んでゐるので、嵐氣が深い。窟はちよつと奇觀だ。しかし、これよりも秋山川の谷を溯つて、山傳ひに足尾の方に出て行く間に小さくはあるがかくれた山水が二三あつた。

日光の大谷の谷に添つた大日堂の少し先からこの都賀山に入つて、小來川に出て、古峰ヶ原、尾鑿山などを探つて見るのも面白い旅の一つだ。小來川から出流の方へ出て來るには、草山を越えたり、溪を渉つたりして、かなりに難儀な迷ひ易い路を一日歩かなければならなかつた。

ど、細い狹い谷が幾條もその間に穿たれてあつて、遠くから望んで見ても非常に襞や皺が多い。そしてその平野に落ちやうとする處には、到る處にすぐれた眺望を持つた山轡が聳えてゐた。

この山の起伏は關東平野の到るところから見えた。淺草の十二階の上から、信越線の汽車の中から、北埼玉の野から、利根川の土手の上から、更に最も近くはつきりと見えるのは、東北幹線の小山驛附近からであつた。しかしそこから見えるのは東の一面で、更に全面を見やうとするには、昔の奧羽街道、それもぐつと昔の萬葉時代に旅客の通つた驛遞の道路の線をたどつて見るに越したことはなかつた。其時分の驛遞路は、前橋附近から伊勢崎、境に出て、太田から往昔の佐野の渡しのあつた渡良瀬川を渡つて、安蘇山、都賀山の裾を掠めて、そして下野の室の八島の方へと出て行つたのであつた。僧道鏡の貶せられた藥師寺の趾やその墓の今日猶その附近に殘つてゐるのを見ても、上野の國府から下野の國府へとの路の榮えたさまが想像された。萬葉集にある安蘇山の歌は、皆その時分の旅客がこの山轡に添つて旅行してゐる形をよくあらはしてゐるのである。ことに、一番近く平野に落ちてゐる唐澤山の形が面白い。それは東武線の汽車の館林、佐野間を通る時によく見えるが、それが絶海の孤島のやうな筑波の翠微と相對して、いかにもひろびろとした眺めを成してゐる。そして佐野から出た路は、この山と岩舟、唐澤の山轡の間を通つてずつと下野の國府へと出て行つてゐた。

下野國志に、室の八島の夕暮の炊煙に包まれたさまを描いた挿繪が一枚入つてゐるが、それを見ると、

湖に面した旅舍は、二三年前の火事に燒けて、今は、欄干からすぐ湖水を見ることは出來なくなつたが、それでも猶ほ旅客の眼を樂ませるには十分だ。

湖を渡つて歌ケ濱に行く。其處の觀音堂にある勝道上人手刻の觀音像は今は國寶になつてゐるが頗る見事である。私は多く佛像を見たが、あんな威嚴を持つた觀音像はつひぞ一度も見たことはなかつた。

湖水の朝は殊に好かつた。水の色が好い。嵐氣の深いのが好い。歌ケ濱から、上野島から、乃至は合瀉の岸から見た男體は、殊にその形の端麗なので聞えてゐた。で、舟で菖蒲ケ濱へと渡る。龍頭の瀑、つゞいてさびしい戰場ケ原、そこには草花が多く、夏は一面美しい毛氈を敷いたやうに見えた。そして其奧にはセウパツサンの『Inn』を思はせるやうな、冬は全く深雪に埋もれて了ふ湯本の温泉場があるのであつた。

日光の山の町の灯も私にはなつかしかつた。料理屋の軒近くまで夜霧が深くかゝつて來て、電燈の光が光芒もなくぼんやりと濡れてかゞやいてゐるのを前にして、東京生れの妓が靜かに爪彈か何かで三味線を彈いてゐるさまなどがをり／＼繪になつて私の眼に映つて見えた。

一五

日光火山群の前衞を成したやうな都賀山、安蘇山の山地も面白い。山はさう大きなものではないけれ

色彩を着けて來た。其頃は夏の日の光線にかゞやいた碧い空が、山と谷との上を蔽うて、電車が明るい快い姿を溪畔から山の町の方へと駛らせて行つた。

町は夜は賑やかだ。遊覽の客が浴衣がけでぞろ〳〵と通る。何處の旅舍にも客がぎつしり詰つてゐる。三味線の音が湧くやうに聞える。「日光ちよいと出りや朱塗の御橋、向河原や含滿の……」などと唄つてゐる聲がする。いかにも世界に聞えた遊覽の町だといふ氣がせずには居られない。殊に月のある夜は好い。神橋の上から見ると、大谷の末流は、すつかり金屬か何かのやうに美しくキラキラと輝きわたつて見えた。

電車が馬返まで通じたので、大平まで上つて行く嶮しい舊道は、今は都會の人達に取つて丁度好い山路になつた。かれ等は袒になつたり、尻端折りをしたりして面白がつて登る。女も「はア」などと呼吸をつき〳〵登つて行く。女學生の團體では、「まだ中々てせうかね。」などと言つて立留つて喘いでゐる。中の茶屋から見た谷は頗る好い。やがて不動坂をたり盡すと、大平のさびしい林が來る。山毛欅や榛や白樺の幹の林立してゐるさまも見事である。つゞいて華嚴の休茶屋が來る。すさまじい瀑は儼然として深い谷に向つて瀉下してゐる。

南岸橋の袂に繋いてある白いボオト、鮮かな碧い湖はやがて前に展けて、赤い白い競漕の旗の水面に靡いてゐるのも美しければ、三角の帆を張つたボオトが滑らかに湖上に動いて行くのも繪のやうである。

鮎はない。此處で食ふ鮎は、皆阿久津附近の鬼怒川から持つて來るのである、その代り、岩魚がゐる、かじかがゐる。赤腹がある。中禪寺湖では大きな驚くやうな鱒が獲れた。鱒は自然生ではないが、秋はかなりに旨い。

山に住んでゐる獸は、日光の町ではさう多く口にすることは出來ないが、裏山から鬼怒川の谷の方へ行くと、あらゆるものがある。熊もゐれば山猪もゐる。夏でも何うかすると、熊に山路で襲はれることなどもある。鹿の肉は澤山にあるが、これはしかしさう大して旨くない。猿は山の人は平氣で食ふ。ひえる體などには非常に暖まつて好いと言ふことである。しかし肉はさう旨い方ではない。兎も澤山にゐる。それに栗山蕎麥が有名である。私はあちこちの蕎麥を食つて見たが、この山中の燒畑で獲れたものほど旨く思つたことはない。かをりが非常に高い。その他、栗山の川俣で食つた栗山餅といふうるちの玄米でつくつた餅が旨かつた。造酒家ばかりが知つてゐるひねり餅といふのと同じものだ。

一四

寺坊の多くは、夏は贅澤な避暑の人達の借りる所となつた。ある寺の二階の欄干からは、若々しい孃さん達の笑聲が聞え、ある寺の一間からは玲瓏としたなつかしい琴の音などが洩れた。新婚の若夫婦、侍女をつれたなにがし侯爵夫人、腕を組んで快活に歩いて行く外國人夫妻、町も山もすべて賑やかな派手な

た莞爾した老僧と相對してゐるさまを到る處で見懸けた。

たらの芽はさうした食物の中で殊に美味であるが、それも山深く入ればかなりにある。山蕗は夏の盛りに行つても、もつと遲く秋になつてからでも、柔かな旨いヤツが食はれる。それと言ふのも六月に石楠花が咲き、七月に躑躅が咲くといふやうな深い山の中から採つて來るからである。漆の芽なども旨い。

蕨は十二三年前までは寂光へ行く路、霧降へ行く路、裏見へ行く路などでも澤山に採れたが、だき手に持てなくなる位採れたが、今は開けて、もうさう手近なところにはなくなつた。その時分になると、矢張寺坊にゐる山に精しい婆さんなどが採りに行つてそして賣りに來た。太い見事な、淺い山などでは見ることの出來ないやうな蕨である。さういふ婆さんは、大抵寂光から裏見へ行く山の中、裏見から慈觀瀑の上一里ほどの處へ出かけて行つてそして採つて來るのであつた。霧降瀑の奥の方でも採れた。

鳥はつぐみが早くから食へた。鳥小屋が山の處々にかけてあつて、そこに町の人達はよく一日遊びに出かけたりした。運が好いと隨分澤山に獲れるといふことであつた。その他、鳥の種類はかなりに多い。雉子、山鳥なども町の料理屋の膳にいつも上つた。

茸類では、松茸は早松茸だけである。初茸も山にはない。町に賣りに來るのは、皆もつと下の端山や野山で採れるのを持つて來るのである。千茸は七月頃に旨い。八月すぎると、まひ茸なども出る。栗もだし、榾もだしなども澤山に採れる。椎茸も出る。

時には激し時には淀んで、段々世間に流れ落ちて行く形が面白い。その清い流れはをりをり山百合の白い花や八汐の紅い色を蘸した。

富士見越の峠のところに小屋があつて、そこが物品交換の場所になつてゐたが、今は何うしたか。つまり日光の方から炭とか米とかの日用品を其處に持つて行つて置くと、栗山の方から下駄や細工物の材料を持つて來て、そして人を須ひずに物品だけで交換して行くのであつた。山の中にはまださうした原始の狀態が殘つてゐた。

女峰の劍の峯は、男體の頂上よりもぐつとすぐれた眺望を持つてゐる。そこで見た男體の雄姿はもとより言ふを待たない、波濤の如く起伏した連山に雲の湧き立つたさまは、日本アルプスの深い山の中でも澤山はないやうな大きな眺望であつた。

一三

日光の山の中には種々な自然生の食物がまだ澤山に殘つてゐた。山牛蒡、山獨活、山人參、山蕗、ことに自然薯が旨かつた。秋の十月の末から初冬の頃になると、山の人達は、それを掘つたのを背負籠に負つて、そして町の方へと賣りに來た。寺の坊などではそれを待ちつけて買つた。髮を棕櫚箒のやうにした山の上さんが、『そんなことを言つたつて、中々掘るが難儀だでな……』などと言つて、白い衣を着

細い裏山道が折れ曲つて通じて行つてゐる。瀧の尾の裏から八風を越えて女峰の七瀧に登つて行く路、裏見の荒澤の谷からその岸を縫つて栗山へと通じてゐる富士見越の路、大眞名子、小眞名子の裾を掠めて志津の行者小屋に達する路、戰場ヶ原から山王峠を越して西澤金山に行く路、湯本の奧から狩籠湖の岸に添つて、金田峠を越して、鬼怒川の川俣溫泉に行く路、それ等の路はすべて深い深い森林帶の中を通つて行かなければならなかつた。この道路の中で、七瀧の大きな谷、女峰の劍の峰の眺望、富士見越の途中から遙に遠くその髣髴を認めることの出來る三界瀑、大眞名子の千鳥返しといふ難所のあるあたりの眺望、太郎山の御花畑、金田峠の上から見た連山の起伏などが深く私に印象されて殘つてゐた。男體へは私は表からも裏からも登つた。裏から登つた時は、雨の土砂降りに降る日で、山巓まで行つたには行つたが、深い雲霧で、一間先をも辨ずることが出來ず、禪頂小屋に躊躇んでゐて見ても何うすることも出來ないほど寒いので、急いで下りて來て、志津の小屋で一夜を過した。

この裏山禪頂は、昔は僧侶がよく行をやつたところで、山中到る處に今でも猶その禪頂小屋の殘つてゐるのを見る。私の知つてるだけでも、唐澤、女峰、志津などがある。風雨と年月とに晒されて、ひどくなつてはゐるが、それでもそこで過した一夜は平凡ではなかつた。その附近の熊笹の中には乾度淸い水が湧き出してゐて、そこで米を炊くことが出來た。秋は鹿の聲が月光の搖曳した深い林の中に聞えた。谷々から滴り落ちる水が、或は潺々とした小さい瀬を成し、或は人に知られない無名の瀑布を懸し、

ごすると、箱根もその繁華の半を此處に奪はれるやうにならぬとも限らない。

この二つの山水の谷に比べると、鬼怒川の溪谷は、平凡ではあるが規模は大きい。何方かと言へば、木曾川、多摩川、久慈川の谷に似てゐる。大谷の谷のやうに岸が迫つてゐない。岩石の奇にも乏しい。しかし中岩橋、籠岩を序幕として、それから瀧の湯附近、更に進んで川治の溫泉附近、そこから谷は深く山又山の中に穿つやうに入つて行つて、その源流の鬼怒沼まで十五六里が間、人家は皆山に架し溪に枕み、水の鳴ること佩環の如く、全く別天地を其處に開いて見せるのであつた。平家の落武者のかくれたといふさびしい山村を……。漁師と岩茸採りと鑛山師と熊と岩魚とを持つた栗山十三鄕の山村を……。

しかし、鬼怒川の水電工事は、この美しい峽谷をも非常に破壞したといふことであつた。文明の氣分は今はこの深山窮谷の中まで入つて行つた。

二

普通遊覽者の通つて行く處から一步入ると、日光の山は非常に深い。地域もまた廣大である。北は鬼怒川の谷を越して、連山重疊した會津の帝釋山脈と相接してゐる。

從つてその持つた森林帶には、扁柏、栂、山毛欅などが一面に密生して、深山でなければ見ることの出來ない原始的のカラアに富んでゐる。密林の中にある木小屋、一面に叢生した熊笹、その中を數條の

かし、この他に鬼怒川の大きな溪谷のあることを忘れてはならない。

しかし、何と言つても一番すぐれてゐるのは大谷の狹谷だ。電車が通じ、涼傘が日に照り、都會の人人を乘せた籠や車が絶えずその谷の岸を通つて行くので、頗る俗化されて了つたやうなところはあるけれども、それでも山が深いために持つた男性的の烈しい氣分は、決してその峽谷を全く平凡化しては了はなかつた。風は凄じく鳴つた。溪は凄じく怒號した。雲霧は時の間に咫尺を辨せぬばかりに襲つて來た。一度洪水が出れば、その凄じい烈しい濁流は例の朱塗の橋をも呑まんばかりの勢を呈した。

それにその持つた輻射谷にもすぐれた谷が多かつた。般若方等の谷、荒澤の谷、田母澤の谷、すべて美しいシインを到る處に開いた。瀧の多いのも無論その峽谷の色彩を複雜にしてゐるが、それよりも何よりも水の美しいのが好かつた。深澤の溪橋あたりの水の美しさは、他の峽谷にはとても見ることの出來ないものであつた。瀞潭の美は紀州の北山川にある。奔湍の美は肥後の球磨川にある。しかし瀬の水の美しさは實にこの大谷の峽谷を以て最とした。

水の美しさは、鹽原の谷も多くこれに讓らない。入勝橋から福渡戸に行くあたりは、殊にすぐれてゐる。しかし、箒川の谷は何方かと言へば女性的である。奔湍急瀬の壯よりも、寧ろ清淺曲玉の美である。山にも大谷の峽谷に見るやうな烈しい強い男性的の氣分を持つてゐない。線からして既に柔かで瀟洒である。しかしこの谷には大谷の谷にない温泉が處々に湧出した。それに、近頃では軌道が出來た。まこま

ある温泉は山の半腹、ある温泉は溪谷の底、ある温泉は噴煙の靡き下る大きな山の背後に位置してゐた。秋の紅葉の頃など、それからそれへと移つて泊つて行く氣分の樂しさは、箱根などの比ではなかつた。こゝから那須岳の裾を掠めて、會津の方へ出て行く路も面白い路の一つだ。

單に汽車で行つただけでも、この那須野は尠くとも東北線の單調を破るものと言つて好い。宇都宮からこゝに來て、初めて旅らしい感じが湧くやうに起つて來る。こころ〳〵に流れ落ちてゐる石川、灌木の林、白い綺麗な小石、その中ををり〳〵細い路が林から林へと入つて行くのを私達は見た。汽車は最初に鬼怒川を渡り、次にその奥に鹽原の山水を持つた箒川を渡り、更に蛇尾川を渡り、黑磯の先に行つてもう一つ那珂川の一支流を渡つた。夏の七月頃梅雨があがりかけた時分に、私は一度其處を通つたことがあつたが、その浮動する雲煙の中に、高い山嶺の一つ二つ顯はれて見えるさまは、何とも言はれなかつた。名手の描いた一幅の水墨山水そのまゝであつた。

二

野州はすぐれた山水の美を鐘めてゐるので聞えてゐる。水石の美しいので聞えてゐる。深い溪谷の多いので聞えてゐる。雲烟の多いので聞えてゐる。

中でも、日光の山水を持つた大谷川の谷と鹽原の勝を持つた箒川の谷とが一番世に知られてゐる。し

氣と共に搖曳した。

町の南一里にある湯津上の古碑は、日本でも有名なもので、俗に笠石と呼ばれてゐるが、こゝを訪ねたり、山中にある雲岩寺を訪ねたりするのも興味の饒い旅の一つだ。雲岩寺は武茂川の狹い峽谷の中にある臨濟のすぐれた寺で、一に佛國山居のところと言はれてゐる。黑羽から那珂川に沿つて、馬頭、烏山の方へ出て行くのも面白い。

那須野の西部を劃る山嶺の連亙は、東北幹線の汽車の窓から指すことが出來た。がそれは寧ろ佐久山、太田原、黑羽あたりに來て眺めた方がすぐれてゐるのを私は見た。この連山では、那須嶽が無論その主峰であるが、高原山の西の奧に聳えた日光火山群も、見事な襞と皺と連亙とを見せた。雲烟が常に登涌した。

昔の旅客はこの荒漠とした野を皆な馬で越した。芭蕉が馬のつぼに錢をつけて馬だけ歸してやつた話は面白い話である。がしかし今ではこの野も開けた。畑も出來、水田も出來、大きな道路も縱橫に出來た。黑磯からは、那須の湯本へも、黑羽へも乘合自動車が勢よく出て行つた。

黑磯の驛は、一に、「薪の停車場」と言はれてゐた。それほど楢、樅、くぬぎ、さういふ灌木の林が附近に多かつた。那須の湯本は越後の赤倉、信濃の富士見に似た高原的眺望に富んだところで、夏は草花なども多く、限りなく旅の思ひを意くやうな處である。其處此處に散在した湯も、頗る變化に富んでゐて、

八溝山はなつかしい山だ。又この山ほごすぐれた位置にその山容を置いてゐるものも澤山にはない。水戸から下孫に行く濱街道からも見えれば、那須野を行く東北幹線の汽車の窓からも仰がれた。否そればかりではなかつた。關東平野を流るゝ利根川の河岸からも、筑波、加波、更にその左に遠く連つた翠微を越して、それこさやかにその山容を指さすことが出來た。

この山は一面また那須野の山の一つこ言ふことが出來た。那須岳、高原山、更に西南に日光火山群と相對して、屹然こして聳えてゐる形は、旅客の思ひを誘はずには置かなかつた。昔の旅客は、荒涼こした東北の蝦夷地に入つて行つた昔の旅客は、皆この山の姿を仰ぎながらさびしい白河の關へこ入つて行つたのであつた。芭蕉も那須から來て、この山の西南の裾にある黑羽町に二三夜を過した。

一〇

往昔の陸羽街道は、那須野の東部を南北に横ぎつて、太田原から蘆野の丘陵に入り、それから白河の關へこ達した。この那須野の東部地方は、今は交通が不便で、旅客は餘り多く入つて行かないけれご、昔は非常に榮えた處で、那須國造の趾があり、源平時代の那須一族の根據地があり、土地も中央部のやうに磽确たるものではなく、丘陵こ平野こが處々に山畠を見せ、水田を見せ、また蕭疎たる町を見せた。黑羽の町の中央を貫いた那珂川は、夏は潺湲こした涼しい音を立てゝ流れ、兩岸の人家の灯は山近い嵐

ゐた。

矢祭山の奇岩は、陸前の白石川の渡瀨にある材木岩とその奇を競ふに足りる。耶馬溪ほど規模は廣くはないが、又その形も違つてゐるが、ある處はとても其處では見ることの出來ないやうな處があつた。しかし交通の不便なために、誰も此處まで好奇に入つて行つて見るものはなかつた。徒に田夫野人の等閑視して行くのに任せた。

袋田の瀑は、その多い幅射谷の一つである袋田川の上流に懸つてゐる大きな見事な瀑である。太田から七八里、街道は西金の北一里で溪を渡つて太子へと行つてゐるが、瀑へ行くには、川の東岸を北して袋田に行つて、そしてそこから山へと入つて行くのであつた。

太子の町は翠嵐の多い町だ。それはかなり大きな一支流の久慈の谷に落ちる會點に位してゐるやうな處で、一面筏や河舟の河港の樣なカラアをも持つてゐた。山深く、冬は雪が多いので、町にはすべて雪國風の屋根の高い廂の長い家が並んで見られた。こゝから西に折れた一路は、八溝連峰の一凹所を越えて、下野の那須野の東部へと出て行つてゐた。

磐城の名山八溝山へは、大抵太子から登つて行つた。それは矢張谷の西岸の幅射谷の一つを下野宮へと入つて、上野宮へと行つて、そこから登るやうになつてゐるが、登路はさう大して險しいといふ方ではない。山頂は眺望が非常にすぐれてゐた。

『繪』の一つであつた。

九

太田から磐城に入つて行く路は二條あるが、同じなら久慈川の峽谷に添つた路を入つて行くに越したことはない。この峽谷は餘り人に知られてゐないけれど、頗る山水の勝に富んでゐて、雲烟が常に搖曳し坌涌した。那珂川の峽谷などはとても比較にならない程すぐれたシインが到る處にあつた。

この峽谷はかなりに長い。太田から一二里で山に入つて、それから十二三里が間、山に凭り溪に枕んだ山村があつたり、此方から向うに越して行く溪橋があつたり、高い仰ぐやうな絶壁があつたり、處々の幅射谷から流れ落ちる小さな溪流があつたりして、山中の一都會である太子町に達するのであるが、それから更に進んで、常陸と磐城の國境近く行くと、岩石の奇を以て聞えた矢祭山の勝が、丁度その長い溪山の繪卷の中心を成してゐるかのやうに、美しく見事に展開されてゐるのであつた。

尠くともこの久慈の峽谷は東北地方屈指の大きな峽谷であつた。多摩川の上流ほど兩岸が迫つてはゐないけれど、又木曾谷を少し狹くした位ではあるけれども、山の嵐氣に富んでゐる形と雲烟の複雜してゐるさまとは、耶馬溪の谷よりはもつとぐつとすぐれてゐるのを私は見た。春は躑躅山吹が吹き、藤が咲き、河鹿が好い聲を立てゝ鳴いた。秋の紅葉は上野の吾妻川の河原湯附近よりももつとすぐれて

すらもなかつた。

しかしこの附近にある川尻の町は面白い魚蟹の町だ。風景としても助川よりはぐつとすぐれてゐる。濱街道を歩いて行くと、水戸以北、最初に海の見えるところは、久慈川を渡つて、その向うの臺地にかかつて行く石無坂だが、そこからは弓弦を張つたやうな常陸の砂濱がずつと一目に遠く打渡されて見えるが、波打際近く、波の白く高く碎けてゐるのを眼のあたり見るのは、實にこの川尻町が最初であつた。私は薄暮の色の中に長く前に突出した徙崖と、その徙崖に打寄せてゐる波と、一帆のさびしくたゞよつてゐるさまと、波の音に雜つた漁村の夕の市の賑はひとを見た。私は何とも言はれない氣がした。

河原子にある海水浴場は、この沿線では、一番心持の好い處であつた。設備もかなりに行屆いてゐる。石無坂から常陸の海濱を望んだ眺望はこの沿線中忘れても見なければならないものである。これほど長い汀線に波の白く碎けてゐるさまを見るやうなところは、日本にもさう澤山はあるまいと思ふ。それに常陸の海岸の砂濱はいかにも平滑である。いかにも瀟洒である。いかにも絹のやうである。坂の上には小さな宮が祀られてあつて、古い大きな松の並木を通して遠い遠いその海が眺められた。

湊町、平磯、つゞいて大洗、この一區劃は都會の人に多く知られてゐるだけそれだけ、俗氣に滿たされて、感じがやゝ派手すぎ淺すぎる。しかし海は決して平凡ではなかつた。湊町と祝町の間にかゝつた大きな橋を前にして、靜かな那珂川の流れを下つて行くペンキ塗の小蒸汽も、この海岸のすぐれた

後に帶びた海を持つたさびしさこ暗さである。これに比べたら、相模の海岸、東海道の海岸は、何んなに晴々した明るい色で塗られてゐるであらうか。此處にはあの冴々した富士の白雪もなければ、帆影の無數に重り合つた賑やかさもない。また漁村の空氣に雜る美しい都會の娘の色彩もない。しかし、淋しさを好む旅客のためには、この沿海十數里の間は、他に求むることの出來ない澤山な『詩』こ『繪』こを持つてゐるのであつた。松原の中に昔からさびしく埋もれた他郷の難船者の墓、波濤の爲に洗はれて一つはやがて陷沒して了ふであらうこ思はれる夫婦島、楊柳の綠で美しく蔽はれた漁師の町、一時盛に流行つてやがて衰へて行つた海水浴場、ある松原からは細い路がひろ〳〵とした海へこ下りて行つて、海の地平線には、怪鳥の翼に似た雲がさびしく一帆の影こ相映對した。

平潟から磯原あたりは、殊にさうした氣分に富んでゐた。例の畫家の村こ言はれた五浦の徙崖の上が、中でも殊にこのさびしい夕暮の海を眺めるのに適してゐた。後に落ちた夕日、その餘照が遠く微かに地平線の上に殘つてゐて、それが海に反映した色のさびしさを、私はまた何處の海に見出すことが出來るであらうか。

助川は松の多い處だ。曾てこの常磐線の出來た時には、東北の大磯こ言はれて、都會から人が多く集つて來たが、今ではもうさうした趣はなく、たま〳〵汽車を下りて一夜を其處に靜かに過ごさうこする旅客があつても、多くは失望して歸つて行つて了ふものが多かつた。其處には東海道の茅ケ崎ほごの設備

海から上る龍燈を望むために、參客は皆その大きな堂で夜を徹した。矢張筑紫の不知火の一種であらう。

この沿線に唯一つ温泉がある。それは平の少し南にある湯本温泉である。しかし其處は多く旅客を樂ましむるに足りなさゝうな處だ。海に遠く、眺望は乏しく、野卑な脂粉の氣があたりに漲つていかにしても喧しい田舍の温泉場にすぎなかつた。大きな浴槽はめづらしいが、それとて一夜泊つて興味を繋ぐほどの價値はない。

しかし、この沿線の海は見事だ。勿來關址のあるあたり、松川磯のあたり、松の姿も美しければ、白茶色の徙崖の長く海中に突出してゐるさまも奇觀である。三十五反の帆を卷き上げて、仙臺、石の卷へと遠く航海して行つた昔の和船の港小湯港が、埋れ果てたやうに、その一角に衰へて殘つてゐるさまも半は繪、半は詩であると言つて差支ない。

八

さびしい海だ。北國の海よりももつとさびしい海だ。何故なら、此處ではせめて一時なりとも美しく輝く落日の色彩を見ることが出來ないから……。

從つて常總、磐城の海の夕暮の色は、暗い雲の色をしてゐることが多い。影が多い。旅客の暗愁をそそるやうな氣分が多い。これはずつと下つて、銚子の海岸あたりに行つても矢張さうだが、つまり日を

つて初めてほつと呼吸がつかれたやうな氣がした。紀州の山奥、會津の山奥などよりももつとさびれてゐた。

この山地には山櫻が多かつた。平潟、棚倉間などは殊にそれが多い。そしてそれが道に添つてあるばかりでなく、丘陵山巒の到る處に白く見事に咲いてゐる。昔から山櫻の多かつた處ださうで、勿來關址の『道もせに散る山櫻』は實にそれを指してゐるのであるといふことであつた。平町から山中の小野新町に行く路は、主として鎌田川の谷を溯つてのぼつて行つてゐるが、溪にはさう大してすぐれたシインもないが、山深くわけて入つて行く感じは好かつた。小野新町は靜かな世離れた特色に富んだ好い町だつた。

常磐線では、日立鑛山のあるあたりは、非常に活動してゐるが、平以北はさびしい草原やら松林やらが多く、徙崖が徙崖に續き、丘陵が丘陵に續いた。その中で、一ところぱつと美しい海の展けて見えるところがあつた。それは久の濱附近で例の往昔の有名な波立の藥師のある處であつた。渺漫として遠く開けた海、砂濱に繪のやうに並んで見えてゐる漁村、徙崖に凄じく打寄せて來る波、ある處には奇岩が五つ六つ海中に聳つてゐるのが見えた。此處には秀れた海水浴場があつた。

平町に入らうとする少し手前で、その背後よりはやゝ左に偏つて、閼迦井岳の丸い特立した姿が見えた。そこにある寺は、土地での流行佛で夏は登拜の客が殆ど踵を絕たない。それに七月八月の夜を期して、

古風な騎馬の行列は、今でも旅客の眼を樂しませることが出來た。私は二十年前に其處を歩いた。草鞋がけで絆立を着て……。私は其處にも此處にも私の若い姿を見出した。松林は段々少くなつたが、それでも猶暫く續いた。

七

常磐線の濱街道と東北幹線の陸羽街道との間に横つてゐる廣い山地は、丹波山地、下總山地と似たやうな形があつて、日本でも交通の不便な最も開けない邊僻の地區であつた。これを貫いてゐる道路は數條あるが、近くて十二三里、遠いのは十七八里に達する。中で一夜泊らなければ、何うしても此方の一驛から彼方の一驛に達する事の出來ない樣な處もある。併し山には名山はない。標高のすぐれた山はない。唯低い丘陵山脈の起伏を見るばかりである。さびしい山村の處々に散點するのを見るばかりである。そしてこの山の中の水田からは、質は好くないが量が多い磐城米が出來た。處に由つては蒟蒻なども栽培した。

中で、平潟から棚倉に行く道は車が通じた。しかし今では車でこの路を行くものなどは殆どなくなつて了つたであらう。私はこの山地を浪江、川俣間で横ぎつて見たが、それは請戸川の谷を長く溯つて入つて行くやうな路で、内地にもこんな處があるかと思はれる程それほどさびしい／＼處であつた。私は貫竹根といふ山村に一夜寢て、翌日立つて例の羽二重の主産地川俣町に出ることが出來たが、そこに行

景は到る處にある。しかし、これほご長く松林の中を汽車の通つて行くやうなところは澤山にはない。北陸線の直江津から糸魚川に行く間にも松が多い。それから須磨、舞子、明石、東海道線では濱名湖附近、四國では津田の松原、これは見事だが、しかし其處には汽車がない。汽車の中から松原を見つゝ行くごいふやうなことは出來ない。

松は松に續いた。後にはあたりは荒凉として、人家や村落などは見えず、路も見えず、唯その松林の中に小さな綺麗な沼が人知れず埋められるやうになつてゐるのを見るばかりであつた。それには午後の日影が鮮かにさした。

靜かな靜かな氣分だ。

原釜の海水浴と、松川浦の勝とは、この廣い松原の中にあるやうな處だ。そこには大抵は中村から行つたが、その一つ手前の新地からも行つた。私は春の初、靜かにその海岸の旅舍に一夜寢た。松の音と波の音が終夜枕の上にあつた。

松川浦も矢張半ば完成しかけた潟湖だ。夕顏觀音から見た眺望はすぐれてゐる。松島とは比べる譯には行かないが、その規模が小さいだけに、感じが纏つてゐて何處か瀟洒な藝術的の處があつた。しかし入江だけに海の色はさう大して美しくない。

濱街道は概して汽車の線路と相並行してゐた。中村から小高、この間は例の相馬の馬追祭のある處で、

て、日に日に港口を淺くしつゝあるのであつた。

阿武隈川は餘り人口に膾炙してゐない川である。須賀川附近の乙字の瀧、それからやゝ下つて二三の奇勝はあるけれども、概して平凡で、東北線の汽車の中から見ても、旅客の思ひを惹くに足りるやうな處はなかつた。しかしそれが梁川の北二里の處から、連山重疊した中に入ると、溪山次第に色を生じて、角田町を中心にした伊具地方を流るゝ間は、帆影相重なり、艫聲相續くといふ、半ば上流半ば下流と言つたやうな面白いシインを展開して見せた。そして海岸線の亘理、濱吉田、阪元などといふ停車場の西に連亘する山巒の背面を北に流れて、槻木に行つて、西から來た白石川を合せて、そして滔々として海に注いで行くのであつた。從つて角田町は世に稀な面白い地形と雲烟と翠嵐とに富んでゐた。

濱吉田あたりから、松が非常に多くなつて來た。見わたす限り松の林である。村落も松の中にあれば、停車場も松の中にあるといふ風である。それも上方地方に見る赤松ではなく葉の濃やかな幹の鼠色をした若い松であつた。

西瓜畑、豆畑、さういふものが皆な松の林を縫つて見えてゐた。路も松の中から出て松の中へと入つて行つた。行つても行つても松原だ。靜かな綠の濃やかな松原だ。そしてをり／＼その松原の上に、一帆の白く歛つた遠い海の光が見えた。

一體日本の海岸には松が多い。何處に行つても松がある。松の林立した中から、帆影を見るやうな風

た。あくる日は岸を縫つて、徙崖の間をたどること二三里、島の東南端にある燈臺のあるところへと志した。

渺々とした太平洋、南は銚子の犬吠岬と遙に相對して、海光相連ること數十里、アメリカから來る汽船は、先づ最初にこの島山の影をなつかしみ、夜はその燈臺の光に初めて祖國に逢ふの喜悅に胸を轟かすと聞く。

鰹の群が九州の南の一角から、土佐の沖を過ぎ、紀州の鼻を掠め、志摩、伊豆、鎌倉の沖へ來て、その頃が丁度初夏で、目に青葉山郭公初松魚なごと都會の人達に持囃され、それから房總、常陸、磐城の海岸を通る頃は秋で、この一孤島の沖まで來て、そしてずつと下つて行つて了ふといふ話なども、私には興味饒く思ひ出された。

六

岩沼からわかれた海岸線をたどると、亘理から二里で阿武隈川の河口にある荒濱町へと行かれた。其處には町から十二三町を隔てゝ鳥の海海水浴場があつた。

鳥の海は小さな潟湖だ。寧ろ半ば形成されつゝある潟湖だ。上總の一の宮川がその最初の潟湖の形式であるならば、此處はもう餘程完成しかけたものゝ一つである。阿武隈川は溶々四十五里の泥砂を流し

もう衰へて了つた。賑やかであつた川の面もさびしくなつた。今は日に一回一の關附近の狐禪寺まで上下するペンキ塗の小蒸汽があるばかりで、小牛田、石巻間の汽車の開通した後は、それさへ乗客が非常に尠くなつて了つた。私は一度この小蒸汽に乗つて狐禪寺から石巻まで下りて來たことがあつた。川は水量は多いが、全く平野の中を流れてゐるので、兩岸にも見るに値するやうな風景はなかつた。途中に登米といふ町があつて、そこから地方の人達がぞろ／＼乗込んで來た。

河口に近く、町から町へ架けた長橋の眺めは、私の心を惹いた。信濃川の萬代橋乃至利根川の河口、あゝした雄大な趣はないけれども、古城址と古い寺とを持つた獨立した丘陵があつて、その眺めには靜かな穏かな氣分と空氣とが漲つてゐた。其頃は、港は衰頽した極點に達した時で、新しい家屋などは一軒も見ることは出來ないほどであつたが、今は停車場を持つやうになつたために漸く生氣を帶びるやうになつたであらう。

鮎川から峠を一つ越して、山雉の渡頭、そこからは海中に孤立して金華山は手に取るやうに見えた。其間の瀬戸の幅二十四町、碧い迅い潮は、凄じく水脈を立て、流れて、成ほど昔から難所として知られてゐるのも尤もだと思はれた。銅鑼の聲につれて、旅客は爭つて岸に集まり、船は怒潮を亂して、暫の間にその狭い海峽を渡つた。

世離れた感じは島の到る處に漂つてゐた。大きな華表、宏壯な社殿、そこで泊つた一夜は靜かであつ

山、倶にこれに似てはゐるが、しかし何方かと言へば、矢張私は此方を取る。遊覽の小蒸汽は長い痕を水面に引いて、そして靜かにこの灣内を航行した。

五

金華山に行くには今はわけはない。汽船は鹽竈からぢかにその島の華表のある處へと着く。從つてあの徙崖の多い長い路をたどる必要もなく、鮎川から峠を越して山雉の渡をわたらなくとも好い。しかし、澤元愷の『漫遊文草』にあるやうに、日に日を重ねて、海と山との互に相錯雜し、漁蜑の村と帆檣林立する港と相連る間を靜かに草蛙穿きで歩いて見るのも遊興が饒い。元愷の行つた時分には、渡波以東の徙崖と丘陵との中に狼などが出沒して、鮎川まで行くのも容易のことではなかつたらしい。

この海岸丘陵の中に、一時郵船の重要な港として旅客の盛んに往來した荻の濱港が廢址のやうにさびしく埋もれて殘つてゐるのも面白かつた。渡波は左に深く入込んで入江を控へ、前に濶い海洋を抱込むやうにした眺望の好い處で、鹽竈附近の菖蒲田と共にこの海岸での屈指の海水浴場をそこに持つてゐた。

しかしこの沿海十數里の間で、最も心を惹くのは矢張石卷港だ。仙臺藩の唯一の運輸港、陸前陸中の平野の米穀の輸出地點、七十里を長く流れて來た北上の川は、或は帆船、或は汽船、或は筏を持つて、その上流の無限の物資を此處へと一齊に漕ぎ下して來るのであつた。しかし汽車の出來た今ではそれも

は名物の實竹の澤山に生えてある島があつて、その向うに大きな島が黑く碧く浮んで居るが、そこに最初の朝日の光が先づ射して、見てゐると、それが段々靄の中に美しいかゞやきを展げて、今まで見えなかつた島の影が其處にも此處にも見え出して來た。私は立つて眺め盡した。

この眺望を更に一層大きくしたのが、新富山の眺望で、更に又それを大きく廣くしたのが富山の眺望であつた。觀瀾亭は政宗が伏見の聚樂の一部を貰ひ受けて、それで造つた瀟洒な亭だが、そこから見た眺めは、旅舍の三階で眺めたよりも、もつと漁村らしい感じを持つてゐて、岸と汀線と松の島との調和がいかにもよく一致してゐた。

富山の上の大仰寺の庭から眺めた形は、橋立を笠松から眺めた形に似てゐる。大抵の旅客は――松島を平凡だと言つた人達は、こゝに來て、皆驚いて冑を脱いでしまふのが例だが、實際其處から見た規模は大きい。此處ではもう島を眺めるのではなかつた。八百八島を持つた美しい海を眺めるのであつた。その四周を取卷いた山嶺を眺めるのであつた。濶い天地の中に浮んだ大きなパノラマを眺めるのであつた。其處からは、金華山も見えれば、西を劃る大きな脊梁山脈も見えた。一面に海にかゞやき渡つた夕日の影の下には、島は皆黑く重り合つて見えた。

橋立は奇だ。また瀟洒だ。しかし規模の大は到底この富山の眺望に若くべくもない。三井寺から見た琵琶湖、麻生から見た霞ケ浦は、とてもこれと比すべくもない。志摩の鳥羽の日和山、御座岬の金比羅

八百八島は次第に現れて來た。

松島の灣の水深は極めて淺い。最早老衰した入江である。琵琶湖乃至霞ヶ浦と均しく、遠からずして陸地になり水田になつて了ふであらうなどと言はれてゐる。しかし流石に區域が廣いので、琵琶湖のやうに水が銹びてゐない。處に由つては深い大海と同じ碧を見ることが出來る。潤い複雜した變化ある氣分を受けることが出來る。

しかしこれを橋立の外海の色と比べると、その生氣あり變化ある色彩は、一籌を輸さなければならなかつた。あの碧、あの四面を取卷いた山、深い嵐氣、あゝいふものはこの松島には求めることが出來なかつた。從つて水蒸氣の少い空氣の乾いた日には、山も島も皆なわるく白ちやけて見えた。島の松が赤ちやけてゐるのも侘しいやうな氣がした。海の碧が空の碧のために全く塗り消されて了つてゐる。あたりに高い山嶺のないといふことは、松島の空氣を尠からず單調ならしめた。

私は三度松島に遊んだ。その中で、最近に行つた時が一番水蒸氣の多い時であつた。『かう綺麗に見えることもあるのか。』かう私は思つた。私は五大堂と相對した大きな旅舍の三階の一間から、蒲團の中にくるまりながら、朝の鮮かな靜かな景色を眺めることが出來た。薄い靄の中から、日のまだ上らない曉の薄い被衣のやうな靄の中から、一つ〳〵島が現はれて來るさまは、何とも言はれなかつた。

靜かだ、いかにも靜かだ。時は春先の三月の末で、どてらを重ねて着てもまだ寒い位であつた。前に

鹽竈の町は半は港で半は漁市といふさまであつた。大漁の模様のついたどてらを着た漁師、細い通りに處々に並んでゐる青樓の淺黄の暖簾、ある旗亭からは三味線の音が湧くやうに聞えた。鹽竈の昔の道、それから長い長い石階、神社の境内は綺麗に掃除されて、參詣の女達は蠟燭の燃え餘りを社務所で買つてゐたりした。

深く入込んだ入江、そこに集まつてゐる帆檣や和船や荷足や、水脈は深く黑く流れて、潮は岸の旅舍の影を靜かに搖かした。そこに、松島遊覽のペンキ塗の小蒸汽が、沖から淡い煙を靡かして入つて來た。酒を載せ妓を載せた小舟がたぶ〳〵と日に照されて沖へと出て行つた。石垣の上には、長い竿を水に垂れて魚を釣つてゐるものなどもあつた。小さな蟹や舟蟲は磯を這つて歩いた。

波が次第に高くなつて行つた。沖に少し出ると、

『あゝ、金華山！』

かう誰も彼も聲を擧げた。

四

大きな水門の彼方に、碧く鮮かに金華山は指さゝれた。太洋に出て行く帆は斜に敧つて、兩方から迫つた瀨戸の山影がさながら入江を扼してゐるやうに見える。白い波頭の立つのが處々に眺められた。

の一つの例だ。

この丘陵の中にある岩出山の城から伊達政宗は仙臺へと出て行つてそしてその覇業を大成した。それにしても、仙臺の背後にある山嶺の翠嵐の深さは！　又その仙臺の城の位置の巧に平野の丘陵の中に隱れてゐるさまは！　流石に政宗は英雄であつたといふ感を深くさせずには置かない。東京から行つて、福島の先の國境の關の置かれたところ、泰衡が最初に頼朝の兵を防いだところ、それから例の武隈の松のある岩沼を掠めて、第一に左に藏王岳の偉大な山谷を見るのは、旅客に取つて忘れられない印象を殘さずに置かなかつた。藏王は脊梁山脈中著名の火山群で、その此方の麓に仙臺侯の悠遊した青根溫泉の眺望閣があり、その向うに、東北の草津と呼ばれた羽前の高湯溫泉があるのであつた。そして此間は、案内者を頼めば、一日で越して行くことが出來た。ここに藏王の半腹から見た遠い太平洋の眺望は、青根の眺望臺より見た風景を更に更に大きくしたもので、脊梁山脈中の多くの峠の眺望もこれに及ぶものがないと言はれた。冬、汽車で通ると、大河原、槻木あたりから、その大きな山脈が雪で白く塗り潰されたやうになつて見えた。

しかも仙臺の位置は、丘陵の中に隱されてありながら、市に入ると、全く平野の中にあるやうな氣がした。そして岩切驛あたりに來るとそれが再び完全に丘陵に隱されて了ふやうな形になつた。岩切の停車場から見た西に北に聳えた山は皆高かつた。雲煙が常に搖曳した。

高原は、鳥海山脈と出羽山脈との交錯を眺めるのに最も好い位置を持つてゐた。私はそこで凄じい夕立に逢つた。船形の停車場に來た時には、私はすつかり濡鼠になつて、帽廂から雨滴が滴り落ちた。

三

船形から陸前に出て行く路は、例の義經が北陸から平泉に落ちる時に通つた處で、今日でも遺蹟が二三殘つてゐた。芭蕉も此處を通つて鳴子から尾花澤に來た。この路は、脊梁山脈の凹所も低く、向うからは鳴子まで陸羽線が通じてゐるので、『奥の細道』時代のやうな不便なことはもうなかつた。それにこの峠附近に『蚤しらみ馬の尿する枕元』と芭蕉の詠んだ尿前の關の址があつて、その時代の大きな家屋が百年以上の風雨に晒されて、壁は落ち、骨は現はれて、さびしく一軒殘つてゐるさまは、旅客の思ひを惹かずには置かない。

鳴子、鬼首の溫泉のある所は、一小別天地を成してゐた。例の日本で名高い間歇泉のある吹上の穴は、大きい方が出なくなつたので、餘程奇觀を失つたさうであるが、それでも猶山越しに二三里をわざ〳〵行つて見るだけの價値はあつた。東北線の汽車の走つてゐる處は、概して泥濘が多く、湖沼が多く、洪水の難が屢々ことして來る。小牛田をすぎて左に連つて見えるのが、鬼首、鳴子附近の山嶺の連亘であつた。昔の國道が汽車の線路よりも餘程山寄りになつてゐるのなども其地形の便不便を語つてゐるもの

ゐるのであつた。

酒田はもう昔の榮えた港ではなかつた。こゝに限らず、裏日本の和船の港は、汽船の時代になつてからすべて衰へた。西鶴の『一代男』に書かれたやうなさまは、此處にも越後の出雲崎にも見出すことが出來なかつた。しかし、此處から見た鳥海山には、又他に違つた姿態があつた。月山の連峰もその東南に當つて指さゝれた。

最上川――昔は羽前の山形平野から海に達する唯一の交通路であつた最上川、碁點、隼などといふ難所を持ち、本合海附近のすぐれた風景を持ち、大陸的な川の氣分と無數の席帆とを持つた最上川、それも汽車が出來てから、もうさびしくなつて了つたであらう。あの沿岸の名所圖繪風な旅客の雜沓ももう見ることが出來なくなつたであらう。風情ある淸川の一驛にも、旅客はもう泊るものもなくなつたであらう。草薙の對岸に懸つてゐる白糸の瀧も、徒に汽車の窓から眺めらるゝにすぎぬであらう。

私は酒田から淸川に來て、そこで旨い鮎を食つた。古風な旅舍の二階の室から、紅白の木槿の咲いた垣の中に、絲車の音の流るゝやうなのを聞いた。赤い襷を十文字に綾取つた色の白い娘の唄を聞いた。そして淸川八郎の事蹟などを考へた。夏は涼しい所だ。溪山中の河港としては、阿賀川の津川と富士川の南部と此處とが最も深い印象を私に與へた。

本合海の渡頭はすぐれてゐた。八向山に向つて流れ下る最上川も好かつた。そこから船形に來る間の

さして有名な飛島、その蕞爾たる島を見ながら、私は一日その羽後の海岸を歩いた。その海岸には玫瑰の花が多かつた。漁村らしい漁村が多かつた。ピエル・ロチの『氷島の漁夫』の内にあるやうなシインが多かつた。松も多く、波も高かつた。それに其處には、例の芭蕉の『雨に西施のねむの花』と吟じた象潟の古址があり、又南谿の『東遊記』の『小砂川の鬼』の小砂川があるのであつた。小砂川はさびしい漁村だ。徒崖の中に埋められたやうにしてある波の高い漁村だ。『東遊記』の鬼は狼のことだが、成ほど今でも狼位は出さうに思はれるやうな處だ。

象潟は廢墟になつてから更に一層の趣を添へた。田の中にある丘、それは昔の島と、蚶滿寺のある位置は、今も旅客にその潟の好風景であつたことを眼の前に描かせた。そこから、鳥海は實によく見えた。手に取るやうに見えた。象潟の勝は半は鳥海の秀色にあるのであつた。

飛島に寄せる波を眺めながら、私は羽後から羽前の方へと入つて行つた。車夫は私に話した。「島に嫁に行つたものは決して歸つて來ませんな……。何でも樂し好いところださうでさ。」

小砂川から鳥海の裾にかゝつて行く路は、頗る海山の趣に富んでゐる。飛島はすぐ手に取れるやうに見えた。この峠は登り一里位であるが、登り盡すと、灌木の叢樹の林や、萱游の微なその中に路がついてゐて、その向うに更に新しい繪卷を展げて見るやうに、汀線の長い美しい海と海岸とが展けた。こゝから吹浦まで三四里、更に東遊記の『吹浦砂礫』の趾を越えて四五里、そこに例の酒田の港が横はつて

よりも此方の方がぐつとすぐれてゐると思つた。續いて私はその山の向うに横はつてゐる日本海を想像した。十三潟を想像した。その十三潟はさびしい潟湖であつた。長く綠を曳いた防砂林の松並木と、赤ちやけた大砂山、湖の岸にくつついたやうになつてさびしく見えてゐる人家とを持つた潟湖で、それを渡つて向うに行くと、この岩木山――汽車で見たのとは全で正反對の山の姿が、錆びてどんよりとした湖水を前景にして、そして高く平野の中に屹立してゐるのであつた。其處から眺めたさまは何とも言はれなかつた。そしてその十三潟の奥に、龍飛岬の奇勝があり例の日露戰役に有名になつた艫作岬があるのであつた。

南部の恐山は、汽車が野邊地から小湊に行く間の海を越して、遙に遠く指點された。暗澹とした海、岸をさびしく縫つた松並木、弓弦を張つたやうな半島の汀線、それを越して遠く見える山の頂きからは、噴煙が地を這ふやうにして靡いた。

二

鳥海山は北廻りの日本郵船の甲板の上から見たのが一番好いといふ話だ。かう思ふと、私はそこにある飛島を思ひ浮べずには居られなかつた。富士山と高さを爭つて、負けて、怒つて其頂が飛んで海中に落ちたといふ飛島、鯨の泳いでゐる形に似てゐる飛島、冬季汽船がしけに逢ふと一番先に避難する地點

て、夕日に明るい野の濶く濶く展開されてゐるのを認めた。續いて私はその野の向うに、連亙した群山の上に、丁度月が半輪を空に現はしたやうな大きな山の姿の面白く聳いてゐるのを眼にした。

私は山の名を知りたかつた。しかし誰も聞くやうな人はなかつた。月山――かう私は想像した。しかしそれが果してさうであるか否やがわからない。私は雲もか丶らずに美しく晴れた山色を眺めながら、崖に添つたさびしい山路を下つた。ふと私は眼下に夕暮の烟に包まれたさびしい小さな町を發見した。私は地圖を披いた。確に金山町だ。今夜泊るべき金山町だ。と、向うから行商らしい男が絲立を着て歩いて來た。私は指して訊ねた。

『さうだ、月山だ……』

かうその旅客は言ひ捨て丶去つた。

『雲の峰いくつ崩れて月の山』例の芭蕉の句の中にも立派な寫生があるのであつた。私は一日の疲勞を忘れたやうにしてその夕暮の色に彩られた遠い山の姿に見入つた。旅情は湧上つた。私は驅けるやうにして峠を下りて行つた。

弘前平野を汽車の通る時には、畫を描くことは子供よりも下手である私にも拘らず、ポッケットから手帳を出して、その右の窓に横はつて見えてゐる岩木山を寫生した。端麗な美しい山だ。成ほど津輕富士と呼ばれるのも尤もだ。こんなことを思ひながら、私はその連亙した裝と皺とを寫した。南部の岩手山

山水小記

一

濶い高原から、荒漠とした平野から、乃至は連亙した山脈の峠から、或は湖水を隔て、或は碧い海を越して、遙に地平線上に名山の姿を望んだ時ほど、それほど旅情の動くことはなかつた。私は彼方此方から種々な名山の姿を望んだ。

ある朝は私は岩手山の姿を停車場の前の旅舍の西の窓に發見した。そして私は特にそれを眺める位置に注意した。ある夕暮には、思ひもかけない鳥海山の姿を遠く離れた絶海の岬頭に發見して驚喜の聲を擧げた。ある日は私は羽前と羽後との間に横はつてゐる大きな峠を一日かゝつて越した。それは秋で、落葉が疎々として私の帽廂を掠めて落ちた。處處に柴栗が落ちてゐる。拾ふものもない。又長い山路を滅多に逢ふ人もない。私は退屈凌ぎにその柴栗を拾つてぼつ〳〵食ひながら歩いた。峠は峠に續いた。勿論それは小さな起伏に過ぎないけれど、それが行つても行つても盡きない。日は暮れつゝある。ふと私は、私の前に、越えて來た山嶺の起伏が盡き

由水小記

三聲、街頭日熱して、既に夏になりぬこ。あゝ都門は既に夏になりたるか、塵埃揚り炎暑燒くがごこくなる夏に近づきつゝあるか。われ等は二領の綿衣を襲ねても猶嵐氣の寒さを覺ゆるものを。

深澤、劍が峰の八汐、日光諸山の新綠を思へば、殆ど夢の如き心地す。

原の中央に至りたる頃、わが後より急ぎて馬を追ひ來れる一人の村娘あり。年齡大凡十七八九、圓顏皓齒、髮はくろく、額はひろく、しかも双頰の間に、無限の愛嬌をたゝへたり。その黑き髮には、躑躅より折り來りたるらしき紅なる一枝の八汐の花を挿したり。

この荒涼たる原頭に、この美しき少女の頭上の一枝の花を見たる時、春をたづぬるわが心はいかに撲たれしか。

あはれ心ある少女よ、御身は春のつかひにはあらざるか。いまだ春ならざる深山に、早くも春を傳へんとて、殊更に花をかざり來れる春の使者にはあらざるか。

かくて思ひつゝ、われは遠くもそれを見送りぬ。少女の挿頭の花は、次第に遠く遠くなりて見えず。聞ゆるは唯いとのどかにうたひ行く一曲の村歌のみ。

湯瀧の雄麗なるさまと、湯湖の深邃なる景とを、蒼然たる景色の中に見て、その奧の奧の湯本の溫泉場に達せしは、最早日暮れてあたり暗くなりたる程の事なりき。湯に入りても溫まらぬ寒氣はいかにと、顧みて婢に問へば、かくても二三日以來餘程暖くなりたるにて侍り、一昨日などはちら〳〵と雪さへふりてまゐりたるものをと答ふ。

ゆくりなく思出せしは、一二日前都門の友人より贈られたる一片の信書なり。新樹既に深く杜鵑早二一

かの舟はわれ等と同じく菖蒲濱へと向へるものなるべければ、いづれが早きか競走して見んとは思はずや。

かくてわれ等は、その帆影と並ぶやうにして走り行けど、われ等の菖蒲濱に至りし頃には、その舟は乗客數名を下し、更に再び帆を張りて、折よく風の變りたるを幸ひ、急ぎ歸途に就きたる後なりき。

をとめ橋を渡り、地獄茶屋を過ぎ、龍頭の瀧の奇峭なる景を見て、やがて戰場が原にかゝらんとする所にて、われ等は振返りて、眼下になりたるその中禪寺を今一度見ぬ。

夕日の影は鮮やかに瓢の形を爲したる湖の一面に照りわたりて、その深碧なる水面に、白銀のごとき微波をゑがきたるさま、いと美し。右に男體山の偉丈夫のごとく屹立せるあり。左に行者山脈の長蛇のごとく蜿蜒たるあり。空氣は澄み、雲影は動き、光線はきらめき湖水はかゞやきたり。その美しき向ひの山際を、かの前の一帆の影いとさびしげに過ぎ行く。

されど湖上未だ一點の春色を着せず。

八

荒涼たる戰場が原に至るに及びて、いよ〳〵春の色を見ることと能はずなりぬ。

枯れたる樹、殘れる雪、男體山より吹おろす寒き風、何となく肌に浸み入る山氣、此處にして、かの

なく、鏡面を破る一點の舟なし。ここに、歌が濱の一角よりかけて、上野島の一端に至るまでは、湖は他と異りたる一段の深碧の色を呈して、恰も影をつくりたるがごとく見ゆ。試みに二人して大聲を發すれば、その聲遠く湖心に反響して、その靜謐たとふるにものなし。

中宮祠に詣で、それより湯本に赴かんとする道のほとりにて、ゆくりなく一帆の影の向岸なる寺が崎の杳渺たる間よりあらはれ出づるを認めぬ。

かの山に添ひて走り行く帆影の風情あるさまを見給へと、われは指點して國木田君にいふ。國木田君はわれより一二歩後れてありたるが、これを見て、まことに美なり。かの半空みたる帆影の風致は、宛然一幅の畫なりといふ。

半空みたる一帆の影は、山色の參差たる間と、湖色の深碧なる間とを、さながら縫ふやうにしていと靜かに進み行きぬ。風は足尾の方より吹き來りて今まで湖心にうつりたる山影、雲影、樹影、皆夢のごとく消え果てぬ。かくて半里ほど湖岸をつたひて、それとなく木の間より見れば、かの一帆の影は、已に近くわが眼前にありて、その船の形、船頭の姿、櫓を押すさまなど明らかに見ゆ。あまつさへ、山、湖を斜に照したる日の光は、今しもおもしろくその帆影の半面を照して、その長方形の影を、白銀の如くかゞやきたる水の上へとうつしたり。

何といふ鳥か知らねど、いと怪しげなる聲を放ちながら、その靜かなる湖面を掠めて飛び行く。

周圍に春來りて、八汐の花いと美しく咲出でたらんには、紅血、白珠、新綠、相掩映して、その風情の美しさ、あはれまことにいかなるべき。

八汐の花は今幾日ありて開くべきかと、われはそれとなく茶店の肥えたる主人に尋ぬれば、然なり、最早程もあらざるべし。今一週日も經ちたらんにはといふ。

瀧と相對して瓢を傾く。醉來り興生じて、その快いふべからず。

蹌踉として茶店を出づ。熊笹の繁れる間を行くこと一町にして、既に木の間より浩蕩深碧なる一大湖水の縹渺としてあらはれ出づるを認む。則ち疾驅してこれに赴く。

七

湖口一橋ありて架す。われ等はそれを渡りて、直ちに湖の岸頭に赴き、新しき船の汀にあらはれたる上に腰をやすめて、先づこのあたりの大景を見たり。

空氣は限りなくすみて、雲間を洩れたる日の光は、一道の火光のごとく、湖を圍みたる山の一端に、いとおもしろくかゞやきわたれり。その日光を受けたる山の西數間の上に、白雪皓々たる白根山、群峰を拔きて極めて高く聳えたるが、その白き山の姿は、深碧染むるが如き湖の面にいと靜かにうつりたり。風の湖心を渡る每に、その影忽ち消えて忽ち顯はれ、忽ち顯はれて忽ち又消ゆ。湖上を飛びゆく一鳥の影

ば、春色今を闌にして、深澤、劍が峰あたりは、正に盛春の候といふことを得べし。方等、般若を過ぎて、この中の茶屋に來れば、春色既に脚下になりて、近傍猶八汐の花の開くを見るとはいへども、風はやゝ寒く、山氣はそゞろに冷かにして、次第に春に遠かり行くが如き心地せられぬ。思ふに、これより山深く分け入れば分け入る程、八汐の花は絶え、春色は微かになりて、遂には初春或は嚴冬の風景を見るやうになることなるべし。

かく思ひつゝも、われ等は遂にその眼下の八汐の花の美しさを見捨てゝ、再び險しき阪路にかゝる。幾曲幾重の阪をやうやくにしてのぼり果てしは、大凡正午近き程のことなりき。大平に至るに及びて、われはわが思ひし想像の誤まらざりしことを知りぬ。あたりには最早八汐の花の一樹だに見えずして、いまだ新芽をさへ萌え出さゞる山毛欅、樺、楢、落葉樹などの寒帶の植物のみいとさびしげに連りわたれり。その間よりをり／＼見ゆる男體山には、白雪猶麓までのこりて、おろし來れる風極めて寒し。あはれ春はいづくにや行きしと思はる。

直下七十五丈、聲萬岳を撼かし、響千雷をとゞろかし、滔々として百川の空中より落つるがごとく、激することは萬弩の奔しく發するがごとく、初めみだれて一團の絹となり、次に碎けて三角形の水晶となり、雪となり、烟となり、遂に濛然として深碧染たるが如くなる瀧壺に落下する。壯極まり悲極まり快極まる華嚴瀧の前に立ちて、我は今更ながら、その奇觀に驚かざること能はざりき。それにしてもこの瀧の

ろ付きて、恰も曙の裾模樣をかけたるもの丶如くなるに、その中を一つは大一つは小なる二條の瀧、錯然として落つるさま、殆ど言葉にも、筆にも盡くすべきにあらず。

八汐の躑躅の美はいかに。

深澤の深谷の美には及ばざるべしとはいへども、右も左も皆美しき八汐の花なれば、決して紅葉の美に讓らざるべし。あ丶この美しき八汐の花よ。

主僧の言葉もこれにては過大といふべからずと國木田君も遂にいふ。あ丶春よ、日光山の春よ。と、われは再び叫ばんと欲す。

六

阪路險峻、加ふるに雨後の泥濘を以てす。のぼること極めて難し。中の茶屋に至るに及びて、殆ど將に倒れんとす。

茶席に踞して徽かに阿巖瀧の髣髴を望み、更に眼を擧げて、遠く鳴蟲、細尾の連山を仰ぎ、更に俯して一縷絲の如くなる深澤の殘流を指し、右顧左眄、いよ〳〵天然の美に撲たれて、暫しは此處を去らんとも爲さゞりき。しかもわれはこの遠く開けたる眺望によりて、日光山の春のいかに變化に富みたるを容觀するを得たり。日光市街は已に初夏に近く、鳴蟲、松立の諸山は、晩春の節に近く、山深く猶分入れ

橋を渡る度毎に、仰いで山嶺の八汐を見、俯して溪流の白雪をうかゞふ。かくてやうやくにして、その深澤の深谷を過ぎ盡しぬ。顧れば、崖上の八汐燃ゆるが如し。

五

これより路は二十四重の阪へかゝる。

女人堂を過ぎて、一歩々々振返りつゝ、われ等はその險阪をのぼり行く。水聲は次第〳〵に遠くなり行きて、美しき深澤の溪流は、いつか木の間に見えずなりぬ。阪をのぼるここ二重、右に一道の細流の流れ出づるを見る、こは般若瀧の末流なり。崖に、岩に、山に、絶壁に、谷に、かの八汐の花いよいよ多くあらはれ出づ。

猶のぼるここ一重、左に華嚴の末流の深谷を認む。その深谷を隔てゝ山あり。形甕を倒しまに立てたるが如し。その絶巓には、杳渺たる雲白くたなびきて、その中腹には、落葉松、樅、杉などの古樹いとをぐらく叢生したり。その間のところ〴〵より、八汐の紅なる花の顯れ出づるさま、又興なきにあらず。われ等はこれを賞しつゝ、猶一町ほど進み行きしに、わが右にひろく大なる澤あらはれて、其處に二條の瀧かゝりたり。方等、般若こは是なり。

日光紅葉の美は、この方等般若の大澤を以て第一となす。遠くひらけたる山々悉く紅、黄、緑などにい

全山皆八汐の花なり。

その下には、怪岩奇石群を成し列を作りて、或は小、或は大、或は馬の耳に相爭ふが如く、或は惡魔の疾走するが如く、或は龍の如く、或は虎のごとく、そのさま殆ど名狀すべからず。その間を深碧湛むるが如き、しかも岩と岩とに激したるが爲め、雪を散らしたるが如くなれる一道の水は、驚くべき力を以て奔逸し來り、先づ絶壁の一角に觸れて、急駛激怒、殆ど深谷も崩るゝばかりの絶大絶高の響を爲し、更に折れて小岩小石の間を、から／＼と流るゝこと少許、再び大岩怪石に逢ひて、その亂るゝこと前よりも甚し。水のあがること一間餘、水珠の飛ぶこと數十間、傍なる石より石に懸けたる柴の組橋もほとほと流されんかと疑はる。その組橋の上に蔽ひ冠さるやうに突出したる絶壁の上には、八汐の花最も多くして、その色の鮮かなる他の比にあらず。水は再び靜まりて、その絶壁の下を洗ひ、更に又激し、更に又靜まりて、遂に深澤の深谷の間を永久に出でて行く。

見たまへ、その水の色の美しさを。さながら淺黄縮緬を流したるがごとくなるにはあらずや。

如何なれば無色の水にして、かく美しき色を爲せるにや。

二人は唯かくいふのみ。

昨年の大水に、新道は崩れて通ふべくもあらざれば、われ等は川原の中につけられたる、大石の磊々たる舊道をたどりぬ。柴の組橋をわたること三たび、石より石に傳ひて水をわたること二たび、しかも

能はざりき。然るに、見よ、馬返しを過ぎて一歩々々深澤の大景に近づき來るに從つて、いかなる風景のわが眼前に横はり來れるかを。

あゝこの風景を何とかいふべき。

川原に突出したる大石の一角をむかうに曲れる時、われ等ははつとして、思はず知らず足をとゞめたりしが、久しき後まで、其處を去らんとも、口を開かんとも爲さゞりき。

見給へ、かの岩の上の八汐をと、國木田君は遂に堪へかねたるさましていふ。

その岩—高さ大凡千五百尺にも越えつべき、材木を建て重ねたる如く屹として突立ちたる岩山の一面は全くその薄桃色の八汐の花を以て蔽はれたるが、空の深碧と若葉の新綠とに反映したるさまのうつくしさ、あゝわれこれを何とか言はむ。

見よ其處にも。彼處にも。

われ等二人の眼は、かく次第に上より下、下より傍へとひろがり行けり。右は劍が峰の岩山よりかけて、その下の少しく窪ぎたる處、その谿下の瀧のごとき形を爲したる山、漸くだりて今崩れんかと思はるゝ絕壁の間、左は華嚴の末流の流れ來れる山奥よりかけて、芝草の美しく生じたる小坂のごとき山、鬼の怒るがごとくなる岩、谿下の下の水の飛沫の人衣を濕はすあたりに、至るまで、處として八汐の花の點綴せざるなく、處として紅なる色の咲き匂はざるはなし。

四

馬返しを過ぎて、疾驅深澤の深谷に入る。

一昨年の秋、此地にあそびて、深澤、劍が峰の紅葉の美に驚き、天下未だ曾てかゝる勝なしと言ひしに、わが寓する照尊院の主僧は、當時更にわれに說きていはく、然し、晃山紅葉の美、まことに天下に冠たるものなるべし。されど秋の山には蕭條肅殺の氣其處となくみち〳〵て、遊ぶ人をして座ろに悲哀の感に堪へざらしむるの弊あり。されば、わが晃山四季の中、最も遊興に適するものは春に若くなし。五月より六月の中旬に及ぶまでの晩春の候に若くなし。まして八汐の躑躅は、至る處に咲きみだれて、その美決して紅葉の下にあるものにあらざるをや。あゝその八汐の花の美世人いまだ多くこれを知らず。されどその美しきことは、殆ど言葉には盡し難かるべし。先づ思ひても見給へ、その頃には、わが前山よりかけて、湯本の山の奧の奧まで、一面に美しき裾模樣をかけたるごとくなるものをと。あはれ主僧の言を聞きてより、夢寐その景を思ひてやまず、暇あらば〳〵とのみ思ひ居たりき。然るに今年ゆくりなく此處に遊ぶを得て、その八汐の花の奇觀を見るを得んことを喜びしに、如何なる故か、主僧の言とはいたく異りて、未だ紅葉の美に匹敵し得べきやうなる八汐の花の美を見ること能はざるのみならず、唯々纔かにその花の新綠の中の處々に見えがくれするを見るばかりにて、更にわが心を滿足せしむる事

新緑と交り、或はさま〴〵の色の毯を重ねたるやうに、或はいろ〳〵の小丘の連り合へるが如くに、その狹隘幽深なる荒澤の谷をつゝみつくしたり。まして八汐の躑躅！　右の山腰に一ひら赤く咲出でたる八汐の躑躅の美しさよ。われは驚きて、聲を擧げて、手を拍ちたり。

行くまゝに、大石次第にあらはれ來る。鬼に似たるもの、牛に似たるもの、鉾に似たるもの、奔馬に似たるもの、或は倒れ、或は伏し、或は行き、或は立つ。その間を一道の水は驚くべき力を以て、激怒憤越して流れ來りたるが、聲は百雷の如く全山にひびき、飛沫は霧の如く行人の衣を撲てり。かくて谷は一曲毎に風致を生じ、一曲ごとに奇怪を極め、遂に路窮りて、最早行くべからずと思へるやうなる處に至り、路傍に突出したる大石の下をくゞりて、漸くにして向うに出づれば、少しく廣き谷俄然としてあらはれ出でて、其處に一條の大瀑匹練の如くかゝる。これ卽ち裏見の瀧なり。

われ等はこの瀧と、その大石と、その新緑と、その八汐の躑躅とを、或は瀧の裏に行きて見、或は茶店の一端に踞して見、或は瀧の上流に行きて見たり。

日光に映ずる新緑、新緑と日光とに映ずる瀧、瀧と新緑と日光とに映ずる躑躅、あゝその一帶の深谷は、無限の春の光を以てかゞやきわたれるにあらずや。

われ等は茶店の床頭に踞して、共に數杯の麥酒を酌み、少しく醉ひて、その深谷を出づ。

瀧や、日光や、新緑や、躑躅や、淺流や、あゝ山中の春の美しさよ。

三

溪一たび屈曲して、右に一小瀑布を認む。これ里人が所謂裏見瀑の一の瀧と稱するものなり。大石に激し、岸頭に碎けて、花と散り氷とみだるゝさま、又見るべきものなきにあらず。われ等は其處を過ぎて、二三軒の茶店の前を右に入れば、今まで脚下にのみ見えたる溪流、今はわが頭上より流れ來りて、その飛沫ほとほと衣を濕はさんとす。その間を右にめぐり左にたどりて、嶮峻削るが如き阪路をのぼり行けば、溪流の全景一歩ごとにあらはれ出でて、その奇觀譬ふるにものなからんとす。わが脚下に茶店兩三軒、その下に風情ある柴の組橋、その下に炭を背負ひたる山男一人、その下にはるゝと碎け碎けて流れ行く溪流、その谷間々々に燃ゆるが如き八汐の躑躅、その先に一帶の障壁を立てたる如き松立の遠山、その上に限りなき深碧なる大空、これを一目に、一直線に、見渡したる時は、われながらあまりの美に撲たれて、殆どわれを忘るゝばかりなりき。否それのみならんや、その阪路をのぼりつくして、愈幽深の境に進み行かんとせし時、それとなく前面を打見やりしに、あゝわれは、夏に、秋に、冬に幾度となく此處に來りたれど、かゝる現象を見たることなしと思ふまで美しき景わが前に横はれり。

裏見の瀧の懸れる澤――瀧はいまだ見えねど――は、悉く美しき新綠の色を以てつゝまれたり。或は黄きあり、綠なるあり、樺あり、靑あり、橙紅あり、群靑ありて、他の色は他の色と交り、他の新綠は他の

をうたひかはして、そのゝどかなること言はん方なし。こゝに、鶯の谷渡りしてうたひ行く聲のさやかなる、山鳩の遠き山際にさも／＼眠たげに呼びかはしたるなど、座ろに人をして山中の春のいかに樂しきかを思はしむ。國木田君われに先だつこと數歩、路傍に山吹の花の美しく咲出でたるを折りて、これを帽の上に挿みたり。われ後よりこれを見つゝ行く、あゝ是一幅の圖畫にあらずや。

一條の路は廣き平原の中に通ず。

思ふ、曾て夏のあつき日に、友人兩三輩と相携へて、この道を裏見瀧へと赴きたりし時、この兩側に覆盆子の多く熟したるを見て、これを採りこれを喫しつゝ、いとたのしく歩み行きしことを。又思ふ、秋の紅葉の頃、弟と共に母を奉じて、歡笑溫顏、いとうれしくこの道を過ぎたりしことを。又思ふ、中禪寺よりの歸途、この道の半にて、烈しき驟雨に逢ひて、衣裾ことゞゝく濕ひつくしたりしことを。ああわれのこの日光山に遊ぶこと既に六回、年を閲すること既に十霜、しかも我この間に何事をか爲せし。

依然たる舊面顏、依然たる窮措大、山もし心あらば、果してわれを如何にか見るべき。

路窮し山盡くるの處、忽ちにして水聲を聞く。琴瑟のごとく、鐘鼓のごとし。あゝこれ所謂山行一三里、漸く聞く水聲といへるものにあらずや。

あゝ春よ、日光山の春よ。

階上の一室なる長火鉢に凭りかゝりて、數杯の晩酌に陶然として醉ひながら、前山の八汐やうやく散り、新綠いよ〳〵深からんとするさまを打見やりたるわれ等二人は、手を拍ちて再び叫びぬ。春よ、日光山の春よ、と。かくてわれ等は一日の課業を拋擲して、翌日山中の春色を探らんことを約す。

二

朝暾門前の溪流に碎けて、前山の新綠閃々として皆かゞやきわたれり。われ等は狂喜して寢床をはなれ、直ちに出遊の準備を爲す。

國木田君は洋服を着け、草鞋を穿ち、腰に一枝の匕首をはさみ、肩に主僧より與へられたる一瓢の酒を荷ひ、飄々然として立つ。われは平服平裝、脚に脚半をつけず、頭に帽子を戴かず、只一枝の蝙蝠傘を大刀のごとく腰にはさみたるのみ。門を出でて數步、右に男體女峰の屹然として深碧なる大空に聳立したるを認む。雲あり、その形恰も長き吹流しの旗のごとし。今しも男體の絕巓より起りて、揚々乎としてその上に棚引きわたりたるが、次第に女峰の方へ方へとなびき行きて、田母澤の溪橋をわたる頃には、已にその半腹へとかゝりたるを見たり。空氣は限りなく透明にして、中に言ふべからざる春の溫和なる氣を交へたり。道の林中に入りてより、兩側に躑、ほゝじろ、山がら、雲雀などいと面白く春の調

春の日光山

一

われ等の寓する山寺の門前を激怒憤越して流れ行くは、かの中禪寺湖よりあふれ出でたる大谷川の流なり。それを隔てゝ、一道蛇の如く蜿蜒として西に走れる山脈を、松立、鳴虫の諸山と爲す。われ等の此處に來りたるは、四月下旬都門の花の散果つる頃の事なりしが、この溪流と山嶽とに對して、いかに久しく新緑の萠え出でんことを願ひ、百花の開かんことを願ひ、群鳥の囀りかはさんことを願ひ、春色の遍ねからんことを願ひたりけむ。かくて漸くにして春は來ぬ。前山の枯木のところ〴〵には、燃ゆるが如き八汐の躑躅美しく點綴せられ、薄絹をかけたる如き霞は、男體女峰兩山の白雪をいとおもしろくつゝみ始めたり。しかも山中の春色の過ぎ行くことの早さよ。梅咲き櫻咲き、杏咲き、桃咲き、石楠花咲き、それのまた散らぬ間に、今まで坊主山なりしと思ひし山々、悉くめづらしき新緑の衣をつけて、そのうらわかき色を朝日夕日の光にかゞやかしつ。

となりぬはなかりき。一夜此處に物を思ひて、あくる日は山形なる外祖父の君の墓に詣でしが、その夜酒田の地大に震ひて、人畜の壓死するもの殆ど數を知らずと後に聞きぬ。あゝわれにして若しかの海岸を傳ひたらんには、恰もその地震の時にあひて、一命をその絶海の畔に殞したらんも知れざりしものを。怪しきは運命の手にあらずや。

出でて、これをだに下り果てなば遙々と羽前の平野の一望せらるべしといへる黑くこんもりと繁りたる山の林間の一角に達しぬ。

林間を縫ひたる路は下りに下りて、一重ごとに越え行く樹間よりは、はる〴〵とひろくひろがりたる羽前の平野一歩〱あらはれ來りぬ。やがて林を全く出でて、遙かにその夕日の金光に彩られたる平原を見たる時のわが興はいかなりけむ。我は殆どその時の情を狀する事能はず。あはれわが稚き頃より母にも聞き、書にも讀みて、夢寐にも姿を思はざる事なかりしなつかしき月山の姿は、さながら雲晴れ氣澄みたる地平線の上に美しき月輪がその三分の一をあらはしたるものゝ如く、極めて面白く、わが眼前にあらはれ出でゝ見ゆるにあらずや。

夕日影暮れなんとする大空に
　　月の山こそ顯れにけれ

我は眼下に見ゆる金山の町に入りて、疲れし身をば休めんともせず、久しくその林の一角に佇立して、夕日の金粉を亂したる空に漸く紫に漸く黑くなり行くその懷しき山の姿を見るに餘念なかりき。

第一日の後、我は恙なく母の故郷なる山形の地に入りぬ。山寺の奇勝、阿古屋の松の古跡もあれど、尤もわが心を動かしたるは、名も無き高擶村一帶の平地なりき。母君は曾て此處に青春花の如き時を過し給ひしと思へば、平凡なる里川も、何の面白味無き平原も、皆我心には一種の新しき思を誘ふの種

心を用ゐんにはこを越ゆることさして難しとも思はれざるに、われは麓にて買ひたる柴栗の茹でたるを撈り食ひつゝ、徐かにその山路をのぼり行きぬ。紅葉四山に滿ち渡りて、行人の顏染むるがごとく、小鳥の聲玲瓏と林間に囀り交す間を、一人淋しく辿り行く秋の面白さをわれはいかにして此處にか說かん。登り行くとする間に、連日過ぎて來りたる羽後一國の景は背後にかくれて、雄物川の流は細く〳〵恰も帶を解きたらんごとく眼下に落ちぬ。銀山に通ふべき路の角にあはれげなる一軒の茅屋ありて、其處には一人の老婆あやしげなる駄菓子などを並べたるが、絕頂は最早其處より遠からず、われはやがてその兩羽國境標の立てる前に立ちて、遙かに都の方を望みぬ。

山影樹影とほく眼界を遮りて、わが志す方の髣髴をだに我は見る事能はざりき。せめてなつかしき月山の姿見えなば、われはそれを仰ぎてこの結ぼれたる心を遣らんと思ひしものを。されど兎に角羽前の地に入りたりと思へば、二三日の後にはなつかしき母の故鄕に入る事を得んと思へば、何となく新しき勇氣も生じて、詩を低聲に吟じながら、獨り面白く下り行きぬ。されどこの峠はこれにて全く盡きたるにはあらず、下る事猶一里ばかり、溪流に圍まれたる風情ある村を過ぐれば、一度平らぎし山は又起りて、終に紅葉の影明かなる林中を穿ち、更に屈曲して山と山との連接したる高き脊のごとき處へと通じ行けり。かくて我は終日山と谷との間をいと覺束なく辿りしが、夕日の影背後の山にかくれ果て、さびしげなるわが身の影いと長く地上に曳ける頃、漸くその羽前羽後の間に蟠まれる幾帶の山巒の間を

くらもあるべしとのことなりしに、かくては峠を越え行かん事も叶はんずと、一方ならず困り果てたれど、今更跡に引返さん事も出來ねば、痛き脚を引ずりながらもこの峠を踰えんものと心を定め、里程の程など何彼と問ふに、上りは三里、下りは二里にて、猶その先に低き峠一つありとの事なり。その間にやどるべき旅亭ありやと問へば、羽前の金山まで行かねば旅亭らしきものも候はずといふ。

痛き片脚を引きながら、心細くもその峠を登り行くわれの樣は、あはれいかにあはれなりけむ。われは稚き頃母の背に負はれながら、若き巡禮の草鞋ずれの脚を引きつゝ、歩み行くを見て、可哀相なりと思ひし事ありしが、今しもゆくりなくそを想ひ出して、遠き旅路に病みたるあはれなる旅客の身の上、知らぬ人のみなる他郷の地に客死して幽魂空しく尾花の原の中に迷遙ふ若き詩人の一生などをつく／＼獨り繰返しぬ。見上ぐれば秋の晴れたる日影美しく峠の絶巓の雲に映りて、院内銀山の赤く禿げたる大なる姿は、屹々然としてわが眼前を壓して立てり。

三

思ひの外の幸福は痛まんと思ひしわが脚は左程に烈しく痛まずして、險しかるべしと思ひし山の左程に險しからざりし事なり。昔は岩石路傍に欹ち、奇山高く頭上を壓して、多き峠の中にても名高き險しき峠なりしが、開け行く新道はよろ／＼と蛇の走る如く嶮岨を縫ひて、勾配は極めて緩に、車[illegible]

澤の驛に着きぬ。驛の少し手前に、雄物川の水おもしろく流れて、岸より岸をと渡す舟のいと趣ある處にて、此處は昨年大洪水の時ことごとく水に浸されて、家屋財産も悉く失ひたる人も少からざりしよし渡し守は語りぬ。この橋梁の落ちたるも實にその恐ろしき夜の事にて、俄に漲り來りし水の流れの急なるに、堤防は只一瞬の間に突き破られて、潮の如くどッと湯澤の町に流れ入りたるその凄じさ、殆ど譬ふるにものなかりき。殊に、町にても美しき少女の一人に數へられたる呉服屋の姉娘は、家と共に押流されて行方だも知らずなりたるに、心の弱き母親はそれを悲しみて氣狂ひ、果ては一家斷絶したるが、げに水といふもの程恐しきものはあらじと彼はいふ。あゝこの穩かなる水も一度はさる恐しき事を爲したるかと思へば、亂れ勝なる胸はまた動きて、見もせざる少女の姿さへ心にうかべて、座ろに雄物川のさびしき秋を弔ひつ。

淡きは旅の興ならずや。

院内にてわが車はとゞまりぬ。西に走りし兩傍の山脈は湯澤を過ぐる頃より次第に迫りて、漸く峠の近きを覺えしが、車を下りし時は美しき羊毛より白き雲おもしろく前嶺にかゝりて、わが越えて行くべき峠の路の電信標は、遠くその晴嵐の中に通じたるを認めぬ。晝飯には稍早かりしかど、これより先には最早したゝむべき所もあらじと言ふに、さらばとてある旅店にてそれを濟し、さて峠を越すべき駕籠ありやと問ふに、無し。馬ありやと問ふに、それだに無し。十文字にて聞きつる時は馬なり駕籠なりい

車は鳥海山を路傍に認めながら、一帶並木松の間を走りて、時の間に六郷、横手など言へる處を過ぎしが、一驛毎に變り行く車夫の物語の面白さ、政黨の選擧に關したりといへる壯士上りのものは頻りに田舍政治家の無能を罵り、鑛山の掘子を三年勤めたりといへるものは絶えず洞穴の中の恐ろしさを語り、或は色白き四國生れの男の故郷をかく遠く離れて佗しき生涯に淪落せるを悲しめる、或は博奕を好める土地の者の頻りに遊廓の事を說けるなど、珍談奇話車の輪のめぐるがごとく、絶えず耳を樂しましめて、我は車上の無聊を慰めらるゝ事少なからざりき。長亭短亭相送り相迎へて、日の暮れなんとする頃、われは十文字といへるさびしく狹き驛に着きて、その四ツ辻の一旅亭に投じぬ。こゝは驛と驛との間にて、昔はさして泊る人などもあらざりしが、黑澤尻より秋田へ通へる新道の岐るゝ所となりしより、旅客の來り泊するもの多く、小さき驛の割合にはいづれの旅亭も皆込み合ひたる由なれど、秋寒く人少き夜のさびしさは一方ならず、茶を賣り歩く一人の行商と相宿になりて、いろ／＼とこの地方の茶に乏しき事、運搬の不便なる爲め僞に賣りても中々間に合はざる事などを聞きしが、半夜の夢圓々たるところなくて、旅窓を洩る、月影に、歸心の矢のごとくなるを覺えつ。いつその事此處より黑澤尻に出でて、汽車にて東京に歸りてんかとも思ひしかど、折角の計畫を悉く水の泡になさんもあまりに口惜しと漸くにも思ひとまりて、あくる日はまた驛間より昨日のごとく車を走らせて客心蕭條と旅亭を出でぬ。今日は院内峠を越えて羽前の國に入らんと思へる身の、出來得る限り道程を急がせて、午前九時には早くも湯

の心を知りぬ。この情や幽欝にしてしかも一種の穩かさと一種の腹立たしさとを備へたるやうなり。腹立てるはわが意のごとくならざるを怒るにて、靜なるは怒りつゝも猶その運命に縋らんとするの情あるが爲めなり。意氣地なきは人の情ならずや。運命に强制せられながら、しかもその運命の惡魔に抗する事能はず、却りて樂しみつゝその手に縋らんとすとは！　かく悲しき事を思ひめぐらすとする間に車は昨日過ぎし路を走りて、いつかかの上淀川の橋をも過ぎ、漸く刈和野近く來りしが、鳥海山の群山の上に拔ける姿は、並木松の間よりいと美しく顯れ出でぬ。神宮寺などいふ處を過ぎて、御物川にかけられたる長き橋を渡れば、この地方にて最も繁盛なりと言はれたる大曲の町早くも森の陰に見ゆ。此處にて午餐を食ひ車をかへなどす。家の構造のすぐれたる、家並の揃ひたる、地方にては珍らしき都會なり。この秋田街道にはいまだ鐵道の敷設せられざれば、概して人車の便利よく、改良、英運などといへる組合さへありて、車賃も一定の規則あるなど、旅する人の便言ふべくもあらず。我は昨日まで草鞋ずれの痛み堪へ難かりしが、今日は熟路を走り行く車の轍いと穩かに、秋の日のほの暖きを滿身に浴びながら、詩とも言はず、歌とも言はず、思ひ出づるまゝの空想に耽り行くその樂しさ！　恰も今まで力を盡して登り行きたる急流を更に軸を廻して下り行くがごとく、或は又病やゝ癒えたる患者の獨り暖かき曝背を爲せるが如く、佗しき中に一種言ふべからざる愉快の情の伴ふを覺えぬ。あゝ何ぞのぼり行く事の難くして流れ下る事の速かなるや。

も、秋田までは行かん、其處まで行きてさて其後の分別を爲さんと決心して直にその車に乗移れば、めぐる車の脚早く、午前十一時といふに、兎に角に志したる秋田の町に入りぬ。

とある旅館に着きて、昼餐など何彼としたゝめしも、脚は猶依然として一歩も歩み難く、醜き形して歩かざらんとするにさへ一方ならざる苦痛を覺ゆるに、折角此處まで來りながら、八郎潟の奇勝を探りて、其風景よき雄鹿半島をめぐる事は勿論出來ず、珍らしき秋田の町の風俗をさへ出でて見る事の叶はぬ悲しさ！　我は運命のはかなきに泣きたるは幾度か。

詮なし／＼この上は車を雇ひて一直線に歸途に就くより外に手段とてはあるべきにあらず。それにしても出來得るならば、元來りたる路を繰返して歸らんより、本庄、酒田を經て、海岸通りを山形へと出づるに如かず、と、それを旅亭の主人に問へば、海岸は路悪しく、交通の便乏しく、とても通し車は得る事能はざるべしとの事なり。あゝ不運はいよ／＼不運！　ましてわが囊中にはその悪しき路を車にて辿り得ること餘裕を餘さゞるをや。明日にして足猶癒えずんばわれは昨日經來りたる路を一直線に車を走らせて、このまゝ急ぎて歸途に就かん。かく決心して其夜は有耶無耶なる夢を遠き秋田の旅亭に結びぬ。

あくる朝わが車は中通りを輾り行きぬ。

わが脚は遂に癒えず、我は蕭條として獨り悲しく歸途へと就きたるなり。わが胸には限りなき悲しき情ありて、そは恰も物を失ひたる時の口惜しさのごとし。我は今にして始めて運命に牽制せらるゝもの

あゝはかなきは人生の行路なるかな、思ひの儘にならぬは人の世の習慣なるかな、われはその郵書を出したる翌日、秋田より路をかへさねばならぬ事とならんとは！ 何故と問ふ事勿れ、こは實にわが足の疼痛いよ〱烈しく、上淀川驛の少し手前にて殆ど一歩も歩むこと能はずなりたるが故なりき。

其時の心細さをわれ今に忘れず、そは恰も上淀川に入らんとする低き山と山とを切開きたる處にて、その向うには上淀川の驛の入口の板橋かけられたるが、我は其橋の欄干に凭りて、傍なる低き丘に尾花の風に靡く樣を見ながら、人生の意のごとくならざるをつく〲思ひぬ。誰か都を出づる時この汽車の便だになき二百餘里を隔てたる一僻地に足を痛めて、かゝる悲しき事に逢はんとは思ひ懸くべき。又都の人々も今われかくして苦しみてあらんとは更に露ばかりも知らぬべし。傍なきは一紙隔てゝも早その先を知ること能はぬ人の智慧ならずや。悲しきは思ふこと皆傍より齟齬し行く人の運命にあらずや。五十年のわが一生も亦この旅の思ふまゝにならぬが如く、思はぬ處より思ひがけぬ事生じて、その志したる百分の一をも達せずして止むことなしと誰か言ひ得む。運命の神よ、殘酷なる運命の悪魔よ、汝はいかなる牲物を得て、われにその運命といふものゝ神祕を告げんとするか。

胸は騷ぎ心は亂れわが袖は濕ひぬ。

橋の上に立ち盡せる我を疲れたる物とや見けん、折しも過ぎかゝりたる一人の車夫は頻りにわれに乘車を勸めぬ。好し、此處まで來りたる上は、假令囊中の錢乏しとも、假令其地に知りたる人はあらずと

行くこと十有餘里、日も暮れなんとする頃に、鳥海山の深紫色を呈して群山の上に聳えたるを並木の松の絶え間に認めしが、猶行き／＼て其夜は苅和野驛の一旅舍にやどりぬ。足は猶痛む事夥しく、二階の昇降にすら一方ならざる困難を感じたれど、頑なる我心は猶變ふべしとは思ひもやらず。湯に入りて、一夜を穩かに眠りたらんには、翌日は忘るゝごとくならんと信じて、按摩も頼まずに臥床に入りしが、思ひ出せしまゝ、都の人にわが行程のほどを知らさばやと、手を鳴らして硯を借り、蒲團の上に腹這ひながら、頻りに行程を數へ始めぬ。明日は秋田に入り明後日は八郎潟を訪ひ、猶二三日をその東北第一の勝地に過したる後、本庄、象潟、酒田と、一筋に海岸をつたひて、十月の二十日には遲くも母の故鄕なる山形の地に入る事を得るならん。其處はわが舊藩侯の甞て治めし處にて、國替になりたる後も、わが一家は其陣屋なる高擶の村にとゞまり、母は二十五歳の時までその村に住み、長姉などは實にその遠き寒き國に生れたるなりき。母は稚きわれを膝に寄せて、いかに多く其高擶の事を語り、いかになつかしくその故鄕の事を言ひ給ひけん。こゝに山寺の奇勝と月山の姿とはいたくわが稚き心を動かして、一度は必ずこの母の故鄕を訪ひ、そのなつかしき昔をも偲ばんと思ひし事幾度なるを知らず。されば今回の旅行の重なる目的は、松島、八郎潟の諸勝にありと言へ、傍らその山形の一小村落を訪ぬるをまた樂しみの一つと爲しき。われは旅程を仔細に記して、十月の二十日頃には必ず山形の地に入るを得べくと追書して、それを郵函に投ぜしめぬ。

拾ひせしとて、かへす〴〵も禮を言ひて、あくる日一日此處に留り、其の翌日獵師をば頼みて生保内に送り遣りぬ。今年も一人や二人はあるならんと老爺は語りぬ。

山巓の番小屋、そを守れる朴訥なる老爺、我は限りなく面白しと思ひぬ。ここに十七日ばかりの月は岩手山の背後よりさしのぼりて、その黒く大なる山は小さき諸山の上に長くその影を落したり。まして木枯の前驅とも言はるべき風は、早くも山巓の梢を渡りて、その吠ゆるが如き聲の中には冬の凄じさのこもりたるをや。我は破窓より洩れ來る月の光を浴びそのさびしき音を聞きつゝ、夜もすがら物を思ひき。

旅客よ。心ある旅客よ。もし緣ありて陸中羽後の境なる、その國見峠を越ゆる事あらば、その絶巓の番小屋にわれの淋しき暮秋の一夜を過したるを思へ。而してその番小屋より猶一町程登りたる所に一つの小さき池ありて、この池の前なる里程標にわれの名ありやと檢して見よ。そはわが吹き渡る淋しき秋の風に吟じて翌朝羽後へと下りたる時の興なれば。

二

輿に乗じたる國見峠の下り路にわれは右の足の踝を痛めぬ。されどこの一蹶のさる憂ふべきものならんとは夢にも思ひ懸けざりき。角館を過ぐる頃より、歩む毎に足岑々と痛み初めて、稍堪へ難きを覺えたれど、こは唯一時にて、やがては元に復するならんとさして心にも留めざりき。かくてその日も道を

の日こゝを越えたる旅人を救けたる事ありやと宣ふか、そは幾人と數も限りも知れ侍らず。現に昨年なごは人一人死せんとせし處を救け遣り候ひぬ。そは十二月の半頃の事なりしが、その日は朝より吹雪盛にて、一歩も戶外に出づる事叶はざりしも、晝頃より少しく穩かになりたれば、水汲まばやと桶提げて出でて行きぬ。その淸水の出づる處は、御身も登りたまふ時、其傍に過ぎ給ひしならん、これより一丁ほご下りたる太き一本の松の根本にて侍り。おのれはその少し下に行倒人ありとは露知らねば、いつもの如く松の根本の處に行きて、ちよろ〳〵と冬も流れ出づる淸水を汲み終り、いざ歸らんと思ひしが、蟲の知らせともいふべきものか、かゝる吹雪の烈しき日には、間々行倒れなごのあるものと、それとなくおのれの職務を思ひ出して、見るともなく四邊を見廻し侍りしに、其處に合羽を被たる一人の男凍えて倒れ居たるには候はずや。己はいたく驚きしが、思ひ定めて第一に體の周圍を改めて見しに、久しき前に倒れたると覺しく、全身悉く冷えわたりて、蘇らん希望も見えぬに、少からず失望し侍りたれど、伴れ歸りて火になりと暖めたらんには、萬に一つ蘇る事もあらんかと、其儘負ひて歸り來り、盛んに火を燃して、十分ばかりも暖めしに、幸福にも、其人は呼吸を吹きかへし、次第に人心地つきて、その日の夕暮には、人並に口をきくことも出來るやうになり侍りぬ。生れは東京にて、秋田まで行かんとして來りたる商人なるが、橋場にて强て留められたるをも聞かず、無理に登りて來りたる由。山に來て山の人の言葉を聞かずば兎角かゝる間違は出來易ければとて呉々もこの後を意見せしに、まことに淺慮の爲めに命

中に盡きて、旅客のさびしげにその碑前に立てる姿、さびしき新月の影の遠く茫々たる尾花の原を照らせる樣など畫くがごとくわが眼前に浮び來るを常となしき。宜なり、客舍の月下遠く前程を思ひやりて、感傷の念そゞろに胸に迫り、都を思ふの情脈々としてその盡くるところを知らざりしや。

　されどわが笠の姿は時の間にそれをも越えて、一の關、中尊寺の古跡をも見、岩手の山、北上の川、さては繁盛なる盛岡の町をさへ悉く見つくし探り盡して、十月の十日には紅葉谷を埋めて行人皆赤からんと稱する羽後陸中兩國の境なる國見峠の嶮を渡り、其夜は山嶺なる番小屋の圍爐裏の傍に、朴訥なる老爺を相手にいろ／＼樣々なる事を語り合ひき。老爺は圓き木の根を圍爐裏に投じながら、やがて來るべき冬のさびしさを語りていふ、これよりの山の寒さ、都の人の思ひも寄らぬ所にや侍らむ。峠を越え行く人の跡は全く絕えて、雪は峯にも尾にも降り積り、嵐吹雪などの絕ゆる間もなく、一步も戶外に出づる事能はぬやうなる日の十日も續く事さへ侍り。さる時は淸水汲みにも行かれぬまゝ、雪を解かして米を炊ぎ、氷を用ひて湯を沸かすなど、そは一通りの佗しさには候はず。霽れたる日にはをり／＼鐵砲携へて近き山々を獵らぬ事もなきには侍らねど、おのれは冬の日この峠を越ゆる人の爲めにとて、政府より給金賜りて、此番小屋を守れる身なれば遠くまで獵に行く事も侍らず。されどこの近くの山々には、鹿、猪などの獲物多く、熊も四里程も山奧に行き候はゞ、幾箇も捕る事を得る由に侍り。現に昨年なども、生保內と橋場との獵師の間に、熊狩の事にて大紛擾の起りたる程なれば……。何かと言ひ給ふ、冬

陸羽一匝

一

運命のあやしき手に弄ばれてつく〴〵人生行路のはかなきを悟りしは、奥羽に遊びたる四五年前の秋の旅なりき。蕭條たる秋風高く澄める大空に吹きわたりて、氷店の暖簾も大方撤し屋の行燈こそかはれる頃、我は芭蕉翁の遺跡を趁ひて、新しき奥の細路の淋しさを味はゞやと草鞋脚半に身を固めて、一人さびしく都門を出でぬ。海道の波の音遙かに夜ごとの夢に通ひて、平潟の月には勿來の關の昔を偲び、松川の浦には夕の雲のさびしきを眺め、松島に入りしは舊暦の九月の十三日なりき。冴えたる月白く千里の波を照らして、ところ〴〵に黒く浮びたる島々の松影美しく、更けたる夜の欄干に我は懸涙の襟を沾すを覺えざりしが、更に前程の遼遠なるに思ひ至りて、益々限りなき寂寞の情に加はりぬ。

「三日月の丸くなるまで南部領」これ昔時南部の入口に立てられたる碑の句なりといへり。山高く地僻に、百里の高原遠く人を見ず。路は徒にすがり海は徒に拓けるその荒野のさまは殆どこの一句の

さまに餘念なく見入りつ。

* * * *

唉！　連日の好晴は遂にわが爲めに全く好運ならざりき。鳥居峠を美しき夕日の影に越えたる我は、いかでか木曾山中一夜の大雪に逢ひて、數日山中を出づる事能はざる不運に遭遇するを思ひ懸くべしや。大雪！　大雪！　われは數日間その降り頻る大雪の中にありて、如何に都の春を思ひ、いかに別れて來つるかの妙義の梅の盛りを思ひたりけむ。かくてわが久しく閉ぢ込められたる藪原の里を出でて、かの棧橋、寢覺の床などの諸景を探りしは猶數日の後なりき。あゝ木曾の大雪！　われはいつの日かこれを記さむ。

峠にかゝりしは午後四時を過ぐる事十五分なりき。美しき夕日は一しきり谷間より流れ下る溪流の上に輝きたりしが、いつかそれも消えて、今は只纔かにのぼり行く半腹のおもしろき一本松の梢に微にその餘光を殘せるのみ。雪の深さは和田峠の比にはあらで、中央につけられたる一條の路すら纔かに片足を容るゝに足れるばかりなりき。されど雪には稍馴れし身の、勾配の烈しきにも、凍りたる山陰の雪の甚だ滑り勝なるにも頓着せず、一直線に帶の如き路を曲りくねりしてのぼり行けば、やがて路は麓より見上げたる老松の處へと通じ行けり。老松の根元には一つの小さき赤き華表の八分ほど雪に埋れたるありて、その奥の小祠は全く雪中に埋沒し了りたるなるべし。只そのあたりと覺しき處の少し高くなれるを認めぬ。此處より見上ぐれば、縷のごとき路はあのやうなる處をたどり行くにやと危まるゝ處を遠く繞ひて、左には豁然たる大谷さながら大斧を以てゑぐりたるがごとく極めて濶くひろがり渡れり。されどこの嶮峻なる路も、一歩〳〵たどり行けば、さして困難をも感ずる事なく、その茶の緣のごとくなる處をも恙なく越えて、遂に峠の絶嶺の茶店の小さく見ゆる處まで行きぬ。

見よ、その絶嶺の景を。

わが立てる處は山懷の地の些しの風をも受けざれど、山の彼方には烈しき風の吹すさむと覺しく、吹き起されたる雪片の夕日の影に美しく閃きながら、峠の絶嶺のやゝ開けたる處より、蓬々と此方の深谷に吹き飛ばさるゝさまの美しさよ。まして其處には風情ある一軒の救小屋！　我は少時立ちてこの吹雪の

の跡の彼方此方に雨戸を建て莚をかこみて佗しげに物語れるいよ〳〵悲し。まして北風の烈しきに燒跡の灰燼の雪のごとく飛びわたれる、その佗しさいかならむと思ふ。

かくて路は絶壁より絶壁へと通じて、絶えず犀川の溪流に沿ひつゝ、幾重ともなき山を右へ左へ踰え行けば、濶かりし谷地は次第に迫り、緩かなりし溪流は次第に急に、路また漸く上を仰ぎて、遂に山の半腹とも覺しきあたりに數軒の人家の山に架し溪に臨みてさながら唐畫のごとくいと面白く散在せるを認むるに至る。これ卽ち奈良井の驛なり。

驛後よりかの鳥居峠は起れるにて、この峠より實に木曾の大觀は始まれるなり。されどわれの好運なる、木曾の山中に入りて、未だ一度も雪に逢はず、この嶮峻極まれる鳥居峠をも美しき夕日の影を帶びていと穩かに越え行く事を得る身ならずや。われはとある茶店に早くも破れかゝりし草鞋をはき替へながら、

『峠は別に變つた事はないかね。』

と問ひしに、

『別に變つた事はありましねえ、二三日前まではお救小屋に番人が居りましたゞが、かう天氣がよくなつては用が無いからと申して、もう下りて來ましたゞ。』

と茶亭の主婦は答へつ。

れど、兎に角向ふの家に行きて尋ね見よと、向側なる汚き食物店を指して教へ呉れぬ。行きて見るに無しといふ。外に何處かあるまじきやと重ねて問へば、町外れの錄の處にはあるかも知れぬとの事に、その所副錄の塵をよく聞き糺して、辛くも一椀の飯に有附きし嬉しさ！　これも木曾に入りし徵なるべしなど思へば、なか／＼に心細く、今宵はいづくの里いかなる茅屋にやどる事かと覺束なし。昔は木曾といへば日本にも名高き街道にて、本陣、本馬、輕尻などきはめて賑しきところなりしに、いかに冬とは言ひながら、午餐一つ滿足に準備する家なしとは、まことに哀れなる有樣ならずや、など思ひながらとぼ／＼として歩み行く。雪は思ひし程深からねど、御嶽よりおろし來れる風顏も切らるゝばかりにて、曲りめぐる山の絕壁毎に顏を背けつゝ進み行く寒さ佗しさ、雪よりも甚し。

本山を過ぎて櫻澤といへる所に至る。人家皆溪流に架して、對岸に障壁を立てたるがごとき奇山を仰ぎ、まことに心ゆく所なり。平凡なる犀川の流は此處に一こころおもしろき激湍を作りて、水聲の絕壁に反響する音さながら遠雷を聞くがごとし。ここに溪流のこころ／＼島嶼のごとき凸地ありて、其上に叢生したる小松の上に薄雪の積りたる風情、われ畫工ならば描かでは過ぎ行かじと思ふも甲斐なしや。溪流に添ひて、右に左にたどり行くとするに、ふと一小谷地を隔てたる高地に怪しき薄青き烟の低く地に這ふ音あるを見る。彼方より來れる人に問へば、それは贄川の驛にて、昨夜の火災に全燒したる跡なりといふ。この雪の山中にもさる災は免れ難きものなりやと悲し。やがて其跡を過ぎ行くに、燒け出されたる人

最初の光を死したるごこき氷湖の上に浴せかけたるのみならず、その絶間よりは雪を戴きたる富士の姿、えも言はれぬ薄紅色に彩られて、さながら畫ける如くいこ美しく顯れわたりぬ。あゝ富士！　われはかく叫びたる儘、絶頂の石に腰打懸けて、暫しはこの眼下に横はれる美しき自然の大景に餘念なく見入りぬ。木曾山おろしの烈しく耳邊に鳴るをも知らずに……。

五

鹽尻を過ぎて疾驅洗馬の古驛に入る。

洗馬は木曾十三驛の最初の驛にして、前には有名なる古戰場桔梗ケ原をめぐらし、背後に白雪皚々たる木曾の諸山を帶び、左に高峻驛絶なる飛驒乘鞍岳の餘脈を控ゆ。木曾義仲の馬を洗ひしこころにして、驛名はこれに因りて起るこ傳ふ。古蹟は驛の入口なる右側にありて、纔に石垣を取廻らしたる小さく淺き井を認むるに過ぎず。われはわが久しく夢にのみ見たる木曾の諸景のこれより取次に我眼前に顯はれ來るべきを思ひて、詩興今更の如く心頭に發し、路傍洗馬郵便局の字あるを認めて、直に入りて一葉の端書を購め、『これより雪を冒して木曾山中に入らんこす、木曾の最初の驛洗馬にて』こ記し、そをわが最も親しき友の一人に送りつ。それより午餐を食ふべき所なきやこ、行けごも〳〵無し。かくばかり名高き驛に午餐一つ食ふべき所なき筈はなしこ、ある家に立寄りて問へば、午餐のあらやなしや覺束なけ

雲影、山影、樹影、恰も別天地のごとき趣を呈せるならんと思ひき。爲ぞ知らん、わが想像は一つもその實を現する事能はずして、四圍の山甚だ遠く、境亦遙かに開けて、人煙、馬聲、却りて一大熱鬧地を現し來らんとは！　われは我姿の整はぬが爲め所謂大なる旅亭なるものより却けられて、木賃宿とも言ふべきいぶせく侘しき小旅亭に纔に身を寄せて、辛くも一夜を過したる憤激の情を敢て此處に洩さんとするにはあらず。將又雪になやみ風に吹かれて終日勞れ果てたる身を靜かに暖き溫泉に醫やす事能はざりし怨恨の念を此處に晴さんとするにはあらず。然れどもわれは確かに諏訪の湖水の風景なるものには失望したり。俗客羅沓、月琴の聲樣々の室より洩れ來れる諏訪の溫泉なるものにも失望したり。市町の風情といひ、四面に聳ゆる山の姿といひ、湖水の徒に廣濶にして、岸頭些の溪樹を生ぜざるさまといひ、一つとしてわが望を損はざるものなかりき。まして世に名高き湖水の氷上を渉り行く人馬の雜沓は、只珍らしといふのみに止りて、自然を愛づる我眼には、寧ろ甚だ風光を害するが如く感ぜられしをや。

只一つ猶諏訪を忘るゝ能はざる者あり。そは鹽尻峠の絶頂より連山の間に富士の白雪を認めたるの最なりき。諏訪を發ちしは、天地まだ薄暗く、霜の光稍連街の屋上に白かりし頃なりしか、旅程を貪る身の、捷きを街道に取りて、險しき絶壁の間、あるひは小暗き溪樹の蔭を、殆ど縫ふ許りにして辿りしか、漸くその絶頂に至りし時、見よ曠々たる朝日は今しも將にその兩山の相仄したる處、則ち天龍の長流の湖水より溢出でて、一路東海の波に注ぎ入らんとするの門處より、恰も黃金を投げたるがごとくさし上りて、その

流のたゞずまひも亦世の常のものとは異なれるに、冬の寒さに萎縮み勝なるわが興も常には似ず高く踊りて、漢詩など聲高く打誦しつゝ、曲りくねりする九十曲折を右に左に登り行きぬ。絶嶺近くなるまゝに、勾配は漸く急に、添ひて來りし溪流も亦次第に遠く眼底に落ちて、今は只纔かに遠き絶壁をめぐりつゝ流るゝ餘流を認め得るのみになりぬ。雪はまことに二丈もあらんと思はるゝばかり深く積りて、中央に踏み固められたる届二尺程の小徑を踏み外さんには身は深雪の中に陷りて、又如何ともする事能はざるに至るなるべし。あはれそれにしても我はこれより絶嶺に至る間の白雪と碧空とのさまをいかなる筆を以て狀すべきか。照り渡る日影の反映なくんば雪も大空も決してこの透徹したる趣を呈する事能はざりしなるべけれど、大なる金剛石の輝き渡れるがごとき麗日は、美しき百道の光を放ちて、白雪をしていよ〳〵益々玲瓏たらしめ、碧空をしていよ〳〵益々深碧たらしめ、更に白き雪と碧なる空をして、一種筆描き得ず口言ふ能はざる美しき反映を爲さしめたるをや。我は和田峠を渡りて、始めて晴雪のいかに美しきかを知りたるなり。あはれかくても猶冬の姿をさびしく、佗しく、生命なく、活氣なく、色彩なしといふか。

四

われ初め諏訪の海に擬するに幽邃なる山中の一湖水を以てし、四面の山突兀として皆來りて影を醮し、

発るべからず。

和田驛の旅亭の他驛に比して稍結構のすぐれたるは、一は峠を昇降する旅客の多くこゝに宿れるより、一は雪中淹留の客甚だ多きによれりといふ。榾火盛に燃えたる圍爐裏の裏に、冷え切りて感覺すらあらずなりたる兩脚を草鞋のまゝ突ツ込みて、熱きが御馳走なりといへる色悪く太き饂飩を掻き込みながら、峠は留りたるやうなる様子も無きかと問へば、いえ、まだ、そのやうな事は御座りませぬ。これが三日四日もつゞきて雪が降りますれば、そのやうな事もありますれど、一日二日では中々そのやうな事はありませぬとの事なり。心を安んじて猶二三杯その熱き饂飩を掻き込みたるが、盛に燃え上る活火の暖かさに全身蘇へりたるが如くなり、新しき勇氣の今更に湧くが如く胸に上り來れるに、この勢の失せぬ間に、七里の大嶺、一脚に蹂躙りて呉れんものと、草鞋の破れたるを新しきにはき替へ、猶不時の準備にと二足の草鞋を腰頭に繋ひ結束して旅亭を出でぬ。

牛馬の幾頭となく連り行く間を、殆ど縫ふやうにして進み行けば、久しく仰ぎ來りし和田峠の雪は早くも眼前に迫り來りて、その晴色の美しさ殆ど譬ふるに言葉を知らず。日は一點の雲翳もなき深碧極れる大空に限りなく美しき金光を放ちて、溪頭、絶壁、山隈に深く積み重れる幾帯の白雪と相反映し、空はいよ／＼碧く、雪はいよ／＼白く、其間を縫ひ行く我は恰も美しき日の七色の光を帯びて、この儘昇天するにはあらずやと疑はるゝばかりなりき。且峠の勾配も始めは極めて緩やかに、眼下を流れ下る溪

脚をさし入れしその快さ！　續きて夕餐の膳にのぼり來る一本の徳利、これに終日雪を犯したる寒さをも忘れて、うと〳〵と心地よく曉近くまで眠りぬ。

三

雪は二丈ほどの深さなりと越えて來し人の物語れる和田の大峠の今日は愈々踰えねばならぬかと思へば、心座ろに動きて、少時も氣をば弛めかねたるに、急ぎ旅亭を發ちて、長久保へと向ふ。幸ひに天は愈愈快晴にして、美しき朝日の影は四面を圍める山々の積雪に相映じ、その色の美しきさながら水晶宮中にあるがごときを覺ゆ。蘆屋などいふ處を過ぎて、雲雀峠を越えしは午前十時近き頃なりけむ。峠を下り果つれば田中より和田に達せる街道髮のごとく通じて、長久保驛の炊煙は早くも數歩の中にあり。されど我は前途を急げる身の、その驛外の一茶店に、破れし草鞋を代へ、ふかし立ての甘藷二本を購めしのみ。一直線に街を通り拔けて、直ちに積雪皚々として美しき天日に眩せる和田の大峠へと進む。

和田の大峠は諏訪と和田との間に跨れる一大山脈にして、西は木曾山の餘脈たる鹽尻嶺に接し、北は松本の市街を繞れる、奇偉絶特なる諸峰に連り、東は遠く佐久郡に於る諸山嶺とその脈絡を同うし、昇降大凡七里に超ゆ。されば木曾街道を行くもの、平時猶これを病むを常と爲せり。然るを今我二丈に踰えたる深雪を踏んで一杖一鞋遠くその嶮峻を渉らんとす。快は則ち快なりといへども、奇を好むの誚は

坂を、只一呼吸に登り難く、我にもあらで振返るとせし時、我はわが背後にパノラマを展げたらんごとき美しき一場の風景の横はれるを見て、不思不知手を拍ちて立留りぬ。

今まで森に隱れ人家に隔てられて更にその髣髴をだに認る事能はざりし淺間が嶽連峰の姿は、今しも落ちんとする美しき夕日の光を受けて、この世の自然の景とは思はれぬばかりにいと面白く顯れ渡りぬ。雪は既に麓に及びて、その山皺の夕日を受くる事の多少によりて、或る處は金剛石の輝くがごとく、或る處は金銀を鏤めたる寶冠を戴けるがごとく、或は赤に、或は紫に、或は碧に、山は今しも變化の限りを盡くして、以て其晴色をわれ等の前に呈せんとするが如し。あゝ誰か冬の神の姿を色彩なしとかいふ。この深碧極れる大空を劃して、巍然夕日の影の中に聳えたるこの雪嶺のさまは實に名状すべからざる冬の美しき姿ならずや。

往昔の望月の驛は、この險しき坂を登り果てゝ、溪樹深く連り立ちたる小暗き山路を其儘谷地へと下り行きたる處にあり。一溪流南より來りて、帶のごとく市街を遶り、數戶の人烟、數軒の白壁、浮世の靜けさはかゝる處にこそと思はるゝばかりいと風情ある古驛なり。日猶高けれど、長久保まで、三里に遠しといふに、脚も早一方ならず勞れたる身の、せめてこの古驛に一夜なりと過さばやと、驛の四辻を右に曲りたるところの一旅亭に、泥濘の上りたる脚半、草鞋をぬぎ捨てゝ、がたぴしと二階の階梯のきしみたる奥の一間、炭の香り靜かなる暖かき火燵の中に、冷え果てゝさながら鐵の棒のごとくなりし兩

ならずして早くもこの好奇なる旅のいかに困難なるべきかを知りぬ。見よ、わが前には和田の連山屛風の如く聳えわたりて、積りたる雪は恰も銀塊を重ねたるがごとく見ゆるのみならず、其處より下し來れる風はさながら切味鈍き剃刀をそのまゝわが鬢深き頰に當てらるゝ心地したるをや。路人に問へば、その一帶の山脈の中央とも覺しきあたりに一ところ美しく日に輝きたる所あらむ、そは即ちかの和田の大峠の絕巓なりと敎ゆ。あゝかの深き雪の絕巓を涉り行かねばならざるか。

二

岩村田を過ぎ、鹽灘を經て、一道虹のごとくなる千曲橋を渡る。川は即ち日本三大河の一なる筑摩川なり。されどこの川の上流見るべきの景なく、探るべきの致なしと聞く。八幡は川の對岸に連れる一市街にして、往古は望月の牧と共に馬を牧したる所なりといふ。このあたり雪稍少く、寒氣また輕井澤の比にあらず。われは、鹽灘の町外れに、老婆一人坐れる店より、大なる切餠二つ買ひて、それを午餐の料と爲せしが、成べく和田峠近きあたりまで步まんものとひたすらに道を急ぎて、更に後を顧んとだになさざりき。されどこころ〳〵泥濘深き路の、思ふ儘に足は進まず、望月驛の少し手前なる石無坂の下に來りし時は、夕陽早已に西山に近く、前なる低き群巒の影は長く沿道の松影と相交り、そゞろ寒き風は轉た旅の衣の薄きを覺えしめぬ。かくて石無坂と、名には呼べども しかも嶮峻削るが如くなる勾配嶮しき長

「湯があるからいくらかは暖いが、それでも木曾の山おろしが中々寒い。」

木曾といふ言葉に我は突如に傍より口を挿みて、

「どうでせう、今木曾に行かれるでせうか。」

「木曾！」……

と除隊兵は驚きたるもの〻如くわが方を見て、「それは行かれぬ事は無いでせう。けれどこれから木曾へ行くのは隨分大變だ。峠だけでも、和田、鹽尻、鳥居との三つを越さなければならないのですから、そして鳥居峠などは天氣の日ならば左程でも無いが、雪と來ちやそれや酷い。吹雪の日などはとても越されたものではない……。それで貴郞は名古屋へお出なさらうと言ふんですか。」

「否さうでも無いンですが。」

對話は此處に絕えぬ。そは碓氷の隧道漸く盡きて、輕井澤の平原遠く廣く我等の前に展げられたればなり。停車場附近には雪積ること五六寸、淺間の峻峰は全身美しき白衣を着けて、今しも晴れ渡る朝暾の光に打輝きて見ゆ。幸にも天は次第に晴れて、暗澹たる灰色の雲は漸く南の山脈に沈み行かんとす。

追分が原は只白皚々たるのみにて他の奇を見ざりき。御代田の停車場を下れば、泥濘にまみれたる一輛の馬車來りて待てり。これ岩村田に通へるものにて、かの除隊兵は二つの旅嚢と共に乘りぬ。我は囊中錢乏しき身の、その僅解けかゝりたる雪の中を一歩〱たどり行きしが、御代田の町を離る〻事半町

『此雪で、和田の大峠は止まらなければ好いがナア。』
『ナアにそれ程でもごあすめいが……』
こいふ聲聞ゆ、見返れば一人は除隊兵とも覺しき二十四五歳の男にして、答へたるはこの近郷の農夫とも覺しき頰冠りしたる五十歳ばかりの中老漢なりき。我も和田の大峠を越え行く身の、座ろに、心を惹かれて、少時二人の會話に耳傾けつ。
『お前樣何處へ行かッせるだ。』
『上の諏訪の少し在まで行くんだがね……毎年今頃一度や二度は峠が留る事があるのだから、實は油斷がならないんだ。峠が止つて、和田の旅舍に二三日籠城などは隨分氣がきかない話だからナア……。現に三年ばかり前の大雪に、僕は其處で三日ほど逗留したが、食ふ物は無し、話相手は無し、弱つて仕舞つた！』
『雪國アそれだから困るダ！』
『それから一時なんぞは、急な用で、風雪の中を人足を賴んで越えた事があつたが、それア峠の雪と來たら話にも何にもなりやしない。丸で雪が上から降るのでは無く、下から捲き上げるのだから、まごまごすると谷底へ吹き飛されて仕舞ふサ。』
『でも諏訪は暖い所だんべい？』

雪中の木曾

一

木曾の雪を見んとて俄かに妙義の寓を出づ。時は二月中旬なれど、碓氷連峰を背後に帶びたる山ふところの地は土氣春光を萌すこと早く、梅咲き、雲雀啼き、霞棚引き、昨夜の雪は夜半より雨になりて、秩父嶺一帶の雪は漸く鹿の子斑の趣を呈せんとはするなりけり。友はいふ、やさしき春の神はやがて美しき馬に跨り、彩色したる手綱を執りて、來りて君が眼を樂ましめんとすなるに、いかなればそを振捨て丶、殊更に生命なく活氣なく、佗しく淋しき山中には入らんとし給ふと。されど我は奇を好める身の、冬の神の姿の淋しきを愛で、雪の山水の美しきを思ひて、轉た興湧き神馳するをいかにすべき。

横川を過ぎて碓氷に入れば、山皺皆雪を被りて溪流亦淡粧を施せるに似たり。汽車の一隧道を渡る毎に、山中の積雪漸く深く、熊野平に至れば溪樹皆花を着け、岩山悉く白を頂きて、「昨夜上では中々大雪でしたな。」この語を車中の處々に耳にするに至る。あはれ暖地より來りて風雪の中に入らんとする汽車!

やがて路は五號と六號との隧道の間をひろき一條の新道へと出でたるが、それよりは境開け路平かに、竹藪杉村などの連りたる間より、幾百年を閲したりとも知れぬ杉の古樹の並木の陰に、その古の坂本驛はあらはれて、たえ〲のぼる炊烟、大なる旅店の荒廢、力餅の末路など、そゞろにおのが心を惹きぬ。われは曾て汽車の中より、この碓氷嶺の山水と坂本町の炊烟とを望みて、其境のいかに詩趣あるかを思ひ、わが腹稿中の小說の人物をこの間に點綴して、いろ〳〵と深き空想に耽りたる事ありたりき。しかしてわれは今實際の坂本街道に、その空想中の柳ある門、はね釣瓶、落魄したる旅店、養蠶の籠、盆踊のありげなる寺、無邪氣なる二三の少女、村役場、半鐘臺、人家の絶間の桑畑、十畝ばかりの竹藪、鼻唄うたひ行く馬子、念佛唱ふる老婆などを認むることを得たるは可笑からずや。

かくて碓氷の古道は盡きつ。

碓氷川に架けたる溪橋を渡りて、低き阪を一つのぼれば、早そこは橫川の停車場にて、十時二十分の汽車は、今將に發せんとする處なりき。我は飛ぶが如くに走りて、纔かにそれに乘る事を得つ。かくて我は車窓より首を出して、一片の白雲のおもしろく棚引きわたれる碓氷嶺と、煤烟斜に橫折れし淺間が嶽とを、幾度となく打ち仰ぎたるが、汽車はわが嶺上より望みたる上武二州の渺々たる平野を、終日轟々として輾り行きぬ。

果ては輿に乘じて、熊笹に深く埋沒されたる古道を、其儘谿地に走り下りつ。

一度は尾花の白き穗波の中に埋められ果てんとし、一度は毬の如く深谷の中にまろび落ちんとし、又一度はとある松蔭に立留りて一日を此處に過さんかと思ひつ。あはれ天然に狂へるものよ。汝の心はいかなればかく騷ぎかく亂れ、將又いかなれば平和の景に對しながらもかく烈しく狂へるか。

谷を越えて丘に上り、丘を踰えて林に入り、林を過ぎて阪を下り、更に又路の半絕えんとしたる熊笹千萱の彌が上に生茂りたる間を拔くれば、今まで上にのみ仰ぎ來りし妙義の奇峰はいつかその突兀たる頭尖を林の梢のかげにかくしつくして、顧れば上武の平野は、早已にわが眼界の外に逸し去りぬ。惜しき山よ、惜しき川よ、惜しき尾花よ、とつく〴〵と思ひたれど、しかも我は足を停めんともせざりき。

阪あり、林あり、丘あり、猶下れば、又更に林あり、阪あり、谷あり。猶々下れば、眼界はいよ〳〵益々せまくなりて、わが身は殆ど深谷の黑暗々たる中に落ち行く如き心地せられぬ。今まで明かに爽かなりし景色は、一朝にして暗く凄く淋しき舞臺となりぬ。下り行く谷はいよ〳〵深く、いよ〳〵黑く、遂に右の暗黑なる絕壁に、一道の飛泉の匹練のごとくにかゝりたるを認むるあたりまでに至りしが、怪岩の奇石と相嚙み窮崖の絕壁と相重れる隧道の如き間を過ぐれば、境は又俄に開けて、尾花の白き丘の上に更らに近くなりたる妙義の秀嶺の、鬼のごとく、惡魔のごとく、駿馬のごとく、牛蛇のごとく、千態萬狀を盡したるを認めつ。

として絶えざる縷のごとく、朝日に閃めきて流れ出で、その向うには、渺々たる平野限りもなく顯れ出でて、利根の殘流の一筋の布を曝したる、松井田町の白堊の一かたまり黒く朝日の光にかゞやきたる、ほがらかなる秋靄のそことも知らず立渡りたる、幾つともなく小さき丘の或は低く或は高く連りたる、濃き淡き林の平野の間の處々に點綴せられたる、一つとして人の心を動かさぬものはなきに、その全舞臺には、初秋の晴やかなる空の色と、何處となく淋しき秋の山翠との限なき美しき色彩の反映を偽せるにあらずや。

われは尾花の、眼の見ゆる限り銀針を靡かしたるさまと妙義の奇山の突兀として天半に聳立したる樣とを、只餘念なく打見やりたるが、ふと思出せしは、この碓氷嶺の紅葉の美を以て天下に鳴るといふ事なり。まことにこの全山の紅葉したらん時の美しさは！　この見ゆる限りの山々悉く美しき錦をつけたらんときは！

われは其美を想像するに堪へず。

我は叫ばんか、歌はんか、狂はんかと思迷へり。しかして傍にもし人あらば、その人の農なると商なると、愚なると痴なるとを問はず、そを捕へて美しきこの景色やと言はんと思へり。否それのみにあらじ。此時もし傍にて見居る人ありたらんには、あれは狂人かと言はるゝばかり、手を拍ち足を舞して雀躍したり。あはれ天然に狂へる我よ。

るべきをつく〴〵と思ひしめて、更に今一度とて少女の家の方を顧みしが、此時此少女は低頭きて、頻りに犬の頭を撫でて居たりき。

峠町は二三十軒ほどの茅屋敗垣より成立ちたるが、權現の森を背後に帶びて、遠く上武二州の平原に向ひたれば、その天の高く氣の澄みたるさま、坐ろにわが心をして波立たしむるばかりなりき。かゝる所に住みて、穩かに文讀み筆執りたらんには、わが願は足りなんと思ひつゝ、人家の軒に隔てられていまだ明かに見えぬ上武二州の開けたる平原の景の、一刻も早く全くわが前に展べられんことを願ひながら殆ど走るばかりにして大凡三四町も下りたらんと思はるゝ頃より、ちら〳〵と木の間〳〵に顯れ始めたる眼前の風景の美しさ、われはこの疎らなる木立の容易に盡きぬをまどろしく思ひつゝ、猶走りぬ。

林は遂に盡きつ。

パノラマと言はんか、大活畫と言はんか。われは今までかく迄明かなる、かく迄爽かなる、かく迄綜合の中に變化の妙をつくしたる景に接したる事なし。わが立てる草に埋れたる細きあれ果てたる路のすぐ下には、かゝる大なる谷もあるものかと思はるゝばかりなる大谷、ゑぐりたるごとくひろがり渡り、その向うなる勾配ゆるき平板を斜にしたる如き長きひろき丘には、閃々たる尾花隙間もなく靡きわたり、それより猶小さき谷二ツほど隔てゝ、妙義の奇山は恰も唐畫の山水を見るが如く奇極まり怪極まれるの奇狀を露し、その奇山峻嶺の將に盡きんとするあたりより、かの紆餘曲折したる碓氷川の激湍は、滔々

とゝのはぬ姿をあやしと思ひてか、或は往來の絕えしより臥席を被たる旅客などを見たる事なき故か、一疋の黑き毛したる純粹なる大なる日本犬は、飛び付くやうに馳來りて、けたゝましくわが脚元に吠えかゝりぬ。われはそれを蝙蝠傘に拒ぎつゝ、一步々々と後退りして逃れ行かんとせるを、猶一層烈しく吠え付かれて、今は殆ど困り果てたる折しも、何事ぞと戶口より姿を顯したる一人の少女、あはれその少女の美しかりし事よ。われは犬の飛び懸るをも忘れて、心をその少女の方へと奪はれつ。黑く凉しくて星のごとくかゞやける眼！　われは今までかゝる美しき光澤ある眼を見たることなし。少女は笑ひつつ、手を擧げて、頻りに犬を叱したれば、犬は聲を低うし、尾を振りて、その儘少女の傍へと走り行きたるが、わが方を見て、更に一聲むー　と唸りぬ。われは會釋を施しながら行過ぎんとしつ。

『この黑は人だに見ればいつもよく吠えて……』

我に言ふともなく、自ら語るともなきこの一語のいかにやさしく無邪氣なりしよ。片頰を笑ませつゝぢつとわれを見たる顏色のいかに愛らしく美しかりしよ。われは行々かゝる萬山の中に、かゝる少女の人知れず住まへるは、美しき花の谷間がくれに咲き出でたると均しく、深き意味のあるやうに思はれて、かのウオルズウオルスのルウシイといへる詩を、ゆくりなく胸に浮びぬ。人に知られず生れ出でて、人に知られず成長し、人に知られず人の妻となり、人の母となりて、しかして穩かに人に知られず死して行く少女の運命の意味深さよ！　われはかの穩かなる詩人の感の、かゝる折に觸れたるより起りたるな

輕井澤の古驛の炊烟は、絲のごとく垂直にのぼりて、處々に散在せる西洋館のさま、わが國の景色にてはあらぬやうなる心地せらる。不意に汽笛の聲高くきこえたりと思ひて瞳を凝らせば、追分が原の枯木の立ちたる向うに、白き烟を吐きて走り行く汽車の影いと小さく見ゆ。

　われは佇立顧望して、暫しは其處を去らんとも思はざりき。それにしてもわれのはじめてこの碓氷嶺を汽車にて渡りたるは、今より七八年前の初秋の事なりしが、われはいかにこの荒涼たる中に無限の深き詩趣な備へたるをうれし面白しとは思ひたりけん、ことにかの淺間が嶽のぬツとして汽車の窓を壓して聳えたるを、この世の中にかゝる美しき天然の景あるものなるべきかと、心を躍らしつゝ仰ぎ見たりき。更に最も忘れ難きは、木曾漫遊の途次、雪中にこの碓氷嶺を踰えて、白皚々たる和田の連峰を望みつゝ、御代田より諏訪の方へ一路遙々とたどり行きたる時の事なるが、望月驛に入らんとする笠取峠の絶頂より、われは遙かに淺間碓氷の諸山をふり返り見て、いつか又かの淺間の高嶺に攀ぢ、碓氷の古道をたどる事を得べきかと、いと覺束なく思ひたりき。然るを今秋氣淋しく山嵐衣を襲ふの日、高歌放吟して獨り此處を過ぐるを得るは豈意想外の幸福ならずや。

　やゝ登り果てゝ、清く細き溪流のさら／＼と十文字に流れ合へる芝生の平地の間を、暫くがほどたどれば、やがて最早その高き杉の立てる處にて先づ眼に入りしは、獵夫の家とも覺しき、知らぬ獸の皮を外面にかけつらねたる小さき破れ果てたる一軒の茅屋なりき。その茅屋の前を行過ぎんとせし時、わが

の銀針のごとき穗はいよ〳〵路の傍に多くなりて、朝日の美しき光に閃々ときらめきわたれるその美しさ、殆ど譬ふるにものなし。かくてのぼり〳〵て、われはその山の中腹に至りし頃は、氣息喘々として少なからざる疲勞を感じたれば、少し休まばやと思ひて、その儘花の閃々たる中に立ちて、ゆくりなく今まで見んともせざりしわが後の方を振返りつ。

これを第二回顧となす。

あはれこの第二の回顧の美しさよ。先の回顧には左の連山に掩はれて見る事を得ざりしひろき〳〵追分が原も、今は悉くわが眼下にあらはれ出でて、近きは佐久郡の山々より、遠きは和田の大嶺に至るまで、悉くさわやかなる朝の空にさながら印せられたる如く淡紫色に浮び出でて見えぬ。引かへて始めに見えたりしいろ〳〵の色したる森は、皆山と山との蔭になりて、今は却りて追分が原のところ〴〵に立ちたる枯木の梢に、旗のごとき純白の長き雲の靜かに沈みわたれるさまおもしろく見ゆ。淺間が嶽は以前より更に高く〳〵なりたるやうに感ぜられつ。見えがくれせし溪流の一筋長くあらはにかゞやきわたれるは、更に美し。

更に童山の間を縫ひて上ること二三町許にして、われは三度振かへりつ。

追分が原に沈み行きたる長き白き雲は、次第に右の一端よりぼかしのやうに消え行きて、朝日の光は既に淺間が嶽の中腹なる代赭色したる處より、更に黃褐色したる處へとうつり行きぬ。昨夜やどりし

此處は未だ數十歩登りたるのみなれば、遠く追分が原を眺めやる事能はざれど、しかも先づ展げられたる繪卷物は、座ろにおのが心をひきぬ。先づわが近くは、疎なる樺、榛などの林蕭條と連りわたりて、一刷毛なすりたるごとくなる黑く平たき山の向うに、曲りくねりしたる一道の溪流、極めて面白く見えかくれたるが、その溪流の右十歩をも隔てぬあたりより、かの有名なる淺間の連峰は起りて、代赭色したる絕大なる淺間が嶽は、朝日の光澤の美しく交れる大空に、巨人の立てるがごとく、ぬツとして屹立し、その絕巓には薄黑き烟ふわ〳〵として東に靡きわたれるを見ぬ。一片の淡き雲は遠く山背に消え行かんとせり。われは暫く其雲の次第に細く小さくなり行くを見てありしが、やがて思返して、そのまゝ右へ右へと曲り行きたる路を、又少しだら〳〵と左に下れば、下には細長く深き谷弓形に前なる山の裾をめぐりて、路はその谷の對岸づたひに、尾花の銀針を並べたる間を、左右より蔽ひ冠さるやうに聳えたる兩山のその最も凹く低き處へと通じたるものゝ如く、その凹き處には、幾百年を閱したりとも知れぬ四五株の老杉の半枯れたる幹、面白く生立ち、その中にて最も高き杉の梢は、今しも登らんとする旭の第一の光を受けて、その餘光は斜に左の半山の尾花にいと美しく反映したり。あはれかの杉のあたりこそは、峠町の權現の祠のある處にて、そこよりは上武二州の野は只それパノラマのごとく顯はれ出でて、山のうねり水の流れなどいと明かに手に取らるゝ如く眺めらるゝべし、かく思ひつゝ、われは谷に架けられたる土とも木ともわき難き苔蒸したる橋を渡りて、谷に沿ひて次第に上へ上へとのぼり行きしが、尾花

下

古驛を過ぎて次第に碓氷嶺の古道へと登り始めたるは、あくる日のまだ旭も登らぬ程の頃なりき。昨夜の苦痛と艱難とは、大空の雲と共に拭ふがごとく晴れて、これより美しき天然の大景は、繪卷物のごとく次第にひろげられんとしつゝあるなり。胸には限りなき樂しき情震ふが如く滿ちて、「氣横秋」といふやうなる感は、脈といふ脈をめぐれる若き血をして悉く全身に漲り渡らしめぬ。われはわが清く朗かなる詩吟の聲を、曉の新しき山翠の中に響かせつゝ、一歩一歩秋の草花の美しく咲亂れたる野より、西洋の景其儘なりと思はるゝ疎なる樺の林へとかゝりしが、路はそれより右に左に曲りくねりして、さらさらと寒玉を聯ねたる如き溪流にかけられたる朽ち果てゝぐらぐらと危き溪橋を渡り、尾花の兩崖より蔽ひかゝりて恰も雪中の隧道の如くなる凹き處を過ぎ、將に路頭に聳えたる一株の老松につきて、其儘右に曲らんとしたる時、向うより西洋人を載せたる山駕籠の飛ぶが如くに峠を逸早く踰え來るに逢ひぬ。

『坂本まで路の破れたる所は無きにや。』

『無し。』と答へたるまゝ、息をも休めずに、疾風の如く下り行きぬ。われは振返りて、その山駕籠の尾花の中に見えずなりたるを見送りたるが、更にその眼を轉じて、遥かに今朝立ちて來し方を眺めやりぬ。

これを第一の回顧と爲す。

なりてかゝる馬鹿らしき眼に逢ふと知らば、大屋にて泊りて來べきものをなどいひつゝ、先に立ちてわれ等一行を闇の中に導き與れたるは、聲の透りたる快活なる性質らしきまださまでは老ゐまじと思はるる男なるが、われ等はこの半里餘の闇路を、いかに辛苦を嘗めつゝたどりたりしか。されば輕井澤の古驛の燈火のちらりと闇の中に光りたるを認めし時は、よく言ふ譬なれど、恰も地獄にて佛に逢ひたるごとき心地してその嬉しさ限りなかりき。驛の入口の角にて、向うより提燈點して來りたる若き男に逢ひたるに、我等の先導者は、先づそれに向ひて旅店の所在をたづね、教へられたるまゝに荒廢したるらしき古驛の路を其儘右へと猶一町ほど行きたるが、とある汚らはしき木賃宿にも多くは讓るまじきと思はるゝ小旅店に就きて、一行七名泊めて貰ふ譯には行かずやと事情を話して賴み入りぬ。蒲團乏しければ應じ難しと、五十ばかりの顏色逞ましき男出てていふを、蒲團なくば二人に一枚づつにてもよければと强ひて賴みて、辛うじてわれ等は一夜の露を凌ぐべき家と半日の飢を醫すべき食とを得たり。

燈下に就きて、始めてわれはわが伴ひし一行は木曾御嶽にのぼりたる白衣の行者にて、先に立ちて我等を導きし男は、この一行の先達なりしといふ事を知り得たり。われは夜もすがらこの一行の所謂御山の事を語り合へるを聞き、意味解し難き御經を稱するを聞きて、殆ど睡を合することも能はざりき。

分け戸外に出でたる我は、遙かに旅店の方を望み見て先づ驚きぬ。洋燈晝のごとくかゞやきわたりて、聲々にわれ等を迎ふるならんと思ひし旅店は、皆悉く戸を閉ぢて、只門外なる瓦斯燈のみいとさびしげに夜を守れるにあらずや。否それのみにあらじ、怪みながら其前に至りて見れば、已に我より先に一群の旅客ありて、旅店の番頭らしき男と頻りに談判を試み居れり。その言葉を洩れ聞けば、最早いづれの家も旅客充滿して、お氣の毒なれどお泊め申すことなり難しとなり。

何たる事ぞ。

百人以上もあらんと思はるゝ不幸なる旅客は次第に集り來りて、その前なる廣場の處々へと陣取りつ。いづれも皆不幸の上の不幸をかこちて、或は派出所に行かんといふものあれば、或は戸を叩き破りて泊りて見れんと呶鳴るものあり。或は最早黎明まで半時間も無ければ此まゝ露營せずやといふもの、或は闇を侵して碓氷嶺を踰えんといふもの、其の評定區々にて、更にその盡くる所を知らざりき。われは兎に角に輕井澤の昔の驛まで行きて見ん、其處に行きても宿るべき家なくば、その上にて夜明しと決心しても遲くはあらじといへる七八名の一群の跡に尾きて、疲足を引きながら寒き淺間おろしに胴顫ひしつつ、くらき〳〵野原らしき處を、一直線に向うへ向うへとたどり行きぬ。此處は水溜りなり、左を行き給へ。此處は小き溝なり、ぴよんと飛び給へ。一寸待ち給へ、此處に小山のやうなる足場の悪き處あれば（とマッチを擦りて見て）さなり、左の方は丘なれば、右へ右へとたどり給へ。それにしても今頃に

破りて進行し始めたるは、殆ど十時近き頃なりき。われは車窓に凭りかゝりつゝ、今回の洪水を思ひ、中途にさまよひたる旅客の難を思ひ、その中にありて比較的にわが旅行の幸福なりしを思ひ、更に闇の中に首を出して、前に高く夜の空を限取りたる淺間連峰の黑き姿を仰ぎ見ぬ。此時、一燈倏忽としてさびしげにわが眼前を掠め行きつ、この微かなる光の中にこそ掬すべき平和はあるなれとふと思ひしが、爐邊に樂しく團欒せる田舍の一家族のさまは、直ちに幻のごとくわが腦中に浮び來て、つゞきて老婆孫嫁などの顏容も分明と眼に見ゆるやうにすら思はれしが、それよりいろ／＼と耽り行きし聯想は、遂にわが今宵やどるべき旅店の上に落ちて、その停車場の前の旅店には、洋燈畫のごとく明くかゞやき、番頭の客を迎ふる聲喧しく、風呂は沸き、夕飯は整ひて、今日の疲勞も忘るゝばかりなる快き一夜を眠る事を得るならんと思ひぬ。しかして明朝は黎明に碓氷の古道を！　いかに興深からずやと思へばわれは限りなくうれし。

小諸御代田もかく思ふ中に過ぎて、追分が原の寒き風氣は沁するがごとく次第にわが肌に徹し來りき。顏を出してゐたりしを見たれど、窓外には限りなき闇を破る一燈の影もなく、只纔かに少し曇りたる空を限取りたる低く丸き夜山の上に、一點の星のいと戀しげに閃めくを見るのみなりき。わが周圍には汽車の迅雷のごとき響の外、大風の高原を渡り行くごとき遙々たる音を聞く。

汽車はやがて碓水嶺の麓なる輕井澤の停車場に着きたるが、一刻も早くと改札口に群集する旅客を押

事ならずやと、詩興今更のやうに胸を衝きて、一日の疲勞も殆ど全く忘れたるやうに、一直線に上田の町をば通り拔けつ。平日ならばいと淋しかるべき田舍道に中途にさまよへる旅客の車の右に左に賑はしく往き違ふ間を、我も亦迷ふ事なくて、とある產土神らしき祠の傍を其儘千曲川の岸へと出でしが、此時は日は早全く暮れて、濁流の岸に漲りわたれる音暗澹たる薄暮の空に響きていと物凄し、半落ちんとしたるを辛うじて繫ぎ留めたるとある板橋を渡り終れば、浸水の害を蒙りたる人家數十軒處々に散在して、壁の名殘なく崩れ果てゝ骨ばかりになりたる間より、數點の燈火のさびしげに透きて見えたるなど、座ろに心を寒からしめぬ。ふと路伴になりたる男より、行々今回の洪水の急なりし事、上田のある湯屋にては家族六名寢たるまゝにて流されたりといふ事、某の紡績會社の工女數名溺れて死したりといふ事など、いろ〳〵聞きしが、二里の道はいつの程にかたどりて、やがて大屋の停車場へと着きぬ。その小さき停車場には、立錐の地なきまで旅客のつめきりて、互に今回出逢ひたる不意の難につきていろ〳〵と語り合へる聲いと喧し。ある者は越後三條附近にて汽車の俄なる洪水に追懸けられた實況をおのれ自ら見たりと語り、ある者は篠の井と坂木との間にて水に陷りて殆ど將に死せんとしたりといひ、或は明日越ゆべき碓氷の新道と舊道とのいづれが近かるべきかを問ひ、或は大なる包をかゝへたる老婆の明日いかにしてその六里の峠を踰ゆべきかと心配するなど、いづれもそは〳〵と心も落付かざるものゝごとし。

九時十分に發車すべき汽車はいたく遲れて、漸く待勞れたる不幸なる多き旅客を乘せて、轟々と闇を

しか。

そは秋の九月初旬にて、三河より伊勢伊勢より木曾山中へと迷ひ入りたる長き長き旅の歸途なりき。前夜信州淺間温泉にやどりて、我は初めて千曲川沿岸大洪水の風説を聞きしが、そのあくる日保福寺峠を踰えて、一路遙々上田の町に下りて見れば、其の浸水の光景は思ひしよりも甚しく、家は流れ人畜は死し、橋梁は落ち道路は破れ、害に遭ひたる人々の吹晒らしの野原に營を囲みて避難し居れるさまの慘澹たる、殆ど目も當てられぬばかりなりき。半陥落したる上田橋を釣籠にたよりて辛うじて渡り、我はその儘停車場附近に至りたるが、其處にて聞けば、汽車は到る處不通にて、これより東京までは、上田大屋間の二里の路と、碓氷嶺六里の險とを徒歩せざるべからずといへり。日も早くれぐに、濁流の上を吹來る風物凄く、座ろに旅情の寂寞を感じたれば、我は一夜をこの上田の町に過して、あくる朝都かにこの旅をつゞけむと一度は思ひつ。されどこれより大屋まで纔かに二里に近しと聞けば、急ぎて其處まで行きたらんには今宵の最終列車の間に合ひて、輕井澤までは行く事を得べし。其處にはわれ曾てやどりたる事ありて、清き浴場、暖き浴衣、今も猶其時の心地好さを忘るゝ事能はざる處なれば、十二里餘も歩みたる身の、少しは無理には相違なけれど、思ひ切りて行きて、その寢心よき旅店にやどらん。而して翌朝は黎明に其處を立ちて、かねてより心に懸けたる碓氷嶺の古道をたどらん。それにしても、この汽車のとまりたるが爲め、今回も徒らに過ぎ行くべかりし碓氷嶺を思ひもかけずたどり得るは、豈面白き

碓氷の古道

上

われ碓氷の嶙峋を渡る既に數次、しかも皆汽車の便を借りて、一度だに其の所謂古道なるものをたどりたる事なかりき。汽車の窓よりをり〳〵見ゆる草深き大路、三本杉の絶間よりほそぼそと立のぼる坂本町の炊煙、絶壁の下にかたよりて流れゆく碓氷川の激湍、そを見る毎に、わが心はいかに動きて、その荒廢したる昔の驛のさまと、今は早一人の旅客だに過ぎずなりたる峠の道のさまとを詳しく探らんとは願ひたりけん。ことに我は空想に耽り易き身の、景によりて境を思ひ、境によりて人を思ひて、この山と山の間に挾まれたる一小谷地を、殆ど別天地のやうに思ひ、殆どわが理想にゑがきたる仙境のやうにも思ひ、わが小説の腹稿中の人物をこの山水の間に點綴して、いろ〳〵と夢より甚しき空想にすら耽りたりき。然るを今茲戊戌の秋、我はゆくりなく久しく心に懸けたるその一小仙境を過ぐることを得て、山の聳え水の流れたるさまをいと詳しくも探り盡しぬ。あゝ碓氷の古道！　われはいかにしてたどり

飲み、仙果を拾ひ、溪澗に終日し、山巓に越歳し、飄忽粗宕、松風と水聲との外、更にわが耳を喧しうするもの無きに至るは、あはれ果して何の日か。

その大觀を見る能はざるを惜むこ。又曰く、此處は上野下野岩代三國の焦點なれば、その鬼怒沼の水三方に落下し、一は會津に至りて只見川に合し、一は上野の山中を注流して利根川に合し一は當國を貫流して常陸下總の間に至るもの、則ち鬼怒川の流れを爲すこ。

我は恍惚こして言ふ所を知らず。

瞻望すれば、絹沼山は右の方數步の中に聳えて、淸容美姬の如く、太郎嶽温泉嶽白根山の諸山は皆眼下に連り渡りて、怪特偉人の立てるがごこし。殊に男體山――わが上りてこの湖水を見下したる男體山は屹立千尺、巍然こして高く雲表に突出し、日影倒射、雲影出沒、そゞろに人をして神飛び魂馳するの情に堪へざらしむ。之に加ふるに北は上毛なる赤城、武尊の一大山脈、蜿蜒大蛇の走るが如く、小川戶倉の間を過ぎ、更に東走して岩代の國に入り、燧岳駒ケ嶽の大山脈に連れるより、南は鹽原高原の連山、連綿こして那須野の高原に君臨するに至る迄、一望則ち盡さずこ言ふ事なし。あゝ深山窮谷の中、誰かかゝる靈境のあるを思はんや。誰かかゝる風景のあるを思はんや。照尊院の主僧の夢寐忘るゝ能はずこいへるまここに故あり。

栗山の勝概こゝに至つて盡く。

車聲馬聲の喧囂なる處、鞭影衣香の陸續たる處、靜かにその山中の奇景を冥想すれば、詩興頓に與り、遊意頻に萠して、都會の熱鬧、更に一層の嫌厭を增せるを覺ゆ。然れごも我は是紅塵場裏の身、溪水を

れたるもの、急走疾驅、更に平地に異るなく、忽にして其姿を林中に失ひ、大聲を發して呼べば、答ふる聲遙かに天上より落ち來る。

氣息喘々、纔かに山樹空濛たる間を過ぐれば、やがてわが前には、渺々たる小篠原、限りもなく顯れ出づ。日光爀々と輝き渡りて、深碧なる一天はさながら淨玻璃を張りたる如く、山巒の蜿蜒と連亘するさま、雲影の飄遙と往來するさま、極めて分明に見え渡れり。この廣濶たる處を猶登ること十八九町、勾配は次第に緩かになり、眼界は次第に廣くなり、山嵐は愈冷になり、境は愈寂寞になり、遂に久しく心に懸け、久しく神往くに堪へざりし栗山の奥の奥、極の極なる絹沼の原野は、渺々茫々として、わが眼中に映じ來れり。快甚し。今迄の勞をも忘れ、疾走して我は之に赴く。行く儘にその景愈々奇絶、愈愈快絶、遂に所謂絹沼の岸頭に至れば、大小數十個の湖水、續々として顯はる、澄光清影、鏡の如く玻璃の如し。日光山志に曰く、その方位男體山の北に當り廣さ凡そ一里、水極めて清潔、奇草珍木、その岸に叢花し、松檜枝を垂る、沼底深からざるも、砂石皆五彩の色ありて水爲めに五色を帶ぶと。又曰く、四季の花卉常に絶えず、緑樹相蔭翳し、その景恰も錦機を織るの觀あり。因つて或は錦沼と稱す。とぞの言皆謬ならず。

導者は即ち曰く、此湖春夏の候は、雪解の水四山より集り、この廣渺たる原野、悉く湖水となり、その奇觀言ふ可き物も無けれど、今は恰も水少く草枯れたる節に際したれば、湖水はかくの如く分裂して、

時、膽戰へ神動くに堪へず。則ち去つて又榛莽の中を行く。

不意にして水聲大いに起る。右より左より、前より後より、或ものは轟然雷の如く、或ものは鏘然琴の如く、或ものは巨人の嘯くが如く、或ものは山靈の叫ぶが如し。しかもその境極めて促、極めて狹、極めて險、極めて必迫、一縷の路絶えんとする事數次、漸く山巓を穿つて、樹影の少しく開けたる所に出づ。則ち樹に凭り俯してかの水聲高き邊を窺ふ。

されど深黑晦冥にして、その奇景の一端を窺見ること能はず。只纔に奇岩怪石の矗立したると、數道の飛瀑の驟雨の如く落下したると、斷岸絶壁の削るが如く屹立したるとを見るのみ。これを箱淵となす。

猶行く事一里、遂に日光澤の溫泉に達す。溫泉守は既に十日以前に里に下りたるを以て、その寂寞なる事殆んど言語に絶す。家は雨の叩くに任せ、浴槽は落葉の埋むるに任せ、鳥聲獸跡、轉た山中隱者の感に堪へざらしむ。岩陰なる一小屋を訪ふ。是年々此處に住して、嚴冬猶里に下らざる一獵師の住する所、鬚髯黑く頭髮長く、一幅寒山拾得の遺容の如し。嚴冬雪白く風烈しき頃の消息を問ひ、熊狩り鹿狩りの快談を聞き、一浴して則ち去る。こは今日湖水を見て、此處まで下り來らんと思へばなり。

猶行く半里許りにして、山路は遂に草茂り樹重れる間に絶ゆ。

是より荊棘榛莽、殆んど名狀すべからず。されどその登るや今迄の如く緩々たるにあらずして、急峻立てるが如き勾配なれば、一歩一歩、その苦殆んど言語に絶す。導者は山間に成長し、嶮しき山路に馴

既に里に下らんとする頃なれば、絹沼までの導き、恐くは得難かるべし。且山は雪にも近づきたれば、態々行き給ひても、面白き事無きに相違なし。思ひ留り給へといふ。我は肯ぜず強ひて之を託す。さらば有るや無きや、捜して見るべしとて、主人は去りぬ。

晩に入りて、主人わが室に來り、幸にして導を得たりと告ぐ。

さては明日はその絹沼に至る事を得べきか。男體山の絶頂より見下したる、清光鏡の如く倒影玻璃の如き、その深山の一湖水の傍に立つ事を得べきかと、嬉しさにそはそはせる心を押包みて眠に就きしが、其夜の夢は既にその深山幽谷の境に飛びて、身はその一湖水の傍に立ちき。

排暁窓を推せば、殘月團明、山氣爽絶、われは快を呼びて起ち、匆々旅裝を整へ終る。既にして夜全く明け、導者亦至る。則ち行厨數個及び二日分の食糧を擔はしめ、自からは草鞋數個を腰頭に纏ひ、湯西川にて獲たる大杖を携へ、短刀は懐に藏して以て萬一の危難にそなへ、別を告げて靜かに發す。暫く鬼怒川に沿ひて行き、更に崎嶇羊腸たる山間を穿ち、將に險又險なる一嶺に上らんとする時、前山に聳えたる山巓の上より、旭日の輝々として昇れるを見る。行く事里許、樵路の中途に一瀑の龍頭を落したる奇岩より落下するあり。岩角を穿ち木根を越え、纔かに仰ぎて之を見る境既に晴雲、加ふるに樹影直蔽せるを以て分明にその首尾を辨ずる能はず。只一道の水晶簾の花々白々として黑暗々より深山の中に投ずるを認むるのみ。何といへる瀧ぞと問へば、是則ウツタテ瀧と呼ばるゝものと導者は答ふ。立つ事少

我の來れるや遠く、山に入れるや深きを知るべし。主人を呼びて、この水源なる紺沼迄の里程を問へば、猶是より六里強にして、日光澤より先は、路といふ路も無ければ、榛莽を分け荊棘を開かずんば則ち至る能はずといふ。

五

川俣溫泉の浴槽は、旅亭の奥にあるもの二、川の彼岸にあるもの一、いづれも適當なる溫度を保ちて、清瑩徹底、掬ぶに堪ゆべき程なれば、栗山鄕中、最も秀でたる溫泉と稱するを得べし。之に加ふるに、前山の紅葉倒に影を鬼怒川の瀨潭に印して、只是錦を布きたるかと疑はる。われは兩三度旅亭の浴槽に浴したる後、導を得て靈効神の如しといへる川原の湯に赴かんとしつ。川に沿ひたる岩を傳ひて、一町程行けば、半朽の獨木橋弓の如く架りてあり。危ふければ跣足にて之を渡り、二つ三つ石を傳へば、一箇の浴槽ありて、淸潔なる湯は、溢れんばかりに湧出たり。しかも屋根も無く、蔽物とても無ければ、木の葉は自由にその中に沈みて、詩趣に富みたる風情、又譬ふべき者もあらず。傍に一つの桶ありて、その熱き時前川の水を汲みて、それを和げん爲に備ふる者なり。我は座ろに仙境に入りたる心地して、その樂しき事言はん方なし。優遊多時、家に歸りて主人を呼び、明曉紺沼に赴かんと欲すれば、導者一名を得たき事を託す。主人之を聞き、頭を低れて躊躇の色あり。暫くして曰く、秋寂しく天寒く、一家

ざるを。

割愛して去る事能はず、遂に日をその溪澗の間に暮して、その夜は野門村の小栗氏に宿す。小栗氏はこの山中の素封、わが爲にこの栗山の勝を說く事極めて詳なり。夜、山風肌に徹し衾を重ねても猶寒し。翌朝、路は猶そのおもしろき溪流に沿へり。一阪を踰ゆれば、南より流るゝ川あり。大事川といふ。これをわたりて、山路羊腸たる間を行く。風景の絕佳なる事又昨の如し。氣息喘々として嶺を越ゆ。下に、瀨戶合權現の奇景を認む。

高百五十間、幅百十間餘なる舞臺石の一面は、奇々怪々の趣を呈し、踏然水に臨んで屹立す。この岩下に就きて見んには、その奇なるさま、人をして驚絕せしむるばかりなりと聞けど、路險に境遠く、容易に至り見ること能はざるを以て、止む。

川俣村より左折して、猶三里山奧なる温泉場に赴く。路は愈細く、境は愈寂し。途中の風景一として見るに堪へざるものなく、一として詩興を呼起すの料とならざるなし。愛宕山の姿は奇秀削るが如く、熊野澤の水は清深染むるが如し。更に一路を深林の中に求め、縷々たる松子の阪を登果つれば、其處の谷間、かしこの谷間に、幾條の烟蛇の如く縷々として渦上するを見る。是里人の炭を燒く所、呼んで炭燒澤と稱するもの。此處を過ぎて、蛇大岩の特立千尺なるを見、漸くして川俣の温泉に達するを得たり。家に對して流れ行く鬼怒川の水は、已に細く〳〵なりて、激湍跳沫の奇景を演ずる事能はずなりぬ。

阪路嶮なる悪曲峠にとかゝり始めぬ。

路は思ひしよりも嶮に、思ひしよりも危し。されど一曲毎に千尋の下なる亂水の飛躍するを望む景、又思ひしよりも佳絶なるは嬉し。一曲又一曲、今まで見えざりし水脈はるぐ＼と顯れ、一曲又一曲、絕壁の猛獸の如く突出したるさま分明に眼中に落ち、更に數曲を登果てゝ、嶮拔倒るが如くなる阪路を下る。

下り果れば、鬼怒川の大溪を跨ぎて、驚くべき一大危橋を架す。

これを大川筑となす。

あゝ此間の景、我は最早狀する事能はじ。われは未だ天下を周遊したりと言ふにはあらねど、平生の癖はわれを驅つて、近きは關東八州より、遠きは東北の千山萬水、且見且賞せずと言ふことなし。然れどもかくばかりの奇景を有せる山水郷は有りしか。かくばかり絶大なる山水を備へたる仙境はありしか、否假令かくの如くならざるも、少くともこの栗山の一景に敵し得べきものありしか。あらずあらずあらず、決してかゝる山水を有したる所はあらず。宜なり、照尊院の主僧をして、木曾を奇に失すとなし、熊野を峭に失すとなし、日光を麗に失すとなし、栗山の山水獨り天下に冠たるに足ると絕叫せしめたるや。

只恨む、我に仙筆なく、かゝる好山水に逢ひながら、その趣の一端をだに、記して世に示すこと能は

將に林を出でんとする處にて、我は二人の牧童に逢ひ、此處は何といへる澤ぞと問へば、間渡戸間渡戸と繰返して、彼等は怪しげにわが顏を覗ひぬ。

間渡戸！　これ即ち鬼怒川奇景の隨一と稱せられたる所にあらずや。

石多く幅廣き鬼怒川の水は、激怒憤越して巨人の叫ぶが如く、前岸に突出したる富士岩と名けられたる一大怪岩を掠めて左折し、更に數町の高さに及べる斷岸絕壁の下に咽び、又直流して岩石林立したる間を急駛す。

斷岸絕壁の上、紅葉は燃ゆるが如く、靑松は染なるが如し。我は中流に架したる一危橋の欄干に凭りて、暫くはわれの我たるをさへ忘れ果てしぬ。あゝ誰か思はん、深山幽谷の中、かゝる絕奇の風景あらんとは！かかる面白き山水のあらんとは！　日光深澤川原の如きは、到底これに匹敵する事能はず。

上栗山を過れば、路は絕えずこの奇景に富める鬼怒川の流れに沿ふ。足より野門に至る間、里程大略二里、奇景百出、愈出でて愈奇に、殆んど名狀するに暇あらず。流は左の絕壁に縋りて、高さ大凡三十餘丈にも及ぶべく、岩岸石は右岸の水中に屹立して、恰も二王の立てるに似たり。その進行く處至る處、水聲ならざるなく、奇岩ならざるなく、山影ならざるなく、紅葉ならざるなく、佳木美樹ならざるなし。しかも消ゆるが如き路は、此間を屈曲して、幾度となく岩多く水激しき溪流を橫斷し、一つ峠岐を越ゆれば一景顯れ、一つ崖岸を渡れば一景生じ、眞に應接に遑なきを覺えしが、一里直行して、忽ち河合に至れば、

あまつさへ一つの太き杖を出し、途中にて何か出でたる時の魔除に、是を持つてお出なされといふ。何か出る事などありやと驚きて反問すれば、否滅多にはありませねど、近頃熊が荒れると申しますればといふ。

心細き事限り無けれど、詮なき儘別離を告げて、朝日の光を後に負ひつゝ、次第々々に山深く分入り分入り、昨日に變らぬ寂寞たる間を二里許も進み行けば、やがて道は峠に懸りて、その險絕なる事殆んど言語に絕す。人には勿論逢はず、溪流の音も已に遠く、鳥聲も無ければ風聲も無く、只踏み行く木の葉のがさ〳〵と亂るゝ音のみなるを、其さへ猛獸の來りしかと疑はれ、心も心ならずして、黑闇々日光も穿ち得ぬ森林の裡を登る事里許、漸くにして絕巓に達し、遙に開けたる林間より瞻望すれば、此處は恰も日光女峯山の裏に當りて、その奇怪峭絕なる姿は、手にも取らるゝ如く見え渡れり。我は他鄕にて友に逢ひたる如く、奇と呼び快と叫び、準備の短刀を出して路傍の大木を削り、姓名と共に秋風寂寞孤影蕭條の八字を題し、其儘疾驅して峠を下る。登るや極めて險なりしと雖、下るや易の易快の快、十町立ごころにして至り、一里瞬間にして走り、未だ正午にも至らざるに、土呂部を過ぎ、黑部を過ぎ、更に捷路を貪りて、一道の溪流を徒涉し、一路の深谷を穿ち、山を越え谷を踰え、前面上栗山村の人家を認むる頃、行先は次第に開けて、水聲高く四山に反響し、忽然顯れたる一大澤は、今しも將に奇極り怪極るの一大奇景を、從容としてわが眼前に展けんとす。

邊の寂しさ恐しさは何處に行きしと思ふばかり、愈々益々皮を捲り齒を捨て、二つの袂に滿ちたる柴栗を殘る處なく食し盡したるが、その頃は早迫りたる山も開け、險しかりし路も平らぎ、湯西川の流は瀬淺くして次第に細く、志したる湯西川村の温泉場はかの山の蔭なりと聞き、我ながらその二里の路の近かりしに驚き、走るが如くにして、兀立したる前山を右に廻れば、幾歩の畑處々に顯れ、その末には一帶の平地、數縷の人烟、是即ち深山の奥又奥極又極なる湯西川村の温泉場なり。

湯西川の水に臨みて三軒の温泉宿あり。夏時は來り浴するもの百人の多きに及べば、その家の清潔にしてしかもその構造の壯大なる、窮山深谷の中にありとは思はれざるばかりなり。川に臨める湯本號を選みて投宿す。湯は溪流を挾みて四ヶ所に湧出し、清透玻璃の如く温和玉の如し。浴後獨木橋をわたりて向岸なる一大盤石の上に踞し、靜坐默想して獨り深山の靈氣を思ふ。前には紋を成して流れ行く水、後には突兀として重り合へる山、之に加ふるに日光下徹雲影往來、暖きこと陽春の候の如し。是に於て予は萬化と冥合し魂は岩石と默會す。

一

山中の人の質朴さ、それには及ばじといふを、強ひて橋の袂まで送り來り、さも親しき人に別るゝ者の如く、來年は必ず緩くりと湯治に來て下され、必ず待つて居りますぞと、涙を漏さぬばかりなる言葉、

響にも膽動きて、暫くは岩の角崖の下など極めて恐ろしく物凄き間をのみ恐る〳〵たどり行きしが、やがてまた曲れる溪を渉り、左に折れ右に曲り、更に水の膝邊に及べる深潭を渉り終れば、路は綫の如く縷の如く遙かに日影倒射せる小山の蔭に通ず。寂の寂寞の寞たるこの山路ほど、我は物凄く氣味悪く感じたる事なし。折々景色よき處に逢ひて、飽迄貪り見んとは思へども、あたりの風物の如何にも澄に過ぎ奇に過ぐるを以て、久しく佇立みてある事能はず。終には風景よりも山水よりも、只人に逢ひたし〳〵といふの念のみ盛に起りて、我ながら後を見らるゝやうなる恐怖の情に堪へがたく、遂には急走疾驅してなりとも、この大寂寞の山中を過ぎんとの決心を爲し、坂とも言はず峠とも言はず、一直線に驅上り驅下り、大略二里も來りしと覺しき頃、不意に眼界廣くなりて前に見ゆるは一二軒の茅屋！

曾て聞く深山にて人に逢ひたる程、嬉しく思ふ事はなしと。われこの茅屋の影を認めし時の心も、亦更にそれに異りたる所なからん。われは喜悦のあまり、疾く走りてそこに至り、戸を叩きて案内を乞ひ、檐頭を借りて暫く此處に疲勞を休め、更に湯西川に至るの里程を問へば、猶是より二里餘もありといふ。今迄の如く山深く境寂しきかと反問すれば、水を渉る所は無けれど、山の深く路の險しきは猶一層を倍すと答ふ。われは座ろに戰慄したれども、外に詮術の有るべき筈なく、勇を鼓して此處を去りしが、途々其處にて購めたる柴栗を拗り〳〵つゝ、歩み行くにいつしかそれに精神を奪はれたりと覺しく、路の險なるも境の寂なるも、鳥の鳴聲の怪しきも、蜥蜴のがさ〳〵と動くも、いつか心に留まらずなりて、今

水少なけれども石原廣き湯西川は、遙かに遙かなる山又山の間より明滅隱見して流れ來り、奇地絕特なる太郎山の麓を過ぎて、一度は林影深き處に沒し、一度は白楊絕えたる處に斷れ、更に亂石の間怪岩の邊を走りて、わが立てる山の半面を洗ひ、潺湲として枯蘆蕭條たる中に見えずなり行く。われはこの景に向ひて立ち、この景に向ひて吟し、悠然太古の如き感の起るに堪へざりしが、折りしも村歌を山風に歌ひて、悠々馬を牽きて來れる一人の村孃に逢ひ、是より湯西川に至るの方向とその里程のほどを問へば、村孃は破顏一笑、手にしたる竹策を擧げて、遙かに兩山相仄したる間を指し、湯西川までは是より四里、この川に沿ひこの流を渉り、更にかの山の奧の奧なりといひ、更に改めて川の前岸なる一縷の炊煙を指點し、かしこは西川の村なりと敎へ、優しき聲にて馬の進まぬ勝なるを叱しつゝ、やがて秋草深處に沒し行きしが、少時にして村歌を歌ふ聲、再び高く林中に聞えぬ。我は直ちに山を下り、淺渚を求めて溪流をわたり、秋風落寞たる白楊樹中の細路を踏み、前山に卷舒出沒する白雲の奇なるを仰ぎ、猶湯西川の細逕を徒渉すること數次、西川の村に入りて深山僻地の生計の憐むべきを見、殆んど隔世の人かと疑はる、村翁の無邪氣なるを喜び、我も亦座ろに山中の人となりたる心地して此處を去り、或は萱影の兩肩を沒するの處鳥聲の樹梢に遍ねき處を穿ち、或は路斷えて苔深き處石出でて水急たる處を過ぎ、行くまゝに進む儘に、遠しと思ひし山も忽にして前に斷はれ、遙けしと思ひし水もいつとなく後に隱れ、一步は一步より山深く、一間は一間より境寂しく、蜥蜴の草に隱る、音にも心戰へ、小溜の岸に落つる

に向ひて行きしが、その寒さその鋭さ、最早嚴冬の時節にやと疑はるゝばかりなりき。まだ染めあへぬに吹散されたる紅葉をがさ／＼と踏みて、例の如く岩石兀立したる山路を行く。五十里川は幅廣からず流急ならざれども、折々佇立みて見るべき所も亦少なからず。まして今日の山路は昨日と異りて、窮したる谷、迫りたる山、岩は聳え石は躍り、柳州が所謂舟行如窮忽又無際といふが如き詩趣を備へたるをや。前に連山脈々と重り合ひたれば、到底それを越えずしては、何方にも出づる事能はじと思ひつゝ、行けば、路は俄かに思もよらぬ岩石の間を縫ひて、遙かに前山の麓に通じ、更に劍拔矗立したる材木の如き岩を繞りて、猶も奥なる山間に達す。かくの如く山を越え谷をわたり、漸くにして少しく廣き所に出づれば、俄然前に大なる鏡の如き澄徹したる一澤水の現はるゝを見る。これ則ち五十里湖と稱せられたるもの。

山風は連りたる千頃の蘆荻を折るゝかと思はるゝばかりに吹撓めて、その烈しきこと譬ふるにものなし。われはその右岸を縫ひて疾走する事大略半里程、路傍一箇の土橋の弓の如く架りたるを見、足を佇めて仔細に橋頭を點檢すれば、旅亭の主人の言の如く、小さき古き一箇の路標の雜草の中に埋沒せられたるを發見す。左會津道右湯西川道と記されたるをたよりに、路とも思はれぬ程の細徑を右に折れ左に曲り、榛莽を分ち荊棘を穿ち、草間小蛇の走るがごとくにして、前なる一山を登り又下れば、渺茫たる五十里の沼はいつしか林間に沒却し、前にはそれよりも一層悠遠深邃なる風景、極めて面白く顯れ出づ。

階なる風清く氣潔き一室に卸し、今日の勞を休めん爲め、直ちに導を得て、川原に近き浴場に赴く。この湯少しく繁盛の趣を呈して、今猶四五人の浴客あり。浴槽も亦屋根あり戸ありて、風致前の瀧の湯の自然なるには及ばず。

浴し終りて、亞字欄干に凭れば、搖曳たる夕嵐、軒頭を襲ひ來りて、斜陽の影は濟々乎として殆んど將に無からんとす。乃ち婢を呼びて盃盤を命じ、陶然として醉ひ、悠然として歌ふ。既にして蒼然たる暮色遠きより至り、幽々たる明月東山の一端より昇る。松影山影、明淨なること白晝の如く、水聲風聲悠遠なること仙境の如し。樂しきかな此夜や。

三

翌曉木枯の風大いに起る。古木を振ひ大澤を動かし、その暴烈當るべからず。われは則ち孤影寂寞として旅亭を發し、五十里川の板橋を右に渡り、雜草叢生せる路を傳ひて、直ちに湯西川の温泉に赴かんとす。この村や栗山郷の最東端に位し、日光を去ること十有三里、寂の又寂僻の又僻なる千山萬岳の中にあれば、從つて訪ふ人なく行く人なく、この近郷に住せる人だに稀れに見るといふばかりなる僻地なれど、我は其地の偉異絶特なる趣を具へたる事を聞きたる身の、假令如何ばかりの危を冒し如何ばかりの險を蹈むことありとも、その境に赴かずしては止まじとの決心を爲し、一步一步正面より吹付くる木枯の風

雲靑松の中に沒し行くさまの悠遠なる、或は大岩奇石の傍を迂廻屈曲、漸くにして流出づるさまの奇警なる、或は谷迫り山窮して、溪流は只是一帶の帶を曳きたる如く見ゆる、或は幾筋とも無き程に分流して、小松の面白く叢生したる處を縫ふやうに流れ行ける、或は遠く或は近く、或は低く或は高く、その高原村に至る間の奇景は、如何にして言語の上に言ひ、如何にして筆毫の下に現すべきか、われは只我に仙才なきを愧づるのみ。

照尊院の主僧はこの間を稱して、木曾十里餘の景にも匹敵すべく、熊野本宮より新宮に至るの景にも勝るべしと言ひ、且昨秋此處に來れる時は佇立多時、夕陽の移るをも知らず、只庵室を此間に設けて、專心苦行を請じたらんには、如何に本望なる事ならんといへる一念より、更に他念は無かりしと語られしが、我も亦かの溪流の斜に曲れる處、かの一株の老松の盤踞する邊、一廬を建て、一室を作りて、穩かにわが著作の筆を執りたらんには、如何に嬉しく如何に樂しき事ならんかと思はざる事能はざりき。されど我は大俗の身、紅塵の中に埋沒せられたる身、山靈如何でかゝる謂はれなき大望を許すべき。

一路の秋風高原に至る。鬼怒川はこれより左折し、路は五十里より流れ來れる一小溪に沿ふ。この小溪と鬼怒川と合する處、三角形を爲し、その一角に當つて、突兀たる一奇山、龍蛇の蟠るがごとく屹立す。その麓は則川治の溫泉場にて、二三の人家、炊烟の斜に渦上するを認む。高原を過ぎ、一溪橋の虹の如くなるを渡り、左折して四五町程行けば、やがてその溫泉場なり。則ち旅亭に入りて、半肩の行李を二

滯り、更に動きて又止まり、終に樹影欝蒼たる處に隱れ行きぬ。我は之を見て後、溫泉場に至りて、晝飯を喫し、溫泉の所在を主婦に糺せば、傍に間道を指して、其處へ行き給へといふ。言はるゝ儘一二町川に添つて下れば、その風景絕佳なる川原に、二箇所の溫泉の湧出するを見る。しかもその浴槽には屋根も無く、戶も無く、雨は降るに任せ、風は吹くに任す。此時不意に水聲に交りて、一曲の村歌の起るを聞く。怪しみて猶下れば、下なる浴槽に、一人の村孃、年十八ばかり、今しも半身の裸體を出して、前なる溪流を見詰めつゝ、惜氣もなく玲瓏たる聲を、山水の間に朗詠してあり。あゝこの仙境！　我は繪畫に於てすら、未だかくばかり美なる現象を見たる事無きを。

　あまりの面白さに、此處に一泊とは思ひたれど、日は高く足も勞れざれば、思ひ返して前の危橋を渡り、細く險しき行徑を傳ひ、今一度木を賴りに下なる景を見納めて後、靜に元の街道に出で、其より又音のみ聞きて姿は見えぬ鬼怒川の流に添ひ、藤原と言へる山間の一荒驛を過ぎ、途次會津に行くなりといふ一馬夫と、無邪氣なる會話を試みつゝ、一里程は山も見ず、川も見ず、澤も見ず、紅葉も見ず、茫茫然として步來りしが、路は次第に山の半腹へ〳〵と登り行き、鬼怒川は遙か下に下に下になりて、微かに鏘々たる音を殘したるのみ。

　かくて猶一里をや行きけむ、今迄見えざりし水は又忽ちにして、幽れ出でしが、是より林影全く絕えて、次第に跨り行く兩岸の風景、一々明かに見ることを得るやうになりぬ。或は遠く兩山の間を流行きて、白

大なる一奇岩突兀として顯れ出でぬ。それに沿うて又七八步、その先に覺束なき一條の柴に組橋を架したり。その橋の傍に一柱の掲示ありて、浴客の外渡る事を禁ず、瀧溫泉守と禿筆の跡見惡し。これ所謂瀧の溫泉かと、岩に凭りつゝ、恐る〳〵向岸を見れば、數軒の人家の蕭條として並べるあり。我は猶一倍の勇氣を奮ひ、さながら猿の木に登る如く、堅くその組みたる柴に攫みつゝ、跋ふ如くして一步〳〵と前岸に渡り行きぬ。下を見れば激怒したる水、盛に泡を吹きて、目も眩むばかりに思はれ、上を仰げば、岩石蔽ひ重りて、今にも落來らんかと危まれ、暫くは生きたる心地も無く、漸くその柴橋の中央に至れる時、その大なる岩に粉碎せし水、蔽ひ重るやうにわが身の上に落來り、呀と言ふ間に、全身悉く水を蒙り、その冷なることゝ殆んど言語に絕するばかりなり。これに驚きて身の今恐ろしく危き處にあるをも忘れ、急ぎてその柴の組橋を渡り終り、その儘恙なく前岸なる岩石の平なる上に立てり。

此處より見れば、其風景一層の奇を加へたるが如し。鬼怒川の水は、遙かに上流の奇岩より迸り來りて、先づ第一に五百羅漢に似たる無數の小岩の間を、或は落花の如く、或は白雪の如く、右に潜り左に走り、次に槍の横に突立ちたる如き岩に當りて、盛に跳珠飛玉の趣を呈し、更に脫兎の勢を以て、續々と重り合へる斷石缺岩の間に流入す。水の此處に來るや、その激怒極めて烈しく、極めて盛に、只是千百蛟龍の頭を並べて飛下するが如く、高きこと一二間に及べる岩をも難なく飛越え跳り越えて澎湃激越天地も崩れんばかりの絕大絕高の響を作し、更に集りて深碧染むるが如き一潭淵を作り、更に亂れて又

かに錚々の音を殘したる頃、前に見ゆる數軒の人家、これを山中の一荒驛高徳となす。

二

鬼怒川の水聲は絶えず路の傍にありて、或は高く、或は低く、或は緩かなる事操琴の如く、或は急なる事風雨の如く、或時は颺り、或時は沈み、その響殆んど名狀せられぬばかり面白けれど、岸頭樹多きが爲め、距離甚だ近からぬ爲め、その奔飛跳躍するさまを見ること能はず、徒らに近寄る響を聞きとめて、今かく〳〵と行けども行けども、それらしき者も見えぬに、失望する事一方ならず。秋風尾花の上を渡り行く間を蕭條として進むこと凡そ一里許、大原をもいつか過ぎ前なる高原山をもいつか失ひ、猶十四五町も進行きたる頃、路傍の水聲再び急に高くなりて、その餘響の林梢に反響する音、極めてわが心を慰くに足れり。されど我は其程には思はず、徐ろに其路を進み行きしに、俄然林は少し開けて、眼下には溪流の泡を吹き烟を卷きて、凄じく奔飛するさま、手にも取られんばかり極めて明らかにあらはれ出づ。

折好くも林間一條の細路ありたれば、我はそれを傳ひて、一歩降り二歩降りつ。下には巖石劍の如く聳立して、一丈もあらんと思はるゝ大石を白き水の跳越ゆるさま、奇にも奇、壯にも壯、殆んど譬ふるに物なし。我は戰立しつゝ、横に突出したる一木に身を寄せ、暫くはこの景を見たりしが、やがて又勇を鼓して、此方の岩角、彼方の木根を力に、一歩誤れば萬事休すといふ路を、一町程降り行けば、其處に

を覺ゆ。橋に對して一岩の聳立するを認む。こは鉾岩と名づけられたる者なるが、その高さ百間許、下りて見んには、仰ぎても眼のとゞかぬばかりなるを、橋の絶壁の高きが爲め、只是脚下に踏得べき心地す。

あゝ此の間の景如何にか說かむ。一方は開け、一方は迫り、一方は奇に、一方は大に、一方は渺々限りなき那須野に落つる水の餘流の恰も平板の如くなるを望み、一方は奇々怪々岩石蝟の如く集りたる間を激怒飛散して流れ來れる水の恰も水晶の如くなるを見、我は只羽化登仙したる昔の詩人のやうに、恍惚として橋上に佇立したる儘、暫く餘念もなかりしが、不圖見れば、向岸の絶壁最も高く嶮しき處に、一箇の車井の架れるあり。かゝる處に不思議なる事よと思ひつゝ、我は未だ其とは知らず見るとも無く遙かに眼を絶壁の下の下の又下なる邊に注げば、そこに一箇の釣瓶ありて、波に搖られつゝ、漂々浮々とたゞよへるを見る。「あゝこは里人の淸瑩玉の如きこの鬼怒川の水を汲めるものにあらずや」と思付くや否や、我は興の起り來るに堪へず、直に其處に走り行きて、ぐらぐらと危き井戸側に戰立しつゝ、その細き繩に手を懸けて、その水を汲み上げんとは擬したれど、崖高く崖嶮しく容易に意の如くなる能はず、しかも數百度の後、漸くにして汲み上げたる釣瓶はかの岸この崖に當りたりと覺しく、水は既にその半を失ひて、殘れるは纔に三分の一に過ぎず。我は之を掬ひしが、その甘きこと甘露盤上の天露かと疑はる。

前の一橋を渡り、中岩の奇なる姿を賞し、更に後の一橋を渡り、佇立多時の後、遂に割愛して林間の路に入れば、水聲殊に高く響渡りて、宛然暴雨の來れる如し。猶行けば水聲次第に遠く遠くなりて、纔

るに過ぎず。路頭仰ぎて四千尺の高原山を望む。清妍端麗美人の粧を凝して立てるが如し。是より路漸く濶く眼界漸く大に、遠く那須野の半面を望むを得、行く事里許、右より來る川あり。橋頭に凭りて地圖を披けば、鬼怒川の水既に幾何もあらず。耳を欹つれば、その流る丶響已に微かに聞え來れるかと覺ゆ。我は疾驅して之に赴く。

橋を渡り終りて、逶迤たる長阪を登る。此間遙かに那須野を横斷せる鬼怒川の殘流を望む。前には大澤を隔てゝ、瘤の如く芋の如き山、陸續として顯れ出で、その奇その怪、宛然一幅の山水畫を展げたるかと疑はる。右には小松原瀰漫として遠く連り、その末を染むるが如き一片の山影を見る。是那須野の極の極なる磐城の八溝山なり。一歩又一歩、前なる大澤は次第に顯れ、一間又一間、低き長阪は次第に盡く。その盡きたる處、その顯れたる處は、則ち清瑩玉の如く、急駛矢の如く、深碧染むるが如き鬼怒川の水！

我は驚喜して走つて之に就く。愈近けばその景愈佳絶なり、此時不意に我はわが前に横れる奇景を見て、殆んど自から絶叫せんとしぬ。一大奇岩水の中央に屹立し、紅葉青松その間に點綴し、深碧なる水は之に當つて激怒し、飛散し、轟然として巨人の嘯くがごとき響を爲す。之に加ふるにこの奇岩を挾んで、宛然虹の如き二大橋を架せるさま、天工人工相合して、更に一大自然を造形りたる者の如し。之を中岩の橋と爲す。我は愈歩を進めて、その橋の上に至り、更に右瞻左望すれば山水の景愈出でゝ愈々奇なる

遊ばん事を勸めずんばあらずと、揚々として得意の色眉間に溢る。我はさらぬだに懷を忘るゝ能はざる身の、勃然詩興の激するに堪へず、悉く萬事を抛擲し、一杖一笠暁を待つて飛ぶが如くに寓を出づ。

連日の山雨拭ふが如く晴れて、大谷川の水烟蒸上する事山霧の如し。後に鳴蟲の山を顧み、前に神橋の朱欄を見、疾走して炊烟裊々たる鉢石街を横ぎり、一道の杉影漸く日光の停車場に達す。宇都宮の一番列車は既に着して頻りに煤烟の立てるを見る。七時三十分煤煙愈多く、愈黑し。既にして乘客の喧騒となり、車窓を閉ぢる響となり、遂に一聲の汽笛となりて、轟々殷々、家飛び林動き、野走り山移り、瞬刻にして今市驛に着す。我は此處に車を捨てゝ、徒歩維新の古戰場なる今市町を過ぎ、右折して大桑に至らんとす。一脈の殘流大谷川の板橋を渡れば、路は渺々たる黄雲千里の間に通じ、四山の風光來りて吟眸に入らずといふ事なし。就中男體女峯の二山、屹々然兀々然と高く四山の上に出で、清淨拭ふが如くなりしが、晴嵐一白横さまにその麓を掠め、一片の殘雲布の如く旗の如く、赤薙山の一角を包むよと見る間に、何處より起りしか蓬々たり、勃々たる雲、寸刻にして男女兩山の半腹を蔽ひ隱し、更に擴がりて松立、大立、鳴蟲の諸山に、幕の如く蔽ひ懸らんとせり。我はこの奇景を仰ぎつゝ、小松原を過ぎ、雜木山を過ぎ、闇黑たる杉樹の並木の中に入り果てしが、大略半里にして、又も廣漠たる原野に出で、再び顧みて二荒山を望めば、雲は既に半天に漲り渡りて、その罅隙の處、纔に男體山の圓き嶺を認め得るのみ。泥濘を穿ちて右曲左折、漸くにして大桑に達す。人家稀疎、炊烟迷離、那須野原中の一小邑た

今も猶昔の如く僻境たる事、その村程開けざる所は廣き日本にも又と有るまじき事、それに續きて鬼怒川の奇、温泉場の古風、住民の質朴、言語の鄙野など、聞くにつけ語らるゝにつけ、わが詩興は再び燃えて、轉た心の動くに堪へざりしが、越えて明治二十八年十月幸に暇を得て、舊知識なる日光山に遊び、南谷の照尊院に寓すること十數日、一夜談偶々之に及ぶ。主僧は天下を週遊し、又曾て其地にも遊びたる人、得々として說いて曰く、栗山の地僻は則僻なり、遠は則遠なり、然れどもその山水の奇、岩石の怪、庶幾くは天下に匹なからんか。世人溪流を言へば則木曾を說き、熊野を說き、日光を說く。しかも木曾は奇に失し、熊野は峭に失し、日光は麗に失す。栗山は則然らず。奇を欲すれば惡曲峠、瀨戶合峽の如きあり。峭を欲すれば中岩橋、開渡戶、及び瀧温泉の如きあり。只麗に至つては、少しく欠く所ありと雖も、日光山中最も佳しと稱せらるゝ深澤川原に匹敵するもの、頗々として少なからざるを見ば、又決して日光の山水に讓るべき者にあらざるを知らん。況んや之に加ふるに、川俣、日光澤の温泉、絹沼の靈境、炭燒澤、梵天岩の奇景を以てするをや。天下の勝境と稱するも決して溢美にあらず。只道路極めて險、狹きは樵斧人を沒し、廣きも猶一尺有餘に過ぎざるを以て、都會の人至るなく、從つて之を知る者甚だ稀なり。拙衲も始は之を知らず、時として說く者あるも、馬耳東風以て野人の言とみなし、少しも心に會せざりしが、昨年の秋誘はれて始めて其所に遊び、優遊一月、奥の奥まで極め盡してより、その景常に夢寐の間にありて、更に心に忘るゝ事能はず、貴君にして若し山水の志あらば、斷然行きて

日光山の奥

一

回顧すれば曾遊二三年前、白衣の行者に交りて、海面を拔く事八千二百餘尺、淸容富嶽に迫り威武關東を壓したる日光男體山の絶巓に登りし時、東北の方、萬山相集りたる深谷に、淸光鏡の如く倒影玻璃の如くなる一湖水を認め指點して傍人に問へば、そは栗山澤の奧、鬼怒の水源なる絹沼といへる湖水なりと聞きて、そぞろに神往き魂飛ぶに堪へざりしが、其後日光山志を繙き、栗山鄕を記するの條に至り、此地深山窮谷の間にありて、耕すべきの地極めて少く、纔かに岩石の際を穿ちて、禾穀を栽ゆるに過ぎざれば、從つて是を以て一年の貯食と爲すこと能はず、家々皆獸獵採樵してその生計を圖ると云々、及び古昔平家の餘類、この山中に隱れたり云々といふを讀むに及んで詩興頓に生じ、遊意俄かに萌して、一刻も遲疑し難く思ひたれど、紅塵深き處に束縛せられたる身の、飛ぶに翼なく、翔るに足なく、山靈に背く所多しと吟じて、逡巡幾年の日月をや經にけん。然るに此頃聞くともなく聞けば、その栗山鄕の

日光山の奥

外四編

の趣味はいつでも大利根の河船や河港や白帆や、水に臨んだ白堊の家や、土手の上に並んでゐる町や、さういふものに落ちて行つて了ふ。利根川圖志といふ本があるが、あれなどを見ると、昔の人はいかに深く川に親しんだかといふことがわかつて、何だかその時分の空氣に浸つて見たいやうな氣がする。私は昔の人達のやつたやうに、河舟を一艘仕立てゝ、三日も四日もかゝつてゆつくり河を下つて見たいと、今でも思つてゐる。

忘れられないのは朝だ。土手の草にはまだ露が置いてあつて、月見草が處々に咲いてゐる。大きく孕んだ帆が岸の人家を掩ふやうにして通つて行く。かゝり舟からは、朝炊の煙が斜に靡いてゐる。水面を籠つた朝霧は次第に晴れて、朝日がキラ〳〵と水にかゞやく。櫓の音が靜かに水を渡つて聞えて來る。

私は土手の上で、よく川の上流と下流とを思つた。

つた。

尾張の玉野川は特色のある川だ。あんな川を他に私は見たことはない。中央線の汽車の線路に沿つてゐるのであるが、いかにも綺麗だ。いかにも美しい。何のことはない土佐派の繪卷でも見てゐるやうだ。兩岸の山も低い。川の水も淺い。しかも地質の關係で、水がいかにも碧い。群靑に紫を加へたやうな綠である。それに岩の白いのがよくそれに映つて見える。土佐の繪によくつかつてある色そのまゝである。飽まで日本畫式である。

さういふ谷が少くとも五六哩はつゞいてゐる。汽車はトンネルを出たり入つたりしてその溪に添つてゐる。面白い形をした橋などがかゝつてゐる。虎溪山の後を通るあたりは殊に好い。

私はこの川に似た川をあちこちと捜して見た。何處にもない。當然あつて然るべき京都奈良附近にもない。大和川にこれに少し似たところがあるが到底比べ者にはならない。ふと私は陸中の磐井川にある嚴美溪を思ひ出した。無論土岐川の方が上方式だ。閑雅で、優長で、ぐつと立勝つてゐるけれど、それでも感じは何處か似てゐるところがある。模規の大小で、嚴美溪の方がすぐれてゐるが、岩石と水との調和が到底土岐川に及ばない。繪のやうな谷、實際日本畫のやうな感じのする谷である。

私は上流について既に餘り多くを書いた。しかし川の面白味は、矢張下流にあると私は思ふ。私の川

ら湯が沸き出してゐる。

山國川の谷、多摩川の谷、荒川の谷、木曾川の谷、皆な面白い。荒川の谷は古生層の地盤なので、岩石が著しく他と異つてゐる。板を重ねたやうな形をした岩が多い。例の寶登山の近所には長瀞といふ一奇景があるが、これは紀州の瀞八町を小さく淺くしたやうなもので、感じは乾いてゐるが都に近いので鮎狩などに出かけて行く人が多い。伊豆の天城山の麓にある狩野川の谷などもちよつと面白い。

私はまだ行つて見ないが、上州の赤城山の裏の追貝川の谷は非常にすぐれてゐるといふ話である。

一溪傍古刹、終夜枕邊鳴、曉近山驟起、風聲聨水聲、これは去年日光の寺に寓した時に作つたものであるが、大谷の谷は、霧に、雨に、風に、頗る變化に富んでゐる。凄じい男體おろしが吹きおろして來ると、あの大谷の水聲が全く掩はれて了ふほど山や樹が凄じく鳴り渡るのであつた。

河口の近いのにかゝはらず中流位の趣しか持つてゐない川を私は日向の大淀川に見た。旅館の納涼台、涼しい河風の吹いて來る欄の上で、その川に對して私は半日暮した。川では少年達が大勢水泳をしてゐた。川の水は淺く、透徹つて見えてゐた。洲が三つも四つも通つてゐた。向うには満武嶽の山が碧い空に捺したやうに聳えて、暑い晝の日影がキラ／＼と輝き渡つてゐた。あたりの色彩がいかにも濃い。いかにも九州の夏の晝といふ氣がした。そのあくる日は、私は深い霧を衝いて、霧島の方へと向つて出かけた。やがて大淀川の渡船が來た。馭者は馬車を渡船に乘せた。朝霧がかたはら崩して撫でたやうに掠めて行

車が出來てから非常に衰退して了つた。天龍も、富士も球磨も皆なさうだ。阿賀川もやがてはさうなつて行くであらう。從つて、かういふ川の持つた河港――利根川などの持つた河港とは丸で趣を異にした河港の衰へて行つて了つたのは遺憾である。今ではもう、下灘船否上灘船といふやうな光景を見ることが出來ない。合歡の花の美しく咲いた河岸の涼しい宿屋を見ることが出來ない。今、取れた鮎をすぐ料理して食はせて呉れるやうな茶屋を得ることが出來ない。それにかういふ船路は、絶えず船が通つてゐなければ、川筋が違つて、船を行るに危險が多いといふことである。天龍なども所謂天龍峽あたりまでは飯田から船は出るが、長い間を通して乘らうとすると、困難なところが大變出來て來たといふことである。球磨川なども矢張さうである。それに、特別仕立は、非常に賃金が高くなる。段々かういふ激湍を下る興味がなくなつて行くのは此上もない遺憾である。

瀬の多いのは球磨川だ。唯、山がやゝ開けすぎてゐるのと、樹木の少いのとが缺點である。保津川は京都に近いので、人が多く知つてゐるが、距離が短く、それに矢張山が淺い。富士天龍などの方がぐつとすぐれてゐる。富士川の南部、萬澤あたりは、溪山殊に色を生じてゐると言つて好い。

河船の通らない程度の激湍にもすぐれた風景が多い。日光の大谷川の谷、鹽原の箒川の谷、鬼怒川の谷――ここにこの鬼怒川の谷の奥の湯澤といふ處には、川に一面湯が噴き出てゐて、それが石灰性を含んでゐるので、穴が次第に隆起して、高さ二三十米になつてゐるものが彼方此方にある。そしてそこか

やうな男山八幡、や、下つて、歴代の天皇の狩獵などに行幸あらせられた鳥飼野などがその沿岸にある。更に面白いのは、太古は淀川は山城川と言つて、枚方の少し下流の處で海に落ちてゐたことである。江口といふ地方は、今でもちやんと殘つてゐる。そして、神武天皇東征の舟師は、實に初めて白肩（枚方）に上陸したといふことである。神武天皇は此處から生駒山脈を越えて大和へ入らうとせられたのである。

淀川は琵琶湖を水源としてゐるので、水の量が多い。これも近畿の諸川の水の少いのに比して、感じの好い一つである。宇治あたりでは上流と中流とを一緒にしたやうな若々しい烈しさがある。橋柱に當る水の勢は大河の趣をも具へてゐる。近畿の多い景勝の中で、特に宇治の好きなのは實にその川があるからである。

木津川の谷もかなりに雲烟に富んでゐる。笠置山の下あたりの風景の好いのは關西線を通る旅客の皆知つてゐるところであるが、その一支流名張川の谷も近畿の山水に多く見られないやうな深さと靜けさを持つてゐる。其處には例の月の瀨の勝がある。

川の上流の面白味は主として溪山にある。谷にある。激湍にある。朝早く立つて、涼しい風を細に孕ませて、白い水沫の飛ぶ激湍を下る快味は、夏の旅行中、最も忘ることの出來ないものである。天龍、富士、木曾、保津、阿賀、熊野などが中でも殊にすぐれた風景を持つてゐる。しかし、この舟路も次

工場、夜業の窓に明るく輝く電燈の燈、時には川の水が眼もさめるやうな鮮かな碧に染つて、其上を白い帆が風を孕んで無數に上つて行くといふ光景に邂逅することなどもないではない。秋の初めに河に長く落ちてゐる岸の燈火なども明るい印象を人の心に與へずには置かない。

しかし上流はやゝ落莫としてゐる。千住から上には殆ど見るに足りるやうなシインがない。カラアがない。荒川堤の花などは花と水とが全く背いてゐる。

都會の川では、この他に京都の鴨川、大阪の安治川などがある。京都の人は鴨川の水といふことをよく口にする。綺麗な形容詞としてはいつもそれを例に引く。その癖、その川は淺い小さい殆ど言ふにも足らないやうなものである。しかし水は實際綺麗だ。四條の納涼棚などに出かけて行くと、山が近いだけに、東京や大阪の平野では得られない嵐氣に富んでゐる。私は春の初めに、祇園の水樓で、千鳥の鳴聲を聞いたことを未だに忘れることが出來ない。千鳥と言へば、宇治川もまた忘れることは出來ない。

大阪の安治川は混雜と不規律とを示したやうな川である。淀川の閘門が出來てからは、川と云ふよりも、溝とか掘割とかいふ方が好いと思はれる位になつて了つた。

近畿では淀川が一番面白い。琵琶湖から出て人跡の乏しい山中を長い間流れて來るのも特色があれば、山城盆地の略中央に諸水を集めて、其處に巨椋池と云ふ殘水湖をつくつたのも面白い。宇治の長橋、川に臨んだ旅亭、昔名高い交通路であつた伏見大阪間の三十石舟、枚方の古驛、山崎の古戰場、城壁の

丁度越中の立山の後あたりに來て、西から北に曲つて、鐘釣などといふさびしい溫泉場を通つて猫の額のやうな魚津附近の平野に落ちて行くが、淀んで靜かに流れるひまもなくすぐ海に入つて了ふ。無論下流のない凄じい烈しい川である。

この黑部川に次いで、會津の只見川が矢張人跡の至らないところを十里近くも流れて行つてゐる。

荒川はその下流が首府の中を橫斷してゐるので、一種の特色を持つてゐる。ロンドンのテームス、パリのセイヌほどにはないだらうけれど、平野の中から來て、煤煙の中に埋もれて行つてゐるのは同じである。

外國の文人の筆はすぐれてゐる故でもあらうが、パリのセイヌなどは隨分人の心を誘ふ川のやうに思はれる。面白いカラアのある川で、わが隅田川などはそれに比べると、殆ど言ふにも足りないやうにすら思はれる。モウパッサンの小說やドオデエの小說などを讀むと、殊にさういふ風な感が多い。

しかしわが隅田川も細かく見て來ると、かなりに面白い川である。ドウデエの作に見るやうな洗濯女こそゐないけれど、夏の朝などは霧で深く埋められて汀渚もよくわからないやうなこともないではない。上つたり下つたりする船、羽搏するやうなけたゝましい音を立てるモオタアボウト、青い白いペンキ塗の色を秋の澄んだ空氣の中に際立たせて通つて行く小さな汽船、汽笛の音の凄じく川に鳴り渡る大きな

あつて、苫を葺いた舟が二隻も三隻も其處に繋がれてあつた。『さア、河口までは、今は水が減つてゐるから、一日一晩位かゝる。』私が訊くと、かう其處の男は話した。私は何故あの時勇氣を鼓して、その舟で下つて見なかつたか。私は今では後悔してゐる。

其處は霧の深い土地で、毎朝十時頃までは四面咫尺を辨ぜずといふやうな所であつた。段々晴れて行く霧の中に見えたり隱れたりする川と橋――それが私のその江の川に對する唯一の印象であつた。

山の奧の奧、脊梁山脈の重り合つた中に、大きな谷をなして、殆ど人跡の至らない間を、二三十里が間も凄じい勢で流れてゐる大きな川がある。

人跡の至らない間を二三十里、そんな川があるだらうかと誰でも疑はずには居られまい。私も其川のことを思ふと、何とも言はれない一種雄壯な感に撲たれるのが常だ。

高い崖と崖、絶壁と絶壁、山と山、その間は或は狹く或は濶く、凄じく流れ落ちてゐるのである。雪消の節などには殆ど巴渦を卷いて流れてゐるといふことである。

地圖をつくるための測量師か、日本アルプスの探檢者ばかりが往々この川をわたつて下りて行く。『實際、凄じい谷川ですよ、日本にはまアめづらしい。あんな川は他にはありますまい。谷が深くつて、水量が多いんだから、徒渉などはとても出來ません。』そこを越えた人がさう言つて私に話した。

黑部の谷、雄壯を絶した黑部の谷、かう言つて、日本アルプスの探檢者は眼を瞬つてその話をする。

やがて峠に着く。少し下ると、また水の音がする。前のは段々細くなつて來たのであるが、今度のは、段々太くなつて行く水の音である。一種別な感じがする。その水の音が高く大きくなつて行くにつれて、谷が展けたり、畑が見えたり、村が見えたりする。綺麗な瀬が開いて見えてゐたりする。

大きいと小さいとの區別はあるが、分水嶺と言ふものは面白いものだ。山の脈が水でちやんとしきられてゐるやうなものである。だから大きな川は大抵大きな分水嶺を持つてゐる。日本で一番大きい分水嶺は、無論脊梁山脈だが、利根川でも信濃川でも木曾川でも大抵その附近に其水源を持つてゐる。其分水嶺から出て、山脈に突つかゝつて曲つたり何かして、そして低い處へと出て行くのである。

東北や中部地方では、その脊梁山脈が複雜を極め高峻を極めてゐるから、はつきり山と川との區別がわからないが、中國地方に行くと、山勢が次第に陵夷して、全然一直線になつてゐるので、川といふ川は殆ど皆なその脊梁の山脈中にその水源を持つてゐないものはないといふ形になつてゐる。そして、山陽の川は北から南に流れ、山陰の川は南から北へと流れてゐる。

唯一つこの例に洩れたものがある。それは安藝備後の境から石見に出て行つてゐる江の川である。この川は日本第一の分水嶺なる脊梁山脈を南から北へと破つて行つてゐる。

私はその江の川と三次川の合流點にある三次町に泊つたことがあつた。面白い特色のある町であつた。四周山で、江の川はその西の山際に偏つて流れてゐた。橋の下には石見の方へ下つて行く河舟の發着所が

それにまた水源が面白い。他の川はどんな川でも大抵山から湧き出して來るのであるが、この川は小さな池をその水源としてゐる。そしてその池は弓弭の清水と言つて、源賴義が炎天に兵士の渇を憐んで、持佛の觀音を念じて、持つてゐる弓弭で突くと滾々として、水が溢れ出したといふ傳說を殘してゐる。今でもそこにその持佛を本尊とした觀音堂がある。

北上川――七十里を流れて海に入る北上川は實にそこから出てゐるのであつた。溪流のやうな趣は何處にも持つてゐないで、唯、靜かに緩やかに流れてゐる。盛岡あたりでは、無論盛に舟楫の便が通ずる。一の關のすぐ傍の狐禪寺からは、河口の石の卷港まで、毎日小さな汽船が出て行く。

この川は一度でも丘陵の中に入つたことがない。川口近く志津川町の方へ分れて行つた舊水路はやゝ嵐氣に富んでゐるが、新水路は全く平野の中に落ちてゐる。

私は旅をする度に、分水嶺といふものに常に多くの興味を感ずる。沿つて來た川が段々細く細くなつて、終には草の中にもかくれて埋れて了ふやうに思はれる。もうなくなつたかと思ふと、まだ何處かで音がしてゐる。さゝやかな音がしてゐる。まだ流れてゐるなと思つて、段々峠を登つて行くと、遂には音が聞えなくなる。長い間一緒にやつて來た川だ。こんなことを考へると、私は何となくさびしい氣がして、暫く立つて、來た方を振返つて見る。

る川とばかり言はれないやうなカラアがある。その代り、急湍、激湍は富士、球磨に比べると非常に少い。急流と言ふのは、碁點、隼などといふ難場があつて、よく舟がそこで顚覆するのでさう呼ばれたのであらうが、何方かと言へば滔々とした水量の多い川である。最後まで上流の素質を失はない富士川などとは餘程趣を異にしてゐる。

川が庄内平野に出やうとする處に、清川の一驛がある。樹の多い嵐氣の多いところで、鮎の旨いのが食へる。古風な深切な旅館の二階からは、機を織つてゐる赤い襷の娘などが見えた。木槿の見事に咲いてゐる垣なども見えた。阿賀川の津川の宿と共に私の忘るゝことの出來ないところだ。

雄物川と能代川、秋田ではこの二つの川が大動脈を成してゐる。雄物川の屈曲したのと、能代川の一直線なのと共に好對をなしてゐる。雄物川が上三郡の物資を秋田市に運び出すと共に、能代川が北境の木材を海岸に運搬する主要路になつてゐるのも、矢張好對である。

能代川には筏が多い。帆船が多い。

北上川は面白い川だ。殆ど上流がないと言つても好い。富士川や大井川の下流がないのとまさに正反對の形になつてゐる。

着いた舟も通る。しかし、その流れてゐる地盤が第三紀新層で、陸地の出來たのがごく新しい時代なので、兩岸に丘陵や樹木が少い。丁度濃尾平野を流れてゐる木曾川とやゝ趣を同うしてゐる。利根の下流のやうに、濃かな影や複雜した光線や動搖した空氣を持つてゐない。乾いてそして露出してゐる。

木曾川の河口はしかし大きい。何だか日本の川ではないやうな氣がする。彌富から桑名に行く間の鐵橋から見た眺望の廣々としてゐるさまは他にはちよつとない。

最上川の水路はやゝ信濃川に似てゐる。中流から矢張山の中に入つて行つてゐる。信濃川よりは規模は小さいが、その小さいのが却つて趣を添へてゐる。

本合海の渡頭の向うに白い高い崖があつて、松が二三本面白く生えてゐる。そこを渡ると、粟畑などの多い間を路はうねくと曲つて行つて、鳥海山脈と出羽山塊との交接點である山の中へと段々入つて行く。不意にこの川に特有な蓆帆をあげた船がそこにも此處にも現はれて來る。いかにも靜かな晝といふ感じがする。何だか内地ではなくつて、支那にでも行つてゐるやうな氣がする。それに、その路が最上平野と庄内平野とを連絡する唯一の交通路となつてゐるので、車や旅客が絶えず通つて行く。名所圖會の中にあるやうな休茶屋などがある。

日本の三急流の中では、この川が一番變化に富んでゐる。富士川や球磨川のやうに唯山中を流れてゐる

信濃川は利根川と共に舟楫の便の多い川であつた。しかし河口は利根川の河口よりも遙かに風景が劣つてゐた。新潟の萬代橋の上から見たさまは、溶々とはしてゐるが、單純である。日和山から見た眺望も、愛宕山から見た眺望とは比べものにはならないと私は思ふ。

信濃川（千曲川）は上流には何の奇もないやうな川である。蓼科の裾あたりを流れる頃でも、中仙道の驛路を横ぎつてゐるあたりでも、川中島附近から犀川を合せて中野町附近に至る間も、單に平野の間を流れてゐるばかりで他の奇がない。カラアのある河港などは見たくても見られない。しかし飯山から山の中に入つて行くと、稍々雲煙の氣を帶びて來て、中流が上流に逆戻りをしやうな趣を見せてゐる。この山の中には大きな瀨をなしたところなどがある。それを出ると、越後で、其處に私の好きな小千谷の町があつた。

小千谷の町の末にかゝつてゐる橋の上に、私はある朝立つてゐた。町も野も山も皆な眞白な雪で埋められてゐた。早立の橇の鈴の音がチヤラ〳〵聞えた。川はそこではまだ上流の烈しさを失はずに凄しい勢で流れた。舟を流されまいとして船頭達は一生懸命にもやひを杭に繋いだ。それから私は苗場山の眞白な姿を眺めた。

北越線の來迎寺驛あたりから、川は全く下流の趣を持つて來てゐた。長岡から下は純然たる大河である。三條あたりに行くと、殊にそれが大きくなつてゐる。ペンキ塗の汽船も來れば、白帆も通る。菅を

つた。しかし川の趣味の多いのは下流だ。下流の少い川は何うも物足らない。私はさういふ意味で、下流の多い利根川が好きだ。

銚子の愛宕山の巓から見た利根川の河口は、尠くとも私の見た多い川の中では最もすぐれた風景を展開してゐた。ちよつと川とは思はれない。關東平野を長い間流れて來た利根の河口とは思はれない。深く入り込んだ入江ではないかと思はれた。

私の友達は話した。『川の水なんて不思議なもんですな、川があちこちで支流を入れますが、その支流の水が容易に本流に一緒に雜つて了はないものださうですな。私の近所では、眞中を鬼怒川の水が流れてゐると言つて、茶に凝つた人は、わざ〳〵船を出してそれを汲んで來るさうです。え、鬼怒川の水は一番綺麗ださうです。眞中に行くと、はつきり線を成して流れてゐるといふから不思議ぢやありませんか。』

私も不思議な氣がした。私は水海道附近で利根に落ちる鬼怒川の上流を頭に描かずには居られなかつた。宇都宮の先の阿久津は昔の樞要な河港であつた。東北地方から江戸に出て來る人は、長い陸路の難きに艱んで、其處から鬼怒川の水路を利用して、河舟で水海道に出て、それから大利根を小利根へと出て行くのが例であつた。水海道の一驛はその爲めに榮えた。私は交通の不便な昔の旅行をなつかしく思つた。驟雨に逢つて慌てゝ苫を葺く船や、大小をさした武士や、櫓を押してゐる船頭や、岸に並んでゐる船宿や、さういふものが私の眼の前を通つて行つた。過ぎ去つたシーンは全く繪となつて了つた。

川について

境で大利根と小利根とわかれて行くが、その少し下流にこの二つの流を連絡させるための小さな運河が掘割られてあつた。そこの朝の靜けさが、いつも私の頭に思ひ出されて來た。低い土手には月見草などが朝露を帶びて俛首れてゐた。雁木では、女が釜や鍋などを洗つてゐた。

山の奥の奥の文珠岩の乳房から滴り落ちた水が、長い間を流れて瀬となつたり淵となつたりして、段段平野の中に流れ出て來るさまが私の眼の前にあつた。ある舟橋の上からは冬は秩父の山の雪が夕日に美しく照り輝いて見えた。ある鐵橋の下には、小さな埠頭にペンキ塗の小蒸汽が白い煙を揚げてかゝつてゐた。河港といふものゝ面白さなどを私は想像した。運漕店、旅籠屋、赤い襷をかけた女中、岸に長く出てゐる雁木、汽笛が聞えたので、旅客は慌てゝあつい飯をふき／＼勘定もそこ／＼に岸の方へと出て行くのであつた。私はまたこの川の大きな河口を想像した。上流から中流、下流、上流ばかりで出來たやうな川もあれば、上流の殆どないやうな川もあつた。中流ばかりで終つて了つてゐるやうな川もあ

私は山移川の谷もかなりに深くわけて入つて見た。落合といふ村のあるあたりまで行つて見た。此處も矢張、耶馬溪の繪卷の一つのシインであるに相違なかつた。

ここに、私は柿阪のかぶと屋の靜かな一夜を忘れかねた。軌道が出來たので、その停車場の近くに新しい旅舍をつくつたが、それが丁度山陽の擲筆松といふあたりの溪潭に近いので、さゝやかな靜かな溪聲が終夜私の枕に近く聞えた。

そしてその溪聲は、耶馬溪の特徵を成してゐるので、決して日光あたりで聞くあの凄じい怒號でもなく、また鹽原あたりで耳にするあの潺湲でもなく、また上高地あたりで聞くあの嗚咽でもなかつた。それは靜かに囁くやうな溪聲であつた。

從つて、四季の中では、秋が一番美しいであらうと思ふ。紅葉の美は確かにこの谷の調和を保つであらうと思ふ。次には春が好いであらう。夏はこの谷の中はかなりに暑い上に、山が淺いために蟲が多く、それが灯の周圍にぱら〳〵と集つて來て、とても靜かに坐つてゐることは出來なかつた。しかし、この谷では夏はかなりに旨い鮎が獲れた。津民谷で獲れるといふ鰻もあまりにしつこくなくつて好かつた。

私の三度目に入つて行つた時には、雨で、卯の花が白く咲いてゐた。『雨にあふもまたあしからじ卯の花の多き谷間の夕ぐれの宿』といふ歌を私は手帳に書きつけた。

堊の土藏あり、田舍離落あり、時にはトンネル、時には溪橋、時には飛瀑、時には奇岩といふ風に、行くままに、進むまゝにさながら文人畫の繪卷でも繙くやうに、次第にあらはれて來るさまは、優に天下の名山水の一つとして數ふるに足りはしないか。賴山陽もさうした形が面白いと思つたのではないか。

私は私の乘つた軌道車が、樋田あたりから夜になつて、溪を一々仔細に目にすることの出來ないのを憾んだが、しかもその車に燈火がなく、外はおぼろ月夜であつたために、却つて兩岸の嶙峋を見得たことを喜ばずにゐられなかつた。夜に見た耶馬溪ではなくて、奇岩突兀とした耶馬溪であつた。それが私に耶馬溪に對して正しい判斷を與へる有力な材料となつた。

奇岩は一つ一つ夜の微明るい空を透して聳えて見えた。

從つて最初行つた時に、羅漢寺の岩石を平凡だと思ひ、妙義の一部にすら如かないと思つた心がいつかすつかり變つて、あの羅漢寺の岩石も、この溪の一部であるとして見れば面白くないことはないと思つた。柿阪から新耶馬溪の奧を究めるに至つて、いよ〳〵さうした私の考へは肯定された。

耶馬溪は溪全體として面白いのであつた。其處に靑の洞門があり、彼處に羅漢寺があり、またその一方に柿阪のやうな、いかにも山の宿驛らしい村落があるといふ形が面白いのであつた。こゝから一つ一つ、五龍の溪を離し、鮎返りの瀑を離し、帶岩を離し、津民谷を離して見ては、決して單獨にその勝を誇ることは出來ないのであつた。

次第に私達は山を出て行つた。

耶馬溪はしかし矢張天下の名勝たるには恥ぢなかつた。

或はこれを球磨川の峽谷に比す、或はまたこれを熊野川の谷に比す、乃至はまた東北信飛の深い溪山に比して見る、さうして見れば、無論餘りに淺い谷、餘りにあらはな谷、餘りに世間化した谷のやうに思はれるに相違ないが、しかしさうして比較して見るのは、初めて接した時の心持で、單にさうした比較で片附けて了ふことの出來ないやうな價値が、二度行き三度行く中に、次第に私の心に飲込めて來た。

耶馬溪の谷は、實はその淺いのを、またはその水の瀬の平凡なのを、または樹木の少いのを病とはしてゐないのであつた。何故と言ふに、溪の特色は、價値は、寧ろその岩石にあるのである。山の突兀として聳えた形にあるのである。從つて淺い谷が、潺湲とした水が却つてそれに伴つてゐるのである。

であるから、此處では、決して急瀨奔湍の奇を見ることは出來ない。雲烟乎涌、忽ち晴れ忽ち曇るといふやうな深山の趣を見ることは出來ない。密林深く谷を蔽つて水聲脚下にきこえるやうな世離れた感じを味ふことは出來ない。夏日の冷めたい清水に手も切る、やうな快を得ることは出來ない。さうしたことを望んで、そしてそこに入つて行くものは必ず失望する。しかし溪流が處々に山村を點綴して、白

ん、坊さん』などと言つた。

夜は靜かに更けた。水聲が私達の枕を撼すやうにした。

あくる朝は早く起きた。幸ひに天氣は好かつた。さわやかな朝日の光線は深く谷の中までさし込んで來た。深樹の緣に置いた朝露はキラ／＼と美しく光つた。

宿の亭主は私達を案內して、山陽の筆を揮つたといふ溪の畔へと伴れて行つた。二階の客の發つたあとでは『お構ひもしなかつた。』と改めて私達をそこに導いて、津民谷で獲れた鰻などを馳走した。あつさりしてゐて旨い鰻であつた。

歸る時には、亭主はその男の兒を伴れて、停車場までわざ／＼送つて來て吳れた。茶代の影響とは言へ、流石は山の中の質朴さであつた。『本當に、初め行つた時は、こんな山の中の家に泊るのかと思つたけれど、却つて呑氣で好かつたわねえ、旅はこれだから面白いのねえ。』かう女は言つた。

實際さうであつた。昨夜は福岡で大盡でもあるかのやうな派手な泊り方をした。その前の宮島でも矢張さうであつた。それがかうして質朴な山中の旅舍に泊るといふことも旅なればこそと思はれた。

歸りは私達は窓から顏を離さなかつた。昨夜闇によぎた谷には、目を瞠るやうな美しい瀨が、そこにも此處にもあらはれてゐた。津民川の流れて落ちるあたりは殊に感じがすぐれてゐた。五龍の瀧は白い波頭を立て、見事に碎けてゐた。

たが、漸く私達は新しく建てたらしい深樹の中の灯の美しく見える二階屋へと案内された。

しかし來るのが遲かつたので、二階はみんなふさがつてゐた。『まア、兎に角』と言つて通された處は、宿の人達のゐるつゞきで、其處にすら浴衣がけになつた客が既に一人控へて居た。失望したけれども、何うするわけにも行かなかつた。かうした山の中に來ては、そんな贅澤なことは言つては居られなかつた。

しかし茶代を下した效目で、前にゐた客は、本店の方に行くことになつて、兎に角その一間は私達の占領することが出來るやうになつた。それに、宿の主人夫妻が何彼と深切に欵待して與れた。後には、母親は、『田舍の親類にでも招ばれて來たやうな氣がしますね。』などと言つた。

私は女と一緒に闇の中を溪の畔まで出て行つたりした。二階の灯は靜かに新綠の中に青く見えた。

風呂は五右衞門風呂であつた。母親は出て來て勸めたけれど、『私はよすわ。』と言つて女は遂にそれに入らなかつた。女は金盥に一杯湯を貰つて體を拭いた。

室が家の人達の室と續いてゐるので、亭主や上さんや子供達は遠慮なく私達の室に入つて來て話した。實際、母親の言葉通り、何處か田舍の親類へでも呼ばれてゐるやうな氣がした。室の隅には耶馬溪燒の廉い陶器や、西行の像を燒いた玩具や、いろ〳〵なものが客に賣るために置いてあつたが、七八歳になる男の兒は、父親の此方に來て話してゐる傍に、それを持つてやつて來て、『西行さん、坊さん、西行さ

窓の外を覗いたり何かしてゐたが、それと知つて慌てたらしく、そのまゝ急いで下り口の方に行つたが、「あぶないですよ！」と女や母親が心配して聲をかけるのも聽かずに、そのまゝばた〳〵と飛んで下りた。

女は立つて行つたが、覗いて見て、「まあ、亂暴なことをするのねえ、飛び下りたんですよ。」

「何うかしやしないかしら……危ないねえ。」

かう母親も言つた。

「なアに、速力が遲いから大丈夫ですよ。」

「でも、ね、亂暴ねえ、何うかしやしないかしら、怪我でもして倒れてゐやしないかしら！」かう言つて母親はおぼろ月夜の路を窓から覗いた。

桶坂の停車場は灯に明るかつた。それに、空には月がおぼろに見えて、山村の桑畠の尖つた屋根や、灯にかゞやいた停車場の旅舍や、周圍をめぐる山などがそれと見えた。水聲はあたりに響くやうにきこえた。

かぶと屋――かう言つて尋ねて街道筋の或る古い旅舍まで私達は行つたが、「別莊の方へ」と言はれて、宿の提灯に案内されて、雨後の泥濘の路を溪聲の高い方へと私達はたどつて行つた。

夜露にぬれた叢があつたり、田の畔のやうな足元のわるいところがあつたりして、女は度々聲を立て

『天氣になりさうね。』
『なるかも知れないよ。』
このおぼろ夜が、被衣につゝまれたやうな茫とした白い夜が私には嬉しかつた。それにさつきから氣にしてゐたが、三等室には電氣がついて居ながら、二等室には竟に竟に灯が點かなかつた。
『つかないのかしら、えらい汽車の二等室ね。』かう女は私やその母親に言つた。
『闇の方が好いよ。その方が山や川が見えるよ。』
私はかう女に言つた。さつきあれほど乘つてゐた乘客は——三等室も二等室もない程乘つてゐた人達は、何時となく下りて、私達のゐる車室には、私達三人と他に一人隅に横になつてゐる男があるばかりであつた。
灯のない汽車は、茫とした白い夜の中を靜かに走つた。川の瀨は白く、兩岸には、奇岩の兀立してゐるのが微かではあるが、それでも到る處に指さゝれた。これも車中に灯かげがないお蔭だなどと私は思つた。
津民の停車場を汽車が動き出したと思つた時、一隅に寢てゐた男はふと身を起して、
『今のは津民ですか？』
『さうです……』

かゝらうとしてゐた。山には山が重なり合ひ、雲はまたその山の上に簇湧した。

私はあちこちを女や女の母親に指し示した。『そら、そこの洞門の中を歩いて通つて行くんですよ。あそこに路があるんですよ。歩いて見ると、もつと非常に景色が好いんですがね。』

段々帶岩一帶の奇岩が雨後の筍のやうに續々としてあらはれ出して來た。あるものは簇がる雲の中から、或るものは連なる峰の上から、時には檜の木の林を靡かせつゝ、――そして溪は幾曲折してその間を流れて行つた。

樋田から羅漢寺に來た時には、薄暮の色が既に迫つて、村や、橋や、谷や、路がぼつとぼかしの中に見えるやうになつた。霧も薄くかゝりつゝあつた。

私は羅漢寺のある山のあたりを回顧して見たけれども、既にその崢嶸をも認めることが出來なかつた。次第に谷は夜になつて行つた。ある停車場に着いた時には、最早溪流の白い瀨をも見ることが出來なかつた。汽車がとまると、唯水の音が淙々として聞えた。

幸ひにも雨は晴れたらしかつた。手を窓の外に出して見た女は、

『あ、好い鹽梅に止んだわ。』

と言つて、晴れてゐたら月がさぞ美しく溪を彩るであらうと思はれるやうな、底に明るみを持つた空を仰いだ。

暫くして軌道車は出た。鐵道馬車の少し早い位である。ぐる〳〵と、中津の町は見えてそして隱れて行つた。賴山陽の最初に滯在した寺が其處から近いといふ停車場あたりからは、松林が段々見え出して、向うに舊知の八面山がその城壁のやうな姿をあらはして來た。小さな停車場は停車場につゞいた。そして一杯に乘つてゐた人達は一人下り二人下りて、これからそろ〳〵溪に入らうとするところにある停車場に行つた時には、もう立つてゐるものもなくなる位に車室はゆるやかになつてゐた。

雨も小降りになつた。

『好い鹽梅ね！』

かう女は喜ばしさうに言つた。

やがて溪はその最初の潺湲を段々その前に展いて來た。村が山に凭つたり溪に枕んだりしてゐる。深く覗かれた谷には、瀨が白く美しく碎けてゐた。

私は此の前に來た時のことなどを思ひ浮べてゐた。其時は、中津から川に添つて、暑い道を馬車で來た。福岡に男と駈落した村の娘の伴れて歸られるのと一緒であつた。娘はしほ〳〵としてゐて、伴れの男が氷を買つて與れても、それを飮むにすら氣が進まないといふ風であつた。可愛い眼をした娘だつた。

『お、好い！』

かう女が言つたので、氣が附くと、軌道車は旣に美しい鮎返りの瀑を前にして、今しも樋田の洞門に

耶馬溪の一夜

町のお祭か何かで、中津の停車場はひどく雜沓した。おまけに、雨はかなりに強く降つてゐる。私達は耶馬溪に行く軌道の方へと行つて見たが、そこにも乘客が一杯押寄せてゐた。

漸く乘るには乘つたが、中々發車しない。あとからあとへと乘客が乘つて來る。大抵は祭禮を見に來た連中で、赤い腰卷をまくつた姐さんや、晴衣を着飾つた子供や、婆さまや、中には小學校の先生らしい人々もゐた。皆な腰をかけずに立つてゐた。

『ひどく込むわねえ。』

かう一緒に伴れてゐた女は言つた。女の母親は小さくなつて隅の方に辛うじて腰をかけてゐた。これから山の中に入つて行かうとするのに、雨が止みさうにないのにも私達は心を苦しめた。

耶馬溪の谷の中にも、旅舍はあるに相違ない。しかし何ういふ旅舍が私達を迎へるであらうか。汚い蒲團、暗いわびしい室、碌々言葉もわからないやうな山中の民――かう思ふと旅の興も失せかけた。

野まで來て、そして午頃に富士見に歸つて來た。

伊那から木曾の谷に拔けて行く權兵衛峠は、今は殆ど通る人もなくなつてゐる。昔でさへ、伊那から宮の越まで六七里の間、人家も村もないやうなところであつたから、今はさぞ荒廢して了つてゐることであらう。しかし此路は木曾駒ヶ岳の北の一面を掠めて行つてゐるやうなところだから、行つて見て、決して面白くないことはない。雲が多く、嵐氣が多く、それに深山の趣にも富んでゐる。伊那から最初の峠まで三里、それから登つたり下つたりして、最後に神谷山の側面の峠を越すこと、それからはずつと下りで木曾谷の宮の越の少し手前のところへと出て行く。

高遠から伊那に行く間は、全くの平野であつた。路は坦として砥の如しである。途中御薗村あたりからは、後に、甲斐の駒ヶ岳、それに連亙した奥千丈の巨嶺を望み、前に木曾の駒ヶ岳連峯を望むといふ風で、いかにも氣象が雄大である。

この間三里。やがて伊那町へとやつて來る。先づ馬車を下りて、それから天龍をわたる。此處あたりでは、天龍はまださう大して大きくはない。舟楫も通じない。それに、諏訪湖から流れ落ちる川なので、上流といつたやうな氣分もなく、やゝ平凡である。しかし、河原がひろく、旅舍の欄干からもその流れが見えるので、夏は涼しい。水聲もかなりに高い。

伊那の町は高遠に比べるとぐつと俗化してゐる。新開町のやうなゴタ〳〵した町である。活動寫眞や芝居の多い町である。藝者などの多い町である。しかし、私の泊つた旅舍は、二階の欄干から天龍が指さして眺められるやうな家で、ちよつと感じが好かつた。それに、町そのものは大して面白くないが、東西兩面に聳えた山が高いので、嵐氣が多く、感じに何處か山の中の町といふやうな處があつた。夏は鮎が盛に獲れた。諏訪方面へも此處の鮎が澤山に持つて行かれた。

汽車で來ると、中央線の辰野驛、そこで下りて、それから伊那電車でずつとやつて來るやうになつてゐるが、この電車が輕快で便利だ。將來は飯田まで行く筈であるから、さうなつたら、この天龍川の溯派する飯田平野は、更に一層の繁華と發展とを來すであらうと思はれる。私達はあくる日はその電車で、辰

づ蹬んだ。信長は一番先に飯田から此處へと押して來て、こゝを破つてそして杖突街道を潮のやうに諏訪へと亂入して行つたのであつた。

それに、町としても高遠は好い町だ。城下町、衰へた城下町といふ氣分が名殘なくあたりに漂つてゐる。美しい女などが多い。『高遠は山裾の町ふるき町行きあふ子等の美しき町』かういふ歌を私は其處で詠んだ。

それに、此處に忘れても訪ねて見なければならないのは、その蓮華寺といふ寺に、老女江島の墓のあることである。江島は將軍家宣の枕席に侍した大奧の女中である。その權力が大奧を傾けたと言はれる位勢力のあつた老女中である。それが一旦役者との情事に坐して、死刑に逢ふべきのを一等を減ぜられて此處に流された。江戸で思ふさまの歡樂を盡した女は、この邊陬の地に來て、老いてそして死んで行つたのである。私はＲ君達と一緒にその寺に其墓を訪ねて、『緣なれや百年の後ふる寺の中に見出でし小さきこの墓』かういふ歌を私は詠んだ。

高遠は一夜ゆつくり泊つて見るべき町だ。町に沿つて三峰川の流れてゐるさまも、旅客の心を惹かずに置かない。しかし、私達は先を急いだので、そのまゝ馬車のあるのに乘つて、伊那町へと向つた。

馬車の中から見た三峰川の眺めは、かなりに見事であつた。尠くとも嵐氣の多い山裾の町といふやうな氣分のするところで、信州でも多く他に見られないやうな町である。

『天龍ども、確かに天龍だ！』

かう私は叫んだ。

あの諏訪湖を出て五六十里を流れて、東海の海に注ぐ大河を、又はあの名高い天龍峡の勝を持ち、河舟の勝を持つた大河を、かうした萬山の中に望み得たといふことは、私達に取つて非常に愉快であつた。私達は其處で休んで、長い間丁度夢中の景のやうに流れてゐた遠い遠い大河を眺めた。

谷を下ると、南北に細長く通じた谷があつて、溪橋などがかゝつてゐた。人家が三々五々溪に臨み山に架してゐる。それは金澤峠から來る街道の荊口といふ村であるといふことを地圖が私に教へた。

金澤峠の街道は、谷は西岸を高く縫つて通じてゐた。この路を一里ほど川に沿つて下る。と、又峠がある。登りはすぐ盡きて了ふ。そして下には大きな谷が開いた。この間を下る路は赤石山で頗る暑かつた。この間が一里。

これを下ると、向うの谷には、今度は杖突峠の昔の街道が南北に通じてゐた。私達は横に二つの谷を横ぎつて來たのであつた。

杖突街道は昔から開けてゐるだけに、谷も廣く路も立派であつた。電信柱なども並んで立つてゐた。釼山、的場などいふところを通つて、落日に面して、私達は高遠の町に入つて行くことが出來た。

高遠は例の仁科某の苦戰したところとして歴史上にも名高い城である。こゝが落ちて、武田の勢は先

清水屋の小屋こいふところがあつて、その下に製板所がある。大して大きい規模でもないけれごも、電氣仕かけか何かで、頻りに板を挽いてゐた。

此處等は全くの深山である。猿なごもゐるこいふ。

これから宗良親王の根據地であつた大河原の方に行くには、この黑川を猶下つて、黑河内に行つて、それから市の瀨から鹿鹽へこ越して行くのであつた。全く深山で、殆ご路こいふ路がないこ言つても好い位であつた。私達はしかし製板所を出るこ、すぐその黑川に離れて、そして深い深い密林の中を行つた。それは晝も日光が洩れないやうな深い栂の深林で、熊笹が殆ご人の肩を沒するばかりに茂つてゐた。

この間が、かれ是一里、やがて今度は急勾配の下り阪になつた。大きな谷に添つて一歩一歩下つて行くやうなこころで、下に咽ぶやうに谷川の音が聞えてゐた。こ急に、R君は指した。

『あれは？』

私達は山こ山この向うに、茫こした平野の中を布を布いたやうに或る大河の流れてゐるのを見た。

『天龍？　天龍！』

かう私は叫んだ。

『天龍ですかね？』

R君は半信半疑である。

いふ。金澤を越しても好いが、それよりも此方の方が近いからと云ふので、一番標高の高い御在所峠を越して行くことにした。

宗良親王の事蹟が私の胸に浮んで來た。親王の跡はこの近所に處々にある。白須の松原にもあれば、穗屋神社にもある、諏訪にもある。現に私のゐる村にも、親王の遺蹟と稱するものがある。それに、私の越えて行かうとする御在所峠は、山越しに、諏訪の勢力に觸れずに、眞直と山を傳ひ、谷をつたつて、親王の根據地である信濃の大河原に行くことが出來た。或は親王もこの山を越えて行かれたかも知れなかつた。私はその點でも、この山越しを面白いと思つた。

富士見の先の松目から私達は上つた。初めはさう大して險しくはないが、一時間ほど登ると、非常に險しくなつて、登つても登つても山又た山である。一町行つては休み、休んでは又登る。休む度に八ケ岳の美しい姿を眺める。この間が二里半。もつとあつたかも知れない。奥に製板所があつて運送が通るので路は幅の廣い立派なものだが、いかにしても險しい。R君やN君は、「先生はとても駄目だ、あとへ引返すつて言ふかも知れないと思つた。」などと言つた。それほど私はへこたれた。

漸く峠に着く。これからは峰つゞきである。入笠の丸い姿が見え出して來る。そこは標高六千八百尺である。其處からも、金澤峠の方から來る路が向うの谷を穿つて通つてゐるのが見える。やがて川が流れて來る。黑川である。

雲煙の氣に富んでゐて、釜無の谷の深く入つてゐる鋸岳に湧く雲は、何とも言はれず美しかつた。私は朝に夕にそれを眺めて暮した。

この鋸岳と相接して、釜無、入笠の二山があり、それにつゞいて、屛風のやうに諏訪の湖水の南岸に及んでゐる山は、私が殊に日夕相對してゐる山であつた。その山を越えれば向うは伊那である。『一度越えて行つて見たいな。』かう思つて私は暮した。

地圖で見ると、この山を越えて向うに出て行く路は三つある。そして諏訪湖に近づけば近づくほど峠の標高は低くなつてゐる。こつちから數へて、御在所峠、金澤峠、杖突峠、この三つである。

中でも杖突峠は、中仙道の副路として、又は捷路として、乃至は裏道として、昔から旅客の多く往來するところであつた。中仙道では和田峠、鹽尻峠、それから木曾の谷といふ風に入つて行つてゐるが、この路では、大門峠を越えて茅野、それから杖突峠を越えて伊那に行つて、更に權兵衞峠を越えて、木曾の宮の越に行つてゐる。非常に近い。中仙道の五分の一は何うしても近い。それにこの杖突の一路は、中仙道なごよりも古く發達したもので、昔の人達は伊那から飯田に行つて、木曾の御阪峠を主として越して行つたものであつた。勝賴を攻める信長の軍も皆な其方からやつて來た。木曾谷は寧ろ閑却されてあつた。

で、兎に角その山脈を突破して見たいと思つた。とある日好い鹽梅にR君とN君とが一緒に行かうと

山を越えて伊那へ

富士見の停車場を出てまだいくらも行かない中に、左の丘の上に新しい洋館が見える。赤い白い旗が揚つてゐる。それは測候所である。それと相對して、笠を着たやうな屋根の馬鹿に大きい別莊が見える。これが小川平吉氏の別莊である。この間に、仔細に注意すると、松林の中に埋れるやうにして、平家の小さな家が眼に附くであらう。其處に私はある年七月から十月の中旬までゐた。

好い處だ。別莊地としてこの位好い處はないと思はれる位好い處だ。初めて行つた時には卯の花が白く咲いてゐた。つゞいて山いちごが熟した。山木瓜の實も黄くなつた。桔梗、刈萱、女郎花なども咲いた。八月末には山は殆ど山花を以て彩られたやうに見えた。十月には初茸が澤山出た。

晴れた日には、測候所の露臺の上に、日本アルプスの鎗ケ岳が見えた。小川氏の別莊の二階から見ると、常念、穗高、乘鞍などもはつきりと見えた。

無論富士はこの高原の第一の眺望ではあるけれども、その西に連つた駒ヶ岳連峰は、山が深いので殊に

までまだ殘つて咲いてゐる山櫻、新綠の中に交つて咲いてゐる山躑躅、雪のやうに白く見える卯の花、その頃は伊香保も好かつた。溫泉も、そこに住んでゐる人も皆な蘇つたやうに見えた。電車から下りて來る浴客も、昨日よりも今日は殖えた……。かう言つて、人々は再び春の來たのを喜んでゐる……。

伊香保は春か秋のことだ。夏はあまりに雜沓しすぎた。秋は山の草花も多く、初茸なども出て、山の樂しみは盡きなかつた。

『どうも、冬は駄目ですな、伊香保も……』

かう私が言ふと、

『それでも、もう來月になると、餘程お客がやつて來ますよ……』

やがて電車の出る時刻は來た。外に出ると、山の寒氣が刺すやうに肌に染みた。妻は山の雪をちよつと見て、

『寒いわけですね、まだあんなに雪が深いんですもの。』

『東京では、もう梅が咲いてゐるのになア。』

『本當ですね。』

で、私達は其處に來てゐる電車へと乘つた。

電車は屈曲した勾配の急な山路を大きな音を立てゝ下りて行つた。」

「行けるには行けませうが、今ぢや矢張、此方からよりも、輕井澤の方から行く方が好いでせう。」

「寒いですな！」

「今は、とても行つても駄目ですな、此處でもこんなに寒いんですから。」

「さうですな。」

かう言つて、私はじつと眺めた。

私は二三日前電車で此處にやつて來たことを思ひ出した。雪が深く積つてゐる中を次第に山の中に入つて來たことを思ひ出した。階段をなした町の人家の中央に湯の鐵管から湯氣が湧くやうに騰つてゐるさまを思ひ出した。二階が寒いので、下の一間、火燵のある一間へ下りて來たことを思ひ出した。「寒いですね、伊香保は……湯でもなくつちやとてもゐられませんね。」かう度々言つて妻が浴槽に出かけて行つたことを思ひ出した。寒い寒い冬の山の溫泉であつた。

「は、つゝじが咲いてゐる。室の中は春ですな！」

こんなことを言つて私は笑つた。

「暖爐は、つい焚きすぎて、のぼせていけませんよ。」

見ると、そこにかけてある寒暖計は六十度の處を指してゐる。

私にはそれとなく春山伊香保があらはれて見えた。駒鳥の啼くやうな鳴聲、ところどころに五月の木

雪の伊香保

『まあ、此方でお當んなさい。』

かう言はれて、私と今年七つになる女の兒を伴れた妻とは、大きな會社の暖爐のたいてある一間へと伴れて行かれた。

彼方此方に散らばつたテイブルには、若い技手などが、洋服姿で、頻りに設計圖などを引いてゐた。硝子窓を隔てゝ見える深雪の山の堆積、白壁でも塗つたやうになつて見えてゐる奥の奥山、それを私は何ともいへない心持でじつと眺めた。その深雪の山の中には、あの吾妻川の美しい溪谷があり、秋は紅葉の美を以てきこえる河原湯の谷があり、更に奥深く雪に埋められた草津の溫泉があるのであつた。

『草津は駄目ですな、今は……』

『え、もうあつちは！』

『それでも、行かうと思へば行けるんですか？』

らう。十年來の流行唄は皆其處で唄はれた。清元も出れば、常磐津も出る。小唄も出れば、奈良丸くづしも出る。後にはカッポレから手品まで出た。それに引きよせられて客と言はず女中と言はず主人主婦と言はず、家にゐるすべての人達は皆な廊下に來てずらりと並んでそれを見てゐた。賑やかな一夜であつた。

あくる朝は宿の船で送られて、靜かな湖水の上を湯瀑の落口まで來た。そこでも私達は冴えた三味線の音の朝の空氣に漂ふのを聞いた。絃聲和艫聲——何とも言はれない靜かな靜かな氣分であつた。

湖畔で折つて來た八汐の紅葉の大きな枝は、筧の大きな桶に一杯になつて挿されてあつた。筧の水はその紅葉の下からちよろちよろと小さな音を立てゝ落ちてゐた。昨日はそれに雨が降りかゝつて一層鮮かな色を見せた。

『しかし、もうお別れだ。』

私は半年の僧房生活を振返つて見た。さらば、山よ、水よ、筧よ…………。

て此方を見てゐた。家の女中達も驚いたやうな顔をして、廊下に來て私達の唄つたり踊つたりするのを見てゐた。

私達のゐる三階の欄干からは、湖水の岸にある雁木がすぐ下に見えた。大きなスワンが一羽綺麗な碧い水に浮んで泳いでゐた。雁木のところには傳馬が一隻つないであつて、赤いメリンスの座蒲團が五つ六つそこに置いてあつた。いつでも漕ぎ出せるやうに櫓がもうちやんとつけてあつた。

『あれで行くんだね。』友達の一人はかう言つて樂しさうに私の方を見た。

麥酒に果物に煙草盆を載せた船！『中禪寺の湖水で一つ大いに三味線を鳴らすんだね。』かう言て私達はやつて來たのだ。やがて三味線の音は流るゝやうに湖水に響いて聞えた。

菖蒲ヶ濱では、中禪寺で賴んで置いた馬車がもう先に行つて待つてゐた。その黑い馬車は船がまだ岸につかない中から見えてゐた。『もう、馬車が來てるぜ。』かう言つて私達は笑つた。

友達の一人はわざと頰被をして、御者臺に上つて、老いた御者と並んで腰をかけた。喇叭を鳴らして見たりした。瀑のある或る谷川の淺瀨では、そこに泳いでゐるますを見附けて、それを捕らうとして、私達はざぶ〳〵その中に入つて行つたりした。戰場が原は時の間に過ぎた。

湯瀑の上のところに行つた時には、もう日が全く暮れてゐた。奧の奧の靜かな溫泉場、湖水を隔てゝ灯のチラ〳〵する溫泉場――その奧にある旅館の二階の一間は、其夜何んな賑やかな光景を呈したであ

そして、店の前に立つてゐたりした。『まア……』なんと言つて笑つて奥の方から出て來たりした。私が歸つて行つたあとでも、そのお伊勢さんは、矢張、さびしさうに白い弱々しい顏を見せて店に坐つてゐるのであらう。紅葉の客もやがては來なくなつて、雪がこの町を白くするであらう。かう思ふと、私は一層さびしい心持がした。

五六日前には、東京から大勢客が來た。そして一緒に伴れ立つて、中禪寺から湯元の方へ出かけた。來た日は曇つてゐたが、其翌日は一點の雲もないといふやうな晴れた日であつた。僧房に半年ゐた記念として、今日は大いに遊ばう。かう私は思つた。東京から來た頭の丸い人の背には、三味線が一挺、風呂敷に包まれて負はれてゐた。『これをかついで、山の上まで行くやうな特志なお客さんは、滅多にないだらうね。』などと私達は言つて笑つた。一行の中には、小唄の上手な姐さんと無邪氣な女學生とが雜つてゐた。

私達は明るい湖水を前にした室で早くも三味線の棹をつないだ。冴えた撥の音は靜かな空氣の中に際立つて鮮かに響いて聞えた。實際明るい感じがした。紅葉に照つた日影は、鏡のやうに澄んだ湖水の周圍を取卷いてゐた。

『見てる、見てる。』

かう誰かゞ言つたので、後を振返ると、隣りの普請場にゐた大工達は、めづらしいので、手をとゞめ

はあると思ひますね。』

『もう少しゐらつしやい……この下旬には、立木の觀音堂の入佛供養があつて、中禪寺が賑やかですから！』

かう和尚さんはとめて呉れた。

馴れた空氣に離れて行くのは、何となくさびしいものだ。僧房に馴れた私は、僧房をたづねて來る人人にも馴れた。御用聞の商人達とも懇意になつた。中禪寺のつた屋の主人からは、お客をつれて私が度度行つたので、大きなますを苞に入れて、熊笹で包んで、そしてわざ〳〵送つてよこして呉れたりした。毎日煙草や繪葉書を買ひに行く店の頰の赤い上さん、髮を綺麗にわけた番頭さん、東京の橋場から來てゐるといふ元氣な豆腐屋の小僧さん、八百屋の息子、蕎麥屋の若い衆――さういふ人達とわかれて行くのも何となく物さびしかつた。

神橋の傍の雜貨店にゐる娘は此頃姿が見えないが、何うかしたんぢやないかなどと私は思つた。それはお伊勢さんと呼ばれてゐた。瘦せた、細つそりした娘で感じの常に變つて見える人であつた。『あの娘は時によると非常に綺麗に見える時があるよ。さうかと思ふとそれほどでもないと思はれる時もあるがね。矢張、氣分の始終變つてゐるやうな氣質の娘だね。何處か複雜した心を持つてゐて、始終動いてゐるんだね。』などと私達は評判した。夏の夕方などには、派手な中形に黑繻子の帶なんかしめて、薄くお化粧

いた。其時分には、其處を誰も通つてゐなかつた。大きな杉の間の路がしんとしてゐた。私は其處でよく過ぎて行くライフを頭に浮べた。

私はさびしくなると、いつも輪王寺の方へと出かけて行つた。大きな門を入つて、三佛堂の扉の固く閉つたのを左に見て、そして黑い板塀の處に行つた。そこにある木戸を明けると高く四邊に音を立てた。其處に私の友達の和尚さんがゐた。

『ゐますか?』

かう言つて私は上つて行つた。

『もう何うしても歸りますか……。もう少しゐたら好いでせう。まだ、今月一杯はそんなに寒くなりませんから!』

『でも隨分長くなりますからな。』

『九月でしたね。』

『……だから、もうかれ是半年ゐるんですよ。大變お世話になりました。』

『それでもちつとは何か出來ましたか?』

『思つたほど出來はせんけれど、いろ／＼なことを考へましたよ。それだけでも此處に來てゐた甲斐

私の心の上にも色々な變遷があつた。私は私の半生を靜かに振返つて見るやうな人であつた。烈しく進んで行つた私、何も彼も構はずに進んで行つた私、四面の壁に突當るのも知らずに曠地に出て行つた私――それを私は離れて見ることが出來た。個人と社會といふことなどを深く考へた。私は開かれない扉に向つて立つてゐる人であるといふことをつくぐ〱感じた。私はさういふ心持の中で、Huysmans の“En Rout”を讀んだ。Flaubert の“Bouvard and Pecuchet”を讀んだ。デカダンのかげにあるシンボルといふことなどを考へた。

私は好んで老いた人と話をした。八十三になる婆さんと圍爐裏の前で長い閒話をしたりした。年を老つた僧は、私の爲めに長い昔話などをして聞かせた。

しかし、私は矢張都會の色彩を忘れることが出來なかつた。私は新聞すら讀まないやうにしてゐたが、それでも都會の色彩と響とは、絕えず私の胸を躍らせた。心の消長、心の盛衰、心の躍進、それにはいつも私は征服されてゐた。

加行の徒にならうと志したことも一度や二度ではなかつた。しかし、その加行の徒が矢張惡魔の障碍を防ぐことが出來ないのを見て、私はいつもその願ひから後に戻つた。『流轉か？ 躍進か？ それ以外に、ライフの眞相はない。』かう私は思つたりした。

私の寺の門を出て、輪王寺の傍を通つて、そして東照宮の正門に行く間を、私は午後四時過によく步

私は來た當座、一緒に來た書生に話した。「痕といふものは書けるね。殘つてゐた物の形で前に住んだ人のことを想像するといふのは面白いことだね。一つ書くかね。」こんなことを私は言つた。書生はまた書生で、押入の中から、女のする船底枕などをさがし出して、「先生、先生、こんなものがありましたぜ。お寺にかういふ枕のあるのはちと變ですね。」さも大事を發見したやうな顏をして言つたりした。何かめづらしいものはないか、何か前住んでゐた人の祕密をかぎつけるやうなものはないか。かう思つて私達は埃の一杯にたまつてゐる戸棚だの押入だのを明けた。

「私の後に來る人も、矢張さうしてあちこちをさがして見るだらう。」私はかう思つてさびしい氣がした。

私の僧房には、さま〴〵な人が來た。そしてその度毎に、いろ〳〵な心が動いて、いろ〳〵な言葉が交されて、そしてまたもとの寂寞へと歸つて行つた。もとの寂寞——こればかりはどうすることも出來ないものだ。

ある人は私の僧房で、生活の方法を變へやうとした。ある人は靜かに疲勞をやすめやうとした。ある人は、「もう東京に歸るのはイヤだ。いつまでもかうしてゐたい。」と言つた。私をこの僧房にたづねて來た故郷の妓も、短い滯在の間にいろんな困難に出會して、十日ほど前に暇乞に來て、そして國の方へと歸つて行つた。何も彼も過ぎ去つて行つた。元の寂寞が後を領した。

それを聞いて、四五年前、山の奥の木小屋で一夜を過したことを思ひ出した。

あと二三日で、私はこの僧房を去らうとしてゐる。私が去つて了ふと、門も、入口の雨戸もぴつしやりと閉つて、家は再び鼠の巣と黴の匂ひとになつて了ふであらう。そして誰かあとの人が入つて來るまでは、圍爐裏の上の鐵瓶も、机の前の座蒲團も、棚の上の貧乏徳利も、私の置いたまゝになつて、何年も何年も殘つてゐるだらう。私が始めてこの僧房に入つて來た時、到る處に私の前に住んでゐた人の痕跡を發見した。戸棚を明けると、醬油が殘つてゐた。砂糖が殘つてゐた。罐の中の豆には蟲がついて、蓋を取ると、ワンと言つて氣味のわるいやうに飛び出した。

『もう四年になりますからね。』かうその時主僧が言つた。

私は私のあとに入つて來る人のことなどを想像した。

痕跡といふことに就いて私は考へた。人間の殘した跡――それは意味の深いことだ。と、私の頭には含滿の淵の岸にある地藏さまのことなどが浮んで來た。獨歩と一緒に散歩した時、『この地藏さんは人間の跡だね。かういふものを人間がつくつて殘して行くツていふことが意味があるね。この地藏さんの像は石で刻んだものだとは思はれないね。人間がかうした形をつくつて殘して行くといふ心持が面白いぢやないか。』かう獨歩が私に言つた。私はそれを思ひ出した。

男體と女峰とがはつきり見える時は滅多にない。何んな好い天氣でも大抵は半段以上雲につゝまれてゐる。『冬の晴れた時分ですね。一番よく見えるのは――』かう町の人が私に話した。

いつか非常に荒れた日があつた。前の山を雲と霧とが早く早く掠めて行つてゐるが、雨が強く烈しいので、雲が切られて丁度大名縞のやうになつて見えてゐたことがあつた。雨の降る日は、却て私には樂しかつた。霧が白く軒先までかゝつて來て、谷の音が海の波の音ではないかと思はれるやうなこともあつた。私は肱椅子に腰をかけて、靜かに雲のかゝつたり晴れたりするのを見てゐた。

此頃では花もなくなつて了つた。一月ほど前には、山から書生が高山植物などを採つて來てさして置いて呉れたが、それもすぐ枯れて萎れて了つた。九連草ももう末になつた。裏の畑につくつてあるダリヤももう葉ばかりになつてゐる。

十五夜の夜には、町の寺へ行つて、老僧を相手にして酒を飲んだ。老僧の室には、團子と薩摩芋とがちやんと供へてあつた。枝豆などを酒の肴にした。

さびしい山の生活だ。一人きりでゐると、一日口を利くことがない。仕方がないから、机に向つて筆を執つたり書を讀んだりする。此處にゐては、今日は日曜だか月曜だか、そんなことはしらずに暮すやうなことが多い。これで都から手紙さへ來なければ、――かう思ふことがよくある。

或日、山から來た人が話した。『此頃もう鹿が鳴きますよ。好い聲ですね。丸で笛のやうですね』私は

ゐた群集はいつ何處に行つたかと思はれるほど山内は靜かになつてゐた。それから一時間ほど經つと、また門前で、ワツといふ聲がした。神輿が今かへるのであつた。私は門のところまで出て行つて見た。行列は矢張前の通りに來てゐるが、もうそれを見送る群集もなかつた。山内はまた元の寂寞にかへつて、參詣者がをり〳〵通つて行くばかりである。

靜かな秋だ。

私は、やがて冬になつて行く山のさびしさを想像した。紅葉の時と言つても、もうそれはすぐである。そして色がついたかと思ふと、すぐもう散つて行くのである。これから何遍時雨が來るだらう。そして山の頂はやがて雪で埋められるであらう。男體と、女峰とに雪が旗のやうにかゝるのももうすぐだ。私の前にちよろ〳〵落ちてゐる筧もやがては氷つて來なくなつて了ふであらう。落葉がこの廢寺の庭を埋めて了ふであらう。私は火燵の上に板を置いて、そして酒を飮んでゐる山の人達の生活を想像した。

山は山でなければ見られないやうな景色を時々私の前に展げて見せた。その中一番變化に富んでゐるのは雲と霧である。天氣の好い夕方などには、雲は赤い鮮かな色をつけて私の前の山を美しく彩つて見せた。かと思ふと、忽ち黑い雲が男體山の方から押寄せて來たりした。

てゐた。

やがて赤い裝束をつけて衣裳束帶をした神官が四人一齊に裳裾を長く引いて、そこに出て來た。

『あの人達が踊るんですか。』

かう私はきいた。

『さうです。あれが踊るんです。』

篳篥と琴と拍子木の音につれて、其の人達は靜かに舖石の四隅へと其身を運んで行つた。靜かな柔かな古風な踊りはやがて始まつた。兩方の袖を合せて、體を輕く浮かせて、靜かな樂の音につれて踊るさまは、私の心を惹くに十分であつた。藤原時代の面影などが私の眼の前に見えるやうな氣がした。

『いかにも古風なもんですな。』

かう私は和尚さんに言つた。

『あれで拍子木を打つ役が中々六ケ敷いんださうです。餘程老巧でなければ出來ないんださうです。』

私は眼をそれから離さなかつた。其人達は後向きになつたり、身をそらすやうにしたりした。體を長く延はすやうにしたりした。しかし全體が靜かで、のどかで、いかにも優長な時代に行はれた踊りだといふことはよくわかつた。赤い青い小さな姿が私の眼の前にチラ〱した。

その踊りは二十分位ですんだ。私は和尚さんに禮を言つて、私の寺へと歸つて來た。今まで集まつて

達は、皆な晴れの衣裳を着て、そして祭禮を見に來てゐた。町の藝者なども其中に交つてゐた。

御旅所は今日は綺麗に掃除されてあつた。紫の幕などが張つてあつた。行列が大抵入つて了つた時分、揉みに揉まれた神輿は、其入口のところで上へ下へと荒れ廻つてゐた。ワイショ、ワイショイ、かう云ふ聲が賑やかに四邊にきこえた。汗になつて團扇で煽いでゐる人なども見えた。やがて神輿は奧の拜殿へと納められて行くのが見えた。

それから三十分ほどすると、私は御旅所の上の方に當る寺の庭で、そこから一目に見える拜殿の方を見てゐた。和尚さんと、若い書生と、それに老いたお婆さんと私と、これだけで其處から見てゐた。東遊と云ふ舞踊がこれから始まるのであつた。『もうお膳が上れば、もうすぐだ。』などと和尚さんは言つてゐた。

『さうです、あの拜殿の前の舖石のところで踊るんです。何アに、大したことはありませんよ。』などと言つた。

『中々始まりませんな。これぢや、ビイル位欲しくなりますな。』若い書生はこんなことを言つて笑つた。

私の前には、群集で充たされた坂があつて、その向うに柵があつて、それから一目に御旅所の中が見えた。舖石の手前には、中に入る許可を得た人達が一杯に並んで立つてゐた。外國人なども澤山に入つ

何といふ古風な儀式だらう。古い祭禮の儀式を私は彼方此方で見たことがあるが、これ程すぐれたものは今までに私は見たことはなかつた。私は千年も前の昔の人の中に入つたやうな氣がした。自動車があつたり飛行機が上つたりする今の時代とは思はれないやうな氣がした。

一番先に雜学が來た。つゞいて鎧武者が來た。派手な赤い鎧が美しく日にかゞやいて見えた。次に槍が來た。馬に乘つた神官がその後につゞいた。天狗の面だの狐の面だのをかぶつた行列が二三十人つゞいた。上に載せた面が落ちさうで困つてゐるものなども中にはあつた。次には鉾が來た。太鼓が來た。一步每にドン／＼と太鼓は鳴つた。

又、馬に乘つた神官がやつて來た。可愛い稚兒が五人ほどつゞいて來た。其頃には、神輿がもう餘程近くなつてゐた。ピカ／＼した金具が秋の日に美しく照りかゞやいて見えた。

私は曲り角から塀つたひに人をわけて、私のゐる寺の門のところに來て見てゐた。其處で私は私の前を揉むやうにして通つて行く神輿を見た。

神輿のあとからは、今は芝居でなければ見られないやうな長柄の赤い傘をさしかけた馬に乘つた神官が行つた。それが東照宮の宮司であるといふことは後で知つた。

私は多くの群集に交つて、長坂の傍にある御旅所の方に行つた。いつもさびしい山内にこんな賑やかな雜沓があるかと思はれるやうな雜沓を押わけて私は石段を下りて行つた。町から近在へかけての娘

巡査が、『こら其處に立つちやいかん。電柱から前に出てはいかん。』などと絶えず制してゐたが、それでもあとからあとへと人が遣つて來ては其處に立つた。

私の立つて見るところからは、東照宮の正門が眞直に見えた。門の金ピカがピカ〳〵と光つて見えて、ゐる。青い衣を着た雛掌が、澤山そこに集まつてゐるのが見える。門の中ではいろんなものが行つたり來たりしてゐる。旗が見えたり、鎗が光つたり、槍が見えたりしてゐる。

大勢の雛掌が華表の石段のところまで下りて來てゐるが、それが容易に動かない。『もう出さうなもんだがな。』などと待勞びれたやうに誰もかれも言つた。

『もう來る、もう來る。』

かう言つて、あきて泣き出した脊の子を賺してゐる母親などもあつた。

雛掌が漸く歩き出したかと思ふと、またぴつたりと止まつて了つた。一直線に並んでゐるので、三四十人並んでゐるが、それが一かたまりになつて見えた。さしてゐる刀がはり鼠のはりのやうにツンツンと見えてゐる。

しかし待つてゐる間もさう大した長い間ではなかつた。雛掌はやがて一歩々々靜かにこつちに歩いて來た。

正面には、神輿のピカ〳〵光つてゐるのが長い間動かずに見えてゐた。

が、一人々々出て來た。それが少からず私の興味を惹いた。何となく滑稽な氣もした。
郵便箱の前では、若い鎧武者の群がピカ／＼する鎧を朝日にかゞやかせて、そして何か笑つて話してゐた。中には十三四の子供が鎧を着たのなどもあつた。

昔から東照宮の御領分といふのが、この町から近在にかけてあつて、祭禮の時には、皆なかり催されて、一里も二里も先からやつて來るのであるといふことを私はかねて聞いて知つてゐた。鎧武者、槍持、太鼓、侍――さういふ風に家柄によつて持役がきまつてゐるのだといふことである。そしてその衣裳や鎧や何かは、皆な東照宮の中の三神庫の中に不斷は藏つて置くといふことである。

それは丁度十一時頃であつた。私が机に向つてゐると、ワッショ／＼といふ聲がすぐ前の通りでした。「榊を持つて迎へに行つたんだな」かう思つた私は、着物を着改へてそして急いで出かけた。町から榊を持つて迎へに行くと、間もなく神輿が渡御になるのだといふことを私は聞いて知つてゐた。

門前には群集がもうぞろ／＼通つてゐた。いつの間に、何處からこんなに人が集まつて來たかと思はれる位であつた。私は曲り角のところまで行つた。東照宮の前の廣い通りには、兩側に人が一杯集まつてゐた。ホテルで拵へたバラックの中には、椅子が置いてあつて、早く來た外國人が既に其處に腰をかけてゐたりした。あとから／＼人がやつて來て、曲り角のところは忽ち身うごきも出來ないほどの群集になつた。

ある寺は谷を見下ろすやうな位置にあつた。室といふ室に日が明るくさし込んで、庭の眞中からは噴水が高く颺つてゐた。大きな自然石の手水鉢から綺麗な水が溢れて流れ落ちてゐた。その寺の和尚さんは、『何うも外國人に貸すと疊をわるくして仕方がありません。新しく取替へた疊が二月でかうなつて了ふんですからな。』などと言つてゐた。

ある寺は谷と谷の間に挾まるやうになつてゐた。其處からは何も見えない。世の中の何の音もきこえて來ない。いかにも深山の中にある寺のやうな氣がした。其處の和尚さんは老僧で、圍爐裏の傍に私を坐らせて、『まア何もないが、一杯何うです。』と言つて後の棚の上から盃を取つて私に勸めた。

本坊の庭は見事なものであつた。前の山を自分の庭に取入れて了つたといふ樣なつくり方がしてあつた。水の豐富なのが何よりもあたりを明るくした。池には到る處から水が落ちて來てゐる。

十七日は秋の祭禮で、他で見られない儀式があると云ふ話だつた。その日の朝であつた。私はなくなつた莨煙草を買ひに例の東照宮の前まで行つた。廣い通りに、物賣店などがチラホラ出てゐる。明けたことのない本坊の長屋が明放されて、そこに幕などが張つてあつた。六双屏風が二つも三つも置いてあつた。門跡始め、一山の僧侶が此處で神輿の渡御を見送るのださうだ。

ふと見てゐると、彼方の路や此方の路から、鎧武者だの槍持奴だの、上下を着て刀をさした武士だの

白かつた。私は私の僧房に栽ゑて置かうと思つて、半分ほどわけて貰つて歸つて來た。

「水氣の多いところでなくつては駄目ですよ。」かう車夫が言つたのを思ひ出して、私は日に二三度づつ水をやつた。

ある夜遲く月が私のゐる谷の中にさし込んで來た。私は崖の上に立つてそして前に展げられた谷を眺めた。

月は丁度谷の上流を照らしてゐた。私の立つてゐる前の谷は、前の山の影になつて暗く暗く見えてゐた。水の流れるのが唯白く見えるばかりである。

此處にゐては、殆ど月を見るやうなことはなかつた。餘程よく晴れた夜でも、雲は峰から峰へとかゝつてゐた。「今日のやうな月は滅多に見られない。」かう思つて私は長い間其處に立つてゐた。

私は山内にある寺をあちこちと見せて貰つた。靜かな好い寺ばかりである。こんな寺をかうして戸閉めにして置くのは惜しいと思はれるやうな寺ばかりである。

ある寺では、私は崖の上のあるところに立つて下を見下してゐた。大きな杉の森が前にあつて、右の方には、稻荷川を越して山が遠く見えてゐた。外山の獨立した姿がすぐ前に聳えてゐた。そこの庭には石楠花だの檜だの楓だのが栽ゑてあつた。葉の大きい楓はもう半紅葉してゐた。

私は驚いたやうな心持で、再びその顏を仰いだ。

私は境内を彼方此方と歩いた。私が獨歩とゐた小さな家は、依然として殘つてゐて、その一間の障子には午後の日影が明るくさしてゐた。私は舟で獨歩と一緒によくこの湖水を漕ぎ廻つたことを思ひ出した。深夜眼が覺めて外に出て見ると、湖水が一面の月の光になつてゐたことなどをも思出した。

此處から見た男體山は、すつかり其谷や裾や樹木を露はに見せてゐるやうなものであつた。一條、二條、赤く薙いでゐるところなども分明と見えた。麓にある瀟洒な中禪寺の旅館は殆ど明るい湖水の上に浮んでゐるやうに見えた。

麓の茶屋で休んでゐると、矢張其處にゐた一人の車夫が赤い實の一杯についた苔桃を手拭の布端に包んで持つてゐた。

『今日はお山に登りやしてな……澤山ありやすよ。』

かう言つてゐた。

東京に持つて行つて栽ゑて置いてもつかないものだらうかなどと私は訊いた。『霧の卷くやうなところでなくつちアなア。』かう車夫は危むやうに話した。

細い赤い實と厚い細い綠の葉とは尠からず私の氣に入つた。山の上でなければ育たないといふ話も面

竹矢來で圍つた中に私は入つて行つた。堂はもう大抵出來上つてゐた。立木の觀音のある所には幕が張つてあつた。

私は内陣の中に入つて、名高い立木の觀音を仰いだ。

この木像は勝道上人の手づから刻したものだと言はれてゐる。勝道上人は天平時代の僧で、始めて二荒山に登つた人である。私はこの前にもこの木像を見たことがあつたが、今まで分明とその印象が頭に殘つては居なかつた。これほど見事なものだとは思はなかつた。觀音の像としては、顏が少し恐ろし過ぎるとは思ふが、粗野な彫刻の中に一種の犯すことの出來ない力がこもつてゐて、向つてゐると崇高な心持が起つて來る。

殊に、眼と眉との間に、何とも言はれない深い影がある。「好いですね。立派ですね。矢張、刻んだ力の上に宗教が立派に働いてゐますね。」

かう私は一緒に來た人に言つた。

其人は話した。「これが向うの中禪寺の方にあつたんですが、先年の水害に堂は倒れて、すつかり木像も壞れて了つたんです。それでも顏だけ完全に殘つてゐたもんですから、兎に角にこれまでに修繕することが出來たんです。あの顏があれで八疊敷一杯位ありますからね。」

「そんなに大きいですかね。」

る。中でも、私の眼を驚かしたのは、日光から富士見を越えて栗山に行く間にある三界瀧である。近く寄つて見る瀧ではなく、餘程離れたところから見る瀧だ。それでゐて、かなりに大きく見える。三四十丈はあるだらうと思はれるやうに見える。

普通の旅客が通つて行く路にも、全く閑却された瀧がかなりにある。深澤にある朝日瀧などはその一つである。華嚴の瀧底に行く路にある白雲の瀧は好い瀧である。涅槃の瀧といふのも一寸異つた感じのする瀧である。

華嚴の瀑底から見た眺望は、雄大崇高を極めてゐる。星野五郎平翁の功空しからずと言つて好い。しかし、瀑壺の深く藍を湛へてゐるさまは、寧ろ此處からよりも上から見た方が好い。華嚴の上の茶屋から一町ほど下つたところから、柵に凭り木に凭りして覗いて見る方が好い。そこから見下すと、瀑に引込まれるやうな氣がする。

私は十日ほど前に中禪寺から舟で歌ヶ濱に行つた。

歌ヶ濱には私は獨歩と二週間ほどゐた。昔なつかしいところである。昔は小さな堂があつたばかりであるが、今では、此方側にあつた立木の觀音堂が其處に移されて行つたので、立派な朱塗の堂が出來かかつてゐた。大工が頻りに釿をつかつてゐた。

日光の山寺で

山中のうつり變りは實に早い。私の來たのはまだ昨日のやうな氣がしてゐるのに、山はもう色が附き初めてゐる。夜、神橋あたりを散歩すると、もう冬がすぐ眼の前に迫つてゐるやうな心持がする。

『これで紅葉の時、一寸人が來て、そして、冬ごもりですからね。堪りませんよ。』

かう和尚さんは言つた。

日光の水は綺麗だ。そして何處に行つても水が湧き出してゐる。裏店の汚いところからも湧き出してゐる。そして、雲が映つたり、樹の影が映つたりしてゐる。

私は書生の時分、此處に來ては、よく瀧を探つて歩いた。日光には四十八瀧などと言ふが、詳しく探つたら、もつと澤山あるかも知れない。寂光の奥に一の瀧、羽黒瀧などといふのがある。含滿の裏山に素麺瀧といふのがある。霧降の上流に眞黒瀧といふのがある。中禪寺湖の向うに黒檜瀧といふのがあ

其處から私は布野、横谷などいふところを通つて、脊梁山脈を越えてそして出雲に入つた。その次の夜は掛合といふところにとまつた。その次の日には出雲の大社に着くことが出來た。その若い車夫とは宍道湖畔の莊原といふ汽船發着所でわかれた。

三次町から廣島に出る道はかなり立派な路である。その途中に毛利氏出身の地である吉田町がある。廣島から三次までは、里程約十五六里はあるといふことである。

見たことがない。日本の脊梁山脈を南から北に破つてゐるので有名な江ノ川は、その橋のすぐ下で三次川を併せて、そして大迂回をして西北に向つて流れてゐる。溶々とした大河が萬山の中を流れて行くさまがそれと想像される。

橋の下に、底の淺い早舟が二三艘苫をふいたまゝつながれてある。此處から石見の國の河口まで一日半で行き着くことが出來るなどと車夫は橋をわたりながら私に話した。

三次には、霧の海といふことがある。それは夏から秋へかけて、霧が多いので、朝は一面霧になつて了ふのを云ふのである。山の上に登つて見ると、丸で霧の海のやうである。三次の町はその中に横はつてゐることは想像されないほどである。そしてそれが毎朝十時頃までは決して晴れない。人は霧の中から霧の中へと出て行く。町の高い屋根の尖角が見えたり、山の一角が見えたり、森の一ところが見えたりして、それは中々奇觀を呈する。山の上にゐて、町にかゝつた霧の晴れて行くのを見るのは、ことに面白い眺めである。

橋を渡ると、松の生えた公園がある。三次川に臨んでゐて一寸景色が好い。公園から眞直に町の大通はつゞいてゐる。私のとまつた旅館はこの通を五町ほど行つた左側で、二階は二間つゞきの氣分の好いところであつた。私はそこから「山中の夕日しらかへやすらかに君がゐまさんことをのみこそ」といふ歌を書いた繪葉書を出した。

『何うしたんだえ。』

『嬶が子を生みに里に來てゐるもんですから。』

かう言つて車夫は梶棒を上げた。

聞くと、細君は此處のもので、子供は一昨日生れたのだと言ふ。出雲まで行くから、それを言ひながら、子供の顏を見て來たのであるといふことだ。

『男かえ?』

『え……』

車夫は笑つてゐる。

『丈夫かね、兩方とも……』

『え、難有う……』

私は一種の面白さを感ぜずには居られなかつた。旅でなければ感じられない人生の印象である。

三次川は段々曲つてそして開けて行つた。もう山の中といふ感じは大分薄くなつた。そしてそこから二里ほど行つて三次町に入つて行つた。先づ入つて行つたところは十日市で、そこを通り過ぎると、大きな橋が三次川にかゝつてゐる。それを渡ると三次の市街が南から北へと通じてゐる。

三次は忘れられない處だ。地形から言つても非常に面白い町だ。こんな感じの好い町を私は餘り多く

私の車と一緒に來た。自轉車が先になつたり、私の車が先になつたりする。やがて一里位行つたところで、私は呉々も父親に禮を述べて別れた。

今、考へると、私はもう一生其處に行くやうなことはないであらう。女は父母に勘當されてまでも、その戀を捨てかねて、今ではその青年と一緒になつてゐる。子供が二人あつたが、一人は死んで今は一人になつてゐる……

私は其處から山を越えて、吉舍で晝飯を食つた。そこには中學校組織の私塾がある。尾ノ道から三次の方へ出て行く一驛次になつてゐるので、かなり賑つてゐる。私は女のことを絶えず胸に描きながらその町から三次川の上流に沿つて、そして段々下りて行つた。

三良阪といふところがある。そこを通り越して、少し行くと、三次川の谷は段々ひらけて行く。堤防が長くつゞいてゐる。ところが、ある處で、車夫は車をとゞめて、そこにゐる上さんらしい女と何か二言三言話してゐたが、「一寸待つて下さい。」と言つて、車の梶棒を下して、そして女と一緒に堤防の下の方の二三軒家のあるところへ入つて行つた。「何うしたのか知らん、こんなところに知つてゐるものがあるのかしらん」かう思つて不思議にして待つてゐたが、中々歸つて來ない。後には、車を下りてそこらをぶら／＼してゐたが矢張歸つて來ない。少くとも十五六分も時間が經つてゐる。

「何うしたんだらう。」かう思つてゐると、やがて車夫は堤防の下から姿を現はした。

して酒を飮んだ。『靜かで好いですね。かういふ處で勉强すると、いくらでも仕事が出來る。』

かう言ひながら、私はつい酒に醉つて了つた。そしてぐつたり寢て了つた。

氣がつくと、

『先生、先生。』

かう女は搖動かしてゐる。日が暮れて灯がついてゐる。父親は笑つて私の方を見てゐる……。

あくる朝は早く私は其處を立つた。車はそこで出雲の大社まで約束して貰つた。若い車夫で、『私も參詣したう御座いますから、お伴をさせて戴きます。』と言つた。別れを惜む人達に、やがて私は別れた。女は眼を赤くしてそして店に立つてゐた。

私の胸にも涙がこみ上げて來た。可哀相な女だ。かうした立派な財産家に生れながら、藝術を慕つたが爲めに、いろ〳〵な悲哀やら苦痛やらを味はなければならないのかと思ふと、私は一層可哀相になつた。愛憐の情は漲るやうに私に押寄せて來た。

『それでは、御機嫌よう。』

『左樣なら……』

かう云つて私は女と別れた。

父親は庄原の方へ行く路と吉舍の方へ行く道との別れるところまで送つて行かうと言つて、自轉車で

つめて、男に先に持たせてやつた。そして私と女と父親とは並んで出かけた。秋の晴れた好い日であつた。山には白い雲が靜かに靡いてゐた。町を出ると、小さな川がある。水田が丘の裾近くまで連つてゐる。經木眞田などをこしらへてゐる工場などがある。

「そら、向うに見えるでせう、松のねきに。」

かう父親は指した。

成程、丘と丘との入込んだ小さな谷のやうなところの少し上のところに松があつて、庭木があつて、家が見える。屋根が見える。

「好い處ですね。」

かう言ひながら私達は田圃の中を歩いて行つた。

長い間經營したらしい立派な庭であつた。庭木などが澤山に栽ゑてある。築山などがある。池には水が山から流れ落ちるやうになつてゐる。家は少し高い處にあつて、ずつと向うを見晴らすやうになつてゐる。茶屋かゝつた瀟洒な家で、まだ半分出來かゝつてゐるところなどもある。「つい、忙しいもんですから。」父親はかう言つて、「此處が出來上つたら、向うに一軒二階屋をつくらうと思ふんですがね。來年あたりやつていらつしやい、すつかり拵へて置きますから。」

其處で四時ごろから日の暮れるまで私達は遊んだ。圍爐裏で湯をわかして、吸物などをあたゝめて、そ

枕元の時計を見ると、十一時を少し過ぎてゐた。

夜、蠟燭をつけて便所に行つたのを覺えてゐる。音を立てぬやうに靜かに階梯を下りて、壁と壁との間を長い廊下を傳つて、そして向うに行つた。蠟燭の火がチラ〳〵する。あたりはしんとしてゐる。茶の間に寢てゐる女のかすかな呼吸もきこえる。

私はまた靜かに二階に上つた。蠟燭をつけたまゝ、長い間、床の上に坐つていろ〳〵なことを考へた。そして長嘆息を吐いた。少くとも一時間位はさうしてゐた。

あくる日は一日滯在した。そこから五里ほどある帝釋の奇勝を父親は說いて、是非一日延して、一緒に行つて見ろといふ。そこはこゝから西城に行く路の中ほどにあつて、石橋だの石門だのがある。わざわざ遠くから見物に來るものもある。永明寺といふ眞言宗の寺がそこにある。備後では名高い山水の地だ。

かう父親は私に說いて聞かせた。私も帝釋の勝はかねて聞いて知つてゐる。妙義に水のあるやうなところだとも聞いてゐる。『雁きくやこゝは橋やら山路やら』といふ風作の句なども知つてゐる。行つて見たいと思つた。しかし私は忙しい體だつた。この山の中に入つたのでさへ、すでに時を過しすぎてゐる位だ。私はさう父親に言つた。

午前は町だの、近所の祉だのをたづねた。午後からは、向うの別莊に行くと言つて重箱に料理などを

『これが私の室よ。』と言つた。

蛇二疊！『よく此處には蛇がゐるので、子供の時分にはこはがつて誰も行くものがないんです』となごと女は曾つて話したことがあるその二疊の一間だ。其處には、新刊の雜誌だの、本だの、飜譯ものだの、洋書だの、原稿紙だのが一面に散らばつてゐて、机の上には、縮緬のよせ布を集めた肱つきが際立つた色をあたりに見せてゐた。

『夜もゐるんですか。』

『寢るのは此處ぢやないんですけれども……夜もこゝで勉強するんですの。』

『さむしいでせう。』

『いゝえ。』

かう言つて女は笑つた。

その狹い一間の中で、女は戀の傷に悶えてゐるのである。かう思ふと、私はたまらなく可哀相になつた。

私は二階の奧の一間に寢た。何うしても眠られなかつたのを私は今でも覺えてゐる。いろんなことが頭に上つて來て、それを振拂つても振拂つても駄目だ。隣には料理屋か何かで、三味線の音が賑かにしてゐる、遲くまでしてゐる。客の笑つたり唄つたりしてゐる聲も聞える。何時かと思つて、マッチをすつて

し行くと、風呂場がある。
女は先に立つて、私を其處に案内した。扉を明けると、廊下の暗いのが急に眩いやうに明るくなる。着物をぬぐところは二疊の間になつてゐる。鏡臺が置いてある。女はその抽斗を明けて見て、石鹼も櫛もブラシもそこに入つてゐるのを見てから、私の湯に入るのを立つて見てゐた。
『加減は何うですの、先生。』
かう女は後から言つた。
『さうさ、少しあついね。』
『留、留。』女はかう呼んで、『あついさうだから、少しうめて上げてお呉れ。』
留といふ中年の婢は、風呂の前の扉を明けて、そこから顏を出して、そして水をうめて呉れた。
風呂場から廊下を奥に傳つて行くと、そこにまた中庭があつて、それに面して立派な十二三疊位しける一間がある。そこに、父親はビールを持つて來させて、家の寳物にしてある應擧の緡の三幅對を見せた。『先年、大本營が廣島にあつた時、これを御叡覽に上げたのですけん……かなりそのとき好い方でした。』などと言つた。
その奥に二疊位の茶室がかつた一間がある。女はそこの戸を明けて見て、

やがて私は廣い二階に請された。私は紺の脊廣を着てゐた。それでは窮屈たらうと言つて、女は父親の着物を出して貸して呉れたりした。私と父親と女とは相對して坐つてそして話した。鯛の鹽燒たの、刺身たの、吸物だの、こんな山の中では容易に得られないやうなものがやがて膳の上にのぼつた。父親が下に下りた時、私は女に言つた。『まア、少し時節をお待ちなさい、今、草津に行つてるやうですね。』

父親はやがて上つて來た。二人で話してゐるさまが、父親にも少しく異樣に感じられたらしかつた。父親の眼鏡は光つて見えた。父親はかうした田舍町の財産家によくあるやうな書畫道樂で、やがていろんなものを其處に持出してひろげた。茶山の書もあれば、山陽の書もある。竹田の立派な山水などもある。抱一の茶かけなどもある。ビールを二本位あけて、ほんのりと私が醉つた頃には、其處等には幅物が五本も並んでゐた。女は『父さんがこんなものを出して東京の人にはめづらしくもなんともありやしない。』といふ顏をして、私と眼を見合せて笑つたりした。父親は成るべく娘の戀の問題には觸れたくないやうな形をしてゐた。それでも娘が座にゐない時、『それは、男がしつかりしてゐるのなら、よう御座んすけん、どうもあれぢやな……まア仕方がない。』などと言つた。

それは大きな家だつた。二階は十疊の間が二間あつて、其の裏に四疊半があつた。階段が中から上るのと、茶の間から上るのと二つあつた。奧の方の階段を下ると、そこに八疊位の茶の間があつて、そこに中庭が出來てゐた。茶の間に添つて、細い暗い長い廊下があつて、西方は壁になつてゐる。そこを少

つと此方を見てゐた。

私は車を下りた。

『まア、左樣ですか、娘がもう先生がお出でになるかつて、昨日も一日待つてをりました。』

かう言つて、長々娘が世話になつた挨拶をして、一寸用があつて此處まで來たなどといふ話をした。

私は再び車に乘つた。そこからはもう町は近かつた。丘に沿つて廻ると、少し開けたところがあつて、路はだらく〵とその田舍町へと入つて行つた。いかにも海岸から山の中に入つて來たといふ感じのする町であつた。女から聞いた話が一つ一つ蘇つて來た。女が幼い時を過したといふ小學校があつたりした。警察署が町の曲り角のやうなところにあつて、そこから商家の軒が兩側に續いた。笠だの糸立だのを賣つてゐる家もあれば、乾物類を店に並べてゐる家もあつた――銀行と書いた大きな板が右に見えたと思ふと、その隣の自轉車の置いてある大きな店に車夫は梶棒を下した。

一番先に女が出て來た。父親が續いて出て來た。父親とは兼ねて二三度逢つて知つてゐた。

『よくまア來て下すつた……』

女は喜悅の色を顏に漲らした。

『さう、母さんに逢つて？』

などとも言つた。

茶店があつた。筧から清水がちよろ／＼と落ちてゐる。駄菓子などを賣つてゐる。私はそこで敷島を買つた。

　峠にかゝる時分から、不思議にも私の心は草津にゐる青年の方に惹かれてゐた。青年も可哀相だといふ氣が盛んに起つて來た。自分が中に入つて、その戀を打壞したといふのではないが、さうかと言つて、その戀の成就を二人の爲めに謀つてやりもしなかつた。私がその女を愛してゐなかつたなら、もう少し多く二人の爲めに謀つてやつたかも知れなかつた。それを考へると、戀人に離れて、かういふ山の中にゐる女も可哀相だし、草津の山の中にさびしい月日を送つてゐる青年も可哀相であつた。それに、私の心はセンチメンタルな狀態になつて、感情が漲るやうに胸に押しよせて來た。私の心は絶えず女に向つて波打ちつゝあつた。

　いつの間にか峠をも越えた。

　そこからは下り坂である。細い谷川が一歩毎に段々開けてそして大きくなつて行く。谷から谷へと路が折れ曲つて行つてゐる。車夫は一散に下りつゝある……と、ある家の前に來た時、（それはもう上下が近いと言はれる頃であつた）車夫は梶棒をとゞめて、「向うに立つて御座るのが、松本の奧さまだ……」かう敎へて吳れた。

何方かと言へば、肥つた、顔の綺麗な、品の好い、背の低い四十五六の人だつた。その人も立つてた

『何ァに、自轉車で通る位ですから、さうひどいことはありません……でも、峠は一つ越さなければなりませんけれど。』

『何里ッて言ふんです？』

『七里と申します。』

かう上さんは話した。上さんは途中のことをいろ〳〵と話して呉れた、松本に行くお客だといふことを知つてから、上さんは一層私を叮嚀に取扱つて呉れた。『母さまも、父さまも入らつしやる筈ですな。』などと言つた。

今日の正午過ぎまでには、その明るい表情のある顔を見ることが出來ると思ふと、何となく心がはずんだ。それに、娘の家を見るといふことも好奇心を誘つた。『何んな家だらう、金持ださうだから、立派な大きな家だらう。』などとも想像した。

路は蘆田川の谷に沿つて、ぐる〳〵廻つて上つて行つた。その谷はさう大して立派な谷ではなかつた。溪流も何方かと言へば凡であつた。唯、紅葉が谷を染めてゐるさまは私の心を惹いた。私の車はいつも山に向つて登つてゐた。そしてその山が盡きると、その向うに谷が折れ廻つてついてゐた。信濃や飛驒のやうに深い山といふ感じは起らないが、兎に角四面悉く山であつた。こけら葺の獵師の家などがぽつねんと一軒立つてゐるやうなところもあつた。木野山に入らうとする處に、橋があつて、其處に一軒休み

その女が私を強ひてその山の道を選ばしめたのである。

府中の旅籠屋で、その家の話を聞くと、「松本の娘さん、學問がお出來なさるんですつてね、此處等でも評判の娘さんですよ。此間も母さんとお泊りになりましたつけ。何でも尾ノ道に御親類があつて、よくお出かけになるやうな話ですよ。父さんは、こちらの銀行の重役さんですから、始終お出になりますよ。」かうそこの上さんが話した。靜かな夜であつた。何處か遠くで水の音がしてゐた。私は、福山から通つて來た路を頻に浮べた。川がある。町がある。織物などの出來る町である。牛の仔が何匹となく野に遊んでゐる。私の志す方に山が重り合つて、夕暮近い靄がぼんやりと一面にこめてゐる。村の夕炊の烟もその中に交つて靆つてゐる。やがて私の車は、道の細い田舍町へと入つて行つた。それが府中であつた。煙草が出來たり、指物師の多かつたりする府中の町だ。其處で私は一番大きな旅籠屋を選んで泊つた。その町には、汚ない女郎屋があつて、薄暗い格子などが續いてゐた。

この町の近所には、吉備津神社と櫻山神社とがあつた。國分寺の趾もその近くにあつた。

あくる朝、私は早く出かけた。昨夜頼んで置いた車は、時間通り七時にはもうやつて來てゐた。

昨夜、上さんに、

「隨分ひどい路ですか？」

と訊くと、

備後の山中

私はあることがあつて、福山から府中上下を通つて、三次へ出て、そして出雲に行つたことがある。それはずつと前の十月中旬の頃だ。私は山陰道の旅行を企てゝ居たが、播磨から入らうとする計畫を捨てゝ、その山の中を通つて行くことにした。一生忘れられない旅である。

何故、この山の中が私の心を惹いたかと言ふと、其處の山の中に上下といふ町があつて、そこに私の弟子になつた若い女が居た。その女は私の家に二年ほど居たが、ある青年と戀に落ちて、そのことが知れて、父親が來て、無理やりにつれて行つて了つたのである。私もその女が好きだつた。無論、戀といふものまでにはまだなつてをらなかつたけれど、心はひそかにその女に向つて居た。私は私の心をかくさなければならないやうな位置に身を置いた。その女に對しても、嚴なる父と柔しい戀の保護者との兩面を兼ねなければならなかつた。青年は失望して上州の地方を放浪して居た。何でもその時分草津に居た筈だ。

備後の山中

外五編

箱根は規模が少さい。山も淺い。雄大とか壯大とか、深奥とか、幽邃とか謂ふ感は充分に味ふことが出來ぬが、都に近い、交通の便利な、設備の完全な山水としては、多く他に求めることの出來ないのは事實だ。

對岸の山の中腹を仰ぐと、電車の原動力なる鐵管を埋めた路を指點せられる。須雲川、畑の二驛は昔は榮えたところである。本陣と言はれたらしい大きい旅館のがらんとして居るのも二三軒はある。今では、一村總て箱根細工を業として居る。

全く山の村となつて了つた。

箱根から三島に出る道は一層淋しい。殆ど越えるものが無いさうだ。此間に今仙人と呼ばれた修行者があつて、旅人に無料で茶を勧めて居る。

山中と謂ふ村がある。昔はやはり榮えたものださうで、豐太閤の小田原攻の時、北條氏の軍が此處に壘を築いて一戰したところである。今はそんな跡は搜しても見られぬ。傾きかけた百姓家、大豆畑、麥畑、休んで、心太を啜る家も無い。兎に角、此の舊道を踏破して、徳川時代の繁盛なさまを想像するのは興味が多い。

箱根から熱海に行く路は、多くは山と山との連亘した背のところをたどる。其里程は五里、十州五島を見るといふ日金峠の跡が其の途中にあるだけあつて、眼界はいかにも廣い。富士を絶えず見て行くことが出來る。湯河原へ下る路は此途中まだ日金に達せぬ中に左に岐れるので、谷の緑を縫つて行く。概して此の熱海道は篠笹が深く、樹立も繁つて、朝通ると、衣は半身露にぬれて了ふ。けれど日金の絶景はこれを償つて餘りあると言つて好い。

箱根の舊道を通つたことは二度ある。一度蘆の湯から道を間違つて其舊道に出た。一度は故人になつた大橋乙羽君と電車の水源を見に湯本から行つた。舊道は小田原から箱根驛まで四里、湯本から三里、其間の宿驛には畑、須雲川などがある。早川の谷に沿うた溫泉道とは、溪谷を異にして居て、この舊道に沿うては、須雲川の一溪が流れて居る。早川の風景とは餘程趣が異つて居て、彼方は迫つて激したところに妙味があるし、此方は緩るやかに寂びたところに面白味がある。早川の鳴る音を急雷の如しとすれば、須雲川の流るゝ聲は佩環を鳴らすが如しと言つて好い。早川の溪では幽邃な深い感は味ふことは出來るが、靜かな親しみ易い感を得ることは難い。須雲川の溪では寂びやかな靜かな悠々たる感を得ることは容易いが、峽谷と言ふやうな趣は得難い。

昔はこの須雲川の谷に、驚くべき雜沓と繁華とを呈したのであるが、今は全く其面影を失つて、却つて早川の谷に、電車が設けらるゝこの話。山川も心があつたなら、其變遷の甚しいのに驚かずには居られまい。須雲川の手前の一茶店の老婆が、この頃では舊道を行く旅人は一人か二人位、冬などは全で通るものがありませんと言つて居たのを聞いてもその衰微が推せられる。けれど此舊道は是非一度歩いて見なければならぬ。湯本の宿を離れると、溪流の音が淙々として聞えて、淸く淺い瀨が美しく眼に閃めく。道が溪流と平行して、其屈曲したまゝについて曲つて、往昔の並木の松が絕えず淋しい音を立てゝ居る。山の女が箱根細工の木材を脊負うて出て來るのに、一人ならず二人ならず三人までも邂逅する。

にも好い、浴後の散歩にも面白い處が尠くない。

溫泉の前が二子山で、其山の高原に接して居る邊には、一面の草花、萩、桔梗、女郎花、苅萱、尾花の穗が風に靡くさまはことに奇觀だ。此の草花の中に立つて、涼しい風に吹かれながら眉を擧げて遠く望んで見給へ、箱根連山の起伏して居る彼方に、澎湃渺茫たる相模灘が、恰も弓弦を張つたやうに弓形を成して展げられてある。山より海――微かではあるが杳渺たる蒼波を望む感は、容易に味はれぬ感である。此の高原に、一つの古碑があつた。たしか恩人の碑と題してあつたやうに思ふ。其書いてあつた事蹟は何であつたか忘れて了つたが、其碑の草花の中に立つて居る光景が頭腦に殘つて、何だか詩材にでもなりさうな氣がした。今も立つて居るか、何うか。

蘆の湯から宮の下まで駕籠で行く。下り坂をよいしよ〳〵で、下りながら仰向くと、青い秋の空が透徹るやうに晴渡つて、手の屆く所に、桔梗、女郎花、萩の美しいしだれ咲、金線の、なめし皮の、小さい詩集を微吟して下つたらさぞと思ふ。小涌谷の溫泉も風情の多い處だ。人家七八軒、青嵐がサツと渡つて、遠いところで谷川の嗚咽が聞える。箱根の奧の山、宮城野から強羅、大涌谷に連る山々が面白く伴えて、谷から谷が一目に打渡される。旅宿にも心のゆく家が多い。浴槽も綺麗だ。客の種類もソ子なこのやうな味噌的御神連は來ない。箱根の熱鬧を避けて、そして設備の整つたしづかな溫泉を望む人は、此處に來るのが好いと思ふ。

根の離宮のあるところが、何の事も無い、丁度池の中島のやうに見えて、駒ヶ嶽、二子山、神山などが殆ど手に取るやうに指さゝれる。十年前の雪の降る日、萬山の底に、この深碧な湖水の凍つた寒い海を見た時――

八

私は熱海道を相模の湯河原に向つて下つて行つた。だから箱根の舊道と温泉道の半とは、今回の旅行には通らなかつた。止むを得ない――追憶を書く。

元箱根は箱根より好い。景色も好いし、人氣も好い。湖岸に賽河原と言つて、石の佛像を並べたところがある。旅店にも質實な低廉な深切な好い家がある。聞くところによると、此元箱根は自治制の發達した模範村であるさうな。權現――箱根權現の靈驗のあらたかなのは、今更此處に説くまでも無い。東海道交通の要衝に地位を占めて居つたから、古今武將らは皆これに參詣して、武運の長久を祈つた。今日、其寶物の中に國寶の少くないのもその爲めである。大石良雄の復仇會計帳と言つたやうな巨細殘さず其費用を書いたものもあるさうだ。蘆の湯温泉を頭腦に描くと、烈しい硫黄の臭がすぐ鼻を撲つやうな氣がする。箱根の温泉中、此温泉位硫黄の烈しいものはあるまい。湯も稍々濁つて居る。塔の澤、湯本などの玲瓏たるに比すべくもない。けれど其地が全く高原の上に位して居るので、眺望が快濶でいか

た。灰色の霧の薄く侘しく懸つて居る爲めであらうか、眼に入るもの入るもの總て侘しくないものはない。封建時代の遺物なる古い大きな家の傾斜、壁の竹の腸の露出、洋館のペンキ剝落、店に坐つて居るものも多くは昔の繁榮を夢んで居る人達で、若い者も其時の話を聞いて過去のみ想像して居るといふ風である。それであるのに、面白いのは、一面旅客の爲めに開けた一種急激なる開化のさまである。この古い驛と新らしい洋館、この昔の民と西洋の旅客、あゝ何といふ面白い對照であらうかと私は思ひながら歩いた。

古い大きな家の一部を保存したらしい旅館の隣に、際立つて塗たての青色鮮かな洋館がある。其隣に西洋人の別莊らしい家、庭には荒れた花壇にさまざまの花が咲いて居る。一軒置いて隣が郵便局、其向う側の家々からは箱根細工を造る轆轤の音が高く聞えて來る。昔の名殘の大きい井戸が路傍に殘つて、街道に出て何事かを語り合つて居る女は如何にも暢氣さうである。猶少し歩いて行くと、霧の晴れた間から、朝日が美しい光をぱつとこの古驛に投げた。

箱根の古驛から熱海道にかゝつて、五六町行つた處に、蘆の湖を見るのに究竟なところがある。上から蘆の湖を一目に見るところを調べると、蘆の湯道から元箱根と權現の森とを間に見た湖、駒ヶ嶽の中腹乃至は鞍掛の半腹から見た湖、姥子の上の國境の嶺から見た湖、箱根の舊道の峠から見た湖、これら皆な特色があつて面白い。けれど私の考では熱海道から見た湖水が一番勝れて居るやうな氣がする。箱

『何アに、大抵大丈夫です。山の中ですから曇つたが曇つたにやなりません。』

ふと、子供が寒さうに、ちよこなんと坐つて居るのに、氣が附いて、

『寒いんぢやないか。』

子供は答へもせずに頭を振る。まだ人見知をして、はにかんで居るらしい。夏蜜柑を遣つても手を出さうともせぬ。

舟は靜かに湖上を行く。

湖に映る數箇の洋館、左に離宮の白い建築、岸を縫ふ樹立の一列、丁度蜃氣樓のやうな美しい箱根が見え出した。こんもりとした權現の森は後方に、二子山は半ば其の雲の襞を捨てゝ、曾遊のなつかしさが簇々と胸に湧き返つた。此湖畔の旅亭に始めて泊つたのは、明治二十七年、兄と一緒に箱根の舊道を踏破した時であつた。其次に通つたのが二十九年の冬、前にも言つた太田玉茗と熱海から來た時で、雪の盛に降頻る日であつた。其時の淋しい湖水は今でも眼に着く。其次は三十年の夏、一緒に來た友はもう死んで此世には居ない。今更に十年の間に、人事の變遷の倏忽なのに驚く。

箱根の古驛のはふ屋の裏の小さい埠頭に舟が着く。船頭に別れて岸に上る。十年前の箱根が再び眼に映つた。

廣い街道、疎らな菅葺屋根、其間に西洋造の旅館が二三軒、私は十年前よりも一層此地の衰頽を感じ

「え、此湖でまア鰻や何かゞ取れるですから、少しは漁しますけれど、それより矢張農の方でがすナ。」と言つて少時經つて、「それに、この箱根細工の材料を拵へて居るです。」

「箱根細工？　はア、矢張あれで生活をして居るのかナ。」

と、私は思つた。

「冬は雪が深いだらうね？」

「いゝえ、さう大して積りはしませんがナ。兎に角、山の中ですから、寒くつて、寒くつてとても話になりません。」

「その時分には姥子にも湯治客が來なからう？」

「え、さうですとも、あの溫泉は冬は丸で駄目です。」

見ると、もう湖水を餘程來て居る。顧ると湖尻の家が猶微かに見える。けれどそれが唯見えるといふだけで、いかにも朧だ。湖水の稍くびれた處の左岸には殊に樹木が深く茂つて居る。駒ケ嶽は雲にかくれて見えず、其の餘波とも言ふべき丸い山が纔かに其肩を顯はして居る。もう二子山が見える位置に舟は來て居るけれど、其あたりは霧と雲とで包まれて居て見えぬ。山中の空氣ほど千變萬化するものはあるまい。晴れたかと思ふと曇る。曇るかと思ふと晴れる。一面は暗い雲と霧、一面は鮮かな朝日の光。

「今日は覺束ないね、此模樣では。」

湖は淋しさは無いが、ごうも淺い。第一四面の山が蘆の湖より中禪寺湖の方が變化に富んで居る。雲霧の色彩の變化が山が深い丈けに多い。それに湖の深さも中禪寺湖の方が復雜して居るに相違ない。蘆の湖には水の色が處に由つて變るこいふここが無いが、中禪寺湖は到る處に變つた色を呈して居る。けれご遊ぶのには蘆の湖の方が面白い。靜かで、穩かでそして馴れ易い。

私は舩頭を捉へていろ〳〵なここを聞いた。

『箱根まで何里あるね。』

『二里こ申しやす。』

『何時間懸る。』

『一時間こ少しでせう。』

『毎日幾度も往復するかね。』

『夏の盛りには、西洋人がよく乘りますから二三度は往復するここがあります。平常は駄目です。姥子に來る客なごは、旦那のやうに一人かうやつて乘つて下さるものなごはありやしません。舟に乘るこ言ふには、十人も十五人も組を拵へて、一人十錢か十五錢でなければ乘りませんからナ。』

艪の音が靜かに響く。

『お前達は平常は何をして居るかね？　矢張漁かね？』

投り込んで呉れた。

やがて船はやうやう湖上に浮ぶ。

湖水は艪を搖いて流したやうだ。親子の立てた二挺艪が間断なしに柔らかな音を立てると、船の舳首にコトコトといふ微かな愉快な楽しい水の音がそれに調子を合せる。朝風が寒からずつよからず好い加減に頬を撫ふので、夏のやうな心地がしない。一町ほど出て振返ると、渡船小屋が今更に畫のやうに美しく見える。主婦が立つて此方を見て居る影が小さく湖水に映る。『おツ母が見てるア』と小さい兒が言ふ。父親も少年も振返つて笑つた。

先程籠つた水蒸氣はもう立たなくなつた。霧は富士山一面の山を埋め盡しては居るが、湖水の周圍の山にはそれらしい影もなく、頭上の空も明かでそして碧だ。『霧がかゝるかと思つたが、晴れて了つた』と艪を押しながら船頭は言つた。右岸は樹立が絶えて無く、湖に沿つて、丸い草山と丸い草山が、連り合つて居るが、其影が少しも亂れずに、丸で寫眞にでも撮つたやうに明かに鮮かに倒しまに映つて居る。其の水中の影を見てだに、何處か萌黃で、何處か青で、何處か深碧だかといふことが分明に解る位である。そり〳〵艪の動搖の餘波がこれに及ぶと、それが搖消すごとく亂れて消えてまた顯はれる。右岸の樹立の影もこれと異ならぬ。

此の邊の湖を日光の中禪寺湖に比べて見ると面白い。中禪寺湖は闊濶ではあるが何うも淋しい。遙

『出しますで御座います。』

莞爾して居る。家の中に入るこ、主婦が飛んで出て來て、座布團を敷き、茶を出す、菓子を運ぶ。山の中でも流石は箱根だこ思ふ。

家の前がすぐ小埠頭で——美しい小波が微かな音を立てゝ寄せて居る。湖上には霧が晴れたり懸つたりして居て、其度毎に湖水の趣が變る。左の岸は姥子から箱根に通ふ道のある處で、立樹が深く蔽ひ冠さるやうになつて居るが、其影が處に由つては分明に映つて、其枝、其葉さへそれこ指點せられるほさだ。埠頭に立つて、船頭の支度を見て居る。ふこペンキ塗の白い板に船賃の書いてあるのが眼に着く。

箱根まで一人舟子で八十錢、二人舟で一圓四十錢こ書いてある。高い渡船賃だこ驚く。念の爲め主婦に聞いて見る、矢張一圓四十錢だこ言ふ。これも箱根だから仕方があるまいこ觀念する。

中老漢は艪を船につける。息子らしい十五六歳の少年があかを汲んで、其上に板を布いて、主婦の持つて出た臥席を一面に敷きならべる。

準備が出來たので、私は靴のまゝ其上に乘つた。

子供の泣聲が耳に入つたので振返るこ、今年六歳ばかりの男の兒が一緒に乘つて行くこ謂ふので泣いて居るのだ。主婦は頻りにそれをなだめて居たが、そんなに行きたければ一緒に乘つて行けこ父親が言つたので、其儘船首の方へ乘せられた。主婦は私の置いた茶代に酬ゆる爲めに、夏蜜柑一個を船の中に

咲く頃、秋風の尾花の穗を渡る頃はさぞ好いだらうなどと思ひながら行く。私のやうな氣分――いかな靜かな時でも心が苛立つて、跳つて、不滿でたまらぬ人間は、天然に對する時でも滅多に心が落付くことが稀だが、此朝は妙に心が平らかで、靜かで、落付いて居て、丁度前に展げられた湖水の靜かさに似て居ると思つた。この心地が平常持續されたなら、何んなに幸福だらう、何んなに世間が明かに映すことが出來るだらう………。

見て居ると、湖水から水蒸氣が騰る。そして風も無いのに、それが彼方此方で合して、濛々として上騰する。其の早さと言つたら、十分も經たぬ中に、湖水の半面は茫と白くなつて、其の隙間々々に深い碧が見えたり隱れたりする。晴鳩か雨鳩か知らぬが、其聲が山から湖水に響く。

草原をだら〳〵と二三町下ると、疎らな榛の林がある。其れを通り拔けると、もう湖水が近く一軒の茅葺屋根が見える。これが湖尻の渡船場である。

蘆荻の低いのと背の高いのとが交つて居るところに、竹の垣があつて、軒の低い一軒の家屋、休憩所にしてある方には、卓や椅子が置かれ、棚には麥酒や箱根水やサイダーの壜が並べてある。そして此家を透して、朝の湖水の光が輝く。

背の高い、白外套を着た中老漢が私の入つて行くのをぢつと見て居た。私は言葉をかけた。

「箱根まで一番は出ますか。」

籠を弄つて、餌を遣つて居るらしい。湯治場まで目白の籠を携へて來るこは、餘程面白いと思つて見て居るこ、今度は其の妾の中年の女が出て來た。私の方を鳥渡見た。色の白い肥つた女だ。そして其態度は何處かから艶なところがあつた。私は少時して室に入つた。夕飯の膳が出て居た。

七

午前七時。

私はもう姥子を出て居た。晴れた日で、空には雲も懸つて居ない。けれど朝霧は山の谷々に靡いて居て、森の上は幕を布いたやうになつて見える。此朝起きた時のことをゆくりなく思ひ出す。富士がかう軒端に近く美しい晴色を送つて、其緑の色の鮮かであつたことは何うして忘れられやう。かう思つて前を見る。林が高いので富士は見えぬ。鶯は間斷なしに鳴く。五六町行くこ林が盡きる。美しい蘆の湖が前に展開された。曉の湖水！　あゝ何こいふ美しさであらう、何こいふ靜けさであらう、私の前には廣い勾配の緩い、高原性の草原が横はつて、其緑の若々しさ、それから湖水の深い碧がずつこ續いて、向うに連れる低い山、其上に富士！

私は其草原の露を分けながら、何こも名狀されぬ好い心地で、——林に囀る鳥のやうな心地で、一歩一歩湖水に向つて下りて行く。路は柔かい黑い土で、うねうねこ面白く曲つて通じて居る。秋の草花の

洗つて居るのが見える。それに、女同士のお饒舌が中々盛んだ。多くは長逗留の知合らしく、いろ／＼なことを話して居るが、こんなことを言つて居る。

「何うもかうして、お知己になると、別れるのが辛いですね、あのお婆も今朝立つた相ですが、好い人でしたね。それからあの離れのお妾さんは何うしました。あゝいふ難かしいお爺さんではお世話が大變でせう……それも仕送りさへすれば一人で樂に暮せるんでせうから、今少しの辛抱ですわね。」

「あの目の惡い娘さんは、氣の毒ですね、あんないゝ器量ですのに。」

「あの母親さんも好い方ですね。」

などと話が絶えぬ。

全身を美しく透徹る湯につけながら、古風な溫泉場は面白いものだと思ふ。宮の下や塔の澤の御影石を敷詰めた湯殿ではかういふ面白味は見たくても見られぬ。勿論、これに逆つた新しい趣味はあるが……

湯から上つて、緣側に出て四邊を見る。前の庭は五坪ばかり、黄楊と槇樹と石榴とが茂つて、下には五月躑躅が目も覺めるばかり美しく鮮かに咲いて居る。湖水は此處から十二町だそうだが、樹が茂つて居るので、其片影をだに得ることが出來ぬ。日はもう落ちて了つた。夕暮の和やかな靜かな空氣を震はして、蛙が頻りに鳴く。をり／＼郭公のけたゝましい聲も交る。廊下の隅には、野の客人頻りに目白の

湯殿に行く間が面白い。此方の家屋から彼方の家屋に石と板とを傳つて、渡つて、狹い廊下を通つて、家族の住んで居る室を覗いて、それから大きい圍爐裏に大きい黒猫のやうな鐵瓶を懸けてある廣い室を通るのだが、其處からは廣い臺所に女が襷懸けになつて働いて居るさまや、七輪に懸けた鍋から湯氣が簇り立つて居るさまや、飯を炊く釜の吹きこぼれて居る模樣などがすつかり一目に見渡される。で其處をも過ぎ去つて了ふと、くさい便所、長い長い廊下、廣い庭、此方の縁側から板が渡してあつて、ずつと湯殿へ。

湯殿は二つに仕切られてあつて、中央には紙行燈に火の用心と書いたのが懸けられてある。入つて見ると見懸けほど汚くなく、板の間も綺麗に洗滌されてあつて、玉のやうな玲瓏たる湯が溢れんばかりに漲つて居る。客の入つて居ない湯の方へざんぶと飛込む。浴槽の底は石と砂の自然のまゝで、餘り心地が好くもないが、さりとてぬら〳〵する不潔な槽よりは餘程增しだ。

湯が溫い、長く入つて居る程溫いのが一層溫くなる。此姥子の溫泉の溫いのは兼ねて知つて居るのだから左程不平にも思はないが、いかにしても身體が暖らぬので弱つて居ると、隣の浴槽に入つて居る長逗留の客が、『何うも二三日、雨つゞきで湯がすつかりぬるくなつて、入れなくなつて困りやした。今はそれでも、餘程熱くなりました。』と言つて居る。成程、これよりぬるくなつては仕方があるまい。

私の入つて居る浴槽の奧に、今一つ浴槽があつて、湯瀧が淙々と落ちて居る。板の隙間から女が髪を

暫く話聲が止む。前の肥つた下婢が茶と鐵瓶とを運んで來る。急須は九谷の茶盞のついた汚いものだ。菓子は田舎出來のまづいカステラ五片。腹が空いたので、茶を飲みながらそれを食つて居ると、

「困るねえ。」

と以前の女の聲がして、更に大きな聲で、「兎に角端書を出して遣つて御覧なさい、場合によれば鳥渡行つて來なければなりませんな。」

「左樣さナ。」

老人は點頭いた。

老人は耳が遠いらしい、私の想像する所によると、此湯治客は田舎の豪農の老主人で、餘程以前から此處に湯治に來て居るらしい。そしてこの附添に來て居る中年の女は、妻ではなく妾で、この老爺を仕遂れば、遺産をいくらか分けて貰へるといふのを目的に、此の聾の老爺を世話して居るらしい。今の話は、留守に何か品物が紛失したのを報して來たに就いての談話であることがすぐ解つた。私は面白いと思つた。いろ〳〵なことを想像して見た。昔の草双紙に、町家の紛擾を書いた例として、主人が湯治に行つて居る間に娘か番頭と通じたり、番頭が財政をごまかしたりすることがよく書いてあるが、成程かういふ隙をつかんだのだナと思つた。そして昔の湯治と今の湯治との差を比べて興味が多いと思つた。

婢が浴衣を持つて來たので、兎に角湯に出懸けた。

『もう無いかしらん。』

『無いでせう。』

と要領を得ぬ。

『舟が無かつた時には、陸を廻るのだが、箱根まで何里あるね。』

『二里。』

このくたびれた足で、この夕暮に、二里を歩くことは無論出來ぬ。止むなくこゝに一泊することにした。

通された室は八疊で、次が六疊、こゝには客が居ない。此の二間に添つて緣側があつて、其向うの間に、湯治客が居るらしい。大きな聲で話して居るのが聞える。

『困つたね、樣子が解らんかね、誰れも座敷に入ることは無いやうにして置きましたに……』少し途絶えてから、『この手紙では誰か鍵を明けて、金を持出したやうに書いてあるのだが、お寄のあまでも出しやしないかね。』

これは女――四十位の女の聲だ。

『あそこに手を附けては、何を遣り居つたか解りやせん、困つた奴等だ。だから、氣をつけろとあれ程惣太に言つて來たに。』これは老人の聲である。

「姥子まではまだ餘程ありますか。」と訊いた。

「姥子? 姥子は此處でがさア。」

「溫泉場のある處?」

「え、此處でがす。」

これが姥子の溫泉とは驚いた。箱根山中の溫泉だから、少くとも西洋風の家屋なども三四軒あつて設備が完全に出來て居ると想像して遣つて來たのに、この田舍的設備、味噌醬油的溫泉!

腰を掛けて休んで居ても、茶も持つて來ない、菓子も持つて來ない。仕方がなく、煙草を出して吸つて居ると、肥つた、色の白い十七八の女が來て、旦那樣は泊んなさるか何うかと訊く。見ると田舍の味噌醬油連が、澤山湯治に來て居るらしい。田舍の老婆や帶も締めぬ田舍娘、百姓らしい老爺などが彼方此方を歩いて居る。今夜は綺麗な湯に入つて、ゆつくり休まうと思つたのに、情けないこの始末。いつそ湖水を渡つて了はうかと思つて、

「湖水の舟は出るかね。」と反問すると、

「何うですか。」

「まだ箱根へ渡れぬことは無いな。」

「時さへあれは渡れますけど。」

木根が彼方此方に張つて居るので、疲れた足はともするとそれに引懸かる。尖つた石が爪先に當つて痛い目に逢はされる。

草藪ががさ〳〵と鳴ると蝮蛇ではないかと思ふ。森林の中と謂ふものは何となく人に恐怖を抱かしめるもので、海底の神祕なるが如く、林の中も亦一種の神祕を有して居て、人をして全くこれに觸れしめることを許さぬ。

暗い、物淒い、不愉快な林の中、それももう夕暮近く、一層陰深な氣の滿ち渡つて居る間を私は急いで走り下つた。殆ど脇目も觸らぬやうにして――何か恐しいものでも見えぬ爲めに。細い暗い溪流を二ところほど渡つた。靴は泥に塗れた上、更に水に浸されて、折角の新調も散々になつて了つた。木から落ちる雫と草藪の中の露とで、縞セルの洋服は、半身以下すつかり濡れそぼちて了つた。佗しい、實に佗しい。

不意に林が一とところ開けた。

はつと思つて見ると、一軒萱葺の家屋が眼に入つた。續いて丸い卓子を土間の中央に置いた休憩所のやうなものが眼に入つた。椅子が三脚、躑躅の古い根で拵へた火鉢が一つ、一軒の家屋と見たのは二棟、三棟、ところどころに此方から彼方に通ずる板が渡されてあつた。まさか姥子がこんな小さな溫泉場とも思はぬので、恰も其處に出て來た浴衣がけの男に、

晴れて行く。そしてその一端が夕日に照されて金烏の羽でもあるがやうに美しく輝く。ふと其霧の晴れた上から、富士山が眼に入つた。私は胸を躍らさずには居られなかつた。思ひ切つて深い碧の色に三條ほどの白い雪の流れた痕が殘つて居るが、それが三分ほど頂を雲の上に顯はして居る具合は如何にも美しい。何うしても日本畫でなくては顯はせぬ趣味があると思つた。

此處から見える芦の湖は、餘程奧で、箱根の古驛あたりからは見えぬ處に相違ない、くびれて擴かつた廣さは周圍一里位かと思はれる。それがしんとして、四圍の山の影を倒に映して、私の前に展げられてあるのが、それがいかにも美しく、いかにも見事で形容するに言葉が無い。

臺に居たのは一時間位。

六

湖水の緣を取圍んだ森林は、山毛欅と榛とが多く、其下草は躑躅、熊笹、しの竹などで、何となく陰氣で濕つぽい。夕日に照された晴やかな高原から其中に入つて行くと、一種狀せられぬ厭な氣がする。濕つた黑い土が靴の裏にくつ附いて、歩く度に不愉快な音がするばかりでなく、上から落ちる雫も何だかたゞの雫ではないやうに思はれる。山蛭が旅人の足音を聞いて樹から落ちるといふ話を思ひ出して、思はずぞつと總身に寒氣を感ずる。

一隅に茶店があるが、夏の盛りにならなければ、店を出すものがないといふ。

大地獄を出る頃から非常な風、霧が右往左往に吹きまくられて、暗い凄い影が、大入道のやうに自分の頭上を亂れて過ぎたが、臺の上に登り着いた頃には、東北の方が稍々明るくなつて、霧のきれ目から青い空が見え、山の肩のところが見え、續いて一道の夕日の光がさつと銀河の天から漲つたやうに、暗い灰色の大谷に落ちた。

はつと思つたも時の間、風の力は實に凄じい。暗霧は山から山へと逃げて、走つて、唯是れ一刻を爭ふかのやう。下の谷から渦まき上る水蒸氣も忽ち吹き破られて、それが幾個にもちぎれ〴〵になつて飛ぶ。實に奇觀だ。そればかりか、かうして見て居る中に、宮城野川の谷と高原とはすつかり展けて、其間に今通つて來た大涌谷の噴烟が高く白く颺つて居るのが見える。

臺から前を見ると、又驚くばかりの好景色が横つて居た。山で圍まれた深碧なる蘆の湖の水、此方の岸は半まで黑い檜と櫸との深林で緣縫されて居て、對岸の毛氈を布いたやうな草山には、塵埃なく、唯白い雲の影があり〳〵と通つて行くばかり、夕暮近い靜かな山の空氣は、座ろに肌に迫るのを覺えた。

右の近い山腹には、大涌谷の餘波かとも見える噴烟が一道の白い影を空に漲らして居た。

私は暫時草を藉いて憩んだ。

湖水の對岸の山にはまだ霧が懸つて居た。けれどもそれがもう薄くなつて、ふわ〳〵と風の一吹毎に

がぶんとする。

此處が大地獄だと教へられたが、更に解らぬ。鐵色の石がごろ〳〵轉つて居る處に、これも白く濁つた水が千條をなして流れて居るばかりで、湯氣が天を蔽ふばかりに騰つて居るのだ相だが、霧が深いので、一向解らぬ、指を浸して見る。成程湯だ。靴の底も何處となく溫い。

石を踏んで、小さい坂を登る。霧は依然として深く、噴烟のさまは少しも見えぬが、其處は山の懐になつて居ると覺しく、霧の複雜して亂れたさまがそれとなく解る。此處が一番噴烟の凄じい場所だといふ處に行つて見る。成程。石と石との間に、湯がたぎつて噴出して居るのが見える。それが一ところばかりではなく、岩石の間から幾條となく流れ出て、赤の錆びた色をして、湯氣を立てゝ居るさまはまことに凄じい。

「霧が無けりや……」

と、伴の男は惜しさうに私に向つて言つた。

で、湯の流、水の流に交錯して流れて落ちて居る間を彼方に傳ひ、此方に傳ひして、同じ深い霧の中を閻魔の臺にと志した。閻魔の臺で見た景色は、今度の旅で忘れられぬものだ。閻魔の臺は大地獄から五六町いひた登り、一帶の平地で、大小の石が佛像の傍に幾個となく積み重ねられてある。鳥渡、賽の河原と謂つたやうな風。

『いや、通り路にあるだァ。』

『隨分見事だらうナ。』

『いや、淋しく（おそろしいといふ意）なるやうな處でがす。』

『それから閻魔の臺まで餘程あるかね。』

『何アに、はア、五町位。』

『それから姥子へは？』

『下り十町と言ふだ。』

こんな平凡な話でも、山路の旅は慰めらるゝものだ。で、絶えず山の腹のやうな處を歩いて行く。細い路には始めは草や萱が繁つて居たが、段々それが少くなる――風が横さまに霧を吹くと、暗い灰色の影が、大きな荷物でもあるかのやうに凄じく恐しく山と山との間を越えて行く。鯨が海から肩でも出したやうに黑い山の半面が見えて、そしてすぐ隱れる。路が非常に嶮しい處を行く。赤土の一角が滑つて、ともすると、千尋の谷底に落ちさうになる。それを踏占めて辛うじて這ふやうにして登る。前から駕籠が二挺顯はれた。

荒くれ男の胸、脛、顏、續いて美しい色が見えたと思つたら、それは十九位の廂髮、リボンの色の美しいのであるのが解つた。男は二十七八の洋服姿、箱根の溫泉によく見る型だ。それと擦違ふと香水の匂

にでも、見るやうに微かである。霧、霧、霧、殆ど咫尺を辨ぜぬと言つても好いので、四邊に山があるか谷があるか、溪流があるか、珍らしい草花があるか少しも解らぬ。

前に立つて行く作の男の脚半姿が何となく影が薄い。丸顔の、鼻の降い、正直さうな三十男であるが、渠は此山向うの駿河の生で、勞働者として箱根水の原料を酌みに傭はれて來たものださうだ。いろ／＼な話を爲て行く中に、それとなしに、先生の不平も出る、愚痴も出る、身の上も出る、單調な霧の中も單調でなく過ぎて行く。

「何うも霧が深いね。」

「え……午前まではこんなで無かつたけれどナ。何うしても梅雨の中だで。」

「晴れて居れば、隨分景色が好いだらうにナア。」

「え、霧さへ懸らなければ、この向うに、富士山が見えて、それア、景色は好いですがアナ。」

「惜しいナ。」

「本當に……。」

「これでは、大涌谷に行つても、噴き出してる樣子が分らんだらう。」

「そんなこともありますめいが――すつかりよく分るといふ譯にも參りますめい。」

「路から餘程入るのかね――大涌谷のあるところは？」

私は木株に腰を懸けながら、前の一軒の溫泉宿を見た。宿は地のやゝ高くなつて居る處にあつて、低い檐には霧が雨かのやうに深く、雨戶が六枚繰つてある。一枚開いた處に、硝子を嵌めた障子が見える。淺黃模樣の色の褪めた手拭が緣の竿に懸けられてある。其前に猫の額のやうな庭があつて、石楠花が赤く咲いて居るのが際立つて眼に付く。天地悉く灰色の中にこの一點の紅言ふに言はれぬなつかしさを感じた。霧はかゝつては晴れ、かゝつては晴れして居るが、晴れた時には、高原の草の靡きや、環のやうに四面を取り圍んだ山の裾などが、をり〳〵微かに見える。溫泉宿の彼方には、筧に引いた水がちよろちよろと流れて居て、何の事はない、態とぢみな色を使つた水彩畫のやうだ。

高原の秋――秋はさぞ好からうと思つた。桔梗、萩、尾花、刈萱、蟲の音もさぞ繁からう。露もさぞ深からう。空の晴れた碧に低く鮮かな山の姿を見たら、何んなに此胸は躍るであらうか。此處の溫泉の湯槽は大きい相だが、其處に一人體を沈めて、山中の秋の淋しさを味つたら何うだらう。物語の一つや二つは必ず得られるに相違ないと思ふ――。大涌谷に通ふ細い路はこの風情ある溫泉宿の傍を縫つて向うの高原に通じて居るが、其傍を通る時、長い淋しい、緣側に、顏の蒼白い、瘦削な美しい女が、湯上り姿で、じつと霧の懸つて來るのを見て居るのが眼に入つた。

私等は步いて居た。

霧は深い。――高原でなければ、山でなければ見られぬ深さ、自分の直ぐ前の草に置く露すら、夢の中

華雅杏の箱根七湯以外にさういふ温泉があるとは面白い。眺望、雲霧、溪流、是非一度行つて見たいとは、私の兼ねての希望であつた。其の多年の希望を滿した今――惜しいかな、霧が深いので、四邊が少しも見えぬ。茅葺の茶店から、だら〳〵と上ると、少しく平たい處があつて、その一隅に檐の低い一軒の旅店、霧が罩めてる故か、いかにも淋しい。灰色の佗しい色ばかりで、眼を鮮かにするやうなものが無い。旅亭にも客が居りさうにも思はれぬ。下には宮城野川の谷が半ば霧に包まれたまゝ展げられてある。ふと見ると、勞働者らしい二人の男が立つて居る。聞くと箱根水の原料をこの大地獄の上に酌みに來て居るのださうだ。

「霧が懸からないと、景色が好いんだがナ。」

と、此方が問ひもせぬのに、四邊の景色の好いのを說いた。時計はもう午後四時半、大涌谷を經て、姥子温泉まで二里近いと言ふので、餘程此處に一夜を過さうかと思つたが、此の勞働者の一人が大涌谷の上の、閻魔が臺まで行く用事があると謂ふので、一緒に行つて貰ふことにして、先づ腰を傍の木株に懸けた。

強羅は晴やかな美しい心地よい温泉と聞いた。

此處は箱根の俗界を脚下にして山の清い灝氣に觸れることが出來るとは兼ねて私の耳にする處であつた。けれど霧が深いので、佗しい、實に佗しい。

りで足も勞れる。洋服のカラーは汗でぐしや〳〵になつて了ふ。雲霧は段々近く襲つて來る。一輿も次第に盡きて來た。

五

霧の上から見えた一軒の萱葺屋根、それが行つても行つても達しない。さては家ではなかつたのかと惑つて居る時、不圖人の話聲がして、前に一軒の家屋がぼんやり見えた。何かなし非常に嬉しかつた。近づいて見ると、それは茶店で、一人の老婆が一人の山男と話して居た。強羅は、と聞くと、此處が強羅ですが、まア休んで入らつしやいと言ふので、赤毛布の色の褪せた、毛の摩り切れた緣臺に、倒れるやうに腰を休めて、汗の染みた洋服の上着を脱いだ。

茶店には、菓子があるばかりで何も無い。咽喉が乾いたので先づ箱根水を飲む。實に旨い。老婆の出したカステラを一片食つて、呼吸を吐いた。

強羅の好いといふことは兼ねて聞いて知つて居た。此溫泉の開けて、旅籠屋が一軒出來たのは何でも三十年頃だと思ふ。此の旅亭の主人が女主人で、中々風流韻事を解するものであるといふことも知つて居る。故山田一郎が其頃此處に滯留して、面白い此處の記事を讀賣新聞の日曜附錄に掲げたことがあつた。それがいかにも奇拔な書き方であつたので、私の記憶にこの強羅溫泉を強く印した。山中の溫泉——紫

が、新道も矢張左樣だ。

宮城野から五六町行つた處に、それでも鳥渡人の眼を惹くに足る好景がある。それは丁度路のまがり角に當つたところで、下に蛇骨の谷と早川の谷とを手に取るやうに見る。それに鷲巣山が正面に聳えて、兩方の谷が落ち合つて一つになつて居る處に、蜃氣樓のやうに浮んで見える宮の下の高樓大廈、この景色は流石に美しい。日本の山水では見られぬもの、一つだ。立留つて見て居ると、何だかかう西洋――瑞西の山中にでも行つて居るやうな氣がする。

私は立留つた。

蛇骨川の谷は半ば灰色の暗い雲に蔽はれて居て、鷲の巣の山腹以上は明かに見えぬ。蘆の湯の方面、駒ケ嶽、二子山などを見たいと思つたが矢張見えぬ。早雲山の肩とも覺しき處には殊に黑い雲が湧いて、今しもそれに連つた神山は八分通りその蔽ひ包むところとなつた。これと反對に早川の谷は明るく晴れ渡つて居て、明星、明神の丸い頂上も分明見えて、遠雷の鳴るやうな音が微かに谷の底に聞える。私は立つて、四顧して、そして自然の偉大な姿に憧れ渡つた。

この一角を過ぎると、例の單調な樹木の林に入る。だらだらとした登り路が行けども行けども盡きぬ。それに、とある處で二條に岐れた路に迷つて、今、自分の歩いて居る路が正しいか、どうか、人の影らしいものも見えぬ。で、つい危ぶみながら進んで行く。……この疑惑が興を損せしめると共に寂しい。それに登

『官林だアで、あれは――』

私は隱袋から敷島を出して吸ふと、

『旦那方のア、旨さうな煙草だ。一本惠んで吳れせい。』

敷島の袋を出して投げて遣ると嬉しさうにそれを一本取つて、火をつけて、すぱ〳〵と吸ふ。別段旨いとも言はない。

で、私は大涌谷に行く路を訊くと、

『大地獄に行かつしやるだか。それには、このすぐ前から左へ入りなさい。一本道だで、迷ひつこはない。……さうさ、强羅へ出て行くんだが、强羅まで一里、それから大地獄まで二十五町といふだ。路は廣いが、今は休むところがあるまいよ。』

で別れて、其の敎へられた處から左に入る。

これから强羅までは實に單調で倦き〳〵する路だ。だら〳〵登りの、穉い木立の、新に開いた木根竹根の多い路で、蒟蒻頭のやうに踏むとぶよ〳〵する。一體、新道といふものは趣味の無いもので、概して兩側に木立の立派なものがなく、草や竹が無闇に生えて、何となく步いて行く足に調和しない。堅く踏堅めた路なら、蹠が旨く調子づいてかへりが好いが、新道の柔かい土では一步每に新しき努力を要するやうな氣がする。歷史の無い國は何處となく沒趣味で、ごそ〳〵するやうな氣がすると誰かゞ謂つた

従事しては、一分に一度、二分に二度休まねばなるまい。丁度私等が進まぬ筆を執つて居るやうなものだなと思つた。不圖、聞いて見る氣になつた。

『一日に餘程挽けますかね。』

と訊く。

木挽は怪訝な顔をして、先づ私の顔、私の扮裝を凝と見る。そして他意無いのをよく確めてからといふ風で、ゆる／＼と話し出す。

『いくらも挽けましねえ。』

『一日何の位？』

『一枚も挽けるだかナ。』

『一枚……そんなものかなア。』

『上手なものはもつと挽けますア。』

『山には木は大きなのがあるかね。』

『イヤ……この山は、木は駄目でがさ。昔は大きな檜があつた相たが、今ははア大きなのは澤山無えナ。』

『湖水の近所には隨分大きいのがあるさうだかね。』

くと、塔の澤の絃聲、宮の下の繁華は、何處へ行つたかと思はるゝやうに跡を絶つて、路傍には樵夫の家がある。運送の車がある。家根に一八の咲いた敗屋がある。汚い衣を着た泥まみれの子の泣いたのをこれも汚い女が叱つて居るのが眼に入る。全く山村の趣になつて了ふ。

生憎に空が少し曇つて來た。今迄は五月雨晴の心地好い生々とした日影がをり〳〵射して、渺なからず、人の心を活動させて居たが、明星ヶ嶽の上に、被衣のやうな薄い雲が懸つて、それが段々昇つて、いつか日の影をかくして了つた。午後二時半の山が何となく淋しかつた。

宮城野の一村落はさして風情のある村でもない。樵夫、木挽などの部落で、とある路の角、小屋掛をした彼方の廣場に、太い木材を横に大鋸を引いて居る四十位の男を見た。一挽毎に新しい鋸屑がばらばらと落ちる。男の鉢卷した汚い手拭に玉なす汗がにじむ。鋸の大きな齒が此世では見られぬ獸の齒でもあるかのやうに思はれて、一挽毎にそれの動くのが何となく一種不思議な感を起させる。鏡花の作に三尺角といふのがあつたのを不圖思出した。

小屋掛の前に小さい小さい流れが草の中に音を立てゝ居て、其岸に赤い花が咲いて居る。何といふ花だか、見馴れぬ花だ、白粉花のやうにもあるが、よく見るとそれとも違ふ。小屋の向うは檜木林で、何となく陰氣である。四邊はしんとして居る。溪流の音と大鋸の音とが代る代る聞える。

見て居ると、木挽は鋸を留めて、鉢卷を取つて、玉なす汗を無造作に拭つた。かういふ烈しい勞働に

中に加へられた。日比谷公園も出來た。電車も開通した。海老茶袴も勢力となつた。其の變遷は實に急劇で、眼を閉ぢて考へると、走馬燈のやうにいろ／＼なものが烈しく往來する。此烈しい往來の中に、友人に對する記憶ばかりは、緩やかに緩やかに通つて行く。

私は八千代橋の欄干近くに立留つて、こんな追憶に耽つて居た。と、向う側の旅館の二階から、鳥渡美しい色彩が眼に入つたので、はツとして空想は破れた。美しい色彩と見たのは、新橋あたりの雛妓らしい十五六の女禪の立姿で、其傍らに四十ばかりの髯の生えた紳士が立つて頻りに何か話して居る。長い欄干の一ところには、大きい手拭が懸つて、青桐の大きい葉が風に靡つて居る。私は歩き出した。

これから先は私は初めてだ。街道は二度通つたし、蘆の湯へも二三度往復したが、これから奥――強羅、大湧谷、仙石、姥子などの所謂箱根の裏山はまた一度も行つたことが無いのだ。

木賀は鳥渡離れた處らしい。景色としては宮の下、堂ヶ島、塔の澤にとても及はぬが、旅館などに思を引くものが多い。鶴屋といふのがあつたと思ふ。家の前に青桐が五六本あつて、何となく俗と懸離れて居るといふ風。暇があれば泊つて見るのだが、まだ早い、今少し行つて見やうと、私は猶先へと志した。八千代橋から上、蛇骨川と早川との合流點以上は溪流のさまが全く變つて、溪床が高い上に石が多いので、水の鳴る音は雷の如く、珠の跳ねるさまは霰の如く、遠くを望むと、頗る奇觀だ。溪はもう早川の名を帶びては居ず、土地にては宮城野川と言つて居る。溪に添うて屈曲した路を段々登つて行

といふ短篇を書いたのを記憶して居る。少女の心を惹いた斷橋と少女と戀――私も空想でいろ〳〵考へた。そして私もそれと同じ名の短篇を一つ書いたことがあつた。水蔭君もまだあの頃は若かつたし、私も若かつたと思ふと、何となくその頃のことが、なつかしくなつて、牛込北町の一角、裏の椎の大樹に木枯が潮のやうに押寄せる寒い寒い冬の夜を思ひ出す。丸い瀬戸燒の火鉢に火をかん〳〵起して、太い水筆に朱をふくませ、經机の前に趺坐をかいたまゝ水蔭君は原稿に假名をつけて居る。私は其處に坐つていろ〳〵文藝の話や雜誌の話や、其頃公にして居た所謂江水社の機關雜誌『小櫻縅』の計畫を語り合つた。あゝあの頃が戀しい、なつかしい。

それから續いて、太田玉茗と正月の元旦に日金を越えて、蘆の湯に泊つたことを思ひ出した。雪が箱根の古驛に積つて、湖水はさびしげに碧を湛へて居た。駒ヶ岳には灰色の雲が懸つて、をり〳〵其の一部が湖の半面を蔽はうとする。其間の路を――人一人通らぬ路を、木綿の黑紋附の羽織を着、草鞋、脚半に身を固め、松茸のやうに開く蝙蝠傘を雪にかざしながら、青年の客氣に任せて、放歌高吟して通つた自分達の姿がありありと眼につく。冬の最中の蘆の湯、夏の繁華に引比べて、何んなにそれが淋しかつたであらうか。客といふ客は一人もなく、何れの室の雨戸も閉切つて、大きい御影石の湯殿に白い湯氣が茫ッと立上つて居るばかり、その湯槽に浴した時の樂しさを何時忘れることが出來ようか。其時からもう十二三年、其間には日清戰爭もあつた。日露戰爭もあつた。我が日本國は一躍して世界の強國の

の立つて居る岸から七八間、鐵色した、灰色した岩石のころ〳〵と轉つて居る間を、水は白い色をなして千條に流れて、亂れて、屈曲して、跳つて、叫んで、あらゆる活動を示して居る。宮の下以下の美は溪流としてよりも峽谷であるが、これからは溪流の舞臺だ。

溪流の奔騰するさまは愉快なものだ。私の見た中で、實に綺麗だ、かうまでも自然は美しい色を出すものかと思つたのは、日光の深澤の谷の溪流であるが、上が白く沸くやうに奔騰して、其中から何とも言はれぬ深味のある淺黃——と云ふよりも水色淺黃で、それにいかにも厚味があつて、和らかで、とても形容することの出來ない色だ。かういふ色彩は水の深さと勢の烈しさと太陽の光線の加減とが旨く調和しなければ容易に見られぬのであるが、箱根は山が淺くつて、何處に行つてもこの青い色彩を見ることが出來ない。それから今一つ、紀州熊野の瀞八町で見た色、これは溪流の奔騰したものではなく、深く淀んだ淵であるが、これがまた世間に珍らしい複雜した色を出して居た。深い碧と言へばそれ迄だが、其碧が深味があり厚味がありそして凄味がありさびし味がある。暴風の後などに、何うかすると、空の色がかういふ色になることがあるが、それも極めて稀だ。箱根は山は淺い、かういふ色を見ることが出來ぬ。

蘆の湯に行く路は蛇骨川の此方の岸を辿つて居る。この上流に、いつの年だか、非常に大破して今にも落ちさうになつた橋があつた。江見水蔭君が箱根の底倉に來て居た時、其附近に散歩して、「斷橋」

底に鳴る瀨の音が遠笛を鳴らすやうだ。白い被衣のやうな夜霧がそこともなく低く谷に沈んで、何とも形容の爲やうが無い。かういふ美しい夜にそゝのかされて、つい戀の深淵に陷る青年男女もあるであらう。其二人は幸福であると謂はねばならぬ。

湯泉は由來戀の出來るところである。一室に深く閉込めた處女でも、溫泉場に來れば、散歩もするし、隣の男の室にも遊びに行くし、浴槽にも一緒に入る。遂に退屈なものだから、いろ〱な話をする。いつか暖かい情が出て來るといふ順序、溫泉は戀する人に取つては嬉しい處に相違ない。溫泉でゆくりなく戀に落ちて、それが嬉しく成就して、其溫泉に新婚旅行をするといふのは、よく聞く話だ。

四

宮の下を向うに出ると、底倉溫泉。

底倉は宮の下の一部と言つても好い位。いや宮の下でこぼれた客が多く行く處だ、梅屋、蔦屋などといふのがある。設備も可也に整つて居る。

此處で谷が二つになる。鷹の巢の前に裾から落ちて來る蛇骨川、それがすさまじい勢で流れて來て、このすぐ下で早川の峽谷に落ちて了ふ。早川の谷は、底が段々高くなつて、此處に來ると、宮の下以前に見た趣とは丸で變つて了ふ。もう溪流も見えぬ深い谷ではなく、樹木の生茂つた山巒でもなく、自分

見くびつて、てんから相手に爲ない。私は驕奢の氣と浮華の調子との充ち渡つてゐる間を一種變つた心の調子で歩いた。此處から蘆の湯に岐れる路がある。私は其路を二度通つた。蛇骨川の細い溪流に沿つて、鷹の巣山の裾を縫つて上るのだが、此道はさして面白いといふ處が無い。小涌谷といふ溫泉は鳥渡した高原の上にあつて、秋風の吹き渡る頃には好い感じのする處であるが、要するにさうたいしてすぐれて居ない。小涌谷から蘆の湯に上る間の高原は鳥渡好い。尾花が多い、秋草が多い。それに、二子山、駒ケ嶽を左右に控へて居るので、山氣が肌に迫つて、雲の複雜した變化が見られる。

宮の下の驕奢の氣で充たされた市街を、夏の夜歩くと面白い。上流社會の客が多いので、美しい令孃の浴衣がけの姿を見ることが出來るし、藝者の艶になまめかしい聲もをり〳〵耳に入る。電燈が家々に煌き渡つて、一村悉く光つて居るといふ光景、晝間見たつまらぬ美術品も美しい光彩を放つてゐるし、店に坐つて居る女の顏も晴れやかに受取られる。西洋人の群が何か語り合ひながら、手を組んで歩いて行くと、後から洋犬が尾を掉つて尾いて行く。ある旅館の一室からは三味線の音が自暴に鳴つた。醉客のうたふ聲が手に取るやうに聞える。市街を北から南に通り越して立留つて顧ると、幾多の燈火は悉く電氣燈に輝き渡つて、黑い鋭い線で限取つた山を背景にして浮き出るやうになつて見える。何のことはない、俄かに山中に現はれた蜃氣樓のやうだ。もし、此れが月のある夜だと一層好い。深い黑い谷がいつか明るくなつて、大平臺の翠微の間から、圓い月が深碧の空に浮び出る。谷々の區別も明かになつて、

顏をして、今にも瀧津瀨に身を投げて了ふかも知れぬやうな煩悶を抱いて居つたが、時が經てば、かうもなるものかと考へる。今更に、時の力の大きなのに打たれる。

奈良屋の大廣間から見ると、箱根の山水の眺望は中々好い筈だ。と言つたつて、私は其の大廣間に陣取つたことがあると言ふのではない。いや何うして！　私は暗い六疊の一間に押込められた身、鳥渡其廣間の傍の欄干に凭つて、こつそり其前の景色を覗いたといふだけのことだ。けれど其の鳥渡覗いた景色が今でも頭腦に殘つてゐる。なんでも薄暮のことであつたと思ふ。夕日の殘照がすつかり消えて、深い深い谷には白い霧がぼーッと立つてゐる。大平臺の鼻から向うの山の堆積が紫の色に連つて、實に畫のやうだ。下の谷には早川の水が淙々と流れてゐる。明星ヶ嶽の上には、早くも顯はれ始めた星がきらく／＼と光つて居た。宮の下の旅館の、谷に面した窓からの眺望は、箱根の景色の中で少くとも指を屈するに足りるものであらう。私の見た景色の中で、伊香保の谷の具合が甚だこれに似てる。伊香保はもつと谷が大きいが、溪流が早川のやうに美しくはない。けれど前景の山は箱根より深いので、雲の複雜した變化は却つて伊香保に見ることが出來る。たゞし設備の好いのは無論箱根だ。

古い洋服を着て、泥濘にまみれた靴を穿いて、宮の下の街路を步くと、何だか調子が作はぬやうな氣がする。二人挽の俥、駕籠の赤い布團、それをのみ見慣れた里人は東京のものがてく／＼步いて居るのを見ると、何だか意氣地が無いやうに見えるかして、じろ／＼と私の方を見る。空車があつても、車夫は

た家、次に木賃宿、それから段々繁華になつて、大きい家では美術品を盛んに並べて居る。Fine Art shop とか何とかペンキで書いた招牌が幾つとなく下げてある。覗いて見ると、概して金ぴかのいかさまものが多い。ごて／＼と金を施した花瓶とか、金を鍍した佛像とか、贋の古錦繪とかがだらしなく並んで居る。勿論、西洋人が土産に買つて行くのだが、こんなものを持つて行つて、これが日本の美術などと吹聽されるかと思ふと、情けなくなる。

それから水彩畫を並べて賣つて居る家が二軒ほどあつた。箱根の景色だの、日光の廟だの、娘さんだの藝者さんだのが澤山書いてあつた。まア、質の好い銅版畫だと思へば間違の無いものが多い。西洋人にも趣味の低いものが多いと思ふ。

宮の下の奈良屋といふのに泊つて、虐待されたことを思ひ出した。いくら呼んでも呼んでも返事しない。癪に觸るからッて言つて、茶代を大はずみにはずんだ積りで、二圓投り出した事を思ひ出した。其頃は、宮の下に來て二人で二圓の茶代を出せば餘程はずんだ積で居たのだ。けれど猶、碌々好い取扱ひも爲ないので、ぷり／＼怒つて、もう宮の下のやうな處には行かないと言つた。あの頃は若かつたと思ふ。と其時代のことがいろ／＼思出される。ある戀人があつて、其の顏を思ひながら歩いて居たッけ……と思ひ出す。其戀人は無論今では人の妻になつて、幸福に暮して居る。子供も三人居る。此間も逢つたが、別段不思議な感も起らなかつた。あんなに熱烈に、その女でなくては厭だと言つて、青い青い神經衰弱の

年中、客の絶えないこいふ箱根でも盛暑にならなければ忙しくはないこ見える。大平臺の村は烏渉面白い特色があるこ思ふ。祖先は農か樵かで此處に移住したのであらうに、箱根の開けた爲めに、それが皆な本業を其方除けにして、箱根細工を造る者、車を引くもの、休茶店を始めるもの、皆な當世向になつて了つて、山中の民らしい處はすこしもない。此中の富豪の娘なごは、東京に出て、女學校へ通つて、海老茶の袴でも穿いて居るだらうこ思ふこ、何こなく變な心持がする。

村を出るこ、箱根水を製造する會社がある。これは私が以前來た時には無かつたものだ。箱根水の原料は大涌谷の上の方から採酌するのださうだが、今では中々盛んに遣つて居るこの事だ。早川の谷は益々深くなつて、水聲は益々遠い。矢張前こ同じやうに縁を縫つて、二三度も曲る、こ、宮の下に着く。

宮の下は箱根での箱根こ言はれてある。富士屋の別邸なご丸で御殿のやうだ。電話もあれば電信もある。凡そ東京であるもの丶無いものは無いこの話。

宮の下に入らうこする右に、堂ヶ島の溫泉に下る道がある。堂ヶ島はこの下を少くこも五六町下つた處にあつて、早川の水が溢れんばかりに其傍を流れて居る。谷の底だから眺望は乏しい方だが、翠嵐の深い、幽邃な好いこころだ。餘程、下りて一浴して行かうこ思つたが、前に一度行つたここがあるので思留まつた。宮の下は村の入口から既に活氣を帶びて居る。新建の家が多い。大工の鉋の音も盛んに聞える。一方では懸崖を削つて地をならしてゐるものもある。初めに雜貨店、次に箱根細工を一杯に並べ

客が無い。

此の茶店を出て、眞直に突當ると、こんもりとした森に衰へた神社があつて、石の華表、俳句の碑、板葺の社殿、子守が二三人子供を背負うて、額髪に手拭を廣く卷いて、可笑しげな子守歌を唄うてゐた。前に麥の黄く熟した畑があつて、其向うは深い谷になつてゐるらしい。

此の里祠に突當つて右に曲ると、大平臺の村落に入る。四角の吹上の噴水のある休み茶店が一軒、それからだら／＼と上がり氣味に萱葺やら板葺やらが連つて居て、いかにも山の中の村らしい。不圖見ると、高窓を明放つた家の中に男の顏が見えて、ギリ／＼といふ厭な音がする。何かと思ふと、先生、頻りに轆轤を廻して、箱根細工を造つてゐるのである。厭なその音がすると共に木が丸くなつて、木屑がばら／＼と落ちる。奥を見れば、其他にも轆轤を廻して居るものがあるらしく、材料が室一杯に積んである。軒端近く、桐の花が咲いて居て、其傍らにはほ・じろの籠がかけてあつて、鳥がちよん／＼飛んでは、好い高音を張つて鳴いて居る。この轆轤を廻して居る男が飼つて居るかと思ふ。何となく面白い。猶歩いて行く。轆轤の音が家々からギリ／＼と聞える。どの家もこの家もこれを常職として居ると見える。そして殆ど其軒にはほ・じろの鳥籠が懸けてある。轆轤と箱根細工とほ・じろの鳥籠と何ういふ關係があるのだらうと思ひながら歩いて行く。

人家の外れに、又休茶店が三軒ある。一軒の家の吹上には水が出て居ない。一軒には老婆が晝眠して居た。

を見て、頻りに頭を下げる。美しい女は自分の前を通つて、ちらと見て、そして駕籠の前に行つた。長い羽織を右の白い手でかゝへて、髪をこはさぬやうに襟首を押へて、その狹い駕籠の中に入つた。白足袋が柔かい土に觸れて少し汚れたが、それを拂はうともしない。紳士も同じ駕籠に乘つた。と、輿夫は荒くれた手足でこれを擔つて、息杖を立てゝ、相圖の調子を合せてゆさ〳〵と歩き出す。先の駕籠からは栗梅の長い袖が飜れて出る。それが大曲りに曲つて、姿が見えなくなると、噂が始まつた。

『今のは藝者衆だね。』

と、娘らしい十九位の肥つた女が言つた。

『藝者衆も藝者衆も、東京の本場だアナ。湯本の福住に來て居るお客で、新橋のださ……いくら素人に作つても、すぐ解るナ。』

『左樣さ……』

『綺麗な女だつた。』

『見た丈でも眼の保養になるだアから、あゝやつて自分の物にして歩いたら、嘸好いだらうナ。』

と四十ばかりの男が笑つた。

私が聞いてゐなかつたらもつと噂をしたのであらうが、此處等の休茶店は開けてゐるので、それより深く立入らなかつた。吹井の水は高く昇つてゐる。谷の底の水聲は淙々として聞えてゐる。少時、通る

ま、閑却されてある。何うしても箱根の山中でなければ見ることの出來ない光景だと私は思つた。

此茶店の前が深い谷で、其谷の縁に二三百年を經たと思はれる老松が二三株立つて居て、其前にペンキ塗の十字形の道しるべが立てられてある。此處から宮の下へ十六町あるといふことが解る。此休茶店、此紳士、此奏人に扮した藝者、この道しるべのペンキ塗、何うしても箱根だ、日光にはかういふ開けた趣は無い。誰か箱根を瑞西の山中に似てると言つたが、成程さうであらうと點頭かれる。私も此の茶店に休んだ。

梨を少し食つて、絹ハンケチで小さい口を押へて、こゞみ勝にして居るさまがいかにも艶だ。栗梅の羽織が色の白いのと姿の細そりして居るのとによく似合ふ。紳士が何か言ひかけると此方を向いて莞爾笑ふ顏は實に美しい。熱海に物を言ふやうではあるが、何うも藝者にしては餘り饒舌ではないらしい。顏にも何處か淋しい處がある。そして、かうして連れられて遊山に出ても嬉しいといふやうな風が見えない。私は例の癖で、其女を見ながら、ついいろ〳〵なことを考へる。

私も箱根水を一罎飲んだ。炭酸水としてはまづい方だ。かざり菓子はカステラ五片、其一片を意地汚く取つて食つた。ふと、銅貨が盆の上に落ちた音がしたので見ると、紳士は立上つた。

「お立ち。」

と主婦が叫ぶ。彼方此方に散らばつて居た雲助が急いで駕籠の周圍に集る。茶店の主婦は茶代の多いの

下がもう見えるかも知れぬと思ふ。顧ると、山がもう幾重にも塞つて居て、何の山の蔭を早川の水は何う流れてこの身は其縁の路を何う歩いて來たか、解らない。それでも山がさう大して高くないので、相模の海の横つて居るあたりが何となく廣々として打渡される。又絶壁について曲つた。前にはまた谷が顯はれた。いや、其谷を前に展けたと同時に、私は美しい蜃氣樓を見たと思つた。翠微の上に丁度浮ぶやうに出て居る白色の大きな西洋館、瑞西の山中の繪葉書に見るやうな風景――私は思はず立留つた。

三

宮の下の宏壯な旅館を翠嵐の上に見て、それからの一曲、大平臺に來た。臺の上に富士屋の別邸地があつて、其の女中らしい女が、今しも笊に何か玉葱のやうなものを入れたのを携へて登つて行つた。石垣をぐるりと廻つて、また谷の縁を一めぐり、今度は其角に一軒の休茶店があるのを見た。いや、すぐ眼に着いたのは駕籠二挺、赤い布團、雲助の鐵色の半裸體、それと相對して、パナマ帽に縮緬のへこ帶、金鎖が美しく光つて、見事な八字髭、その紳士が一人の藝者――素人に扮らしてはゐるが確かに藝者だ――を伴れて居た。白い美しい顏、栗梅の長い書生羽織、駕籠に勞れたといふ風で、だらしなく縁側に腰掛けて居るが、其前には遅ればせに五月躑躅が赤く咲いて居て、四角の吹井から噴水が心地よく高く上つて居る。箱根水の空罎が二本、茶道具が一組、梨子の皮の剝いたのが半分朱塗の盆に載せられた

大釜の縁を渡るやうに、路は早川の溪谷の縁を縫つて、緩い勾配で登つて行く。鶯が鳴く、郭公が鳴く。深い深い谷の底では、遠い瀧津瀬を聞くやうに、又は山巔を渡る風の音を聞くやうに、溪流が面白く鳴つて居る。五月雨の頃で、灰色の雲は絶えず往來はして居るがをり／＼日の影がさして、青い空が聰しい眼のやうに彼方此方に顯れる。心地が好い、實に心地が好い。

青い、深い、木立の中にをり／＼白い花が咲いて居る。それが餘り多くなく、たまさかにかすかに見えるので、何となく詩情を惹く。何の花か知らんと初めは思つたが、やがてそれは卯の花であるのを知つた。卯の花の風情は山路にあると兼ねて聞いて居つたが、今にして始めて成程と思つた。これが薄暮で、さびしさが伴つて居つたなら猶よからうと思つた。路は川に沿うてＳ字を成して曲つて、そして其の一屈曲毎に屹度小さな瀑が濺々たる音を立て、落ちて居る。そして屹度淡竹の小藪がある。

瞽者が二人連で下りて來た。板臺を擔つた魚屋が一生懸命で自分を追ひ越して上つて行く。五月雨に處々破壞した道を修繕する爲めに、工夫が五六人集つて、石槌で石を細くして居る。山から瀧の落ちて居るところは非常に泥濘で、折角磨き立てた靴が臺なしになつて了ふ。

一屈曲、一屈曲、谷底の川がまた見えるやうになつた。けれど餘り深く、餘り遠いのでもう先程のやうに賞翫することが出來ない。溪は亂石の間を瀬をなして流れて、もう前のやうに深い瀞潭をつくらない。明星ヶ嶽は今少し前大曲の鼻を廻つた時、其全面を顯はしたが、段々其右の端も見え出して、宮の

下りて、午前十一時頃塔の澤の鈴木の前を通つた。鈴木の前で、小兒の一群が枯葉を集めて頻りに焚火をして居つた。東京に歸つてE兄を訪ふと、暮に箱根に行つたとのこと、箱根は塔の澤、鈴木に泊つて居るとの母堂の話。

それなら寄つて來るのだと、大に遺憾に思つたがE兄が歸つてから聞くと、丁度其時刻、少兒が焚火を爲て居る時、自分はそれを面白いと思つて見て居たとのこと。兩方とも夢にも知らなかつたのでかく徒に打過ぎて了つたが、若し其時邂逅したなら何んなに互に嬉しかつたらう。君等二人の疲れたる身をも十分に慰めることが出來た……とE兄は言つた。あゝもうそれから十二三年、生れたばかりの子が悪戯盛になり、五ツ位の娘の子が人の新妻となり、老人は村の蔭のをぐらき墓の主となつたであらう。早川の水は依然として凄じい音を立てゝ、日夜世間に流れて居る。

早川の岸には、松、杉、欅、檜、淡竹、草では萓、蓬草、しの篠、ふと道傍から木樵が腰に鉈を下げて、簑を着て出て來る。廣い道路の直ぐ下に、堀立小屋があつて、傍に鋸で挽きかけた木材が新しい木の香をぷんくさせて居る。薪にしたのが高くところぐに井字形に積まれてある。對岸、一直線に眼を移すと、芝山に道が細くついて居て、新しい木小屋が一つ二つ三つまで見える。明神嶽の殆ど絶頂と思はれる處に、電信柱のやうなものが行儀正しく並んで立つて居る。電信柱にしては、可笑しいと思つたが、何う見直しても電信柱だ。

水に向つて憧れ渡つたか知れなかつた。此の塔の澤の旅宿から見た山中の寒月、この情趣ある手紙を私の受取つたのは、忘れもせぬ、牛込の甲良町、貧しい家は六疊と八疊の二間、其の八疊の北隅、厠に近い處に汚い机を据ゑて、戸外に荒る丶木枯の音を聞きながら、果てしない長い物語に筆を執つて居た。箱根、箱根、山中の寒月、一度志を得たならば、其溫泉に浴して………と思つた。

それからE兄と箱根と私とに就いて、かういふ話がある。

其翌々年の正月だと思ふ。前の年の暮に、初めて小說を賣つて原稿料を得たので、親友の○兄を誘つて、房州に遊んだ。この房州もE兄から美しいことを聞かせられて行く氣になつたので、送別の俳句などを貰つて二人して出懸けた。E兄は此の正月には旅行に出られぬ、東京で送ると言つて居た。で、私等は木更津から鹿野山、鋸山、那古、北條、洲の崎と大廻りに廻つて、平洲浦の荒凉たるさまをも見、野島の燈臺に夕日の落つるのも見た。處が青年客氣のならひ、もう此位海も見れば澤山だ。何うだ、君、海を渡つて相模へ出て、それから伊豆の熱海に出やうといふ相談。○もすぐ贊成して、浦賀、鎌倉、國府津、晝飯は薩摩芋で間に合せる位に儉約をして、年の暮の三十日に伊豆の熱海に着き、其日と其翌日とを其處に過したが、同じ路を戻るのも愚だと、また馬鹿勇氣を起して、正月の元日、しかも雪がちらちら降り出したにも關せず、五十町のぼり、日金に登つた。風雪に鞍掛を越えて箱根湖畔に出た。で、其日は蘆の湯の鶴屋に泊つたが、翌日は懷中が乏しく歸る旅費位しか無くなつたので、急いで宮の下に

月は里に出でたるを知れども、山中此光を受くるは未だ數分の後にあらむ、と見る內、空いよ〳〵明るくなれり、山益々黑くなれり、斯くの如くにして、空と山との區別は定まりたり。されども其黑き山や、我が室の緣側より起りたる黑色一帶の山にして、庭を隔て、川を隔て、村を隔て、林あり、寺院あり、岩石ありし白晝の山にはあらざるなり。

既にして團々たる月は山の頂に半面を出せり。直ちに空に全晝を出せり。更に飛んで雲間に入れり。入つて再び光を放てる時は、聲のみ聽きし窓下の松枝、音のみ聞きし庭前の溪流、明かに見るを得たり。而して其山の影となりたる、村、家、林、岩、依然として暗黑々。

一日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　E　生

K　盟兄

實によく箱根の山の寒月を狀してあると思ふ。忘れもせぬ明治二十七年、E兄は小櫻緘といふ雜誌を發刊したが、私も其驥尾に附いて、文章を其紙上に載せて貰つた。一種文學に憧れ渡る若々しい心は、些やかなことにも大きな意味深いことを發見したやうに考へて、旅に出るにも歌の手帳を離したことがなかつた。E兄は其頃何ぞと言つては箱根に出懸けて、塔の澤の鈴木に宿して居た。私の箱根に對する渴仰の念は、實に兄の物語に由つて生じたので、玉のやうな玲瓏たる溫泉、色硝子の嵌つた浴槽、終日筆硯に親んだ後の溪流の畔の散步、昔の雲助の話から按摩の話、私の若々しい心は何んなにこの山

があつて、それを明けると、二三段の低い階段、下には一坪ばかりの浴槽に、玲瓏と透き徹る湯が溢れんばかりに張り渡つて、それに全身を浸しながら、聞くともなく聞くと、表座敷で騷いで居る三味線の音が、溪流の高い響に交つて喧しく聞える。自分の友人は曾つて此處で見た美しい娘に戀をして、三年間思ひ詰めに思ひ詰めて肺病で死んで了つたものもある。また其の旅店の女中のお玉といふのに魂を打込んで、東京から一週間を隔てずに態々通つて來たものもある。それから、此地には何とかいふ座頭が居て、それが湯治に來る貴顯紳士の内情を詳しく知つて居て、いろ〳〵面白い話を爲た相だが、今でも生きて居るか何うか。湯本、塔の澤などいふ處は所謂俄分限者などの遣つて來て、馬鹿に贅澤に金を遣ふ處で、日本の溫泉場の中でも殊に設備はよく整つて居るのだ。――無心の溪流は凄じい音を立て丶、白雲の靡く山から絃歌の音艶めかしき地へと。

私はじつとして立つて居た。

それから塔の澤に今一つ忘れられぬことがある。左に先づE君の私に寄せた手紙を引かう。

此頃の月こそ美しけれ、兄の好む寒月なり。『山中の寒月』又唄はざる可らず。暗黑々、たゞ松枝の風に鳴り、溪流の岩に鳴る、其聲をのみ聽いて、暗黑々の折柄――星の空や、燈火の山や、いづれか分ちがたきの折柄――月出るらし、雲の、恰も、金糸を以て縫つたる模樣の如き雲の、見えそめ、既に

『え。』

『何處邊まで。』

『箱根の裏山の方に行つて見やうと思ひます。木賀、强羅、大地獄、姥子の方に行つて見やうと思ひます。』

『お美しいですナ。』

『いゝえ………』と答へて、直ぐ、『塔の澤におとまりですか。』と極りきつたことを聞いて見る。

『え、塔の澤の環翠樓に。』

『もう餘程前から？』

『いゝえ、三日ばかり前から。』

『彼處は好いでせう。』

『ちと喧しいですナ。藝者が塔の澤にばかり二十人も居ますからナ。それが、お客の混雜する時には、それだけで足りずに、小田原から呼ぶですからナ。保養にはちと喧しいですよ。』

千歳橋を渡る時、右側に瓦斯燈が出て居て、藝者の名がずらりと書いてあつたことを思ひ出した。續いて塔の澤に泊つた時のことや、塔の澤の旅店に就いて聞いたことなどをいろ／＼思ひ出した。欄干に凭つた美しい少女の長い袖、あの頃は自分も若かつた。二階をトン／＼と下ると、色硝子の嵌つた戸

『まア、綺麗だ！』とさも感嘆したやうに言つて、『何だか怖いやうですね。』

子供がちよろ〳〵とまへに出やうとしたのを抱き止めて、『まア、あぶない、落ちたら、何うします？』

『何、大丈夫だ！』

と紳士は笑つて居る。

女性と山といふことを不図考へた。海は女性をして慣れ近づかしめるといふ寛容なところがあるが、山は殆どそれを許さない。汽車、電車、温泉宿、それから五六町出たばかりの浅い山でももう一種の恐怖を女に起さしめる。十里も二十里も分入つてからの奇勝、山の上の上の湖水、湖水の上の上の原野、さういふ種類の風景は女をして美感快感よりも恐怖の念を起さしめるものだ。かう考へながら、細君の顔を見た。年は二十五位、丸顔の、色白の、眼元にちよつと愛嬌のある女である。

紳士は立つて凝と見て居たが、

『好い景色ですナ。』

と再び自分に言葉を懸けた。

『え、好いですナ。』

『これからもつと上の方にお出ですか。』

いた。見えなかつた谷、徒にあくがれ渡つた水聲、それが岨道の屈曲の具合で、今しも明かに顯れ渡つたのであつた。先づ大きな石が眼に入つた。續いて藥研で細末にされたやうな白い水、一ところ深碧に湛へられた淵、面白い形に捻れた松、岸に蔽ひ冠さるやうになつた淡竹の叢、それから大曲に曲つて溪流が凄しい勢で峽谷の間を奔流して行くさまが手に取るやうに見えた。私は立留つてぢつと見入つた。其岩！ 鐵色をした大きな岩！ それが三つまで擴がつて水を堰いて居るので、水はそれを切り拔けて出やうと焦つて、藻掻いて、もだえて、そしてこの奇景を作つて居るのだ。それに、谷が深いので、餘程雄大の趣を加へて居る。日光の深澤は谷の上から見るのではなく、奇岩奇石を下から仰ぐところに美があるのであるが、これは上から下の谷を見るところに面白味がある。溪流としての面白味よりも谷としての面白味があると思つた。

多摩川の上流は餘程これと似て居る。棚澤から數馬橋あたりの景色は或はこれに勝つて居りはせぬかと考へた。

立つて見て居ると、子供を連れた夫婦が追付いた。紳士は自分の立つて居る傍に來て足を佇めた。

『好い景色ですナ。』

『え…………』と私は答へる。

細君も近寄つて來た。

る、箱根通の友から聞いたことがある、春の初に、山火事があつて、此丸い山が僧の頭顱のやうに燒けて行く光景は實に壯觀だ、と。それは成程壯觀だらうと思つてまた其方を見た。

郭公が一聲谷で鳴いた。

郭公といふ鳥は面白い鳥だ。都に住んで居る人は、其の鳥のたまさかの一聲を珍重することは知つて居るが、其亂鳴を愛するものはない。いや、郭公は多く鳴かぬものだと思つて居るものが多い。山に行くと――深い山に入ると、それが實に好い聲をして鳴く。鶯を女性とすれば、郭公は確かに男性的の強い處がある。それから此鳥の鳴聲を聞くと、何だか一種寂しい悲しい恐ろしい氣がする。草双紙の妖怪談には屹度此鳥がつきものであるので、幼い時の聯想を呼び起すのかも知れぬが、何だかかつ賑に陰氣だ。八千八聲血に啼く恨、その恨を啼き盡くすことが出來ぬので、夜には小さい咽喉が裂けて血が流れるといふ。さういふ話を母の寢物語によく聞いたものだ。さうしてその不幸な鳥のことを悲しく考へたこともあつた。幼い頃のことゝ、青年になつた時のことゝ、それから今のことゝを一緒に考へて私は歩いた。

二

ふと內に開いた眼が外に轉ずると、私は今早川の流れを眼の前にして立つて居るといふことに氣が附

箱根紀行

一

塔の澤から早川の流れに沿ふて上ると、山の氣が自づから身に迫つて、言ふに言はれぬ好い心地がする。谷はもう餘程深くなつて居て、凄じい水聲が瀧津瀬の樣に聞える。自分の歩いて行く前をパナマ帽の紳士と丸髷の細君とが七歳ばかりの男の兒を伴れて靜かに歩いて行く。塔の澤の溫泉に來て居て、退屈して散歩に出たのだナと思ふ。此の溫泉に來る爲に夫婦は長い間勤儉貯蓄を遣つたのであらう。そして此二三日が一生の中の樂しい日に數へられるのであらうなどと考へる。と、後から西洋人を乘せた二人挽の車が凄じい勢で追ひ越して行く。でぶでぶと肥つた西洋人で、金縁の眼鏡を懸けて、口に葉卷の烟を靡かして居た。

谷を劃つて流れる水の音が高く四邊に響いて聞える。丸い、丸い、青い毛氈を布いたやうな明星ヶ嶽が、すぐ前に聳えて居る、これも同じ丸い山の肩の處に少し見え出して、灰色の雲がふわふわとして居

箱根紀行

夕暮をぐらく、晩鴉の塒に歸るがごミ、かの一軒茶亭の立てるあたりまで行けば、里より迎ひに出でたる人の群、後よりこれを望むに、其の高き、白き洋服は多くの里人の群に取圍まれて、靜かに後より行く空体、其情景の面白きにわれはそゞろに思ひを摸たれぬ。まして其群の中には、われ等の一行を迎ふる青年もありて、其篤き情轉た都の人のごミくならざるをや。羨ましや。美しき故郷もてる人、平和なる故郷に迎へらるゝ人、この白雲青山の裡にのごけき朝夕を送る人――。

伊香保は香雲館、其二階の一室よりは開けたる大景を唯一目。浴みせし後の咽喉の渴きを麥酒に醫し、それこなく危欄の一角、傍に据ゑられたる椅子に凭れば、夕暮の谷は白雲に蔽はれて、さながらに海のごミく、吾妻の峰巒は絶海の一島嶼かごばかり、こ見るうちに、はやき雲の脚は忽ち其山の影をも蔽して、遠く聞ゆる水聲は、そも何處の瀑、何處の溪。見よ、雲は今、わが一室に。

翌朝、奧座敷を通り懸れは、黑檀の机に、男蝶女蝶の美しき銚子、聞けはこの旅館の若主人、今日嫁の君を娶るこて、其準備に忙しきよし。昨夜、來りし袴著けたる若者はそれぞなごと言ふ中、改めて今日の結婚のこミを告け、祝の歌俳諧書きて給はれこて、色紙短册なご多く持ち出しぬ。書きしは何、歌ひしは何、祝ひしは何？　あゝ友の墳墓、歸山の旅客、若者の結婚、意味多しやこの旅、この牛。

三

暮にわかれて、早二時間。夕日に向へる暑き路を、一歩一歩伊香保へとのぼり行きしが、御蔭の松の茶亭、湧き出づる冷たき清水を掬びて、われ等はほつと呼吸を吐きぬ。四近既に皆な山、風の聲、鳥の聲、水の聲、一として都の塵にけがれし思ひを慰めぬものはなきに、山蔭の里、はやかげりて、むさゝびの鳴くも聞ゆる淋しさ、誰か旅情を催さゞらむ。

伊香保は榛名山の中腹、東北に開けし眺望は、登るに連れて次第に濶く、赤城の裾を帶のごとく取卷ける刀寧の流、吾妻の一水は西より來りて、赭色なせる長き絶壁は兩水の會湊點なりと、人々の語りぬ。正面は小野子、子持の兩翠微、かの雲深き萬山の裡を穿ち、四萬、澤渡、草津にあくがれし昔を思へば、そゞろに其時の偲ばれて、一面に蔽へる鼠色の雲もなつかしや。

御蔭の茶屋に、二人挽の新しき俥一輛、中高帽に洋服姿、こは伊香保に名高き某代議士が滿韓視察を畢へて、其故郷なる青山白水の裡へと歸れるなるが、慌てゝ迎へし茶亭の主人に、何彼と語れる言葉の一語二語、『何うも一度山に歸つて來ぬ中は、氣が落付かなくつて爲方が無いから、東京へ一晩泊つた切りでした。實に、旅と言つても、山の中を出たこともない人間が、今度は俄かに五六千里も遠走りを爲たですからな。』と語る中には、その故郷の山水に向ひての喜悦の情は、其眉目の間に鮮かに顯れ渡りき。

野べへと出でて、
聲高く歌やうたひし。

あるは、石、
夕日の石に、
思ひ添ひ、愁ひ渡りて、
彩深き雲、絶々に、
暮れ渡る日影をとひし。

あゝ前の日千年、
後の日千年、
事多しや、此世。
只靜か、この山、此水、
とはなる君がおくつき所。

人はゆき、世は移り去り、
戰、平和、
幾度か變り行くらん。

さいへ、此野、
鳥歌ひ、日また照りて、
やはらぎは、唯つひの世。

思ふ、君、
年若うて、
眉淸く、頰くれなゐ、
幾度か墓の細道、

さなり、墓の細道、
林より日の光る、

胸には滿し難き希望と理想とを抱きて、しかも其理想、其戀、其希望、——一度實際に觸るゝや氷の如く解け、水の如く流れ、遂に敗れて故鄕に死したるならば、如何。其墓をめぐりて立てる友は皆な當年のアイデアリストにして、且つ敗れつゝ生存せるものならば、如何。あゝこれ眞に『アイデアリストの敗北』の最後の一章たるにかなはずや。

父、兄——母は死せり——は、態々東京、高崎より其子の墓參に來れる親しき友を歡待さんと自から臥席二三枚、折詰五六箇を運び來り、麥湯を勸めて、以て縷々に其の故人のことを語りぬ。われは老いたる父の顔を見て胸また塞がりぬ。

記念の爲めに、何か樹を植ゑばやとて、われ等は林の中をあさりしが、不圖、かやの樹の長一尺ほどのものを認めて、これを其墓畔に植うることゝなしぬ。彼一掬、我一掬、あゝ何ぞ其情の篤きや。

はる／＼訪ひて、
思ふどち植ゑし、かやの樹。
まだ二葉、幹低けれど、
蔭深く、しげらん其日。

と其人は語りぬ。

われ等の胸には、今暗き悲哀、暗き死の影、詳しく問はむ力もなくて、唯默してぞ歩み行く。

墓は唯一二步、垣に添ひし路は少し下りて曲りつ。斜坂の一角、小高き十五六坪の地、古杉樹晝も小暗く茂りて、永久に乾かぬ墓の露。それに隣れるは、疎なる楢林、其の隙間を透して、明かなる野の光流るゝ如く漲り來るに、こゝは是れこはの闇、こはの愁、こはの悲哀。

生年二十三歲こ記したる一箇の墓標、其前に線香を點し、花を手向け、あたりを清く掃ひたるが、水蔭兄は遙々携へ來りし一箇の繪畫——故人の友山中古洞が描けるを——其前に展げ、さながら生ける人にもの云ふがごごく、『それ、これは山中君が君を喜ばせやうこ思つて描いて吳れたのだ。見えるだらう、嬉しいだらう………。』こ二度三度これを振り動かし、

『よく見なさい。』

われらは其前に、其後に、或は其附近に直立して、沈默して居たりしが、この一場の烈しき感情に接するや、いづれも胸の迫りたるは、其態度に著るく、一種狀すべからざる壯嚴の情は、今しもこの狹き一帶の地に充ちぬ。われは暗淚を嚥み下して下唇を嚙みつ。

流星の如く胸に上り來れるは、ツルゲネーフの大作『新牛』。其主人公ネズダノフのここは直に思ひに浮びぬ。寒水、若しネズタノフの如くならば如何、アイデアリストの勇將にして、其思は火、其情は熱、

家を出で、垣に添ひて、ひろ〳〵と打渡す榛名の連峰。朝に夕に、此の翠微を仰ぎ、この奇峰に對し、思を馳せ想を遣りたるらんと思へば、今更に故人の面影偲ばれて、胸には萬斛の暗涙ぞ溢れたる。

二

小笹垣、麥畑、裏には桑地の暗樹の繁茂、その奥なる小家を指して、こゝこそ寒水が最後の呼吸を引取りたるところと人々は語りぬ。入りて見るに、棗、柿などの亂れ散りたる傍に稍々清き四疊半の一室、廂低くして月影の到らぬを嘆く勿れ、故郷に父あり、母あり、兄あり、またこの平和なる家屋あり、此處に穩かに眠り得し渠は幸ひならずや。

人は語る、「私の來るのを待つて居て、私が來ると、非常に喜んで、もう死んでも遺憾が無いと言つた。長い間の病氣でしたから、顏も身體も窶れて、もう見る影が無かつたですが、それでも完爾と笑つて、私の手を取つたです。其夜遂々臨終、母樣が非常に力を落して、これも百日ほど經つて歿くなつたのですが。」

「母樣も……。」

水蔭兄は甚しく胸を搏たれたる如し。

「實に其落膽と言つたら、見るに忍びんでしたからナ。」

われ等一行の姿を見送る。中途より町を横ぎり、裏町淺き路を田圃へと出でて、登るや小石多き斜坂の三歩四歩。顧れば風情ある澁川の町は唯是眼下、赤城の大裾は東西に曳きて、其麓を北より南へと下る刀寧の一水。遠きは雲、森、丘陵、山、翠嵐、近きは町、こけら葺、半鐘臺、——ふと、呷唔の聲のきこゆるに心付きて、其方を見れば、麥畑の赤く色づける中に、赤茶色のペンキ塗の二階建の洋館、これぞ故人が幼きより通ひし小學校と聞くに、先づ胸騒ぎぬ。

故人の家はそれより次第に登り行く田圃の彼方、山と山との嶺に當りて、二三、日に榮ゆる白堊の光、墓は其の右なる森こそそれ、と聞くにつけて、わが思ひ愈々亂れつ。かれが年稚く、この坂路を同じ小兒等と戯れつゝ小學校に通ひしさまなども鮮かに眼に映るを覺えぬ。

猶登るや細徑の幾うねり。暑き日に、手向の菖蒲の葉は垂れ、花はやつれ、われ等も唯、喘ぎ〳〵村に著けば、家毎の軒、桑の空枝高く積まれて、淸き流れに臨みつゝ養蠶の後の莚洗ふ若き老いたる女の幾群。それを過ぎ盡して遂に達せしは、故人の家、廂高く、檐長く、農家の庭には美しき草花もなくて、徒に白き栗の花、馬小屋、物置小屋、納屋——故人の住めりといふ室には、古き天神机置かれて、床の間には、故人の肖像にこと〴〵しき漢文を添へたる懸軸、田舍の畫師の技拙くて、更に似ぬ其肖像のうら悲しきや。

兄なる人は三十五六の短軀、田舍人の情篤く、坐蒲團に砂糖水、古びたる團扇を添へて、少時は憩ひ給へと言ひたれど、われ等は先づ墓へと、故人の眠れる墓こそは最もしたはしきわれ等が休憩所。

香山遊記

一

單調なる汽車の二時間、焮熱せる馬車の三時間、澁川の驛に著きし時は、加ふるに午餐後れの身の飢、佐鳥屋とか言へる旅亭の田舍料理もそゞろに待たれて、二階の意地惡き三菜も腹にひゞきぬ。

水蔭兄はこの驛に近づきし時、四面の山河のすぐれたるを見て、常に想像せしより美しき所、寒水はよき故郷に生れたりなど言ひしが、われ等は都より遙々と來りて、其山口寒水の墓を訪はんとせるなりき。寒水、年二十三四、其文才は刀寧の水のごとく清く、其思想は榛名の山の如く高かりしものを、一朝病の襲ふ所となりて、遂に此の故郷の土と化し去る、悲しからずや。

同行せる高崎前橋の諸文士は、手向くべき花をとて出で行きしが、携へ歸りしは、をりからの菖蒲の紫白、束ねたる線香の紙の赤く青きも眼につくぞ無常なる。案内に立ちし人の後より行くに、澁川の田舍町、呉服屋、荒物屋、足袋屋などの、勾配やゝ高まれる廣き大路の兩側に並びて、行き過ふ人々皆な

われは恍惚として唯見入りぬ。

見よ、松原を盡れたる路は低く眼下に、畠、田、村落の彼方、美しき柴山潟の全景は銀色の靜波をたたへて、其上に高く聳えたるは群山を帥ゐたる偉麗なる白山の秀姿。わが連日憧れ渡りてしかも見ること能はざりし其山は、今し靡曳せる彩ある雲の衣を粧ひて、千古の雪美しく日に輝き渡れるにあらずや。

『御山がよう晴れた！』と、老婦は言ひしが、われに向ひて、『それでは、此の路を潮水についてぐるりとお廻りやれ、今江はあの森ぢや。』と、右に低く黒く横はれるを指し、『それでは、達者で行きなされ。』とて去りぬ。

疲勞をも忘れ、飢餓をも忘れて、われは久しく其松林の一角。

松原の途絶えたる處、豆畠、菜畠、西瓜畠、海濱に近く五・六軒の屋根の見ゆるは鹽燒小屋なりと言ふ。此あたりの冬はいかに、雪深く積るならんと問へば、積るにも積るにもそれはお話にも何もなりはしませぬ。丸で路も何にも無くなつて了ひますとのこと。其寂寥たる中の松原、鹽燒小屋、日本海の怒濤。

わが胸にそのさびしきさま浮びぬ。

濱佐美は、半農半漁の村、われ等の歩める路は其風情ある村の中央を横ぎりて、松影と松影との重り合へる處、美しき白堊の土藏、桔槹、物干竿、稍々展開せる丘の邊には、漁網高く日に曝して、うねうねと其傍を海への砂路。

時は既に午、飢ゆること甚し。物したゝむる店ありやと、彼方此方を搜したれど無し。止むなくとある家に憩ひて、強ひて、請ひて甜瓜二顆を割きしが、あゝ其味の旨かりしことよ。都にありては甜瓜など手に取りしことも無かりしものを、かくて今江に赴くべき路を問ふに、路といふべき路もなく、唯々松原の中を穿ちて行くなりといふ。われはしたゝか困りたるに、これを見兼ねたる家の老婦、さらば、妾、案内して參らせむ、此松原だに出づれば、路は明かなるべくに、……と結束してわが前に立ちぬ。

同じく松の影深き砂路を左右、或は丘を越え、或は濱川を渉り、或は畑を横ぎり、或は荊棘を穿ちて、かくて歩みしこと凡一里ばかり、最後の松原はとある長き丘陵の一角、蜿蜒たる路を漸々と向うに出づれば、あゝ何等の大景！

風雨幾百年。

限なき悲愁はわれを襲ひぬ。

六

海女の群に追ひ付きしは、實盛の墓を出でて久しく走りたる後なりき。さびしき松原、一度此中に迷ひ入らんには容易に路を見出さんこと覺束なしと思ひたれば、われはかの海女の群によりて、今江に達するの道を得んと思ひ決めたるなり。傍、海女に問ひ、傍、手にせる陸地測量部の地圖を検するに、われ等の歩める道は覺束なき點線にして、直ちに安宅に達せるものなることは明けし、否、海女の群も亦其地に志せるもの、彼等は此朝西瓜を擔ひて橋立と言へる海岸の村に赴き、そを賣り終りて、其家路にと向ひつゝあるなり。安宅とは有名なる勸進帳の地、さぞな其古蹟に詳しからめと、いろ〳〵に問ひ試みたれど、海女は更にさるものを知らじといふ。其村に住みて、知らぬといふことはあるまじ、義經の舊蹟、牛若丸の遺址、富樫の關所と、其物語すら語り聞かすれど、猶更に知らじといふ。無邪氣なる彼等、愚かなるかれ等――されど其村の舊蹟をすら知らぬかれ等は幸なりや。

篠原を去りて濱佐美の村、今江に赴くには其處まで行きては廻り道なれど さりとて不知案内の身の、松原を横斷する勇氣も出でねば、其儘海女の群に從ひて其村へと志しつゝ行く。

小童も亦われを穴のあく程。

まア後に跟いて來よとのことに、われは其儘松原を通ぜる路を眞直に傳ひぬ。冬の海の潮風に枯られたる松は面白き濃淡の幹綱を織りて、樹には何とも知れぬ小鳥の玲瓏たる宛轉、地を撼して來る怒濤の響、地には松の枯葉の堆積、草叢にをり／＼交る撫子の花、それを一つ折りて、これを帽子に挿むを、あやし業するとて海女は見守りつ。かくてわれらは二三町進みしが、前に見ゆる半農半漁の家二三軒、低き土籬の前に立留りて、そこより折れたる細徑の奥、かしこに低く地を這ひたる傘松あらむ。其處こそ實盛さんの墓なれと老いたるは教へぬ。

まこと其墓の荒涼、地に這ひたる傘松に相對して、小高き丘に一基の小さき墓、字は磨滅して讀むに難く、年既にあまりに久しうして、詣づる人の香花もたえたり、われは帽廂の撫子の花を手向けつ。

されどこの荒涼こそなか／＼にわが興をぞ促かすなれ。殿堂巍々として香烟日夜絶えざらんよりは、いかばかり深く淋しくわが胸に沁み渡りしぞ、この墓の上の微かなる松の音、濤の聲。

光陰の過ぎ去る、啻疾。されど人の世に生れては、月日の過ぎ易きを慾ひ、刹那の移り易からざるを嘆くこともまた多し。此苦、此愁、いつの時にか免れ得む、此煩悶、此悲痛、いつの時にか拭ひ得む。短き人生五十年と言へるに對して、われ等は平凡單調なる月日の徒に移らざるを悲しみしこと幾度ぞや。

あゝ墓碑、あゝ墓石。

かくてわれは幾時かありし。不圖われに歸りて、其儘に步み出したれご、今は迷ひてそこご所在を知らぬ身の、先づ元の路にこそご思ひ決めつ。同じ松原、同じ丘を越えて、五六町、不圖、耳に入りしは、人の語り合ふ聲。

急ぎて彼方に志せば、松原の中の茅葺屋根一軒、桔槹の高く揚れる傍には、二畝三畝ばかりの菜の畠豆の畠、今の聲は此家よりかご耳を欹つる時、再び姿は見えずして聲のみ高き二三人の群の氣勢、路は此家の彼方をぞ通ぜるなる。

家の笠を飛越えて行く譯にもゆかねば、大廻りに其路に出でて、十五六間ほご行過ぎし聲の群を見れば、何れも畚擔ぎし海女の素足、一人は年若く、一人は年老い、今一人は十一二の小童、松風の波濤の音より聞えぬこのさびしき路を、誰憚るものもなく、思ふまゝを大聲に語れるなりき。

驅寄りて、實盛の墓を問へば、驚きて振返り、わが洋服姿を見て更に驚きし體、まこご新しき縞セルの服にオリーブ色の襟飾、佛蘭西革の赤靴は、この荒磯には釣合はぬ限りなるべく、海女のじろ〳〵さわれを見詰めて、こみには答へぬも理なるべし。

『實盛さんの墓見に來たんけえ？』ご若き海女。

『實盛さんの墓ッて、何の御堂であるでねえし、誰んねえ處だのに、態々こんな處に入つて來たんけえ、えれ〳〵。』ごさも都の人は解らぬこごを爲るご言はぬばかりに、吾顏を見る。

或は荆棘の亂れたるおどろしきを分け、猶は行く程に、辿る程に、不圖丘と丘、松影と松影との重り合ひたる狹谷に一泓の池水を認めぬ。

さなり――鐵色なせる池水！

松影は蔽ふがごとく其上に垂りて、銹なせる枯葉の浮べる彼方、痩せたる蘆葉の亂れ淋しいわが足音に驚きて、二つ三つ飛込みし蛙に、靜かなりし池の面は破れて、其處に作るや輪の幾輪。

わが好奇、われは寶盛の寨を訪ふことをも忘れて、其儘、其傍なる草の上に腰を息めて心をすましつ。松の葉の緑間より落つる雲の彩ある影に倆し、それとなく耳を欹つれば、限りなき松の聲、限りなき怒濤の音、――あゝ誰か胸動かざる。

松を隔てゝ、日本海の怒濤、浦潮須德克の潮は朝に夕に此岸に漲りて、北國の淋しき海岸は延長百有餘里、海鳥亂れ叫ぶ無人の岩、燈臺の光は夜毎寂寞を極めたる海波を射て、港遠き舟人のわづらひ、あるは、さる年に難破して溺れ死せし遠き國の舟人の墓、昨日も今日も歸らぬ舟を天末に待ち侘びて淋しく暮るゝ漁村の夕、あるは潮満ち、獲物溢れて、漁村の家毎、燈火の光赤く、窓際に歌ふ若き漁師の聲、あるは小さき港に風待つ百石積の船幾艘、夜毎紅樓の火は海波に落ちて、絃聲絶ゆることなき海畔の一角。――ふと空想より醒むれば、下なる池には水鳥一つ二つ、微かに照る日の光、雲の影、頭上には同じき松風の遠音。

歸つて參りまして、親の恥、村の恥、私はまだ逢ひませぬが、皆様のお話では、もう昔のやうな優しい所はなく、よくまア、恥も知らずにあゝづう〳〵しくして居られることゝで御座います……この追懐の物語、われはそゞろに心を撲たれて、平和なる此海邊の村のことを思ひぬ。

想ひ見よ、此村、此松原の間の路、これこそ、往昔の北國街道、平家の大軍は倶利迦羅の一戰に敗れ、恐ろしき源氏軍の追撃、この篠原の里を破られてはと、名を惜む面々、踏留りての悪戰苦鬪、入り亂るゝ兩軍の旗の影、槍の光、刀のかゞやき、實盛は此處を先途と戰ひし後の名譽の戰死、其墓は此松原の奥の奥、其入口の茶屋にはかゝる美しき主婦の追懷、好奇なる旅客の詩思、――松の音、濤の聲、あゝ悠々たるかな人生の悲哀。

五

松原の奥の奥。

茶亭を出でて早七八町、海岸の道を眞直に、主婦の教へたるまゝを右に折れしが、行きても行きても墓らしきものも無ければ墓の傍に植ゑられたりといふ古松らしきものもなし。松樹の下は赤き砂路、磯蘭とか言へる葉の厚き緑の繁りたる處々、紅、目も覺むるばかりなる撫子の爛開、冬の烈しき風に吹寄せられたるらしき小丘の幾つとなく連れる間を右に越え左に登りて、或は倒れたる松の木根を踏み、

りとお廻りなされ。さうすると申す處に出ます……。私は此から向うの村に登りまするからと叮嚀に敎へて、其儘右の路を根殻垣へと曲り行きぬ。われは敎へられたるまゝ、粟の穗の撓げに垂れたる褐色の畑の間を一町ほど進めば、其の風情ある廣き松原の入口、果して一軒の茶屋。

近郷に名高き別嬪の主婦の顔も見たく、實盛の墓の所在も訊ねんものと、前に張りたる葦簾を分けて中に入れば、西瓜、甜瓜のごろ〳〵と數限りもなく轉れる店の一隅に、主婦は新しき白手拭を髪に、後向になりて居たりしが、わが足音に振返りて、につこと笑みたる其顔の美しさ、其色の白さ、年の頃は二十二三、丸顔の、眉は地藏、口のしまりに此世ならぬ美しさ顯はれ。眼色の好もしさ、襟足の白の延べたる、この磯濱にこの美しさは、我ながら打守らるゝ。

西瓜割かせて、茶汲ませて、さて、かゝる淋しき濱、さびしき松原、それよりは東京に行く氣はないかと問へば、住馴れし故郷、何しに東京くだりまで難儀致しに出やうと思ひませう、東京に出た妾の朋輩も隨分澤山御座りますれど、一人とて運の好きものは聞きません。落魄れて故郷に恥を晒したものも一人や二人ではありませぬ。現に、此間も、妾の幼友達、學校にも一緒に通つて、それは氣性の好い男の子で御座いましたが、親の遣らぬと言ふのを無理に、こんな田舍に埋れて先祖代々の百姓になるのは厭だと申して、五年前に、村の松原、私はこつそりと二里程送つて、出世して歸つて下されとつく〴〵別を惜みましたが、それが何うで御座いませう、つい此間、着た切りのみすぼらしき姿、ひよつくり

顧望の幾度、湖水の縁をめぐりて猶進めば、やがて片山津溫泉に達しぬ。樓々多くは水に臨みて、雲の影、蘆葦の影、一夜浴せばいかに興多かるべきかを思ひつゝ、しかも過ぎ去らねばならぬわかいそがしの旅。街道には日に曝せる晴傘の数々、總湯のあたりには、手拭を肩に、だらりとしたる蒼白き顔の湯治客、緋縮緬の扱帶しごけなきあやしの女、曲欄干に凭れるなどを見つゝ、眞直に湖水の南岸、町を外るゝより再び見ゆる面白き景色を眺めて、一意に展げられたる松原を志しぬ。

道伴になりしは、近郷の農に肥料を賣るを生業とせる四十男、北國訛の言葉可笑しく、かねて聞きし獨逸語の Ja! さうけいの連續に興を催し、實盛の墓の所在を問へるより始めて、旅の話、土地の話、戰爭の話、媾和の話、行く道の泥濘をり〳〵靴を沒するばかりなる難場をもいつしか過ぎて、松原續きの丘陵の幾起伏。曲りくねれる草川には、みそ萩、薄、刈萱の亂れ咲美しく、遂にとある村のわかれ道に至りぬ。

男は立留りて、それでは此道を右に眞直にお出なされ、少し行くと、路が二つに岐れて、左に一軒茶屋がありまする。其處の女房は此あたりにても名代の別嬪、其處に行つて、實盛の墓は、とお訊ねになれば、叮嚀に教へて呉れまする。淋しい處で、不斷は人も通らぬ路なれど、今は西瓜の時節なれば、安宅あたりからそれを賣りに通るものがいくらもありませう。今江――今江の三湖臺と申して、左程面白き處にてもあらねど、達つてお出とならば、實盛の墓から、松原を眞直に湖水の縁に出で、それを左にくる

實盛の墓はわが思ひを惹けるところ、其面白き歴史は、さらでだに興多きを、とある案内記に小さく描かれたる松原の奥なる其墓、それを見てよりわが好奇の念は更に加はりぬ。まして車夫の興味ある說明、倂ぞらぬのみか、道さへぞなしと言ふなる。よし、われ訪はん、われ憑弔の意を寄せむ。片山津に入らんとして、倂の湖畔の一角を過ぐる時、われは不圖白山の秀姿を思ひ出しぬ。越前なる本寺村の山脈を出でてより、わが思ひは常に其山、其姿、往古人の仰いで越の白嶺と言ひし其秀容は、いかに山にあくがれ渡れるわが心を動かすべきか、いかに都門の塵に汚れたるわが胸の俗慮を一洗すべきか。かくてわれは過行く道すがら、幾度其山の方角を路人に問ひ、幾度其の山の方角に眼を凝りたりけむ。されど、生憎、空は昨日も今日も鼠色の雲の叢、其秀でたる山のみか、其連山の裾だに見えずして、惆悵顧望の情殆ど堪ゆべからざるものありき。今、不圖思ひ出して、これを車夫に問ふに、車夫は言ふ、此地、此一角、殊に白山の眺望に富みて、晴天には、其の玲瓏たる秀容、來りて影を湖水に蘸し、其の風光の絕佳、筆舌に狀すべからざるものあり、と。かくて車夫はゆくりなく其方向を顧みしが、聲高く、

『見給へ。』と言ふ。

其指點せる方向、雲稍々薄らぎて、碧空の處々、日の光美しく、山の裾らしきもの長く鼠色なして横はりぬ『あの山の裾、あの上に白山があるのですが……』と車夫は言ひしが、凝視すれば、果して、雲の絕間々々、其鼠色の肩を出づ。

堆積。

『これが柴山潟かね。』

と車夫に問へば、車夫は驅走を少し遲くして『え、左樣で御座います、まだ此向うに、木場潟、今江潟と言ふのがありまして、鮒や鰻やえらく捕れるですナア。』

『實盛の墓と言ふのがある相だナ？』

『え、御座いますア。』

『何う行くんだ？』

『片山津から鹽津と言ふ處を通つて、篠原――その實盛さんの討死さつしやつた篠原でがすアナア。今ぢや、から詰らねえ處で、松原ばかしでがすがナ。昔ア、何でも今の街道筋が其處等を通つて居つたとかで……』

『俥で行かれぬか？』

『いんや、何うして、はア、行かれやすけえ。道も碌々無えだ。』

柴山潟は、一歩一歩其の美しき風景を展開して、蘆荻蒲葦の面白く縁取れる彼方、薄き靄は銀色の彼衣の如く、遠く靡ける松林を隔てゝ、地を撼して來れる日本海の怒濤、見よ、雲間を微かに洩れし火の光、聽しげに覗くや碧空。

宥し給ひしことあり、雑誌紙上にては常に其健在を知れど……近頃も御健全にや、歸り給はゞよろしく傳へてよなどゝ言はるゝも何となくなつかしや。

われはかくて主人より此の山中温泉に就きて種々なることを聞きぬ。かの總湯の區の内外に集れる少女の群の、名を浴衣婢と言ひて、客の浴衣を預からん爲め、態々此村及近郷より驅り集めたるものなること、昔は此風今の比にあらずして、一種湯女とも稱する淫靡なる風俗を成し、其の謳する唄また卑猥淫靡を極め、客の枕席に侍するもの、獅子と稱し、浴客またこれに戯るゝもの多かりしこと、維新以後は其檢束漸く嚴に、今は其風全く廢したること、其他、土地特有の風俗を何彼と詳しく聞きぬ。

翌日は夙に山中を發し、河南にて鐵道馬車を下り、大聖寺川を渡りて、山代温泉に向ひぬ。山代温泉は山中温泉と共に加賀の著名なる温泉場、其浴室の設備は殆ど完全に近く、來り浴するもの年々數十萬に及ぶと言ふ。されど、地は田圃の間にありて、附近見るべきの景なく、絃歌徒に耳に喧しくて、要するに俗地たるを免がれず。

一浴して去る。

此より片山津温泉へ二里。此間は渺々たる田圃、樹立繁れる處々の村落には、普通の田舎に見るに異らぬ茅葺屋根、白壁の土藏のみにして、唯とある屋根に合歡の花の咲けるを美しと思ひしのみ。北國街道は北陸線の鐵道と相並びて、動橋驛の停車場を右に、やがて前に展げられたるは、渺茫たる淡色の水の

村の盡頭、右左桑畑、山には鼠色の雲佗しく懸りて、山中の民と覺しき簑笠の後影を見送れば、番傘に麗々しく旅亭の名を記したる浴客の戻り姿、ちよろちよろと流れ落つる淸水に、女郎花、萩、桔梗なごを折りて挿したる畫のやうなる小景を路傍に見つゝ、猶幾町をや進みけむ。俄かに高くなれる水聲は碎くるがごとく、杉の暗樹の絶間より早くも見ゆる溪流の奔湍。

思はず脚を早めてこれに赴けば、茶樓一兩軒、溪潭に臨みて、忽ち見る風情ある百尺の危橋、大聖寺川の流は此處に一とこころ奇景を幻出し、岩の聳えや、潭の碧や、溪の屈曲や、宛然これ袁家渴記中の光景――われは恍惚として、橋欄干に凭りてこれを見入りぬ。

橋を渡れば、亭あり、其位置、最も溪を觀るに適せり。卽ちこれに上れば、山氣空濛として來りて室に入り、また三伏の炎暑の身にあるを知らず。婢に命ずるに、麥酒を以てし、香魚ありやと問ふに、『唯今取れたのが御座ります。』とは嬉しき答なり。言ふ匆れ、一人旅は興なし、と。此溪あり、此の亭あり、此の香魚あり、あゝわれいかで醉うて低誦せざるを得むや。

四

微醉の顏を夜風に吹かせて、旅亭に還れば、亭の主人來りて、珍らしきお出……と馴々しき言葉なり。怪みて問へば、わが名を宿帳にて知りぬと言ふ。且つ語りて曰く、三四年前、大町桂月氏來りて此處に

細きが上に、馭者馬を御するに拙なるが爲めか、其動搖實に夥しく、折々車輪に當る大石小石、其度毎に、乘客は皆な手に汗握りて、辛くもこれを堪ゆるなりき。ましてや、馬車の路は一筋に田圃の中に長く、やゝ登り坂に至れば、馬は呼吸絶えく\、馭者の鞭烈しく馬の空しき脊を打ちて、殆ど血汐の流るを見るに至れるをや。

二里半の道程に二時間餘を費して、大聖寺川の流遙かに、一帶の小盆地、棟々相連れる温泉場に達せしは、午後四時過なりき。先づ扇屋と言へるに着きて、内湯や何處？ と問へば、此處は往昔のまゝの總湯一つあるのみ、何處の浴舍にもさる設備なしといふ。止むなく浴衣懸けになりて、其處に赴く。

道路の中央、大なる家屋ぞそれ。先づ見るや、扉の内外、若き美しき少女の群、手に手に浴衣を携へて、語るや唄ふや、さながら雀の囀り小鳥の歌。浴衣をそれに渡して、日の光到らぬ小暗き浴槽の裡に入れば、濛々立ち籠ける湯氣の中、浴客はひしと詰りて、或は俗歌を歌ふ者、或は義太夫を唸る者、或は笑ふ者、或は語る者、或は喚く者、或は怒る者、其喧しきこと言はん方なし。われはこの光景に一方ならず愉快を損ひたれど、兎に角一浴せばやと、其裡に入れば、溢るゝばかりの湯の温度、自然石の古風なる槽底は流石に風情ありて、其儘心地よき湯の香に醉ひぬ。

湯上りの身の心地すがくしう、折から山雲の雷雨を催し來るにも拘はらず、此地の名勝蟋蟀橋を訪はんものと、其儘右こなる道を上流へと向ひぬ。

三

山と山との間を越えて、次第に開け行く福井平地、鯖波に至りて、瓜生保が孤忠を以て聞えたる杣山城址を人に問へば、車窓より首を出して、其山こそそれなれと敎ゆ。見上れば圓錐形を爲せる一個の獨立山、其上には斜に掠めたる一片の白雲。萬古の恨、遂に消えざるがごとし。

福井に入りしは午前十一時、足羽山に藤島神社の昔を偲び、義貞の北國征略の纔かに此地に及べるのみなるを慨し、猶、市街を逍遙すること二三時、再び停車場に汽車を求めて、直ちに北に向ひたるが、加賀國、大聖寺町に至りて再び汽車を下りぬ。

停車場を出れば、前の廣場の一隅に、小さき屋ありて、矮小なる男、破鐘のごとき大鈴を鳴して頻りに客を呼べり。これ、山中溫泉に通ぜる鐵道馬車の發車の近きを報ぜるなり。山中、山代、片山津は加賀の著名なる溫泉場、ここに山中は風景に富みたりと聞けば、直ちにこれに赴かんとす。山中鐵道馬車會社は、官線北陸線の對面にありて、其處に集れるは、皆な其地への湯治客、旅鞄の大なるを携へたる若夫婦、其地の友人を訪ぬると言ふなる絹の三紋付羽織の紳士、其他、山中漆器を買出しに行くと稱する若者など、その喧しきこと言はん方なし。待つこと稍少時にして馭者は痩せたる馬を棧にと繫ぎつ、一聲の喇叭を相圖に、これより山中まで二里半の長途、われはいかに腰の痛さを覺えたりけむ。線路の

根の兩三軒、其處には子供の衣、浴衣などの高く竿に干されたるを見しが、猶下れば、風情ある松の林、右の山陰の荒磯深く、濤立ちあるが砂濱には、さびしき漁村蜑戸の群、ここに、冠岩は押潰されしやうに低く蒼波の上に突出して、其上の松樹の繁茂、思ふに、由緒舊き祠。

停車場の名勝標には、此海岸に海水浴場あることを記せり。乘客に聞へば、其設備甚だ完たからざれど、風光の明媚なるに憧れて、夏は行いて遊ぶ者多しとなり。かくと聞きし我は愈々心を動かさゞること能はざりき。其松原には色殊に美しき撫子の花、山よりは殺れて流る、清水の泉、無邪氣なる若き漁師のさま／＼なる面白き海物語、殊に月の明かなる夜など一人その松原へとあくがれ渡りて、美しき海の閃耀を見んと、一歩は一歩より高く其の斜坂の上へと登りつ、遂にこのさびしき停車場に至り、一夜の宿をもとめたるを緣に、さま／＼の物語に耽ることありたらば、いかに。若き驛長、老いたる驛夫、都を望む心と鄙に埋る、心とは、いかに面白き感をこのわが胸に起さしむるならん。話頭は必ず北國の雪物語、其間の此の海山の寂寞、都よりの使とてはをり／＼聞ゆる汽車の音ばかり、しかも車窓を明けて海山の風景を望むの人もなく、倏忽に過ぎ去る幾長蛇。

ほつねんと雪の中に立てるさびしき停車場のさま明かに眼に浮びぬ。

此の空想の間に、汽車は猶二三の隧道を過ぎて、其海山は遂に見えず。

『春などあの近所に行つて網でも打つたり、釣でも爲て居やうものなら、丸で世の中を忘れて了ふやうな氣がする。君は、何時行つた。』

『僕は三年ばかり前の秋！』

『秋も好いだらう。』

『好いね、秋は空もよく晴れるし、眺望もよく利くし、それに紅葉が好い。』

『紅葉が？』

『さう澤山もないけれど、海邊の紅葉と言ふものは又一寸風情があつて面白いものだ。』

『さうとも……。』

この汽車の開鑿せし道は、岩石なれば、過ぎ行く俥の底の轟音高く、見るから危きばかりなる岩山の一端。隧道ごとに、風景は少しづつ變り行きて、海中に突出せし冠岩一帶の丘陵、稍々右に偏ると見し頃、汽車の歩みは漸くに緩く、開かれたる斜坂の上に、さびしく一個の停車場。

『すいづ、すいづ（杉津）。』

と車掌は呼びぬ。

此停車場よりの眺望、またわが心をぞ惹きたる。新しき建築と見えし小さき停車場、それより一道の褐色の路はうね〳〵と、或は豆畑、或は粟畑、或は草藪の間を下に下にと降り行きて、風情ある茅葺屋

わが汽車の駛れるこころは山の半腹、これが爲めに、幻影の如き山水圖は皆な眼下に、岸には亂る、怒濤の掀飜、山には懸れる白雲の搖曳、長く彎入せる敦賀灣には紺青を以て描きしに似たる島嶼棊布して、海に盡きたる榮螺ヶ嶽の餘脈より、斜に開くや、縹渺たる日本海萬頃の怒濤。

『好い景色だ！』

『何時通つて見ても、此處ばかりは飽きんね。』

『實に好い。』

乘客の眼は皆偏りぬ。

『常宮は丁度あの近所になつて居るだらうかね。』

と、土地の豪商の子息らしき、赤き襟飾の、アルパカの洋服を着けたるハイカラは、傍なる友らしき男に尋ねぬ。

『左樣サ。』と、問はれたる男は、前に展げられたる景色を見て『此處からはよく見えんが、丁度あの岸にくつ着くやうになつて居る島があるだらう。あの少し左になつて居ると思ふね。常宮は好いね！』

『常宮は好い。』

汽車は再び隧道の中。

隧道を出るや、其會話また續きつ。

此の社頭の眺望、餘りに明かに、餘りに麗はし。憑弔の恨、追懐の情、幾度か胸に描きて、躊躇去るに忍びざるものありしが、何時までもかくあるべきにもあらじこて、割愛して去る。

松原公園は名の如く松樹の搖曳、其中なる松原神社は水戸の志士の此濱に露こ消えたるを祀るなり、われは跪拜して、更に新しき悲愁の情を繰返しぬ。

海美し、街美し、更に歴史美しき此敦賀港。

二

町にありしは、纔かに二三時間、風景越前に冠たりこの稱ある常宮さへ訪ふ暇なくして、直ちに上りしは北上の汽車、敦賀盆地を北より西へこ掠めて、かくて木の芽峠連嶺の翠嵐の中へこ入りぬ。溪の小流、野碓の獨りさびしくめぐれる彼方、田舍少女の眞白なる手拭に髮を包める、田畠の處々白壁の土藏の日に照りたる、栖の林中の道、丘の上のひこつ松、かくて兩傍の丘陵小嶺は次第に迫りて、褐色の岩石に激せる小溪の流、漸く細く細くなりしが、轟然穿ち入る暗黑々の隧道。

煤烟の音凄じく車燈の影朧氣に人を照して、轉た仙話の洞窟に入りたるがごときを覺えしが、忽ち出で去る光明また光明、見よ何等の好風光、如何にしてかく俄かに、如何にしてかく美しく前に展げられたるかこ思はるゝばかりの海、島山、白帆。

かしむる汽笛の響、見よ、手筒山下の紅樓には紅裙の影趾の船を送りて、影悲しき月の夜の金波銀波、多恨の人ならざるも、誰か腸を斷ぜざらん。あゝこの美しの海、情けの港。

まして美しき歴史の追懐は、いかにこの北陸の一港を詩的ならしめんとするぞ。氣比神宮こそはその最も旧き遺址、二千餘年の昔、仲哀天皇は此地に都して、神功皇后の征韓の舟師は此處に其の征途を啓したりきとぞ言ふなる。下りて、南朝の一悲劇、港に對して東北に聳ゆる一丘、それこそは悲涙とゞめ難き金ケ崎の宮。想像せよ、新田義貞、敗餘振はざるの兵を帥ゐて、幼き親王を護し奉り、京師に別れて、北に、琵琶の湖畔を海津に來りしは十月の早寒空、氣比神官の一族の爲めに迎へられて、辛くも金ケ崎の城に入りし時は既に四面皚々たる雪。やがて敵の大兵に圍まれたる孤城の饑寒はいかに、杣山の瓜生は雪に阻まれて敗績し、三四月の後、南軍遂に悲しき末路。尊良親王の自刄、恒良皇太子の雜木浦逃匿、續きて捕虜、續きて毒弑、義貞の忠にしていかでか泣血慷慨せざるべき。宜なり、渠が絶世英雄の資を以て、一雜伴將の如く遂に藤島に戰死するに至りしこそや。

今、波静かに、日かゞやき、丘陵の一角、大なる華表は海山に面して社務所には衣冠著けたる禰宜の端坐、拜殿の注連繩の白紙風に飜りて、境内修理の土工等、丘陵の上を削りて、頻にトロコの車を押しぬ。悲劇過ぎ去りし後の永劫の平和、渠等は其の悲劇を知らず、知るも誰これを思ひこれを弔ひ、これを悲むに至らず。われは社頭に立ちて、悲劇と平和とを久しく思ひぬ。

北國街道

一

若狹より越前に入るに、榮螺が岳の峻嶺は左に高く、ふわ〳〵と綿の如き雲杳かに、遙かに廣く展開したる彼方には、思ふに深碧なる海、澎湃たる怒濤、岸を縁取れる青松の列畫くが如く曳きて、上に漂ひ渡れる五六の白帆。

北國街道を其の翠微の裡に有する橡木峠一帶の山嶺の高さよ、又嶮しさよ。冬の日は積雪百尺、義貞の軍これが爲めに飢ゑ、勝家の兵これが爲めに機を失し、英雄をして遂に悲しき末路を描かしめたるは、此の高く面白き山の姿かと、そゞろに往昔を胸に繰返すとする間に、載せたる若き車夫の脚早く、俥は飛龍の如く一路坦々として敦賀に向ひぬ。

敦賀は瓦甍粉壁、海色潮光のたゞずまひ世にすぐれて、岸には松影、港には檣影、かの名高き常宮の祠のあたり、彎入せる海の碧は殊に穩かに、斜に孕みし一帆の渡し船、をり〳〵巨人の嘯きかと人を驚

ここに蚊の多く且大なるにはしたゝか怖毛を振ひぬ。

あくる日は、雨蕭々として俥の幌の裡暗く、その絶間より絶々に見て行く田舎の景色の佗しさよ、かくて越前崎に海波の白く見ゆるあたりより、雨は小降になりて漸く俥の幌を外すことを得たれど、一里、二里にして、再び美しき海山を背後に、とある荒涼たる山村を過ぎ盡せば、勾配漸く急に、面白き並木松の間、草刈娘の籠を背負へる群の行方遙かに、一株の傘松、逶迤たる褐色の路、それぞ若狭、越前兩國の境なる。

峠には美しき冷たき清水ありき。

五

敦賀に向ふべき汽船も、この南風にては寄港すまじとのことに、止むなく俥を雇ひて發す。日笠村より岐れたる敦賀街道は、一直線に北に向ひて、或は疎なる雜木林の繁茂、或は美しき並木松の排列、三十三間山の山脈には湧くがごとき黑雲夥しく簇りて、をり〳〵洋傘に催し來る一雲の雨。名も知らぬ村幾つか過ぎて、白壁多き安賀里の里に入れば、三方まで歸り俥あり。お氣の毒なれど、乘替へて賜はれと車夫は言ふ。餘儀なく俥を代へて進む。これより山漸く深く、揺曳せる翠嵐漸く多し。ことに、沿道、松の並樹の美しきは、此地方の特色とも稱すべく、夕陽の影のほのかに照り渡れる頃、われは三方村近く來りぬ。

三方の四湖は、所謂瀉湖の性質を具し、三方村に入らんとする前、われはその劈頭に接し得たり。阪、並木松、稻田、其下に展げられたるは、夕暮の靄に包まれたる銀色の湖水にして、向ひに聳えたる山々の幾連亙、湖の岸には、夕炊の烟に包まれたる平和なる村一つ二つ横はりて、低く孕みたる白帆の數點、あはれ美しの景色やと思ふとする間に、俥は坂を下りて雜木林の中に入りぬ。

三方の旅館は湖に近くして、しかも水を見ず、平凡なる田舍道に臨みて、蒸暑さ堪へ難きところなりき。夕餐の膳に上りしは、鯉、鯰、鰻など、皆な湖水の獲物、給仕の女の、言葉の鄙びたるも佗しく、

も足らぬ！」と。此の好風景あり、誰か酒を過さゞらんや。

此一泓の潮水、これ外面に遊ぶものゝ最も快を叫ぶところ、晴日には、或は岩石を攀ぢ、或は湖底に掬び、一竿釣魚の樂や、岩頭採貝の興や、その遊嬉、日を盡しても猶ほ去るに忍びざるものありといふ。生憎、今日は鼠色の雲低く、南風細雨を送りて、怒濤漸く岸を嚙まんとするの兆あるを以て、一時間の後、遂に割愛して船を回す。

若狹灣の門口に至るまでは、長き絶壁南風を遮りて、さして困難を覺えざりしが、大岩の鼻附近に至れば、海は奔涌澎湃、唯是れ鼎の沸くが如く、波頭の激觸、潮流の洶湧、殆ど船を進るに難し。前を見れば、小湊灣は盤の如く、鼠色の濃き雲低く舞ひて、暴れ模樣は一目にてそれと知らるゝ海、山の晦冥。かくても舟を回し得べきや。

小舟に懸けし櫓三挺、舟夫は今を時と阿邪曳々の聲、動搖する舟は唯是れ木葉の如く、少しく心を用ゐざれば顛覆の恐れありと思はるゝばかりなりき。殊に、潮高くして進まざる舟のもどかしかりしことよ。三十分、四十分、猶ほ船は大岩の鼻。

兎角して雙子島に達せし時は、眞に是れ蘇生の思ひありき。更に、一怒潮、一奔涌、午後一時辛うじて小湊に戻りぬ。

只見る、松樹稀疎たる懸崖は海中に聳立して、四面より落つる小瀑布の濺々、怒濤の音く烈しきを避けつゝ、崖に從ひて右より左に遶れば、一町、二町、三町にして、忽ち相對す、正面に其の自然の門。眞個堅城の追手を開きたるがごとく、其奇構、其の奇景、思はず人をして天工の妙なるに瞠若たらしむ。門、高さ五六十丈、傍にくゞり門とも稱すべき小門を具し、窺へば潮水一泓、明かなること宛然鏡のごとし。舟夫、帆檣を立てゝこれを過ぐ。

門を過れば、其裡の潮水の廣さ大凡方五六十間もあるべく、前なる絶崖の小谷よりは一道の大瀑鏗然として落下し、中途折れて小尖岩に飛散し、嬌態轉た人意を惹くに堪へたり。舟夫、先づ船を其の灣内浪穩かなる處へと漕ぎ、岸邊の尖岩に纜を繋ぎしが、さて靜かに取出すや、船底より酒一壜、肴一包、飯一盒。

『旦那樣、一盃お遣りなされ！』

と五郎八茶碗をわれに差しつ。

われも兼ねて携へたる麥酒を出し、主婢が大門まで開くなと笑つて言ひし風呂敷包の重箱の蓋を明ればゝ、美しや、薄紅色なせる小鯛の鮨！

此鮨の旨かりしこと、此大碗の酒の美なりしこと如何ばかりなりしぞや。舟人語りて曰く、

『實に、外面に來て飲む酒は旨い、いつも足らぬと思つて五合位餘計に持つて來るんだけど、それで

多くは路の不便なるが爲めに功を擧ぐること能はず、數年以來、全くこれを廢せり、と。洞窟に入るに、石の破碎せられたるもの甚だ多く、意を用ゐざれば、頭を倒るゝの恐れあり。窟の上部、潮水滴ること多く落ちて、冷氣肌に徹す。匆卒にして、舟に歸り、更に絶壁をめぐりて、渺茫たる大洋に出づれば、懸崖の小灣は更に一副灣を起して、岩石の奇、殆ど名狀すべからざるを見る。思へ、矗立せるは帆檣の如く、倒懸せるは破甍の如く、起つもの、臥するもの、舶の如き者、獅子の如き者、奔馬、踞虎、飛龍の如き間、深碧料るべからざる深潭は不斷の盆涌、無限の澎湃を漲らして、崖底の洞窟に當つて碎くる怒濤の響は、さながら遠雷の轟くがごとし。船は輕艫徐ろに此間を過ぎて、進るや、行くや、はた停まるや、かくて岩石は絶壁と相連りて、綠青の色美しき懸崖を更に過れば、天下の奇景これに如くはあらじと思はる、深潭の暗碧、怒濤の奔騰、怪石の起伏、われは思はず快哉を連呼しつ。

紀州の山中、瀞八町の奇勝はわが常に忘る能はざる處、其瀞潭の深碧は、此胸に鏤くべき深感と沈默とを傳へたりしが、幽邃たる其深潭を今此の絶海の畔に見んとは！　われはこの外面一帶の風景に對して、遙かに紀州北山川の峽谷を思ひぬ。

東嶋岩の奇怪極れる景を賞し、更に久須夜ケ嶽一帶の絶壁を傳ひて、猶進むこと半里程、低き灌木の間より亂れて落つる小瀑の幾條を仰ぎ、常神の岬に、鼠色の雲の懸れるを見つゝ、遂に達せしは、大門小門。

流されることなどありはせぬかと問へば、『大丈夫、大丈夫、安心なさつせい、此の大男が三人ついて居て、旦那を流させるやうなことは爲ねえわナ。』

との力强き返答。

雙子島より更に一里。若狹灣の門口に至るや、怒濤更に高く、舟の掀飜すること甚し。されど其風景は次第に趣を加へ來りて、岩礁の聳立するもの漸く多く、或は立ち、或は臥し、或は奔馬のごとく、或は踞虎の如く、怒濤これに觸れて花と散り、雪と亂れ、其壯觀容易に狀すべからざるものあり。猶進むこと五六町、漸く外洋に面せるあたりに達すれば、久須夜ケ嶽の半面は、總てこれ懸崖、總てこれ絕壁、岩は岩と相重りて先づ造るや傘の瀨の奇景。見よ、絕大なる鋒岩は巨人の嘯くが如く怒濤の中に聳えて、其の四面の洞窟に打寄する波の美しさ、凄じさ、船は其傍を掠め過ぎて、小岩起伏の間を進み行けば、岸に扁平なる大石橫はりて、下に隱し水の勝あるを見る。舟夫、船を洞中に入れ、仰いでこれを搦ばしむ。其の冷かなること氷のごとし。これを出でて五六町、小島と稱する地に出づ。

此岸は更に一層の奇を極めたり。絕壁の高さ五六百丈、其の巉崖は危く頭上を壓して、上に五六の靑松を點綴す。舟を巉崖の一角に繫ぎ、岩ケ根を踏みて攀れば、人の通ひし一筋の跡ありて、それを傳ひ行く彼方、黯黑なる洞窟われに向つて其巨口を開く。

舟夫語りて曰く、これ鑛山の痕なり。昔は多額の量を產し、今も鑛脈絕えざれども、これに從ふもの、

鼠色したる雲は名殘なく大空を蔽ひて、和田山の絶頂ことに深し。海は大波小波の氵湧、もしや歸られぬ樣な事はありはせぬかとの懸念は絶えず胸に上り來れど、舟夫は關せざるもの丶如く、談笑自若たり、沖に浮べる漁舟の數々、そを掠め過ぐる度每、

『何處に行くだ。』と問はる丶を、

『外面に行くのサナア。』

と答へつ丶過ぐ。

『此の天氣に、外面行とは御苦勞ぢやなア。』

『やあ。』

『流されないやうに用心さつしやい。』

『大丈夫、金の鞋。』

など笑ひつ丶行き過ぐ。

舟夫等は今、その所謂『流されたる』時のことを語り合ひぬ。かの時は凄じき暴れなりし、其時は高き潮なりし、此身は竟に流されたることなけれど、あの時のみは櫓は最早利かずして如何とも爲す能はざりし。『それに、可笑しいのは、淸の野郞さ、大流れに流されて、經の岬まで行つた癖にナ、流されたんぢやねえ、態と行つたんだッサ。押の强い、我慢な奴らやねえか。』と語りぬ。われは心に頷づき、

われ、明日の遊を思うて眠らず。

四

曉、戸外の楊柳に蕭々たる音あり。起ちてこれを見れば、雨なり。生憎なることかな、かくては到底外面の奇景を見ること能はざるべし。われはかく思ひあきらめて再び臥床に就きしに、一時間ほどを經て、主婢來りて、如何に爲し給ふべきと問ふ。此の天候にて行き得べきか。主婢の曰く、舟人今來りて語る。此雨は夜明けなば晴れん、南風少しく至ることあるべきも、舟夫三人を以てせば敢て航し難からず、一に、客の意に任せん而已と。

われ卽ち決意して遊ぶ。

船に上る頃、雨少しく晴る。主婢は茶器一切と火鉢と毛布とを其中に備へ、別に、風呂敷に包める重箱二重をわれに渡しぬ。その何なるかを問へば、笑ひて答へず、大門に行きて開きませとのことなり。我は他に、麥酒二陶を購めつ。

岸を離ること一二町、舟夫は先づ帆を張るに、少しく吹立ちし南風は、斜にそれを孕ませて、船の走ること極めて速かなり。忽ちにして一里、雙子島の翠螺は既にわれ等の眼前に來りぬ。

顧れば、小濱の街は既に遠し。

が思を惹けり。夕暮、麥酒一盃に醉ひて、此家の主婢を相手に、土地に流行せる梅田雲濱を詠せる歌を聞き、兼ねてこの小濱港のさびしき冬の物語を聞きぬ。十二月以降は、三面を圍める山皆な深雪に鎖され、かの今津に通ずる保阪峠の如きは、深さ五六尺に達し、越前に通ずる街路また三尺有餘に及び、到底人車を遣る能はざる而已ならず、徒歩またこれを越ゆる能はず、まして、海上は北海の波濤高く、船は皆岸に繋し、北風暴るゝ時は、怒濤此の家の高き塀を洗ふことあり、是を以て、住民皆な戸を閉ぢ、業を罷めて、其の荒凉寂寞、實に想像に堪へたるものありとかや。主婢、猶語を繼いで曰く、「けどもナ、故鄕と言ふものは好いものでナ。どないに寒うても、他鄕へは好う行く氣になりまへんがナア。」と。あゝこの別天地、あはれこの平和をこそ愛づるなれ、この質朴をこそ愛するなれ、終年終日鄙門に僻在して、曾て平和の何物たるをも知らざるもの、このさびしき冬の港を想像せよ。

婢また大門小門の勝を語る。われ問うて曰く、明日艤して至るべきか。婢、天候を窺うて曰く、其地絶海の畔にありて、岩嶮しく潮高く、少しにても北風に逢はゞ、門を出でて歸るべからず。是を以て、舟夫容易に艤することを肯んぜず、一年の中、梅雨の候、風濤尤も平靜なる時を待ちて遊覽するを例とせり。されど今日の如き好晴ならんには艤して以て至るを得べし、客、意あらば、以て舟夫に議せん。われ、卽ちこれを囑す。主婢、少時して歸りて報じて曰く、舟人諾せり、客、乞ふ、明朝五時を以て發せよ。然らずんば波濤高く、風吹き荒れて、遍なく其勝を探る能はざらん、と。

帽子、白洋服なども明かに小さく見えぬ。これ、小濱、和田通ひの汽船なるべし。かくてわれは其汽船の進行するを見てありしに、汽船は次第にわが立てる青井山の麓を弧線を畫きてめぐりつゝ、遂に、小濱港外一里のところに來て、再び汽笛を鳴して停りぬ。此時、岸より出でし一艘の艀、三人の船頭は曳曳聲を出して漕ぎ近づきしが、やがて其汽船の舷腹に取附きて、見よ、今、乘客の昇降。

われの山を下りしは、其汽船の更に人を乘せて、大海に向ひて走り去りたる後なり。き再び小濱の街道に出でて、國學の泰斗伴信友先生の墓に詣で、更に小濱の市中を散策す。小濱港は往昔、酒井侯の十二萬石餘の城下たりしのみならず、北國通ひの船舶は皆此處に纜を繋ぎたるを以て、其繁華は頗る見るに足るものありしが、今は此處を通ずる鐵道の便なく、交通頗る不便なるを以て、市の繁華頓に衰退し、人口また次第に減じ行くといふ。町は他の奇なしと雖も、衰微せる市街に見るがごとき一種の氣到る處に滿ち渡りて、潮入の乾たる河に、小童の五六人小蟹を捕へて遊ぶさまなどそれとなく眼に入りぬ。南川は町と雲濱村との境を爲し、溶々として、水常に滿てり。此川に鯋と言ふ小魚あり。其色飴色にして、春季群を成して、此流を泝り、一たび網を打せば、克く數百を得べしといふ。雲濱城址はこの川の河口に其の廢墟を存し、中に藩祖を祀れる神社あり。われは好奇にも、この廢墟の上に登り、天守閣の敗殘せる樓上に立ちて、海山の美、市街の光景に久しく見入りぬ。

わが宿せる青濱館の一室は、四疊半の狹き間なれど、其軒端に、楊柳の葉の戰げるがありて、頗るわ

三

午後一時、われは青井山の眺望臺にありて、獨り靜かに小濱灣の大景に對せり。此處に達するに、われは先づさして繁華ならぬ小濱の街を橫ぎり、絃歌の聲する廓の一角を掠め、地の名士雲濱先生の碑に詣で、直ちに其後の岩石嵯峨たる山路へと懸りしなりき。一步每に眼界の開け行くこと、この山の如きはあらじ。數步にして眼に映ずるは、弓弦のごとき灣頭を緣取れる小濱の市街、南、北兩川の互に合流する流も面白く、國の東部を劃れる諸山には、雲おもしろく靡きて、灣を隔てたる一大巨峰、これこそかの大門小門を始め、外面一帶の奇勝を其背後に藏する久須夜ヶ嶽なれと思へば、其の皺襞多き影深き山の姿にわれは愈々憧れ渡りぬ。更に一步、更に一步、眼界は漸く北に開け、蛭子島の黑き姿、小濱灣の門戶を成せる大岩など、さながら扇をひらくがごとく顯はれ來りしが、遂に達せしは、其絕頂、其眺望臺。あゝ誰か快哉を叫ばざるものぞ。西北の灣は唯是れ眼下に島嶼の碁布、岬角の出沒、をりからの風きたる海は、さながら藍を溶きたるが如く、雲の間よりをり／＼穿漏する日影は、處々に金色の[illegible]を[illegible]し
て、低く浮べたる白帆の數々。われは松原の中に踞して、唯々この大景に見入りぬ。

かくてわれは幾時かありけむ、不圖、纖き長き汽笛の灣內の靜かなる波に響びわたれるに驚きて、頭を擡ぐれば一艘の小蒸汽は全速力を出して、灣の西部を東へ東へと航しつゝあり。其甲板に立てる新しき[illegible]

ぬ。此處にて俥を代ゆ。其立場の旅館、名は忘れたれど、古風なる庭ありて、鄙少女の美しき眉を見き。

かくて再び程に上りしが、重山複水、境はこれより次第に開けて見るや、漸くに、田の連亘、稲葉の戰ぎ、養蠶を業とせる農家の軒に、日に曝したる雪白の繭の閃耀。北川の流域は次第に廣く、其兩岸に開けたる沖積層には、雜木林を疎らに點綴したる村の白壁、稲田の間をうね〳〵とめぐれる幾條の畷道、街道の傍には、電信柱遠く連りて、日笠村附近に至れば、北川の對岸に、褐色長く通ぜる敦賀街道、其處に見ゆる二三の俥、蝙蝠傘。

車夫、わが爲めに指點して語る。この北川の末流、かの山と山との間に、更に遠き一山影の藍碧の色なして聳ゆるを見るならん。小濱港は其前にありて、海は其山と此方の山との間に横はれるなり。而してかの大門小門の勝は、前面なる山脈の海中に突出したるその背後にありと。わが胸はこれを思ひて、興更に昂りぬ。

遠敷村に、若狹姫神社あり。神宮寺村に、若狹彦神社あり。共に國中に於ける古祠として著名なり。人家軒をつらねたる遠敷の古邑を過れば、南川の流南より來りて、其處に一長橋を架せり。かくて此橋を渡れば、一道の街路斜に後瀬山の麓を縫ひて、其盡くる處、小濱港の人屋、前に展けられたる青戸灣の晴色。

海に面せる旅亭を選みて、青濱館といへるに投ず。

峡谷は峡谷を生じ、溪流は溪流を産み、或は開けて山野の末を見るべく、或は塞りて路の窮せるを思ふべく、炊烟透迤たる處、數軒の人家、白雲揺曳たるの邊、歴落たる人語馬聲。

村童の草刈籠を負うて谷へと下り行くを見送れば、村孃のあやしげなる髪結ひて、頻りに田草を採れる鄙歌の一群。見よ、彼處に一條の瀑布、其處に懸崖の危橋、とある村の茶亭、後は溪流、前には此附近に名高しといふ清水溢れて、美しく浸されたる甜瓜の一兩顆、俥を留めて其處に憩ひ、齒に沁するばかりなる冷き旨き味を占め得たりしことをあはれいつの日にか忘れん。

追分より保阪峠へと懸れるころは、空名殘なく晴れて、車上の日影燬くがごとく、滿山唯是れ蟬時雨、保阪の峠の半途、角に一軒の旅亭ありて、これより岐るゝ路は朽木谷へと下るなりとぞ。朽木谷は吾途川の峡谷にして、これより比良山の山陰なる葛川谷に連り、山村の數十五六、朽木監物が祖先の地にして、足利義晴將軍の隱匿せる古蹟なりと聞く。をりから懸れる白雲を仰ぎつゝ、種々なる歴史上の想像に心を馳せ、次第に保阪の嶮峻なる峠へと登りぬ。

峠に至れば、三十三間山の餘脈新に起りて、前に絶大なる谷を開く、其谷の縁の路、これを縫ひて走り下れる俥は早く、溪は溪に從ひて生じ、谷は谷に從ひて開け、危橋を渡ること二三、山村を過ぐること一二、遂に熊川の町に入る。

熊川は山間の一小驛、曲折せる街道を繞る小溪の水は流れて、翠嵐の影搖曳せる、日光忽ち雲に蔽り

物語より述懐に轉ぜし最後の一語、われはこれを聞きつゝ、愈々なつかしき其黑き島影に見入りぬ。船は漸く近く、約一里弱とも覺しきあたりまで來て、急に、舵を東に轉じぬ。此時ゆくりなく眼に映りし一穗の燈火、彼ぞ辨天祠の常燈明なると聞くに、わが胸は愈々波立ちぬ。

少時して、西岸には、黑き人屋、明かき燈火、汽船の舵器の廻轉、續きて、ボウイの聲して、

『今津！　今津！　今津上りのお客樣は早く甲板に出て下はれ！』

二

一夜寢し今津の港、夏の夜は早く明けて、顏を洗ひにと、湖畔に出れば、夜來の宿霧は未だ晴れず、茫々たる湖上、竹生島の影は夢の如く、沙汀に打寄する漣の微かなる音、旅亭の娘の赤裸したるが、金盥に湖水の水掬び上げて奥るゝなど、まことに詩中の景、畫裡の趣なりや。

今津は若狹路の要衝、俥を雇ひて此街道を走らするに、其家屋、其市街、他に比して稍整へり。町の中央に、北國街道、若狹街道の分岐點ありて、道傍に、『若狹みち』の石標を立てたり。若狹道、今よりぞわれは其國に、其別天地に。

稍々登り阪なる路を一里ほど西北に入れば、身は全く萬山の中に陷りて、山はさして高峻ならざれども、迂餘曲折、路に從ひて、溪流の奔湍は顯はれ來りぬ。雨餘の水肥えて、戛々として聲ある竹叢の陰、

これぞ、竹生島なる。

貝原益軒、曾てこれを記して、『竹生島は周圍六十町許、山の高さ總て十間ばかり、その高さ何處も均しく高下なし。山上は皆常磐木繁れり。下の山根に大なる岩石繞りつゞき、岸高くして屏風を立てたる如し。東の下神社の下に纔かに狹き入江あり。船の着く所なり。神社佛寺に登る處、只一處なり。其餘は皆石崖のみにて登るべき地なく、又船を停むべき所なし。山上の林木、山下の岩壁、其形繪に畫きたるやうに鮮かに麗はし。社も寺も高き所にあり。民家は一宇もなし。社前より遠く望めば、湖水渺茫として人寰遠く隔り、境地潔淨にして、人里遠く俗塵を離れ、恰も浮世の外に出たる心地して、仙境に入りたるやうに覺え侍る。まことに世に勝れたる靈地にしてあやしき佳境なり。』と言へり。この靈境、今も猶昔の儘なりと聞くを、其地を一歩だに踏まずして過ぎ行くことの遺憾さよ。

乘客の一人、年五十五六ばかりなる中老漢、同じくわれと甲板にありて、この島影を見つゝありしが、語りて曰く、『私は大溝の者だが、あの竹生島には、若い時にはよく獵に遊びに行つたものだ。今でも銃獵禁制地だから、隨分雉や鴨が居るですが、私等のよく出懸けて行つたのは維新の少し前頃、それは居たにも居たにも、實に取り切れぬ位でした。老人などは神樣の地面だから、罰が當ると言つて、私共を留めたですけれど、私等は若い血氣盛に、そんなことは頓着せずに、よく出懸けて行つたことでした。今では、もうそんなに取らないが、若い時は一番面白いですナ。』

汽船は堅田を過ぎ、和迹を過ぎ、猶西へ西へと航しぬ。われは十七日の月の出を待ち侘びつ、少時室内に下りて、横に倒れしが、終日乘り勞れし汽車の長途の疲勞は直ちに睡を誘ひて、間もなく華胥の國に遊びぬ。かくて一時間をや眠りけむ。ふと眼覺れば、東の窓明かに、微かに射し入るは、まさしく月の光！

急いで甲板に上れば、果して月は既に三竿の高きに登り、堅田附近より左右に開けし湖水は渺茫として海の如く、瀲灔たる月光の彼方、鼠色したる山はさながら夢の如く長く靡き渡りぬ。

船長に問へば、そは奥島の長命寺山にして、伊吹山は常に、此あたりに見ゆれど、今宵は少し雲ありて……と、更に其左の方を指し示して語りぬ。

あゝ湖上の月夜、われはこれに對して、いかに胸を躍らせしぞや。船は西岸に沿ひて走れるを以て、東方は渺茫又渺茫、思ひは遠く千里を馳せて、いかにしても湖水とは思はれぬばかりの廣濶。言ふ勿れ、人生苦多しと。この興、この樂。われは甲板の上に踞して、深くあたりの風景に見入りぬ。

大溝の風情ある埠頭に寄りしは、夜の十時過なりけん。汽船は長き埠頭に横付に、埠頭には人の騷ぐ聲、提燈の光、甲板より乘降する客のあわたゞしげなるも面白く、陸にほの見ゆる田舍の町の燈火もそぞろおのが心を惹きぬ。深けたる夜の湖岸の埠頭、唯か思ひを誘はざるものぞ。

大溝を出でて約二三里、不圖、わが前一二里を隔てゝ、彪然たる一島の横はれるを認めぬ。

に繫がれたる八十噸ばかりの小蒸汽には、赤、青の洋燈の光處々に明かに、顧れば沿岸の水多くは家々の燈光を長く落せり。

汽船は少時して出帆しつ。

水を截る音凄じく、大津の市街をもいつか離れて、薄暗き闇の中を次第に西へ西へと進みぬ。われは獨り微醉の顏を水風に吹かせつゝ、狹き甲板の上に立ちて、今、別れし方の燈影、家影を見送りぬ。比叡の最高峰に殘りし夕陽も既に全く消えて痕なく、さびしく靡ける雲の影も微かに、二三日來の暴風雨の後の空は拭ふが如く、めづらしき好晴やと船長も語りぬ。

いかなればこの湖水を西に渡るぞと問ふ勿れ、われはこれより西江洲を經て、彼の若狹の海岸に出て、それより越前、加賀、能登へと遊ばんずる身、ことに、若狹はわが久戀の地、其の海岸には美しき小濱の港市、大門小門などと稱する奇勝もありて、容易に人の至らざる絶海の畔、その別天地の風景はいかにわが眼に映ずべきかと思へば、今更に、湧くや、興、波立つや、胸。

遺憾は竹生島、この西琵琶湖の一勝地を徒らに過ぎ去らんとすることなり。今日米原より長濱、其處より和船にてかの島に渡らんとせしものを。今宵十七日の月夜は、其の湖中の一孤島、辨天の古祠の巖上に嘯きて、かの經正が古琵琶の遺音を松聲に聞かんと樂みしものを。暴風雨の名殘は未だ止まず、其願は水の泡となりしこそ口惜しけれ。

若狹道

一

馬場の驛、大津の市街、をりから夕陽は熾くが如き閃耀を湖水に漲らして、比叡連峰の上、焔の餘波とも見ゆる雲、美しくふわ〳〵と靡き渡りぬ。湖の西岸を渡り行く汽船の出帆は午後八時、今津に着するは今宵の十二時なるべしといふに、舊暦十七日の月の美しさを想像して、逸興湧くが如く、湖に臨める旗亭の一室、名産の鮒のあらひに獨り低誦の酒に醉ひぬ。

蒼然たる暮色、湖の夕陽は消えて、紫なせる山の幾連亙、不圖山際に一點の燈火の見え始めたるに驚きて首を擧ぐれば、水の如く晴れ渡れる暗碧なる空に、星光其處此處と聰しげにかゞやきて、汀に打寄する漣の音の微かなるに、名利の念頓に失せて、轉た物外の境に心を馳する時、ゆくりなく響き渡れるは汽笛の長吼なり。

あたふたと旗亭を出でて、埠頭に驅け着くれば、日は既に全く暮れて、闇に白き湖水の茫々、此方の岸

に比すれば如何、小生は無限の感想に耽らざるを得ず候、半年の間に味ひ來りし悲劇、――其當時はさほどだにも思はず候ひしが、今、この山中にありて靜かにこれを冥想致し候へば、あらゆる悲劇、あらゆる事件、一まとめになりて、眼の前に見ゆる心地いたし、そゞろに涙の胸に迫るを覺えず候。

小生の占めたる室は六疊の一間、障子は硝子を嵌めたることゝて、前には、湯の湖の靜かなる水うつくしう見え渡り、早五六分も色付きし紅葉の、其岸の灌木の林を縁低う縫ひたるさま、得も言はれず候。小生は今、此景色に向つて、この筆を執れるにて候ふが、この筆を執るべくわが一室に戻り來りし十五分以前のことを記して、以てこの長き筆を擱き候はむ。家の裏に路あり、この路は紅葉の二三株美しく染めたる庭よりちよろ／＼と清き水の流るゝ土橋の上を過ぎて、大根の葉青き畑へと通ぜるにて候ふが、ふと見れば、其畑の中央には、唐黍の山ふす／＼と燻りて、その烟は絹のごとく靡き渡るにて候。否、この家の老主人は、尻からげに跣足といふ甲斐々々しき姿にて、頻りに大根を抜きつゝあるにて候。何彼と一語三語物語りして、それとなく首を回らせば、四面の山の紅葉既に美しく、ここに上州境の峰には、さながら錦繡を懸けたる如きを見申候。それにしても何たる平和に候ふぞや、此處には爭鬪もなく、不平もなく、寂としてこの自然の過ぎ行くやうに、人の世も移り行くにて候。意味深くは候はずや。

満洲にての露營、風寒く、露冷かに、月光千里を照して、家郷を思ふの念、湧くがごとくにて候はむ、自愛あらんことを祈り候、不宜。十月十五日。

も熱心なる聽者に有之候。自在鍵には黑き鐵瓶湯氣を吐き、古風の洋燈薄暗く一室を照し居候ふが、平生訥辯なる小生がいかに興に乘りて、南山、得利寺、大石橋の戰爭の物語を致し候ひしことか。思ふに、いかなる辯士もこの上には出でまじく、また、いかに名望すぐれたる有名なる政治家なりこて、此夜小生が得たるやうなる心よりの喝采、心よりの嘆賞を得候ふことはあるまじくこ存候。無邪氣なるは、山中の老爺老婆に御座候。それにしても、意味深きは其時の光景、貴兄等遠征の將士は其頃いかになしてか居給ふらんこ考へ及び候へば、千里隔てし其地のことも目に見るやうに覺えられ候。貴兄もこの書簡によりて日光山中の老爺老婆を偲び給へ。かれ等は心よりこの戰爭に同情致し居ることに候。血汐の流れたる死骸、彈丸の飛び來る庭のことを語り候へば、かれ等は皆目のあたり、見もし聞きもしたるやうに感じ、いづれも感極りて袖に涙を拭ふのに候。ここに橘中佐戰死の狀況を語り候時などの感はいかゞ候ひけむ、一座默して、少時は言葉を發するものも無之候ひき。物語終りし後も、さまぐ\なる質問盡きず、淸人の汚き生活なごも少なからずかれ等の好奇心を惹き申候、かくて、談話の終りしは、夜の十時過ぎにも候ひけむ、山中の夜の、そゞろ寒けく覺え候まゝ、溫泉に入り浴して眠らむこ、內湯の扉を排し候へば、白き湯氣の充ちたる中に、洋燈の光薄く照りて、筧より落つる水の音一種言ふに言はれぬ心地致し、溢るゝばかりなる玲瓏たる浴槽に身を投じながら、種々冥想に耽り申候、この靜けさ、この淋しさ、これをかの砲彈破裂し血汐流るゝ戰の庭に比すれば如何、これを突貫の聲凄じき敵壘前の一刹那

簡を手にしたるならむ。其書簡にわれはかく記しぬ。

拝啓――

海城にて怪我したることは既に前便にて御承知こ存候、其後海路も恙なく、この月の九日に、宇品著、新橋停車場に著きし時は、服の破れ、顔の憔悴したるに、友は皆見違へ申程にて候ひき。半歳の遠征、其苦を追想致し候へば、貴兄がこれより冬營したまふこと思ひ遣られ申候、一昨々日、萬事を排して、此の山中に著。先づ一週日程は靜かに病を養ふつもりに有之候。日光は昔も御存じ、否々、曾つては一度御一緒にその山水を覧巡りし身、湯本のこの宿に滞在致し候ふ事を申上げたる丈にても、小生がいかに日を送り候ふかを直ちに御推察なさるゝならむ。されど、この今の淋しさ、小生の宿せる旅亭は勿論、湯本十幾軒の旅亭を通じて、客こ申しては、小生只一人、實にしみじみこ秋の淋しさを味ひ申す次第に御座候。ここに、面白く感ぜしは、小生が戦地より戻りし身なることを旅亭の老主人に語り申し候ふに、それはそれは、非常に珍しがり候うて、是非是非夜分にてもその物語せよとのことに候。其時は好加減に挨拶致し置候ひしに、夜になり候へば、果して是非戦地のお話伺ひ度しこ申来り候。小生は御存じの通り話し下手ゆゑ、斷らんこは存じ候ひしも、山中の老爺老婆、ここに圍爐裏を圍みての物語、趣味深きを思ひ候うて、直ちにこれに應じ申候。想像し給へ、圍爐裏の周圍には、湯本を盡しての老若男女、ここにこの家の隣家の主人は召集せられて滿洲に有之候こかにて其家の妻君顔なき、故

『九月の始めまで居て、歸つて行つた切り、後は知らねえ。』

われは更に面白しと思ひぬ。

菖蒲ヶ濱沿岸に至れば、紅葉漸く美に、灌木の青きが中にところ〴〵血潮の如き紅を交へたる、そゞろに眼を刮するの思ひありき。楢の林の彼方、水聲そゞろに高く、やがて近づくは龍頭の瀑、紅葉の瀑と名に呼ばれたる程ありて、岩石の黑、溪流の白、靑き樹、紅なる葉と相映じて、玆に限りなきの趣を成せり。されど、山寒くして、遊覽の客至るなく、洋風の茶亭に閑却せられたる卓の上には、大木の根もて造られたる小さき火鉢の灰白し。

淋しき山の秋なりや。

六

戰場が原を過ぎて、湯瀑の音、湯湖の水、榛の古樹の小暗き道を過ぎ盡せば、十數軒の旅亭、淋しき湖水に其影を涵して、夕日殘れる蘆原の此方、白き湯氣の煙の如く靡けるを見ぬ。

湯本は奧の一旅亭、圍爐裏と帳場との間に置かれたる紅なる紅葉一枝先づ目に觸れしが、やがて迎へ出でたるは、兼ねて識れる此家の主人主婦。ようこそとて二階の一室に導かれぬ。

滿洲の野、寒き露營を佗ぶる一將校は、この後、十日にして、日光湯本の山中より發したるわが一書

『建つのか？』

『イヽヤ、もう建つめい。あの老爺、惡漢だアでナア。』

『惡漢とは？』

『博奕ぶい打つて爲方が無えだよ。』

われ曾つて美しき外國婦人を見しことありと語りしに、

『旦那、知つてお出だか、それア、美しいッて無かつた。何でも、横濱から來たんだ相だが獨逸生れだ相た。えらい、騷ぎだツたナア、頓公。』

『さうサ。』

『旦那、あの女の爲めに、若い西洋人同士決闘するの何のと言つて、それア、大騷ぎだツたですア。』

『決闘？』

『え、向うの濱でナ、既のことで遣る處たツた。中禪寺から巡査が來る、それア、隨分話の種さアナア。』

『一體、何うしたんだ？』

『よくは知らねえけども……一人は〇國公使の息子で、一人は大きい會社の番頭とか何とかで……』

『女は何うした。』

には、常に二三の小舟の、たぷ〳〵と漂へるをわれは記憶す。否、いかでか忘れん、これわが友と佇立去るに忍びざりし所、をりから讀みし鷗外漁史のうたかたの記、かの少女が溺れし死骸を男の漕ぎ入れしといふ漁師ハンスルの家に、その風情の似たりとて、われ等はこれにハンスルの家の名を與へたりき。否、友は餘りにこの湖水の美しきに憧れて、一週間ほどその離れの一室を借りんことを乞ひたりき。されど、高き價はわれ等をして其の希望を思ひ留まらしめしが、今來りて、驚くは、其家の影だにあらぬことなり。

否、此家に關しては猶思ひ出さるゝことあり。三四年前、わが他の一友と此ほとりを過ぎし時、嚢にわが借りんとせし一室には、西洋の美しき婦人一人住ひて、明なる髮、綠なる瞳、長き裾には愛らしき小さき犬のまつはるを見しが、湯本に泊りての歸るさ、菖蒲ヶ濱よりの船を使とし、麥酒など載せて、優遊此湖上を渡りしに、其家を宿せる女は、かの國の名高き美しき少女とやらむにて、毎夜其家に集る若き外國人數を知らずと舟子の物語り、轉た事の小說めきたるをたゝへしことのありしが——今は、其家屋の影だに無きを思へ。

『この漁師の家は何うして潰れた?』

われはかく問ひぬ。

『先年の大暴風雨に潰れて了つたんですが、まだ、建たねえだよ。』

中宮祠より菖蒲ヶ濱に至るの道、この間は絶えず湖水に添ひたれど、しかも榛、樺、楢等の灌木深く茂りて、うねくと曲りたる路、容易に盡きず。旅客のつねに寂寞に病むところ。われは却つて、この間は少なからざる記念を有せり。今も、猶、眼に見ゆるが如き心地ぞする。否、其路を曲りたらば、紅葉を滿載したる車見えはせぬかと思ひ迷ふにぞある。そは七年前、弟と共に母に隨して、暮れ行く秋を此の山の紅葉へとあくがれ渡りしことありき。頼山陽か母の輿に侍して吉野に遊びたりけむと同じやうに、われも弟と前後して、車に侍したりしが、母は怡色を滿面に呈して、紅なる枝を車上に挿して行き給ひき。其時、この湖畔の紅葉はいかに美しかりしぞや。暗き木蔭の路も明かに、ありくと見ゆる湖水は美しく夕日に彩られて、天地の物象皆なわれ等が爲めに喜色を呈するもの、如くなりき。されど、一度行きし歡樂は再び來らず、其後三年にして母を喪ひ、今、弟は軍に滿洲に從ひ、われは塵の世の人となりて、世累漸く身に堆からんとするにあらずや。

しかも、依然たる路、依然たる湖水、依然たる紅葉――われは双手に面を掩ひて、以て母の昔を憶ひぬ。

夏のみ來り住むといふ洋人の別墅三四、それをもいつか過ぎ盡せば、路は木の根の凸凹せる間を向うに出でて、再び接す湖光の滿面、湖は茲に西南に千手を開き、北に幽釋坊ヶ淵を括りて、遙かに菖蒲ヶ濱の一邊へと對せるなり。此の一角に一軒の漁家――晴天には二三の網を夕陽に曬して、さゝか波寄る岸の邊

なく指點せらる。紅葉の色は尙早けれど、高き處には既に全く美しく色付きたるありて、をり〳〵日に光りて輝くは、それなり。

晝餐せし旅亭は湖水に臨みて、明かなる緣には籐製の安樂椅子一つ据ゑられたり。一陶の麥酒に微醉したる身をこれに横ふれば、西南面の山色湖光美しく室內に入りて、白き帆の傾斜、小さき波のさゞめき、彼岸の山の影の明かに涵せるまで、一つとしてわが眼に入らざるなし。湖上よりの舟、と見れば、何處より折りてや來し、眞紅に染めたる紅葉一枝載せて、中には廂髮、高島田、丸髷の群れ、二人交れる紳士の顏は赤く醉ひて、をり〳〵高く笑ふ聲、手に取るばかりに明かに聞えぬ。心憎き何人の舟遊びと見る間に、其距離次第に近くなりて、艫を押せる老舟夫の顏も明かに、麥酒手にせし紳士のさまも殘る處なく見ゆるまでになりしが、やがてわが右二町の處より岸に添ひて、長く出でたる棧橋へと其船は着きつ。迎ひに出でし旅亭の主婦手代婢女、丸髷の婦人の手を取るやら、紅葉の枝を散らさぬやうに運ぶやら、其騷ぎ一方ならざりしが、二人の娘の嬉々として笑へる顏にそれとなく見入りし時――

『輿夫が、あまり遲くならぬ中と申しますゆゑ、お支度が出來ましたら。』

と閾にうづくまりたるは、此家の手代。

『よし。』

とわれは立上りぬ。

る詩集を示して、見よ、この新しき詩を……と言ひき。酒はかくて酌まれ、詩はかくて吟ぜられき。あはれ、瀑よ、千載盡くる時を知らざるその瀑よ、爾にしてもし靈あらば、爾はその時のさまを記憶せるならむ。頬紅なる二人の若者が、酒に醉ひて其の詩を高吟せしさまを知れるならむ。否益々興に乘じたる二人は、遂に其詩集を瀑底に投じて去りたるを忘れざるべし。かくて五年の後、爾は遂に詩集ならざるまことの犧牲を得たり。

今、われ、此瀑畔に立つ。感慨無端なる、亦理ならずや。

五

華嚴の瀑に濺ぎたるわが憂愁は、南岸橋に到りて全く拭はれぬ。

あゝ何等明快なる湖上の風光ぞや。湖畔ホテルの岸には輕快なる白色の端艇三四艘繋がれて、その一艘には、金髮明眸の人二三、小兒と共に戯れてあり。林の疎なる間を透して、暮ゆく日の光るホテルの硝子窓、その向うには、翠微を遶らしたる湖水碧なる色を湛へて、合渦より歌が濱に至る間、一道の日の影、的皪として金色の波を湧かせ、それより南に、搖曳せる翠嵐の影、沿岸の樓臺皆畫圖の中にあるを見る。

男體の偉大なる巨頭は今全く晴れて、赤く禿きたる痕も明かに、先つ年の山嘯に崩れたるさまもそれと

著名なるもの、惜むらくは時尙早く、未だ繡錦の美を專らにすること能はざるを。

四

華嚴の瀑聲を聞きて、われは胸を動かさゞる能はざりき。われ、年若うて、この華嚴の瀑に憧れしこと幾度、其瀑底に下りて、七色燦爛、其の偉大なる姿を仰ぎし時の如きは、實にこの人の世のあらゆる總てを忘れて、身を以てその深潭に投ぜんとするの念を抑ふるに難かりき。藤村操、彼も亦かくの如くしてその犧牲となりたるや否やを知らず。されど其瀑畔にとゞめたる筆の痕は、解すべからざる人生に、一種の謎を與へたるは爭ふべからざる事實なるべし。瀑の畔、これを此方の岸より望むに、その大瀑の將に瀉下せんとする一角に當りて、低き樹木を以て蔽はれたる巨岩を認むるならん。其巨岩、中央缺けて一平地を作り、中に二三人を容るゝに足る。これ、藤村操が身を投ぜしところにして、われも亦七八年前友と共に其處にありき。友もわれも傷心斷魂の青年、胸には限りなきの苦悶を抱き、袖には未だ世に公にせざる一卷の詩集を有したりき。語りしは、何。泣きしは、何。思ひしは、何。遠く過ぎたる今にして、これを思へば、實に世を隔てたるの感に堪へじ。

其時にして、われに友なく、われに詩なくば、われの身や卽ち如何。思ふ、其時なりしよ、友は肩に懸けたる瓢の酒をわれに與へて、飮め、君、この新しき酒を……と言ひき。われは友に裝幀未だ成らざ

とさも感嘆したものゝ如く輿夫は言ひぬ。

深澤の溪流は今吾前にぞ開かれたる。路は大谷の緣を縫ひて、巨岩の倒懸せる間へと進み行けば、巨人の嘯くが如き一道の溪流は岸に激し、岩に當りて、名狀すべからざる壯觀を呈し來る。四面の山は恰も此處に窮りたるものゝ如く、其の突兀、其の嶮峻、殆ど人をして肌に粟するを覺えしむ。絶崖一瀑を懸く、旭瀑といふ、旭日の騰上する、其の餘光これを射て七色燦爛たるに因つて名を得たりと。新道の爲めに、其半を截斷し去られたる、惜むべし。

わが籃輿はこの奇極り怪極れる崖邊の一路を縫ひて、次第に深澤の茶屋へと近づき行きぬ。路、窮するが如くにして忽然開け、その一角に至れば、般若方等兩瀑の溪流は急板を流るゝが如き勢を以て落下し來る。華嚴の末流は其下數間の處に於て、これと會し、怒號忿涌、白雪を噴き、珠玉を飛ばし、其奇觀譬ふるにものなし。

『相變らず、好いね。』

と頭を出せしに、

『旦那、危いでがすよ。』

と輿夫は躊躇としつ。

深澤より劍ヶ峰に至る。此間の風景、蓋し日光諸山水の白眉にして、ここに方等般若の紅葉は天下に

『それは、酷い。』

『死屍などはだらに居るだんべいナ。』

『それア、居るとも、南山でも、得利寺でも、敵の死屍が路にごろ〳〵轉つて居る。頭を半分失した奴だの、胴腹を打貫れて、腸が出て居る奴だの、それア、實に、目が當てられない。』

『味方の死屍もあるべいナ。』

『それア、あるとも、……死骸や怪我人を運ぶ人でも、先づ、怪我人から先に運ぶから、死骸は戰爭が濟んで了はんけりや、片附けない。それに、一番酷くつて、目も當てられなかつたのは、遼陽の首山といふ所の戰サ。敵の居る堡壘を無理遣りに取つたは好いが、敵がすぐ盛り返して、味方は酷ひ目に逢つた。かういふ時などは、死屍でも、怪我人でも運ぶ事が出來ない。だからまだ死に切れないものも敵に殺されて了ふし、死屍は勝手な眞似をされて了ふ。』

『首を切落したり、何かするつて言ふが本當だんべいか。』

『そんな事も隨分有るかも知らんサ、私なども其日首山が取れたッて言ふので、行つて見ると、堡壘の中は、丸で敵と味方との死骸、折重つて死んで居るぢやないか。いや、かう言ふのがあつた。味方と敵と立つたまゝ、刺違へて死んで居るのがあつた。』

『へえ……』

『イヤ、負傷ぢやない、怪我だナ！』

されど輿夫は負傷と信じて、わが言葉を耳にも入れず、

『遼陽？　ハア、辛かつたでせうナ、實に、此方に居りましても、大變な騒ぎですな、日光の町でも、今までに、出たものが五人戰死したですが、此間も、その葬禮が一つありました。郡長さんも、町長さんも、皆なその葬禮に行つて、花などもそれは、豪氣なものでした。ナア、頓公。』と棒鼻に聲を懸けて、

『何うせ、人間は、一度は死ぬんだ。……あんな葬禮を爲て貰へりや、戰地に行つて、死んでも好いナア。』

『左樣とも……。』

『貴樣の甥子は何うだ、達者か。』

『達者なんだんべい、此前までは怪我も爲ねいツて言つて居た。けども、遼陽がまた解らねいだから、お袋、えら心配して居たツけ。戰爭勝つは好いが、號外が出る度に、伜、死にやしねえかと思つて、手紙の來る迄は、夜も碌々寢られねえ、言つて居たゞ。』

『それア、左樣だんべい。』

更に聲を高くして、

『旦那、戰爭は隨分豪いもんだんべいナア。』

日光山志中の挿畫に見たるまゝなるぞ風情ある。わが識れる若き畫家は、この旅亭の靜かなるを愛でて、久しく此處に留りたりきと曾つて語りき。曰く、此家の風情ある、居る久しくて愈々離るべからざるものあり。境既に山と里との間にありて、人事の交通一種の特色を具へたるに、深流は深澤の奇に近く、屋後の山を越ゆれば、丹青山の勝忽ちにして至るべく、朝雲暮雨の奇、また端倪すべからざるものあり。われ、畫を思ふ、一を期せず、しかも旬日にしてよく三葉を作るを得たりと。われも此馬返の地の遂に忘るべからざるを思ふの一人なり。

三

『旦那、足を何うしたんです？』

輿夫のかく問へるは、深澤の深流に入らんとする時なりき。

『怪我したのサ。』

『何う爲すつたんです？』

『實は戰地に行つてゝナ。』

輿夫は驚きぬ。

『はゝア、それぢや、負傷ですか、何處の戰爭で……』

茶亭の主人は樵夫らしき朴訥なる言葉、主婦は誰か聞きても野州訛と知らる〻三十二三の單純なる丸顏、煤けたる自在鍵には黑猫のごとき鐵瓶白く湯氣を吐きて、圍爐裏に燃ゆる大なる木の根、傍には主人の影作と覺しき山男二人三人頻りに何事をか語り合ひぬ、屋後には、大谷川の水聲崩る〻がごとく、林を渡る秋の風そゞろに身に沁みて、長き筧の水ちよろちよろと庭の池に落ちたり。あはれ、取集めたる一場の秋光、この古き宿に、若き水彩畫家などの宿したらば……と思ふも詩趣なからずや。

細尾村の盡頭、路の足尾に岐る〻邊、四五年前の洪水に、林も村も丘も皆一時に流れ去りて、只、廣濶たる砂原を見るのみ。大谷の流れは近く路傍に咆哮して、其勢の盛なる、四面の山岳皆ために搖ぐかと疑はる。この川原砂原、讒には紅葉のすぐれたる地にして、旅客の憩ふ二三の茶亭、赤き襷を十文字に綾取りたる可愛ゆき田舍娘もありたるものを。

馬返に至りて再び憩ふ。

蕭然たる三四軒の茅屋、われは蔦屋の奧の一間——池には、紅葉の影、小き緋鯉の群れて遊ぶさま面白かりき——に憩ふ毎に、此馬返の風情に富みたるを思はざることなし、世界に名高き遊覽地、朝に夕に、異國人の、或は馬、或は徒歩、此所までたどり來りて、ほつと一呼吸吐かんとするこの山と里との境の面白さよ、欅の大樹、其傍に繪具もて描きたる旅店の廣告札、車の二三臺は常に其の附近に並びて、屋後は仰ぐばかりの高き山。ここに、この家の力餅は、味ひ甚だ美ならざれども、その招牌の古びたる、

ふべき。またこの山水裡にありて、誰かかの悲慘たる戰爭の罪惡なることを思ひ知るべき。

平和よ、戰爭よ。われは今この問題を頭腦に繰返さゞるべし。少時は世を離れて、山を仰ぎ水に俯せむ。

二

細尾村の一茶亭、輿夫は先づ我を其庭へと下しぬ。赤毛布を敷きたる臺には、娘と見ゆる十七八歳の美しき廂髮、につこと笑ひたる眼には無限の愛嬌滴りて、紅なる頰の匂ひ、綠なる眉の黛、世にすぐれたる幸多き身なることを先づ胸に浮びぬ。母なる刀自は四十五六、五十前後の薄き外套纏ひたるは、其父なるべし。三箇の籃輿、六人の輿夫。中に緞子の信玄袋を結び、色鮮かなる紅葉を挿みたるは、其の美しき娘の乘れるものなるべし。茶を酌みて、相對す女峰の晴色、或は灰色に或は茶褐色にさながら鋸の齒のごとくなる尖端は晴れたる秋の碧なる空に明かに印して、七瀧の谷と覺しきあたりより、冉々として揚りては消え、揚りては消える羊毛のごとき白雲一簇。曾て訪ひし夏の霧ふかき日、秋の風烈しき日、春は八汐の色に憧れて、若き僧と瓢の酒の盡くるを惜みしことありしがと想ひ來れば、空想の翼は益々張りて、その溪より左唐澤の宿に通ずる嶮峻なる山路の一ところ、男體の偉大なる姿の左肩に當りて、的皪たる夕日の鏡、それこそは中禪寺湖と、指點して快を呼びし時のことなど、それとなく胸に浮びぬ。

とは。

されど笑ふを休めよ、われは足を傷けるなり。一歩も跛足を引くことなくしては歩む能はざるなり。否、われは生命をさへ滿洲の地に失はんとせし身、跛足位のことにて、兎に角なつかしき祖國の地を踏むを得しは、實に勿怪の幸と謂はざるべからず。それにしても思ひ出さるゝは、海城の兵站病院、熱烈しく舌爛きて、てつきり腸窒扶斯と醫者も思ひわれも思ひし時、其の時、其刹那、この身は猶このなつかしの日光の山水を忘れざりき。あはれ日光の山水、重き責務をも果して、恙なく歸朝したらんには——恐らく其時は紅葉の候ならむ——妻を拉し、子を拉し、親しき友の限りを集めて、倶に其の秀麗なる山水に放浪せんと思ひしこともあはれ今は夢になりぬ、と。然るに、かく恙なくて、夢になりなんとせしことの夢にならざりし嬉しさよ。

紅葉は未だ早けれど、中禪寺以北は既にその絢爛たる色を著けしやも知れずと僧は語りぬ。湯本の鄙かなる旅亭、琉璃玉のごとくなる溫泉に浴して、靜養すること一週間ならんには、滿山皆紅、滿溪皆な紅、秋日の美は思ふにその限りを盡して、以て半年遠征の苦を慰むるならむ。

搖き行き搖き行く籃輿、含滿か淵、大日の堂、鳴蟲の山も背後に遠く、前に展げられたるは細尾の村落。われは舊知己の山水に目を寓しつゝ、いかに深く半年遠征の苦に思ひ到りしぞや。砲煙の影、突貫の聲、屍は積みて山を爲し、血は流れて川を爲せるの間、人誰かこの山水あり、この平和あることを思

晃山再々記

一

籃輿來れりと雛僧は報じぬ。

われは急ぎ起ちて、跛足を引きながら、室を出でつ。見れば一箇の籃輿、色の稍褪めたる幕の朝風に飄れる下に、赤き長き座蒲團は客を待ち顔に清められたり。われは脚を縮め、頂を縮め、胸を縮め、辛うじて其中へと乘りぬ。

憐むべし、當年の健脚者、放吟者、跋渉者たる我は、今この籃輿によりて、日光南谷の一寺院よりかの湯本の山中へと赴かんとせるなりき。あはれこの日光の山、われは探り盡し跋渉し盡して、いかなる山涯水隈も知らざるなく、到らざるなく、朝に女峰の白雲を踏み、夕に男體の深谷に嘯き、樵夫と共に飲み、麋鹿と共に遊び、山靈また轉たわれに神なるを覺えし身なるを、いかに運命は解すべからずとはいへ、曾つて罵りし都人士の日光見物の眞似して、籃輿に擔はれながら、この舊知の山を谷り行かん

が一行田の市街稍々近き頃に及びては、既に一帶の暗黑色となりて、夕照の光また漸く陸離たる光彩を失ひ、川俣街道を過ぐる頃、夜の幕は全くその大景の上を覆ひぬ。

暗碧色の幕を曳きて、空氣の清澄なる、殆ご名狀すべき言葉を知らず。

淺間の美はいかに。

あゝ何等の幸福ぞ。わがその渴仰は猶行くこと一里餘にして遂に遂に充されたるなり。如何にしてと問ふことを須ひじ、わがたごれる路は、竹藪柴門、里川の流の間よりゆくりなく左に折れて、斜に相對すその大景。

かの純白なる雪の衣を著けたる淺間が嶽、今は夕照の燃ゆるがごとき光に照されて、透徹せる薄桃色の反射を帶ぶ。その麓に靡ける諸山は、全く濃紫の色に包まれつゝ、靜かに靜かに暮れて行く。

何等の平和、何等の光明。

われは覺えず快を呼びぬ。人間の情大なりこ雖も、いかでかこの自然のすぐれたる平和に若かん。いかでかこの複雜せる色彩の美妙なるに若かん。見よ、その活火山、千載の下猶その噴烟こ鳴動こをこゞめざる戰鬪力を具へて、しかもかく靜かに、かく穩かに、美しき夕照の光りに浴しつゝ、一刻每に夜の暗き世界の中に沒し去らんこしつゝあるにあらずや。

車は再び右折して、眼前のパノラマは忽ち夢の如く消えぬ。

それより猶幾度、車はそれに對ひ、またそれに背きつゝ、關東平野の中を走りたりけん。淺間の山の色は薄桃色より次第に深碧に變じ、更に濃紫の色を呈して、刻一刻每に暗澹たる鼠色を帶ぶるに至りし

六

其日の午後五時、われは既に武州の平野にありて、俥を利根河畔の一邑に驅りつゝあり。汽車の熊谷驛に著きしは四時二十六分、短き冬の日は既に長き影を廣濶たる平野に曳きて、今一時間ならずして、夜の影は全く天地を蔽ふべく思はれたるに、われは猶前程に五里の道路を控へたる身の、一刻も早くと路を急ぎ、旅亭に晩餐をすら求めずして、直ちに車を走らせつ。

一里、二里、日影は既に薄く、夕暮の風はそゞろに寒く襟を掠めて、車上にすくめるわが影は殆ど路に氷るにかゝり、脚の爪先の冷かさ寒さ、かくして五里の路を闇夜に走らねばならぬと思へば、愈々心細さは加はりて、何故に一夜を旅亭に過さざりしかを自ら悔いぬ。

行く時相對したる赤城、榛名、妙義、淺間、今は皆それを背後に帶びつゝ、東に向ひて、われと寒く淋しき平野の中を辿れるなり。あゝ其山、その絶大なる山地、今し夕照の光を帶びて、いかに光彩を呈しつゝあるならん。殆ど名狀すべからざる美しきパノラマを現じつゝあるならん。

されどそれに背きて走れるわが車！

幾度か引返さんとして、しかも遂に其意を得ず。猶幾町をか走りけむ。それとなく見れば南に靡ける秩父山地は美しき夕日の餘光を帶びて、武甲、兩神の兩山は純紫の色を呈し、空はやゝ赤味を帶びたる

遠く連り、其北に雪を戴ける田圃森林、遙かに斜なる傾斜を爲して廣く上田の市街に接し、黑きは松林、灰色なせるは村落、かの雪白き烏帽子ヶ嶽、其間を越えてかの山の湯の温泉に達するなりと友は指していふ。

更に友は其の下とも覺しきあたりを指して、

『かの水彩畫家の住めるは、向うに松林の見えて、煙の斜に颺れるところなり。』

と告ぐ。

西北を見たる眼は次第に南に轉じて、遂に千曲川の大谷に及びぬ。友は更にその谷に對して起れる絶壁を指點し、『君はわが物語の中に描きたる御牧ヶ原のことを記憶し居給ふならん、そは、その絶壁の上にて、廣さ數里に渉りたり』と。

ゆくりなくわが眼に留りしは、西方遙に群山を隔てゝ、一嶺高く白を戴き、美しく朝日に輝けるの景。指點して問へば、

『何山かはよくは知らず、されど飛境境の高嶺なることは明なり。淺間の麓を少しだに登らんには、飛驒、信濃の山は悉く眼中に映じ來るべければ……』

飛驒の山中、其處には雪積る已に幾尺といふ感、簇々としてわが胸に上り來りぬ。雪、雪、雪の天國!

維新前までは一二萬石の大名の城邑として、その舊城址は町の南方、千曲川に下らんとするところにあり、半ば壞れたる大手の門を右に見て、人家稀疎なる間を少時過ぎ、鐵道線路の踏切を向うに越ゆれは、本丸の大門なりし古き門には懷古園なる大なる扁額を懸けて、今は衆庶偕に樂しむの公園となりたるよし。門を入れば、風情面白き松の聳え、壞れし石壘には蔦かづらの枯れたるが蔓りてそゞろ昔のことを忍ばるゝに、友が歌ひし詩それとなく口に上りぬ。

狹き谷に沿ひたる路は、再び取廻らされたる石壘を穿ちて、昔は御殿の趾なりしといふ茶の畦、未だ今日まで殘れる書庫の傍などを過ぐれば、積雪踏むごとに鼓々と聲を爲して、松影空濛をめぐれるの邊、更に深く一廓をつくる。友は指していふ、これ即ち往昔の本丸、と。

本丸の裡、一神社あり。石徑相接して、傍に懷古園の碑を立てたり。合歡の樹の歲月を閱したるもの多く、夏はその花の美、蒼古たる廢城址と相掩映して、人をして轉た憑弔の情に堪へざらしむとかや。

一樓の傍を過ぎて、猶行くこと數步、遂に天守臺の址に登る。臺址甚だ高からずと雖も、南、西、北の三面遠く開けて、登臨の美、蓋しこの附近に冠たるものなるべし。ここに、こゝより見たる淺間の大麓、それに伴ひて開けたる千曲の谷、あゝ何ぞ雄大にして且つ荒涼たるや。

見よ。われ等の前に松影蟠れる深き小谷あり。それより東に延いて、小諸の市街は越後街道に沿ひて

だわが知らざる處なりき。友は旅客としてこの小諸町に住めること、其の民情の質朴なる中に何處となく他鄕の人を容れざる處ありて、絕えず旅人扱にせられたること、友なく、慰藉なく、獨り北佐久の高原に立ちて、往古の哲人の寂寥なる一生を追想したること、詩も捨て、物語に移りたる思想の變遷などを語り出でて、人の生のさびしく哀しきものなることを嘆きぬ。

されど今は既に久しき歲月を閱して、町の民に知れるもの多く、其の子弟にして友の敎鞭を受くる者尠なからぬに、次第に土地の風俗に馴れつゝ、最早別離を惜しむもの、出で來りたりとぞ。

かくてその夜われ等はいかに長く語り合ひたりけむ。幼き兒等は既に眠りて久しく、火鉢の裡には紙卷煙草の白き山を築き、時計は既に十時を過ぎたり。ふと家の附近に起る絃歌の二三聲、怪しみて友に糺せば、この家の周圍、町の妓の家を構ふるもの多く、待合、料理店などもこの附近にあるなりといふ。

面白しと思ひて眠りぬ。

翌朝の十時四十分の汽車には早別離を告げんとわが言ひしに、友はさらばせめてわが住める町の外形なりと見給へ、且、小諸の古城址を探る暇は十分なればと、其儘われを誘ひて家を出づ。

正月の六日とて、田舍なれど門松注連飾せし家彼方此方に見え、高原に位せる街は早くも朝日の光りを受けて、寒き大道の氷れる路にも、既に其餘光の至れるを見き。所謂越後街道は一直線に街の中央を貫きて、外形は甚だ質素に、しかも豐かなる朝炊の煙――さびしけれど風情多き山間の都會なりや。

山寒く、やがては雪に埋めらるゝを以て、番人一人を殘したるのみにして、旅亭の人など皆里に下るを常とせり。かのモウパッサンが描きたるアルプ山中の温泉は必ずそれに類したるものに相違なからん。行きて見んとは思はずやといふ。

われは一宿して即ち去らんと思へる旨を告げ、そはまたこの次回に來りたる時に……と辭しつ。

かくしてわれ等の物語はゆくりなく山嶽小說の上に落ち行きしぞ面白き。而してその結果として、諾威の詩人ビヨルンソンの事は直に話頭に上り來りぬ。わが國は山國、峻峰高嶺到る處に連亘して、其裡に住せる珍らしき民亦尠なからず。一年を殆ど全く山中に暮せる炭燒小屋の夫婦、秋の末毎に網を携へて數日を山中の鳥小屋に過す鳥屋、ここに熊、猪、鹿等を涉獵する獵師の生活は、いかにわが大和民族の特色を發揮したるものなるや知るべからず。然るに未だその一端をだに描き出しゝ人の無きは如何。見よ、かのビヨルンソンが山嶽小說を、其の文は卒直、其情は透徹、其寄思は奇峭、讀む者をして、北歐山嶽の特色に打たれしめざることなきにあらずや。

友は其の例としてさまざまの事を語りぬ。この町より西北、淺間群山の裡、珍らしき特色を有したる物語少なからず。こゝに、山番の生活は最も深く興を惹きて、早晩一作品たるの時あるべしといひぬ。

友は次に火山の麓に眠れる小都會のことに就きて多く語りぬ。友はこの地に住する既に五年、其綿密なる觀察とその眞實たる情操とは、名殘なく其の作品の上に顯はれたれど、しかも其の詳しき敍述は未

むらしき黑の冠木門、土も氷り、石も氷りて、少しく注意せざれば滑りて後に倒るゝばかりなる大道は、それより一步ごとに高くなりて、其の稍盡きたる處に、淺間の連山より流れ落つる一道の石多き小流。其處には小橋一つ。

橋を渡らずに流れに沿へと兼ねて敎へられたるに、其儘右に折れて少時がほど行けば、友の家は早其處なり。

五

其夜の興は如何なりし。

友はわが不意の訪問を喜ぶこと一方ならず。とてもかゝる山里に都の人の訪るゝことなどは夢にも知らず、今宵もさびしく唯眠るのみと思ひしに、よくこそ來ましつれと一方ならぬ欵待、茶より酒に移れば、談論風發、思潮談も出れば氣焰も出でて、二人の愛らしき女兒も唯默してわれ等の語り合ふを見るばかりなりしよ。

友はいふ、この山里、見るべきものとては無けれど、山はまた多少の詩趣を具へたる處なきにあらず。これより、北、籠ケ塔山と烏帽子嶽との間を越えて三里、鹿澤といふ處に山の湯といふ溫泉あり。夏はその効能の著しきを以て、村の人民の味噌、米などを荷ひて行きて浴するもの多けれど、十月以後は、

風景の眼前に展げられたるを見たり。先づ、わが前に小さき谷、之を隔てゝ黄いろき萱、薄の平地、松の綠は暗澹として、枯れ渡れる楢、山毛欅の林は淋しく、その少し上よりは雪既に美しく日に照りて、仰げば淺間の大嶺は少しく斜に、東北に靡ける烟は纔かにその一端を窺ひ得るのみ。之に引かへて、西北の連山は一目瞭然、光線の明耀、殆ど目を眩せしむべく、その雪山の驕奢、あゝそもこれを何に譬へん。

小諸町は早やこれより二里、柏木村より少しく西北を指したるところにあり。地は未だ淺間の平野に屬すと雖、田畝また一の赤色したる燒石及び灰を留めず。松、楢の林も亦頗る繁茂せるを見る。西南方、千曲川の大谷を望める邊は、村家隣續として相連り、炊煙の甚だ高く騰れるを認む。

小諸の停車場は世の常のものと少しも異らず。大なる時計、小さな待合、驛夫の聲を擧げつゝ列車の戸を開き行くなど、更に他の驛と異るところなし。われは暖かき列車の室內より出でゝ、寒き淺間の空氣に觸れし時、思はず烈しき戰慄を感じぬ。

切符を驛夫に渡して、出づる埒外の一歩二歩、われは忽ちにして友の常に描ける山麓の小都會のわが身に迫るを覺えたり。先づ眼に入るは、二三里を隔てたる田舍町に通ふらしき古風なる馬車一輛、凍れる路の兩側には、停車場の置かれしより俄に開けたるらしき物賣店――牛肉店、名物蕎麥、丁[illegible]など、招牌は到る處に連りて鮮鮭、などの漬物を高く店頭に積み重ねたる乾魚屋、メリンスの端片を店頭に垂下げたる呉服屋、猶進めば一ところ青き葉の畑の半ば雪に埋められたるがありて、[illegible]にても住

更に奇なるは、南を劃れる荒船の連山、其形嵯峨として、恰も鋸の齒を立てたるがごとく、斜に千六百米餘の立科山の高嶺に接し、和田峠の積雪は遠く明かに眼中に映じ來る。あゝこの大觀をいかにか記せむ。

汽車、輕井澤の停車場にとゞまること十餘分、再び轟々として西を指せば、落葉松を以て緣取られたる谷、枯草亂篠を以て充されたる丘陵、雪は樹蔭、山陰に白を殘して、泥濘半ば解けたる一道の大路、深く陷りたる轍の跡は長く梢林の彼方に通じて、先づ見ゆる沓掛の荒驛。

何ぞその驛の荒涼たるや、何ぞその白堊の點々として寒げなるや、風は折から淺間の雪を渡り來りて、輕羅目にかゞやく數千片、眞に是れ、金粉銀粉の粧點し來りたるものに髣髴たり。

追分町の荒涼たる人家を榕、落葉松などの林の間に望みつゝ、丘陵と平原と相交れる間を猶西に走ること數里、御代田停車場に至れば、淺間の大麓は愈々西に開けて、今まで見えざりし三ツ尾根山、箍の塔山、烏帽子山、湯丸山などの峻嶺續々として相連亙し、其の麓は斜に千曲川の大谷に向うて下り、或る處には暗碧の色をなせる松林をあしらひ、ある所には芝、萱の黃色き色を呈し、一度は崩れたるがごとく低く窪み、一度は隆起せるごとく高まりて遂に絕大なる大谷へと靡き下る。しかして、わが汽車は、實にこの一度隆起せる丘陵の上を西北にと指させるなり。

一度入りし停車場を逆戻りして、再び本線を西に進まんとするところ、われは殊に美しくすぐれたる

餘脈とも覺しき奇峰一二、其の絶頂には未だ雪を著けず、深碧なる色は斜に、荒船火山の白雪と相對せり。

隧道の數二十有六、あゝ何ぞその暗黑なるや。車燈の影朧げに人を照して、其顏、其姿、恰も陰府にあるがごとし。あゝこれ雪の天國に通ずる洞門ならずや。

一度洞門を出づれば、山かゞやき、野かゞやき、家かゞやき、人かゞやき、果してこれ雪の天國！

四

誰か快哉を呼ばざる者ぞ、見よ、其の四面の雪のいかに美しく天日に閃き渡れるかを。輕井澤の野の廣漠たるは人皆これを知る。、その樹林の配置、燒石の點地、四面の山の開けたる全く泰西の風景に類して、外國人の好みて暑を此地に避くるも、亦知らざるものは少なかるべし。されどこの雪の野、雪の平原を知れりや。

淺間の大嶺は既に眼前に近く、其の雪の閃爍は、殆んど人目を傷はんとするばかり、煙は前嶺の左肩を掠めて、低く小淺間の絶頂を過ぎ、條々として其の後背六里の原に靡き行けり。地上には雪處々に斑を爲して、悴れる如き樹、山毛欅の排列、落葉松の葉は殘りなく凋落して、薄、刈萱、篠の半は雪に埋れながら、蕭々たる山風に鳴れる、まことに冬の淋しさと寒さとをあらはして餘りあり。

友の田園生活のさまもまたゆくりなくわが眼に見えぬ。去る年の暮秋、裏の柿の木こ桑畑の葉のしげみの中に立ちて、一人さびしげに立てるさまを撮せる一葉の寫眞、そをわれに寄せたるこごありしが、其裏庭には雪深く積りたらん、火山の麓に眠れる小都會も全く白くなり果てしならん。その淋しき山中に、二人の愛兒こ共に暖く爐を圍める團欒のさまは羨むべきかな。

われ等都會に住む果して何の要ありや。驕奢こ嫉妬こ陷穽この間に世を送りて、果てしなき無意味の戰鬪の中に促々こ徒らに過ぎ行く月日の可惜しさよ。靜かに思ひ、靜かに感じ、靜かに歌ふはわれ等はかなきもの丶慰藉にあらずや。

一聲の汽笛長く四邊に響き渡れるに驚きて、空想より覺れば、汽車は既に阿嬬波夜の上毛の平野を過ぎ盡して、その碓氷嶺の翠微の裡に入らんこはせるなり。四面の山嶺、既に奇峭、碓氷川の水は深く峽谷を穿ちて、其聲佩環を鳴らすが如く、山巒に殘れる一霎の雪、既にその美しき天國の近づけるを告ぐるに似たり。

坂本町の炊煙は微かに、汽車は紆回盤旋して、遂にその暗黑たる隧道の中に入る。

隧道を過ぐるこご二三、地上既に雪を著くるこご多く、隧道こ隧道この間、既に尺餘に及べるを見る。淋しきは熊の平こ稱する停車場なり。峽谷既に深く重りて、水聲は遠く耳底に沒し、雪を載せたる荒涼たる一路の纔かに絕壁の間を縫ひて、見えまた隱れつ丶、遠く彼方に通ぜるを辨じ得るのみ。妙義の

ここにその雄大なる活火山噴煙の光景はいかにわが心を動かしゝぞや。淺間山の煙、こはわが稚き頃より上毛の平野にありて望みしところ、其煙の西に靡きたるに由りて雨を豫知し、東に折れたるに由りて風を豫想せしもあはれ幾回、されど今日のごとき美しく明かなる噴煙を望みたることは曾つてありしや。想像せよ、其煙りは白きこと羊毛の如く、雪の日にかゞやける大嶺の絶巓より、渦を卷きつゝ北に北にと靡きわたれるなり。

三

この大景に對して、われはこれより訪ふべき友のことを思へり。友の住めるは、其の淺間の大麓の南に靡きたる處にして、地は北佐久の一部、火山の麓に眠れる小都會、いつまでも昔の俊樸と私語との小諸町とは、友もその作れる物語の中に記せり。あはれ友の詩に唄はれたるその古城址はいかに、寂寞比ふべきもののなき千曲川の谷はいかに、其質朴にして詩趣に富める住民の光景はいかに、ここに友の夕毎に出でて雲の美を研究せしといふ高原はいかなる趣を備へたるや。

詩より物語に轉せし友の思想は如何。靜かなる夕の逍遥より烈しき人の世の活闘に入りし情緒は如何。その活寫せりといふ線路番人、村役場の書記、不幸なる少女は如何。外國より鸚鵡を携へ來りし水彩畫家は如何。

否、否、否――

冬の日の美しさをわれは實に此旅に於て知りぬ。見よ、誰か冬の神を色彩なく光榮なしといふ、見よ、誰か冬の日の光りを薄く寒く淋しといふ。わが前にいかにすぐれたる大景の展開せられたるぞ。

わが走り行く汽車、右には碓氷川の谷を控へて、次第に登り行く一帶の平原。南には、秩父甘樂の諸峰蜿蜒として相連り、妙義の奇峭は近く鬚眉を壓して迫り、北には、榛名の餘脈、上信兩州の境に跨れる角落火山――これ等の諸山、最も低きは黄に、高きに從つて漸く灰色茶褐色を帶び、妙義、角落、秩の絶巓は、深き暗碧の色を呈しつゝも、しかも關東の平野には未だ一點の白を着けず、荒涼寂寞、林に鳴る風は寒く、石に激する溪聲は高く、日影も亦甚だ薄く力なきに反し、一度首を擧げて信州の地を望めば、見よ、其處には淺間の大嶺!

妙義、角落兩山の、結節點なる碓氷峠の暗碧、上高く、滿身玲瓏たる白雪の衣を着けて、斜に日に對したる其の美、其の秀、其の麗! 殊に空は一點の雲翳なく晴れ渡りて、その深碧の純白と相映對せる表象の美は、到底この人の世のものとは思はれぬばかり、雪の天國の語はそれとなくわが感喚せる心頭に上りぬ。

雪の天國! 何ぞその言葉の玲瓏たるや。われはその雪の天國のいかに美しきかを想像して殆ど眼はその淺間の大嶺より移さゞりき。

に頭上を行く村歌一曲、その聲の玲瓏として恰も玉を轉ばすがごとくなるに、思はず頭を擧げて其聲の來るところを見れば、溪を隔てたるの路、絶壁に添ひて、一人の村嬢の叱々と馬を趁ひつゝ下れるを見き。わが山中に迷ひたる身はいかにこの村嬢の姿に逢ひしを喜びたりけん。溪を隔てゝ、路を問ふに、溪聲徒らに高くして其聲容易に通ぜず。止むなく迂回して溪間の岸に達し、漸く路を尋ね得て、以て僅かに萬山の中に陷るを免れたりき。今、既に閲す幾星霜、山容依然として水聲また舊の如し。變れるは唯人のみ、眞に唯人のみ。

顧つて榛名山を望むに、榛名富士、掃部嶽、烏帽子嶽、宛として皆指點すべく、湖水の寒く氷れるさまもまた眼前にあり。

二

烏川の潺湲たる流を渡り、碓氷川の清溪に沿うて、對岸の丘陵の上、安中町の白堊の點々たるを見るに至りて、わが自然に渇する心は愈々募りぬ。

われ、此間を過ぐる既に幾回、春に、夏に、秋に、その一帶の風景はわが眼に熟すること久し。されど未だ曾つて此日ばかりの大景に接したること無きは如何。これ蓋し、わが都門風塵の裡にありて、久しく山水の美に接したることなきに由るか。

哉を叫ばざるべき。

大麓遠く東西に曳く赤城の群山、其の麓には前橋市の瓦甍粉壁、そを抱きて溶々として東を指す利根の大河、更に奇峭を極めたるは、其の背後に崛起して、白雪燦として旭日にかゞやき、その光彩殆ど人目を眩せんとする大嶺小嶺、指してこれを傍人に問へば、曰く、右なるは日光白根、左なるは越後境の連峰。

是に於てわれは雪を思ふの情に堪へざるものあり。都門未だ雪無し、關東平野未だ一點の白をとゞめず、されど北方の雪嶺は既に凛乎として、われ等未だ雪を見ざるの平野に臨みつゝあり。ここに、利根の一水、その雪深き萬山の中より出でて、遠く世間に落つるを思へ。しかして其の源は實に萬山の奥又奥なる文珠岩の胸頭より滴り落つるものなるを思へ。其雪、其源、其文珠岩。

空想はわれを驅つて、遠く其の大河の源を思はしめし間に、汽車は轟々として猶北を指し、遂に高崎の停車場に入る。

停車場より見れば、赤城群山は既に東に遠く、正面相對して、更に榛名火山の屹立せるを認む。榛名はわが曾遊の地、かの山頂の湖水の縁を廻りて、相馬嶽の南背を掠め、路なき路を溪谷の間に求め、或は絶壁數仞の險を下り、或は深樹窈藹の暗を穿ち、一日を費して辛うじて箕輪の寒村に下りたることありき。忘られぬは、名も無き一溪流の畔、蝙蝠傘を腰に敷きて、炎天の渴を傍の清水に醫せし時、遙か

雪の信濃

一

信越線の汽車に乘じて、關東の平野を走ること數里、廣濶渺茫、菜畦桑畝の徧野に見るものなき單調なる車窓に、先づ眼を刷するは富士の晴色なるべし。まことに美しきは東海の白扇、天冠皓く雪にかゞやき、旭日またこれが爲めに五彩燦爛、群山皆來り朝し、大臣小臣首を俛れて敢て仰ぐものなき、何ぞ絶世英雄の貴ある帝王の姿に髣髴たるや。猶進むこと數里、秩父山塊の翠色は漸く近く、武甲兩神の二嶺の瘤のごとく其間に峙立したる、また一奇觀ならずとせず。されど、甘樂の淸流を渡りて、老骨嵯峨たる妙義群山の翠微を見るに至らずんば、旅客の渇は全く醫せらるゝことあらざるべし。

北に赤城群山、南に秩父山塊、この一語を聞きて、其の平野の一關のいかに雄大の趣を備へたるかを想像する能はざる者は、共に自然の美を談ずるに足らざるの徒なり。況んや久しく都門風塵の中にありて、山を懷ひ水を戀ひたる身にして、忽然としてこの自然の大展開を眼頭に見る。誰か聲を放つて快

*　　　*　　　*　　　*

甲州鹽山まで歸り馬のありたるを幸ひ、寫眞機一切をそれの背に託し、ちやら／＼と亮けき鈴の音を聞きながら、落合より柳澤峠へとたどりぬ。日麗かに照りて、空の深碧の美しく滿山の白雪に反映する美しさ。かくてわれ等は漸く嶮しき峠の絶巓へと至りしが、其處より見渡さるゝは、さながらパノラマの如く展げられたる甲州の平原！　我等は思はず快を叫びつ。」

口惜しきは氣候悪しきが爲め、思ふまゝにはならぬ事なり。これより林を十町はかり分け行けば、路は次第に熊笹の深き深き澤の如き所に達し、そこをも過ぐればやがて水源とも覺しき所へ出で申すべし。」

「水源には乳のごとき形したる大岩一つありて、水は其處よりたら〳〵と少しづゝ滴り落つと聞きたるが、まことにや。」

「そのやうなる事言ひ傳へ侍れど、未ださるめづらしき岩を見たりと言ふものもなし。何かの誤りにや候はむ。されど……」言ひかけて少し躊躇ひたれど……、「無しと限られたるにも侍らず、見給ふごとく、水源近くなりては、小さき流れいく筋となくあちこちより流れ落ちて、まことはいづれを本源とも定め難きなれば、その多き中には、さる形したる岩より湧き出づる清水なしとも限られず侍り。されどおのれは未ださる岩を見たること候はず。」

柴田は最後の撮影をなさんとて、折重なる枯枝の雪を押分けつゝ、漸く少しは川の撮影するに適したる所を見たてゝ、頻に度合をはかり始めぬ。わが傍には、活火燃えて、焦茶色したる烟は、白き雪の梢にいとおもしろく渦上したるが、その暖氣にや熔けたりけむ、雪塊はゆくりなく圏をなしたるわれ等の頭上に落ちかゝれり。我等は驚きて身を振ひつ。

多摩川は白き堆雪の間を縫ふが如く細く〳〵流れ行けり。あゝこの一場の平地こそは、實はわがこの行に於ける最後の到着點なりき。

野の山奥なる瀞八町のごとき深潭藍を湛へたる驚くべき隱れたる奇勝もあるなるべし。その岸には、春は美しき菫の花人知れず咲きて、其ゆかりの色おもしろく水に映り、名も知らぬ小鳥などいと樂しげに歌へるならむ。夜に入りて、薄月の影その淵に落ちたらばいかに、河鹿の聲さながら笛を鳴らすがごとくその溪流に聞えたらばいかに。

されどわが今回の探檢は、さる樂しき空想を逞うするの餘地なきをいかにかせむ。辛うじて市の瀨の山中までは入りたれど、到る處只々雪のみにて、川の瀨のいかに分れ、山の姿のいかに聳え、林木岩石のいかに連りたるか、それすら明かには辨ずる事能はざりしをや。

『此處より水源までは猶何里あるべきや。』

『然なり。水源までには最早一里半ばかりにや候はむ。されどこの雪にては、とても一歩たりとも前へは進み難し、見給へ、これを。』と言ひつゝ導者は藁靴に凍りつきたる夥しき氷柱をそのまゝ前なる焚火の上へと出しつ。

こは市の瀨村より半里ほど無人の境に入りて、林木の稍絶えたる、前には多摩川の弓の如く曲りて流れたるとある絶壁の上の平地なるが、われ等は雪中の探檢を此處に終らんとして、今最後の焚火の周圍へと集りたりき。

『夏ならば……』と導者は言葉をつぎて、『夏ならんには、此處より最早一呼吸なれど、かへすぐも

四

昔は道路も開けざる事とて、市の瀬、高橋、黒川の三溪流の落ち合ひたるところを、そのまゝ水源とは定めたれど、今は落合といへる新しき村も開かれ、柳澤峠の險しからざる路も通じて、夏ならんには水源を探るといひても、さして困難を感ぜざるべきなれど、いかにせん、われ等が分入りたる時は、天寒く雪深くして、山阻水涯遍ねく探るの便を得ざりき。多摩川の本流とも言はるべきかの市の瀬川は、昔の水源――則ち三重河原より、萬山の裡へと深く曲折して、その兩岸は到底人跡の至る事能はざるばかりに、絶壁聳え峰崖重り合へるなり。されはこの市の瀬川の水源を探らんと思はゞ、暫く川を離れて落合に行き、それより右折して高橋村に至り、尙それより犬斬尾峠の小險を踰えて、山の峠とも覺しきところを一里はかり辿らざるべからず。さすれはその眼下に蕭條たる市の瀬の人家を認むるを得るならむ。而してそのさびしき村に入らんとする處にて、再びなつかしき市の瀬川の潺々として右の山崎より流れ來るに逢ふならん。されど此處にては、川幅既に細くなりて、奔飛跳躍の奇景を見ること能はざるは勿論、いかなればかの溪流のかく細く小さくなりしかを疑はしむるばかりなりき。われ等は其橋の畔に立ちて、こゝよりかの三重河原に至れる、いかに奇景に富めるかを思ひぬ。山嶮しく絶壁高ければ、水は驚くべき勢を搖つて、或時は珠と亂れ、或時は雪と流るゝ奇觀を呈せる所もあるなるべく、かの甲州鰍

れ等の辿りし山陰の路には、積雪殆ど三尺の深さに及び、昨日も今日も往來は全く絶えて、いつものぼり行く驛馬さへ、久しく鈴の音を絶ちたりといへるにあらずや。否、纔に二里に遠からざる落合の村に至るにすら、わら等は一日を費さねばならぬ艱難に逢ひき。

雪の中にこけつ轉びつして、漸く落合の一軒家を山陰の淋しき處に認めしは、早日も暮近き頃なりき。生憎にも空はこの時また大なる雪を下し來りて、風さへ烈しく吹き立ちたれば、四山の梢に積りたる雪横さまに衣袂を襲ひて、その烈しきは殆ど身をも倒さんとせり。導者はいふ、「かくてはいよ〳〵水源探檢を思ひ斷ち給はねばなるまじ。いかに剛氣なる御身等とても、この雪に尙山深く分け入り給ふ程の無法なりとは覺えねば」と。われ等も今日の深雪に惱みたる身の遺憾ながらこの探檢はこゝに終を告げねばならぬかと思ひつゝ、傘を傾けて猶辿りぬ。不意に烈しき風一陣、春帆の蝙蝠傘は松茸の如くなりて飛べり。

風雪の間を辛くも辿りつゝ、漸くその蕭條たる落合村の人家の見ゆる處まで來て、我等はほつと呼吸をつきぬ。言ふ事勿れ、宿るべき家無しと。兎にも角にも我等は其處に粟の飯と堅き湯團と溫き榾火とを得む。

黒川千軒といひて、金掘人多數入りて、支配の士も住居せしとて、屋敷平といふ跡あり。女郎平といふ地もあり。遊女もありしとぞ。寺平といふには、寺もありけん。其頃は雞冠權現も參詣多くありけん。今は神主は於曾村に住みて、祭禮の時に高橋村に至りて、神事執行すといへり、其上金出でずなりてより、かゝる深山の黒川には、住居して渡世ならざれば、甲府或は青梅路に追々引移りて、今は黒川といふ名のみ殘りて、家は一軒も無し。丹波川の上の谷川に五十人淵といふあり。さるは黒川の遊女どもを連れ來て、落し沈めしと言ひ傳へたり。其淵も今はありけれど、いかなる誤をか言ひ傳へけん、今は黒川を通り下りける道に、昔の石垣の跡見え、又其上は甲府の方への街道にぞありけんと思はるゝ跡も見えたり。」

と記せり。

この多摩川泝源日記は、寛政の頃、橘樹園なる人の水源探檢の結果を記したるものなるが、道も無き當時にありては、いかに困難を窮めたりけん。只山より山へと峰つたひして、纔に木に凭り岩に縋りつつ、水の所歸を認むるに過ぎざりしならむ。されど今は新に開けたる路、絶えず多摩川の流に沿ひて、所謂三重河原も、黒川の末流も、皆その途中に探り得べくなりぬ。我等は一夜を丹波山の風寒き旅亭に明かして、辛うじて得たる導者一名と共に、翌日その萬山の中に分け入りたるが、雪深く山寒くして、十分にその沿道を詳かに探る能はざりしは一行の最も遺憾とせる所なり。されどこれも理なきにもあらじ。わ

り。さるを大岩の上へ一丈餘よぢのぼりて、先づしるべの者に其谷川を問ひけるに、一の瀨川といふ。「見るに、淺瀨にて、よく底も見え透く、三四間許の廣さの石川なり。その西の方に嶮しき山と山との峽の細き谷阪の岩間を繞る瀧川あり。その廣さ五六尺、狹き所は三四尺ばかりに見ゆ。これを黑川といふ。落ちて一の瀨川に會せり。其水を掬びつ、磁石据ゑて方角をしるしつ。少時見渡しつゝ、其處より五十間あまり川を添ひ、下りて山と山の間より、コモロ川といふ幅五六尺の小溪、山澗より流れ出でて、一の瀨川に會せり。これを合せて三重川原とはいふならん。ひとつの谷間に流れ合へど、出る所は山を隔てたり。さる水元を各々尋ねなば、皆山々の泉の流れ合へるなるべし。彼郗源莽叩谷心寒といへるも思ひ合せつ。こゝをぞ濫觴といふならん。」

また黑川の金山を探るの條に、「一の瀨も此處より程近し。朝のほど空晴れ渡りたり。出て山路二里ばかり分けて、黑川山の金穿りし洞に至る。近頃も掘りしさまにて、其處に板屋一軒ありしが、立破れしまゝなり。金ありと思ふ岩を碎きけん、臼、箕、其外道具捨て荒れて見えたり。窟洞の入口は柱ふとく立て、凡間口の廣さ七尺ばかり、高さも同じ程にて、梁夥多渡し、堅固に造れり。中へ炬火挑げて入るに、次第に狹く、奥の方は崩れて危ふければ、入り難し。中なる岩を見るに、星の如く金光交り見ゆれども、金光のものは金にはあらぬものなり。山下に、淸水の流れの如き溝あり。これを黑川の水元なりといふ。雨降る時などまさるべし。武田機山侯の時、此山より堀出して甲金を造りしといひ傳へたり。其頃は

なる板一枚橋に架け渡したり。是を若人は事もなく渡りけれど、予は老の足元の覺束なければ、如何にせんと躊躇ひければ、此下の程四丁ばかり行けば、よき板橋架かりたれば廻り給へといへども、いかで此等を渡らでやはと、しるべの者と從者を力に渡り行く央ばかりに、板はたはみゆれ動きて、恐しう思ひつゝ渡り果て、息をつきつ。其より峽澤川といふ高かる山の九十九折を登る程に、樹とては更になき芝山にて、處々に清水湧き出づるが見渡さる。をちこちなるが次第に流れ合ひて、麓に至りては峽澤川といふ小川となりて、丹波川に會せり。さて廿町ばかり行きて、峽澤山の一つ家といふあり。立寄る前に、畑作りたる聊か平地あり。馬も飼ひたり。そこよりさかしき阪に登りて、横端といふ阻道を行きて、丹越山といふ峰のたわ（峠のことなり）に至る。其處にも聊か畑を作りて、大豆の立枯れたるが見ゆ。其處は峰續きたる絶頂のうちたわみたるやうに低き所なり。板屋低く作りたるありて、老の夫婦住みたり。

「立寄りけるに、鐵砲掛けて見ゆ。主の名を聞けるに、定吉といひて、七十五になりぬといへり。茶を乞ひて、割籠取り出でて食ふ。婆が桃を取り置きたりとて、籠に入れたるを賜はる。食ひけるに、やはらかにして味ひいみじ。今も枝になりてありといふ。かくて打越えさかしき阪を下りて、三重河原に至る。かく分入りぬるは、幽谷の細流にて、凄じき處なり。予が思ひわたりぬる願は成りにけれど、幽我儕亦何時かな、岩根は苔蘚に埋れ、荊棘など掻分けつゝ、二町ばかり行きて、大巖一つ細流を塞きた

論なるは可笑しからずや。わが從者はいふ、多摩川の水源は日原川なり、現に政府にて日原より東京まで鐵管にて引かんとせる擧あるにても知らると。他の一人はいふ、さる事あるべき、川は尤も長きものを以て水源と爲すべきものなりと。

おもしろき山中の一夜や。

あゝわれ等も明日は雪を冒してその萬山の中に入らんとせるなり。かくてその烈しき議論のやむと共にわれ等は再び眠に就きしが、夢に多摩川の水源を遡りて、めづらしき二つの大岩よりもくもくとおもしろき水の湧き出でたるを見つ。あゝ多摩川の水源！

三

多摩川泝源日記に、

「このたびはいかで水元にわけ入り、次手に黑川の金山も見まほしく來にけりと言へば、主人は心得つとて、山路をわきまへたる狩人を語らひ設けせられけり。翌菊月廿七日の空のどかなり。しるべの狩人は、用心に鐵砲を携へ、火繩ふり立てゝ先に立ちゆく。割籠を持たせけれど、一夜宿るべくと思へば、かれいひの代りに、米を袋に入れて持たせつ。さて三四町ばかり行きて、丹波川の上の方の瀨々細く流れたり。石を傳ひて渡り行くに、一瀨はいみじく激浪に見渡されて、渡り三間許の所に、廣さ尺五寸ばかり

この雪中に果して水源まで行くを得べきや否やを問ひぬ。

さても……と隨平さし〻、さてもこの雪にては、水源は愚か、市の瀬まで行かん事も覺束なかる可し。否無理にも行き給はんとならば、それは行かれぬ事はあるまじけれど、途中にて凍死する程の覺悟なくてはといふ。雪の深さを問へば、落合にて二尺以上、市の瀬の山中に至らば三四尺以上にものぼるべしと語る。されどわれ等は行かる〻處までは行かばやと思ふ。

漸く身體も煖りたれば、導かれて二階へとのぼりぬ。あ〻この二階！　われはか〻る陋屋の二階を見たる事無し。障子も無く、天井も無く、風は只ひう〱と戸隙より入りて、その寒き事言はん方なし。殊に疊は僅かその片隅に四五枚并べたるのみにて、傍には蒲團、枕などのあら莚に包まれたる儘なるが置かれたるにあらずや。否それのみにはあらじ、板敷の戸隙〱よりは、下にて燃せる圍爐裏の烟、そこともなく洩れ上りて、その烟く怪しきこと、殆ど忍ぶべくもあらず。されど山ふかく地僻なること〻て、爲方なく、大なる木の根をくり抜きたる丸き火鉢に、火を盛んに起して、主婦が持ち來れる猪の肉――これのみは都にては得られぬものなるべし――を炙、われ等は地酒を酌みて、辛くも嚴冬の寒さを忘る〻を得つ〻、醉の覺めぬ中にと、その儘黑頭の如き蒲團に包まれて眠りしが、ふと人聲の高きに驚きて目覺むれば、下なる圍爐裏の邊に、今しも酒に醉へるか、誰れか、ただ地の大よこも覺しき計漢との間に烈しき議論起りて、互に罵る聲は恰も鬪ひ合ふが如し。而してその議論の基は實に多摩川の水源

く高く高くのぼり行きて、遂に下瞰すれどもその水の髣髴をも認むる事能はざるに至る。あゝこの多摩川！　樋にせかれ、鐵管に引かれて、都人士の飮料に供せらるゝ時、誰かこの水のかゝる深谷の間を流るるを思ふべき。あゝこの深谷！　あゝこの多摩川！

恰も大釜の緣を危くも一歩一歩辿り行くごとく、覺束なくも絕壁に沿ひつゝ、ぐるりと大めぐりに一廻りすれば、絕壁の蔭に少しく廣き一平地ありて、そこに一株の面白き形したる老松傘を張り、その根元に、旅客の枯木を集めて焚火したる跡、歷然として殘りたり。此處より望めば、今まで見る事を得ざりし多摩川、手に取る如く顯れわたりて、水の岩石に激するさま、樹間に雪を噴き珠と亂るゝさま、いと明かに認められぬ。

山隈を繞り、絕壁を涉りてやゝ兩山の開けたる處に、蕭然たる丹波山村の人家を認めしは、早日も名殘なく暮れて漸く微かに人顏を辨ずる程の頃なりき。當面の山西南にひらけて、その一帶の平地を流るゝ多摩川の水は、二筋或は三筋に流れたり。丹波山の村はその岸に臨みて、宛然たる一寒村なり。われ等は導者の言ふがまゝに、郵便局と旅人宿とを兼ねたる一茅屋に投宿す。

主婦は一行の衣貌の常に異れるを見て、呆然として只われ等の顏を見詰るのみ、暫しは室に導かんともせざりしが、從者の縷々とわれ等一行の目的を語るに及びて、漸く爐邊に導くことを許しぬ。我等は活々と燃え上る爐邊の榾火に、終日雪中に佇立みたる身を緩めつゝ多、摩川水源探檢の事を語り出でゝ、

を見ず。只こころ／＼山高く水遠きの趣を備へたるのみ。一里にして一溪流の左より來り會するあり。こは小菅川といへるものにて、甲の佐野峠より流れ出でたるなるが、我はその溪流を傳ひて、辛くも甲の猿橋に出でたる事ありたりき。その峠彼方より流れ落つる多摩川の水を望みて、その水源附近までも溯る事を得たらんには、いかに嬉しき事ならんと思ひたりき。然るに今、山瘦せ水涸れたる時に、一路遙々その萬山の中に入らんとす。快ならずや。

開けたる山漸く迫りて、多摩川の再び面白き激湍を呈せる處に、一彎の風情ある溪橋を架し、それを隔てて、蕭然たる一邑を望む。これ甲の鴨澤にして、この一彎の溪橋は、則ち甲武の國境柱のある所なり。是よりいよ／＼瘦せ、水益涸れて、兩山の仄する事いよ／＼烈しく、山路の險峻なる事、殆ど名狀すべからず。路傍多く猪、鹿、などの軒頭にかゝげられたる茅屋を見る。

親川橋に至りし頃は、日漸く落ちて、暮色は紗の如く天地を蔽ひ、鼠色したる雲は、漸く山際にかゝらんとせり。橋畔筏を組む人の點々として黑く散在するあり。渠等の流したる木は、三日にして青梅に達する事を得るなりといへり。

これより路は多摩川の最も深奧に最も險峻なる大壑へとかゝり行けり。絶大なる谷は大なる顎を開きたる如く、次第にわれ等の前に現はれ來りて、脚下に激したる水は、恰も巨人の嘯くが如く絶大なる響を四面の山谷に反響したり。縷の如き路は、大なる絶壁に沿ひて、或は右に折れ、或は左に曲りて、漸

玉花溪を過ぎ果つれば、水また緩かに山も亦舒びたり、その山をめぐり、その水に沿ひて、猶行くこと十町餘にして原村に至り、猶一二町にして小河內村の溫泉場に達す。浴樓二三多摩の清溪に枕みて、その地の清閑なる、殆ど譬ふるにもの無からんとす。鶴屋といへるに憩ひしが、これより先に午餐を得べき村なしといふに、未だ早けれど、此處にて午餐を濟して行く事に決す。この家は曾つて初めて多摩川を溯りし時、淋しく一夜を過したる處なれば、何となくゆかしき心地して堪へがたし。其頃は今の如く家も立派ならず、主婦も如才なくあらざりしがなど思ふも可笑しや。

湯に浴り給はずやといふに、さらば一あたゝまりして來んとて、春帆と共に入りて浴す。浴場は前に來りし時よりは廣く清らかになりたれど、浴槽は依然として狹く、纔かにわれ等二人を入るゝに足るのみなりき。されど火傷、打身には他の有名なる湯にも得られぬ效驗ありとて、來り浴するもの多しといふ。溫泉神社は村の盡頭にありて、鑛泉はその傍より湧出せるが、槽を作りてそれを貯へたり。試に手もて檢すれば、微溫あるを見る。下流は落ちて多摩川に會す。

小河內村字日の湯といふ處に、多摩川は又一つの奇觀を作れり。岩上の青松は染むるが如く、岩下の深潭は藍を湛へたるがごとし。一縷の細徑は絶壁の間を縫ひて、遙かに歷落たる寒村に接し、その風景のすぐれたる、優に多摩川の一勝たるに耻ぢず。

河野、留浦は、皆この多摩川に臨みたる小寒村の名なり。此間、兩岸の山やゝ舒びて、數里他の奇景

石のさま〴〵の形を僞せるもの、皆夜半の雪を被りて、青きものは愈々青く、白きものは愈々白く、その水石の互に相戰ひ相亂るゝさまの美しさ、殆ど名狀すべからず。われ等は山の一曲ごとに次第に離れ來れる山水の美しきさまを見且つ賞しつゝ、境村をも過ぎて、漸く玉花溪に近かんとす。路は俄に曲折して、水聲は林を透して來るもの漸く常に異れり。これ玉花溪の近き徴なり。既にして路はやゝ林のひらけたる處に出づ。眼下には一大奇景ありて、その布置の巧、座ろに人の心を惹く。あゝ是氷川以西最もすぐれたりといへる玉花溪の入口にあらずや。大巖二つ、一つは溪潭の中央に屹立し、一つは岸頭に高く聳ゆ。沈々と音なく響なく流れ來りたる碧き水は、中央なる大岩に觸れて、瀑となり、瀨となり、更に其間に錯落たる小岩小石を跳り越えて、玉を碎き雪を噴き、花を散らすの奇觀を呈す。岩上には松おもしろく生じて雪中の風景畫も及ばず。紫白はせめてその一端なりとも寫眞の中に收めばやと、雪に滑り岩路を踏み占めつゝ、一歩〳〵とその低き岩頭へと下り行き、春帆は岩上の松を寫生せんとて、それを見るに尤も適したる少し先きの岩の傍へと行きて立ちぬ。われは一人跡に殘されて、暫しは恍惚とその風景を見るに餘念なかりしが、ふと心付きて見れば、紫白は今しも危き岩角を下りかけたる處にて、その小さき黑き影は、雪の白く積れる中に、いと明かに認められつ。と見る中に、その姿はやがて其處を下り果てゝ、寫眞器をとある岸の上に据ゑつゝ、頻りに度合をはかり始めぬ。多摩の水は激怒してその若き寫眞師の傍を流れ行けり。配合よき一場の景にはあらずや。

たぬ身の雪達磨のごとく眞白くなれるをも、更に少しも頓着せざりき。

さればこの朝限りなく美しと愛でつゝ、暫しは山の一角に立ちて、その面白き景色と別るゝに忍びざりしその偉大なる立岩の姿の、闇のうす黑き半空を限取りて幻のごとく現はれたるを認めし時は、われにもあらで、立岩〳〵と叫びぬ。

立岩は薄鼠の色していと微かにわれ等の前に屹立したり。『あゝ立岩！　此處まで來れば大澤には早程もなし、氷川までは僅かに一里。』と我等は言合はせて喜び勇みつ。さてそのおもしろき立岩を仰ぎつゝ、とある山角をぐるりとめぐれば、早くも闇の中にかゞやける燈火………人家………人聲………

二

深く積らばいかにせましと思ひし雪は晴れたり。準備など何彼と整ふとする間に、かの昨日の男は來りぬ。渠は今日も猶我等の重き寫眞機を負ひて、丹波山まで從ひ行かんとせるなり。われ等はお早く歸り來ませとの主婦の言葉を後にして、その儘雪深き山路にかゝりぬ、半溶けたる雪、草鞋に滲みて、爪先の冷たさ、譬へんにものなし。一里ばかりにして、日出づ。樹々の梢の雪、花のごとく散りて、その溶けたる處に、水蒸氣を起し、輕きこと羅の如き白雲、冉々として處々に蒸上す。多摩の水は飽まで深碧にして、岩石の聳立する處に白き激湍を作り、小石の宛轉たる邊に、青く白き一道の清漣を布く、

かにおもしろき時代物の舞臺ならずやなど言ひて、かの某の君もわれらの後を見送りぬ。

雪積る已に深くして踏む毎に緻々として聲あり。美しき山川は、雪の衣を着けたる儘にて、漸く薄暮の薄暗き幕の中に包み隱されんとす。一行は出來得る限り明るき中に歸らばやと、殆ど走るばかりに路を急ぎて、日原の大橋をも、この朝焚火したる檜澤の橋をも、瞬く間に過ぎ盡して、いつかかの大奇巖のおもしろく對岸に聳立せる處まで來つ。

顧れば、春帆と從者とは、いたく後れて影も見えず。いかにかせし、待ちてあらんと思はぬにあらざりしかど、前途をのみ急ぐ身の、紫山と我とはその儘先へ先へとのみ歩み行きぬ。されど暮れ行く日の影には、遂に追ひ及ぶ事能はずして、倉澤日原の分岐標の立てるあたりに至りて、山川は全く暮れ果てぬ。

あゝこの闇夜の山路のいかに危くいかに心細かりし事よ。一歩路を誤れば、身は千仞の谷底に墜落し果つるを思へ。それのみならず路は雪あかりにて纔かにその行先を辨ずるのみなれば、木立深き處に至れば、殆ど一歩先も明かには見えぬと思へ。われ等は殆ど摸足しつゝ、この深谷に臨める蛇のごとく曲りくねりしたる一線の山徑を辿り行きぬ。それにしてもせめてかの從者の携へ來れる松明ありとあらばと我等は幾度思はぬにあらねど、さりとて半里ほど後れたらん彼等を待たんも愚かしく、只々一刻も早く人家見えよ、燈火見えよ、今朝寫眞撮りし大澤村に着けよとのみ念じて、降りしきる雪に、傘一つ持

こき岩石到る處に聳ゆ。まこ〻の陰府もかくやこ思はる〻ばかりなり。老爺先づ松明を振立て〻先へ先へこ上り行きしが、その皺多き顏、暗き闇を隈取りて、さながら陰人の死出の山をのぼり行くさまに髣髴たり。

十二藥師は最も奥なる靈場にて、そこには一個の眞鍮の御幣納められたり。維新前までは自然石の儘なる十二藥師の像尊く坐りおはし〻なるが、近年學校の生徒來りて皆そを壞りて持行きたりこいふ。その暴惱むべきかな。これより猶一二町奥まで進み行きたれご、あまりに遲くなりてはこ思ひて、その附近の狀景を寫生して歸途に就く。

窟を出づれば、雪猶盛に降りて、薄暮に近き色は何處こもなくあたりに滿てり。堂に歸れば紫白の影はなくして、傍に一葉の紙落ち散りたり。拾ひ見るに、寒くて堪らぬゆゑ、日原まで一足先に歸る、四時十五分こ記されたり。四時十五分！　あ〻われ等はこれより三里の山路をこの風雪に辿らねばならざるか。

疾驅して日原に歸る。

從者はこの雪にかく遲く到底氷川までは歸らるべしこも思はれねば、今宵は此處にやごり給へこいふ。われ等はそれをも聞かんこもせずに、直ちに準備を整へて歸路に就く。さらば日の暮れたる後の準備に、窟にて殘りたる松明なりと持ち行かんこて、從者はその五つ六つ背後に擔ひつ。雪の山中に松明！　い

「そこに見ゆるは蓮のれん華!」

導者は松明を上げて敎へつ。

『それより「髭摩り」と言へる處を過ぐ。こは岩石兩方より迫りて、頸を屈るまでに身を屈めずんば到底過ぐる能はざればかく呼ぶとぞ。導者先づ過ぎて、我これに續きしが、過つて頭を突出したる岩角に觸れたるその痛さ! 暫しは昏絶せんばかりなりき。

一合天井とは、穹窿の如き窟の線を爲して破れたる跡を指していへるなり。此のあたりには蝙蝠多く住めば、そを捕へ行かんとて、老爺は松明を振りて、あちこちと岩の陰、窟の背後などを探りしが、果して二三の蝙蝠の、酸漿のごとく小さくなりて、ひたと岩に附着し居れるを見出したれば、そを捕へて懷に入れんとせしに、ちう／＼と鼠の如き聲を立て、啼きたるもをかし。冬は寒氣に縮まりて、さる恐は無けれど、夏は桐の葉のごとき大なる羽をひろげつゝ、急劇に飛び來りて人の面部を壓し、息を閉ひされば死に至らしめらるゝ事往々にしてありなどと語りつゝ、老爺は猶二つ三つの蝙蝠を捕へぬ。

弘法の硯の水を見、それより少しく支脈を下れば、暗黑なる中に、さら／＼と響くものを聞きつ、怪みて、恐る／＼松明の光に見下せば、そは一道の水の長く黑く横はれるなり。下り行きてこれを掬へば、冷かなる事氷のごとし。導者は指していふ、これ三途の川と。

或は狹く或は廣き洞窟の中を猶辿る事少時にして、遂に死出の山に達す。その坂は急峻にして劍のご

岩石を踰え、遂に大岩の倒懸せる罅隙をもとめて足場を爲し、片手を木の根に、片手を岩角に、漸くにして我はその大岩の半腹の窟口の處に達するを得つ。

窟口には一坪ほどの平地ありて、その口よりは寒く物凄き風、颶風の如く絶えず吹來れり。されば老爺が骨折りて點ぜんとする松明の火は幾度か吹消されて、一箱のマッチのその半を費し終らんとせる頃、辛くも三人が持てる各の松明に火は點されつ。かくて一行は匍匐してその怪窟へと潜り入りぬ。

やゝ濶かりし窟は、一歩二歩と狹くなり行きて、果ては腹を全く地に着くるに至らずんば止まざるに至る。前人のさまを望むに、尻高く頭低くして、恰も猫の眠覺めて脊を丸くしたる樣に彷髴たり。陰風の絶えず何處ともなく襲ひ來れるに、持ち馴れざる松明は驀地に吹消されて、導者を呼びて更に火を點ぜしむる幾度なるを知らず。かく匍匐する事大凡半町ばかりにやありけん、やがて窟の細長くして狹き事壁と壁とを合せたる如き處に出づ。腹を摩るやうにして辛うじて其處をも過ぎ、猶低く狹き間を腰をかゞめつゝ過ぎ果てれば、一歩先に行きたる老爺は燃上る松明を頭上高く振立てゝ、こゝより廣くなりぬと呼ぶ。

その聲の凄まじく四面に反響するに恐れ戰きて、我にもあらず見返れば、悉く鐘乳石を以てつくられたる大窟は、驚くべき廣さと深さとを我等の前にあらはしたり。思はず一聲阿と呼べば、その聲深く窟背にひゞきて、恰も鬼ありてわれに答ふるかと疑はる。

に辿りたるものなりこいふ。ここに里人はこの老翁を神のお使なりこ称して、渠にあらざればその怪窟の導をなす能はずこなせり。而して渠も亦よく窟の深奥を極め、横窟縦窟處こして至らざるなく處こして探らざるなしこかや。風雪いよ／＼烈しく、第一門に至る頃には、殆ご眼前咫尺の處をも辨ずる能はず、只纔かに一縷の山徑の雪に埋み残されたるをたよりに、導者の後に従ひ行くのみなりき。路は林に入り、谷に臨み、山に縁りて、次第に深く深く分け入りつ。兩山の相迫したる距離漸く深く、日原川の溪潭漸く深く、眼前に靡き下れる暗澹たる雲霧漸く多し。その間を昇降する事大凡五六町にして、路は岐れて二つこなり、一つは秩父へかよへるかの仙元峠へこ通じ、一つはわが志す一石山の怪窟へこ向ふ。猶辿る事五六町、路は俄かに下りて眼下に一道の溪橋を瞰る、溪流千尋の谷底に咽びて、その奔飛跳躍のさまは雲霧の間より隠れて見え見えて隠れぬ。

　橋を渡り終らんこして、ゆくりなく頭を擧げたる我は、驚きて阿！　こ呼びぬ。見よ何等の奇観ぞ。わが立てる溪橋を隔つるここ僅かに咫尺、驚くべき一大奇巌は暗澹たる大空を摩して巍然こして巨人のごこく凝立したるにあらずや。見よ、男體巌！　こ我は叫びつ。

　二十分の後にはわれ等の一行はその奇極れる男體巌の下部なる怪窟の入口の處へこ進みつゝあり。紫白はあたりの景一こころ二こころ寫眞にせばやこて、跡に残りたれば、われは作帆こ従者こ共にその老翁に導かれて、われに向つて頷を開ける怪窟の方へこ進みぬ。先づ水の膝邊に及べる溪流を渉り雪に滑り勝なる

り出さん爲めに來りてこの山中に住めるなりといふ。我は曾て故ありて、このなにがしの君の世故に長けて、さま〴〵の憂さ辛さをも嘗め給へるを聞ける身の、此寒山の中にての邂逅を極めて面白きものに思はざる事能はざりき。深山の中なる茅屋の爐邊に、曾て都にありし人と、都より來りし人と互に語り合ふさまの意味深さよ。ましてその後景には、戸外の風雪、壁間にかけ連ねられたる獵衣、獵銃、折々高く燃上る爐火、ここに都の客あるをも知らず顏に、頻りに機を織るに餘念なきやさしげなる一少女の後姿さへあるにあらずや。

一場の光景宛然たる詩なりと我は窃かに思ひぬ。昨日獲たりといふ十六貫ありし鹿の皮などを春帆の寫生することする間に、漸く午餐の膳は火爐の邊りに据ゑられぬ。飢ゑたる身には稗多き飯も旨く、尠づくめの料理も旨く、いつもより食の進みたるもおもしろき旅の逸興なるかな。食し終りて時計を檢すれば、早午後二時に十分を餘すのみなり。日の暮れぬ中に氷川まで歸らんと思へる身の、ぐづ〳〵しては居るべからずとて、直ちに鐘乳窟の導を得んことを主婦に託す。主婦則ち小僮に命じてそを呼びきたらしむ。

頃刻ならずして爺來れりといふ小僮の聲、戸内に徹す。結束して戸外に出づれば、一人の老爺頭に饅頭笠を戴き、足に藁草履を穿ち、素脚にして立つ。手には一束の松明と一個のマッチとを携へたり。これ即ち我等の一行を怪奇絶特なる闇窟に導かんとする老爺にして、渠は一生を所謂『窟見物』の案内者

中にかくれ住みたりと言へるものをや。且つ我はその奥に一石山なる靈境ありて、維新までは女人禁制の札をさへ立てたりと言へるをも聞きつ。見渡せば、今まで迫りたる兩山や、開けて、路は一帶の平地――則ち村のある處へと通じ行けるを見る。右岸の山勢駿馬の急奔するが如く西南に走りて、その盡きんとする處に、烏帽子を立てたる如き一小奇山の極めて面白く聳立したるを認む。その麓の深谷は則ち日原の溪流の絶えず岩石に激する處にして、その沈々たる音は、さながら他界の妙音を聞くが如し。

　春風雪中に佇立みて寫生す。

我は久しく風雪の中に凝立するに堪へず、導者と共に、先づ走つて日原の村に入り、最も舊家たりと言へる原島某の家に投じ、一行の爲めに午餐を準備せんことを主婦に託す。主婦喜んでこれを諾し、この雪に好うこそ來給ひつれとて、傍なる粗朶を折り來りて、頻りに爐の火を盛んならしめたり。我等は遠慮もなく草鞋の儘なる兩脚を、その儘暖き活火の上へと出しつ。

　主婦の飯を炊き菜を煮るに餘念なき間に、我等はその活火暖き爐を圍みて、いろ〳〵なる雜談に耽り始めぬ。年の頃凡そ二十五六歳になりたらんと覺しき男の、しかも此家の主人とも見えぬが、頻りに東京の事を語り出でて、山中の民の知り得ぬ事どもさま〴〵にいふを我はいと怪しと思ひしが、後れて入り來れる畫家春白の顔を見て、君は柴田君にはあらずやと言ひたり。不思議なる奇遇もあるものかな。こは幸田露伴君の門弟にて、一たびは文壇に名をも出し給ひしなにがしの君なるを、一年程前より、材木を切

多摩の水源

一

雪は降り頻りぬ。されど我等の一行は是より日原の奥に入りて、かの有名なる鍾乳窟を探り、直ちに踵を氷川の驛亭に旋らさんと思へる身の、風雪の劇甚なるにも拘はらず、絶壁に沿ひ、峻坂を攀ぢ、岩石を陟りて、漸く一溪橋の弓の如く蕭然として深谷の間に横れる處をも過ぎ、それより一大絶壁の下を縫へる逶蛇たる山徑を暫しがほど辿れば、迫りたる山は谷と共に俄かに開けて、われ等の志したる日原の寒村はさながら蜃氣樓の浮び出でたる如く、いと面白く顯れ出でぬ。この萬山の中なる一寒村！ われは如何に久しくこの一寒村の風情を思ひ、いかに深くこの一寒村の光景を想像したりけむ。わが空想は影の上に形を加へて、聳えたる山、流れたる水、皆世の常のものとは異りたる一種靈妙なる一別天地の如く思はしめたりき。それも理なり、この村に住める民は皆由緒正しき北條家の武士の末裔にして、主家の秀吉に滅されたる時、渠等の先祖は節を失はんよりはとて、、渺茫たる武藏野を踰えて、遙かにこの山

多摩の水源 外五編

お題目の音である。それを聞いた時の崇高な感じを私は忘れることが出來ない。深い雲霧の中に、凄じい暴風雨の中に、この山の上に、さうした勤行をしてゐる人達のことが急に胸に迫つて來た。

平日なら何でもないのであらうが、深い霧と雲との中では、堂も杉も山門もすべて他界の光景のやうに私には思はれた。さびしい庫裡の中にゐる尼、囲爐裏の火を赤く燃やしてゐる小僧、暗い本尊の前にチラ／＼する蠟燭、それは凡てベルジユームの作家の舞臺面を私に思はせるに十分であつた。私はやがて庫裡から奥の院の方へと行つた。そこには日蓮が其處で初めて亡親を思つたといふ遺蹟などがあつた。奥の大きな堂には開かぬ扉があつて、お題目の勤行の音はそこからあたりに響いてきこえた。霧は白くあたりを流れた。

れを深い霧こ凄じい雨こ恐ろしい風この中に登つた。私は長い間、誰一人にも逢はなかつた。三光院に着いた頃には、雨は土砂降りになつて、霧のために一間先も見えぬ位であつた。

いろは四十八曲を通つた時の凄じさは、今でも私の眼の前にある。登つて行くにつれて風は強くなり、雨は烈しくなり、霧は深くなつた。ある岩角では、颶風に逢つて、私の蝙蝠傘は危く松茸のやうになつて了はうこした。

流石は日蓮のゐた山だこいふやうな氣がした。荒山——實際荒山である。社會こ戰つた彼れは更にこの大自然こ戰はうこしたのである。私はこんなここを思ひながら歩いた。一歩は一歩より嶮しく、岩角から岩角へこ路はついて行つた。時計を見るこ、もう五時半である。五十町——その位の路はわけはないこ思つて來た私も、いつの間にか思はぬ時間の立つてゐるのに驚かされた。

三十五町の標木は、もう少し前に私は通つて來た。

雲、霧、それを破つてこころぐ〵縞のやうに見せる強い雨、山の嶺の樹木は凄じく鳴り響いて天地の神祕が何か凄じいものを私の前に見せるかこ思はれた。一町、二町、五町、お水屋に行つた時には、もう日はすつかり暮れて、ほの明るい薄暮の光が微に霧の中に殘つてゐるばかりであつた。やがて四十五町目の標木を過ぎた頃、ふこ私は耳を欹てた。

『ドン、ドコ、ドンドコ——』

手にした僧よりも、自己の苦悶と戰つた僧達の方がより多く私の胸に觸れる。しかし日蓮が晩年この山に來てさびしく一人苦行を積んだ形は私の心を動かさずには置かなかつた。

私は急いで出かける支度をした。奧の院まで五十町、そこまでは是非行かなければならない。かう思つて私は出かけた。もう時計は四時に近かつた。

それに、宿を出る時には、今迄晴れてゐた空が曇つて、凄じい黑い雲が一面に蓋をするやうに蔽ひかかつた。奧の院のあるといふ山の上には雲が凄じく暗くかゝつてゐた。

『お山は雨だな。』

こんなことを誰かゞ言つた。

長い石段を喘ぎ〳〵登つて、本堂から奧の院の方へ行く路に入つた時には、雨がもうぽつりぽつり落ちて來て、俄に林の中は暗くなつて行つた。杉、檜、落葉松、さういふ木の林の中を、路は縫ふやうにして次第々々に上つて行くのであつた。

此方の山の背から彼方の背に行つた時には、深い谷が一眸の下に開けた。それは早川の谷と富士川の谷と相合するところであつた。霧と雲とは附近の山から湧くがごとくに渦き上つて、見るが中に、さうした光景はその中に包まれて行つた。

身延の山、奧の院、それは誰でも行くところである。女子供でも行くところである。しかし、私はそ

仕方がなしに、私は空腹を抱へながら身延の町の方へと志した。

波木井川に沿つて上つて行く路は、ちよつと鮮やかな明るい感じのするところである。激湍のさまもよければ、溪の屈曲してゐる形も見事である。釣橋などがかゝつてゐたりした。やがて身延の久遠寺の最初の山門も大きく前に現はれて來た。

多いといふほどではないが、杉の大木がところどころにあつて、それが涼しい蔭を到る處につくつてゐた。橋、それを渡つて、石ころのごろ〳〵する歩きにくい路を五六丁行くと、やがてさびしい身延の町が板葺の廂と低い屋根と高低ある配列とをその前に見せた。

有名な寺のある町と言ふよりも、山の町といふ感じを私は一番先に受けた。耳の立つた和犬、指物師の店、乾物屋、汚い旅館、のんきさうに子供を負つて立つてゐる上さん、何年も挽いたことのないやうな壞れた車、さういふものが歩いて行く私の眼に映つた。それに町はS字形に折曲つてゐて、それを過ぎると、上に高く杉森と山の翠微とを背景にして久遠寺の山門が高く町に臨んで立つてゐた。

玉屋といふのに休んで、大急ぎでそこで私は晝飯をすませた。床の間には小笠原長生氏の『ありがたや御法の風に拂はれて心にかゝるうき雲もなし』といふ歌の軸がかゝつてゐた。日蓮の修行地――さういふ感じがどことなく私の胸に迫つて來た。

日蓮は私はさう好きでない。私は佛教に對してはもつともつと古いところに憧憬れてゐる。社會を相

は川原につゞき、それにつれて山は幾重にも折れ曲つて行つた。彼方此方から落合ふ川も昔のまゝであつた。しかし、沿岸の人家、山峡から上る炊烟のいかにさびしかつたことよ。

飯富近く、早川の大きな流れが右からそゝぎ落ちて來てゐた。それは白峰三山の奧から流れ出して、大きな峽谷を成して、身延の側面を掠めて、そして富士川に落ちてゐるのであるが、その凄じい流れのために、河舟は震盪して、凄じい飛沫が舟の中まで上つて來た。

波高島、そこからは武田信玄のかくし湯と言はれた下部の温泉へと行かれた。「なアに、いくらもありやしません。あの向うに、山が見えるでせう。あの山の陰のところになつてゐます。」かう指して船頭は教へた。下部の温泉には旅館が三軒あつて、一軒の旅館が二百名づつも收容し得るといふことであつた。その温泉からは、毛無山脈の主峰雨ケ岳を越えて、富士の西側にある本栖湖の方へ出て行くことが出來た。嵐氣の深い山が少なからず私の心を惹いた。

あそこが身延の奧の院のあるところだといふ山には、赤く塗いだところがあつて、その上には面白いひよろ松が列を成して並んで生えてゐた。私は今日、そこまで行かうと思つてゐた。都合がよかつたら、そこから七面山の奧までも行かうとも考へてゐた。私は舟の中に危坐して、そしてその山の近づいて來るのを眺めた。

波木井に來て、私は舟を見捨てた。しかしそこはさびしいところで、晝飯を食ふやうな家もなかつた。

のさびれてゐることよ。その衰へてゐることよ。その茶店のさびしく田舍的になつてゐることよ「一番の時間船は出て了つたで、あとは買切でねえぢや――」かうそこの上さんは言つた。昔は何んな時でも、一日に四度や五度は出た河舟は、今は時間船の外は、滅多に出ることはないといふことであつた。で、私は河舟を一隻買切つて、波木井まで行くことにした。

川原に行つて見ると、川はさびしく、眞にさびしく流れてゐた。河舟のかゝつてゐるのも一艘か二艘しかなかつた。川も狹く思はれるほど船の集つてゐた昔、朝早い一番船を待つて川原で船頭達が火を燃してゐた昔、大勢集つて來た旅客と荷物、その時分は川も賑やかで、舟の立つた後までもあとを追つて來て聲を擧げて呼ぶ人達などもあつた。上つて來る舟、下つて行く舟、川の岸には船頭の寄つて女に戲れるやうな家などもあつた。しかしさういふ光景は今は何處にも見ることが出來なかつた。川は太古の昔のさびしさにかへつたもの、やうに靜かにさびしく流れてゐた。

舟はやがて出た。

船頭は依然として櫂をあやつりながら歌を小聲で唄つた。それは昔は元氣よく聲を張上げて唄つた唄である。しかし不思議にも、その小聲で、さびしく唄ふ唄が却つて川の靜かな情調に適してゐるやうに思はれた。私はさびしい氣がした。

下つて行く沿岸の風景は昔と少しも違つたところがない。天神が瀧、屛風岩、瀬は瀨につゞき、川原

つれて赤くなるさまや、編笠山の鄙にのんびりした形や、權現岳の嶮しい犯し難い姿や、それをいかな日でも見ないことはなかつた。大きく長く靡いた裾野、裾野一杯に苔か何ぞのやうに密生して生きてゐる松林、大きな山脈を白い煤烟を揚げて通つて行く汽車、さびしい停車場、丘の上の、林の中にある別莊、草花で美しく綴られた小徑、さういふところに私はひとりで三月ほど暮してゐた。

こゝ、昨日、秋雨の降り頻る中を、山の人達がわざ／＼停車場まで送つて來て呉れて、もう好いと言ふのをもきかずに、プラットホームに横はつた汽車の窓まで來て、雨にぬれながら私を見送つてゐて呉れたさまが思ひ出された。なつかしい八ヶ岳の裾野！

釜無を渡つて少し行つたところに、甲府往還と信州往還とのわかれる標石の建つてゐるところがあつた。その標石を後にして、馬車は長い間休んでゐた。日が明かに明かにあたりを照らした。私は韮崎、臺ヶ原、蔦木などを通つて信州に入つて行く路を思つた。

鰍澤は十年前とは丸で變つたやうなさびしい町になつてゐた。人通りも少なければ、車の往來なども少ない。昔はゴタ／＼した色彩に富んだ町であつたが、今はひつそりとして小ぢんまりした町になつてゐる。都會の人達の町から地方の人達の町になつてゐる。此處ではもう昔見た美しい都會の娘のパラソルなどを見ることが出來なかつた。

馬車から下りて、川舟の出るところまで歩いて行つた。依然として川舟の出る河港はあつた。しかしそ

の中にもところどころ隙があるやうな客——それも皆その地方の百姓達の繕はない色の黑い顏、野卑な田舍娘、古ぼけたパナマ帽を大事さうに冠つた村役場の書記などであつた。

廣潤とした甲府盆地、昔は大きな谷湖であつたと言ふが、それを縱橫に荒川、鹽川、釜無、笛吹の諸川が雨後の水を漲らして流れてゐる形が面白い。橋があり、村があり、青田があり、寺があり、朝日のかゞやく白堊の土藏がある。小さな川には、蘆や蘭がたぷたぷとした水の上に青々と浮んで見えてゐる。

晴れた日ならば——雲のない日ならば、このあたりは山を見るのに最も好いところである。日本の南彎北彎の山脈の對曲してゐる形などは殊に面白い。南彎の山脈は嶮しく、北彎はやゝ陵夷してゐる形などは地理學上面白い光景である。それに、白峰三山、その奥に連亙した赤石山脈、所謂南アルプスはその前に雄偉壯大な山容を展開してゐる筈である。しかし、雲は深く封じてゐて、その裾すら明かに見ることが出來なかつた。

でも釜無の長い鐵橋近くに來ると、北彎の方の山が少しづつ見え出して來た。茅ヶ岳、金ヶ岳の裾が見える、と、思ふと、白い浮動した雲の上に八ヶ岳の尖峰が三つ四つほど碧く鮮かに見え出して來た。

『ヤ、八ヶ岳！』

私は思はず心に叫んだ。

なつかしい八ヶ岳だ。私は三月ほど毎朝その山の姿に對さないことはなかつた。赤嶽の夕日になるに

身延の霧

上諏訪から甲府に來て泊つた。明日は身延に行つて見ようと思ふのだけれど、この雨ではとても駄目らしい。鰍澤の舟も今日は出なかつたと旅館の番頭は言つた。

しかし翌朝起きた時には、雲の間からところ〴〵碧い空が見えて、朝日の明るい光りがそこここなく薄く透いて見られた。で、河舟の出る出ないに拘はらず、兎に角私は鰍澤にまで行つて見ることにした。

旅館の前から子供の玩具のやうな鐵道馬車に乘る。此頃では見たくても見られないやうな鐵道馬車である。十二三年の昔にかへつたやうな氣がする。殊に私に取つて思出の多いのは、曾て亡兄と共にこの鐵道馬車の前身であるガタ馬車に乘つて、鰍澤に行つて富士川を下つたことである。それからまた二三年經つて、私は社の二三の人と冬の雪の深い多摩の山の中から出てこの馬車で鰍澤に出て行つたことがあつた。その時分はまだ中央線の汽車が出來なかつたので、この路は甲府盆地に住む人に取つて東京に出る唯一の交通路であつた。從つて旅客の往來が頻繁で、あたりも賑かであつた。それが今では狹い車

私はこんなことを言つて、霞ケ浦に比較して話したり何かした。かれ是する中に、十八日の月は赤く吉高城址の松の上にあらはれ出した。私はその錆びた沼が今しも銀色に輝いてゐるさまを想像せずにはゐられなかつた。

私達はその夜は遅くまで話した。

つゞ上つて御覧になりませんか。』I君はかう言つて勧めて呉れたが、しかしそのらつきやうをつけて食ふことだけは、私には出來なかつた。

夕飯をすましてから、私達は、此方の離座敷の方へとやつて來た。水鶏は猶ほ頻りに鳴いてゐた。

『夜も鳴くんですね、あの水鶏は?』

『え、え、一夜あゝして鳴いてゐますよ。それも、一羽か二羽きりゐないんですけれどもね。』

『好いですね。』

水近き
君がやどこそ
うれしけれ
水鶏の聲を
夜もすがらきく

實際、羨しいのは水近き宿だと思つた。私は種々と沼の話をI君とした。

『さうですね。面白う御座んしたね。舟も好かつたけれど、それよりも、丘陵の中の散歩がロマンチックでしたね。丘陵の中だけをシインにして、すぐれた小説が書けるやうな氣がしますね。實際あの丘陵の中を歩いて見なければ、印旛沼を本當に見たとは言はれませんね。』

こんなことを言ひながら、私達は、既に夜露の置き始めた草道を家の方へと戻つて來た。

八

I君の家の中の灯は、此方から見ると忙しく往つたり來たりした。

I君の姑で、細君の母親である主婦は、私達のために、風呂などをわかして、その歸りの遲いのを心配して待つてゐたといふことであつた。『さうかえ、瀬戸井まで行つたのかえ。私はまたさうとは思はなかつたもんだから、この前のやうに、路でも迷つたのかしら！と思つて、今、迎へに人をやらうと思つてゐたんだよ。それは大變だつた……瀬戸井までぐるつと廻つたんぢや、それは大變だつた。まア、ゆつくり湯にでも入つて……』主婦はかう言つて、いかにも馴々しく私をも欵待して呉れた。

私は奥の風呂場に薪の赤く燃えてゐるのを見た。着物を脱ぐところに、新しい花莚の敷かれてあるのを見た。湯の加減を見に來た男は、丁寧に私の背中を流して呉れた。私は田舎の親類にでも行つたやうな心安さと、なつかしさと、親しさとを家の人々から受けずにはゐられなかつた。

『何うか休んでゐて下さい、』といふにも拘らず、病んだ細君までが、髪を束ねて起きてゐて何彼と欵待して呉れた。夕飯の膳には、すべて沼で獲れた鰻、鯉、鮒などの料理が並んでゐた。

『此處等のものは、鰻の素燒に、らつきやうをつけて食ふのを最も好い御馳走にしてゐますが、ひと

『わたるんぢやないんですね。』

『さうだ……渡るんぢやないんだ。』

それで男は向うに行つた。暫くして私が見た時には、二三人の客を乗せた小さな渡舟が、夕日の微かにさし渡つた沼の上に靜かに動いて行くのが見えた。

一時間ほど經つた後には、私達は既にそこにゐなかつた。私達は、日が落ちて、あたりが暗くならない中に、萩原新田まで歸つて行くためには、かなりに急がなければならないといふことを知つた。歸りには是非寄つて行く豫定であつた吉高城址にも從つて寄つて行くことが出來なかつた。私達は急いで歩いた。松原を半ばほどやつて來た頃には、もはやあたりは暗くなつてゐた。

松蟲祠も、またやつて來ることにして、眞直に丘陵の中から、沼沿ひの村の方へと私達は出て行つた。土手の上に辛うじて行き着いた時には、あたりはもうすつかり夜になつて、ところどころの灯が明るく人家の所在を示してゐるばかりであつた。すれ違つた村の女達が、I君を知つてゐて、

『今晩は！』などと挨拶して通つて行つたりした。

あたりには、夏の夜の田園のさまがかなりに色濃くあらはれ出してゐた。叢には、蟲の聲がして、チラチラと螢が光つた。時にはそれがそこらから飛び出して、空高く飛んで行つた。

『好いですな！　田舍の夏の夜は！』

『さうなりますかね。隨分、時間が早く經ちましたね。……矢張舟の中で手間取つたと見えますね。』
『さうですね。』
折角やつて來ても、このあたりには、靜かに落附いて、酒を飮んで行くやうな家はなかつた。私達は、爲方なしに、I君がいつも散歩にやつて來た時に休んで行くといふ沼沿の酒屋の緣臺に腰を休めた。
それは酒や醬油を賣ると同時に、小間物や、雜貨や、呉服物を一樣にあきなふといふやうな、田舍に行つて始めて見ることの出來るやうな店であつた。私はそこで、冷やつこを肴に、まづい田舍の地酒を飮んだ。
そこには綺麗な吹井があつて、水が美しくあたりに溢れこぼれてゐた。その時丁度襷がけになつた若い丸髷の細君が赤い手絡を見せてせつせとそこで物を洗つてゐるのを私は見かけた。さう大して美しい人でもなかつたけれども、あたりのさまが、何處となくそこに調和して、私にすぐれた名所圖繪中の挿畫を思はせた。
すぐに向うにある渡船小屋から、
『貴方がたは、向うにわたるんぢやありませんか。』
かう言つて男がやつて來た。
『いや!』

方では、十年も違ふでせう。物價なんぞだつて、生活だつて、何だつて、ぐつと違ふんですから。』

『さうですかね。』

『それも、ごくわづかの間です。この沼の沿岸の丘陵の地の中だけです。木下に行つてはさうした生活は丸でなくなつて了ひますけれど……』

『ぢや、まア、こゝだけが十年も時代におくれてゐるといふわけですね。それも單に交通線に離れてゐるといふだけの理由で――』

『その理由だけだか、何うだか、他に猶ほ理由があるか何うか、それはわかりませんけれど、兎に角、さういふ生活だといふことは事實です。』

こんな話をしながら、私達は古寺の傍に添ひ、村役場の前を過ぎ、それからよち〳〵と坂を下りて、瀨戸井の村の人家のある方へと次第に下りて行つた。家から舟に出かけた時は、まだ一時少し過ぎた位であつたが、あちこちで手間取つたと見えて、そこで時計を出して見た私は、

『ほ！　隨分、時間がかゝつたんですね？』

思はずかう言はずにはゐられなかつた。

『何時です、もう？』

『もう、四時半ですよ。』

『一里位なもんでせう。そこに行くと、もう佐倉の煙突が見えますよ。』

私達の前には、篠竹の細いツンツンした藪が、半ば白く半ば青く一面に連つて見えてゐたが、次第に近づいて行くと、路は畠の中から、がつくり谷地へ下りて行くやうな形を取つて、それと同時に、沼と言ふよりは、寧ろ時を經て衰へた川と言つた方が適當だと思はれるやうな錆びた水がぼんやりと白くその前に横つてゐるのが見えた。

『こゝが瀬戸井の渡ですね？』

『え、さうです……』

『ちよつと好いですな。』

『さうでせう。』

『衰へた形が面白いですな。いかにも年月を經た沼か川かと云ふ氣がしますね。此處等に來ると、とても都會の文化なんて言ふことは、想像が出來ませんね。田舍も田舍、隨分さびしい田舍ッていふ氣がしますね。』

『ひどい田舍なんですもの、實際……』

『でも、沼を渡れば、もうすぐ佐倉ぢやありませんか。』

『ところが、さうぢやないんです。沼の向うと此方とでは、大變な違ひなんです。何しろ、向うと此

小さな古びたペンキ塗の郵便局、かと思ふと、かういふところに泊るものもあるかと思はれるやうなさびしい旅舍、樹のこんもりと繁つてゐる鎭守祠、暫く行くと、その村の人家も盡きて、再び丘の上のひろ〳〵とした沼のあらはれ出して來るのを私達は目にした。

七

『もうすぐそこです。』

かうＩ君は突如として言つた。

『瀬戸井が？』

『え……』

『近いんですね。』

『え、そんなに遠くはありません。舟で沼を廻ると、三里位ありますけれど、陸をくると、私の家から一里に少し遠い位なものですから……。』

『そんなに近いんですか。』

『沼はぐる〳〵帶のやうに廻つてゐますから……』

『佐倉は、その渡しを渡つてから、いくらもないんでせう？』

『さうですな。』

『これが、落日とか　または月の出だと言ふと、猶ほ一層好いんですよ。何とも言はれませんよ。だから、私は此處に來た當座は、何ぞと言つては、この丘の中に入つて來て、よく迷兒になつたんですよ。全く別天地ですからな。』

『本當ですな。』

かう私は言つたが、『さつき舟で渡つて來た廣沼は、右になりますか？』

『え、さうです。もつとずつと右です。今、見てゐるのは、丁度、甚兵衞の渡しの少し左位になりますかな。』

『左ですかな。』

『え、さうです。吉高の松が、あそこですから……』

で、私達は暫しそこに立つて眺めた。そこらには、甘藷の畠が一面に連つて、向うに低く松の林が連つて見えた。やがて私達は其處を去つて、松原の中へと入つて行つたが、少し行くと、佐倉から木下に通ずる大きな街道が白い埃塵をあげて通る荷車の轍の跡とをあたりに見せて、長く松原の中に通じてゐるのが見えた。『この路を木下まで行つて見ても、ちよつと面白いですよ。』などとI君は言つた。

やがて小さな宿驛らしい人家があらはれて來た。低い板葺屋根、カンカン音を立てゝゐる村の鍛冶屋、

そこから少し來て再び松林に入らうとした時、

『あ……』

かう異口同音に言つて私達は立どまつた。何故と言へば、そこからは、美しい沼の一面が、さながらカンバスの中に劃られたやうにはつきりそこにあらはれて見えたからであつた。それは丁度、吉高城址の松のなびきが、その前景を成すと同時に、對岸の松崎あたりの丘陵がその背景を築つてゐるといふ形になつてゐた。

『好いですな！』

かう私は思はず言つた。

I君もさも得意さうに、『これが忘れられないんですよ。こんなところにと思はれるやうなところに、ひよつくりかういふ風に沼があらはれて見えるんですからな。え、え、此處等ばかりぢやありませんとも……。かういふ風に見えるところは澤山に澤山にあります。瀬戸井の方でも、松蟲の方でも、それから吉高の方でも、何處からでも、沼の一部がひよつくりあらはれて見えるから面白いですよ。まア、さうですな、印旛沼の特色と言へば、これが特色ですな。だから沼だけ見たんぢや、本當に沼を見たとは言はれない。何うしても、この複雑した、變化に富んだ丘陵の中を歩いて見なくつては、印旛沼を完全に味はつたとは言はれないわけですな。』

丁度、巨きな龍が、ところどころにその片鱗をあらはすやうに、をり〳〵その沼が光つてあらはれて見えるのも、私に一種他と異なつた印象を與へた。

ある丘の上には、松原を出外れたところに、此處等に不似合なほど大きな小學校の建てられてあるのを見た。

丘から丘へと歩いて來て、夥しく咽喉が乾いてゐる私は、そこに、その前に、大きな車井戸のあるのを發見して、そのまゝその傍に歩み寄つた。

『此處等の水は大丈夫でせうね？』

同じく寄つて來て、覗くやうにしたI君は、

『大丈夫でせうとも。……何しろ、深いですからな。』

で、私は車井戸の繩に手をかけてそれを繰つた。實際深いことゝ言つたら！　手繰つても手繰つても、釣瓶は容易に私の手先までやつて來なかつた。

『これは深い！』

かう私は思はず言つた。

漸くにやつて來た釣瓶の水の淸さ、また冷たさ！　私もI君も暫しは口も放さぬばかりにして心ゆくばかりにそのつめたい山の水を飲んだ。

て行つた。

丘と丘との間には、全く松で蔽はれたやうな草山などもあつた。

『坂の多いところですね、此處等は？』

かう私が言ふと、

『此處等は皆なかうです。谷から丘、丘から谷といふ風に、小さな山が起伏してゐますからな……。』しかし、そこが好いと思ひます。ちよつと、他にはないやうな氣がしますね。』

『さうですとも……』

『沼たけては、さう大して面白くはないけれども、この複雜した丘と、谷と、その丘と谷とを縫つた松林があるので、それで、この印旛沼は面白いと思ひます。』

『本當ですね。』

實際、この下總の低い丘陵は特色に富んでゐた。都會に近いところでありながら、全く深山にでも入つたやうな感じのするところが到るところにあつた。房總線で旅行しても、または兩總線で旅行しても、汽車の窓の中から、旅客はこの下總山地を指して通ることが出來るのであるけれど、仔細にこれを探らうとするのは容易なことでなかつた。ことに、この印旛沼の古い錆びた沼か、全くその丘陵の中に埋められたやうにして存在してゐる形が、私に何とも言はれないロマンチツクな感じを起させた。

『さうですな。』

『それも、沼でなければ見られない水郷ですな。霞ケ浦の潮來附近などとは丸で違つた感じですな。』

『それは、霞ケ浦には、此處はとても比べ物にはなりませんけれど――』

『いや、さうぢやないと思ひます。此處には此處の特色があつて、霞ケ浦あたりで見られない水郷の味があると思ひます。手賀沼とはよく似てゐるけれども、此處の方がコンポジションが變化に富んでゐますね。何處か複雜してゐますね。』

こんなことを話しながら、私とI君とは歩いた。振返ると、今、舟から上つた岸はすぐそこに見えて、蘆荻の靡いてゐる綠の上に花島山の黑く聳えてゐるのがくつきり繪のやうに指された。

私達は振り返り振り返りながら歩いた。私達の前には靜かな丘と丘に狹まれた青田があつた。其青田に面して大きな豪農の邸を思はせる門や、垣や、葡萄棚があつた。下總丘陵でなければ他に見ることの出來ない小さな谷や小さな坂があらはれ出して來た。

いかにも靜かな田舍であつた。かうしたところにも都會の文化の影響がやがて來るかと思はれるほどそれほど靜かな田舍であつた。谷を窮めたところに坂があつて、その坂に添うて淡竹の藪がある。その藪の蔭には鷄犬の聲が微かにきこえてゐる。かと思ふと、かうしたところに、かうした村があるかと思はれるやうな五六軒の人家がひよつくりあらはれて來て、それがまた次第に、私達を向うの谷地へと伴れ

から私は手帳にかきつけた。

次第に、魚を獲るための竹の周圍を取卷いたものが、私達の前にあらはれて來た。琵琶湖では、これを魞と言つてゐるが、此處ではぐれと言つてゐるといふことである。『はゝアおもしろいですね。まぐれ込むのでぐれですね。』こんなことを言つて私達は笑つた。

藻刈舟も二艘も三艘も、長い竿や鎌で頻りに藻を刈つて舟に積んでゐるのが、そこここに見え出して來た。次第に甚兵衛の渡しが近づいて來た。此處に來ると、廣沼はぐつと後になつて、沼は漸く川のやうな形を示し出した。岸には渡しを待つてゐる自轉車やパラソルなどが見えてゐた。雲は次第に薄くなつて、日影がをり〳〵暑く舟を照すやうになつた。

花島山は、印旛沼の勝景の一つに數へられてゐるのであるけれども、今はすつかり荒廢して了つてゐて、のぼつて見たところで、とても沼の眺めを恣まゝにすることは出來ないといふことであつた。當方なしに、私達は、瀬戸井まで舟でぐるりと廻つて行くことはやめて、その近くで、舟を此方の岸に寄せさせることにした。

六

『いかにも、此處等は水郷らしいですなア。』

『印旛沼では、こゝらが、廣沼の中心で、一番濶いところですよ。瀬戸井のわたしあたりは此處等に比べると、もつとぐつと狹いですから……』

『甚兵衞の渡しは？』

『向うです……』

かう言つて、I君は、舟の向つて進んで行つてゐる對岸の方を指した。そこには大きな松の靡いてゐるのが見えた。

いかにもあたりはしんとしてゐた。半ば曇つた空の鈍色をした雲が、錆びた沼を一面に蓋をしてゐるやうに思はれた。一鳥も飛ばず、一波も颺らざるさまが、何とも言はれない寥廓とした心持を私に誘つた。私はかうして舟に坐つて、沼の唯中に泛んでゐるといふさまを、數千年も前の時代に置いて見るやうな心持がした。

錆び果てし
沼のおもてに
大空の
ひろくうつるが
さびしかりけり

印旛沼にて

え。でも……な、この沼には不思議なことはあるにはあるつて言ふだ。一夜中、漕ぎ廻つても、何うしても元のところに歸ることは出來ねえで弱つたなどといふ話はよく聞くだよ。」

「ぼらの火つていふ奴は？」

「あれはめづらしくはねえ。いくらでもあるア。夜漁に出りや、いつでも光つてるア。」

「兎に角、古い沼だけに、いろ〳〵なものがあるにはあるらしいですね。だから漁師も、夜は滅多に漁に出ないさうですよ。」

I君もかう傍から言つた。

舟は次第に沼の中心へと出て行つた。それでも、藻はまだ澤山に生えてゐて、櫂や艪を十分につかふことは出來ないらしかつた。

「えらい藻ですね。……何處まで行つてもかう藻が深いですか？」

かう私が訊くと、

「藻のねえところはねえだな。沼はすつかり藻だ。」

かう村の若者は言つた。

いかにも年月を經た古い沼であるのが私にも知れた。錆びた色も、實はさうした長い年月を示してゐるのであつた。船は靜かに沼の中央へ出て行つた。

『一時間ぢや無理だ……。』

暫く考へて、

『瀬戸井に行くんけえ。それなら、花島山のとこからあがつて行く方が、その方が近いや。』

『さうかなア……』

こんな話をしてゐる中に、舟はいつともなく泥濘を離れて、藻の多い水の中へと浮んで行つた。まだ櫂も竿もつかふことが出來ないので、若者は水中に立つたまゝ舟を押した。

私達の前には、さびしい錆色をした大きな沼があらはれ出して來た。それは成ほどこれが印旛沼かと思はれるやうな古い古い沼であつた。向うの岸の低い丘には、松の林や杉の杜が一面に連りわたつて、それからずつと蘆荻が風に吹き靡かされてゐるが、その錆びた色をした水の上に、曇つた空のどんよりと映つてゐるさまは、何とも言はれない佗しさとさびしさを私の心に誘つた。とても私は霞ケ浦あたりのあの明るい色彩をそこに發見することは出來なかつた。

私は夜陰にこの沼の上にあらはれるといふ臭い火の玉のことなどを頭に浮べずにはゐられなかつた。

私はその話を持出した。

と、若者は笑つて、『そんなことを言ひますけども、私はまだ一度もそんなものに出會したことはね

[illegible]を運び、それから、力を出して、出來るだけ近くまでその舟を引張り寄せた。私とＩ君とは漸くその舟に乘り移ることが出來た。

「隨分渇水たね。」

かうＩ君は若者に言つた。

若者は今度は舟を水まで押出すことについて骨を折らなければならなかつた。後には若者は帶を解き、衣服をぬぎ、丸裸になつて曳々聲を出して舟を押した。

「大變たね。いつでも、舟を出すには、こんなに厄介なのかね。」

かう私が訊くと、

「いや、いつでもはわけがないのです。いつでもなら、もつと、ぐつと手前まで舟が入るんですから……。何しろ、少し水が出て來れば、あの土手のところまではわけなく押し寄せて行くんですからね。」

かうＩ君も説明したが、更に若者の方を向いて、「今日は瀬戸井の渡しまで行けるかね？」

「瀬戸井の渡し？」

「遠いかね？」

「大變廻りたでな。」

「でも、一時間もあれば、行けるには行けるんだらう。」

『何うして明けたんだね？』
『川も渴れたんで。』
かう言ひながら、若者は堤防の上をぐん〳〵歩いて行つた。
『舟は何處だね？』
『あんなとこだァな……。そら、見えねえか。そら……』
若者はかう言つて指した。
成ほど蘆荻の深く生茂つたところに、土手から下りて行つた一條の路があつて、それが微かに水のあるあたりまでついて行つてゐるのが指された。
『おう、あんなところか。』
I君もかう言つてそつちを見た。流石にその遠いのに驚いたといふ風であつた。
あるところまで來て、それから、私達は土手を下りた。そして暫しの間は蘆荻の一面に茂り合つたやうなところをわけながら進んで行つた。剖葦のキ、キ、キと鳴く聲がすぐ近くでした。
次第に路はわるくなつて行つた。終には、駒下駄で歩くことが出來ないので、爲方なしに、足袋をぬいで、跣足になつて、辛うじて舟の寄せてあるところまで達した。
一番先頭に立つた若者は、自分の持つた茣蓙や茶器を先づ舟の中に入れ、戻つて、I君の持つてゐる座

「水あほひはまだ咲かんでせうね？」

今度は私がかう後から訊いた。

「さア、まだ早いですね。八月の末にならなけりや――。實際、その時分になると、沼にはいろんなものが咲きますがね。河骨なんか綺麗ですけども……」

「八月末ですか。さういふ水草の花の咲くのは？」

「何うしても、その位になりますな。」

「あの水あほひの紫の花を見ると、いかにも沼といふ氣がしますね。」

「本當ですね。」

こんな話をしてゐるうちに、水田の畔の路は盡きて、次第に、長い高い堤防の上へとのぼつて行つた。

やがて沼があらはれ出した。

それは思つたより佗しい、または淋しい錆びた沼であつた。（はゝア、これが印旛沼かな！）と思はれるやうな……。堤防から水のあるところまでも、かなりに遠かつた。

「渇水だね？」

かうI君が言ふと、

「渇水ですとも、今、一番の渇水でさ……それに閘門を明けたで……」

ゐではありませんね。』

I君の眉にはその時の興を思ふやうな情熱が歴々とあらはれて見えた。

五

私はI君の後について行つた。

I君の先には、私達のために舟を沼に放つて呉れる筈の村の一人の若者が、莫蓙だの煙草盆だの茶器だのを持つて歩いて行つた。I君は座蒲團を二枚持つた。

『暑くはないかね。』

かうI君は村の若者に聲をかけた。

『曇つてるだで、さうひどく暑くもなかんべと思ふがな。』

『ハゲやしないかしら？』

『さうな……』

若者は空を見廻して、『雲がかなりひろくひろがつてるだで、ちよつくらハゲることもあんめいと思ふがな。』

で、私達はすた〳〵と水田の畔のやうなところを歩いた。

らしいと思はれるほどそれほど文化におくれてゐるといふこと、この沼の岸の民の多くは懶惰で酒ばかり飲んでゐるといふこと、殊に女達はうそを言ふことを何とも思はないといふこと、それから話は次第に進んで、來た當座に、あちこちと唯、無闇に沼の岸や、沼に沿つた丘陵の中を歩いたことをI君は頻りに話した。I君の言ふ所に由ると、沼の岸の丘陵の中は非常に面白いといふことであつた。松蟲姫の祠、お萬さまの祠、そこいらには千葉家四十八城の昔の城址などもあつて、深く探つて見れば、歴史的にもめづらしいことがいくらも出て來るといふことであつた。それに、をり〳〵丘陵の松林の中から、沼が斷片的にあらはれて見えるさまが面白かつた。おやこんなところにと思はれるところに、ひよつくり沼の水光が閃めいて見えたりした。吉高城址あたりは中でも殊に眺望が好かつた。

「初めの中は、松林の中で、よく方角がわからなくなつて困りましたよ。此方だと思つてあべこべの方へぐんぐん歩いて行つたり何かしたんですから……。ある時なんか、松林の中で、日が暮れて、何方に行つて好いんだか、聞く人もなし、本當に閉口して了ひましたよ。」

かう言つて、I君はその丘陵の中の複雜した路を話した。

「吉高からの歸りに、沼の上に出た月を見た時には、何とも言はれませんでしたよ。お盆と言つて好いか、大きな笠と言つて好いか、それともまた銅の金盥と言つてよいかわからないやうな月が、松林の上に出て、キラ〳〵と沼に映つてゐるぢやありませんか。實際、細かに見ると、決して面白くないとこ

『五年？　大變ですね。』
『半は、奴のために費されて了つたやうな氣がしますよ。何うも、人間といふものは、しやうがないもので、長くなると、いろんなことを考へますからねえ。何うもかうしてゐると、何だか、萬事が中ぶらりんで、仕事が手につかないやうな氣がして爲方がありません。さうかと言つて、早く何うかなつて了へば好いと思ふのではないですけれどもね。』
『それは何うしてもさうでせうね。』
『このまゝ、何もせずに終つて了つてはつまりませんからな。何か、少しは殘して置けるやうなものでも書いて置きたいと思ひますからな……。何うもしやうがありませんよ。』
『しかし、かうした靜かな、世離れたところにゐたら、自然に、筆が執れるやうになるでせうがな？』
『初めは、さう思つて來ましたけれど、却つて離れてゐて、病人のことを心配するよりはと思つてやつて來ましたけれども、矢張、中途半端では駄目ですよ……。眞劍にならなければ矢張駄目ですよ。』
I君はこんなことを言つて笑つた。

四

I君は此處に來てからの話を何彼と私にしてきかせた。汽車の線から一里離れたところにしてはめづ

于蘭盆に
をどらぬ都
うかりけり

と見事に書いてあつた。

I君は話した。「これは紅葉先生の遺けですよ。先生は佐渡に行つて、小木で、則來た出來て、歸るにも歸れなくなつた。それを漸くわかれて歸つて來たが、何うも思ひ出されて、いけない。何うも忘れられない。それで佐渡の盆に比べて都の盆を考へるとさびしいと言つて、いくらか言外に女のことをも詠み込んでゐるんですよ。面白いぢやありませんか。」

私にも紅葉山人時分のことがいろ〳〵に思ひ出されて來た。つゞいてI君が紅葉門下で、その兄君と一緒に、紅顏の美少年であつた時代のことがそれからそれへと話し出されて來た。私はその紅顏の美少年が、病んだ妻を看護すべく、かうして沼の畔の田舍の舊家に一時身を落ちつけなければならなくなつたさまを、ロマンチツクに考へずにはゐられなかつた。私は過ぎ去つた月日の中に種々に織り込まれた色彩をそれからそれへと描き出して見た。

「いつからなんです、細君が病氣になつたのは？」

「もう五年になりますよ。」

『え、さうです……。そこから、舟で、甚兵衞の渉しの方まで行つて見ると、ちよつと面白いですよ。午後から、ひとつ行つて見ませう。』
『コ、コ、コ、コ、ココ。』
急に、青田の中で、かうした高い聲がきこえた。
『水鷄ですよ、あれは。』
『水鷄！　さうですか、好いですな、東京では、とてもきかれませんね。』
『あれが、夜も晝もべつに鳴いてゐるんですからね。水鷄の聲が伴侶となるといふことは、歌などによくありますけれど、實際、かうして始終聞いてゐると、さうした氣がしますよ。いかにも都會離れがしたやうな氣がしますよ。』
『さうでせうね。』
『コ、コ、コ、ココ。』かうその水鷄の聲は靜かにきこえた。

三

『ひとつ、紅葉先生のやつをかけて見ませうか。』
かう言つてＩ君は茶懸けの横物を床にかけて見せた。それには、「

そこは地盤がいくらか高くなつてゐるので、一面に、下に青田を望み、堤防を望み、青高城址の松を望み、深く重り合つてゐる丘陵を一目に望むことが出來るやうになつた。涼しい風が吹いて來た。

『涼しい、好い處ですね？』

『何うしても、水が近いこと、風も涼しいですよ。』

『こゝからは沼は近いんですか？』

『え、もうすぐです。』

I君は立つて緣側の隅に行つて、そこから沼を指點した。

『あゝ見える、見える。』

錆びた色をした沼ではあつたけれども、またそれほど心を惹くに足りる眺めではなかつたけれども、それでも私は暫しの間そこを離れることが出來なかつた。

『沼の北の外れですかね、其處等は？』かう私は訊いた。

『いや西です。そこが一番廣いところです。廣沼といふのがそこです。印旛沼は此處が一番濶くつて、それから、ずうつと、かう東から北へ入り込んでゐますからね。北の外れは、何でも、此方に當つてゐるさうですよ。』かう言つて、全くそれと反對の方角をＩ君は指して見せた。

『堤防からすぐ沼ですか？』

こに病人が枕を高くして寢てゐるのを發見した。私は垣の處に立つて、車夫が其の旨を家人に傳へてくれるのをじつとして此方から見てゐた。少くとも私の不意の訪問は一家の靜かな空氣を破つたに相違なかつた。若い女中が向うから此方に來て、離座敷のI君にその旨を傳へたり、今まで寢てゐたI君が慌てゝ離座敷の雨戸を明け出したり、暫くして、I君が眠さうな顏をそこに出したりした。

『ヤア、好く來て下すつた。』

『まだ寢てたんですか?』

『昨夜、遲かつたもんですから、三時位まで起きてゐたんですから……』

『相變らず、夜が遲いと見えますね?』

『何うも、わるい癖で……』

I君はこんなことを言ひながら、私をその奧の離れの一間の方へと伴れて行つた。私はそこで始めてI君の病んだ細君に挨拶をしたり、報告なしの不意の訪問を謝したり、今朝急にその氣になつて、何も彼もほつたらかしてそのまゝ出て來た話をしたりした。細君の病氣はもはやかなりに重いらしく、起きて話はしてゐても、聲は微かで、何うかするこ、聞取れない位であつた。何となしに私は悲しい思に誘はれた。

I君のゐる前の離座敷の掃除が出來たといふので、やがて私は其方へと行つた。私は其處に靜かな世離れた別天地を發見した。

の落ちてゐるさまから推して、現に私の車の通つて行つてゐるあたりも、昔は印旛沼の一部であつたことがそれとなく想像された。七月の日影は暑く頭の上からさした。

車夫は急に歩みを緩めて、

『そら向うに見えませう、三軒ほど藁葺屋根が……。その眞中のが、Oさんの家でさあ……』

『あの大きな欅の樹のある右の方の？』

『え、さう……』

『ぢや、もうぢきだね？』

一本筋の草の生えた路が、眞直にその方へと向つて走つてゐるのを私は眼にした。午に近い日影は明るくキラ／＼した。田には一番草を取りに入つてゐる農夫達の笠がところ／＼に光つて見えた。

I君の家はいくらか地盤が高くなつてゐて、周圍には昔は濠であつたかと思はれるやうな細長い田がぐるりと取卷いてゐるのを私は目にした。私はそこで車を捨てゝ、案内を乞ふために垣の方へと行つた。

二

大きな廣場やら、庫やら、物置やら、またはその奥にある二階ばかりの家屋やらがぐるりと取卷いてゐるやうなシインを私は一番先にそこに發見した。續いて奥の家屋の二階に、蚊帳が高く吊られて、そ

たこと、祖父さんの代から段々わるくなつて、そのお孃樣の父親の代になつて、すつかり滅茶々々になつて了つたことなどがそれからそれへと盡きずに話された。次第に車は潤々とした野の方へと出て行つた。私の志して來た印旛沼そのものは、まだそれこその前にあらはれては來なかつたけれども、次第に小川が多く、泥淖が多く、田が多く、小さく紫色をした水草の化などがそこゝにあらはれ出して來た。赤ちやけた丘陵に松の斜めに欹つてゐるのなどもそれと指さゝれた。

『沼はまだ見えないかね？』

かう私は車の上から訊いて見た。

『まだ見えませんな！』

『向うに見える松のあたりが、沼になつてゐるのかね？』

『さうです。あの右の方がさうです。あの松は吉高ですから……』

『吉高ツて、城址のあるところだね？』

『え、さうです。』

私が車の上で、五萬分の地圖をひろげてあれかこれかと見當をつけてゐる中に、車は小川の岸に沿つたり、堤防の上を横ぎつたり、または淡竹の藪をぐる〳〵廻つたりして、次第にＩ君の宅のある萩原新田の方へと近寄つて行つた。ところ〴〵に散點した村の人家の形から推し、東から南にかけて丘陵の裾

印旛沼にて

一

「こばやし」といふ驛で私は下りた。

小さな驛だつた。あたりを見廻しても、車の待つてゐるものもなかつた。爲方がなしに、私はあちらこちらと聞いて歩いた。此處からＩ君の宅のある萩原新田まで、一里に少し遠い位の距離であるから、歩いて行つても行かれないことはなかつたけれど、暑い日盛であるし、始めての路ではあるし、出來ることさなら車を得たいと私は思つた。幸ひに、少し此方に來たところに、此處等によく見る酌婦のある料理屋があつて、その前に車を置いてある家があつた。やがて爺さんの車夫が出て來た。

この車夫は、Ｉ君の家のことをかなりよく知つてゐた。「あ、Ｏさんのお孃樣の若旦那ですか」かう言つていろ／＼な話をした。そのお孃樣がブラ／＼病で東京から歸つてゐること、若旦那らしい中年の東京風の姿をした紳士がをり／＼この驛にも出て來ること、昔はその家は此處等でも有名な豪家であつ

一浴した後で、私達は海岸の方へと出かけて行つた。

いくらも歩かない中に、やがて私達は碧いひろい海をその松林の間に發見した。實際、美しい靜かな海であつた。あそこいらが瀨波港であらうと思はれるあたりには、徙崖の連なりわたつた上に翠嵐が揺曳して、松林の半を刷毛で撫でたやうに薄く掠めてゐるのが見られた。前には、粟島の一靑螺がさながらほつかりと海の中に置かれた置物か何かのやうに靜かに靜かに横はつてゐた。

『あれは、鼠ケ關あたりでも見えてゐた島だね！』

かう男の兒は指した。

『さうだ……』かう私は言つたが、『それにしても佐渡は見えないかな。此處からは見える筈だからな。』

『あゝ、見える。そら、薄く、ぼんやりと、山が――』かう男の兒は海の上を指した。次第に、佐渡の島影が海の空氣の中にそれと微にあらはれて見えて來るやうな氣がした。

私達は裏町のやうなところを、「瀬波の松山温泉へ行くには何う行くのですか？」と聞きながら歩いた。寺が二軒も三軒も並んでゐるやうなところがあつたり、大きな倉庫の連なつてゐるやうなところがあつたり、やがて町外れ近く、停車場の所在地もそれと明かになるやうなあたりまで出て來たが、ふと見ると、海近い松林の中に、白い噴烟のもく／＼と騰つてゐるのを目にした。男の兒は、

「あれは？」と言つて指した。

「ほ！　あれが、温泉だ……。噴き出してゐる温泉の湯氣だ。明治三十四年に石油を掘り出さうとして井櫓をつくつたところにあの温泉が噴き出したんだ。」

かう話しながら私もぢつと松原の中のその白い噴烟を眺めた。

私達は、一方に停車場を望み、一方に瀬波港の碧い海を見るやうな畠の中の道――草叢に撫子が雜つて咲いてゐたり、機おりが鳴いてゐたりするやうな砂山道を、次第にその松原の方へと近寄つて行つた。

瀬波の温泉は、まだ開けてさう長い年月を經てゐないので、浴舍の構造や、設備や、客の取扱ひは、さう大してすぐれてゐるといふことは出來なかつたけれども、その松原の中に埋れるやうにしてあるといふ感じと、温泉場でそして何處か海水浴場らしい氣分にも富んでゐる形とは、私の旅情を慰くに十分であつた。私は長い辛い旅の疲勞を醫すに相應しいところを得たことを此上もなく喜ばずにはゐられなかつた。

來てゐた。私達は少し休んで、そしてそれに乘ることにした。

六

松の大きな並木、それにつゞいた欅の並木、その間から見た三面川の流域の山巒は大きかつた。半晴れやうとした空のところどころに、或は肩、或は髻、或は鬚眉を現はした形は、さながら一幅の南畫の山水圖であつた。長い間、並行して走りながら、一緒にならなかつた三面川の橋は、次第に私達の前に近づいて來た。

それは鮭漁の盛んな川であつた。またその奥には平家の一族の隱れたといふ深山の一部落を持つた川であつた。その川に架けた橋の板をとゞろに鳴らしながら、一散に走つて渡つた乘合馬車は、今度は更に川に沿つて、今までとは全く地形の異つた、越後平野の深く山巒の中に楔のやうに入込んだやうな感じのする平野を、次第に翠嵐の搖曳する村上の町へと向つて駛つた。

その中央に古城址を持つた村上の町は、ちよつと古風な好い感じのする町であつた。ところどころにペンキ塗の洋館などが建つてゐるけれども、概して昔のまゝの、庇の低い家屋が多く、しかもそれが行つても行つても盡きずに長く續いた。漸く乘合馬車の繼立場に來て、それを下りたが、それから停車場まで行くにも、まだかなりに長い間歩かなければならなかつた。

などと男の兒は言つた。

しかし、私は一刻も早くこの長い山轡の中を拔けて向うに出たいと思つた。一週間ほど前に、東京を出てそれからやつて來た旅は、決して決して樂ではなかつた。陸中の猊鼻溪に一日、嚴美溪に一日、それから脊梁山脈の栗駒嶽の殆ど頂上に近い處にある須川溫泉に一夜を過して、翌る日は秋田の小安川の溪谷を探り、稻庭から湯澤に出て、それからずつと汽車で酒田の方へと出て來たのであるが、その間には隨分辛いことが多かつた。密林の中の風雨、泥濘の山路、行つても行つてもやつて來ない山の溫泉、時には深い熊笹の中に路を失つて何うすることも出來なかつたことなどもあつた。しかし、さうした困難を突破して、今は兎に角豫定通りに此處までやつて來た。この峠を越えて越後の村上に出さへすれば、あとは汽車がある。そこからすぐにでも東京に歸つて行かれる汽車がある。海府浦にはまた來る時があるであらう。兎に角この峠を突破しやう……。かう思つて、私は急いで峠を下つた。

次第に一つ一つ展けて行く山轡のさまは面白かつた。始めは細く潺々として咽ぶやうに流れてゐる谷の水も、行くまゝに次第に大きく廣くなつて、その流域の彼方には、白堊の村落や、榛の並木や、眞直に直線を引いたやうに通じてゐる道路がそれと指されて見えた。開けるまゝに濶々とした野はあらはれて、遙かにそれを繞つた高い山轡の聳えてゐるのが美しく指さゝれた。

鶴野町は半ば樹木・半ば畑の中にあるやうなさびしい町であつた。私はそこには村にある乘合馬車が

『矢張、山が深い故だね？』

『さうです……。ちよつと見ると、この峠は、さうえらい登り下りもないし、高い山もないし、車も通ふから、さうひどい峠とは思はないかも知れませんが、何しろ、此方に、』と東北の方を指して、

『此方に、深い大きな山がありますからな。出羽方面は、十里も二十里も、人の入れないやうな高い深い山ですからな。それで何うしても雪が深いんですな。それに、雪の降るにも、通り路と言ふものがありますな……。この葡萄は、何でもその通り路に中つてゐるとかで、北中なぞは、此處から比べると、餘程雪は少ないですよ。』

『まア、一度、雪の頃に通つて見なくつちや本當のことはわからんね。』

こんなことを言つて私は笑つた。

葡萄を出て少し來ると、そこにまた小さな峠があつた。そしてその峠の上からは、山と山との間を越して、海岸の寒川の方へと出て行く路がわかれてゐた。地圖を繙いて見ると、その間は二里に少し遠い位のものであつた。海府浦のことがまた思ひ出されて來た。『此處から、海府浦に行かうと思へは行かれるんだがな。』

かう私が言ふと、

『行かうか、父さん。』

しかし、この[illegible]で一番大きな旅舍は、向うの家でしたから、屹度そこに泊つたんでせう。大抵は、昔は、旅客はそこに泊つたもんださうですから……』かう言つて、そこの主人はその向うに半倒れかけてる大きな古い家屋を指した。

『今は、人は住んでゐるんですか？』

『いや、もう、すつかりいけなくなりましてな。もう、潰すばかりになつてゐるんだけんど……』

『あとは何をしてゐるんです？』

『なんていふこともねえだ――』

かう言つて、老主婦一人殘して、多い息子達の散々に何處かに行つて了つた一家のことを手短かに話した。

私は話頭を改へて、

『雪は深いつてね、此處は？』

『いや、もう、冬は駄目でさ――。今日でも十日位埋つて了つて、何うすることも出來ないことが一年に二度や三度はありますからな。』

『矢張、冬[illegible]になつてからの方が多いかね？』

『さうですな……十二月頃にもよくさういふことがありますな。二月になつてもあります。』

『そんなに大きくないね。』

『でも、これで、昔からきこえてゐる卍だからな、源義家が此處を通つたことなども、歴史に見えてゐるんだから。』

『ふむ――』

かう言つて男の兒はその大きな岩を仰ぐやうにした。

この明神岩のあるところから、谷を縁どつた路を七八町行くと、やがて葡萄の峠の上であつた。裏日本に横はつた名高い大きな峠としては、あたりの感じがやゝ平凡で、何となく物足らないやうな心持がしたけれども、それでも何處か山の深い、成ほど冬は雪が深く積るであらうと思はれるやうな氣がした。それから少し下りて行つたところに、その葡萄の古驛があつた。

古驛――實際それは北中にも增して、古驛らしい感じに富んだ村であつた。昔は皆旅舍であつた大きな家屋が、庇は傾き、壁は落ちて、そこに住んでゐる人達の顏にも、時代に後れた衰へた空氣が名殘なく巴渦を卷いてゐるのを私は見た。角に大きな雜貨店があつた。

思ふに、南谿のやつて來て泊つた旅舍は未だに存在してゐるのであらう。旅舍としては殘つてゐなくとも、家として殘されてあるに相違ない。かう思つた私は、ちよつと休んだ店で、その話を持ち出して見た。しかし誰も(葡萄嶺雪に步す)の作者を知つてゐるものはなかつた。『さア、わかりませんな……。

五

南谿の通つた舊道は、今は全く草に埋れて、その跡をさへさだかには知ることは出來なかつた。新道は小さな峠から峠へと傳つて、次第に深山らしい氣分をそこに現はして來た。座頭ころがしといふあたりは、殊に深い深い谷が覗かれた。

昔は此處に山賊が隱れてゐて、通りすがりの旅客を脅かしたといふことであつた。折れ曲つた、谷に沿つた路は、ところどころに雲の靡きあがつた山嶺を前にして、漸く私達をその明神岩のほとりへと伴れて行つた。

それはその大きな深谷の遙かに行き詰つたやうなところにあつた。成るほど勝木の旅舍の主人が言つたやうに昔から名高い祠としては、それは餘りに露骨になりすぎたやうになつてゐた。しかしその巨岩の聳えてゐるさま、その下に小さな祠の安置されてゐる形は、私に種々なことを思はせるに十分であつた。時といふものが、一刹那の間に過ぎ去つて行つたさまなども、私の心を堪へ難くした。

「これが明神岩？」

かう男の兒は訊いた。

「さうだ。」

更にその上に展開されたやうな高原に行つた時には、午後の日影が明るく山裾の村にさしわたつて、北中の驛の人家がいかにも山中の村らしい感じを私に與へた。

そこあたりに來ると、勝木川の流れは、既に既に細く、僅に潺々とした音を立てゝゐるばかりであつた。山畠には蕎麥の花が白く一面に連なつて見えた。

まだ、日は高く、行かうと思へば、葡萄まではさう大して骨も折れずに行けたのではあつた。けれども、その北中の古驛の物靜かな感じは、私に、一夜泊つて見たい心持を起させるに十分であつた。大きな衰へた旅舍の庭には、芙蓉の赤い白い花が繪か何かのやうに咲いてゐた。

私達はやがてその旅舍の二階に案内された。私は久し振で、本當の昔の旅をやつてゐるやうな氣持がした。私のゐる二階の前には、『東遊記』の作者が百五十年前に通つた路が依然として昔のまゝに殘つてゐて、その周圍をめぐつた山襟には、白い雲が簇々として渦まきあがつた。河は變つても、あの山だけは、昔も今も同じであつたに相違ない。かう思ふと、その山に深く雪の積つたさまなどがそれとなく眼に映つて見えた。南谿がその弟子の蓑軒と二人で、この旅舍の前を通つて、海岸には出ずに、そのまゝ積雪の山の中を通つて行つたさまなども想像された。

夕に近く、雨になつて、山襟は皆渦まきあがる雲の中に埋れて了つた。私達は靜かにそこに一夜を寢た。

人にその話――さうした昔の文を讀んでゐるので、踰えて行つて見たい氣の起つたことなどを話した。

『さうぢやな、汽車が出來ちや、もう通りたくも通れなくなるやうなところだで、一度は通つて見るのも好からうぢや。』

主人はこんなことを言つて笑つた。

葡萄の古驛が、今でも冬は雪は多く、用事があつて出かけて行つても、うつかり泊るとあくる日は大雪で、それから一週間も十日も歸つて來られないやうな眼に逢ふといふ話などをも主人はしてきかせて呉れた。『何しろ有名な雪の深いところでな……。昔は、おたすけ小舍なども何軒かあつたものだ。』

私はやがてそこを出かけた。何もない平凡な、退屈な十四里の峠、途中で一夜泊らなければ何うしても向うに越えて行くことの出來ない峠、それでも私に取つては何となくなつかしいやうな氣がした。私達は勝木川の峽谷に廻つて、次第に山の中に入つて行つた。

一里ほど行くと、その峽谷に漸く窮つて、山巒が山巒と相面して聳えるやうなところへとやつて來た。ふと見ると危橋が此方から彼方へとかゝつてゐて、渓が凄じく音を立てゝ流れてゐた。山氣が肌に迫つて來た。

橋を渡り終つて、再び平地を山間に認めた時には、自分の身は既に全く萬山の中に埋れて了つたやうな氣がした。あたりの山巒からは雲が絶えず渦まき上つた。

勝木で晝飯を漸く賴んで食はせて貰つた家は、昔、街道に旅客の往來の繁かつた時代には、かなりに榮えた旅舍であつたらしかつたが、今は全く農に歸して了つたらしく、夏蠶の籠などが一杯にそこらに置いてあるのを私達は見た。私達は生れてまだ幾月も經たない樣な幼い兒の靜かに眠つてゐる室で、罐詰から出した鰯のやうなもので晝飯をすませた。しかしそこの主人はちよつと面白かつた。かれは葡萄峠の今昔を話したり、賴三樹が海府浦をたづねた時のことを話したりした。

明神岩の話を私が持出すと、

『あそこもな、もとの大杉がある時分には好かつたが、今はすつかり伐られちやつたで、趣きがなくなつたぢや。』

『村で伐つたんですか?』

『いや新潟縣の技師か何かゞ來て伐つて行つたんだが、惜しいことをしたもんだ。それは立派な杉だつたが……』

その明神岩のことなども、『東遊記』の中には詳しく書いてあるのであつた。橘南谿は三月の初めに村上から鹽野町に來て、思ひもかけない雪の深いのに驚きながらも、三里のところに一日かゝつて、その日は葡萄に泊り、翌日は峠を越して、その明神岩のあるところから北中の方へと出て來たが、幾度となく雪崩を恐れ、あるところでは、危く命を殞すばかりの眼に逢つたことなどが書いてあつた。私は主

四

『おい、もう越後だぜ。』

かう言つて私は路傍に立てられてある里程標を指した。

いかにも國境らしい感じがしてゐた。徙崖と徙崖の間を流れ出してゐる川の海に注ぐあたりにはさびしい漁村がいくつともなく連なつて、それを出外れた向うには、ひろい碧い海が展けられて見えた。路傍の草藪の中には、ギスなどが鳴いてゐた。

府屋町から少し行つたところで、海岸への路と峠へとの路がわかれた。矢張、海よりも峠の方に私は心が惹かれてゐたといふことが次第にわかつて來た。私は左の路を取つた。

『矢張、葡萄峠を越すの？』

かう男の兒は私に訊いた。

勝木まで行く間にある小さな峠は、さびしい人通りのない路であつた。此處に來ると、昨日から傳つて來た海岸はすつかり見えなくなつて、代りに嵐氣だの、雲だの、深い森林だの、山裾に凭つたさびしい村落だのがあらはれ出して來た。小さな溪谷の底には、綺麗な水が靜かにチョロ〱と流れてゐたりした。

乘つたり自動車に乘つたりして、十分に歩くことの機會のなかつたのを漸く滿足させたといふやうにして、子供達はさつさと歩いた。流石に健脚を以て誇りとした私すら、何うかすると後に取殘されるといふやうに――。

從つてまだ晝にもならない中に、私達は、逸早くも鼠ケ關の辨天島のそれと指さゝれるあたりまで來た。

なつかしい鼠ケ關！　なつかしい辨天島！　成るほど羽前の海岸の名所の一つとして決して恥かしいものではないと私は思つた。相模の江の島、または日向の青島に似たやうな感じが何處かでした。しかしさうした景色もあるが、それよりも、一番私を愉快に感じさせたのは、長い年月の間、來たい來たいと思ひながら、つひに來ることが出來なかつたのを、漸く此處までやつて來たといふことであつた。繪葉書などで見た辨天島の松の長く海中に突出したさまを見た時には、私は思はず喜悅の聲を擧げた。

昔の人達が越後の國から出羽の國へと、此處を通つて入つて來たり、出て行つたりしたさまがそれとなく頭に浮んで來た。關東と奥羽との間に横はつた白河關にも增して、この海沿ひのさびしい關所の址は、私に遠い歷史を思はせた。

『あつちも通れる。何方かと言へばあの方が近いから、今ぢや海岸を通る人の方が多かんべ。唯、ちよつとのぼり下りが多いが――』

私にしては、海岸路も葡萄峠も、何方も通つて見たかつた。橘南谿が『東遊記』に書いた「葡萄峠雪に歩す」の一文は、若い時から私の頭に印せられて、いつかは一度通つて見たいと思つてゐた。村上と鼠ケ關の間を通つて見なければ、旅行家としても非常に物足らない樣に思はれてゐた。しかし、一方の海岸路にある海府浦の勝も行つて見たかつた。そこには男鹿半島の孔雀の窟に勝るとも劣らない奇岩と怒濤とがあるといふ。それは勿論、この頃のしけでは、舟を艤して、その奇岩を十分に探るといふことは出來ないにきまつてゐるけれども、それでも、その海岸だけでも好いから、出來るならば通つて見たいといふやうな氣がした。（まア、兎に角出かけて見よう。そして、その近くまで行つて、樣子をきいてから、その二つの一を選ばう。）かう思つて私は出かける支度をした。

私達はやがて昨日の溫海の村へと出て來た。

海岸は長く長く續いた。同じやうな海岸が、漁村と斷崖とトンネルとの長くつゞくやうな海岸が……。雨は落ちて來なかつたけれども、風はかなりに強く、昨日と同じく海の荒れてゐるさまは、それとはつきり指さゝれた。濱には舟が高く引上げられて、退屈さうに漁師達の步いてゐるのを私達は眺めて見た。輌の元氣は、殆ど私達の足を止めさせなかつた。步く支度をして來たから、何うと言つては、馬車に

い饅頭も賣つてゐる。かれ等は皆海岸の方から、籠だの畚だのに、さうしたものを入れて擔いで來たり、または荷車に一荷載せて來てそれをそのまゝ店にして並べて賣つてゐたりするのであつた。そしてかういふ人達は、皆自炊の湯治客を當にして、かうして商賣をしてゐるのであつた。朝市がすんで賣れ殘つた野菜や魚類は、再び籠に入れられて觸れて賣られた。

私はこの朝市の喧しく混雜したシインを面白いと思つた。浴客達が皆宿屋から小さな籠を抱へて出て來て、てんでに、その欲するものを負けさせて買つてゐるさまは、東京ではとても見られないラスチックなものだと思つた。私も出來立ての饅頭などを買つて戻つて來た。

その頃には、空のところどころに碧空が見えて、今日は天氣らしく思はれたけれど、宿の主人の話では、汽船はまだとても通ふまいといふことであつた。『もう二三日逗留してゐらつしやい。さうすりや、屹度出るやうになりますから……』かう主人は言つた。

しかしその位なら、いつそ葡萄峠を越えて、このまゝ越後へ出て行く方が好いと私は思つた。私はいろ〳〵と葡萄峠の話を宿の主人に持ち出して見た。主人は言つた。

『それも好かろ……。なアに、國道だで、そんなにひどいことはありやしねえ。唯、いかにしても長いでな。退屈な路には路だが……』

『海府浦の方は?』

にひけを取らない綺麗さを持つてゐた。

浴後、私はあちらこちら歩いて見た。私は溫海川にかゝつた橋のほとりまでも行つて見た。溪として は、決してすぐれたものではなかつたけれども、山襞と山襞との間に深く折れ曲つて入つて來てゐるさまは、私に爽かな感じを與へずには置かなかつた。この溪に沿つて小國の方まで入つて行つて見たいやうな氣もした。

三

「何です、あれは？」

朝早く俄に起つた騷がしい人聲を聞き附けた私は、かう言つて丁度室に入つて來た女中に訊いた。

「あれですか？　朝市です。」

「え、朝市？　朝市が立つんですか、あゝやつて毎朝……？」

「えゝ。」

湯から上つて來て、私は外へと出て行つて見た。私は不思議な氣がした。そこにはあらゆるものが並んでゐた。野菜もあれば、魚類もある。今獲れたばかりのやうないきの好い小魚もある。さうかと思ふと、豆腐やがんもどきを賣つてゐる。納豆もある。こんにやくもある。その一方ではふかし立ての飯か

た。溫海川の狹い峽谷は、山と山との間に深く穿たれて、そのわかれ路からまだ七八町しか入つて來ないにも拘はらず、靜かな山の中らしい感じがそれとなく私達を襲つて來た。

『はゝア、面白いところだな。』

かう私は言はずにはゐられなかつた。

海に近くつて、そして山の中のやうな氣のする溫泉場、私は今まで行つて見たところをあれかこれかと引きくらべて想像して見た。ふと、伊豆の湯河原が私の胸に思ひ出されて來た。

しかし、湯河原では、かうした鄙びた、さびしい感じを味ふことは出來なかつた。また入つて行く山嵜の感じにも、これほど山に密接に觸れたやうな氣はしなかつた。（鹽原の箒川の谷とは地形は丸で違ふけれども、それでも何處か氣分に似たやうなところがある。）こんなことを思ひながら私は歩いた。

山にぴつたりと沿つて、弓弦のやうに曲つて入つて行つてゐる路は、ポプラで圍まれた、廣い運動場を持つた小學校を通過してから、遙かに向うに、山嵜の裾に當つて、參差として連つてゐる溫泉場らしい人家を見せるやうになつた。

三十分後には、私達はその山の中の溫泉場の氣分に十分に浸ることが出來た。それは見かけに寄らないほど、それほどすぐれた旅舍に富んでゐるやうなところであつた。軒を並べた旅舍は大抵三層四層の高樓で、設備も決して馬鹿には出來なかつた。私達はある旅舍に草鞋をぬいだが、浴槽も湯河原あたり

こんなことを言ひながら私達はすた〳〵歩いた。

いかにも漁村らしい海に沿つた村を抜けたり、此方から向うへ徙崖を貫いたトンネルの中を通つたり、目も覺めるやうな大きな立岩を仰いで眺めたり、時にはまた再び勾配の高い絶壁の半腹の方へ上つて行つたりしたが、しかも、三瀬を出たあたりに見たやうな絶壁乃至徙崖に再び逢ふことなしに、次第に、溫海の村近くなつて行つた。三瀬で乘り捨てた乘合馬車は、容易に私達に追附きさうにも思はれなかつた。

『馬車はまだ來ないね。』

溫海の村に入らうとした時、かう男の兒は云つた。

『僕等の方が先に行くね、これぢや――』

『二里位、わけはない。もう來ちやつたんだね。』

『矢張、馬車を思ひ切つて好かつた。馬車では、隨分危ないところがあつた。』

次第に入つて行つた溫海の村は、別に變つたところでもなかつた。ぴつたりと海に沿つてゐるにはゐたが、また一方山に峯微を見ることは出來たが、別にこれと言つて特色もないやうな漁村であつた。私達はその村外れを少し行つたところから、標石の立つてゐるところを左に折れて、やがて湯溫海の方へと志した。

溫海の村の平凡であつたに引きかへて、溫泉場のあるところへと入つて行く路は非常に感じが好かつ

二

三瀬から一里半ほど來ると、高い徙崖は盡きて、今度は漁村などがそこゝにあらはれ出して來た。かなりに濡れたには濡れたけれども、雨はさうひどい土砂降にもならなかつた。そのあたりに來た頃には、全く小降になつてゐた。

持つて來た瓩をひろげて、通りすがる旅客に、甜瓜を賣つてゐる簑を着た男なども見かけた。

『このしけでは、とても、新潟行きの船は出さうもないね――』

『うむ。』

『出なけりや爲方がないから、葡萄峠を越すんだ。峠の眞中で一晩泊る氣なら、そんなに骨は折れやしない。』

『でも、今日ぢやないんだらう。明日だらう、それは?』

かう大きい方の男の兒は言つた。

『それは、さうさ。今日は何うしても溫海に泊るのさ。』

『明日になりや、天氣になるかも知れない。』

『何うだかな……。この分ぢや、何うも明日も難かしさうだな。』

落ちた怒濤の中に、大きい小さい岩が無數に横はつて、波が白くそれに碎けてゐるさまが何とも言はれなかつた。かうした邊陬に來て、そして、始めて接することが出來るシインのやうな氣がした。

それに、その三瀨といふところは、面白いところであつた。そこにある鎭守の宮には、東國下りの義經一行の笈などが今日でも寶物として殘されてあつたが、かれ等は山伏姿で、越後から海府浦を經て鼠ヶ關に來た。そしてそこにあつた危險な關所をも辛うじて通過して、もう、これから先は大丈夫だ。賴朝の權威も恐るゝに足らない。さうした山伏姿になつてゐる必要もないと言つて、そこで始めて山伏の笈を解いたといふことであつた。私はそんな話をしながら歩いた。

『今でもあるのかしら？』

『あるつていふ話だ……』

『ぢや、見て來れば好かつた。何故見て來なかつたの？』

かう言つて男の兒達はそれを殘り多いことのやうにした。私もさう思はないではなかつたけれども、それよりも一刻も早く溫海に行つて、靜かな溫泉に入りたいと私は思つた。私はその町で晝飯を終ると、そのまゝ支度をして急いで立つて來たことを思ひ出した。

『本當だ！』

『何うだ、あの波を見ろ。あの碎けるさまを見ろ。あの凄じい海の荒れた色を見ろ。天氣の好い日にやつて來ては、とても、かうした壯觀は得られないぞ。』

『…………』

男の兒は別に何も言はなかつたけれども、父親の言葉を肯定するやうにして、凝と前に展げられた海の景色を見た。

暫らくして、

『こんなところはたんとない？』

『さア。』路が絶壁の角になつて、凄じく風雨が吹つけて來たので、暫しは口もきけずに、そのまゝ一町ほど歩いて行つたが、漸く少し風の當らないところに來て、『さア、日本海では好い方だな。羽後の海岸、親不知附近、あそこいらにもちよつと好いところはあるにはあるけれども、此處なども好い方だな。あゝした大きな岩の屹立してゐるやうなところは滅多にないよ。』

かう言つてその前に漸くその姿をあらはし始めた大きな奇岩を私は指した。

三瀬から溫海まで、實際その間には、大きな岩の屹立したものが多かつた。三瀬の町から日本海に出たあたり、徙崖の半腹をうねくと折れ曲つてたどつて行つたあたり、そこから振返ると、徙崖の海に

葡萄峠を度る

一

雨はかなり繁く降つて來たけれども、風が強いので蝙蝠傘はさすことが出來なかつた。爲方がないので、着茣蓙を兩方から合せるやうにして、帽子を手で押へて、そして絶壁に添つてつくられてあるやうな高い路を進んで行つた。

しかしそこには何んなに美しいすぐれた海があつたであらうか。何んなに雄大な北海の怒濤が展開されてあつたであらうか。畝を成して沖から押寄せて來る波は、眼下に錯落して横はつた無數の岩にさゝらのやうに碎けて、時には巨人のやうに屹立した大きな岩の半にまで及んだ。早い早い雲は、鼠色をした波の上にをり〳〵黄い日の光りをわびしく落してゐたが、それも瞬く間に掻き消すごとく消えて行つて、さびしい荒凉とした海には、一帆の白さをすら認めることが出來なかつた。

『好いな、雄大たな。』

『さア！』私は考へた。『溪こしての性質が違ひますね。巖美溪の特色も煎じつめれば、矢張同じく、深潭こ岩石こにあるのですけれご、その形や狀態が丸で違ひますからな。巖美溪は寧ろ、木曾の寢覺こか美濃の土岐川こかに似てゐるんですけれご、猊鼻溪はあゝした深潭や岩石こは全く趣きを異にしてゐます。勿論、巖美溪は平泉に近く、交通も便利で、おまけに街道筋に當つてゐますから、誰でもそこを通るものはひこり手に見るこいふやうになつてゐます。しかし猊鼻溪の方は、全く交通路から離れて、山中に深く藏されたこいふ形になつてゐるので、何うしても、行つて目を寓するものが尠いこいふ形です。しかし、此頃では、中學校の遠足などには、よく一の關あたりから出かけて行くさうです。さうですな、私の好みから言ふこ、巖美溪なんか、こてもその敵ではありませんな。ぐつこ猊鼻溪の方がすぐれてゐるこ思ひますな。』

今でもそこだけ切放したやうに、その溪谷の印象が鮮やかに長く私の頭に殘つた。」

五

私は東京に歸つて來てから、いろ／＼な人に話した。

『さうですね、わざ／＼行つて見るとすると、ちよつと失望するかも知れませんね。しかし特色のある溪谷には溪谷です。見やうに由り、考へやうに由つては、非常に印象的な忘れ難い溪だと思ひます。それに、平凡は平凡だと言つても、長阪の宿驛は古風で好いと思ひます。夏の夜は、蟲が多く灯に集つて來るので、薄暮になると、いつも通りのところどころに藁を積んで、それに一時火をつけて、蟲をそこに寄せるやうにしますが、そのもやし火――さびしい闇の夜の田舍町に、ところどころその火がぽつかり燃え上つてるさまは、何とも言へませんでした。非常にロマンチツクなものか何かでも見たやうな氣がしました。それに面白いのは、何處の家でも、大抵はランプは外に出して、そこに蟲を寄せて、家の人達はその奧の暗いところで食事なんかしてゐることです。ラスチツクと言つても、關東や中國あたりで見ることの出來るラスチツクとは味が違ひます。出來るなら、その路を三陸の海岸までずつと歩いて見ると、一層面白い趣味であるけれど、それは容易ではありませんから……』

『猊鼻溪――そら、平泉の傍にある猊鼻溪と何方が好つ御座んす？』

かつある人は私に訊いた。

『何が釣れるのかね？』

『鰻が釣れます……この川の鰻は、骨が柔かいのが名物になつてゐます。』

『澤山釣れるかね。』

『ゐるにはゐるだァが――』

壯夫岩のあるあたりは、殆ど溪の中心を成してゐて、此處等まで入つて來ると、一の關から長い間を暑い思ひをして入つて來た山路や、古風な田舍の宿驛や、四面をめぐつた山巒や、さうしたものからは全く離れて來て了つたやうな氣がした。靜かな靜かな心持がした。

村の童達は、頻りに面白さうに水泳をしてゐた。

『かうした遊び場所を持つてゐるこゝらの子供は仕合せだな。』

かうした言葉が誰に言ふこともなくひとり手に私の口から出て來た。

一番最後に、昔は獅子ヶ鼻と呼ばれ、今は猊鼻溪と呼ばれる猊の鼻に似た岩石の絶壁にくつゝいてゐる溪谷があらはれて來た。

私は長い間其處に立ち盡した。』

は出来ない。しかし、さうした山の淺い、溪の卑近な弱點があるにしても、岩石の雄大奇峭、またその岩石が相待ち相伴つて一種のめづらしいすぐれたシインを成してゐる形は、かれ決してこれの敵ではないのは確であつた。それに、ロマンチックなお伽噺の中のシインのやうな感じは、この溪の獨得で決して他にその類を求めることが出来ないのを私は思つた。

右岸に大きな洞窟があつて、それから、溪は更に深く深く、驚くべき大きな奇岩を聳立せしめてゐた。

『大きな岩だね。』

かう言つて、私は仰ぐばかりにしてそれを見上げた。

『これは壯夫岩と言ふのです。』

かう船頭は說明した。

舟は靜かに、緩やかに、巨岩の根元を遶つて進んだ。

溪が一ところ淺い瀨を成してゐるところでは、村の童達が、皆な裸になつて、頻りに水泳をやつてゐた。

『あそこらは淺いんだね。』

『え・え』

私はまた、岸に小舟を留いて、頻りに釣竿を垂れてゐるもの・あるのに目をやつた。

ごではないが、一人ではとてもさびしくつて入つて來られないやうな溪谷を私はそこに發見した。
私は考へた。丁度、この溪は、平凡な才能しか持たない藝術家が、ある時、ある機會に觸れて、一生に唯一つすぐれた大作を公にしたやうなものだ、と。そしてすぐれた一つの作の他は、何の色彩も、何の技巧も示すことが出來ずに、平々凡々に終つて了つた藝術家のやうなものだ、と。實際、平凡なこの沙鐵川に何うしてかうした山水のすぐれたシインのあるのを想像することが出來るであらうか。こんなことを思つてゐる中にも、舟は靜かに溪潭の上を滑つて、次第に深く奥深く入つて行つた。

四

私はこの溪谷をこれまでに見た山水に比較して考へて見た。甲斐の御嶽でもない。秩父の長瀞でもない。耶馬溪でもない。木曾谷でもない。また土岐川の溪谷でもない。箒川の谷でもない。その類似を求むれば何うしても、紀州の瀞八町に近いと言はなければならない。溪の一時湛へて潭を成してゐる形も似てゐる。又ある場所だけ特に奇なるシインを呈してゐるさまも似てゐる。舟を艤して始めて見ることを得るさまも似てゐる。しかしこれを以つてかれに比するに、自ら一長一短がないわけには行かない。この谷には、とても瀞八町の持つたやうな深山の氣象は求めることが出來ない。またその玲瓏透徹した深碧な水を求めることが出來ない。人の毛髪をして悚然として立たしめるやうな凄絶な氣分を求めること

が、溪の屈曲するにつれて、次第にその前に展げられて來たからである。或は水はさう美しくはない。とても紀州の瀞八町に見るやうにあの玲瓏透徹を望むことは出來ない。しかし、潭はそこに深いところもあるらしく、しんとして丸で別天地のやうに靜まり返つてゐるのを私は認めた。

『は、ア、面白い山水だね！』暫くしてから、私は誰に言ふともなく言つた。

舟は靜かに屈曲した溪潭を右に、また左に迂回して、一景は一景を孕み、一岩は一岩を生じ、一曲は一曲を開くといふやうに、緩やかに且つ滑らかに竿に從つて動いて行つた。

『ホウ！』

かう私は驚きの聲を立てた。

見よ、そこには、天に參するばかりの奇岩――他に何處にかうした奇岩を發見することが出來るであらうと思はれるやうな奇岩が、赭ちやけた土に形の面白い松の矮樹を載せて眞直に水中に聳え立つてゐるのである。船頭は次第に兩側にあらはれて來た岩の名を、一々私に説明してきかせた。

思ひの他に、幽邃であり、また別天地らしい氣分に富んで居り、またその岩石が思ひの他に奇をつくし、怪をきはめてゐるので、私は益々心を惹かれて行つた。

何うした聯想か、私にはお伽噺にでも書いてあるやうな溪谷――思ひかけない不思議な山の精、水の精でも住んでゐるやうな溪谷が思ひ出されて來た。かうして大勢作立つて來たは、さう無氣味といふは

好いにしろ、わるいにしろ、私は自然の拵へたこの藝術品を見なければならないのである。その繪卷のひろげられて來るのを仔細に點檢しなければならないのである。私はいくらか眞面目な氣分になつて——さつき失望した心持とは丸で違つた眞劍な氣分になつて、竿につれて、靜かに船の滑かに水面に動いて行くのを待つた。

『これから始まるんだね？』

『え、さうです。』

潭ではあるけれども、決して深いすぐれた溪潭ではなかつた。水もさう大して綺麗と言ふことは出來なかつた。それもその筈だ！　と私は思つた。かうした周圍の平凡な山巒の中に、深山に見るやうな幽奧深邃な溪潭を求めるのは、求める方が間違つてゐる。それに谷そのものも、此處から上流は深い山の中といふのなら格別だが、それは決してさうではなく、上流も矢張平々凡々の溪流であるのである。私は默つて、船の移つて行くのを待つた。

一度曲つた溪は、忽ち前に驚くべきシーンを展いて來た。

『はゝア！』

かう私は思つた。私の山水癖は忽ち深い衝動を受けた。

何故なら、思ひもかけない奇巖がそこにあらはれて來たからである。また思ひもかけない幽深な氣分

『大丈夫――』

かう言つて元氣よく起上つた。弟の方は、『あゝ好い心持に寢た！　すつかり勇氣が恢復した！』かう言つて、手を伸したり縮めたりして見せた。

私達はそろつて出懸けた。

若い船頭は默つて私達の前を歩いた。草履を穿いてゐるので、歩くたびに、ぺた／＼と白い埃が烟のやうに騰つた。あたりは何となく午後の涼しい山氣に滿たされて、さつき來た時とは、山の影も濃かに、姿もなだらかに、平凡だと言つても、流石は山の中だといふ氣がした。斜にさしわたつた四時過の日影も、深い靜かな影の多い氣分をあたりに展げた。

驛を外れると、さつきの川が折れ曲つて流れてゐる。そこに土手がある。猊鼻溪へ三町といふ木標が立つてゐる。船頭がちよつとその傍にある自宅に立寄つて來る間、私達はその土手の上で、待つてゐたが、やがて長い竿を持つて來た船頭は、また私達の前に立つた。次第に私達は溪の入口へと向つて進んだ。

二町ほど行くと、そこには材木會社の挽材置場があつて、路といふ路もないほどに木材が一杯に置いてあつた。それをあつちに越え、此方に越えて、漸く私達は船の繋いであるところへと行つた。

失望か、それとも思ひもかけない驚愕か。今、その二つの前に私達は立つてゐるのである。兎に角、

な、怪訝な顏をしてそれを見送つた。

三

晝飯をすまして、私達はぐつすりと人心地もないやうに寢込んで了つた。

『もし、お客樣！』

かういふ聲が耳に入つて、はつとして眼が覺めた時には、西日が既にまともに一面にさし込んで、[illegible]領の男の兒の暑さうに汗をダク／＼額やら手足やらにかいて寢てゐるのが眼に入つた。

『あの、船頭が來やした……』

かう小さな女中が言つた。

『あ、さうか。』

時計を見ると、もう四時を十五分すぎてゐる。よくも寢たもんだなア！　と思つた。私は男の兒達を呼び起した。

『四時すぎ？　そんなに寢たかなア！』男の兒も意想外といふ顏をして、『暑い、暑いと夢の中で思つて寢てゐた。あついわけだ……日がさしてゐるんだもの……』

『頭がぼんやりしてやしないか？』

鍛冶屋があつたり、白い青いペンキ塗のけば／＼しい醫者の洋館があつたり、二階づくりの構へだけ大きくつて、中では養蠶でもやつてゐるやうな旅舍があつたりするやうな宿驛か。または怠惰と退歩と衰頽とのみが常にあたりに渦を卷いてゐるやうな宿驛か。しかし、さうした宿驛でも、輕薄な、おつちよこちよいな、新開の町の氣分よりはいくらか好い印象を私に與へた。私達は町の右側の三階の旅館に入つて行つた。

「さうけえ、獅子ケ鼻を見に來さしつたのけえ。よく來さしつた。あつかつたべや。」

流石に村の誇りとしてゐる名所を遠くからわざ／＼見に來て呉れたのかといふ感謝の情が、それとなくその主婦の訛りの言葉にあらはれてゐて、いかにも田舍らしい好い感じを私は受けた。

三階の一間に腰を落附けた私は、とても今日は平泉までは歸ることは出來ないと思つた。纔かに五里の路に、こんなに勞れて了つた。それといふのも矢張昨夜十分に寢なかつたため、また例飯を攝られなかつたためであらう。「もう、今日は駄目だな、歩けないな。泊ることにしよう、今夜は此處に――」かう私は言つて、先づ氷と白砂糖と水とを取寄せて、それをコップについで何杯もガブガブ飲んだ。

主婦はまた入つて來た。「何うせ、今日は泊りだんべや、それなら、ゆつくらして、日陰が出來てから、鼻さ、行くが好か……。なア、さうすべいやな。その頃までに、船頭に來いつて言つて置くでいやな。」かう早口に言つて、ひとり一飲み込んで、さつさと下に下りて行つて了つた。男が見違へる不出來な顔とう

を目にした。私は地圖を展げて、その橋のかゝつてゐる川が、別に何の奇もない平凡な川が、溪流といつても藻などの底に生えてゐる川が、その猊鼻溪のある川の下流であるといふことを認めた時には、徒々さつきの失望を的確にせずには居られなかつた。(こんな川の上流に、天下の名山水があつてたまるものか)といふやうな腹立たしさすら感じられて來た。

『駄目だな、これは――』

かう私は言つた。

『何が――?』

男の兒はまた不思議さうにして言つた。

『いや、駄目だつて言ふんだよ、わざ〳〵やつて來ても、失望して歸らなくつてはならないつて言ふんだよ。』

『…………』

何か言はうとして男の子は默つて了つた。

私の眼の前には、やがてさびしい宿驛があらはれて來た。二三十年も前でなければ見られないといふやうな古風な宿驛が――。笠に糸立を着て草鞋を穿いた旅客、北上平野から丘陵の中の町や村に運搬して行くらしい日用品や、乾物類を載せた荷馬車、かと思ふと、鋤や鎌をトンカントンカンつくつてゐる

るんだもの。』

東京に歸つて來てからまでも私達はそんな話をした。

で、餓を醫したために、私達は急に元氣が出て來た。捷路だといふ細い山路を、ぐる／＼と山腹に傳つて下りて、谷の底を流れるさゝやかな溪流を兩手に掬つた時には、私達は漸く生き返つたやうな氣がした。

しかし、長阪近くなるにつれて、また山巒は遠く開けた。青山などもあちこちに見え出して來た。何う想像して見ても、かうしたところに、天下の名山水が藏されてあらうとは私には想像することが出來なかつた。

私は子供達に言つた。

『これで、行つて見て、その猊鼻溪がつまらなかつたら、それこそ、えらい眼を見るといふわけだな。乾度、さう大したもんぢやないよ。矢張、一地方の名勝以上にいくらも出てゐないに相違ないよ。世の中のこと・いふものは、大抵はさう皮肉に出來てゐるものだ……』

『何うして――？』

父親の言葉がわからないやうにして總領の方の男の子は反問した。

向うに見える人家か、あれが長阪だといふあたりまで來た時、私達は前に一桁の橋のか・つてゐるの

さうしたものを待ち得ずに、日のカン〳〵照る路傍の草の上に倒れるやうにして腰を下した。

二

一の關から長阪まで四里半の路であるが、その間の遠かつたことは、自分にも殆ど豫想外であつた。行つても行つても、同じやうな丘陵と、ぐる〳〵谷に沿つて廻るやうな路と、山の中といふだけで少しも涼しくも何ともない、むしろ風がなくつて蒸暑いといふやうなところが長く〳〵續いた。嵐氣の搖曳もなければ、溪流の潺湲もなく、また目を娯しませるに足る山巒の起伏もなかつた。ただ、暑い木陰のない路や、赤く兀げた岩に蛇ののたくつてゐるさまや、貧しい何もない百姓屋のさまなどが眼に殘つた。

從つて、長阪に入る一里ほど手前で、心太などを水に冷して置いてある路傍の飲食店の若夫婦が私達の朝飯をも食はないといふのに同情して、自分等が食ふために打つて置いた饂飩の一部をわけて呉れた時には、私達は感謝の聲を擧げずにはゐられなかつた。

『旨かつたな、あの饂飩は。』

『腹も減つてゐたけれども、粉も好い粉だつたんだね、あんな旨い饂飩は食つたことはない――』

『もう一杯食ひたかつたけれども、あの上さん、自分達のがなくなるつていふやうに惜しさうにしてゐる

『ふむ、これが北上――』

男の兒達は、さもめづらしさうに橋の欄干に凭れるやうにして眺めた。

橋を渡つて、桑畑や、雜木林の疎らに連つてゐる平野、――一の關平野の東の一角を僅しかほど行くと、北上川の東に蟠居した北上山脈の餘波が波濤のやうに連つて行く路が、次第にその低山性の丘陵の中に入つて行くのを見た。

それは一の關から太平洋沿岸地方に出て行くもので、丘陵の起伏した中を二十里も三十里も小さな驛や村落で繋いでゐるやうな街道であつた。行くにつれて、朝霧は次第に晴れて、暑い日がアリアリと頭の上から照り附けて來た。

私達は今は必死に饑を感じて來た。村に入る毎に、私達は飲食店をさかして歩いた。しかも遂に一椀の飯、一杯の茶をも得ることが出來なかつた。止むなく、私達は生玉子を買つて飲んだ。

何うして私達は、かうした邊僻な田舍に入つて來たのか。飲食店も何もないやうな土地に入つて來たのか、車も乘合馬車もないやうな山の中に入つて來たのか、低い丘陵性の山ばかりで、冷めたい溪流といふ溪流もない山の中へ入つて來たのか。それは他ではなかつた。獅子ヶ鼻の山水を見たいばかりにわざわざ五里に近い路をこの邊陬に入つて來たのであつた。

私達は二里も歩かない中にヘトヘトになつて了つた。私達は暫くは樹の蔭を求めて休んだが、後には

得ることが出來るかも知れないと思つた。『なアに、十時頃までには長阪に行ける。さうすれば、少し一生懸命になれば、今日の中に獅子ヶ鼻を見て、平泉までぐるりと廻つて行くことが出來るかも知れない。何しろ、まだ先が長いんだから少しでも出て置くが好い。』こんなことを言ひながら私達はせつせと歩いた。

やがて狐禪寺が來た。

乘合馬車どころか、朝飯を食はせて呉れる家もないことを發見した時には私達はがつかりした。そこには生玉子すらなかつた。『一の關の停車場前で食つて來れば好かつた。』かう言つて見た處で何うも爲方がなかつた。

しかし其處に展開された北上の大河は私達の目を惹くに十分であつた。平泉の平野から今しも低山性の丘陵の中に入つて行かうとしてゐるその川は、二つ三つの白帆を繪のやうにあしらひながら溶々としてゆるやかに且つ靜かに、夢の樣に流れて行つてゐるのを私達は見た。下流には半ば朝日半ば霧に彩られた山巒が、川に接して幾重にも重なり合つてゐるが、これからその山巒の間を十數里あの石の卷の古い港に行つて海に落ちてゐることを思ふと、その中に藏された山水の勝が想像されて、私はそこからそのまゝ下つて行きたいと思はれるやうな石油エンジンのランプが客を待ち顏に波にふわふわ漂つてゐるのが覗かれた。

猊鼻溪を見る

一

夜行で上野を立つて、あくる朝一の關に着いた時には、町は七夕の色紙の笹で半埋められるやうになつてゐた。朝日はもう高くなつてゐたけれども、夏の晴れた朝によく見る深い霧で、笹の葉も色紙もしつとりと濡れて、荷車も、車も、または町の人達も、夢の世界にでも動いてゐるやうに見えた。朝飯を食はせるやうなところはないかと、私達は門毎に覗いて見たけれども、さうした家は何處にも見當らなかつた。

『仕方がない、猊鼻へ行つたら、何うかなるだらう。』

かう言つて、私達は町を通り拔けてしまつた。一夜寢られずに輾轉反側して來た混合つた汽車の三等室、その鬱悶と溷濁から脱却して、晴々とした朝の空氣に觸れたといふことが、鮮かな新しい野の緑に接したといふことが、急に俄私達を力づけた。二里や三里は何でもなく歩いて行けさうに思はれた。私達は元氣よく歩いた。それに猊鼻までは行つたら、朝飯にも有附けるだらうし、或は長坂までの乗合馬車をも

五

『もう餘程來ましたな！』

『え、も、大舟津はぢきです。このつぎのつぎがさうです。』

から同室の客は話し合つた。

もう日はすつかり暮れた。岸を劃つて丘陵は黑く微に夜色の中に見えてゐるけれども、それでもあたりは既に全く闇で、空に輝く星と、たぷたぷと漂ふ水の音と、汽船のエンジンの響とばかりが唯私達の周圍にあつた。岸には灯の影一つ見えなかつた。

何だか身は際涯のない廣い大海にでも浮んでゐるやうな氣がした。『もう、腹は減つたな。大舟津で下りて、今夜あそこに泊らうか。』こんなことを私は子供達に言つた。次第に、大舟津の埠頭は近く、やがて、灯が二三點星火か何ぞのやうに水に映つて動いてゐるのが見え出して來た。

これ等の多くの船着――両岸の丘陵の中に埋られるやうにしてつゞいてゐる船着、そこにも深く入つて仔細に探つて見たならば、面白いことがさぞ澤山にあるであらう。平和な田舍の生活もあるであらう。また、海近い漁村の賑はひもあるであらう。交通の不便なために、今も猶四、五十年前の生活をしてゐるやうな古風な村もあるであらう。かう思ふと、唯掠めるやうにして通りすぎて行く沿岸の船着も、またその奥に潜んでゐるさびしい村々も、皆私に向つて、何か種々なことを囁いて別れを惜んでゐるか何かのやうに思はれた。私は東岸の丘陵の向うにひろくさびしく展開されてゐる鹿島灘の怒濤を想像したりした。

「あ、もう日が落ちた！」

かう子供達は言つて指した。

見ると、さつきから船室の西の硝子窓を染めてゐた夕照の影は既に半消えて、銅盤のやうな日輪は、光芒も何もなしに、丘陵の松の並木の上に落ちかゝらうとしてゐた。そしてそれから延びた光線は、一道の長蛇のやうな閃耀を美しく湖上に漂はせてゐるのを私達は眼にした。

「あゝ好いな。」かう言つて私も眺め入つた。

汽船は徐々下つた。湖は徐々濶く濶くなつて行つた。暫くして再び見た時には、日は既に丘陵のかげに沒して、湖水に殘つた光線も次第に薄く薄くなつてゐるのを私は見た。

私も子供等と並んで、船室の窓から顏を離さなかつた。

『佐原にいつ頃つくね？』

丁度入つて來た船のボウィに私は訊いて見た。

『さア、十時すぎますな。』

『さうかな、十時すぎになるかな。それまで飯を食はずにゐなくつてはならないのかな！』

私は誰に向つて言ふともなくこんなことを言つた。

溶々とした北浦の水は、既に汽船の周圍にあつた。湖の西に遶つた丘陵は、その上數尺のところに今しも赤い夕日をたゆたはせて、そこに靡いた松や、林や、または村落を黑く見せたばかりではなく、その光りは閃々として、水面に美しく輝きわたるのを私達は見た。霞浦のやうに濁くはなかつたけれども、利根の河口にも劣らぬほどの潤さを持つたこの湖水は、さながら大河を下つて行くやうな感じを人々に與へた。夕日の明るい光線の中に一つ〳〵浮んであらはれて來る帆の影は、黑く黑くなつて見えた。汽船は右の岸に、或は左の岸に、さながらXといふ字に兩岸の船着に寄港しつゝ下つて行つた。或は岸近く人家の參差して連つて見えるやうなところもあれば、村も人家も何も見えずに、唯林が深くさびしく繋つてゐるやうな岸もあつた。汽笛を鳴らして停船した汽船の舷側へと近寄つて來る艀には、美しく夕日に照された派手なパラソルだの、土地の商人らしい若い男の自轉車などが乘つてゐた。

の丸い火鉢、隅に積まれた座蒲團もまだ新しく、すべて居心地の好い明るい船室であるのが私には嬉しかつた。午前中の馬車の窮屈と動搖とから得た體の疲勞は、この靜かな一室で十分恢復することが出來るやうな氣がした。

積込む荷物の大部分は、米俵であつた。傳馬から汽船へ、ヨイ、ヨイ、ヨイなどと言ふ懸け聲が暫く續いたが、やがてそれも濟んで、汽船は靜かに動き始めた。時計を見ると午後四時を過ぐること既に五分であつた。

靜かに細く入込んだ江を下りながら、鉾田の町の位置を離れて見るといふことも面白かつた。丘陵の一端にある樣な町で、それで、北浦の巨浸の裏口の扉を成してゐる樣な形は、私に地形上の興味を誘はずには置かなかつた。成程此處までやつて來て、始めて北浦の全體が解ると私は思つた。

よくこんな細い入江の中を下つて行くことが出來ると思はれるやうなところを、岸や、岸の蘆荻の新芽にすれ／＼に觸れるばかりにして通つて、汽船は次第に濶い濶い方へと出て行つた。

町の後を取卷いた丘陵――つまり、北浦の東と西とを繞つた丘陵の一部は、行くまゝに次第に延びて、時には形の面白い松を點綴し、また時には世離れた魚村蓬戸を展開し、或は襞の細かく重り合つたあたりに淡竹の藪をあしらひなどしつゝ、さし添ふ夕日の光りに明るく美しく輝きながら、次第に一つ／＼ひらけて行くさまは、さながら大きな平遠山水の繪卷にでも對してゐるやうな心持を私に誘つた。

その橋のすぐ向うの下のところに、埠頭があつた。埠頭と言つて好いかわるいかわからないやうな埠頭――岸に集つた二三隻の船と、ポプラの木と、小さな運漕小屋と、唯それだけしかないやうな埠頭、そこで、私達は七八人の乗客と一緒に、岸の船の中に鶏が餌をさがして入つて來るのや、または船頭が竿を弓のやうに張つて細い川を上つて行くのなどを見ながら、次第に汽船の近づいて來るのを待つた。待つてゐる乗客の中には、美しい姉と母とに送られてゐる大學生などもあつた。

不思議な汽船――實際、この北浦霞浦乃至利根川を航行する汽船ほど、人に不思議な古風な感じを起させるものはなかつた。外輪の廻轉する毎に飛沫を高く飛ばすやうな構造を持つた汽船は、これを他所にして、他に何處にそれを見ることが出來るであらうか。また、淺瀬にその船脚の膠したのを船員總がかりで、棹をおいらんの簪か何ぞのやうに甲板の上から突張つて辛うじて進行させるやうな汽船をこの他に何處に發見することが出來るであらうか。私はこの汽船に對すると、いつも二三十年も前の青年時代に歸つたやうな氣がせずにはゐられなかつた。

明るい夕日を一杯に帶びながら漸く其處まで入つて來た汽船は、甲板の上の數本の棹につれて、次第に私達の待つてゐる岸近く寄つて來た。

やがて纜が岸の丸太に繋がれて、乗つて來た客がぞろ〳〵と下りた。

やがて私達はその汽船の後部にある二等室へと頭を曲げつゝ入つて行つた。中央にある大きな鏡、瀬戸

唯田圃の中の一條の川としか思はれないばかりであつた。

汽笛の響があたりに響いて聞えた。

『あ、あそこに、汽船が來てる。』

かう私は指した。

汽船は今その細い川の中に、午後三時すぎの日影の一面に照りわたつた明るい光線の中に、その不思議な姿を浮き出すやうにして、徐かに焦茶色の煙をあたりに靡かせつゝ、次第に此方へ此方へと近寄りつゝあるのであつた。

『まだ、隨分、先きだ……。これから、着いて、荷を下して、それからでなくちや出かけないから、まだ緩くりだ……』

こんなことを言ひながら、私達は靜かに歩いて行つた。

次第に、船着きらしい、または水郷らしい感じがあたりに色濃くなつて來た。折れ曲つた劃堀のたぷたぷした水、その岸に行儀よく並んで生えてゐるポプラの木、倉庫らしい家が一軒二軒見え出して來て、岸には、これは和船で運ぶらしい淡竹の束ねたのが一杯に積んで置かれてあるのが見えた。米俵を積んだ船が一隻二隻下つて行つてゐた。

ポプラの並木に沿つて、橋が高く架かつてゐるのが見えた。

一夜緩り泊つて見たいやうな心持もしたけれども、子供を伴れて來てゐる身には、さうも出來なかつた。爲方がないので、再び汽船發着所の處に行つて、船の出るまでの時間をその前の茶店で待つことにした。

『もう、一度、町を歩いて來よう！』

かう言つて子供達は二人揃つてまた元氣に出懸けて行つた。

私は此間に、毎日の課程の新聞の小說を一回書いたりした。それは靜かな午後で、家の裏から見わたした田圃に、げんげの花が咲き、二三羽のチャボが餌を拾つて遊んでゐるさまなど、何うしても田舍の平和を思はせずには置かなかつた。ここに何年かの昔の石版刷の新聞の正月附錄が、額になつて、年月の塵埃に煤けて黑くなつて長押にかゝつてゐるのを見ると、此處にのみ時は跡をつけないかとさへ思はれて不思議な氣がした。

四

『船の着く處へ行つて下さい。』

かう言はれて私達はそこからまだ五六町歩かなければならなかつた。やがて町は盡きて田圃が來た。次第にこの丘陵の中に北浦の細長く入込んで來てゐるさまが私の眼に映つて來た。戸浸の水も此處では

からない中にすつかり歩きつくして了つた。ある通りは二度も三度も歩いた。「オヤ、またさつきの通りに出ちやつた。」など、私達は言つた。

此處が矢張り一番好さゝうだなどと言つて入つて行つた小料理屋は、ひどい家で、食ふものは何もなく、得體のわからない鮫に類した肴の煮附けで、辛うじて晝食をすまして了はなければならなかつた。そこ〳〵にして、私達は其處から出て來た。

私達のすぐ傍で晝飯を食つてゐた一人の百姓は、いろ〳〵なことを私に話してきかせた。私達の入つて行つたその家が唯安いだけで碌なものは食はせないといふことや、この他にも飲食店は二三あるけれども、矢張り大したところはないといふことや、此町では、藝者でも揚げて、酒でも飲まなければ駄目だといふことや、其他いろ〳〵なことをきかされた。その話に由ると、かうした田舍町であるのにも拘はらず、藝者が非常に多く、どの料理屋でも五人や六人は抱へてあつて、こんな田舍とは思はれないといふことであつた。「何せ、この周圍に町つていふ町がねえだでな、何方へ行つても五里から六里あるだで……。皆こゝに遊びに出かけて來るだ。」かうその百姓は話した。それに、物價が安く、遊ぶのには、これほど手頃なところは滅多にはあるまいとの話であつた。さう言はれて見ると、成ほど町には脂粉の氣が多かつた。さつき町を歩いてゐる時でも、あちこちでさうした長い袂や白い襟足などに邂逅した。お酌が囀つて歩いてゐるのなどをも見かけた。

その混雜したところを通り拔けると、その先に、錆びた黑い色をした堀割の水がずつと町の中まで入り込んで來てゐて、渡ると橋板がガタ〳〵しさうな古い橋が、二つも三つも並んでかけられてあつた。北浦の最も奧の奧にある船着きらしい空氣がそれとなく私の身に迫つて來た。

『はゝア、かういふ處かな、鉾田ツて言ふところは！』

こんなことを獨語ちながら、私はその古い橋の上に佇立した。不思議な氣がした。何處から汽船が出るのだらうなどとすら思はれた。私達は兎に角その埠頭までと思つて、橋を渡つて向うに行つた。果して、堀割のやゝひろくなつて行つたあたりに、運漕店らしい家が並んでゐて、その一番先に、汽船の發着所らしいものがあつた。私は入つて行つて、

『三時ですか、今度のは！』と訊くと、

『此處に入つて來るのが三時半ですから、出帆はどうしても四時すぎですな。』

かう帳場にゐた男は答へた。

私は其處から引返した。四時間近くの時間を、私はこの町にすごさなければならないのであつた。私達は先づ町を見るべく歩き出した。

或は堀割に沿つた道、或はその道から旅舍の裏二階を仰いで通りに出て行くやうな道、またはさびしい大通、郵便局のあるあたり、それからそれへと歩いて行つたが、それほど廣くない町は、三十分とか

此處までの路と、これから先の路とを比較すると、前者よりも後者の方が、海に離れて砂のないだけが馬車をやるには具合が好さゝうに思はれた。御者の鞭に伴れて馬は頻りに駛つた。

樹を伐り、草を刈り、根を掘起し、邪魔になるものを塵埃と共に燃してゐる開墾の光景はやがて私達の前にあらはれて來た。この國では、この行方半島が一番荒蕪地が多く、縣でもその開墾を奬勵してゐるといふことで、『好いところがありますとも、此處に來て、五年、七年辛抱すりや、立派な百姓になれますよ。』などと人々は話した。塵埃の山のくす〱くすぶつてゐるのが到るところに見られた。

午近く、馬車は（もうこゝを下れば鉾田だ）といふところまで行つてゐた。成ほど北浦の水の深く入り込んでゐるところであるらしい氣分が何處となくあたりに漲つてゐて、犬牙錯綜した丘陵のさまも、私に面白い地形を思はせた。緩やかに、緩やかに、ぐる〱廻るやうにして下りて行く馬車につれて、次第に、低地にごた〱と簇がつたやうに形づけられてゐる鉾田の人家は見え出して來た。

三

馬車を下りたところには、藤棚のある飲食店だの、料理屋だの、蕎麥屋だのが混雜と小さな巴渦を卷いてゐた。ある料理屋の二階からは、若い綺麗な藝者が二三人欄干に凭りかゝつて、今しも着いた馬車から下りて來る旅客の群をさもめづらしいものでも見るかのやうにして眺めてゐた。

『あれは、向ぅ側です。涸沼の末流の川になる少し北の處です。』
『此處からは遠いんですな――』
『方角が違ひますから。』
私は幔幕を手で持ち上げて、その沼のある方角のひろぐ\〵とした地平線を遠くなつかしむやうにして見た。そこには松の大きな林が並んでゐたりして、いかにもさうしたさびしい沼がありさうに思はれた。路の兩側には、をり〳〵桃の紅い花も雜つて咲いてゐた。矢張、鹿島灘の岸に近く、同じく南に向つて進んで行つてゐるのではあるけれども、次第に路は海に離れて、今はその波の音の髣髴をも容易にきくことは出來なくなつて了つた。山畑が山畑へと續いた。
成ほど歩いたら淋しいこころであらうと思はれた。行つても行つても、村もなければ、人家もなくまたすれ違ふやうな旅客の群も見當らないやうな荒凉とした高原――その高原の中央に、唯・こころ、子生といふ小さな聚落があつて、そこが此方から行く馬車と向ぅから來る馬車との繼立場になつてゐるが、そこがまたさびしい原始時代をまざ〳〵と眼に見るやうなこころで、兩方から下された旅客は、畑の中の堀立小屋のやうな家に入つて、顏中にくさの出來た女の手から温い茶を貰はなければならなかつた。そこでは、馬車の別當ぬ御者は、圍爐裏の傍に寄つて、わからないスラングで、土地の面白い話をして笑ひ興じた。チヤラ〳〵と錢の勘定などもした。

ければならないやうな難場も處々にあつた。

私達は馬車の周圍を卷いた白い幔幕を絶えず持ち上げつゝ進んだ。海は次第に遠く、松原には漸く離れて、今度はあたりに山畑らしい氣分の漲つたさびしい高原があらはれ出して來た。麥の綠、草花の黃、をり〳〵雲雀の揚る聲がきこえるばかりで、行つても行つても農村らしいものも見えなかつた。處に由つては、まだ全く草藪に埋められた土地などもあつた。

「涸沼はこの方角ですね？」

地圖に合せて、私は地方人らしい青年に訊いた。

「さうですな、この方面になりますな。」私の指した方角とは稍右に偏つた邊りを指して其青年は言つた。

「この途中からは見えませんか？」

「さあ……、見えませんな。しかし、この次の村から入れば半里とはありませんがな……。何アに寂しいところですよ、何にもありやしませんよ。」

「大きな松があるつて言ふぢやありませんか。」

「え……水戸の烈公が名所にした？」

「さう〳〵！」

『鉾田の午後の汽船――間に合ふごころぢやねえ……。今朝、早くその積りで、自動車で行けば、朝の十時のにも間に合つた。』かう赤兒に乳を吸はせてゐる馬車屋の上さんが言つた。

『自動車もあるのかえ？』

『四人ありやいつでも行くわな。』

成ほご、その傍の空地に、一臺の自動車が置かれてあつた。『自動車で行かうか。』など、私達は言つて見たが、何うせ、午後の汽船には馬車で行つても間に合ふのだからと言つて、そのまゝ、そこに待つてゐる乘合馬車で行くことにした。

二

最初は海に沿つた道――いかにも荒涼とした、またいかにも寂寞とした、次第に南へ南へとのみ下つて行くやうな感じのする路であつた。潤い鹿島灘は弓弦のやうな砂濱と共に平に展けて、波は白く長く打寄せて碎けた。

松原は絶えては續き、續いてはまた絶えた。さぞ松露が出るであらうと思はれるやうな松原が――。そして、その松原の間からは、午前の日に美しく輝いた海がをりをり繪か何ぞのやうに展開されて見えた。ごもするご馬車は深く砂に埋れて、鞭つても鞭つても馬が動かないために、止むなく乘客が皆下りな

ことなくこの町に入つて行かうと思ひ立ちながら、いろ／＼なことに碍へられて、これまでつひに其目的を遂し得なかつたことであつた。私は霞ヶ浦の東岸、玉造からも入つて見やうとした。その南の麻生からも行つて見やうとした。現に、昨年の秋は、大舟津から是非とも其方へ入つて行く積りで、わざわざ支度までしてやつて來たのであつたが、矢張り雨に阻まれてその目的を遂することが出來なかつた。それが今竟に實行されると思ふと、一種言ふに言はれない旅情の湧きあがつて來るのを禁めることが出來なかつた。

霞ヶ浦から北浦にかけての水郷の美は誰も知らぬものはない。蘆荻の新芽のたぶたぶと水に搖いださまだの、半ば草んだ汀の重なり合つて狹い水門を出て行くさまだの、ポプラの碧い容に並んで立つてゐるさまだの、一として『詩』になり『繪』にならぬものはない。そしてその間に、例の牛堀の水に臨んだ旅舍があり、潮來の古い狹斜があり、狹い浪逆浦の水郷があり、息栖の古社があり、更に、東北に離れて、古代の容氣をそのまゝに嗅ぐことの出來る鹿島野があるのであつた。これで、鉾田――その北浦の最も奧の船着きの町を目にすることを得さへすれば、それで、この大きな水郷の勝は、大方知ることが出來るのである。『昔は、大方地方から鹿島詣をするには、誰れでも皆その路を行つたものである。だから交通の不便であつた昔の方が、今日よりも、却てその路は人通りが多かつたさうだ。』かう言はれてゐる路を、私達は今乘合馬車で行かうとしてゐるのであつた。

北浦を下る

一

大洗に一夜泊つてあくる朝、私達は急いで支度を整へて出懸けた。空はよく晴れてゐる。常陸の海岸の特長を成してゐる滑らかな砂濱は、さながら弓弦を張つたやうに白い波濤を湧かして凄まじく吼えてゐる。風もいくらかあるらしい。

磯濱の半商半漁の長い長い町を通り抜けて、涸沼の水の時々潰決する水路の跡のあるところを過ぎると、もう大貫で、そこには鉾田に向けて出發する乘合馬車の待つてゐるのが、低い坂の上に小さくそれと指さゝれて見えた。

私はかなりに以前から、鉾田の町を地圖の上にのみ想像して來た。北浦の船路の一番深く入り込んだ處、荒涼とした行方半島の中心を成したやうな町、そこには世離れた趣が澤山にあるであらう。さびしい昔の町の面影を發見するやうな印象も澤山にあるであらう。殊に、私に取つて忘れられないのは、何遍

北浦を下る

外四編

×

その電車には、途中の停車場から、秋茱萸の一杯についた枝と、赤い枝柿と松茸を刈つた薄に包んだのを持つて乗つて來る人達などがあつた。田舍の秋がそこにあるやうな氣がした。

×

いくらすぐれたいゝ聲の持主であつても、その相手の姐さんの三味線に頓着せずに自分だけ十分聲を出すやうな妓はすぐれた妓でないといふことを知つた。また、いかにすぐれた獨唱の聲樂家でも、眞に自分から動かされたものでなければ、聽者を動かすことは出來ないものだといふことを知つた。

×

今度泊つた京都の旅館の日本式のエランダと言つたやうな處で、私は月光の中に薄く線を引いたやうに靡いてゐる東山連嶺を眺めた。大文字、比叡あたりまでそれと微かに指さゝれた具合は何とも言はれなかつた。私は靜かに右顧左眄した。千年來の古都といふ感じが、チラ〱する灯の影や鴨川の水の音や、をり〱響いて來る電車の音に雜り合つて私の胸に迫つて來た。

×

大阪の旅舍では、朝起きた二階のすぐ下に堀割の水が澄んでたぷたぷ湛へられてあつて、その上を輕い櫓の音と共に舟が靜かに通つて行く氣分が私の心を惹いた。流石は秋だ。秋の水だと私は思つた。

×

生駒山脈を貫通したトンネルを出て、それから奈良の古都まで行く間の地形は、大阪平野からトンネルまで行く間よりも、ぐつと趣味に富んでゐるのを私は見た。そこは低い丘陵の起伏したやうなところで、小さな谷あり、小さな村あり、折れ曲つた溪流あり、萱や薄に當る夕日あり、赤い柿の實あり、黄熟した山合の狹い水田あり、そしてそれが段々奈良の古都のある平野へと出て行つた。西の京近くになると秋篠寺を左に、菅原寺を右に、唐招提寺の大きなあの古い金堂もそれと指さゝれば、天人飛翔の水烟を持つた藥師寺の三重塔も松樹の間に隱見した。私は旅情の漲るやうに押寄せて來るのを感じた。

で波に接吻しようとしてゐた。『あ、好い、見給へ。』かうK君は指ざした。やがて日輪が波に觸れたかと思ふと、、ちき二分三分と沈んで、すつかり沈んで了ふのも瞬く間であつた。顧ると、岸の松林の上に十四日の月が白く出てゐる。『日は西に月は東に海と山と打むかひてぞ暮れを待ちける』平凡だが、何處かでさうした氣分がした。その後、熊谷直好の歌に、是と同じやうなのがあつたのに氣が附いて調べて見る。『日は海に月は山より此夕べ出るも入るもあかぬ影かな』といふのであつた。矢張古人もかうした落日の眺めに對したことがあつたのであつた。

京都ではK君の情けで、桂園翁の墓を初めて展した。『またぬ青葉』の中の夫人の墓の前にも私は手を合せた。

×

『桂園一枝』や『浦のしほ貝』などに詠んである歌の寫生氣分を今度ほどしみじみと味つたことはなかつた。岡崎や黑谷が東京の一部を移したやうな繁華なところになつても、それでもその時分の地勢や情調や氣象は依然としてそのまゝである。それは丁度京都でなければ見られないやうな秋霧の深い朝で、その中に綠を靡かせた柳、半ば隱れたやうになつてゐる橋、霧の一ところ破れた間からをりをり現はれて見える山、何うしても『桂園一枝』や『浦のしほ貝』あたりに見る情調である。私は俄霧が次第に小雨になつて行くやうな町を、車で祇園の方へと急いだ。

秋の京阪の二日

×

秋は深くなつた。紅葉、蘆荻、赤い草の實、葉の落ちたあこに殘つた柿の實二つ三つ、碧くくつきりこ晴れた空——

奈良の古都に一日行つて遊んだ。東京の友達に繪葉書を一枚書く。その言葉に、『蘆荻の白こ柿の實の紅この交錯した佐保川のかれがれな水を指しながら、靜かに奈良の古都に入り申し候、一人旅も興多く候、東京の郊外こは違つて到る處名勝古蹟に滿ちたるがうれしく候』

×

濱寺公園では、『松のみやひそかにふしを合はすらん離れ座敷の妹がつま彈』

×

夕暮近くK君こ濱寺の海邊に出て見た。ふこ見るこ、大きな灼金のやうな丸い光芒のない日輪が今少し

勝浦は、海の溫泉場として、其特色に富んでゐる處であつた。此頃では汽船から上陸して來る浴客が多くなつたと共に、軌道なども出來たために一年每に次第にその繁華を增して行つた。海の眺めも好く、生魚なども多く、ごたごたはしてゐるけれども、それでも一夜泊つて見ても好いやうなところであつた。

紀州の長い海岸線に沿つて、終日航行する汽船は、勝浦から次第に西して、漸く潮岬近く進んで行つた。この附近は、紀州の海の中でも殊に惡灘の聞えの高いところで、曾てはトルコの軍艦を始め、大きな汽船も度々此の沖に沈沒の災厄に逢つたのであつた。凄じくあがる怒濤の中に微かに闇を隈取つて廻轉しつゝ光る燈臺の光……。

串本の海岸にある橋杭岩の奇も、旅客は注意して見落さないやうに心がけねばならない。行つて見れば、噂にきいたほど大きなものでもなかつたけれど、それでも、一つ一つ海中に並んで立つてゐるその岩のさまは、他に多く類を求めることの出來ないものであつた。汽船の甲板から見ると、岩は全く串本の漁市にくつついて了つたやうになつて見えた。

熊野の山巒であつた。瀞八町のやうな深い、嵐氣に富んだ、滅多に世間に俗了されて了はない山水があるのも無理はないと私は思つた。

海岸では、木の本の附近に、花の窟といふ奇勝があつた。しかし私はそれを知らない。名所圖會で見ると、長島から新宮まで、つまり私が汽船で一日航行したその沿海の地には、非常にすぐれた山水が今だに世に知れずに殘されてあつて、是非一度は通つて見なければならぬやうな氣がする處が到るところにあるといふことであつた。また瀞八町の上流數里のところにも、瀞八町以上にすぐれた山水がかくされてあるといふことであつた。何處に行つても、紀州は海山の勝にすぐれてゐた。

新宮から三輪崎、それから那智山の麓を掠めて、更に西に串本あたりに至る海岸の地方は、概して暖かい、南國の氣分に富んだ、畠には蜜柑の色彩を點綴し、山には綠色の林を展開した、何方かと言へば、明るい感じのするところであつたが、その海岸から二三里山の中に入つて、小座川の沿岸に、ちよつと特筆しなければならない山水があつた。勿論、熊野川のやうな大きなすぐれた山水ではないが、岩石や、山の姿致や、潺々とした溪のさまなどに、一種他と異つた、穩かな靜かなこころがあつて、何となく柔らかな心持を旅客に誘つた。例を引いて言つて見れば、耶馬溪に似て、それよりも規模は小さいけれども、あるところに由つては却つて耶馬溪よりもすぐれてゐるやうな溪山であつた。紀州に遊んだもの丶一度は訪ねて行つて見るべきところであらうと思ふ。

雨後の水量は凄じく增して、時には危險ではないかと思はれるばかりに、崖や絕壁やらに向つて、船は矢を射る如く落ちて行つた。船頭は互に聲をかけて、前にそゝり立つた大きな岩石をぐるりと巧みに避つて行つた。

鼎のやうに凄じく湧き立つた瀨は、次から次へと來た。晴れた日ならば、水はさぞ美しいであらう。日影が美しく七彩をなしてその底にさし込んでゐるであらう。底の石も數へられるばかりにきら〱と輝いて流れるであらう。しかし、その日は溪水はすつかり濁つて、唯、黃い奔流が絕えず船を瀨の中に掀飜させるばかりであつた。時の間に船は北山川を併せるあたりまでに下つて來た。

五

紀州の山水は、山が深いだけに、近畿地方とは思はれないやうな深さと美しさとを持つてゐた。近畿の山嶺の中では、吉野の奧の大峰、大臺ケ原、それ等を除いては、何うしても熊野の山嶺が一番深く且つ人家に遠かつた。深い深い密林も其處にはある。樹を伐りおろす山の絕壁もそこにはある。大きな道を山奧まで開いて、電氣仕かけの製板所をつくつたやうなところもそこにはある。駒鳥の鳴くやうな深い谷もそこにはある。「紀の海の波よりも荒けはしきは熊野のおくの山路なりけり」私はかうその時手帳にかきつけたが、實際、紀州をめぐる惡灘百餘里の怒濤にもまれて容易に踏破し盡すことの出來ないのは、

行つたもので、潮見峠から振返つて海を眺めた眺望などは、その間の名勝として、昔から人口に膾炙してゐた。

しかし、今はこの路を歩くのは餘りに好奇にすぎる。それに、わざ〳〵その長い嶮しい路を突破しなければならないほどの勝地もその間にない。それよりは、熊野川に入つて行く陸路としては、吉野から十津川に入り、その山中に一泊二泊して、本宮へと出て來る方が、便利であり、且つ面白くもあると思ふ。

あくる日は私は本宮から河舟に乘つて、昨日岸に沿うて上つて熊野川を靜かに下つて行つた。其の日も矢張雨であつた。本宮を出る時分には殊にそれが烈しく、葺いた苫の一角をあげても、雨がサツと吹き込んで來た。これではとても深山のすぐれた眺めを恣にすることは出來ないかと私は思つて、少からず失望した。

川水は黃く濁つて、瀨はゴオゴオ音を立てゝ鳴つた。

しかし一里ほど下つた時分には、雨も小降りになつて、蝙蝠傘をさして苫の外に出てゐてもそれほど差支ない位になつた。山巒からは白い雲がもく〳〵と渦まき上つた。

で、私は雨の苫舟の中にありながら、何うやら彼うやら熊野川の長い繪卷を見ることが出來た。次第に山や岩石があらはれ出した。こころごころに點々された躑躅や山吹の美しさも、雲霧の間からをりをりあらはれる大きな瀑の姿も、何も彼も……。

林で、日本アルプスの中でも歩いてゐるやうな氣がした。『今だにもかくも嶮しき山路をいかにか御子はたどりましけん』

かう私は手帳にかきつけた。片岡八郎の戰死した花折塚の前では、『さゝぐべき花のなきこそうらみなれ君が御墓の前に來つれど』と、私は詠んだ。

護良親王が十津川にも居られずに、かうした深山のなかまで遁れて來たかと思ふと、私は黯然として昔を思はずには居られなかつた。玉置山からは、私は萬山の中をたどつて、本宮へと下りた。

本宮は新宮に比べると、ぐつとさびしい。しかし熊野神社の祠は川に臨んでゐて、ちよつと感じが好い。こゝらからは、新宮までの川船が毎日數回下つた。

湯峰の溫泉は熊野の山中に入つたもの、是非一度は行つて見なければならないところであつた。それは本宮から三十町ほどで、小さな峠を一つ越すと、すぐその下にあるのであるが、田舍としては、割合に居心地の好い溫泉場であつた。この近くに、曲川といふ川があつて、その上流にも、ちよつとした山水の勝がある。

この本宮から近露といふ、これも矢張護良親王が土地の豪族に追はれて、僅かに身をもつて免れたやうなところを通つて、逢坂峠、其他もう一つ何とか言ふ大きな峠を越して、栗栖川から田邊の海岸へと出て來る路がある。これは仲邊地通りと言つて、昔は京畿地方から熊野に行くには、皆なその路を通つて

しかし彼はどても此には及ばなかつた。第一、境が及ばない。岩石が及ばない。深潭が及ばない……』つゞいて私は陸中の獅子ケ鼻を思出した。長瀞よりは寧ろこの方が形に於て似て居た。しかし、彼には決してかうした深山の幽邃な氣分を求めることは出來なかつた。岩石は或は彼、此に勝るものがあるかも知れないけれども、この水の深さ、淨さ、また碧さは、どても、かれ、これに及ぶべくもなかつた。

『ふむ、好いこころだ！』かう私は獨語した。

深潭はしんとしてゐる。何の音も聞えない。唯、私の乘つてゐる船の艫の音があたりに響いてきこえて來るばかりである。船頭は岸にある岩石の名を一つ一つ説明して私にきかせた。

深潭はかなりに長かつた。此方の崖から彼方の絶壁まで、その長さは尠くとも十町位はあつた。碧い深い靜かな潭！　淺いところで三尋より淺くはなく、深いところは七尋以上にも達したこの瀞潭！私は長い間人知れずこの深山の中に埋れた形を想像して、不思議な氣がした。

溪潭の盡きたところには、上流から流れて來た筏が一杯に滿たされてあつた。私は溪の盡きたところにある小さな家にその夜は泊つた。

四

私は大塔宮の遺蹟を探りたかつたので、これから直ちに玉置山に登つた。この間の山路は、全くの密

『土地のものは知つてやしたとも……。とろッて言ふのは、昔から言つてゐる名なんですよ。』

『今は、人は來るかね？』

『隨分來ますよ。一年中ぢや、大したもんだな……。』

『矢張、秋が多いかね？』

『夏が多いな――』

見ると、もうそこはその入口であつた。瀞深とした瀬、更にその先に、兩岸から更に重つた高い絶壁。

水聲は私の胸に沁入るやうに聞えた。

私はそのまゝそこにある船に身を託した。

始めは棹で岸に沿つて行つたが、暫らくすると、船頭は棹を櫓に代へて、頻りにそれを押し始めた。

瀞々とした瀬は盡きて、やがて碧い碧い深潭が展けた。

岩石の奇もあるけれども、それよりも此の溪の特色は、沈々として聲なき深きその瀞潭にあつた。船はさゝやかな波紋をつくつて靜かに進んだ。

『成ほど好いところだ！』

私ははるばる海を渡り、山を踰えてやつて來た效があると思つた。

私はこれに似た溪をあれかこれかと想像して見た。第一に思出されて來たのは、秩父の長瀞であつた。

このあたりは、いかにも川がひろ〴〵としてゐた。山もやゝ展けてゐる。』

『瀞八町には此方ですね？』

『さうだ。』

で、私は今まで沿うて歩いて來た熊野川に別れて、今度は靜かな、明るい北山川に添つて溯つて行つた。幸ひに雨は晴れて、こゝろ〴〵雲切れがした間から碧い碧い空が覗かれた。白いもく〳〵した綿のやうな雲が絶えず渦まき上つた。

一里ほど來ると、路はまた嶮しくなつた。竹筒あたりでは、山轡の根が深く谷に向つて落ちて、北山川の流れは眼底に咽んで流れた。熊野川以上に屈曲の多い此川は到る處に筏の集積地點を作つて、小さな村落が既に全く木材に滿たされてゐるのを私は認めた。

竹筒から山を一つ越して下ると、そこはもう玉置口であつた。私は玉置川を徒渉して辛うじて其村に入つたが、漸く舟を出して呉れる家をその村にさがして、漸く其有名な瀞八町へと向ふことが出來た。

大きな艫を肩にした船頭は、私の前に立つて歩いた。

『船でなくつては、行つて見られないやうになつてゐるんだね？』

『え、さうです――』

『昔から、人はさうした岩のあるのを知つてゐたのかね？』

『いかにして種は牛ひけんと思ふまで高き高根に花の咲くかな』かうした讃めらやがては私の前にあらはれて來た。

水の多い時には滴下し、渇水の時には、單に赤く薙ぎてゐるやうな瀧のあとが到るところにあつた。現に、十五六丈の瀧の落ちてゐるものも三四條あるのを私は見落さなかつた。』

三

熊野川の峽谷は球磨川、富士川に比して、一層變化に富んでゐる。樹木も多く、雲烟も多く、屈曲も多い。『大八州遊記』の作者が口をきはめて賞めたのも決して無理ではない。熊野川の美はおもとして本宮から二里ほど下つたあたりにあるが、北山川を容れてから少し下つたあたりも、また決してわるくはない。重り合つた山嶂が嶮しく且高いので、舟を下つて行くと何となく凄じく恐ろしいやうな氣がした。

これに比べると、北山川は明るく且つ心持が好かつた。

『この落しは何ッて言ひますか？』

かう私は訊いた。

『円瀧――』

しかし、こゝから大雲取、小雲取の嶮を踰えて、本宮まで行つて見ると、その間には非常にすぐれた、世の常でないシインが澤山に澤山にあるといふことであつた。しかし、私はそこを踰えなかつた。私はすぐ那智山から引返して、新宮に來て泊つた。

新宮は特色のある町である。海近い町といふ感じよりも、寧ろ山の中の町といふやうな氣のする町である。熊野川を流して下す木材の新しい匂ひがどことなくあたりに滿ちて、いかにも木材町らしい感じを嗅ぐやうな思を私にさせた。周圍を廻つた丘陵も凡でなかつた。

あくる朝は、私は雨を侵して出かけた。新宮の社にお詣りをして、それから少し行くと、もうやがて熊野川の岸である。小さな渡しをわたつて、次第に私は雲烟の籠曳した山巒の中へと入つて行つた。

河口近いので、始めはさう大して興味を惹かなかつたが、一重二重と折れ曲つて入つて行くにつれ、次第に雲烟は渦上し、嵐氣は奔騰し、水聲は凄じく四境に反響するやうになつて行つた。急に水聲が高くなつたと思ふと、やがて思ひもかけない大きな瀧が鏜然として深潭に落下してゐるのを私は認めた。

益々兩岸の山巒は高く高くなつて、今は殆ど仰ぐばかりになつた。ところに由つては、河床が思切つて高く、凄じく白龍の首をつらねて下るやうなところもあれば、兩岸が狹く迫つて、川原に添つた路も往々にして絶えはしないかと思はれるやうなところもあつた。そして雨にぬれた岩石の間を簑笠をつけた筏師が竿を弓のやうに張つて、速く速く下つて行くのが見えた。

らで、その一里西方の三輪崎が事實上の新宮の港をなしてゐるのであつた。私は三輪崎に一夜泊つて、あくる日は、雨を衝いて、那智山へと向つた。

　紀州の雨は私に取つて忘れられないものであつた。黒潮の關係で、氣候は南國のやうに暖く、熱帶地方の植物なども往々にしてその海岸を彩つてゐるといふことであつたが、雨の多いのもまたその特色であるらしく、私は三日三夜ぬれた旅の衣を干すことも出來ないやうな目に逢つた。しかし、伊勢、志摩あたりに比べると、氣候は一月近くも違つて、菜種の花は咲き、蛙の聲はあたりに滿ち、到るところ夏蜜柑の實は、既に黄く熟してゐるのを私は認めた。

　今は、勝浦から新宮へと軌道が出來てゐるので、那智山へはひつて行くにはわけはないが、その時分は、例の那智の黒石の多い海岸を二里ほどもあるいて、それから山にはひつて行かなければならなかつた。

　那智山は流行佛の所在地としては、かなりの賑ひを見せてゐる町であつた。しかし山そのものは、決して秀麗とか、典雅とか、または奇峭とか言ふ形容詞で形容するやうなものではなかつた。平凡であつた。深山といふ感じにも乏しかつた。從つて例の有名な瀑も、大きいには大きいが、烈しいとか、凄まじいとかいふ瀑ではなかつた。瀑底近く行けば、それでも流石に飛沫が衣を沾すけれども、遠く望んだ感じは匹練の一丈でこれを盡すことが出來るやうな氣がした。

つたりする海岸を。または一帆の危く欹つやうな凄じい怒濤の絶えず打寄せて來る海岸を。

『山こしに見えこそわたれ今宵わがやごる港の帆ばしらの影』これは錦浦から日暮に峠を越えて長島に行つた時の實景實情であつた。（兎に角、長島まで行けば、それから先は紀州街道である。陸地を歩いて行くにしても、今までのやうな邊僻なさびしい且つ不便な道路ではないに相違ない。それに、都合が好ければ、明日は、そこから沿海百里を航行する汽船に乘ることが出來る。）かう思ふこ、眼下に展けられた港の夕暮のさまが、何こも言はれない旅情を私の胸に簇らせた。

長島の港頭には、小さな島が一つ二つ海中に聳えてゐて、その向うに、南伊勢から紀州に連る山脈が障壁のやうにすうつこ長く連つてゐるのが見えた。あくる日の午前九時頃、汽笛の音に誘はれて急いで海岸に出て行つた私は、その右の方の島に近く、一隻の汽船が、さながら、怒濤の中を突破して來た勇士のやうに、黑い煤烟をもく〳〵こ海上に靡かせて碇泊してゐるのを認めた。で、私は艀でその汽船へこ行つて、終日その海岸を航行した。尾鷲の海岸、木の本の海岸、汽船は岸を、岸をこ縫ふやうにして進んだ。汽船が新宮の沖に達した時には、日は既に全く暮れつくしてゐた。

二

新宮は埠頭を持つてゐなかつた。それこ言ふのも、熊野川の激しい流が常に泥沙をその河口に流しか

熊野の山水

一

熊野には私は南伊勢から入つた。志摩の濱島から沿岸二三十里、何遍となく上つたり下つたりする徒崖を伊勢の長島まで來た時には、私は長い旅でも終へたやうにほつと呼吸をついた。（まあ、こゝからは汽船が出る。）かう思つて、古風な行燈などのついた大きな旅館の一間に安らかに眠つた。

志摩から南伊勢の海岸、そこには五ヶ所だの、贄だの、錦浦だのといふ海山の勝のすぐれたところがあつて、ある岬の上から御座岬を振返つて見た形などは、容易に他に得られないほどのすぐれた眺めを持つてゐたけれども、しかも交通の不便は、到底普通の遊覽者を其處に伴れて行くことは出來なかつた。草鞋穿きに絲立を着た私でさへ、長島まで出るのに、かなりに辛い山路の經驗を嘗めさせられた。私は徒崖から徒崖を渉るやうに、または漁村から漁村へ越えるやうにして、その海岸を縫つて歩いた。時には美しい島があつたり、締しやうな靜かな入江があつたり、桃の花の見事に碧い海色に反映する丘があ

その點から言ふと、溫泉場としての價値は、到底、箱根の變化の多いのに及ぶことが出來ない。しかし、伊香保と比較しては、好き嫌ひから言つて、私は鹽原の方が好いと思つた。

門前、古町、須卷、これ等の溫泉場も皆好い、更に深く荒湯あたりまで入つて行けば、雲烟や、霧や、深い深い山の嵐氣などをも徐々味ふことが出來るに相違ない。更に奥深く路をたどつて、鬼怒川の岸に出て行くのも興味の多い旅の行程である。川治の湯から瀧の湯を經て、中岩橋、籠岩の方に出て來る路は、普通の遊覽者にはちよつと難かしいが、若い人達にはさう大した骨の折れる路ではなかつた。

私は東京に近く、好い溫泉をきかれた時、一番先きに、先づ箱根と答へた。次ぎに鹽原と答へた、そしてその次に伊香保と答へた。

『日光の奥の湯がせめて中禪寺湖の菖蒲ケ濱あたりにでも引いて來られると、それこそ日光や中禪寺の繁榮がぐつと違つた形を取つて來るんだが――』

こんなことをも私はつけ加へた。

つて差支ない。

私は鹽の湯に行つて四五日ゐたことがあつた。此處は鹽原の中でも、深く奧へ入り込んだだけに、いかにも靜かで、全く都會の紅塵を沒却し去ることが出來るやうに思はれた。それは箒川の一支流の岸で、兩岸の相迫つた形は、福渡戸、門前あたりよりも、餘程趣致に富んでゐるのを私は見た。旅館などにも居心地の好い家が多かつた。

前に高く尖つた山襞、山の影と影とは互ひに深く交叉して、溪聲の鳴る音が常に高くあたりに反響してきこえた。そこからも此處からも源流近い、溪が寄り集つて、或は小さな谷をつくり、瀨をつくり、瀑をつくつて、そして大きな箒川の谷へと落ちて行くやうなところであつた。

兄弟が瀧、小太郎が淵などのある山の中は、鹽原の溪谷の中でも、最も深い山の特色を持つてゐた。

しかし、初めて入つて行つて、非常にその山水に撲たれるには撲たれても、長くゐるにつれて、次第に退屈になつて來るのはこの鹽原の谷である。溫泉が到るところに湧出してゐるのでそれからそれへと移つて行つて、それで退屈をまぎらせることは出來るけれど、何にしてもシインに變化がないのが遺憾であつた。此處では日光のやうに、高原の爽かさを見ることが出來ない。溪水の鮮やかさを求むることが出來ない。また瀑の美しさを見ることが出來ない。それに、山が迫つてゐるので、何處となく、鼻先がつかへて來さうな氣がして、何となく鬱陶しい。

旅行するものゝためにいろ〳〵な興味を殺ぎつゝあることは事實であつた。單調ではあるが――また夏などは暑い道ではあるが、那須野を歩くといふことは、また那須野を乘合馬車で搖られて行くといふことは、決して興味のないものではなかつたのであつた。廣漠とした原野の中を、一歩一歩涼しい美しい峽谷の中に入つて行くといふのも旅としては興味があつた。

箒川の谷は、回顧橋附近に至るまでが最もすぐれてゐる。大網溫泉のあるあたりも決して惡くはない。しかし、溪に沿うた路が、次第に溪に近く益々溪と平行するやうな形になつて行くに從つて、奔瀨の奇、岩石の怪は多くこれを目に集めることが出來るけれども、しかも溪としての眺めは、漸く平凡になつて行くのを免がれなかつた。御用邸の附近の箒川は、溪谷としての美よりも、むしろ奔瀨としての奇を私は見た。福渡戶は昔は靜かで好いところであつたけれども、今はすつかり開けて、鹽原中の最も賑かな溫泉場となつた。やゝ俗化しすぎて了つた。

六

天狗岩のあるあたりは、流石に絶景である。

溪橋が溪橋に接し、巨岩の水に聳えて相連つてゐるさまは、日光にも何處にも多くその比を見ることの出來ぬやうなものである。日光の深澤の溪潭に比べては、孰れが兄、孰れが弟たるかを知らないと言

しかし、私はこの溪谷にあくがるゝ心は、決して今の開けた、繁華になつた、山下まで軌道の通じた、自動車の通つて行く溪谷ではなかつた。私はこゝからあらゆる文化の外皮を取除きたいと思つた。交通の便すらも却つてない方が好いと思つた。私はこの鹽原の谷の百年以前を想像した。

その頃には、この山水は更に一層の美を持つてゐたに相違なかつた。あの小さな幾つかの瀑を持つた坦々とした道などはなくて、旅客は岨から岨へ、山から山へ猿のやうに渡つて行かなければならなかつたに相違なかつた。何でも、昔は、その迫つた峽谷の或は底に、或は崖に、或は岨に、綫のやうに路がついてゐて、湯治に行く人達はそこに入つて行つたといふことであつた。從つてその時分には、この美しい山水の眺めも、溪流の見事な瀬も、人の眼につくことなしに、全くこの萬山の中に埋れて了つてゐたに相違ないのであつた。私には大網の湯の白い湯氣のさびしく溪谷の中にあがつてゐる繪のやうなさまをも眼の前に描き出すことが出來た。

鹽の湯などに行くにも、三四十年前までには隨分危險な思ひをしなければそこに行くことは出來なかつたといふ話であつた。私は自動車に俗化されず、こんな御殿でもあるやうな温泉宿に俗化されず、わるく半可通になつた土地の人達に俗化されずに、人知れず深く山中にかくれてゐた頃の箒川の谷をなつかしまずにはゐられないやうな氣がした。

あの那須野を橫斷して、西那須野から新鹽原までつゞいてゐる軌道も、便利ではあるけれども、鹽原に

五

鹽原の谷は、始めて訪ねて行つたものを驚かさずには置かなかつた。單に溪谷としては、日光の大谷の谷もこれに及ばず、箱根の早川の谷もまたこれに及ばず、木曾の峽谷もまたこれに及ばず、耶馬の溪もまたこれに及ばず、球磨、富士、天龍――それは舟楫を通ずると通ぜざるとの別はあるにしても、矢張この鹽原の箒川の谷には及ぶべしとも思はれなかつた。

第一、谷の深いのが好い。兩岸の相仄して迫つた形が好い。次に、溪が幾重にも綫の如く曲り曲つて、次第にその奇をあらはして來るのが好い。俯しても容易に見ることの出來ないあたりに、水聲が微かに咽んで、樹木の綠の漲つた底に、纔に深潭の髣髴を認め得る形も、旅客の心を惹くに十分であつた。迫つた幅の狹い谷、脚下に深く穿たれた谷、樹木の新綠の半ば埋れた谷、折れ曲るにつれて次第にその奇をあらはして來る谷、さうした谷は、この箒川の谷に於て、最もすぐれたものを見出したと言つても、決してそれは過言ではなかつた。

その他に、何處に私はかうした溪谷を發見するのであらうか。私はあれかこれかと思ひめぐらして見た。甲斐の御嶽の谷を其處に持つて來て比較して見た。耶馬溪の谷を其處に持つて來て比較して見た。しかし、いづれもこの箒川の谷に比肩すべきものはなかつた。

かうした山の霧、これは深山でなければとても見ることの出來ないものである。しかし、日光に於ては、この山奥の溫泉場に限らず、中禪寺でも山内でも往々にしてこの濃霧に邂逅する。殊に六月七月に多い。

山内である夜に邂逅した霧も、私には忘れかねた。夕飯をすまして外に出て見ると、深い深い霧である。唯、外の電燈の光がぼつと光芒なく點いてゐるばかりで、杉の木立も、殿堂も、寺の屋根も、山の一角も何も彼も見えない。それに、風もいくらかあつたので、霧の流れるさまが早く早く私の眼の前を掠めた。

私は公園を通り拔けて、辛うじて入町に出たが、人聲はきこえながら、あたりは灯より他に何も見えなかつた。私は靜かに歩いて大谷の岸の方へと行つた。

日はまだ暮れたばかりなので、夕暮の光りはまだ何處か殘つてゐるらしく、岸に來て見ると、水の瀨をなして流れてゐる上に、霧が破れては合ひ、合つてはまた破るゝさまがそれとさやかに指された。水聲に破られて霧が瀨と共に流れて下るさまは、めづらしい眺めを私に與へた。

私はじつと立盡した。

深く封じた霧は、山より吹きおろす風につれて峠の闇にまた破れて行つた。次第に谷を繞る峰の尖や、山の脊や、また瀨の上に聳えた松や、黑い大きな山の肩などがあらはれ出して來た。霧は早く早く流れた。

ども、それだけでも、都會の人達の容易に得ることの出來ない樂しみを盡すことが出來た。舟から見た四圍の山巒は、さながら萬花鏡中の影に埋められるやうな心持を旅客に誘つた。山と水、水と山、それに雲の絶えざる浮動が加はつて、全く身は紅塵の外に漂つたやうな氣がした。

四

『オウ――』

『オウ。』

深い深い霧の中で、かう谺が淋しく反響した。それは六月の初旬であつた。山奥のまだ家を開いたばかりの溫泉場は、しんとして、何の物音もきこえなかつた。霧は流るゝやうに、または巴渦を卷くやうにして家々の庇を深く罩めた。

私は次第に、一間先も見えぬまでに、霧が深く罩めて來るのを見た。もう何も彼も見えなかつた。今まで微かながらに見えてゐた湖水も、湖水の岸に湯氣を白く靡かせてゐた小さな浴槽も、何も彼も…。

『オウ。』

『オウ――』

とまた反響した。

た。日光の山懐の中に蔵せられた神秘な氣分、それが此處に一ところ開けて世間に落ちてゐるやうな氣がした。それと言ふのも、此處から裏山の山襞に入つて行く山路が一路遙かに栗山の深山窮谷へと通じて行つてゐるためであらう。こゝから富士見峠へ二三里、志津の小屋へ三里。

初音の瀧、その上流の慈觀の瀧、こゝらあたりまで、遊覽の客も入つて行つて見る必要があらうと思ふ。

電車が出來て、あのあたりはかなり開けたけれど、それでも、蔦屋の古い旅舍のある馬返しはいかにも山口の里らしい感じを旅客に與へるに十分であつた。その旅舍の庭の小さな池に映つたさつきの色、また秋の紅葉、林を透して、溪水の轟きわたつて來るさまは、何うしても、日光の烈しい山の氣象を人人に思はせずには置かない。それから入つて行く一歩一歩、あの深澤の深潭からかけて、般若、方等、瀧の瀉下した大きな溪谷を經て來た谷や、水流を遙かに下に見下ろすやうな位置になつてゐる中の茶屋、一縷綫のごとき阿含の瀧、二十四重の峻阪をのぼりつくした大平の白樺の林、やがて華嚴の瀑聲のきこえて來るあたりは、日光の繪巻の中で殊に最もすぐれたシインとしなければならなかつた。

日光の山水は、單に溪山として見れば、或は鹽原の溪谷に劣るかも知れなかつた。しかし、鹽原にないものを、日光は非常に多く持つてゐた。あの明媚な湖水、あの世離れた菖蒲ヶ濱、つゞいてあの戰場ヶ原の靜けさ――。

湖水を横ぎる船もまた興味が多かつた。普通は菖蒲ヶ濱まで船を傭つてわたつて行くにすぎないけれ

ある夕暮には、怒號憤越して流れるその溪水の上に、一面に白い霧がかゝつたりした。この溪には青い美しい海苔が出來た。しかし、鮎は此處まで上つて來なかつた。澤山の雪解の水を雜ぜた溪水は、餘りかれ等にはつめたすぎた。

三

其處は日光のすべての山水の鎖鑰を成してゐると言はれてゐるだけあつて、朱塗の橋のほとりは、いくら世間に俗化されても、容易に俗化され切つて了はないやうなところがあつた。町を出てほつと呼吸がつかれるやうなその溪谷、橋の前面にそゝり立つやうに聳えてゐる山の姿、雨などにはことに、その橋の朱の色が鮮かに美しくかゞやいて見えた。

含滿ケ淵は、今は荒れたけれど、それでも猶ほ行つて見る價値は十分にあつた。田母澤の上流にかゝつてゐる寂光の七瀑、その奧にある相生の瀑、世人は餘り知らないけれど、秋の紅葉の時には、捨て難い趣があつた。

裏見瀑に赴く途中の高原は、春は長閑であつた。駒鳥が頻りに囀り、岩躑躅がそこゝに點綴せられ、遠く聞える荒澤の谷の水の音は、『山行二三里。漸聞水聲。』といふ感じを私に與へた。

裏見瀑の美は、瀑そのものよりも、その附近の山の姿、谷の眺め、または溪流の變化の面白さにあつ

達には羨しかつた。女のない生活、淋しいけれどもわづらひのない生活。

しかし、僧達にはかうした生活は矢張物足らないらしかつた。G院は私に廣い室々を案内して見せて、

『すべて理想的です、唯、一つ不足があります。他でもない。それは明眸皓齒！』こんなことを言つて笑つたりした。

同じやうに並んだ五六の寺坊――その寺坊では何處の室からも、地を撼すやうな深く穿たれた溪谷の水聲がきこえて來た。朝に、夕に、靜かな午後に、または夜更けてひとり目覺めた枕のほとりに……或は低く、或は高く、或は驟雨のやうに、或は琅々と佩玉を鳴すかのやうに。

私は夜ふけて、よくひとりで眼を覺してゐるやうなことが多かつた。雨戸をも引かない廊下の障子には明るい月の光がさし込んで、慈悲心鳥が、キ、キ、キと空を掠めて鳴いて通つた。ある夜は曉近く凄じい山風が吹き起つて、樹といふ樹は軋り、枝といふ枝は撓ひ、葉といふ葉は鳴つて、いつもきこえる水聲さへも、全くそれに沒却されてしまつたことがあつた。日光の山の氣象の烈しさに私はその時初めて觸れたやうな氣がした。

私はよくあの神橋から入町の方へ行く川ぞひの路を散歩した。高くそゝり立つやうに聳えてゐる對岸の山骨、その裾を紆餘曲折して或は右に、或は左に、或は左右相合して落ちて流れて來る溪水の樣は、私の心を樂しましめるに十分であつた。

ませんが何うです、すいらつしやいませんか。』

かう言つて、私はG院の主僧から誘はれたことがあつた。

は明けて外國人などに貸すが、平生は全く閉め切つて、唯、番人が一人隅に小さくなつてゐるばかり、主僧も一山の内に、その他に輪番の持場持場があるので、自分の寺に歸つて住むやうなことは滅多にはないのであつた。唯、月に二度か三度、留守居のものに命じて、戸の一部を明けさせ、風呂を立てさせ、そこで一二時間を靜かに過した。

私は日が暮れてから出かけた。

G院の主僧は、同僚の人達と碁などをうつてゐた。

『よくいらつしやいました。』

かう言つてG院は立つて來た。

風呂場――それは綺麗な理想的の風呂場であつた。水は小さな瀑のやうに樋からすさまじく流れ落ちた。それに口を當てると、その冷めたさは齒に沁みわたるやうであつた。私はさびしい僧達の生活を想像しつゝ靜かに湯に浸つた。

何處に行つても、この綺麗な水は羨しかつた。それだけでも、都會に住む私達に取つては、既に大きな御馳走のやうな氣がした。風呂に、酒に、蕎麥に、とろゝ汁に、精進揚に――さうした生活もまた私

六月の祭禮は殊に私の心を惹いた。祖先の昔からそれと定められた神領の百姓達は、今も其日は朝早くからやつて來て、三神庫の中に藏められた鎧、兜、槍、刀等に身をかため、或は鎧武者となり、或は槍持となり、或は太刀持となり、古い昔のまゝの列をつくつて、東照宮のあの門前から長阪の旅所へと神輿に隨從しつゝ進んだ。尠くとも私はそこに日本にもさう澤山には見ることの出來ない古風な祭禮の儀式を發見した。長阪の旅所のひろい庭では、冠をつけた神官達が、悠揚迫らざる笙や、篳篥の調子につれて、昔の東遊びの舞踏を舞ひ、佾は佾で、その山特有の一種古雅な調子の足取りで、その大きなひろい裾を飜して見せた。

その旅所の廣庭――それは平生は全く人氣もなく暗く閉されてあるのであつたが、その日ばかりは晴れやかに、さながら遠い昔のある一日が再びそこに蘇つて來たかのやうに、今の世とは全く異つた色彩と氣分とをあたりに漂はせた。白い袖の長い衣服、冠の高く聳つた人達の姿、笙の音の靜かな調子、もし其處に、それを物見する群集の中に、眞紅のパラソルを翳した肥つた外國婦人が雜つてゐなかつたならば、私達の心は、遠く千年の昔の世に夢のやうに誘はれて行つて了つたに相違なかつた。

二

『今日は風呂を立てさせました。不斷閉めて置くので、本宮に風呂たけてお茶も碌々あげることは出來

日光と鹽原

一

新綠の美しさ――それは芭蕉の『あらたうと青葉若葉の日の光り』を思ひ出させずには置かないやうな美しさであつた。あらゆる萠え出づる力に伴れて、次第に塗られて來るさまざまの色彩、それが山を蔽ひ、谷を蔽ひ、朱塗の典雅な橋を蔽ひ、更にキラ〳〵と溪の瀨に碎ける日影と相掩映して、暗い杉の森の中に半ば埋められたやうになつてゐるあの金碧の殿堂も、其頃には、晴れやかに世間にあらはれ出してゐるやうな氣がした。外山の半腹あたりから望むと、その杉の古樹と新綠と相雜り合つた間に、或はその屋尖を、或はその樓閣を、或はその五重塔を、或はその廻廊をさながら大和繪か何ぞのやうに展開して見せた。單に繪だとか何とか言つて了ふことの出來ないやうな美しさが其處にあつた。私は、よく獨りでその金碧の殿堂を繞つた苔の深い石垣に添つた路を步いたが、をりをり崖になつたところに卯の花などが眞白に咲いてゐて、それがある日には、ちら〳〵とそこを流るゝ細い綺麗な溪水の上に落ちた。

れてあつて、大きな黄い白い幣帛を振りながら、やがて打揚げらるべき花火の種類の名を人々は叫んだ。
つゞいて花火は勇しく揚つた。

波久禮に來ると、荒川の潺湲は次第に美しくなつて來た。しかし、餘り雜沓してゐるので、それを子供達に指し示さうとしても、容易に顏を車窓から出すことが出來なかつた。

荒川の上流は、古生層なので、岩石が一種錆びた鼠色をなしてゐて、日光や木曾あたりの花崗岩の上を流るゝ溪流の持つたやうな明るさを持つてゐなかつたけれども、それでも、そのぢみなカラアが一種落附いた感じを人に與へた。

やがて寶登山驛についた私達は、寶登山の大祭の賑やかな氣勢を後にして、溪に臨んだ長生館の奧の二階の一間におそくなつた晝飯を食つた。

しかし、長瀞の眺めは、汽車が出來て、都會の人々が多く入り込むやうになつてから、非常にその最初持つたラスチックな靜かな氣分を失つたのを私は感じた。あたりもいやにひらけ、わるく乾いて、以前に書生時分に行つた時のやうなすぐれた印象を得ることが出來なかつた。

しかし、子供達には、その大きな岩が、またはその深い淵が、遊ぶにはめづらしく面白く感じられたやうに見えた。かれ等は岸から岸にわたした鎖の舟渡しを面白がつて、それを手繰つて二度も三度も對岸にわたつて見たりしてゐた。私はそれを樓上から眺めた。

寶登山神社では、花火の揚る音が頻りにして、午後に行つて見ると、田舍の大きな社の祭禮らしい氣分が名殘なくあたりに漲りわたつてゐた。林の疎らな丘の中段には、寄進花火の筒が何本となく並べら

私は一時間以上もそこに彷徨した。感慨盡きるところを知らなかつた。

四

一桁の長橋靜かに荒川を渡つて、寄居の町に入ると、越生、小川などとは丸で感じの違つた、山裾の町と言ふよりも寧ろ山口の町と言つたやうな印象が私を喜ばせた。私達は町で鉢形の繪葉書などを買つた。

停車場前の旅舍で、一時間ほど汽車を待つたが、その樓上から眺めた秩父の山巒も美しかつた。笠山の丸いいんびりした上に白い雲のふわふわと浮いてゐるのもなつかしければ、薄紫をした山の半面に明るく日がさしてゐるのも靜かであつた。そこからは山の翠微を背景にして、工場の烟突や、二階三階の瓦甍などがくつきりと空に捺したやうに眺められた。

熊谷から岐れて、荒川の東岸に沿ひ、絶えず前の秩父の山巒を望みつゝ、次第に山の嵐氣の中に入つて來る樣な上武線の汽車はやがてやつて來た。不幸にして、或は幸にして、丁度その日がそれから行かうとする長瀞の上にある、寶登山神社の大祭に當つてゐたので、列車は殆ど全くその賽客で埋められてゐて、赤いメリンスの帶だの、草花の模樣の出た襟だの、派手な襦袢の袖だのが、荒れた手や太い足や乾いた皮膚に不相應にビラシヤラしてゐた。私達は辛うじて、その一隅に腰をかけることが出來た。

私は考へた。(成ほどさうだ。成ほど上杉がこの城だけは何うすることも出來なかつた筈だ。小川から越生を經て川越に通ずる路、即ち昨日私達の通つて來た路は、丁度要塞の中の路のやうな形を成してゐるではないか。小川町の北を劃つた丘陵は、その自然の城壁を成して、その內部を窺ふことを得せしめないやうになつてゐるではないか。北條方はいかやうにもその中で自由な連絡を執ることが出來る。鉢形のこの城を、上杉が持餘した筈だ。)

『來て見なければ本當のことはわからない。』

かうつゞいて私は獨語した。

私達はやがて、そこから荒川の見える方の疎な林の中に入つて行つた。

何とも言へない雄大なシインがそこに開けた。荒川は大きな溪谷をつくつて、兩山の間を激怒憤越して流れ落ちて來てゐるのである。そしてこの鉢形の城址のある、その當時は立派な天嶮として役立つた數百仞の一面の絕壁に當つて、大きく東北に弧線を描いて、そして關東平野へと流れ出てゐたのである。長瀞の溪潭が好いとか、三峰に至る間の山水が好いとか言つたとて、何うしてこれとは比較にならうと思はれるほどそれほどその眺めはすぐれてゐた。私は敢て言ふ、東京附近で、これほど雄大な眺めを持つた峽谷は他にはない、と。

『襟帶山河好。雄視關八州。古城跡空在。一水倘東流。』かうした詩が、ひとり手に私の頭に上つて來た。

『今はもう出ねえな……。』

また、鋤を使ひ始めるのをこゞめるやうにして、

『何か昔のまゝで、殘つてゐるやうなものはありませんか？』

『あの木がさうだ。』

かう言つて、そこからさう遠くない小高いところに大きな傘を張つたやうな樹を指した。

『ふむ、あれがその時分からある木かね。……』

かう私は言つて其方を見て、『何の木だね？』

『榎だんべえ。』

私達はやがて其處を去つて、その小高いところへと行つた。カサコソする草叢、一つ二つ咲き殘つてゐる野椿の赤い花、それにも昔の空氣がからみついてゐるやうな氣がして私はたまらなくなつかしかつた。私達は榎の木の下に行つて、仰いで見、撫でて見、さてその下に草を藉いて腰を下した。子供達も、『その時分からある木なの、これが？』と言つてなつかしさうにした。春の午前の日影は麗らかにあたりに照つた。

私は昔のさまを想像した。大刀を挾んだ武士や、かつぎを着た姫達が此處等を往來したさまを眼の前に浮べて見た。過ぎ去つた時の永劫即一瞬の空氣の深く身に沁みるやうな氣がした。

そこを入ると、ちよつとした廣場があつた。そこからは、既に一目に深く、大きく穿たれて折れ曲つて來てゐる荒川の流れが覗かれた。鐵橋の工事中らしく、大工や工夫が頻りに小屋掛けなどをして、頻りに斧の音をあたりに響かせてゐた。

城址はもうすぐであつた。私は其處に麥の綠の畑と、桑の畑と、それから隅に偏つて靡いた淡竹の藪とを見たばかりであつたけれども、しかもところどころに僅かに殘つてゐる壘壁の跡や、濠の跡や、石垣や、小さな丘や、さうしたものゝ中から、仔細に昔の城のあとをさがすことが出來た。

私は立つて眺めてそして四顧した。畠に耕す農夫があつた。

『こゝだけですか、昔の城の跡は？』

私はかう訊いた。

農夫は鋤をとゞめて、腰を伸すやうにして、『そこが本丸の跡でさ……それからずつと向うに姫曲輪があるのですが……さうですか、大手ですか、大手は丁度あそこいらになつてゐるでせう。』かう後を顧みて指した。

『何か武器か何か掘り出すやうなことはありませんか？』

『元はよくあつたさうですよ、村にも持つてゐるものがありますよ。』

『今は出ませんか？』

て進んだ。次第に迫つた山襟は開けて、成ほど荒川の流域と想像されるやうな濶い濶い低地がその前にあらはれ出して來た。

『鉢形の城址、鉢形の城址？』

かう私達は何遍も何遍も逢ふ人毎に聞きながら歩いた。

松原を出て、さびしい村を一つ越して、それからスロープをなして麥畠の方へと出て行つたが、矢張城址に行くには、鉢形の聚落に出なければ駄目であるのが次第にわかつて來た。想像したとは違つて、その古城址はその鉢形の聚落からさう離れてゐないところにあつた。

それはさびしい村だつた。茅屋陋舍相續くといつたやうなところであつた。丁度神武天皇祭の日で、國旗がところどころその茅葺の屋根を飾つてゐたりした。やがて私達はその搦手の址である溪橋のあるところへと行つた。

潺湲とした水聲がやがて私達の前にあつた。

急いでそこに近づいて行くと、橋の下には美しい繪も及ばないやうな溪流がひらけて、半ば碧い潭を成して深く湛へ、半ば白い瀨をつくつて瑠々として流れてゐるのを見た。

『好いな。』

かう言つて私達は橋の欄干に凭るやうにして眺めた。橋には搦手橋と書いてあつた。

三

小川から荒川の河畔にある寄居町まで三里、この間は、坂戸、越生間、または越生、小川間よりももつと淋しい人通りのない道であつた。曉の山巒からは雲が絶えず湧くやうに騰上した。『倩レ車出ニ山驛一。雲湧曉巒冥。雖落兩三里。搖々酒未レ醒。』かうした詩がひとり手に私の口に上つて來た。

これを此方に來ずに、小川から北國街道を本畠村の方へ出て行くと、畠山重忠一族の古址が到る處に散在してゐて、仔細に探れば逸興もまた尠くなかつたのであつたが、それを捨てゝ此方に出て來たのは理由があつた。私は切に荒川沿岸にある鉢形城址を探ることを望んだのである。

鉢形の古城址は、關東の歴史を讀むものゝ必ず行つて見なければならない處であつた。北條と上杉の對抗、川越に本據を置いた北條が、時には松山を奪はれ、また時には川越を空くして上杉の鋭鋒を避けたことなどもありながら、終にこの一帶の山地の守りを失はなかつたのは、その左翼の鉢形が要害の地形を占めてゐて、かねて常に敵の背後を脅かす形になつてゐたからであつた。私は長い間一度そこに行つて見たいと思つてゐた。

乘つてゐた乘合馬車が、鉢形にあと半里ほどのところで、車の轅を外して了つて、それを直すのに手間が取れさうなので、思ひ切つて私達はそれを捨てゝ、街道から外れた捷路を松原や草藪の間にもとめ

く白堊、處々に林立した工場の煙突、豊かに渦まき上る夕炊の烟、それはちよつと思ひがけないやうな賑かな町にやがて私達は伴れられて行つた。

『好い町だね。こんなところにかうした町があらうとは思はなかつた。』

かう私が御者に言ふと、

『小川は賑かですとも……何しろ、織物の市が立ちますからね。』

『越生よりもぐつと好いね。』

『とても比べものになりはしません。こゝらでは一番でさ。』

かう馬に鞭うちつゝ、御者は言つた。

その夜一夜泊つた旅舍もまた私の氣に入つた。一番奥の一間、その障子を明けると、田舍町の裏らしい人家や畠が夕日に染つて、その向うに廣い關東平野を聯想させる長い赤褐色の丘陵が、形の好い松をその上に屹立させて、さながら屏のやうに連りわたつてゐるのを見た。赤い桃の花が畠の中に二三本雜つて咲いてゐるのも、私に田舍町を味はせた。斜に對した樹立の中の建物は、警察署の裏に當つてゐるらしく、頻りに擊劍を習つてゐるシナヒの氣勢がした。私は淺く晩酌をし、子供達は菓子を食つたあとで、その夜は三人床を並べて敷いてぐつすり寢て了つた。

丁度運好く越生から小川に歸つて行くガラ空きの馬車の來るのに邂逅して、再び私達はそれに乘ることにした。

馬車の走つて行くあとに、或は獨立した山巒、或は雲の湧き上る峻峯、或は山合より流れ落ちる細い溪谷、或は繪のやうな桁の長く高い橋、或は人家、或は籬落、或は立つて此方を見送つてゐる汚れた手拭で額髪を卷いた子守、或はあとから追ひかけるやうにして來て、先に容易に拔け出ることが出來ない自轉車、さういふものを殘したり見たりして、私達は次第に山巒深く入つて行つた。津久根の梅溪を見てゐる頃には、空が曇つて天氣が變りはしないかと危まれたのに、今は次第にまた持ち直して、薄い午後の日影が斜に山合の狹い田畠を照した。

普通の乘合馬車ならば、玉川から昔の北國街道の方へと出て行くのであつたが、歸りを急ぐガラ空の戻り馬車であつたために、『近路して行きませう！』などと御者は言つて、右に取るべき路を左に取つて、山合から山合へ、村から村へ、馬の脚をとゞめさせぬほどに驅けさせて、青山、日影などといふ村の間に橫はるさう大して大きくない峠を越して、日影の斜にさしわたる頃、漸く小川町近く行つた。

私はかうしたところに、かうした町を發見しようとは思はなかつた。私の持つてゐる地圖にも、さう大きく書いてないし、熊谷あたりから乘合馬車が小川に行くといふことは知つて居つても、何うせ山合のさびしい町位に思つてゐたのに、段々近づいて見ると潺湲と流れた大きな溪橋を隔てゝ、夕日にかゞやと

ならないほど劣つてゐるが、しかも東京附近の梅溪では、これでもすぐれた立派なものとしなければならなかつた。無論、原村、蒲田、多摩川の吉野、あそこらの梅よりは、遙かに此方がすぐれてゐるには相違なかつた。それにつけても思ひ出さるゝのは、その大和の月の瀬の梅溪であつた。

あの名張川ほどの生色を持つてゐなくつても好いが、せめてはその越邊川の谷がもう少し美しい瀬を持ち、もう少し游溪とした流を持ち、もう少し多い水量を持つてゐたならばと私は思つた。梅も平地にばかり並べて栽ゑられてあるのでなしに、山の峽、山の狹間、谷の底などをも白くして埋れてゐたならばと思つた。

しかし、この梅溪が新月の瀬と言はれる理由は私にもわからないではなかつた。實際、四圍の山巒——のんびりした、または緩やかに迤繞した、頂きの斜面に形の好い松などの並んだ、處々に谷が深く入り込んださまは、まことに月の瀬に髣髴してゐた。『感じだけは、何處か似てる。靜かで、幽揚で、のんびりしてゐる形は、關東の山とはちよつと思はれない。』こんなことを私は兄の方の男の兒に言つてきかせた。

二

秩父の山巒の中に入らうとは思はぬでもなかつたけれども、思ひ返して、それよりは寧ろ入らずに、その山巒の裾を縫つて荒川の流域に出て見るのも面白いと私は思つた。津久根の梅溪を出たところで、

その紳士は町から十三四町ある津久根の梅溪まで一緒に私達を連れて行つて呉れた。紳士は家に持つて行く土産を、この町で一番そこがよいといふ小學校の前の菓子屋で買つたりなどした。一歩一歩町は次第にさびしく、段々場末らしいカラアを帶びて來たが、それに引かへて、四面をめぐる山巒は漸くその連亙を歷々と見せて、雲がふわ／＼と、その峯から湧き出すさまなどが面白く見え出して來た。私とその紳士とは絕えず話しながら歩いた。

津久根の奧にある黑山の鑛泉の話などを紳士はした。段々訊くと、その黑山の村の人であるといふことである。そこから秩父の大宮を越して行くブナ峠の話をした時には、『雪はもうあるめえが、子供さんを伴れてゐては樂ぢやないな。それより矢張小川の方から入る方が好い。』かう言つて、そこは近いには近いが、かなりに嶮しい、人通りのない裏山道だといふことを話した。

津久根の入口に來て、『こゝから、梅だ……ゆつくり見て行かつしやい。もうこの通り遲いが！』かう言つて、帽子を取つて、半ば禿げた頭を見せて、そして別な路の方へとわかれて行つた。

『掌の大きな人だね。僕の倍位ある。』

弟の方の男の兒は、少しこつちに來てから言つた。

新月の瀨と言はれる津久根の梅――さう言はれるために何うしても本當の月の瀨と比較する氣にはなるが、また月の瀨と比べては、その溪といひ、その位置といひ、またその梅といひ、とても比べものに

の入口は、やがて私達の前に展げられて來た。

町の中ほどに來て、馬車は留つた。想像した通り、果してさびしい衰へた町であつた。裏町といふ裏町もなく、唯、一筋に鍛冶屋を置き、呉服屋を置き、小料理屋を置き、郵便局を置き、荒物屋を置き、旅籠屋を置いたやうな町であつた。午は既に過ぎてゐるので、私達は空腹を滿すべく、取敢へず、町で一番大きいと言ふ右側の旅舍に入つて行つた。

明るい二階の一間で、私は馬車の中から懇意になつた半ば農夫半ば材木商らしい五十近い品の好い田舍の紳士と牛鍋を一緒にして淺く酒を酌んだ。一緒につれて來た子供達には逸早く晝飯の茶碗を渡しつつ……。

腹が空いてゐた故か、その牛肉は割合に旨かつた。紳士は丁度私達の行つて見ようとする津久根の梅のある梅園村の人で、一昨日今年十三になる男の兒を川越の中學に入學させるために伴れて行つた歸途であつたが、男の兒を私が二人連れてゐるのをなつかしく思つたらしく、何彼と深切に津久根の梅の話などをして聞かせた。「もう、梅は遲い。まだあるにやあるが、どうせ見に來て下さるなら、盛りでなくちやいけない。折角、見に來て貰つて、つまらないと思はれてはしやうがないから。」などと言つて笑つた。子供達には、今日逢つた見ず知らずの他人とかうして打解けて、牛鍋を一緒に突ついたり、盃のやり取りをしたりする父親が不思議に見えたらしく、頻りにじろじろとその紳士の方をのみ見てゐた。

秩父の山裾

一

坂戸の終點から乗合馬車で秩父の山巒に向つて進んで行く心持は、都會の煩累を離れて一歩一歩大きな自然の懷に入つて行くやうななつかしい感じであつた。あたりの人達ももう都會人ではない。その人達のする話も、山の話、材木の話、田野の話、町の市日の話などである。次第に山の翠微は近く、細かく刻まれた襞に、髮のやうに青く黑く林の連つてゐるのがやがてはつきりと見え出して來た。一緒に乘つてゐた歸休兵の一人は、『國の山は好いな、矢張、木が多いでな。』かうなつかしさうにその伴侶の一人に言つた。

路はやがて丘陵の中に折れ曲つて入つて行つた。越生の町はもう近いのである。大都會の近くにありながら、全く文化に離れて存在してゐたやうな町、汽車を待ちこがれて居りながらまだ容易にそれを得ることの出來ないやうな町、秩父の山巒の裾に徒らにさびしく烟をあげてゐるやうな町、その越生の町

『え、さうとも……』

『海水浴には適いね、しかし……』

『でも海水に入れない病人がいくらもゐるでな……こゝらにも、随分借手はあるよ。』

『別荘は、何ういふ人がつくるんだね。中村の人かね？』

『さうだ、大抵、中村だ……東京の人で、建てた人も一二軒あるとか云つたけれども、何うも遠すぎると見えて、みな、賣つちやつたよ。』

『東京の人には、こんなところぢや不便だね、原釜でも、便利とは言へないんだからな。』

『それはさうだな。』

船は夕日で染められた離れ崎の不思議な形をした岩石へやがて近づいて行つた。

船頭は私の舟に乘るのを待つて、再び竿を取らうとした。
突然私は訊いた。
『あつたかね、鰻は?』
『え、ありました。』
『大きいかね。』
『なアに。』
かう言つて、船頭はそこに置いてあつた笭箵の蓋を取つて見せた。
『おゝ、中位で、好い鰻だ……百目、餘程するだらうな。』
『なアに、安いや。』
『何の位?』
『五十錢ばかしだ。』
『うむ、安いな。』
船は靜かに別莊だの、茅葺屋根だのの連つた下を動いて行つた。夕日の光線は、はなやかに、離れ岬の岩石の赤ちやけた上に照り渡つた。
『こゝらにも、都會の人達が、夏は家を借りてゐるんだね?』

る松山の中までは、入つて見る好事者も尠いに相違なかつた。しかし、私は、そこに行く旅客に勸めたい。「そこまでは是非入つて見給へ！」と。

何故なら、そこには美しい怒濤の奔湧があるからである。見事な岩石の起伏があるからである。上から草や木の根につかまりながら、辛うじて目を觸することの出來る奇景があるからである。丁度それは踩釜の海水浴の徙崖と相對してゐるやうな徙崖で、その怒濤の岩石を浸蝕した奇觀は、他に容易に見ることの出來ないものがあるからである。

私はやがてそこから引返した。

その下の船着には、さつきの船頭が既に來てゐた。

「あ、あの裏まで行きましたか、それは豪い。容易にあそこまでは、人が入つて行かない……」

その話をすると、

かう言つて笑つた。

「ちよつと、危いね、しかし、あそこは？」

「なあに、こつちは大丈夫でさ。眞直に行つては、危ないけれども――」

「崩れて、落ちたものがあるのかね？」

「詳しくは知らねいが、何でも、昔あつたといふこつた……」

『……おもしろいものを發見した……。』

こんなことを思ひながら、私はじつと長い間立つて眺めた。

長い並木松の砂洲に、外海の怒濤の打寄せてゐる樣は、いかにも見事であつた。そしてその坌湧した怒濤と、大きな線の美しい松の排列との間には、かなりに幅の廣い砂の道がつくられてあるのを私は見た。

『好いな。』

私は思はずかう口に出して叫んだ。

それに、その砂洲の盡きたところに、白く且つ赤ちやけた此處等に特有な徙崖の岩石の連つてゐるのも、私に何とも言はれない印象を與へた。正面は、濶い、濶い海であつた。

私は松で縁どられた徙崖の上を、岩石の鼻近くまで歩いて行つた。

此時、ふと、私の眼に留つたものがあつた。それは、村の青年會で建てた建札で、それには、

――これより先に進むべからず、危險なり――

と書いてあつた。脆弱壞れ易い此處等の岩石の危險を示したのであつた。私はそこに立留つて了つた。

三

恐らくこゝまでは大抵の旅客は入つて來るであらう。しかし、これから先には、横に、斜に連つてゐる

どころ壊れて、注意しないと、滑つて危く落ちさうになつてゐた。

夕顔觀音と言ふと、いかにも優美な、源氏物語にでも緣故を持つた、由緒のありさうな觀音堂に思はれたが、此處にやつて來て見て、此處は、この小さな觀音堂は、夕顏を上げて、女の安產を祈る所であるといふ事がわかつた。小さな堂は殆どそのために埋められるほど、澤山に澤山に夕顏が供へられてあるのを私は目にした。

觀音堂のある位置から見た眺望は、かなりに好かつた。そこからは、漕いで來た湖が一面に手に取るやうに前に展げられて見えたばかりではなく、ところどころに浮んでゐる徒崖の岩石の殘缺したものなども、舟で見て來たのとは違つて、言ふに言はれない趣致を添へた。ことに、一番私の眼を惹いたのは、外海の怒濤の長く打寄せてゐるのに並んで、長い並木松の砂洲が、さながら天の橋立の松、または博多の海の中道の松のやうに、眞直に美しくつゞいてゐることだつた。これで、一方の湖の入江が、もつと濶く大きかつたなら、それこそ立派な東北の天の橋立が出來るのであると思つた。

私は堂の傍についてゐる路を傳つて、一町ほど上つて行つた。と、その上は廣い平地になつてゐて、そこからは一層明かに、半ば出來かゝつた東北の天の橋立を一瞥の下にあつめることが出來た。

「は・ア、天の橋立のやうな、あゝした景色は、かういふ風にして出來るんだな。つまり、これで、長い年月を經て、内部の湖水がもつと本當に完成せらる・やうになれば、立派な海の中道が出來るわけだ

『丸で別天地だね……舟でなしに、陸から來られるのかしら、此處は？』
『來られるとも……』
『船頭さん、此處のもんかね？』
『さうだ……家は、此處にあるだ。』
『それで、海水の方へ稼ぎに行つてゐるんだな。』
『まア、さうだ。』
かう言つて船頭は笑つた。
やがて船が着いて、私達は岸へと上つた。
『ぢや、何うか、さうして吳れろ。氣の毒だがな。』
『何アに、大丈夫だ。』
かう言つて、私は船頭に別れて、ひとりぼつ／＼と湖に沿つた路を岩山の方へと歩いた。そこからは、さつき低い松の中から見た大きな入江や、松並木を越した外海の怒濤の響が、手に取るやうに見えたり聞えたりして來た。次第に、路は觀音堂の丘へとついて行つてゐた。
徙崖の赤ちやけた岩がところどころに露出してゐるにも拘らず、そこは松や灌木がかなりに深く生えてゐて、小さな觀音堂は、半ばその樹の影に蔽はれるやうになつてゐた。五六十ある階段の石は、ところ

捨て、艫を押した。艫の音が靜かに湖上に響き渡つた。

二

船はやがて岸近くなつた。船頭は向うの丘の上の森を指して、

『あれが、夕顏觀音でさあ。』

『あ、、あれが――』

『わし、案內すると好いだが、ちよつと、錢貰つて來ねえちやなんねえで、お氣の毒だが、お前さア一人で行つて見て見れろ、な。何アに、わけはねえだ。そら、見えてんべ……そら路が、岩の上に……あそこを行くだ。さうすると、觀音さんの堂のところへ行くだで……そしてお詣がすんだら、もう少し上の方さ、行つて見るだ。景色好いだでな。』

『迷ふやうなところはないね？』

『ねえとも――』

船は岸に近くなつた。それは此の村の埠頭と言ふやうなところであつた。

『好いところだな。』

『なアに――』

ころへ向つて進んで行つた。
湖のところどころには、高い櫓のやうなものが出來てゐた。私は訊いて見た。」
『さうでさ、矢張、夜網を打つために出來たんでさ。』
ある櫓の下のところでは、老いた漁師が頻りに置針をあちこちにと置いてゐた。」
『おんつあん――』
かう船頭は遠くから聲をかけた。
老いた漁師は此方を見た。
『おんつあん、鰻を持つてゐねえか、二三百目――俺ら、海水の人に賴まれたゞが、あつたら、讓つて吳れねえか。』
『ちつともねえや。』
かう老いた漁師は叫んだ。
『少しはあんべいがな?』
『ねえだ、百目もねえだよ――』と考へて、『淸公、持つてべい。きいて見ろ。』
『さうか、淸公、持つてゐるか、さうか、難有う。』
かう言つて、船頭は此方へ此方へと舟を漕いだ。始めて深いところに來たといふやうに、かれは棹を

『これから、段々、伴れて行つて見せるだよ。』

で、暫くそこにゐて、やがて、元の舟のところへ戻つて來た。』

『こゝに茶屋でもあるこ好いね。一軒で好いから……』

『本當だよ。』

『出來さうなもんだがな。』

『駄目だなア。もつこ、見物に來るものでも多くならなけりや――』

また私達は舟に乘つた。舟は靜かに松の影の映つた入江の水に長い痕を殘しつゝ進んだ。

暫くするこ、細い長い入江は松こ共に盡きて、今度は割合に濶い大きな入江がその前にあらはれ出して來た。外海の怒濤の音が地を撼かしてきこえて來た。

『外海の波が此處まで入つて來るやうなことはないかね？』

『滅多にないな。』

『それでも、あるにはあるのかね？』

『一度だか、二度だか、あつたつていふ話だ。元は、此處は砂濱だつたで……こゝの湖水も、もこは海の水だつたで――』

いかにも初期の潟湖らしい形を指點しながら、私達の舟は、次第に、徒勝の懷になつてゐるやうなさ

『こゝは、松川浦でも名高い名所だ。相馬の殿樣がよく遊びに來たところだ。』

少し行つたところで、船頭はこんなことを言つて私に敎へた。

成程、それは好いところだつた。低い綠の細かい松が繪のやうに到るところに生えてゐて、砂の白いのがそれに好い調和を保つてゐた。そればかりではなかつた。その松の間を向うに拔けると、そこに一寸こころひろ〴〵とした入江があつて、その向うに竝んで立つてゐる松が、何とも言へぬインプレッシイブな感じを私に與へた。

『成ほど好いな……昔はこれで相馬の殿樣の別莊でも此處にあつたのかな。』

『さうだんべい。』

私は向うの松並木を指して、

『あの向うは、大海かね?』

『さうだ……』

『成ほど、此處に來ると、靜かで好いな。成ほど名高い松川浦だけあるなと思はれるね。』

『でもな、一番、好いのは、夕顏觀音だよ。あそこに行つて見なけりや、松川浦の本當のことはわかんねえだ。』

『何處だね? 夕顏觀音つて?』

『鰻は好いな……此邊等では、名物の一つになつてゐらア、鰻は――』
『澤山獲れるかね？』
『かなりゐるなア。』
此方から向うに沼を横斷するにも、艪は少しも用ひなかつた。竿だけで漕いで行くことが出來るほど、それほど湖は淺く且つ汚なかつた。
暫くして氣が附くと、舟は川のやうな細い入江へと入つて行つた。そこに緑の細かい低い松があつた。蘆荻が生えてゐたり、萱ががさ〳〵と繁つてゐたりした。舟蟲や小さな蟹が一杯そこらにチヨロ〳〵してゐた。
その入江を少くとも五六町は行つた。右の砂洲には、次第に低い、緑の細かい松が多くなつて行つた。ある灌木の林の角のところには、二三人の手拭をかぶつた女が頻りに松葉を掻いてゐた。
『清公、何うしたな。』
『ゐるだ、家に……』
『さうかな、ゐるかな、午前に覗いて見たらゐねいやうだつた。』
平常懇意にしてゐる間柄らしく、その女の一人と船頭とは、こんな世話をした。やがて船頭は私を伴れて一緒に岸へ上つた。

こころごころ、樹の枝を一杯に投り込んであるのに目をつけた私は、一

『何か養殖でもしてゐるのかね？』

かう訊いて見た。

『牡蠣でさ……牡蠣を養殖してゐるでさ……』

『獲れるかね？　ちつこは？』

『ちつこはこれますがな。何うも、小さくつて駄目ですな……』

『しかし、他に、まだいろ〳〵なものが獲れるには獲れるんだらう？』

『鰻位のものだな。』

『鮒や鯉は？』

『ゐるにはゐるが、さう澤山はゐねえな……何うも、まだ潮がさして來るだでな。』

『わかさぎは？』

『まだゐねえな……』

『養殖位しさうなもんだな？　縣で？』

『わかさぎは、沼が古くなくちや、駄目だアな……。海の水がさして來るやうな沼ぢや——』

『鰻は好いのが獲れるかね？』

「澤山は來ねえな……何しろ、こんな田舍だで。」

「でも一時は松島ご並べて言はれたこごもあつたぢやないか。」

「そんなこごもあつたなア……けれご、小さいでな、景色が――」

こんな話をしてゐる中に、湖水は次第に眼界を濶くして來た。丘の上に聳えてゐる松の面白い姿の上には、白い長い旗のやうな雲が靜かに靡いて見られた。

路は湖水に向つて絶えず下りつゝあつた。次第に蘆荻が多くなり、小さな川が多くなり、眼界が濶く濶くなつて行つた。暫く經つた後には、私達は舟の繋いである岸へご行つた。

船頭は持つて來た莫蓙を舟の中に敷いた。

船は靜かに動き出した。

何うもあたりが平凡であつた。これが有名な松川浦かご思はれる位であつた。水の色も錆びて、イヤにごんよりしてゐるし、周圍をめぐる山も、概して低く、樹木に乏しく、赤く禿げてゐるやうなものが多かつた。唯、一面、南西に向つた方の山襞が、いくらか嵐氣を湧かしてゐたけれども、それごて爽かな心持を人に與へるほごでもなかつた。

行つても行つても、湖水は淺く、汚ない藻が一杯に生えてゐるだけで、蘆荻さへ思つたほごに茂つてはゐなかつた。

『餘程、高いかね、此處等は、一夏借りるには……？』
『たいしたことはねえな。』
『何の位だね？』
『さア。』
考へたまゝ容易に言はうとしないので、
『一夏、五六十圓も出せば、好い家があるかね？』
『その位、出せばいくらもあんべいよ。もつと安くつてあんべいよ。』
『さうかね……それから思ふと、大磯あたりは高いね。一夏、六疊一間で、百圓するからね。』
『さうかねえ、何しろ、此處は田舍だでな、まだ……客が來る來るつて言つても、さう好い客は來ないからな。』
『さうだらうね。』
少し默つて歩いてから、
『でも、松川浦には、見物に來るものが隨分あるだらう？』
『ちつとはあるね。』
『澤山は來ないかね？』

否、そればかりではなかつた。そのために、海水が陸地の内部に浸入し、潟湖の初期をなしたやうなものを到るところに發見した。

松川浦はさうした初期の潟湖で、原釜の海水浴場から一里にも足らないところに位置してゐたが、一時は東北に於て、松島とその勝を競ふに足るなどと言はれて、かなり人が遊びに行つたものであつた。

ある年の夏、私は原釜の旅舍の主人に、松川浦遊覽の舟を準備して貰ふことを頼んだ。

『好う御座んすとも……すぐでも、支度は出來ますから。』

私が支度して外に出た時には、船頭は、既にそこに來て待つてゐた。

細いうねく／＼した道、漁村でなければ見ることの出來ないやうな貝殼の屋根、その漁村の家の一間には、都會の一家族が海岸に一夏をすごすがために自炊生活をしてゐるやうな人達をも見たが、暫くして丘陵と丘陵との間から、水の銀色に光つて輝くのを見た私は、

『あれかね、松川浦は？』

『さうだア。』

『近いんだね。』

『十万町つて言ふだア、海水浴のところから。』

私は話を海水浴の人達の方へと持つて行つた。

松川浦に遊ぶ

一

相馬の原釜は、常磐線の汽車の馳走する海岸では、かなりに名高い海水浴場であつた。しかし、田舍だけにその設備はさう大してすぐれてもゐなかつた。客は大抵仙臺、相馬、平あたりから來た。東京からわざ〳〵出かけて行つたやうな客は滅多になかつた。夏が過ぎ去るこ忽ち元のさびしい荒凉こした漁村になつてしまつた。

村のあるこころから、少しのぼつて行つた徙崖の上には、松が面白く生えて、そこからは渺々こした太平洋が一目に眺められた。岸は半ば砂濱、半は徙崖で、その徙崖は白ちやけた危い石でつくられてあつたために、絶えず怒濤のために浸蝕されて、時には奇岩や大きな洞窟などをあちらこちらに見出すここが出來た。

停車場の近いのがわかつた。それは何遍通つたか知れない、そしてまだ一度も下りて見たことのない停車場であつた。私は先づ停車場へ行つた。

まだかなり待たねばならなかつた。仕方がないので私はその前にある旅館へと行つた。そして金魚などの泳いでゐる小さな池に面した静かな室で、若い岩槻生れの女と一時間ほど話した。

『さうですね、此處の停車場は、滅多に下りる人などは御座いませんね、汽車が大抵は素通をして行つて了ふんですもの……。本當ですとも、貴方のやうなお客様でもなければ、東京の方は滅多に此處にお出にはなりやしません。』

女は岩槻の話を何彼とした。私の知つてゐる旅館が改築されたことや、町が昔から比べると、いくらか賑やかになつたことや、その女の親しい友達がある豪農の息子と情死した話などを盡きずにした。室には明るい午後の日影が一杯にさし込んでゐた。

やがて私は廣い明るい野に出た。一條の大路は、斜坂になつた扁平い丘を眞直に向うについて行つてゐた。秋風はさびしく路傍の薄を吹搖がした。到る處林は日影に透かされ、丘は影に蔽はれ、遠い空は色ある雲に彩られた。停車場から來たの『であらう、自轉車が一輛、滑らかな道を勢込んで走つて來たが、やがて私の歩いてゐる傍を掠めて、飛ぶやうにして通つて行つた。

長い岡が盡きると、水田がその前にあらはれて來た。水草の深く茂つた中に、めだかの泳いでゐる川なども見えた。岩槻の方へ行く道は、赤い坂になつた路で、そこからその路は汽車の線路を横ぎつて、林や野を通つてそして向うに行くのであつた。私は四五年前に行つた岩槻の町を想像しながら歩いた。庇の長いさびしい古い町が私の眼の前にあつた。

『蓮田に行くのは、これで好いんですか。』

かう私は路傍のある農家で訊いた。路はまた丘から丘へとかゝりつゝあつた。丘の上からは、天末がひろく開けて望まれた。

やがて今まで――菖蒲を出てから殆ど見たことのないやうな人家の集落が路の行先に現はれて來た。ある農家では、大きな精米所を自分の庭に仕かけて烟筒から烟を漲らせて盛に米をついてゐるのが通りから見られた。豪農らしい門構の家や、柘榴の見事に熟してゐる庭や、さういふものがそれからそれへと續いた。

いくらか地盤が高くなつてゐるので、町は秋の空氣の中に浮彫のやうに浮き上つてゐるのを私は感じた。歩いて行く通りには、物音もなければ、人の影もない。しんとした靜かな午後の空氣がしめやかにあたりを領した。

長い庇の奥に破れた障子の高窓があり、すつかり閉め切つた二階があり、板葺の古くなつた屋根があつた。そしてこの衰頽と滅亡の中に、ある期間は鮮かに人目を欹だたしめたであらうと思はれる醫師のペンキ塗の剝げた洋館の雜つてゐるなども面白かつた。町のところ〲には楊柳が栽ゑられてあつて、」その葉の疎らな影をさびしく街上に落してゐた。

この町にも旅館はあつた。かういふ町のかういふ旅館には、さぞさびしい物語の種が潜んでゐることであらう。日本のルージンが其處等に彷徨つてゐることであらう。こんなことを考へながら私は歩いた。靜かに、〲……。

しかしこのさびしい昔の町も時の間に盡きた。私に東北線の停車場に行く道を敎へて吳れた人は、髮の長く生えた大きな瘤のある中年のさびしい顏をした男であつた。

町を曲つた角で、私は敷島を買ふためにある店に寄つた。そこは飲食店で、奥には大勢人が集つて、赤い襷をかけた女が頻りに何か饒舌つて笑つてゐた。その笑聲にも衰頽と寂寥とが名殘なく附纒つてゐるやうに私には思はれた。

『桶川でせう。』

『停車場かね？』

『さうでせう。』

そこまで直徑にして一里に足らなかつた。左は、東北線の線路が矢張一里に足らないところを走つてゐた。

白岡の八幡宮の話などを車夫はした。そこまでは此處から一里位しかないといふことであつた。」

五

林をいくつか過ぎた。やがて廣い一條の道は、淋しい原市の町へと私をつれて行つた。長い庇、さびしい通り、壞れかけた家屋、街道に干した穀物の莚――北武藏野の一角に來たといふやうなさびしい心持は新しく私の心を襲つて來た。

少くとも街道筋には見たくとも見ることの出來ないやうな特色のある古い町であつた。附近に比較を求むれば、その感じはいくらか岩槻の町に似てゐた。遠い昔の面影と、遠い昔の空氣とは、何處となくあたりに巴渦を卷いて、旅客のなつかしさを誘ふやうに見えた。私は町の入口で車を捨てゝ、靜かにその空氣に浸るやうにして歩いた。衰へたもの、頽敗したもの、なつかしさよ。」

神などといふこころも、武藏野研究者は是非行つて見なければならない。

飯能は山裾の町だ。宿屋の二階から、町の屋根を隔てゝ秩父丘陵の長く關東平野に突出してゐる形を見るのは、ちよつと他には見られない光景の一つだ。扇町屋の平地から武甲山を松原越しに發見したさまも、私の忘るゝことの出來ないものであつた。

私は人々に話した『武藏野は實際不思議だ。東京のやうな繁華な首府をすぐわきにひかへて居りながら、一里二里、三里入ると、もうすつかり田舍だ。殆ど東京がその近くにあるとは思はれないほど田舍だ。何等東京風の影響もなければ、首府からの交渉もない。民は皆畠を耕して甘藷などを常食としてゐる。交通の便がなかつた故もあるかも知れないが、兎に角不思議だ。』

それほど武藏野は今でもさびしい。東京から武藏野を見に行くといふ人達も、多くは電車の線を利用して一歩もその先には行つて見ようとはしない。從つて、武藏野の眞相は、今だに都の人達に知られずにゐる。こんなことを私は車の上で考へた。そしてこの原市附近が矢張り昔の武藏野の面影を多く殘してゐることを想像した。林には林が續いた。

やがてひろびろとした處へと出た。振返ると、村の所在を示した森の上にはつと白い烟の靡つてゐるのが見えた。

『何處だえ、あれは？』

志木町は一見見て古い町だといふことが飲み込めた。昔の奥州街道――義經が通つたり道興准后が通つたりした最古の奥州街道は、久米川から内川に沿つて此處に來て、宗岡を通つて、そして荒川を渡つて岩槻の方へ出て行つたのだ。私は此處に泊つたあくる朝、早くひとりでその町を歩いて見た。町は少し行くと、やゝ低くなつて、對岸の宗岡との間に、美しく内川の水が流れてゐた。橋がかゝつてゐた。

一度は東上線の新河岸驛から下りて、川越街道を横ぎつて中福を通つて、堀兼へと志した。例の名高い堀兼の井を見ようとしたのであつた。武藏野の中で、恐らく此附近ほど昔の面影を殘してゐるものはあるまいと私には思はれた。あたりは林と畑とばかりである。甘藷と陸稻と茶畑とばかりである。村は勿論、農家の煙さへ滅多には見えない。堀兼の井のあるあたりは中でも殊に私の興味を惹いた。

一度は川越線の東村山驛で下りて、その近くにある元弘戰死者の碑を訪ねた。碑のある德藏寺の庭園は、頗る詩趣に富んでゐた。それから私は久米川の橋を訪れたり、義貞時代の塹壕の跡を模索したりして、小手指原の方へ行つた。

小手指原と相對して、狹山の丘陵が長く靡いてゐた。此處等に來ると武藏野といふ感じも、東京の郊外附近で味つた武藏野とは違つて、背景も大きければ、氣象も雄大であつて、武藏野は、地理學上、高原的臺地であるといふことであるが、此處等に來るとなるほどさうだと點頭かれる。そして、武藏野鐵道の車窓は、優にこのひろい風景を展望させるに適してゐる。狹山の丘陵の中にある山口觀音、北野天

いやうなところです。」などゝ言つた。分岐點から段々入つて行くと、なるほどこれはさびしい。東京近いところに、それも右にも左にも、三十町内外で汽車の停車場を持つてゐるところに、かういふさびしい處があるかと思はれるやうな光景が次第に現はれ出して來た。私の車は時に川の緣、時には甘藷畑の傍、時には日影の濃淡のチラ／＼する林の傍を縫つて靜かに動いて行つた。今までいつも眼を離れなかつた百姓屋の影はすつかりあたりに絶えて、林と丘と畑とばかりが續いた。水田はもうあとに／＼なつて了つた。私は開けた關東平野からさびしい武藏野へと入つて行つたのだ。

四

武藏野は今二條の鐵道が横貫した。

私は二月三月、この鐵道に沿つて、彼方此方と歩き廻つたことを頭に繰返した。今でも昔の武藏野の面影の殘つてゐるところは、所澤以北乃至以西であらう。それから、この二條の汽車の並行した中間に位するあたりのある部分であらう。一度は私は東上線の膝折驛で下りて、川越街道の野火止から平林寺へと行き、そこから引返して志木（昔の引又）に來て泊つた。平林寺は好い靜かな寺だ。それから雜木山越しに、野火止に近道をして出て來るあたりも好かつた。玉川上水を引いた綺麗な溝渠に沿つてひろい道をひろい野を、夕暮の金色の光に浴しながら、明るい灯の志木町に近づいて行く心持も忘れられなかつた。

れで亦元の利根川に川口の下あたりで合して、そして隅田川となつて行つたのかな。』かう思ふと、德川幕府が治水の爲めに、關東平野の水を左へ左へと骨折つて押してやつた形がそれと眼の前に浮んで來るやうな氣がした。續いて、武藏野の溝渠が地盤が高かつたがために、この地方のやうな完全な效果を擧げることが出來ず、土地が今だに荒蕪に歸して了つてゐるのを私は考へずにはゐられなかつた。玉川上水の水を引いて、武藏野の中部を橫斷させて、平林寺から志木の方へ導いて行つてゐる溝渠のさまなども私の頭に浮んだ。

元荒川に邂逅したところから少し行くと、柴山と言ふ村があつて、此處で見沼用水が元荒川に合してゐるのを私は見た。衰へた川同士が、何の感興もなく、何の興奮もなくごんより寄つて來て、ごんよりと相合して、そして田圃の間に流れて行つてゐるさまを私は不思議な心持を以つて見た。柴山といふ村は、丁度この二川の會點に面して、やゝ賑かな田舍の町を展いて見せたやうな形になつてゐた。赤ちやけた瓦、赤い甕、たばこといふ赤い看板などが、さびしい、くすんだ錆びた色の中に浮出して見えてゐた。橋に面したある茶店の前を通る時には、其處にやすんで中食をしてゐる田舍の爺さんと娘との姿が見えた。

一歩一歩、道は狹く、あたりがさびしくなつて行くのを私は見逃さなかつた。『こゝからは、原市街道です。これまでは中仙道の裏通で人通りがありますけれども、これから先は、もう誰も通りつこはな

私は鮒のつけ焼と玉子焼で晝飯をすました。

私はまた車で出かけた。こゝから原市までは三里ある。しかし、この間の道路は、里人の外は滅多に旅客の入つて行かないやうなところで、車夫も、「原市とはめづらしいお客さまだ。そこにはもう何年も行つたことはない。」などゝ言つた。原市といふ町は、汽車と汽車との線路に挾まれながらそれとは何等の關係もなしに、昔の面影と昔の狀態とを保留してゐるやうな町であつた。

菖蒲の町を出ると、道は長く見沼用水の上を東へ向つて走つて行つてゐるのを私は見た。町外れの橋の袂には、大きな柳が一本風に靡いて、三味線の音が靜かにきこえた。川に臨んだ小さな棚木の上では、赤い襷の女が頻りに物を洗つてゐた。

縱横に水田に利用された用水の樋のさまが行く行く私の前に現はれた。潴は幾段にも堀られ、樋は幾段にもかけられた。堰いたために、水がすつかり涸れて、水底に船が露されてゐるのなども見えた。少し行くと、右に靜かな川が流れてゐるのが見えた。

「あれが元荒川でさ。」

かう車夫は私に言つた。

矢張錆びた色をしたどんよりと淀んだ川であつた。老衰した川といふ心持が私の心に滲み込んだ。

「はゝア、これが元の荒川の水路かな。これが大宮の向うの方に流れて行つて、入間川に注いで、そ

橋がかゝつてゐたりした。ある時、其處を通らうとすると、人はゐなくつて苓箸と長い釣竿とがその一本橋の上に置いてあつた。苓箸の中には大きな鯰だの、大きな鮒などがゴチヤゴチヤ入つてゐた。

菖蒲の町に入らうとするところで、私は昨日わかれた見沼用水に再び邂逅した。矢張、靜かな川であつた。堤防以外に兩岸には何もなかつた。影を蘸す薄もなければ、岸を取卷いた林もなかつた。唯、靜かに錆びて淀んで流れて行くのを私は見た。『え、え、これでも洪水がありますとも……。二三年前には、菖蒲の町がすつかり浸つて了つたんですから。』かう車夫は私に話した。

その時は合川も見沼用水も皆一つになつて、昔の利根川の原型を再現したやうな形を見せたのであつた。私は土手から次第に菖蒲町へと入つて行つた。町は騎西に比べては、やゝ大きく、田舎町らしい特色も眼に立つて見えた。兩方の交通線路に押されながら、靜かに獨立した繁華を維持してゐるやうな感じが私の心と眼とを新たにした。

その町では、車の繼かへを待つ間、ある家に行つて晝飯を食つた。それは家の奥にポンプ仕かけの井戸があつて、赤い襷を十文字に綾取つた女達が、何杯となく大きなバケツに水を汲んでゐるやうな家で、私の坐つた一間からは、さびしい荒れた庭が眺められた。私は何年にもかういふ田舎の飲食店を見たことがなかつた。停車場のある町などにはつひぞ發見することが出來なかつた昔の田舎町の飲食店であつた。

流れも細く、水量も少なく、ずつと栗橋から關宿に行つて、今の江戸川に落ちてゐた。

合川は丁度見沼用水の北を略々平行して流れてゐた。今では小さな川である。ところどころに土橋が架つてゐたり、藤棚のある茶店が出來てゐたり、浮いた藻に白い花が咲いたり、此方の町から向うの町に通じた街道を自轉車が走つたりした。川には魚といふ魚は住んでゐない。鮒とさいが少しばかりゐる位のものであつた。

私はこの川が利根の本流であつた時分のことをよく想像した。利根は川俣から折れて、羽生の傍の岩瀬を通つてそして此方へと流れ落ちてゐたのであつた。歴史にある岩瀬の渡などといふ渡津は今はもう跡方もなくなつて、何處だかわからなくなつて了つてゐるが、それでも昔の人達が、廣い武藏野を横斷して來て、遙かに野州の安蘇の連山を望みながら、そのさびしい渡津をわたつて行つたさまが歴々と眼に見えるやうな氣がした。その殘水路のところどころには、松林などがあつて、昔の流域の跡を示した砂礫の多い地面などが折々掘り出された。桑畠の中を通つて行く折れ曲つた路、そこを向うに行くと、小さい赤い稻荷の祠などがあつて、殘水路の又殘水路である小さな池には、蘆荻が少しばかり殘つてゐる。夏は剖葦がきまつてやつて來ては鳴いた。

昔の土手の跡のやうなところもをりをり殘つてゐた。そしてそこを下りて行くと、確かに昔の流域であつたらしい低い桑畠がつゞいてゐて、その向うに細い合川の水がさびしく錆びて流れてゐた。一本

のことを考へた。野火止から平林寺、新河岸から中福を通つて堀兼に行く途中、さういふ間の地形と此處との間を引較べて考へた。其方に比べると、此方は明るくつて、そしてひらけてゐた。農夫の顔にも生生とした色が現れてゐた。武藏野の百姓に比べては、此方が餘程生活も豐であるのを私は見た。騎西は平野の中にあるさびしい田舍町であつた。町の外觀も羽生、加須に比べてはさびしく、概して交通線路から外れた衰頽と寂寥とを持つてゐた。町の外れでは、若い男がメリヤスなどをひろげて賣つてゐる周圍に、人達が澤山たかつてそれを買つてゐた。

關東平野では、此處等が一番山に遠いところであらうなどと私は思つた。中でも秩父が一番近いけれど、それでも、堀兼、平林寺あたりから比べると、感じが餘程遠いやうな氣がする。全く林の私語と、森の濃い蔭と、水田と溝とに占領されたやうな處だ。

『これでも、昔は中々人通りのあつたところです。何しろ中仙道の裏街道ですから。』などと車夫は走りながら話した。

三

利根と荒川とが一番變遷の多かつた川であつた。昔は今の合川の線を利根が流れ、荒川は熊谷の北を掠めて、入間川に合し、そして利根に落ちてゐた。今の利根川の流域は、昔は渡良瀬川の流域で、その

この間は、戰國時代にあつては、或は上杉に屬し、古河公方に屬し、少し後れては、北條に屬したやうな土地の豪族の住んでゐたところだ。久喜にもその址があれば、菖蒲にもその址がある、行田の成田は、中でも最も勢力があつたもの、一つである。かういふ人達が時の中に亡びて行つて、そして唯その城址と菩提所と寺とを殘して行つた形などにも深い意義がある。こんなことを思ふ間に、車は加須に行く街道を左に折れて、段々騎西の方へと向つた。

さびしい街道だ。壁の落ちた百姓屋と、甘藷畑と、雜木林と、古い小さいお宮と、農具や乾物類を賣る町と、機を織る音と、それより他には何も無い。子供や旅人の買つて食ふものには、ふかした芋と駄菓子とがある位のもので、滿足に中食をするやうな店すら四邊には見當らなかつた。

日は麗かに上からさした。森の所在はいつも村の所在を示した。村には乾度寺があり宮があり小學校があつた。小學校の周圍は、大抵雜木の林で蔽はれて、そこから唱歌の聲が賑かに洩れて聞えた。ある古い壁には、一月前ほどの近所の町の田舍芝居のビラが半ば破れて貼られてあつた。木槿の咲いてゐる垣などもあつた。

見沼用水を幹線にして、其處此處から引いた用水の溝が到るところに見えた。この幾條の溝――これが昔雜木山であつた頃、或は荒蕪地であつた平野をかうした見事の水田や畠にしたことなどを私は頭に縦返した。武藏野に於いて水田の多いのは全くこの用水のお蔭であつた。私はこの前武藏野に行つた時

三角にして小箸の先につけたさこうが先づさきに出されて、つゞいて茶が出て、それから酒が出た。

老僧は盃を客にさしながら、遠い昔の話などをした。雲水時代の話、旅籠賃が二百文であつた時分の話、東海道中仙道の賑やかな光景、つゞいて大宮ご上尾この間にある天神橋の話などが出た。私は靜かな氣分に浸されずには居られなかつた。世の變遷を餘所に靜かに平野の中に老いて行つた人達の生活を考へずには居られなかつた。

二

友達にわかれて、私は車でひこり其處を立つた。私は騎西、菖蒲、原市の線に出て行かうこした。右こ左この汽車の線路に挾まれたゝめ、全く交通の便から閑却されて了つてゐるやうな驛路——其處に私は昔の北武藏野の面影を得たいこ思つた。

武藏野は嚴密な意味で言へば、荒川を境こして、その南こ西こを意味してゐた。北武藏野はむしろ武藏野こ言ふよりも關東平野こいふ大きな範圍に屬すべきものである。しかし道興准后の廻國雜記を見るこ、この方面も矢張武藏野に入れてある。村君を通つて利根川を渡つて行つた記事などもある　引又、宗岡の線から、川口、岩槻の方へ出て行つた形なども面白い。それに、この平野を横流した利根こ荒川この複雜した關係も面白い。で、私はその方面をずつこ原市まで出て行つて見ようこ心懸けた。

其夜はその寺から五六町離れた田舍町の外れにあるやうな寺に泊つた。寺僧は七十近い肥つた人で、長い年月を此處で一緒に老いたらしい主婦と二人で、寺男も使はずに靜かに暮した。「此間、水が出かけたので、慌て丶疊をあげて了つたものだから、ひどい處で、申譯がない。」など詫びて、豆腐や精進揚で酒を私達に勸めた。成ほど室といふ室は皆な疊があげられてある。根太の上に茣蓙を敷いてその上に薄い座蒲團が置いてある。それでも家具などはよく整頓してゐて、夜のものは肌觸りがよかつた。大きな古風な蚊帳の釣手はチヤラ〱鳴つた。

夜もすがら裏の山にそよぐ風の音は、度々私の夢を覺した。

朝、私は其處にさびた靜かな庭を發見した。苔の蒸した石、葉の半枯れた葡萄棚、水盤の中に植ゑられた大きな蓮の葉、庭と田との間は、低い疎らな檜や杉で劃られてあつて、黄熟した稻の水田から朝日は一面にその晴れやかな光線を私達のゐる室に漲らした。

「は丶ア、此處等は皆な水がかう赤いんですな、漉さなくては使へないんですな。」かう言つて私は立つて、砂を盛つた大きな赤甕から水のちよぼちよぼ落ちるのを見た。背の低い若い時はさぞ美しかつたであらうと思はれるやうな主婦が客の爲めに抓み鹽を小皿に入れて來たり、水を桶に汲んで呉れたり、新しい手拭を出して呉れたりする間、肥つた主僧は、裏の小池に行つて、「赤くない人參ッてめづらしいなア」などと言ひながら頻りに野菜を洗つてゐた。裏の山には赤い實の鈴生になつた木などがあつた。梅干を

北武藏野

一

折れ曲つた見沼用水の土手の上を私達は歩いた。靜かな日で、土手の腹に靡いてゐる薄だの刈萱だのが捺したやうに澄んだ秋の水にその影を蘸してゐる。私達の歩いて行く姿も水底に映つたまゝ動いて行つた。

橋が損じて一ところ繩で結んであるのが見える。『大丈夫かな、落ちたら大變だな。』こんなことを言ひながら私達は辛うじて渡つて行つた。川の向うにさびしい靜かな寺がある。庭には赤い黄色い草花などが澤山に咲いてゐた。客間の裏の庭では、橐駝師が頻りに大きな冬青の木に鋏を入れてゐた。寺からは見えないが、その少し向うにかなり大きな沼があるといふことであつた。雁、鴨、小鳥などが今でも下りて、もう少し經つと、汽車から都の狩獵者が澤山に來るといふ話だ。沼の周圍には、雜木山があり、松林があり、陸稻や甘藷の畠などがあつた。田舍の娘の機を織る音なども聞えた。

私達は靜かに話した。この町もこの寺もこの寺の後にある停車場も、矢張、あの美しい山々の雪を背景にしてゐるのであると思ふと、私の興は猶續いた。私と友達とはやがて湯豆腐鍋に使ふための蕗の薹を裏の垣の殘雪の中にさがしに出かけた。」

果して車夫の言ふ通り、私の昔馴染の松並木が行く手にはつきりと見え出して來た。それは故郷から信越線の汽車に行く度に、何遍となく通つた路である。その路を左に行くと、利根の堤防があつて、その下に碧い寒い水が白い殘雪の河原の中に帶のやうに鮮やかに流れてゐた。

眞直な街道、田に面したところは乾いて、林の蔭、人家の蔭になつてゐるところが泥濘になつてゐるやうな光景に私はよく邂逅した。笹原に殘つた雪も私の興味をそゝるやうに惹いた。

私は一時間ほどして、私の友のゐる寺の大きな門のところに立つてゐた。路がわるいからと言つて、車を街道のところで下りて、そして本堂の前の舖石道を歩いた。

『ヤ、もう歸つて來たのか。』

『今朝早く妻沼を立つて來た。』

『妻沼から來たのかえ、まだ十時少し過ぎたばかりだよ。』

『關東平野をめぐる山の雪は實に何とも言はれないね。殊に、北が好い。太田、妻沼あたりの線が好い。』

こんなことを言つて、私は冷たくなつた手を火燵の櫓に載せた。『でも、穩かでよかつた。君の行つた日は寒かつたが、二三日風もなくつて、春のやうだつたからね。』友達はかう言つて茶なごを淹れて來た。

兩神山は餘程右に偏つて聳えてゐるが、その左に夥しく美しく雪に光る山の連亙が見えた。甲州境の山だといふことは一目にそれとわかる。あの雁坂越などといふ峠は、その中にあるのだと思ふと、何となく私はなつかしい氣がした。

秩父と淺間との間に横たはつてゐる山は、御荷鉾山である。その奥に、注意して見ると、信州境の荒船火山の城壁のやうな形をした姿が見える。妙義は低いので、此處等あたりからは、僅かに金鷄の一部を見ることが出來るばかりである。

榛名の雪を見るには、前橋伊香保間の電車が一番好いが、それでも、其處まで行くと、山が近すぎて、關東平野といふ感じは全く失はれて了つてゐる。利根川にも、もう他の奇がなくなつてゐる。

關東平野と言つても、私はまだ所謂武藏野の冬は知らない。川越、所澤あたりも面白いだらうとは思ふけれど、想像するところに由ると、その正面になる秩父と多摩は、北部に見るやうな美しい雪のかゞやきは持つてゐないに相違ない。淺すぎ、或は近すぎるに相違ない。

私の車は絶えず利根川に添つて進んで行つた。小さな川、痩せこけた榛の林、石橋や土橋、もう少し行くと、あちこちに散らばつた農家が見える。

『あゝもう加須だ。』

『そこを通れば、もう新郷はわけはありません。』

川を挾んで此方こ彼方こにある小さな町などを私は想像した。風の寒い町、機の音の絶えず聞える町、種物を賣る赤い暖簾の際立つて眼に立つ町、夜は横町の明るい窓に調子はづれの三味線の音の聞ゆる町。さういふ町が其處にも此處にもあつた。そして、かういふ町は、多くは關東平野をめぐる美しい山の雪を背景にしてゐた。

チヤンカラ、チヤンカラー、さういふ音は今でも私の耳にあつた。竹藪の中、林の中、畑の中、その音は到る處で聞えた。梭の手をとゞめて糸の切れたのを結びながら、外を通つて行く車の上の人を見る若い女なども時にはあつた。

私はこころごころの町に立つ市を頭に描いた。近在から持つて集つて來る織物、その中には縞もあれば絣もある。靑縞もある。殘雪の泥濘の中をこねかへすやうにして集つて來る車、荷車、朴齒の下駄、草鞋、イタリヤネルの汚れた襟卷！　それも午後からは市場はしんこして、町を步いてゐる百姓や、田舍娘や、子供達や――

秩父連山の雪は、一方に比べると、餘程規模が小さいが、それでも光線の變化にはかなりに富んでゐた。

『武甲は見えないかね。』

『武甲山は東京の方からはよく見えますが、此處からは見えません。』

『およしなさいよ。』

『面白いもんだな。』こんなことを言つて、私は命じた車の來る間の朝酒を靜かな心持で飲んでゐた。私はこれから利根川に添つた五里の路を東に向つて行かうとしてゐた。今まで絶えず相對した雪に背いて、今度は廣い平野の方へ出て行かうとしてゐたのであつた。

やがて車が來た。寒いだらうからと言つて、若い車夫は持つてゐたドテラを私の足のところにかけて與れた。

町を外れると、左に連る秩父の連山の雪がさやかに朝日に光つて見えた。兩神山の姿が中でもことに私の眼を惹いた。襞と襞との間にある長瀞から大宮の方へ行く路があるのだなと私は思ひながら絶えず其方の方を見た。車は時には竹藪の陰、時には堤防の上、時には農家の日當りの長い緣側などを掠めて通つて行つた。利根川に注ぐある支流のところでは、兩方からの堤防が暫しの間絶えて、去年の洪水の跡らしい跡がそれと指さゝれた。蘆荻が一面に倒れて、そして白く泥にまみれてゐた。

車夫は東京にゐた時分の話などをした。『田舍は氣樂ですけれども、住むなら矢張東京ですな。』かう言つて、脚氣にさへならなければ田舍になど歸るんぢやなかつたなどと話した。昨夜泊つた宿の女中達に觸しては、『あれらア、何うせ、町の人の妾か何かになるんですな。あそこにゐて、町に店なんか出して貰つて居るものも三人や四人はありますよ。』などと言つた。

合ないいろんなことを言つたね。びつくりした位だッたよ。始めから、ちやんとお浚ひをして見ようか。皆な覺えてゐるよ。』

かう言はれると、女中は流石にきまりがわるいやうな顔をして、『だッて、あれでなくつちや田舍では間に合はないんですもの。藝者は一人きやゐないんだもの。』

『ひとり、えらく管を卷く奴があつたね。』

『え、あれは、町でも評判のわるい人なんですもの。』

『いろんな人がゐたね。皆町の有力者だね。町長を攻擊してゐたね。一體、幾人ゐたんだえ？』

『六人。』

『もつとゐたやうだがな。棚の達磨さんを踊つた人があつたね。その時、君は、「やア逸見さんのうまいこと、こんなに藝人だとは思はなかつた」ッて言つたね。』

『…………』

『もつと言つて見ようか。皆な、すつかり覺えてゐるんだから……。お客が立つたあとで、あら、もつとあるかと思つたら一本しきやないよッて言つてゐた女中があつたね。』

『あれは私ぢやない。松ちやんよ。』

『もつと言つて見ようか。』

泥濘の中にくつきりと見えた。

一つある蓄音機は終日二階の一間にきこえてゐた。始めは客が鳴してゐるのかと思つたが、それは浴客を慰めるために家でわざ／＼鳴らさせてゐるのだといふことが段々解つた。奈良丸くづしにかつぽれに軍歌、あれさへなければなどと思つたが、後にはそれにも馴れて、別に氣にもならなくなつた。夕暮になると、その蓄音機がはつたり止んで、今度は宿の向うの離れから、念佛の鉦の音につれてさびしい御詠歌が聞え出した。「え、此間、宿の主人が死にまして、今日で四十九日になりますんで。」などと番頭は話した。

ある町の裏通では、殘雪の中に青く見えてゐる豌豆の畑などがあつた。午後の日影は美しくあたりを照した。足駄を穿いた袖口の赤い女などが通つて行つた。

小さな料理店の招牌や、御神燈や、格子戸に雜巾をかけてゐる女や、鰻屋の上さんや、軒に吊されたしのぶや、蔽ひかぶさるやうに行手に高く立つてゐる二階家や、さういふ裏通の靜かな空氣の中で、三味線を浚ふ音がをり／＼聞えた。清元らしかつた。

「昨夜はえらい騷ぎだつたね。」

「どうもお氣の毒さまでした。町の人が騷いでしやうがないんですもの。」

「でも始めの中は寢られなくつて困つたけれど、後には面白くなつて聞いてゐたよ。君なんかも、顏に似

を指さして教へて呉れたので、私はそこに入つて行つた。それは田舍によく見るわびしい中食宿であつた。饂飩や蕎麥を茹でる大釜からは湯氣があがつてゐた。私は其處で、子供を二人つれた百姓と、里歸りの若いお上さんと一緒に中食をすました。百姓の爺はひもかはを食ひ、子供は饂飩を食ひ、若い上さんは山盛の飯を食ひ、私は蕎麥を食つた。

離れるにつれて、その太田の金山の段々丘陵の一部になつて行く形が面白かつた。白い華表はいつまでもいつまでも見えてゐた。利根川の畔まで來ても見えてゐた。

西長岡は藪塚驛から丘陵の中へ入つて行くやうなところにあつた。つまり金山の山つゞきで、そして、その裏になつてゐるやうな位置である。平常は却々賑かださうだが、私の行つた時は、五六人しか客はゐないで、三階も二階もがらあきであつた。從つて湯も綺麗であつた。

關東平野に特有な、枯れて葉のガサ〳〵した楢の林が丘の斜坂の到る處にあつて、その下の笹原に殘雪が白く見えてゐた。豪家の塀について上つて行くと、桐畑があつたり先祖代々の墓地があつたりした。前に展けられた狹い野には、百姓が繩梯子を負ひながら泥濘を拾ひ拾ひ歩いて來るのが見えた。

私のゐたところは、南に面した三階の暖かい一間であつた。少し光線が明るすぎたが、それでも心が動搖するやうなことはなかつた。私は其處で老いた婢と、口の端にくさの出來た仕出し屋の女中とを相手にして、いろ〳〵の話をした。女中が湯豆腐鍋だの汁だのを膳に載せて運んで來るのが、通の雪解の

聖天の本堂では、僧が集つて讀經をしてゐた。林を通して來る朝明けの氣分、明るい日出前の空氣、しんと沁みわたるやうな寒氣、ところどころに固まつて堆く殘つて居る雪、その中を赤い毛糸の襟巻をして、元氣よくあちこちを飛び廻つてゐる子供達、さういふ境内を私は靜かに歩いた。

樓門の上では、澤山の鳩がくゝくと啼いてゐる聲が、遠くで聞くエンジンか何ぞのやうに聞えた。

「さうですかね、あれは鳩の啼聲ですかね。朝起る前には、いつもあゝして鳴くんですよかね。矢張、夜が明けたのが嬉しいんですね。」通りすがつた爺さんをつかまへて、私はこんな話をした。あたりには、既に目覺めて、元氣よく飛廻つてゐる鳩が澤山にあつた。樓門から下りようとしてゐるものなどもあつた。

太田にある金山は、ちよつと特色のある面白い山である。標高が小さいので、遠くから見ると、丘陵の一部になつて了つてゐるけれども、汽車が足利驛を過ぎると、その獨立した山容がすつかり見えて來る。新田神社の華表の白いのがはつきりと目につく。上に松の面白い形をして靡いてゐるのなどもそれと指さゝれる。他に木はない松ばかり。實際松の多い山である。

私は太田の呑龍の門前で、妻沼行の馬車を訊いた。「さうですか、それなら、ちよつと前で中食をしていらつしやい。待つてゐますから。」馬車宿の主人らしい、肥つた、ぞろりと絹物などを着た四十男が前

かう言つて上さんは釣錢を私に渡した。町の入口には、小學校があつて、町の青年會があるらしかつた。名高い大きな聖天の宮の杉森が黑く前に見えた。

此處の聖天と太田の呑龍とが利根川を隔てゝ相對して居る形なども面白いと思つた。義貞が笠懸野から出て來た時のことなども頭に上つた。

聖天の境内にある旅館に私は一夜寢た。顏の綺麗な女中の手が皺だらけであつたことや、厠に下りて行く階梯が折曲つてついてあつたことや、裏の小屋で指物師が火鉢をかゝへて障子の棧をつくつてゐたことや、夜着の襟の汚れてつめたかつたことや、夜、靑年會の崩れの町の有力者連中に騷がれて困つたことや、町を通つて行く獅子舞の笛の音が旅の窓の紙に顫へるやうに響いて聞えたわびしさや、さういふものが今でもはつきりと私の眼の前に殘つて見える。

それに、今度の旅で、私の一番困つたことは、私が早起きだといふことであつた。西長岡の鑛泉宿にゐた時は、それでも湯が六時半に沸くので、拍子木の音を聞くと、すぐ飛び出して行くことが出來たが、他では何處でも下で起きてくれないので困つた。それといふのも、此處等の田舍では、大抵料理兼業で夜がいつも遲いからである。私はそこでも起きたばかりの下男に戶をあけて貰つて、寒い朝の空氣の中をぶらぶらと步き廻つた。

てゐた。

「舟橋――なつかしい船橋を私は一歩一歩渡つて行つた。誰も渡つて行くものがない。私より他には誰もゐない。水には冬の冴えた光線がキラ〳〵と光る。私は一歩歩いては振返り、又一歩歩いては振返つた。何といふ美しい山の雪だつたらう。日光群山が殆ど手に取るやうに見える。中禪寺湖のあるところなぞもそれと指さ・れる。大眞名子と女峰との間にある富士見越の凹所もはつきりと見える。私は山奥に冬籠りをした若い僧のことなどを考へながら歩いた。

　淺間は何方かと言へば、平常あまりよく見えない山である。噴煙の爲めばかりではない、一體に雲が多いのである。しかし其日は實によくはつきりと晴れて見えた。その左には角落連山の雪の日に光るのがキラ〳〵と美しく見え、や・低く榛名の尖つた山が躍くやうになつて見えた。

　街道の農家の軒には、萎びた細い大根が干しつらねられて、午後の日影が寒く斜にさしてゐた。道は日當りのところだけは乾いた駒下駄でも通れたが、林の蔭や丘の裾などに行くと、半は溶けた雪が車の轍のあとを深く食ひ込ませてゐた。

　私はある家で、大和障子を明けて、敷島を二つ買つた。」

『今日は穩かで結構ですけれど、わるく沁みますな。』

なところに、赤城があるかと思はれるほど左に寄つて見えるところなどもある。

關東平野を横ぎつてゐる汽車の縱線が二條あるが、それも餘程先に行かないと、山の雪を見るのに遠すぎる。信越線では、吹上、熊谷あたりまで行かなければ駄目だ。東武線では、久喜、鷲の宮、もう少し進んで利根の鐵橋あたりまで行かなければ十分にその眺望を恣にすることは出來ない。唯一の横線である奥羽線は、やゝ遠すぎる。この線では淺間、角落、荒船などといふ連山がよく見えない。下毛に入つてからは、日光が見えるが、そこで見た日光は、利根河畔で安蘇山の上に見た日光とは比べものにならないほど單純である。

今度の旅行は、此横線を主として歩いて見た。私は太田から妻沼、行田の方へと出て行つた。つまりかなり近く山の雪に迫つて行つて、そしてそれを離れて見ようとしたのである。

川俣あたりで見たのと、妻沼あたりで見たのでは餘程感じが違ふ。同じ利根河畔でも、山の開け方が違ふ。前者よりも後者の方が餘程ひろ〳〵としてゐる。安蘇連山の平野に靡き伏した具合が實によく見える。

『妻沼は川向うだで、此處で下りて下せい。』

かう言はれて、太田から乘つて來た馬車を下りた私は、ひろい川原の眞白い殘雪の中に紺青色をした川が一筋鮮やかに流れて居るのを見た。川上には、河川工事の浚渫船から黑い煙がもく〳〵と簇り立つ

佐野の舟橋は上州でなくつて、この渡良瀬にかけた橋であると書いてあつたが、或はさう解釋する方が面白いと私は思つた。類聚國史にある驛逆の條を見ると、昔の奥羽街道は、高崎の線から太田の線に出て、そしてこの渡良瀬を渡つて、佐野から栃木の方へ出て行つたものと見える。萬葉集の安蘇山は、即ち今の足利や佐野の背景になつてゐる連山を指して言つてゐるのである。

安蘇のむら山――實際此山群ほど襞の多い光線の變化に富んだ山は澤山ないと思ふ。利根川の岸に立つてこれを望むと、殊にその感が深い。つまり上毛と越後と下野との奥に横つてゐる大きな山塊がずつと關東平野に蹲き伏してゐると云ふ形になつてゐる。そして馬の耳を立てたやうな形をして筑波は離れ島のやうになつて見える。平野の海の唯中に浮んでゐるやうなさびしさを感じる。

渡良瀬は足利から五六里下で利根川の大動脈に合してゐる。竹藪の多いのが特色で、昔は岩魚といふ銀色をした魚が澤山に獲れた。私は朝早く兄に伴れられて、そこに釣りに行つたことを覺えてゐる。

關東平野の山の雪は何とも言はれない程見事だ。日本アルプスなどよりも冬の眺望はすぐれてゐるかと思はれるほどである。中でも赤城がその中心を成してゐる。關東平野の何處からでも、最も近く最も鮮やかに見えるのは、この山の雪である。旅店の窓からも見えれば、林を出外れた路からも見える。あの町の街道は眞直にこれに對してゐる。馬車の後にいつも離れずについて來てゐる。あかと思ふと、あん

關東平野の雪

利根河畔の町にある淋しい寺から出て、私は一週間ほど關東平野をあちらこちらとさまよひ歩いた。そこには私の生れた町もあれば、私の幼い頃丁稚にやられた町もある。欅の大きな樹に吹荒るる風の音もなつかしければ、路傍にほつねんと立つてゐる道祖神に夕日の微かに當るのもなつかしい。私は近頃にないひとり旅の面白さを覺えた。

足利の町は、山裾の町といふやうな好い感じのする處である。ここに、東武線の足利町の停車場から見た眺めは一層さういふ感じを深くさせる。光線の加減で、時には押詰つたやうな陰氣な感じをすることもあるが、概してくつきりと鮮かに繪に向つたやうな心持を起させる。それに、此處に來ると、遠くに見えた奥山の雪のかゞやきは低い山に遮られて見えなくなつて了つて、一週間ほど前に降つた雪が山のかげや襞や日蔭に殘つて居るばかりである。

汽車から橋が見える。それは渡良瀬川に架けた橋である。此川も私にはなつかしい。ある本に、昔の

寒い北伊豆から暖かい南伊豆に私等の心は飛んだ。

「明日は天城、下田。」

と私等は繰返した。

よく其水上を思はしめるものである。私等は傾き懸けた日影が、瀬を成した水に薄くさびしく殘つて居るのを見て、言葉もなかつた。

細い道が川に添つて曲つてついて居た。私等は其の細い路を辿つて見た。其路は高い位地にあるので、下に展げられた谷川のさまが手に取るやうに見える。水の音が反響して谺のやうに聞える。私等は岸に低く茂つた樹木の梢と平行して歩いて行つた。其細い路に添つて、小さな溝があつて、綺麗な水が靜かに流れてゐるが、岸にすみれが咲いて居たのを島崎君は敎へてくれた。

何でも見ように由つて其趣が變るといふ。此谷をめぐつて見ると、湯ケ島の感じが最初とは餘程違つて來た。何となく全景を見たやうな氣がした。

谷の下流に橋がかゝつて居るのが見える。其處まで行つて、くるりと廻つて、歸ることにした。田畝に下りて、橋の畔に出た頃にはもう日影がかげつてゐた。竹藪の下の道は暗かつた。

寒いので、幾度も湯につかつた。午後には女や子供が入つて來た。學校の先生も居た。川を越して村の人が湯を貰ひに來るのだといふことがやがて分つた。夜は箱ランプが一つついて居るばかりで湯殿は薄暗かつた。

私等は湯の中で村の婆さんと語つた。明日は天城を越えて下田へ行くことを話すと、『向うは暖かでさア。もう菜の花が咲いてゐるでせう。此處は冬は寒い處で……』と言つて、婆さんは手拭で顏を洗つた。

欄下[illegible]葉の日に照る間から溪流が美しく光つて、ざアと流るゝ音が屋を撼かすばかりに聞える。[illegible]に、日影がくつきりとして、鶏が一疋ブン／＼音をさせて居る。裏の障子をあけると、庭には古い大きい梅が今を盛りと咲き亂れて、碧の晴れた空にくつきりと捺したやうに鮮かに見える。鶯が二三羽遊んで居た。

私等の興は遂に一時此處で消るといふ迄に募つた。

「鶏をつぶさせて煮て食はうぢやありませんか」と島崎君は言つた。鶏を命じて先づ湯に行く。さびれて居るので掃除が行届いて居ない。硝子の破れたのが其儘になつて居たり、衣裳をぬぐ處が埃になつて居たりした。けれど人造石の廣い湯殿には客といふもの一人もなく、私等の自由に浴するに任せてある。惜むらくは湯が温かつた。

私等は筧から湯の出る近くに身體を並べて、耳には水の音を聞き、眼には硝子窓を透して櫻の木の間を洩るゝ日の光を見ながら長い／＼間温い湯につかつて居た。

五

午後四時頃、私等は散歩に出懸けた。

釣橋を渡つて、少し登つて、二つの谷の落合ふさまを見て居た。谷から流れて來る谷川は、人をして

たことゝ、段々天城が近くなつて、家の構造が山國の風を帯びて來たことゝ、先づその位のものであつた。

まだ早いが兎に角、湯ヶ島で、晝飯を食つて行かずばなるまいと言ふので、馭者に、旅舍に伴れて行くことを命ずると、馭者は一鞭加へて、ガラ〳〵と淋しい村を通り拔けた。四邊に温泉宿らしいものもなかつた。

村を外れて、馭者は馬を留めた。

旅舍は？　と聞くと、其向うにあるといふ。賃錢を拂つて、一二三歩下ると、面白い景色が私等の前に展げられた。谷が二つに岐れて、見事な溪流が兩方から落合つて、其處に釣橋がかゝつて居る。橋の彼方には、こんもりした樫の木が茂つて、下には大きい岩に碎けた水が或處は白く、或處は碧く、頗る面白い趣を成して居る。『鳥渡堂ヶ島見たやうな處ですな。』と武林君は言つた。私共はしばし立盡した。

樫の木の陰に、大きな旅館があつた。天然の美しい姿に對すると、ぢつとして居られぬのが私等の癖である。皆な言ひ合はしたやうに、昨夜此處まで來ればあんなゴタ〳〵した汚い家に泊らなくても好かつたのだ。私等は俄かに起つた興を促されて、ぐら〳〵動く釣橋をわざ〳〵動かして見たり何かして、少年にかへつたやうな心持で對岸に渡つた。

旅舍はしんとして居た。客といふものは一人もなかつた。二階の一番好い室に私等は勝手に押通つた。

は、「今朝明方でしたかね、家鴨が騒いで鳴いたのを知つて居ますか……乾度狐か何か捕りに來たんだと思ふんですがね。」と言ふと、「さう〳〵夢のやうに知つて居ますよ。」と蒲原君は言つた。

「さうして見ると、私も寢ましたかなア、昨夜餘り茶を飲んだので、よく寢られなかつたんですが、それを知らない處を見ると、寢たと見えますね。」島崎君はかう言つて笑つた。

天城を越えて下田に行かうか、伊東に行つて熱海に出ようかといふ話が定らずにゐたが、昨夜たうとう下田へ行くことになつて、湯ケ島まで馬車を頼んで置いたが、それが朝の七時に遣つて來た。寒い朝で霜が瓦に白かつた。

四

湯ケ島には其朝の十時に着いた。

風は昨夜のやうに無かつたが、朝の冷たい空氣を切つて馬車が駛るので、耳が寸斷れるやうに寒い。

昨日は島崎君が困つたが、今朝は私が一番弱つた。途中は別に變つたこともなかつた。昨夜の殘りの菓子を馭者に遣つたことゝ、ツメ襟の洋服を着た、人のよささうな小學校の先生に逢つたことゝ、枝の縦横に張つた柿の樹を武林君が煩悶してるやうだねと言つたので、それから柿の樹を煩悶してる木と言ひ始めたことゝ、青羽根といふ處で馬車を下りて、碌々火もありもしない火鉢に押寄せるやうに顔を當て

筧の水に野蒜が摘んで洗ひ懸けてあつたことゝ、眼に殘つて居るのは先づ其位である。

三

泊つた宿は客が一杯であつた。庭に谷川の水が引いてあつて、廊下へ傳つて行くやうに出來て居た。梅の白く咲いて居るのも寒かつた。飼つてある家鴨の啼聲も何だかけたゝましかつた。

私等の室の隣が便所で、その便所が可也汚い。裏の室を覗くと餘り綺麗でない夜具や枕が積重ねられてある。婢が白粉をべた〳〵とぬりつけて、代る〴〵違つた顏を出した。廊下と言はず、座敷と言はず、襖と言はず、總ての感じが汚くよごれて居るやうな氣がした。汚ないことを知らずに旅をした時代には、これでも結構好い旅籠屋であつたに相違ないが、今では汚いのがよく解るだけに一層感じが惡い。

菖蒲湯と言ふのがあつた。紅葉山人が『菖蒲湯に裸一貫の男見よ』とか何とか言つて、大いに江戸兒を振廻して居るが、混浴の、何處の馬の骨か知れない皺だらけの婆樣や、何處の淫賣婦だか知れない女などが、男と共に平氣でボチャ〳〵遣つて居る處で、この男振を見て呉れいでもなからうと思つた。

夕飯には白粉のはげかゝつた汚い女の酌で、それでも酒を三四本飮んだ。私は例の醉つて寢て了つた。諸君は十時過まで茶を淹れかへて、菓子を食つて、いろ〳〵な話をしたといふことだ。印象主義に就いての議論が大分出たといふ。翌朝島崎君が「君は隨分大きな鼾をかきますね」と言つて居つた　武林君

修善寺の谷の入口で、路は二つに岐れるのであるが、其處まで行く間は、鳥渡感じが好かつた。天城がもうすぐ前に進つて、明日越えて行かうと思ふあたりに、白い雲が夕日に照されて、湧くやうに靡いて居る。下田街道は眞直に向うに通じて居る。山の兩方から緩かに迫つて居る具合と、雲の具合と、道路の具合とが取合せて何とも云へぬ感を私に與へた。はる〴〵と長い半島の果てを窮めやうとする旅情が湧きかへつた。

桂川の細い谷が右から來て、下田街道を越して狩野川に落ちる道の岐れる處に道しるべの石標が立つて居るのを、形が西洋式でめづらしいなどと言つて、私等は傍に寄つて見た。下田街道には荷物を載せた馬がぞろ〳〵列をなして通つた。路傍には水車が軋つて、水がさら〳〵と落ちて白く碎けるのが見える。

桂川の谷は平凡であつた。それにまともに吹付ける風がいかにも烈しかつた。人々の顏や耳が赤くなつた。島崎君は涙が出て仕方がないと言つて、いかにも辛さうにして居た。伊豆は暖かい所だと聞いて居たのに……着物を一枚減して來ようかと思つた程であつたのに……こんな寒い日に逢はうとは思はなかつた。

修善寺は感じは餘り好くなかつた。水も平凡、谷も平凡、溫泉場も平凡、獨鈷湯など殊に俗惡であつた。入口に根穀の垣のあること、櫻が澤山栽ゑてあること、居酒屋に馬子が酒を飲んで居たこと、

二

大仁驛で下りた。

溫泉客らしい信玄袋、鞄、小傘などがぞろ〳〵下りる。停車場を出ると、馬車が二三臺あつて、修善寺までの乘車をすゝめる爲め馭者がぞろ〳〵寄つて來る。私等は步いて行くことにした。

大仁は田舍の町らしい町であつた。町役場があつた。警察分署があつた。小學校の廣場には放課後の十分を子供が騷いで遊んで居る。電信柱が街道につれて曲つて凄じい風に線が夥しく鳴つて居る。たばこと書いた招牌が其處にも此處にも出て居て、藥種屋の店には仁丹の大きな看板が眼に着いた。山で伐つて挽いた檜の板を、車が幾臺も載せて通つて行つた。

町を外れると寒い〳〵風だ。顏をそむけるので話も出來ない。ガラ〳〵と馬車があとから先を越して行く。

狩野川に懸けた橋を渡ると、間もなく村に入る。山の陰になつた故か、風が少しも當らなくなる。枝を縱橫に張つた柿の樹や、綠の葉の間に赤い花を着けた椿の樹や、青々とした葱の畠や、葉の大きい珊瑚樹の疎い垣根の間をいろ〳〵なことを話しながら步いて行つた。梅の花は半ば旣に盛を過ぎて白くなつて居た。

次は中學校のペンキ塗の家であつた。汽車は夕日を車内に漲らせながら夥しく動搖して進んで行く。韮山の疎らな人家も段々後に後になつて了つた。島崎君はハンチングに金縁の眼鏡、頭を窓に寄せて、島渡睡氣が催して來たといふ風で、眼をつぶつて居る。ある停車場に著いた時には、誰も皆な反射爐のことを念頭に置いて居らなかつた。と、不意に、武林君が、『あれだらう、反射爐は？』と言つた。見ると、成程それに違ひない。丘と丘と相迫つた奥に、黄かかつた灰色の不思議な形をした煙筒らしいものが、三本立つて居る。

『島崎君、反射爐が見えますぜ！』と私は起した。

島崎君は昨夜晩く今朝は早かつたものだから、つい假睡をして了つた！ などと言つて、居住を正して外套を合せた。一しきり幕末から維新の話が皆なの口に上つた。此間、陸軍でそれを保存する目的で、折角からんで居た蔦たの葛たのを取つて了つたので餘程趣味はなくなつたといふ話なども出た。蒲原君は大きな聲で笑つた。

其話が盡きた頃には、汽車は狩野川の谷をもう大分深く來て居た。谷は狹く狹くなつた。竹藪の間から、碧い水が曲り曲つて流れて居るのが見える。右は高い絶壁で、左は高い岩山が聳えて居る。風の具合で、空氣が透徹つて、川が濃い寒さうな御納戸の色をして居た。

天城火山に連つて居るので山が非常に多く、平地といふものが殆どない。狩野川の豐饒な谷でも、其幅が一里位なものである。冬と春との境、田には氷が張つて、畠には麥がいぢけて、ところ〲梅が白く咲いて居るばかり、野も村も寂として居る間を、玩具のやうな小さな汽車が白い烟をほッ〱と吐いて走つて行く。

小さい停車場が一つ二つ三つまで同じ谷の同じ野の同じ細長い丘陵に面した路の畔にあつた。時計の針が二時二十分の處を指して居るのをある停車場で見た。ある停車場では、腰の曲つた婆さんと田舍娘とが下りた。ある停車場では便所の傍に梅が白く咲いて居た。熱海の方に通ふ道路がその近くの踏切を横ぎつて通じて居て、村の料理屋らしい家の前に、風が紙屑やら毛糸やらを吹いて小やかな白い埃を立てた。

左の丘陵の下に人家が點々として疎らに連つて見えた。地圖には丁度其の見當に、蛭ケ小島としてある。韮山の町も近い。伊豆で韮山と謂へば、隨分名高い處であるが、それらしい繁華な町も見えない。向うの人家がそれとしては餘りに見すぼらしいなどと言つて居たが、矢張、其の曉の星のやうな點々たる人家が韮山の町であつた。丘の上に松の大きいのが七八株固まつて聳えて居た。それが有名な韮山城址であつた。

江川の反射爐が汽車から見える筈だと蒲原君は言つた。初めにそれと思つたのは工場の煙筒であつた。

北伊豆

一

西風の寒い／＼日の午後に、私等は三島驛で、豆相鐵道の小さな車室に乘り替へた。正面には晴れた空に富士の吹雪が雲のやうに立つのが見えて、竹藪に圍まれた百姓家だの、小川にかゝつた水車だの、箱根山を縫ふやうに並んで居る昔の並木松だの、三島の町家の屋根に載せた石だの、いろ／＼なものが早く／＼眼の前を通り過ぎる。

三島の名物は西風に鳴大下といふ諺から、例の富士の白雪溶けて流れて三島女郎衆のお化粧の水と言つたやうな話が出た。國府を此處に置いた頃から三島は既に伊豆の中心であつた。賴朝の流された頃、北條氏の榮えた頃、殊に東海道五十三次時代の繁華が人々の頭に繰返された。峠の前後にある驛の特色などを例を擧げて語り合つた。

北伊豆の最も開けた處は、私等がこれから入らうとする狩野川の細長い流域である。伊豆は箱根から

それは笛を吹くやうな冴えた高い聲であつた。始めは其聲の何であるかゞ解らなかつたが、段々それは鹿の鳴聲であるといふことが解つて來た。

『鹿だ、確に鹿の聲だ！』

異口同音に誰も皆な言つた。

『面白いなア、確かに鹿だ。』

興の起るに堪へないと言ふやうに、洋服の男は耳を傾けながら言つた。

其聲は靜かな谿に反響して谷から谷へと渡つて行つた。空には遲く月が上ると見えて、樹の梢が薄く明るくなつて來た。

「遠くで水の音がする。」

主僧は小さい瓢箪から酒をついで飲んで居たが、

『何うです、これも好いですぜ。』など勧めた。

『面白いねえ、かうしたことは一生の中に幾度も出来やしないぜ。』

こんなことを言ふ人もあつた。

『酒も飯もかういふ所で遣ると、味が違ふんだから面白いぢやないか。』

誰も彼も皆面白さうに見えた。酒を飲まぬ人達は、取つて置きの菓子を出して食つた。低い聲で詩を吟じ始める人などもあつた。人々は嶮しい坂、深い林、恐ろしい谷などを全く忘れた。

やがて夜は來た。風の音も絶えた深山のさびしさは何とも彼とも言ひやうがなかつた。遠くの水の音さへ分明と聴えて來るかと思はれるばかりの靜けさ！　それは太古の靜けさであつた。

その夜は生木を下す棚の下の爐に遅くまで火が明るく燃えて居た。さうして暖を取らなければならぬほど山は寒かつた。私達は笑ひ且つ話した。私達の顔は、丸で山中の民かと思はれるやうにその火の光に照されて見えた。

ふとその靜けさを破つて、ある音が聞えて來た。

『や……。』

誰も皆一齊に耳を欹てた。

間ほど右に寄つて、金剛杖を持つて立つた。案内者も其の中に入つた。

『小屋も全部入るやうにし給へ。』

私はかう注意した。

水のある處までは一町ほどあつた。私は桶を持つた案内者と一緒に其處まで行つて見た。熊笹が深く茂つて居た。路はや、降り加減になつて、處々に大きな岩が立つて居た。疲れた脚には、一町の路も餘り近くは思はれなかつた。

やがてさ、やかな水音が聞え出した。其處には半ば草や木や熊笹に蔽はれた小さい清い溪流があつて、綺麗な水が此方の岸に偏つて淵をつくつて居た。

案内者がザブンと桶を其中に入れると、映つた草や木の影は一齊にチラ〳〵した。

五

私達はその水で持つて來た米を精いだ。急造の土竈に燃やした火は、暫くの間薄暮の濃い影の中に明かに見えて居た。

一行は疲れ且つ餓えて居た。佃煮の罐詰、牛肉の罐詰、それを切るのをも待ち兼ねて、フウ〳〵吹きながら熱い飯を食つた。洋服の男が準備して來たウイスキーは火のやうに人々の脣に燃えた。

小屋には生木を干す爲めに細長い爐が出來て居て、上には木を並べる棚が一面に吊つてあつた。仕事場といふやうな半仕切つた處には、木片や木屑が殊に多く積まれてあつた。寢る處や勝手元らしい處などもあつた。かれ等は木材のある處をさがして、それのある中は、二年も三年も續いて遣つて來た。かれ等は水のあるところ、風の烈しく當てないところ、山路から見透されないところを選んで、谷の傍や蔦の傍に巧に小屋を組立てた。

私達は漂泊の生活をかうした山中に送る民のことを考へずには居られなかつた。世の中に何があらうが、戰爭があらうが、殺人があらうが、そんなことは夢にも知らずに過ぎて行く人々の生活、それは尠くとも私達の心を惹くに十分であつた。私達はかうした山中の小屋に一夜を過す運命に遭遇したのを面白くも意味深くも思つた。

四邊の林からは、夕暮の濃い影が迫つて居た。

「何うだ、記念の爲めに寫眞を一枚撮らうぢやないか。」かう私が言ふと、一緒に來た寫眞を撮る男は、

「さうさな……もう光線が足りないかも知れない。」

でもかれは三脚を立てゝ、レンズを廻して度合をはかり始めた。やがて黑い布を冠つて、光線を見て居たが、「何うかかうか映る」かう言つて、かれは人々のその位置に就くのを待つた。

私は木屑の上に立つて居た。洋服を着た男は其傍に腰を下した。シヤツポを冠つた主僧はそこから一

だのがあつた。俵の中には茄子の鹽漬にしたのが一杯入つて居た。
『別に人が居ないでも間違はないんですね。』
私達の一人が尋ねた。
『え、こんな山ん中ですからナア、人間が正直でさ。』
かう案內者が云つた。
『太古の風がありますね。』『私達はかう言はずには居られなかつた。
私達は其處からまた暫くの間、路のない林の中を縫ふやうにして步いた。十月の夕暮の風はもう寒かつた。時計は五時を過ぎても私達は一夜を過すべき木小屋を見出すことが出來なかつた。
林の少し伐り開かれた間から、低い一軒の木小屋を認めた時、私達は歡呼の聲を擧げた。氣の早いものは一散に走つて行つた。
此頃は何處の木小屋にももう人は居なかつた。かれ等は夏近くなつてから、群を成して遣つて來て、秋の中頃にはもう急いで歸つて行つて了つた。山から山へと渡つて行く木地屋の生活は、町や村に住んで居る人達には容易に見すかされなかつた。私達は小屋の周圍に木屑の一杯に散らばつてゐるのを見た。
『これは立派な小屋だ。』
先に入つて行つた一人は、かう云つて其處から出て來た。

らなかつた。これを下りると木小屋がありまさア。案内の男はかう言つて先に立つて歩いた。

小さい祠のある處から、私達は又一目散に下り始めた。今まで折角登つて來たのを殘らず下りて了ふのかとさへ思はれた。しかし私達はもう大分山路に馴れて居た。急傾斜を下る時には、膝を低く、手を附く、丁度猿のやうにして下りて行つた。時には木の根に躓いて危く前に踣りさうになる時などもあつた。

下るに從つて、林は愈々深く廣くなつて行つた。葉がさわ／＼と風に鳴つて、身は全く森林の海の中に埋められて了ふかとさへ思はれた。それは慈觀の瀑の上流から左右は女峰男體の麓まで廣く展げられた大きな森林で、樺、山毛欅の白ちやけた幹が限りなく續いて見わたされた。

女峰の谷から流れ落ちる水は少くとも五六筋はあつた。熊笹の蔽や、栂樹の茂りや、さうした間を小さい瀑をかけたり、靜かな淀みをつくつたりして、人知れずさゝやかな音を立て、其水は流れて行つた。私達はその流れの一つをさがして、夕飯の準備をしなければならなかつた。

此方の山と向うの山との間に幅の狹い細長い平地があつて、私達はやがて其處に出た。栗山に通ふ路、馬立峠——其先には、冬三月全く凍つて大きな丸い氷柱になつて了ふ三界瀑がある。

路の傍にある小屋には誰も居なかつた。私達は其處に荷物を卸して休んだ。それは栗山と日光から物を運んで來て互に交換する爲めに建てられた小屋であるといふことを案内者は話して聞かせた。挽物の材料、これは栗山から運んで來たものである、日光から運んで來るものには、醬油だの、酒だの、米穀

左右の谷からは、絶えず白い雲が湧き上つて、それに日影が美しく照つた。半ば蔽はれた男體の大きな姿も、段々雲の中から其の全身を露はして來た。しかし私達はそれを眺める餘裕もなかつた。その馬の背のやうな、劒の刄を渡るやうな路は、少くとも二十丁ほど續いた。それを無難に越え終せた時には、私達はホッと胸を撫で下した。

『豪い路だ。風の吹く日などには、とても通れんね。』

かう言つたものもあつた。

今見捨てゝ來た『女峰』の頂の祠は小さく手に取るやうに見えた。成程山の脈はかうして辿つて行くのかと私は思つた。森林もある。崖もある。絶頂もある。かうした險しい路もある。山の連續といふことが私達に大きな山脈の光景を想像させた。

此方の山には林が續いて居た。影の多い此處からは、劒の峰からかけての女峰の夕照が此上なく美しく見えた。赤薙の谷は白い雲で埋められて居た。

四

其處からまた暗い森林が續いた。

志津の行者小屋までは無論今日は行かれなかつた。私達は何處か一夜を過すところを搜さなければな

容降の澤、稲荷川の澤、寂光の澤、荒澤の澤、大谷川の澤——それが落ちて流れて集つて行くさまが明かにそれと指點された。

ところどころから——裏から或は表から見た風景は、今私達の前に大きなパノラマとして展開されたのである。

三

私達の立つて居る頂上から左に聳えて居る山、其處に至る間は全く「劍の峰」といふ名に背かないやうな嶮しい背になつて居た。鎖をたよりにそれに向つて下りて行つた時には、流石に私達も戰慄した。左右の深い谷は、板を竪てたやうに急傾斜をなして居るばかりではなかつた。馬の背のやうな路は幅が三四間、狹い處は二間位しかなかつた。それに石がごろ／＼して居た。

私達は時々這ふやうにして行かなければならなかつた。偃松の枝にすがつたりすることなども度々あつた。一度足を踏み外せば萬事休すといふやうな處には、それでも鎖がつけてあつた。

午後の日影は、男體の肩あたりから、まともに其の馬の背越を照して居た。寫眞の機械を持つた案内の男に續いて、ハンチングを冠つた丈の高い男、中折を前のめりにした男、洋服にゲイトルをつけた男、一番最後に僧侶の帽子を冠つて、白い僧衣を纏つた男が續いた。

た森林は苔か何ぞのやうに思はれた。平家の餘族の隱れたといふ谷、十數里の間村落が晨の星のやうに散點して殆ど世間から交通の絶たれて居る谷、冬は全く雪と氷とに埋められて了ふ谷――その谷の底には水の音がそれとなく聞えるやうな氣がした。丁度山嶺を渡る風の音のやうに。

私は數年前其深い谷を一度通つたことがあつた。其處には溪流の中から綺麗な溫泉の湧き出るところもあつた。狹い谷合を水が凄じい瀨をなして流れ落ちて、藤蔓で編んだ板橋もその飛沫に蔽はれるといふやうなところもあつた。斜坂になつたところには草を刈る若い男女の群が居て、長い鎌が夕日に揃つて光るのを見たこともある。時にはまた、行つても行つても盡きない森林が果てしなく續いて、下に積つた濡れた落葉が、氣味惡い重い音を四邊に響かせるやうなさびしい山道も通つた。熊の話をする獵師、山小屋の話をする老爺、挽物の材料を切り出す木地屋――私はさうした人達と話し合つて、靜かに其谷を過ぎ去つた長い年月を考へたこともあつた。

この裏の谷のさびしいのに引かへて、表の谷はいづれも賑かであつた。山から滴つて集つてそして世の中に流れ落ちる幾筋の溪流、其處には屹度崖が聳えて、綺麗な名高い瀧が落ちて、都の遊覽客が車に乘つたり籠輿に搖られたりして見物に遣つて來た。水の源を究めに、瀨を分けて深く入つて來る學生などもあつた。瀑、瀑見茶屋、其處に居る色の淺黑い村の娘、それから段々谷は開けて、林となり、叢となり、野となり、畑となり、人家となり、終には白い埃の立つ街道となる。

八千尺以上の尖つた山の嶺、今、私達は其處に立つて居る。始めは鳥渡解らなかつた方角も、見て居る中に段々それ〳〵指さゝれるやうになつて來た。すぐ前にある谷を隔てゝ大きな坊主のやうな山が見え、それに連つてそれよりも一層高い大きな山が半ば雲に包まれて見えた。「それが男體だ。」かう私達は指し合つた。

山も谷も雲も、下で見たのとは丸で異つた趣を呈して居た。山は廣い連續を惜し氣もなくその前に展いて見せ、谷は微細にもわかれた脈を地圖のやうに明かに並べて見せた。しかし一番私達の眼を驚かしたのは雲であつた。午後の日影を帶びた白い堆積は、大きな影を山から山へと漂はせて、谷から谷へと動いて行つた。

「何うだ、あの雲の影の大きいこと！」

私達は思はずかう言つた。

後の谷は雲で包まれて居る爲めに殊に廣く大きく見えた。そしてその白い堆積の中からは、山の嶺が丁度海の中の島のやうに其處にも此處にも顯はれて見えた。釜のやうな深い谷からは鼠色の雲がもく〳〵と巴渦をなして上つた。

二

鬼怒川の峽谷は殊に大きかつた。雲の渦き上る底には、丘陵が地圖のケバのやうに見えて幾百年を經

女峰の谷

一

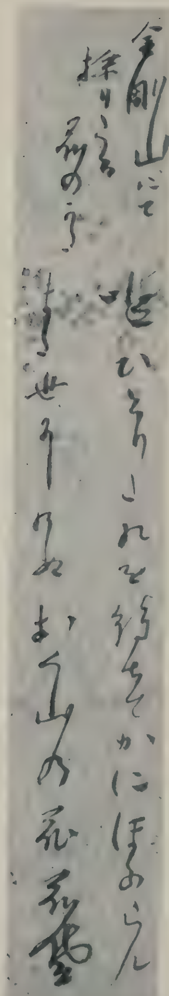
小さい祠が見えた。一行は勇氣百倍した。中には聲を擧げたものもあつた。遠く志して來た山の嶺—
—私達は遂に到着した。

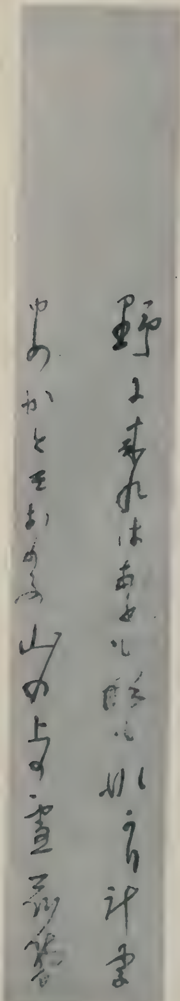
幹が一つで枝が七谷に亙るといふ偃松が、其處等一面に敷くやうに靡いて居る。其間に細い路がついて、それが山の嶺の祠へと私達を導いて行つた。祠には風雨に曝された注連縄が見えた。

私達は今始めて周圍を振返つて見るやうな位置にあつた。大きな釜の縁のやうな處に立つて深い谷を覗いて見た時には、思はず胸が戰慄した。山の半腹を縫つた暗い森林は、行つても行つても容易に盡きようともしなかつた。岩や、木根や、笹原や、少しく開けたところからは、白い雲に蔽はれた大きな谷が恐ろしく見渡された。それでも私達は何うやら彼うやら行者小屋に着いて、其處で火を燃して、晝飯を食つた。岩と岩との間からは冷い淸水が滴るやうに落ちて居た。

女峰の谷　外八編

花袋全集第十二卷目次







田山花袋著

花袋全集

第十二卷

紀行集

花袋全集刊行會



